KAIZO

改造

九月特輯

1928

有島武郎氏遺稿

最後の日記

◇

定價貳圓
送料廿錢

山荘の夜に痛ましい最期を遂げてより五星霜。この日記は氏の死後筐底より發見された手記である。あくまでも人道と藝術に清く終始せん爲め、世襲財産拋棄決意の徑路、或は身邊を憾がすいくた女性よりの誘惑の煩ひ、それ等血みどろの闘ひの跡を丹念に書き綴る。一讀、再讀流石に故人の天稟と篤情とに打たる。

加ふるに巻頭なる光澤紙刷四十八枚の寫眞は事前一週間まで、著者各時代の俤を偲ぶに遺憾ない。本書こそは魅力ある彼が藝術と、人とに關心する百萬の士女喜びの一書である。

最新刊

有島生馬著

海村

（唐本綴美裝 上下二冊）

定價貳圓五拾錢
送料十八錢

東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二

Bem

オノト行進曲





改造九月號目次

對支の根本策樹立……巻頭言……一

流刑を終る人々……鬼[illegible]冬彦……[illegible]

人民の中に行く……神近市子……七四

父よ悲む勿れ……麻生久……八六

現世相に於ける賣笑婦の状態……草間八十雄……九五

改造十月號大附錄

彥根屛風

浮世繪での最高權威。一双の屛風で百萬圓の評價に克ち得、その彩色の絢爛はその筆致の至妙と相俟つて海內にその比なし。その版畫尙ほ五圓で羽が生えて飛ぶが如し。本社は讀者にその妙技を頒たんと欲し、約百日に亘りて復寫中のところ、このほど漸く完成し、十月號の大附錄とするに決定。十八色の複雜なる彩りも共同印刷必死の努力によりて原版そのままの輝きを以つて仕上げらるるに至つた。鏑木淸方畫伯はこれを一瞥し、「眞によく出來た、これで原物に同じい眞を傳へることが出來た」と嗟嘆された。この附錄を添加し本誌とも七十錢內外を以つて讀者に頒ち得るに至ることは本社の欣快とするところ。讀者は本誌五百頁大の、そして附錄のみにて市價五圓を超ゆるこの大附錄を手にし、神品の前につくづくと味賞さるる愉快の日を思ひ待つて下さい。

改造社

父よ悲しむ勿れ……麻生久

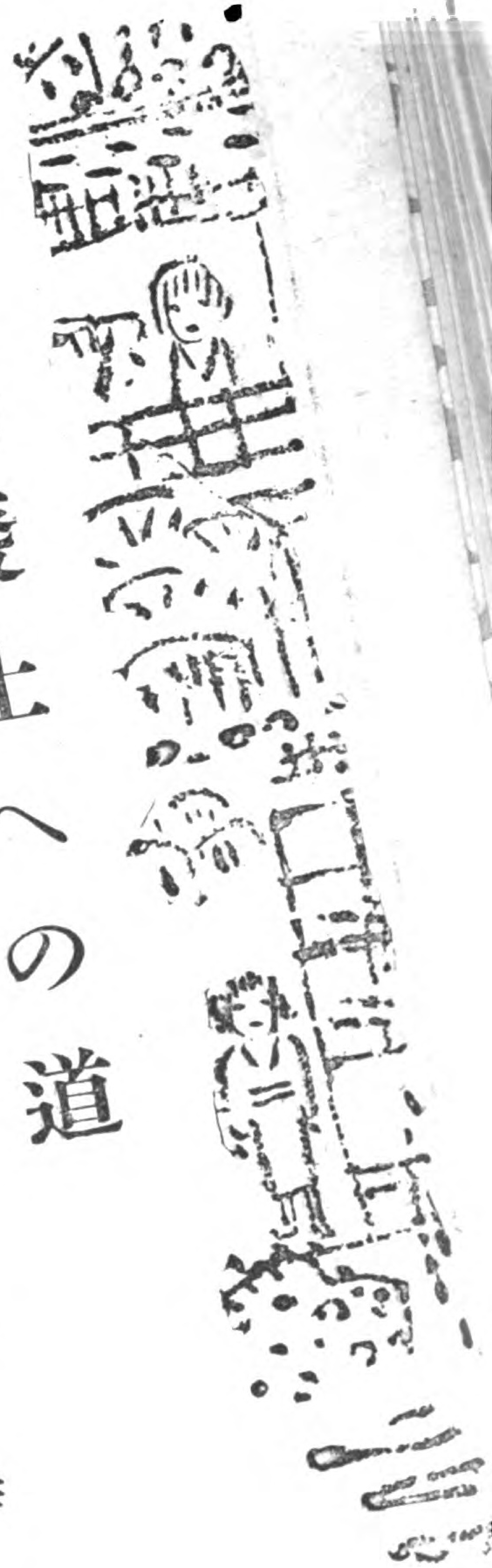
現世相に於ける賣笑婦の狀態　草間八十雄

對支の根本策樹立

支那全土は曲りなりにも三民主義を以つて統一完成されさうである。彼等が熱意ある主義、政策を以つて廣汎なる國土の統一を企てつつある一面に、我國では主張、政策ぬきの江戸時代の親分兒分の關係で政黨の分解作用が行はれつつある。何といふ時代錯誤の再來であらう。

そして田中內閣にせよ、民政黨にせよ支那問題といへば滿蒙問題に限定し、そしてあくまで一時凌ぎの政策を弄して恒久的日支關係を目標せないのが、いつでも我が對支策が行詰る基因をなす。思へ、若豐一張を對象とする外交は誰が考へても本氣の沙汰とは見られず、彼張學良の浮動せる地方的勢力と我政府との妥協がついたにせよ、それは暫定的であり、地方的であることは申すまでもない。假りに彼に暫く靑天白日旗揭揚を見合はせさせることが可能とするも、それが全支對策の將來にどんな善い反映があるか。そこを大觀したならば、いかに無神經な田中內閣でも、遲鈍無比な民政黨でも覺りがつきさうなものである。我國が今までどほりの武斷的權道を以つて覺醒せる支那をリードし得るか。アメリカ、ロシアの强剛は腹背にあるではないか。支那を立派な獨立國に仕立てるのは寧ろ日本自身が將來に强く生きる爲ではないか。そして東洋の危局を回避せしめる唯一の道である。今にして曲庇を根本的に革正するの勇氣がなく、ノンベン奉天擁護を持續したらんにはまたたくまに深淵にすべり落ちんやも知れず。滿蒙の小天地のみを執念せずに全支に活眼を拂ふべきである。そして一時的苟安の道を選ばずして恒久的親和の道に就くべきである。

要は支那以外に眞の我が强い競爭者のあることを算中において對支策の根本を決定すべきである。



死刑廢止への道

瀧川幸辰

一

イタリヤの青空にそそり立つあの有名なミラーノの大寺院の、南東の角から一町ばかり東にはいると、チエザーレ・ベカリヤ通といふ小路につきあたる。この小路が北につきるところはベツカリヤ廣場であ

の研究者であつたといふものの、これといふ業績も殘さずして生涯の幕を閉ぢたところの平凡な學究に過ぎない。それにしては紀念像のすばらしいことよ。これこそは彼が日本流に數へて二十七歳のときに出版した『犯罪及び刑罰』といふささやかな著書の有形化したものに外ならない。『犯罪及び刑罰』はどんな内容の本であるか。

の[illegible]に向つて自己の無實を[illegible]へた。死刑執行者が[illegible]を以て四肢を[illegible]する毎に苦しそうな表情を見せたが、囚人は默々として[illegible]に堪えた。彼の四肢は完全に打砕かれた。彼の身體が四肢を組合せたまま車の上に横たへられたとき、彼は突然口を開いた。「私は無實の罪によつて死んで行く。裁判官が間違つたのです。だが無實のキリスト様はもつと苦しい死方をせられました。」彼は千七百年前に十字架にかけられた偉大な人物を思起すことによつて自らを慰めたのである。

この處刑は有名なカラー事件であつて、當時の啓蒙思想の中心フランスの刑事裁判制度の改革、延いては全世界の刑法改革に原因を與へたのである。

三

ジヤン・カラーは一六九八年に南フランスに生れた。家は信仰の深い新教徒である。彼は正直な商人として人々から尊敬せられて居た。極めて平和的な寛大な性質は、次男息子ルイがカトリックに改宗したこと、ルイの改宗に盡力したジヤンヌ・ヴイギユエといふ婦人を家に置くことに心よく同意したのであつた。

一七六一年十月十三日の夕方、長男マルク・アンツワヌの學校友達ガンベル・ラヴアスが訪ねて來た。家族と來客とは夕食を共にし、夜[illegible]、そこで縊死して居るマルク・アンツワヌを發見した。マルク・アンツワヌが部屋を抜出たことには誰も氣付かなかつたのである。この息子は學問も出來たが家の新教が辯護士を志した彼の前途を鎖したため、力を落し怠惰者になつて不愉快な日を送つて居たのである。ピエルとラヴアスとは驚いて大聲を出した。一番に驅付けたのに父のジヤンであつた。彼が息子の死骸をおろして首の紐をのけて居る間に、カラー夫人もヴイギユエも出て來た。そのうちに醫者も來た。醫者は死亡證明書を書いただけで歸つてしまつた。これが間違の第一原因である。

夜の十二時半に裁判所の役人が鑑定人を作つて檢死に來た。檢死の眞最中に群衆の一人が「家人が殺したのだ」と叫んだ。何人の聲であつたかは最後までわからずじまひに終つた。しかし家は新教、死人は舊教に改宗したがつて居たのは事實であるから、群衆の一言はカトリックに凝固まつて居る役人に或るヒントを與へるに十分であつた。彼は直にカラー夫婦、ピエル、ラブアス、ヴイギユエを捕へ、詳細な訊問書を作つた。勿論法律違反である。間違の第二原因はここにある。

第一回の訊問のとき、カラー夫婦とラブアスとはマルク・アンツワヌが床の上で死んで居るのを發見したと陳述した。法律上[illegible]

骸は裸體のまま町を引廻して刑場に行くことになつて居た。彼等はこの侮辱を避けるために嘘をいふたのである。ところがその陳述は殺人犯人にされる心配がある。それに思付いたので、マルク・アンツワヌが縊死して居るのを發見したといふ陳述に變更した。役人は信じなかつた。これが間違の第三原因である。

十一月上旬にマルク・アンツワヌの立派な埋葬式が行はれた。日は日曜日で儀式はカトリックによつたことなど、すべて役人の細工であつた。役人はカトリックの國教たる地位を明かにするためにカラー事件を利用した。カラー事件は役人の筋書通りに進まざるを得ない。

十一月十八日カラー夫婦に對し拷問の宣告が下つた。最終訊問の日にジャンは裁判所の建物の前に處刑場が建てられたのを見て彼の運命を直感した。心の亂れが顔に現れた。この混亂は有罪の材料に利用された。一七六二年三月九日ジャン・カラーは八對五の票數で車裂の宣告を受け、その判決は宣告の翌日に執行せられたのである。

他の被告人の運命はどうなつたか。カラー夫人は夫の處刑後四日目にそれを知つた。ピエルとラヴアスとは恐れてカトリックに改宗した。三月十八日彼等に對して十對三の票數で判決が言渡された。ピエルは追放、他は無罪であつた。この判決と三月九日の判決とは明かに矛盾して居る。ジャン・カラーは他の被告人の力を借りて年若い腕力の強いマルク・アンツワヌを殺したため死刑に處せられたのである。ジャンが死刑になつた以上、他の被告人も殺人罪を犯したことにならねば辻褄が合はない。それは兎に角、放免された人々は呪はれた故郷を捨てて隱家をスイスに求めたのである。

四

一七六二年三月ヴォルテールはマルセイの商人からカラー事件を聞いて驚いた。彼は材料の調査に手をつけた。ニームから逃げて來て居るジャンの末息子ドーナをスイスで發見してカラー事件の無罪を確信した彼は遂に表面に現れた。まづカラー未亡人を伴つてパリーに出た。トゥールズの裁判の再審管轄はパリーであつて、未亡人の出頭は再審の必要條件であつたからである。

トゥールズの裁判所は判決書の交付及び記錄の閲覽を拒絶したが、ヴォルテールは公開狀を發表して輿論の喚起につとめ、遂に再審裁判所をして再審を受理するの餘儀なきに至らしめたのである。ここに至るまでのヴォルテールの努力は非常なものであつた。

一七六五年二月二十八日カラー未亡人、ピエル、ラヴアス、ヴイギユエは再び拘留せられた。五十人の裁判官によつて再審の裁判が開かれた。その裁判はトゥールズ裁判所が故意に看過した種々の材料を利

用して、公判の過程中ヴォルテールに宛てて公開狀を發表して世論に眞相を知らしめ、また辯護人も熱心に活躍した。その結果一七六五年三月九日即ちジャンの死刑宣告のあつた三年目のその日にジャンは無罪に決定し、他の人々も拘留を解かれた。裁判の結果を聞いたヴォルテールはジャンの末息子ドーナを抱いて嬉泣きに泣いたといふ。尚ヴォルテールは訴訟のため殆ど乞食に身を落したカラー一家のために義捐金を募集した。ルイ十五世も三萬六千リヴールの賠償金を提供せざるを得なかつたのである。

五

カラー事件は直にヨーロッパに廣まつた。ここにアンシエン・レジームの刑事制度の崩壞する小穴が出來た。ベッカリヤの『犯罪及び刑罰』はこの歴史的背景のもとに生れたのである。

刑事制度の改革はベッカリヤの加はつて居た雜誌『イル・カフェ』同人の目標の一つであつた。その中でもアレッサンドロ・ヴェリーは囚人の保護者であり、政府の委託によつて囚人の異議申立や希望を取次ぐ役目をして居た關係上、『イル・カフェ』の執筆者は相當に監獄制度の缺點や誤判に關する知識を持合せて居た。ベッカリヤの『犯罪及び刑罰』が世界的となつた原因、殊にフランスで歡迎された理由は、

甚だ[illegible]しい[illegible]に生きて居たか[illegible]。ベッカリヤの[illegible]ら[illegible]ひ所が死刑及び拷問の廢止にあつたことは容易に想像出來ると思ふ。ベッカリヤは『犯罪及び刑罰』によつて[illegible]刑[illegible]止論の先達となつたのである。一七六四年六月に本が出來上つた。

ミラーノからどんな偉大な人物が生れて居るか私は知らない。ミラーノがベッカリヤの名をもつ町と廣場と彼の記念像とを誇る理由は、『犯罪及び刑罰』によつて彼のかち得た名譽、イタリヤの世界的レコードの一つを旅人の胸に刻まうと思ふ心からであらう。

六

話が前後するがここでベッカリヤ以前の刑事裁判、殊に死刑について一言して置く。

死刑は最も古い刑罰である。昔の復讐は死刑そのものであつた。また最も頻繁に行はれた刑罰は死刑であつた。啓蒙時代までの刑罰の歴史は血を以て書かれてあつたといふてよい。十六世紀のニユールンベルヒのフランツ・シュミットといふ死刑執行者は、二十餘年の在職中にその町だけで千百五十九の死刑を執行したといふことである。また十七世紀の有名な威嚇主義の刑法學者カルプツォは、在職四十餘年の間に二萬の死刑を宣告したといふことである。これに[illegible]

態はよくわかる。殺人、放火、强盗、竊盗に對してはもとより、瀆神、魔女、貨幣僞造、不正度量衡の使用に至るまで、およそ犯罪といふ犯罪は悉く死刑を以て罰せられたのである。死刑を適用する犯罪の範圍が狹くなり死刑の執行が次第に少くなつたのは近頃のことである。その原因は文化の高まつたこと、刑法學が發達したこと、國家の基礎が鞏固になつたため秩序の破壞者を殺す必要がなくなつたことなどである。この意味において刑法の歴史は死刑の歴史である。

七

さてベッカリヤは『犯罪及び刑罰』の中で死刑をどう取扱つて居るか。勿論彼は徹頭徹尾死刑に反對したのである。『犯罪及び刑罰』に現れて居るベッカリヤの議論を詳細に引出して見よう。

ベッカリヤは第一に死刑は適法でないといふ。ベッカリヤはこの原則の根據を社會契約論に求める。各人は社會の安全をはかるために必要なだけの個人的自由を社會に讓渡す。この部分はなるだけ小さいことが望ましい。法律を破つた場合に刑罰を受けねばならないといふ義務は社會契約から生ずるが、同時に死刑の適法でないこともこの契約から出て來る。各人は社會のために社會契約によつてなるだけ小さな程度の自由を犧牲にするが、生命を犧牲にすることはこの契約に含まれて居ない。生命を處分する權利は各人に屬しない。[illegible]り得ないし從つて權利でもない。これが第一の理由である。[illegible]も生命を處分する權利があるか否か、社會契約が生命の讓渡を求め得ないか否かの點は社會契約の概念に含まれて居るのではない。ベッカリヤと同時代の、そうしてベッカリヤがこれに負ふところの多いルソーの社會契約論は死刑を認めて居る。

第二に死刑は必要缺くべからざるものではないといふ。ベッカリヤによれば死刑は權利ではなく國家の個人に對する戰爭である。ベッカリヤは死刑問題を二方面から論じた。その一つは國家が無政府狀態に陷り、法律秩序の代りに無秩序が生じた場合である。個人が自由を奪はれたに拘らず、國家の安全を害し國家形式に變更を加へる力をもつ限り、國家はその個人の死を必要とする。ベッカリヤが死刑を承認する唯一の場合である。他の一つは第三者を犯罪から遠ざけるため死刑が唯一の方法と見られる場合である。ベッカリヤはこの問題を死刑の威嚇力と牢獄の威嚇力との比較問題として論じて、死刑否定の結論に達した。ベッカリヤは重い自由刑が死刑よりも犯罪を抑壓するのに一層適當であると主張した。

第三に死刑は正義に反するといふ。刑罰が正義に合するためには、威嚇の目的と刑罰の輕重とが均衡を保たねばならない。死刑は自由刑

より重いか威嚇力に自由刑に於てはない。そこで輕い刑罰か重い刑罰よ
り威嚇的である場合にはどうすべきであるかといふ問題が起る。ベッカリヤは次の如く答へる。生涯にわたる自由刑は死刑と同様に苦しいから同様に殘酷である、と主張する人があるかも知れないが實はそうでない。自由刑の悲しい瞬間を合算するときは殘酷になるかも知れないが、自由刑の苦痛は一生涯に分配されて居るから囚人にはさほどに影響しない、囚人は何等かの希望を將來にかけて現在の苦痛に堪えるから慰安があり鎮靜がある。自由刑に對して恐怖を感ずるのは第三者である。第三者は囚人の苦痛の總量を合算し、自己の心を以て囚人の心を推量するから、そこに慰安も希望もない。自由刑に威嚇力はあるが殘酷性のないのはこの理由による。

第四に死刑は矛盾を含むといふ。ベッカリヤによれば一般意志の發現であり殺人を罰することを目的とする法律自身が殺人を犯すことは矛盾であるし、また市民を殺害行爲から保護するために公然と殺人行爲を規定することも矛盾である。

ベッカリヤの死刑論は上に述べたところで盡きて居る。ベッカリヤが死刑の威嚇力を否定したことはその見識をうかがふに足る。死刑に威嚇力のないことは廢止論の有力な論據の一つである。

ベッカリヤの主張は今でこそ何でもないが、專制政治のもとであれただけの意見を發表するにはかなりの[illegible]であつたと[illegible]。[illegible]レジムの[illegible]を見、[illegible]と考へた。彼等がこの著物を[illegible]と思ふたことは[illegible]迫害が烈しかろうといふことは出版前からわかつて居た。故にベッカリヤはこの本を匿名にし、自由主義者レオポルドの攝政のもとにあるリヴォルノで出版した。否、ベッカリヤ自身は出版の意志がなかつたといはれて居る。彼は折角の原稿を火に投じて暗に葬るつもりであつたが、友人ピエッロ・ヴエリーが出版を勸告し原稿の淸書まで引受けたと傳へられて居る。この話が事實とすれば刑法學はこの學問に緣なき人に感謝を捧ぐべきである。

八

ベッカリヤの思想を當初に實行したのは自由主義者トスカナのレオポルド一世である。彼は一七六五年即ちベッカリヤの著書の世に出た翌年に位について死刑の執行を停止し、一七八六年に廢止を斷行した。レオポルド一世をして死刑廢止に導いたものは目的思想である。一七八六年の刑法は刑罰の目的として損害の賠償、犯人の改善、犯罪手段の實行などを擧げて居る。しかし死刑廢止は永くなかつた。一七九〇年にはレオポルド一世によつて國家に對する犯罪に、一

五年にはフェルディナンド三世によつて普通犯罪に死刑を科することになつた。更に十九世紀のはじめには死刑の適用範圍が擴張せられた。尤も實際に死刑を執行する場合は極めて少なかつた。裁判者は死刑を科さない方針をとつたからである、國民は死刑を中世の遺物として排斥したからである。死刑が執行される毎に國民の感情は焦立つた。

フイレンチエではその死刑執行のとき有ゆる店や勸工場の戸を閉めた。一行が通行する町々は殆ど人影を見せない。市民は寺院に驅付けてお祈りをした。刑場附近にはほんの僅かの見物人が立つて居たに過ぎない。

これは一八三〇年のフイレンチエで起つた有名な事件の記事である。

この國民思想は刑法に動搖を與へた。一八三八年には裁判者全員の一致がなければ死刑を科し得ないことになつた。事實において一八三一年以來死刑は執行されて居ない。一八四七年に改めて死刑を削除したが、一八五二年に再びこれを規定し、そのまま一八五三年の刑法に引

一九二一年のフェリー案は死刑を知らないが、一九二七年の、案は死刑を復活した。既に一九二六年ムッソリーニが國家の成立を[illegible]する犯罪を罰する特別法において死刑を規定したので、ロッコ案はこれに從つたのである。

九

オーストリヤではマリヤ・テレジヤ時代から死刑問題が論せられて居る。一七六八年のテレジヤ刑法はまだ近代思想の影響を受けては居ないが、一七七六年の刑法はオーストリヤの刑事制度にとつて劃期的のものである。拷問は廢止せられ、死刑廢止の當否が研究されることになつた。研究の結果、死刑は犯人の勞働力を社會から奪ふだけで少しも利益にならないこと、それよりも勞働場を建築して死刑を強制勞働に代へるがよいといふことになつた。尤も適當な勞働場がないためこの計畫は延期せられた。

オーストリヤにおいて死刑が[illegible]ヨゼフ二世の時代であ

しいた。その後五十年の間に二三の數が改正せられて一八五二年の刑法に移つたのである。

大戰後の一九一九年にオーストリヤの議會は滿場一致を以て死刑を廢止した。一九二三年の刑法草案が死刑廢止の態度を維持して居ること勿論である。

十

啓蒙哲學の本營フランスはどうであるか。最初に死刑問題を論じたのは革命時代の憲法議會である。當時フランスには死刑に當る罪が百十五あつた。一七九一年にはじめて議會に死刑廢止案が提出されたが、議會は死刑存置の決議をした。尤もこの提案が緣になつて死刑の制限及び執行方法の緩和が認められた。死刑を科するは單に生命を奪ふだけの意味でそれ以上の何ものでもない、といふ根本原則が立てられ、この原則は十月の刑法に採用されて居る。この刑法によつて死刑に當る罪は百十五から三十二に減少した。その後ナポレオン刑法が制定せられるまでに、死刑廢止は六度議せられたが常に失敗に終つた。ナポレオンが支配者となつてから再び死刑の數が多くなつた。ヨーロツパ諸國の刑法の母といはれて居る一八一〇年のナポレオン刑法は有ゆる政治犯罪に對し死刑を科した。制定當時には死刑に當る罪が三十九あつた、十九世紀の二十年代になつて[illegible]スト教育協會がラマルテインの指導のもとに死刑[illegible]ーゴーがこの運動に參加した。しかしこの當時の刑法に及ぼした影響は何もないといふてよい。

議會が死刑問題を眞面目に取扱ひはじめたのは一八三〇年の七月革命後である。その十月に議會は政府に對し死刑の代りに自由刑を制定すべきことを提案し、一八三二年には刑法の部分改正に成功した。第一に死刑に當る罪の數が二十二になつた。第二に死刑免除の事情を認定する權限が裁判所に與へられた。その後一八四八年の二月革命の影響は政治犯罪に對し死刑を廢止した。この改正は十一月の憲法に明記せられた。尤も一八五三年には政治犯罪の意義に多少の改正を加へ、王家の人に對する暗殺を政治犯罪から除外してこれに死刑を科した。

フランスにおける死刑廢止運動は今日まで一向に效果を現して居ない。政府は廢止論者の建議に基き一九〇六年に死刑廢止の法律案を起草したが、一九〇八年に三百三十票對二百一票を以て否決された。この問題につきパテイ・パリジエン紙は一九〇七年に一般投票を募集した。結果は百四十一萬二千三百四十七の回答中、百八萬三千六百五十五が死刑賛成、三十二萬八千六百九十二が死刑反對であつた。

ランスの輿論を知ることが出來る。フランスでは死刑執行の公開を禁ずることすら認められない。

十一

スイス刑法は聯邦刑法及び各州刑法である。聯邦刑法は死刑を認めないが、この法律は歷史上も實際上も今のところ重要ではない。各州刑法は死刑の制定につき獨立の權限をもつて居る。二十五のカントン中で十五州は死刑廢止、十州が死刑存置である。廢止の州はノイエンブルヒ、チューリッヒ、テッシン、ゲンフ、バーゼル・スタット、バーゼル・ランド、ゾロトウルン、ニトワルデン、アールガウ、トウールガウ、ワート、アッペンチエル・ア・ローデン、ベルン、グラールス、グラウビュンデンの十五州、死刑存置の州はウリ、ルチエルン、オプワルデン、アッペンチエル・イ・ローデン、シュウイツ、ツーク、ザンクト・ガレン、ワリス、シヤッフハウゼン、フライブルヒの十州である。

十二

ドイツは死刑問題について極めて保守的である。フランス及びドイツが死刑を廢止しないことは世界の死刑廢止運動の一大障碍といふてよい。

ドイツでは十九世紀のはじめまでカロリナ刑法が各國刑法の基礎を形作つて居た。死刑はカロリナ刑法の刑罰組織中最も重なものであつた。一八四八年までにドイツ各國は屢々刑法の改正を企て死刑についても種々の變遷があつたが、死刑を廢止した國は一つもなかつた。例へば一八三三年にザクセン、一八三八年にハンノーヴア、一八四〇年にバーデンが死刑廢止を試みたが、いづれも失敗に終つて居る。

一八四八年十月フランクフルト議會ははじめてドイツ國民の「基本權」中に死刑廢止の條項を掲げた。これによりドイツにおいては各國の法律を以て死刑を廢止する道が開かれたのである。ところが一八五一年の聯邦議會は決議を以て「基本權」の效力停止を宣言したので、

現行刑法の死刑は制定のとき既に議論せられたのであつた。その草案は死刑を科する犯罪を四つ認めて居た。ところが一八七〇年三月一日の第二讀會において死刑問題は百十八票對八十一票を以て廢止に決定した。五月二十一日に第三讀會が開かれたが、劈頭に司法大臣レオンハルトは政府の命令により第二讀會の決議を朗讀した。死刑廢止の決議を撤回することが聯邦の諸法律を制定する必要條件であるといふ注意を暗示したのである。議員ブランクは折衷案として死刑廢止國のザクセン、オルデンブルヒ、アンハルト、ブレーメンについては死刑廢止を認め、他の諸國だけで死刑問題を議すべきことを提案したが、宰相ビスマークはブランク案に反對し有名な演說を試みた。

私が聯邦によつて北ドイツのために二重の法律を作るべき主義、即ち謂ば北ドイツに二つの階級を作るべき主義を是認する法律案に贊成することは、私にとつては絕對に不可能である、それは私の過去を完全に否定することである。立派な人は自分が開けて居るため、教育を受けて居るため惡分子に對してすら、もはや首斬刀による矯正を必要としないと考へる程度に進んで居る。ところが二千七百萬の野人はまだザクセン・オルデンブルヒ的文化階段に達して居ない、これに對しては秩序維持の必要上、首筋に首斬刀をあてねば

私にただドイツ

おける平等を北ドイツ國に

不平等を承認することではない、

ことではない。諸君、これは政治的に不

議會はビスマークの固守した理由の重要さを否定

かつた。死刑は百二十七票對百十九票を以て存置され

た。この刑法はドイツ聯邦成立後、聯邦刑法として今に及んで

ドイツは一九〇九年以來屢々刑法草案を發表して居る。無

題は重點の一つである。しかし死刑廢止を斷行した草案は一九

の公表されなかつたラートブルフ案だけである。

十三

死刑問題は何人にとつても多少の興味と感動とを引起させる、

を存置すべきか廢止すべきかにつき各人は本能的に自己の傾

して居る。少くとも自分限りの問題としてはわかり切つた

居る。全くその通りである。それ故に漠然と考へるときは、

究の餘地のない問題のように思はれる。ところが事實はま

ある。刑法上他の問題については種々の研究があるに拘らず、死刑の學問的取扱は殆ど發表せられて居ない。否、世人の多くは死刑問題を考へて居ない。一九一〇年にダンチッヒで開かれたドイツ法曹會が死刑問題を議題にしたとき、「自分は死刑贊成者であるかどうか自分にもよくわからない」といふ告白をした刑法の教授があつたといふことを、リープマンが指摘して居る。恐らくは一九一二年に公にされたリープマンの『死刑』がこの問題に對する唯一の學問的研究ではなからうか。何人にもわかり切つたものと考へられて居るに拘らず、或はそう考へられて居るが故に、却つて顧られないところに死刑問題の特色がある。

十四

現今の刑法または刑法草案とフランス革命以前の暗黑刑法との最も著しい區別は、その刑罰組織が本質的に違ふ點である。昔の刑罰の重な部分を占めて居た死刑はその廣大な適用範圍を失ひ、今日は自由刑が刑罰組織の中心となつて居る。この變化は刑法の進化の名を以て呼

この問題につき存置論者の一部は死刑の廢[illegible]謂ゆる人道的刑罰をもつ刑法によつて文化の高度が象徴されるといふ主張は間違つて居る。文化の向上は同時に犯罪の狀態を危險ならしめる。文化を高める力と犯罪を增加せしめる力とは源を同じくする。一方において論理化または洗練化が高まれば高まるほど、他方において犯罪技術は次第に精密になり危險になる。この對立が大きくなればなるほど、文化社會が犯罪惡を評價することが嚴しくなる。文化社會に重い刑罰の必要な理由はここにある。

刑罰はそれ自身一つの害惡である。これを受ける個人にとつて苦痛であるばかりではなく、これを加へる社會にとつても損害である。故に刑罰はそれが犯罪を抑へる唯一の手段であるときにのみ是認せられる。死刑の正當性もこのところに結付けられねばならない。

すべて刑罰は犯罪を防ぐことによつて社會を保護することを目的とする。死刑は死刑のもつ威嚇力によつてその任務を果す。犯人の多くは極めて利己的であるが、利己主義者に對して最も效果ある方法は生命を奪ふこと[illegible]

があるからこそ死刑は他の刑罰の果し得ない役目をつとめる。無期自由刑及び法刑は回復性をもつため、そうして囚人に放免または恩赦の期待を與へ、事實期待通りになることが通常であるからその威嚇力は遠く死刑のそれに及ばない。

これが死刑維持の第一の理由である。

存置論者の一部は民族的法律觀念をその根據とする。——有ゆる法律制度は民族、社會、文化、時代即ち歴史的條件によつて制限されて居る。法律制度の變更もこの條件に服する限りにおいてのみ許されるに過ぎない。死刑にもこの留保はあてはまる。死刑は永遠に傳はるべき刑罰ではない、現に昔の廣大な適用範圍から、今の制限的なものに狹められて來た、窮極においていつか廢るべきときが來るであらう、また來なければならない。ただ問題は現在及び近き將來の社會狀態に直面して、死刑を拋棄することが民族確信に一致するか否かの點である。

現在の社會は犯罪の大小と刑罰の輕重とが均衡を保つべきことを要求する。殺人者の受ける死刑は單なる應報思想の要求ではない、唯一の適當な贖罪方法である。贖罪は主觀的の復讐本能ではなく客觀的な正義觀念の標準に從つたものである。故に「民族的法律觀念は死刑の唯一の、しかも完全にして十分な正當理由である。」死刑廢止は民族確[illegible]としなくなるときはじめて實行される。死刑は永遠のものではないが、この民族確信の變化しない限り廢るものではない。

これが民族的法律觀念に立つ論者の根據である。

十五

死刑廢止論の理由は極めて簡單である。——死刑は囚人を牢獄に押込めて苦しめる刑罰、拷問の苦痛を與へる刑罰、身體の一部を毀損する刑罰などから種々の殘酷な加重的死刑までを含む中世的刑罰組織の最後の環である。死刑と現今の自由刑や財產刑との間には何等の連絡もなければ、また比較すべき何ものもない。死刑の正當性の證明に役立つものは原始時代のタリオの形式において考へられる應報思想のみである。

死刑廢止論の積極的理由はこれだけである。

廢止論の消極的理由は死刑に威嚇力がないといふことである。——元來吾々が罪を犯さないのは種々の原因によるが、通常は經濟的原因、時には倫理的または宗教的原因が理由となつて居る。吾々が刑罰を知ると否とは吾々の行動の標準になるべきものではない。死刑についても事情は同一である。死刑を科する犯罪は主として生命犯罪及び政治犯罪である。

ところが第一に殺人は一時の激情のためにこれ

合であつても、計畫的にこれを行ふ場合であつても、いづれにしても犯人は刑罰のことを考へて居ない。激情的殺人者は行爲の魅力に幻惑されて他のことに氣付かないから、また計畫的殺人者は既に萬事を覺悟して居るから、彼等に對して死刑は何の威嚇にもならない。第二に政治犯罪にとつてであるか。、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。即ち死刑は生命犯罪に對しても政治犯罪に對しても威嚇力をもたないといふ結論になる。

十六

死刑は野蠻時代の遺物である。死刑廢止の理由はこの簡單なことで盡きて居る。この簡單にして有力な理由に對し、存置論者は民族確信が死刑を要求するといふ。民族確信または民族的法律觀念といふのは何か。

或る思想が時代精神に影響を與へることが大きいから見逃すことの出來ないとき、吾等はそれを民族確信と呼ぶ。昔の死刑執行は公開されて居た。今公開執行を是認する法律は殆どない。文化社會は死刑執行の公開に堪え得ないからである。これが民族確信である。民族確信は贊成者の數や投票によつて定まるものでもなければ意見といふ意味のものでもない。民族的文化の雰圍氣中に自ら民族確信といひ得るものが生れる。その昔笞刑や身體毀損刑の廢止を要求したものは民族確信であつた。今それは死刑の廢止を要求する。社會には一方において保守的な民族確信があると同時に、他方に進歩的な民族確信が對立的地位を占めて居る。共に民族確信である。法律の任務は生々とした新興の民族確信に力を添へることである。傳統や慣習は性質上常に保守的で現狀維持のために働くが、法律は社會の進歩的要素を育てて行く方向に作用せねばならない。法律の改正は常に保守的勢力の強き反對を押切つて行はれる。法律が傳統の奴隷となるとき、法律による社會の改良はもはや望まれない。汽車が地上を走りはじめた頃學識ある醫者でさへ、あんなに早く走ると理性がなくなると豫言した。今日汽車の速力はその當時の三倍五倍になつて居るが、醫者の心配は理由のないものであつたことが證明されて居る。傳統や慣習は時々迷信と臆說とを作ふ。人間が傳統や慣習や迷信や臆說に盲從して居たならば、アメリカは遂に發見されなかつたであらう、太陽は今日まだ地球の周圍を廻つて居ろに相違ない。

有力な死刑存置論者カールさへも、終局の目標は死刑廢止にあるといふ。これは死刑が野蠻時代の遺物であることを承認したことにな

る。野蠻は一日も早く社會から法律から取除かれねばならない。[illegible]制度從つて法律秩序は人間の性質を決定するにつき與つて力のあることいふを俟たない。「法律が人間の弱さまで低められてからは人間も法律を迎へるようになつた。人間は法律に伴つて穩かになる、恰も法律に伴つて粗野になると同じく。野蠻な犯罪は野蠻な刑罰の後を追ふて忘却のなかへと消えて行く。」死刑を科する犯罪がなくなつたから死刑を廢止するのではなく、實に死刑を廢止することが犯罪をなくする原因である。スイスの死刑廢止のカントンは世界で殺人罪の最も少い土地であるといふ事實は立派な證據ではないか。

死刑に威嚇力のないことは既に死刑廢止論者によつて心理的に説明されて居り、また死刑廢止國の統計がこれを證明して居る。ところが政策的に死刑の必要を主張する者は、常に死刑の威嚇力を口にする一。九二六年のイタリヤの法律は死刑に威嚇力があるといふ前提のもとに四十年の尊い經驗を捨てて死刑を再與したのである。またドイツの新しい刑法草案の理由書は、戰爭の結果と見るべき殺伐な社會に當面しては死刑の力強き威嚇手段を捨てることが出來ないといふのである。しかしイタリヤ及びドイツ以上に戰爭の災害を蒙つたオーストリヤは平和回復と同時に死刑を廢止し、却つて好結果を示して居る事實がある。國家創立のときは秩序維持のために死刑が必要であるといひ得るかも知れない。少くともこれに[illegible]

しかしこの理由に安定せる國家に適用さるべきでない。死刑存置なければ國家の秩序が保てないといふのは死刑の威嚇力が迷信的であり非科學的であることを知らないことから生ずる幻影に外ならない。

十七

次に死刑の贖罪作用を考へて見よう。苦痛による贖罪淨化の思想は人間の歴史にとつて極めて古いものの一つである。悲劇の藝術的價値は運命の生んだ主人公の責任が償はれ淨められるところに成立する。責任の償はれない悲劇、罪なくして苦しむ悲劇の藝術的價値の少いわけは、贖罪に倫理的價値の回復社會の調和をもたらす力があるからである。しかしこれは死刑內に贖罪觀念のあることが前提となる。次の新聞記事は贖罪と死刑存置との間に大きな溝のあることを物語る。

――ハンガリーの強盗殺人ステファン・スッアルマの死刑執行は數年來の不思議なものの一つである。犯人は不遜極まる態度で執行を受けた。執行前日の午後、犯人は執行の近づいたことを知つて落着を見せた。彼に說教しようと焦つた敎誨師は却つて嘲弄せられた。夕方七時頃犯人は鬚を剃つて欲しいと申出た。俺はつるつるした顔であの世へ行きたいのだ」と說明した。

した。床屋が石鹸をつけて居たとき犯人は笑ひながらいふた、「氣をつけろ、俺を切らないように。殊に首に氣をつけろ、明日は立派なネクタイを結んでもらふのだから」と。床屋が出て行くと犯人は「上等の夕食」を請求した。燒小鳥とエンメンタール・ケーゼと葡萄酒と炭酸水とを一紳士の如くに」注文した。注文の品が出た。彼は大に飲み大に食ふた。食後の果物が出たときは彼は執行者に來てくれるようにと賴んだ。執行者は死刑囚の監房に現れたが、犯人が執行者の職制を執念深く聞くので答へなかつた。「少くともたつた一つ君は俺にいふてよいことがある、これまで幾人絞めたのだ。」「五人。」「それでは俺が最初の半ダースを作つてやるよ。」笑ひながらこんな話を交した。執行者が立去らうとすると、後から「大に愉快だつた」と浴せかけた。それからまた酒を飲んだ。一時間の後彼は監獄の役人を呼びにやつて、死刑囚には最後の願が容れられるといふのはほんとうかと尋ねた。そうだといふ答を聞くと、彼はジプシーの音樂藝人を呼んでくれといふた、陽氣な歌であの世へ送つてもらひたいといふわけである。また情婦にもう一度逢はしてくれと賴んだ。彼の意見によれば「女なしにハンガリー人が樂しめると思ふのか、もう一度底拔けに遊びたい」といふのである。この願は勿論容れられなかつた。犯人は別に氣を惡くはしなかつた一俺だつて犯人の最後の要求を充たしてやるといふ約束の程度がどれだけか[illegible]るよ。大きなことをいふな、大きなことを。」

これはウインのデイ・ツアイト紙の記事の一節である。この犯人は友人を極めて殘酷な方法で殺して強盜を行ひ、犯罪を自白し、上に揭げたような罪の償ひ方をしたのである。死刑に贖罪淨化の作用があるといふ立場は見事に裏切られて居る。

十八

死刑は野蠻な行爲である。故に死刑存置論者も「死刑に贊成」といふのを避け「世間にはまだ死刑廢止の程度に達して居ない」といふのである。有名な死刑存置論者カールも「自分の意味における確信的死刑論者といへども、やはり死刑の排斥を立法上の目標として留保するであらう」と告白した。

繰返していふ、死刑は野蠻な行爲である。それ故に死刑執行者は世間の人に嫌がられる。昔執行者は特別の階級を作り、階級の内部だけで結婚して居た。もはや今日はそうでない。しかし社會感情が執行者といふ職業に對して不快を感じて居るのは事實である。職業に上下はない。それにも拘らず或る職業が特に排斥されるのは、職業に伴ふ聯想が世人の不快を引起すからである。人に罪があるのではない、職業

に罪があるのでもない、制度が罪を作つたのである。

　トルストイは死刑に對する抗議書「私は默つて居れない」の中で死刑執行者のことを書いて居る。彼の知人の畫家が死刑執行者の繪を描かうと思つてモデルを探した。一人の執行者を探しあてた。執行者は畫家の訪問に驚いて急いで姿を隱した。畫家は執行者の妻を喜ばす種々の手段をとつて遂に主人に面會することが出來た。主人は「屋根裏の部屋」から出て來た。「意地の惡い、頑固そうな、落着のない、おどおどした顏」である。主人は何のために自分のような人間がモデルに必要なのかと幾度も繰返して質問した。畫家はいつか町で出會つたときその顏が、腹案の繪に適して居ると感じたからだと答へた。しかし主人はいつ、どこで自分を見たか、どんな着物を着て居たかなど種々の質問を出して容易に話が落着かなかつた。

　トルストイの話はこれだけである。トルストイは執行者を非難するために書いたのではないが、執行者の姿がいかにも鮮かに出て居るではないか。

　ギヨテンといへばフランスの死刑執行の道具である。フランス革命のはじめ一七八九年にギヨテンといふ醫者が死刑を一樣に、そうして迅速に、そうして苦痛なしに執行し得るためにこの機械を案出したので、機械にその名をつけたのである。通常ならば名譽なことである。

　しかしギヨテンは自己の發案した機械のために日に日に多數の人命が失はれることを氣にして、その最後は極めて不幸であつたといふ。死刑執行によつて不幸に陷る者は犯人とその家族だけではない、執行者も機械の發明者も共に不幸な人になる。人に罪はない、罪は制度の負ふべきものである。制度は改め得る、改めねばならない。

　三度繰返していふ、死刑は野蠻な行爲である。しかもその傳統は極めて古い。傳統が古ければ古いほどこれと戰つて勝つことがむつかしい。傳統が百年千年と續くときは、國民の大部分がそれを排斥しても容易に根こぎにすることは出來ない。しかし吾等はこの傳統と戰ふことを避けてはならない。

十九

　死刑の必然性を理由づけた學問的研究が一つでもあるか。一つもない。死刑反對から死刑贊成へ移つた人が一人でもあるか。一人もない。死刑存置論者が「死刑反對者は文化と人道の太陽の光のもとに戰つて居る」といふたとき、既に存置論の敗北と廢止論の勝利とが決定されたのである。「各世紀は刑罰の緩和化と人道化とについてその任務をもつて居た。十七世紀は教養ある人と、殊に法律學者の努力によつて魔女裁判を取除いた。十八世紀には拷問が廢止せられた。十九世紀にて

れに負けてはならない。吾等の任務はこの關係において同じ步調を續けることである、卽ち死刑を廢止することである。」キルヒマンのこの希望は充たされなかつた、死刑廢止の思想は十九世紀において安全な勝利を收めることが出來なかつた。しかしその日は近づいた、二十世紀の文化は今まさに野蠻の最後の抵抗者を征服しようとして居る。旣にルーマニヤ（一八六四年）、ポルトガル（一八六七年）、オランダ（一八六八年）、スイス聯邦二十五のカントン中の十五（一八五四年——一八七四年）、イタリヤ（一八八九年）は十九世紀において、ノールウエ（一九〇二年）、オーストリヤ（一九一九年）は二十世紀になつて死刑を廢止した。ベルギー刑法には死刑を科する犯罪が六つあるが、事實において死刑は一度も執行されない。大戰後に發表されたスイス（一九一八年）、オーストリヤ（一九二二年）、チエッコ・スロヴアキヤ（一九二六年）、の刑法草案は死刑廢止を企てて居る。ドイツの死刑廢止論者は「野蠻人の島」として取殘されないために死刑存置の草案と戰つて居る。イギリスのことは述べなかつたが、この「傳統の國」も旣に傳統を捨てればならない時期の近づいたことを自覺して居る。イタリヤがムッソリーニの

二十

本文の目的は死刑廢止論をヨーロッパ大陸の二三の國の歷史に照して述べることである。わが刑法の死刑問題に觸れることは目的の外にある。しかしただ一つ注意しておきたいことがある。それはわが國の刑法改正が反動的な動機から保守的な態度をとらうとして居る點である。緊急勅令を以て死刑を規定するのも反動的動機から出た保守的態度の一つの現れである。吾等はいつまで死刑を維持せねばならないか。ムッソリーニが再び死刑を廢止するまで待つべきか。

大學＝國家の機關？社會の機關？

『宗教裁判』と『思想警察』

長谷川如是閑

一 『宗教裁判』

宗教家の『慈悲忍辱』は、所謂洋の東西、時の古今を問はず、彼等の生命とする道德であると稱せられるに拘らず、ヨーロッパでは、十三四世紀の頃から十九世紀の半に亘る六七百年の長い年月の間、有名な『宗教裁判(インクイジション)』なる制度をもつてゐて、彼等宗教家は、人間の思想、學術、言語、技藝、考へ方、量見、口ぶり、そぶり、目付き、鼻つきの異端的なるのに對して、慘虐無比の制裁を加へた。その裁判に於て、彼等宗教家は、水責め、火責め、車引き、懸刀、ラツク、その他野蠻人は無論のこと宗教家ならざる文明人の到底考へ及ばなかつた恐ろしい刑罰を彼等自身の兄弟姉妹に對して加へることを憚らなかつた。

然も更らに不思議なことは、かやうな慘虐は、決して彼等宗教家の生命としてゐる『慈悲忍辱』の道德に反くものではないといふことであつた。その理由は、此等の異端者の肉體に對して、かゝる責め苦しみを與へるのは、即ち彼等の憐れな魂を救ふためであつたからだ。それは彼等の魂が惡魔に浚はれて行くことを、彼等のために防いでやる『慈悲』の掟であり、それはその昔使徒の行つた奇蹟の代りに寺院の異端者に與へる難有い賜物であつた。而して更らにそれは人類一般の魂の安定に缺くべからざる『眞理』を擁護する唯一つの途であつた。

かゝる慈善事業がヨーロッパ諸國に普ねく行はれたのは、いふまでもなく當時の世界的宗教帝國の大本山たるローマに於けるキリスト教寺院が、ヨーロッパの各國家の上に支配的地位を占めてゐたゝめであつた。而してそれはそのローマ的勢力を排除せんとする運動が各國家の裡に芽生へるのを一つ／＼摑み取らうとする寺院自身の防禦に外ならなかつた。その以前に異教國がキリスト教の使人に對して迫害を加へたのは當時ヨーロッパ大陸に起つた社會的混合門も世界的宗派の大

勢に乘じて、超國家的の卽ち世界的のキリスト教が、此の大勢を妨げる民族宗教を打ち破つて、ローマの軍勢のやうにヨーロッパ全土に進擊するのに對する防禦であつた。が、此度はキリスト教の世界帝國たるローマの寺院が、各國家に勃興せんとする民族的の分離傾向に對して、宗教的の統一傾向を持續するために、一層猛烈な迫害をその分離者に加へることゝなつたのである。それは元來この世界的交通が、ローマに導かれながらそのローマ帝國を分裂せしめるに至つたと同時に、ローマ中心の文明をも分裂せしめ、それに代る異教國の東方文明――科學文明――をヨーロッパに導き入れて、恰も近代の科學文明が世界の諸中心を作り變へたやうに、當時の東西文化の交通はヨーロッパ各地に新らたな諸中心を作り上げ、それが次第に統一的寺院の勢力を排除せんとする力となつて現はれたのであつた。當時の封建的小國家は、この分裂の大勢から生れたものであつたに拘らず、その國家的勢力の微弱なるためにローマの宗教的世界帝國の力を借りなければその國家的地位を保たれなかつたので、ローマの寺院が彼等に强制する宗教裁判に協力する外はなかつたのである。各國家がローマの宗教帝國の勢力から離脫しやうと努力するに至つたのは、各自の國家的存立が、弱小な封建的形式から强大な帝國的形式に轉じて、その國家的生命の支持が毫も宗教帝國の力を假りる必要を感じなくなつたからのことで、それまでは、分權的國家又は統一的宗教支配の下に在る外はなかつたから、異端者の征伐は、國家政策の主要なる部分を占めてゐたのであつた。

寺院的支配若くは國家的支配はその一つだけでも充分であるに、その二が協同したのであるから、その充分さは一層であつた。宗教裁判が、所謂『慈悲と正義』を强制するために人間の裁判に於て考へ得られる限りのいろ〳〵の方法――けれども今日なほ全く根絕されてはゐない方法――を採用したのは當然であつた。十四世紀のスペインの宗教裁判所長自からの記述する所によつても、間諜網、內報、暗黑的手段、拷問の濫用、告發者と裁判官との通謀、被告の防禦の妨害、裁判官の利害による斷罪のやうなことが忌憚なく行はれた。それらの方法を用ゐることでは人後に落ちない國家でさへも、自己の勢力の伸長するに從ひ此等の方法のために――宗教裁判そのものゝためよりは寧ろ――國家は此宗教帝國の裁判所を敬遠せんとするに至つた位である。それほど宗教といふものも、それが寺院といふ階級制度として發達した後には、どこまでもその非宗教的態度を押し進めることを得るのである。さうしてそれを宗教家達は、彼等の良心に從つて『お慈悲』と呼んだのである。

かやうな古るめかしい話を、我々をして想ひ出さしめたのは、『思想警察』といふ此頃の言葉であつた。思想警察といふ不思議な言葉と丁度よく釣合ひのとれるのが『宗教裁判』といふ言葉であることには、恐らく何人も異存はあるまい。宗教といふものが昔のやうな意味での支配的能力を失つた今日に於て、それに代るものは『思想』である。

宗教と同じものも、寺院といふ階級以外の階級に於ては『思想』と呼ばれたことは古からのことであつた。民族的の宗教をも、世界的の宗教をも持たなかつた封建貴族の國家にも、『國家思想』はあつた。德川の國家にとつては神道も佛教も、その國家觀念とは沒交渉であつたが、封建主義の諸制度を『東照神君の御遺訓』といふ範疇に統一した『思想』は持つてゐて、その原始的思想を哲學化するためには外來思想の朱子學といふ傭兵もあつた。而して島原事件や安政の大獄やの大『思想裁判』が行はれた。かく『思想警察』は、實質的には、宗教裁判と同じく古い産物であるが、後者を現はす "Inquisition" といふ言葉はあつたが、恐らく『思想警察』といふ言葉はなかつた。それは全く二十世紀の日本に於て始めて作られた言葉であつた。我々は、さういふ言葉の始めて作られた當時の日本に生れ合した、、、、、、『宗教裁判』といふ言葉の始めて作られた當時のヨーロッパ、、、、、、、、、ものでありはしまいかと考へるのは、言語の聯想からいつても、强ち理由のないことではあるまい。

二　『思想警察』と教育

宗教裁判が、ヨーロッパに於ける寺院階級の支配の性質の如何なるものであつたかを思はせるに充分であつた如く、思想警察なるものも亦我が日本に於ける國家階級の支配の性質の如何なるものであるかを說明すべく發展するであらうと思はれるが、世界的規模をもつて世界の總ての國家の調整によつて行はれた宗教政治が、結局却つてローマを大本山とした世界的宗教帝國の誇りを發せしめることに立導つたのであるから、思想警察なるものも、たとへ世界に於ける現代國家の總ての加盟によつて行はれた所で、結局に於て如何なる作用を働くものであるかは推察するに難くはない。が、この『結局』の恩惠を蒙るものは我々の子孫であつて、我々ではない。祖先をのみ尊敬することを教へられて、子孫を尊敬することを教へられなかつた我々日本人も、人間本來の性能によつて、祖先と同じく、場合によつては祖先よりも——子孫を愛することを忘れてゐるものではないが、然し遠い子孫に與へられる恩惠の、、、、、されるには、我々は余りに利己的である。殊に今頃『思想警察』などゝ公然名乘つて出たその警察思想と警察政治とが、、、、、、、、の精神と方法との全部であつたならば、、、、、、さへも氣支はれない譯に行かぬ。

この警察的精神の我々の子孫に對する影響は、教育制度を通じて最も直接に且つ痛切に與へられる。我が現時の教育制度が警察的精神に基いてゐるものであらうとは、今日まで誰れも容易に斷言し得ないことであつた（？）が、警察が『思想』を對象とすることを國家的に公告するに及んでは、さういふ國家が教育制度に於ても亦『警察的』たるに至る虞れのないことを誰れが斷言し得やう。それは無論、警察機關が同時に教育機關であるといふやうな組織をとることを意味するものではない。たゞ教育制度に於て、ある特定の『思想』のみが公然と

取扱はれることを許されるといふのは即ち、その特定の思想以前の『思想』はこれを警察の對象として取扱ふ、言ひ換へれば『、、』として取扱ふことを意味するものである。しかも如何なる思想が、、であるやを決する標準は、思想警察なるものの創設に於て公式化された標準によるものであるとすれば、教育の取扱はねばならぬ多くの思想は、警察の取扱ふ『思想』即ち、、『例』思想の範圍に包含されなければならぬことゝなる。現に、今日國立又は私立の大學から排除されてゐる思想は、警察の取扱ふ思想と同じ範疇のものであり、放逐されてゐる『思想』家その人は、警察の取扱ふ人間即ち、、と紙一枚の隔りに置かれてゐる人間である。これは確かに教育制度が、國家の警察的特殊及び方法に從屬するもので、警察制度の教育制度に對する優越である。

然し『警察』をその本來の社會的性質に於て解すれば、右のやうなことも強ち不合理的といはれない。蓋し警察とは、國家といふ制度に濫觴したものではあるが、元來は、國家的統制とは別な自治的社會統制の意義をもつたもので、國家は、この社會的自治の制度を保存し蹈襲したに過ぎないのであつた。國家の成立は多數の單位社會の統一に基いたものであつたから、統一的國家は、政治的には、強靱な統一形式をもつて各單位社會を統括する必要をもつたが、各單位社會自體の統制は、ある程度まで、それを各自の本來の形で保存せしめることは少しも差支なかつたのである。されば警察の如きは國家以前の單位社會に於ける各自の統制の一つとして保存され、國家は其の自治を

といふ形式をとり、今日の國家萬能の法制に於てさへも、警察を自治體に屬せしめる形式が殘されてゐるのである。されば、この原始的の意味通り社會的統制の秩序そのものが直ちに警察であるならば、教育制度も、この秩序から自由にされることはあり得ない筈である。無論かやうな場合でも、元來社會統制の警察的性質は、形式的に——靜的に——社會生活を制約するもので、教育は實質的に——動的に——社會生活を進展せしめるものであるから、兩者の間に撞着の生ずることは免れない。然しその場合には、恐らく教育の實質的効果が、統制の形式的効果を打ち破つて社會進化を持ち來すことになるのであるが、それは原始的社會統制に於ける經過で、實際の問題を餘りに懸け離れた事實である。國家の場合には、警察は、特定の國家目的を達成する強力機關として、社會的統制とは別な組織を包含してゐるので、警察が國家的に發動する場合は、警察力は主としてその國家目的をもつて、言ひかへれば、必ずしも社會的統制と一致しない統制力として、作用することゝなるのである。此の狀態に於て教育制度が警察的標準によつてその限界を決定せしめられるといふことは、國家的なるものが、社會的なるものを規定することであつて、國家制度が、、、、、、を發揚する場合の一例である。

教育を全然國家的施設と解するもの、國家あつての教育であると考ふるもの、即ち所謂『國家教育』のみを教育と解する者は右のやうな

國家的態度によつて規制される教育が、教育本來の性質に反するものであることを理解することが出來ない。同時に、教育を全然その抽象的意義に於てのみ把握するもの、即ち現實の社會的生活の意義から教育を引離し、超越的の『價値』又は『當爲』の實現を教育の目的又は所謂眞精神とするものも亦、國家的統制の範疇に局限される教育をその本來の性質に反くものとは考へない。何となれば、さういふ抽象主義者は必ず、國家をもつて――現實の國家でなければ抽象された觀念的國家をもつて――さういふ『價値』又は『規範』の實現と思惟する態度をとるものだからである。云ひかへれば、教育を『價値』又は『規範』の實現とする觀念的態度こそは、寺院又は國家等の階級的支配の成立に伴つて發生し、而してその階級的支配の、、、、、を創造するための特殊の心的態度として發展したものに外ならないのである。

然しながら、教育といふことが、その學術のための機關としての性質に於ても、亦社會的訓練のための機關としての性質に於ても、本來は寺院や國家といふ特別の機關のための制度でなかつたことは、教育史――教育『學』史ではない――について多少の智識を有するものゝ拒み難き事實である。無論、ある特定の教育制度は寺院や國家の――殊に前者の――制度として發達したものであり、しかも寺院や國家の組織が、社會的統制の上にその支配的勢力を占め來つたので、教育制度一般は、殊に大學の如き高級の教育機關は、寺院的又は國家的機關であつたかの如き觀を呈してゐるのである。然るに實際はさういふあるものとしての高級的教育機關でさへ、決して寺院的又は國家的に出發したものではない。むしろ寺院の教育機關から獨立した大學もそれが寺院から離脫することによつて始めて大學となつたもので、その大學の寺院からの離脫に於て國家が有力な後援者であつたが、然し、大學そのものは、決して國家的性質をもつて起り若くは發展したものではなかつた。

教育の――殊に學術的教育の――制度としての性質を明かにすることによつて、今日の『思想警察』的大學教育が錯誤的であり、しかもその錯誤が、深山の、、、、、の中の極めて重大なもの〻一つであることを知ることが出來る。

三　大學の發生事情と「學問の獨立」

『教育』について一般の有する重大な誤解は、教育といふことが、ある特定の國家的統制即ち階級的支配による統制を生じた後にその階級内に、その階級的生活の完成のために成立した制度であるかの如く考ふることである。たとへば、教育史が先づギリシヤの市民國家の教育から說き始めるのは、文獻的材料の理由によるものとして已むを得ないが、しかし、一定の社會は、決して支配階級だけの存在によつて成立し持續する筈のものではないのだから、從つてその社會に於ける『教育』も決して支配階級だけの事實ではない筈である。故に、ギリシヤの市民國家の教育といふことも、

意味するものとはならない。現にギリシヤの社會は、市民とそれに數百倍する奴隷とから成立し、而かもあらゆる社會的生産資料の生産からあらゆる工藝技術に至るまで、苟も生産的の意味の肉體的乃至心的勞作は悉く奴隷階級によつて營まれてゐたのであつた。故に此のギリシヤに於て社會的に『教育』といへば、ギリシヤの國家階級の軍事的文事的支配生活又は市民的有閑生活を完成せしめる教育制度のみではなくそれ以上に、奴隷の階級に於ける、社會に必要な生産的の肉體的乃至心的勞作の生活を完成せしめる教育を中心として認めねばならないのである。あのギリシヤ的審美感を具體的に發揚せしめた建築、彫刻等は奴隷階級に於ける『教育』がそれを産んだものであることは、我邦固有の美術として稱賛されてゐる古來の工藝品に、當時の軍國的支配階級の『教育』の成果であるものは一つもなく、悉くそれが生産階級自體の教育の賜物であつたのと同じてある。然かも教育史に於て『教育』として記載されてゐる事實はギリシヤにあつては市民國家的階級のそれ、我邦にあつては軍國的支配階級のそれに止まつてゐる。これは、『教育』といふものをその社會的意義に於て認識せずに、たゞ國家的意義に於て把握してゐる所から來た錯誤でる。今日では、國家又は寺院以前の社會に於ける教育をも問題として

たかについては全く無關心であ
さういふ研究者の態度は、古來から支配者の側に於
活といへば、自己の階級に於ける生活のみを意味し、教養乃至文化といへば、支配的階級のそれのみを意味する、階級的觀念に當然の考へ方があつたので、自づから社會の諸制度の研究者もさういふ支配的生活觀念に立脚することになつたのである。

教育といふもの、制度として組織立てられたことは一つの事實であり、教育といふ特定行動の實質の存在するとは他の事實である。この區別は、文明社會に存すると同様に、原始社會にも存する。南洋の野蠻部落に於て、青年訓育のための大家屋——西洋の研究者がクラブ・ハウスと呼んでゐる——の設けられ又割禮やイニシエーションの諸形式の定められてゐるのは、教育制度の組織立てられたものであるが、同時にその社會に於て、さういふ特定の組織にまで結成されないが、然し、種々たる社會的生活行動が日常の生活の間に傳習せしめられてゐたことは、即ち教育といふことの實質的存在である。文明の社會に於ても、中世紀までは、教育は組織的の制度としてのそれよりも、實質としての行動的のそれが重要な部分を占め、國家階級乃至寺院階級以外の最

なかつた。從つて從來制度に於ける教育の實[illegible]には[illegible]てられない、行動的のそれであつた。而かもそれによつて、如何なる時代のそれも及ばない中世紀的工藝品を産み出すことを得たのである。されば教育は、それが制度として組織立てられることは、その實質的効果を目的とせねばならぬ。而して社會的に有意義な生活行動の發達を促がすのが教育の實質的効果であり、社會の教育に對する要求も亦一つに此の實質的効果を目的とするのである。

私自身が教育について云つてゐることは即ち右の社會的要求を代辯してゐるので、階級的生活を本位とする寺院の教育や國家の教育が、その實際に於て、社會的要求に降服しながら、理論に於て、觀念に於てこの社會的なる要求を無視することを指摘しやうとするのである。大學の發達の歴史は、教育機關が、階級的支配の形式への追從とは別な動機をもつて起り且つ伸展して行つたものであることを、即ち階級的要求でなしに、社會的要求に應じたものであることを説明してゐるのである。

中世紀のヨーロッパに大學の起るまでは、高級の教育機關は、たゞこれを寺院の學校に於て見出し得るのみであつた。しかもそれは、一般社會的の要求に應ずるものではなく、僧侶のための教育機關であつた。ローマ帝國の崩壞は、その軍國的世界帝國の支配を、同じローマを中心とするキリスト教の世界的宗教帝國のそれに讓つたゝめに、教育に對する支配權に於ても、ローマ帝國のそれは、その要求された機關と共に、全くローマ法王のそれによつて取つて代はられたのであつた。この軍國的大帝國の事實上の崩壞と宗教的大帝國の建立とは、かの「神聖」でも「ローマ」でも「帝國」でもないと云はれた「神聖ローマ帝國」なる空虚の帝國的支配の名の下に、その實ローマの大本山の宗教的支配の下に、ヨーロッパ全土を投じたものであつた。從つて教育機關の制度としての成立も一つに、この宗教帝國のそれに限定されてゐたのであつた。

然し、それは寺院的支配の要求で、それとは別な社會的要求の起ることは、此の全能の宗教的支配もそれを奈何ともすることは出來なかつた。

ローマ帝國のヨーロッパ統一は、その道路によつて支持されたといはれた通り、今まで割據的に孤立してゐた各民族の地域的障壁を取り除けて世界的交通の發達を促がしたものであつた。從つて既にいつた如く、それの中心であつたローマ帝國の崩壞は、忽ちそれまでの中心文明——即ちローマ文明——以外の東方文明をその同じ道路によつて、ヨーロッパ全土に導き入れたと同時に、その移入の電導體をなした商工業の世界的——全ヨーロッパ的——發達は、文明のローマ的中央集權の打破と共に文化の中心をも分權的ならしめ、所在に諸民族の文化的中心を作り、——それが後代の民族國家成立の素地を爲したものであつた——宗教的の大統一帝國は、政治的には封建的小國家、社會的

には自治的諸團體——都市ギルド——の發生を促したのであつた。

この時代に於けるキリスト教の世界的精神の使命は、これらの分權的小國家の割據的對立を超越して、現に行はれてゐる世界的交通の生活形態に一致する統制を寺院の名に於て成立せしめてゐた事にあつた。所謂『寺院法』の如きものも、世界的交通に伴ふ各民族間の生活の交渉に應ずる社會的要求から生れたものであつた。元來宗教意識は、社會的事實としての生活の統制に應じて形成されるもので、民族的孤立の生活形態の必然である生活集團は民族宗教を持ち、もつと小さい部落的集團はトーテム意識をもち、それらの孤立的集團の接觸から生ずる超民族的生活の發生に於いて世界教的宗教意識が生れる。中世に於けるヨーロッパの社會的混合に應じてキリスト的意識の發展となり、大寺院階級を産むと同時に、その實質的な支配は、國家的支配を凌ぐに至り、元來、民族國家的なる軍事行動をさへ、混合民族から成立せる十字軍といふやうな、軍事行動の集團としては珍無類の内容をもつたものを成立せしめたのであつた。それは然しながら、當時の人類混合の猛烈な群的衝動を生んだ宗教的迷信であつて、この種の宗教意識はこれを機能的迷信と呼ぶことを得るのである。

然し、宗教意識の機能には局限があつて、それは、行動の[…]

ヨーロッパの交通の發達が[…]としては、寺院的教育がその機能をもつことを得ないの[…]る。寺院の教育機關は、寺院的支配に必要な智識の機關であるが世俗的生活の智識はその關知する所ではない。現實の社會的生活者の要求する所は前者になくして後者にある。然かも高度の統制的權力が寺院にあるために、社會は自己の要求する制度を寺院の許可なしには創設する自由を與へられてゐない。そこから當時の社會に於ては、諸方の文化的中心地に、それぞれ社會的生活に必要な智的要求に應ずる學術教育の機關の自然の發生を見たのであつた。この自然發生的機關はそれが、學術團體として充分の機能を有つに至るためには、當時の寺院的統制に於て承認されねばならぬ、然らざれば、始めに記したやうな異端的存在として、それは必然に迫害を脱れないのである。然かも寺院は人間の教化に於て全能の權力をもつと信じながら、つひにこれらの學術團體に對して特許狀を下附するの已むを得ざるに至つたのは、寺院的統制と社會的統制との競合に於て、社會的のそれの勝利を意味したものであつた。

然かもかくの如き學術團體は、全く社會的協同體であつて、——無

が、その起原はとにかく、大學として發達した時には、當時、宗教的にヨーロッパ全土に於て迫害されたユデア人を教師及び學生として包容してゐたのであつた。すべての大學は、元來、世界的交通を動機として起つたものであつた故に、如何なる地に起つた大學でも、その團體の要素はその土地の土着人であるよりは寧ろ各地よりその土地に移住した異邦人より成つて居たのである。史家のいふ通り、これ寺院の學校が、多く山間僻地の俗塵を脫した地方に存在したに反して大學が當時の新文化の中心地に發生した所以であつた。當時の大學は今日の學級といふものゝ代りにそれぐ\その出身國に分れた『國籍』に區分されてゐたのもそのためであつた。ユニヴアシテイーといふ語も、當時のこれらの國籍による集團が、ユニヴエルシタスと呼ばれてゐたことに起原するのであつた。

これをもつて見ても、大學といふ學術の機關は、寺院とか國家といふ階級的支配から生れたものでないことは明かなのである。すべて、社會的統制として生じた組織は寺院又は國家のそれとは對立的地位をとるのであつて、その當時の强制的統制がそれに對して支配的地位を占めるが故に、それの特許を得ねばならなかつたのであるが、實は此の特許は、寺院の勢力に對する學術團體の實力によつて得たもので、丁度、無産政黨が公式の承認をブルジョア政府から得るのと似たものなのである。而して學術の機關が中世に於て、さういふ獨立的社會集團として成立したことが、今日も盛に唱へられてゐる『大學の自治』とか「學問の獨立」といふ觀念の基礎的事實だつたのであつて、今日にはそれはたゞ空虚の觀念として言語の上に保存されてゐるのみだが、——我が日本の如きでは大學も國家思想と離るべからざるものとして規定されて居り、大學の獨立は、言語の上だけでも最早保存されて居らぬが——當時に於ては嚴然たる事實だつたのである。

大學制度の研究者は、學術の機關が中世に於て右のやうな獨立的存在として成立し得た社會的動因をギルドの成立と同性質のものと見るとに一致してゐるのである。殊に當時ヨーロッパの諸市に成立してゐた異國人のギルドの性質に似てゐる。これらの異邦人は市民と同一の法律上の保護を得ないために、團結して相互の扶助を計る必要に迫られ且つその職業上の目的のために、共同せねばならなかつたのである。凡て社會的集團の結成は、一定行動の統制に基くもので、家族は生殖哺育の行動の統制に、職業團體はそれぐ\の職業的行動のそれに、寺院は宗教的支配行動のそれに、國家は政治的支配行動のそれに、といふやうに必ず具體的の行動の組織がその社會的集團組織の統制を作るものであるが、實際に於ても、また理論に於ても、各種の社會的生活行動の集團はそれぐ\獨立的であり、自治的であり、言ひかへれば、各自の統制をそれ自體に於てもつてゐる筈のものである。それが一定
院の統制なり國家の統制なりに從屬するに至つたのは生活に對
括的支配の存在が、人間社會の組織に於て必要とされた事實
ので、その原始的なるものは、親の子に對

年少者に對する總括的支配、家長の家族に對する總括的支配等であるが、寺院の支配と國家の支配との總括的性質は、やゝそれと異る。宗教的支配が原始的性質の總括的支配の特徵を具へたのは、それが前にいつた如く、社會的結合の意識で、同一集團の結成のために、總括的に協同的の、又類同的の生活形態をとる必要の存したゝめである。然し寺院なるものは、その宗教的意識の統制自體の組織ではなく、その統制的意識を把握する少數者僧侶の共同利害——といつても利己的の意味のみではなく、社會的の意味に於て要求される統制的勢力の支持のためといふやうな利害をも含むが——のための組織が、それによつて多數の被支配者と懸隔ある生活樣式を彼等僧侶に與へたゝめ、僧侶社會は、その與へられた利益の確保とその増進とのために特殊の階級的構成にまで進んだのである。從つて寺院的生活の階級的性質は、宗教的性質と一致するものではなく——言ひ換へれば、社會的結合の心理と一致するものではなく——寧ろそれに背馳した特殊利益の設定として、社會的分離の心理を刺戟する性質のものである。原始的宗教意識又は階級的生活利益と沒交渉となつた宗教意識が常に既成宗團即ち寺院に反抗するのはその理由である。又國家の統制もその政治的支配を離れた社會管理に於ては、社會的意義に於ける一定の統制的地位を占めてゐるものであるが、元來、政治的支配の總括的性質は、政治階級が被政治階級の生活の上に寄生する組織として發生したものであるから、その總括的支配は親の子に對するそれとは同性質のものでなく、宗教的支配の總括的性質とも一致するものではない。然且成立した國家的統制は、社會の各單位を綜合して、國家的結成をなすことによつてそこに新たな大きい單位を構成せしめて、此の國家的單位が一つの共同利害に於て、他の國家的單位と生存を競爭する地位に置かれるので、數千年間の國家歴史の示す如く、事實上國家的統制は國家的單位に總括された多くの社會集團の安全のための組織となつてゐるのである。然し、そのことは國家的支配の成立事情即ちそこで成立した國家の階級的性質を變化せしめるものではないから、すべての社會集團はやはり、獨立の社會的統制組織として國家と對立的地位をとる本來の傾向を持つてゐるのである。ギルドの國家に對立することも、勞働組合の對國家的地位も、大資本團體の對國家的地位も都市町村の國家に對する自治體性質も、その他、その統制が國家的統制のそれから多少の隔りをもつて成立してゐるものは皆、さういふ對立的地位を國家に對してとるのである。中世の大學はその點に於てギルドと同じくやゝ極端に國家と沒交渉の起原と地位とをとつたもので、それは大學といふ組織が、本來社會的要求の産物で、國家的要求の産物で、なかつたことを證據立てゝゐる事實である。

四　近代國家と「大學の獨立」の喪失

大學の獨立的地位は、右に述べた如く、學術の社會的機能に應じてその學術的行動集團として成立したもので、その統制が他の階級的支

型のそれから獨立せねばならぬ理由もそこに在つたのであるが、中世に於ける寺院の總括的支配の衰へた後には、國家の總括的支配が現はれたので大學は更らに國家の統制をうけることゝなつたのであつた。

當時の封建的小國家は、餘りに小い政治的區域をもつたものであるために、その勢力は、地方的で、當時の廣汎の交通による生活の統制としては全く無力で、その國家はたゞ封建貴族がその武力によつて、漸く富有になりつゝある市民から掠取する組織たるに止まり、反之神聖ローマ帝國は、その國家的勢力が名目的で而かも餘りにその政治區域が廣大なためにその支配は全く空虛な非現實的のものとなり、何の統制でもあり得なかつた。かやうな無統制は政治的には殆んどアナーキーの狀態であつたので、その缺陷を充たしたのが寺院の超國家的支配であつたが、その寺院の勢力は、當時盛に侵入し來つた異教的學術即ち、醫學、天文學、數學、その他の學問の社會的要求を壓迫しなければならぬ地位にこそあれ、それを獎勵し得る性質のものではなかつた。偶寺院の學校が社會の要求上さういふ學術を少しでも取り入れたことは、その學校を寺院の機關から引離し、獨立の特許狀を强請する大學たらしめた所以であつた。

されば寺院の統制もやがてその機能を失ふべき時期に達してゐたのであつた。名目的大帝國と封建國家と寺院帝國との有名無實無名有實有名有實の支配の三角關係に於ける各のものが機能を失つたことは、つひに近代的民族國家の發生を促した所以であつて、これを極言すれば、異教的學術の侵入は、ヨーロッパを完全に統一したことに依るのである。されば、近代國家はその本來の性質が、ローマに對抗的の社制から離脫すべきものであることが露はにしてゐるのである。各地に起つた分權的文化の中心は漸く凝結して、それ〳〵近代國家の胚胎的作用を營むことゝなり、地上の世俗的關係は宗教的心意の關係に代つて新國家形成の楔子となり、その新國家を單位としての生存競爭が爭はれるに至れば、各國家はその單位としての存在を高調せねばならぬ、觀念的并に客觀的必要に迫られ、世界教たるキリスト教の大本山への服從さへも、この國家的單位の獨立的存立を損ふものと考へられることは、封建諸侯が寺院の支配の自分の繩張內に餘り有力に喰ひ込むことに對して不利益を感じたのと同樣であつた。

この意味に於て、即ちローマの支配を對立的地位に置くことに於て、近代國家は、丁度大學ギルドと利害を同うするものであつた。從つて近代國家は、大學の寺院に對する獨立の運動にはいつも大學の後援者たる地位に在つた。のみならず、國家は大學を自から設立することによつて、自己の國家的統制に於ける敎育機關を具備して、寺院のそれに有力に對抗することを得るのであつた。故にギルド的起原の大學に次いで、國家の即ち帝王の創設になる大學の時代が來たのであつた。尤もヨーロッパの大學の最も有力なものは、オックスフォード、ケンブリッヂ、パリ、プラーグ、等を始めとし大抵前者即ちギルド的起原をもつたものであるが、又多くの大學は、その創設[illegible]

として封建的貴族をもつてゐたのである。從つて近代國家の發達と共に、大學は、あらゆるギルドが國家に吸收されたのと同じ運命に陷ることを脫れなかつたのである。初期の大學が獨立的存在たることを得たのは、それが一般のギルドと同じく、その社會的必要に應じて、財政的に獨立することを得たゝめであつた。大學が寺院から特許狀を得るのは、その社會的勢力と共にその財力にもよつたものであつたことは、都市が封建領主から特許狀を得るのが一つに貢物によつたのと同じ事情があつたものと思はれる。然るに近代國家に於ては、すべてのギルド的のもの、すべての非國家的なるものは、寺院的なるものと否とを問はず、壓迫され、異邦人は同化を求められ、又は驅逐され、その支配の現實的なることは封建國家以上で、しかもその統制の性質は寺院のそれの如く總括的性質のものであつた。從つて大學もその學術的の地位と財政的地位とに於て、超國家的獨立性を保つことが困難となつたのである。十三世紀にパリ大學が、その學課から行政及び裁判に至るまで殆んど全的の自由をローマ法王から得たのを、ある史家は大學のマグナ・カルタと稱したが、近代國家に於ては、大學は、つひに國家からマグナ・カルタを得る機會を持たなかつたのみならず、相率ゐて國家的支配の下に置かれたのであつた。宗教改革後

てゐたが、ゲーニヒスベルヒ大學の
ドの貴族に列せられることになつた程、大學は國家的機關
のであつた。イギリスが二十世紀に入つて始めてオックスフォード、ケンブリッヂの大學に國費を供するに至つたのは同國の制度の一般に保守的である事情によつたもので、決してイギリスがその例外であつたのではない。又從つて猛烈な國家的變化に際しては、近代國家は、ローマの大本山や封建國家も爲し得なかつたやうな暴壓を大學に對して加へたのであつた。フランス革命當時國民議會はフランスの大學全部を閉鎖する命令を發した。これは革命前の大學を保守的性質のものと認めたためであつて、それは大學が元來寺院の眼からは國家的に見られ、國家の眼から寺院的に見られる性質のものだつたからであるが、フランス革命の此の擧は大學を全然國家的たらしめやうとする近代國家の意志を最も露骨に表示したものであつた。

五　大學の隷屬と我が私立大學

近代に於て完全に成立した大學の國家的性質は、學術の機能の超國家的性質を妨げるものには相違ないか。然し、かういふ組織の成立し

[illegible]その超國家的性質をもつてゐたのである[illegible]本に於ける封建時代の大學は、國家の機關で、これは今日の大學と性質を異にしユニヴァルシトゥスではなく、全く、、の學校と同質のもので、支配階級の哲學を構成する機關に過ぎないのであつた。近代國家は、生產組織に於ける支配的勢力が、——即ち武力階級でなしに所有階級が、——國家的地位を占むるに至つて完全に成立した制度であるから、昔の國家が社會的生產のあらゆる機關を國家生活の範疇外に除外したのに反し近代國家は生產機關を國家的に獨占——つまり階級的に獨占——することによつて、その國家の經濟的根柢を確保する組織である。從つて、昔はギルド的獨立を保つてゐた生產的諸機關も、現在では、國家的管理の下にもち來たされ、その獨占的支配の統一組織の裡に置かれてゐるのである。大學は元來、空疎な宗教的學問に對し、東方の科學の侵入したのに起因したもので、その學問の性質は、廣義に於ける社會的生產の目的に一致するものであつた。故に、寺院や國家の支配の哲學を構成する學校とは、その性質を異にするものであるが、たゞ當時の傳統に於て、最高學府は寺院や國家の特許を必要としたが故に、寺院乃至國家の支配に必要な哲學を包含せしめたもので、然し實際は醫學法學等をもつて繁榮したのであつた。從つて、近代國家に於ては、大學は先づ、その國家の生產に對する支配に協同する高級の徒弟を養成する緊急の必要をもち、やがて近代國家の即ちブルジョア國家の資本主義的支配の哲學を完成せしめる役目を昔の大學が軍國的支配の哲學を[illegible]する役目を[illegible]たのと[illegible]れたものであつた。この近代國家が、直接に社會的生產の機關を獨占する許可に[illegible]といふことが、學術機關に對するその最も完全なる支配を——寺院が大勢力をもつてしても、封建國家の武力をもつてしても爲し遂げ得なかつた完全の支配を——つひに成し遂げ得た所以であつた。

大學の近代國家に對する降服をもつて、直ちに大學がその學術機關としての機能を失つたものと見ることは出來ない。今いつた如く、それは近代國家が、その國家的行動に於て、これまでの國家や寺院やのそれと異り、社會的に必要な生產機關の獨占といふ特別の性質をもつてゐるので、生產社會に必然な機關としての大學をもその手に收めねばならなかつたのである。されば近代國家に於ては大學は、その本來の機能を失ふことなしに、國家に隸屬することを得るのである。

大學の國家に對する隸屬は右のやうな意味をもつのであるが、たゞ近代國家が、いひ換へれば、所有階級が、その國家的支配に於て、、、、、、することは、決して社會的目的によつて、それをしてゐるのではなく、寺院が宗教を、封建國家が武力を、各自の權威に於て獨占してゐたのと同じく、全く階級的目的のためである。いひ換へれば、近代國家は寺院や舊國家と同じく、社會的目的に對立する、それとは別な國家的目的をもつた組織である。從つて社會的生活の進化は、寺院に對し、舊國家に對して、社會がとつた[illegible]

家に對して繰り返すものであることを推定せねばならぬ。

所がその際、舊國家の場合と近代國家の場合との間に存する重大な差は、前者に於ては、國家はそれ自體の機構に於て國家的進化を有機的に働き出す作用をもつてゐないに反し、後者は、ある程度までその作用をもつてゐるといふことである。近代國家は、その組織が、代表制度によつて、社會的對立集團の卽ち國家內の各社會の統制的意識を國家的に代表せしめ、それによつて國家組織それ自體の有機的進化を相當程度に於て働き出すことを得る機構をもつてゐるのである。無產政黨の出現の如き、種々なる勞働運動の合法性の國家的承認の如き、國家內幷に社會的諸制度について、古來の絕對不變主義が失はれ、合法的手段の持ち來し得る變化に加へられた法制上の限定の絕對的でないこと等は、所謂國家法理の上に於ては頑固に否定されながらしかも、諸々事實として現はれて行くのであるが、そのことは近代國家の性質が、支配階級と被支配階級との絕對的隔離を政治的條件とした舊國家の支配形式とは、その組織の性質に相異を有つことを說明する事實である。

果して然らば、近代國家の唯一の特徵はその進化の性質を、自己の機構による有機的發展に基かしめた點で、その特徵を失へば、近代國

するものである。

大學が近代國家に隷屬することは、その近代國家た

家である限り必ずしもその機能を妨げられるものではない。蓋し、自由主義國家は、市民國家であると同時に、それの對立的社會集團たる無產階級の統制形式の實現をある程度まで促進せしめる有機性をもつたものだから（英國は、その勞働黨政府の出現に於て、何等無產階級的統制への進展を示したものではなかつたが、然し、それは同國の無產政黨の性質によつたもので、イギリスの國家の近代的性質によつたものではない。）大學は自由國家と協同することによつてブルジョア階級の支配に加擔するものであるには相違ないが、同時の、それの對立階級たる無產階級の、、、、への進出に對して、學術的協力の機關たることを得るからである。中世の大學が、寺院や國家の特許の下に半ばそれら支配階級の機關として役立ちながら、その目的性質に於て社會的生活集團のための學術機關としての機能を働いたやうに、近代國家の大學は國家的獨占の下に、國家的階級のために役立ちつゝ、近代國家的自由主義によつて、それと對立する階級のために機能を持ち得る譯である。

り、後者は私立大學のそれである。

自由國家の封建化が大學に及ぼす壓迫に對しては、大學は學術機關たる性質により、教授及び學生の精神的努力によつてそれに對抗することを要求するものもあるが、然しある『精神』は必ずそれの背景をなす所の具體的條件が何かの形で存在せねばならぬ。さういふ背景のない精神は、何かの拍子で正反對の性質に改宗する自由をもつものであることを知らねばならぬ。中世の大學が、寺院に反抗したのは、後に近代國家を形成せしめた複雜な生活環境が、それ〴〵その個人及び群の背景を爲して居たからである。それはユデア人の反抗又は卑屈にそれ〴〵彼等の現實の生活環境の背景があつたのと同じである。現在のわが大學に於ける教授又は學生に於ては、その學問的良心なるものは、概ね所謂單純な『學問的興味(アカデミックインタレスト)』によるものであるが、それこそ改宗の自由をもつもの——學問的に改宗しないまでも、生活的、、、、に改宗の自由をもつもので、——或は生活的、、、には、少しも改宗の必要のない連中さへも少くはあるまいと思はれるのである。純粹に學的意識をもつことによつて、大學的獨立を保つといふ個人的勇氣の所有者は、それが大學の組織そのものに影響する程多數であるのは望み難いことで、從つて反對に大學の組織がその人に影響して、毫も外部からの壓力によらず、大學自身の壓力でそれらの人間を刎ね退けることが普通の現象となる。然し、わが官立大學のあるものが私立大學に比べて大學としての自由を保つてゐるのは、その財政的根柢が直接階級的支配を受ける方法によらずに、中間に民衆の手を通してゐるといふ事情が與つて力があるのである。

わが私立大學は、その創立の動機は、學術大學及び宗教的の大學を除いては、その動機は國家的即ち所謂官僚的若くは商業的であつたがその國家的動機によつたものでも、多少の社會的意義をもつてゐたのであつた。即ち維新後の日本が西洋の組織によつてその國家改造を行ふに當つて、西洋の如何なる組織を學ぶかについての意見の相違が、政府の大學に對する私立の大學となつたのであつた。尤も、彼等が西洋の組織を選擇する動機は、自己の政治的地位の不滿のために、政府のそれと反對のものを撰ぶといふ傾きもないではなかつたが、しかし撰ばれた手本の相違によつて、日本の政策や學問的傾向や法律やが、英、佛、獨の三國に立脚して猛烈な三角戰を演じたのは、ともかくも壯觀に相違なかつた。私立大學の勃興は、此の英、佛、獨の各派を代表したもので、學派の爭ひのために大學を作つて永遠の戰を期するといふ眞面目な覺悟は、最早今日の學問的鬪爭者の間には見ることの出來ない現象である。

かくして出來た私立大學も、國家組織の進むと共に、外來の學說に關しては模範をドイツに見出すことに一致し、諸制度の一應完成するに及んで、私立大學の對立理由は全く失はれ、それと同時にその財政的根柢も失はれたが、やがて、これらの大學の背景をなした官僚は全社會的に消滅し、すべての制度がブルジョア的背景をもつこととなる

に至つて、私立大學は、その榮養を求むる所に、その學術的地位を一致せしめる外はないこと丶なるのである。而してそれは同時にブルジヨア國家への降服を意味し、私立大學なるものは、國家的であらねばならぬ點で官立大學と同じく、加之、大學が直接その榮養を求めるブルジヨア階級の雰圍氣に同化せねばならぬ點に於て官立に勝るといふ地位に置かる丶こと丶なつた。出來るだけ特定の財政的援助をうけることを避けやうとすれば、淺草觀音の如く、多數の生徒から零砕の月謝を、教員から勞力を搾取することによつてその榮養機關を充たし行く外はないのであつた。かくてもなほ大學として存在する理由は、その商業主義の成功によるのであつて、それなしには存在の價値も方法もないのである。

これらの事情は、大學の社會的性質、即ち、その動的性質を失はしめ、近代國家に於ける大學をして、中世紀に於けるそれのやうな機能的性質を全然喪失せしめるものである。

六　結論＝將來の暗示

大學はその歴史に於て社會から國家的に轉じたが、すべての學術的機關が更らに社會的に還元すべき運命にあることは、既に現在の形勢に於て之を豫見するに難くない。たゞ空想的に未來を語ることを避けるために、簡單に現在の形勢を指摘して結論とする。

（一）現在に於て、既にあらゆる學問的方面に於て、既存の思想、權威、系統による學問の內容に對する不信が涵養されてゐる。この不信は、智的操作の結果によるものであるよりは、寧ろ經驗的直覺によつてゐる。而してかゝる直覺は、その感覺の基礎を、新らたな、、、の展開に置くものであるから、それは必ず新らたな學問的態度と、學問的機關の發生を促すべきものであること、中世紀に於ける世界的な新しい生活環境が、寺院教育に對する學問の、從つて大學の叛逆となつて現はれたのと同じ性質のものである。

（二）新興階級の組織の發達は、日本に於てこそ甚だ幼稚であるが、外國に於ては、殆んど、、、、、の存するが如き規模に達せんとする形勢にある。少くとも勞働組合の發達に、それが右でも左でも、國家に對する別箇の統制即ち、、、、、の創造過程である點に疑りはない。それは學問的並に教育的目的に於て、その財政的事情が許すならば、何時でも、現在の、、、のそれを離れて、中世に於ける大學の發生と同性質——といふよりはもつと、、、、、と組織とをもつて、特許狀を強請する地位にまで達すべきものである。

（三）同時に、既存の學問の組織に於ても、大學なり他の高級教育機關なりの間に、それ自からの有機的性質によつて、この轉換期に應ずる內的變化を起しつゝある。學術の機能的性質がこれらの既存の組織のうちに順應を起さしめるのである。ロンドン大學の如きはその顯著の例であるが、、、、のドイツの大學に於てもさういふ變化をある程度で內的に起してゐるといふことである。その時に於ては、容易いや

[illegible]で比較的[illegible]が、その「グース・ステップ」に於て擧げてゐる無數の例によつても、前節にいつたわが私立大學の傾向と同性質のそれを極端まで押し進めてゐることが窺はれる。クーリッヂ大統領の母校たる大學の總長が勞働組合と協同して勞働者のために講座を設けたといふので維持員のために免職されたといふのは有名な話である。が同時に、新思想の學者や右のやうな意味の失職教授を中心とする社會的教育機關——ランド・スクールのやうな——が遲々ながら發達しかけてゐる。

（四）これらは教化者階級の側のことであるが、被教化者の側、即ち無產階級の側に於ける教化の要求は、恐らく歷史的に前例のない程度に達してゐることであらう。世界各地に於て公にされつゝある無數の小册子は、恐らく、遠からずして智的要求の新らしい性質を作り上げるであらう。これまでの無產階級の智的要求は、文化階級のそれを目標としたものであつたが、今や無產階級は、彼等自からの階級に特殊なる、、の何であるかを知つてゐる。彼等は最早、、のやうに投げ與へられた教化に喰ひつくことをしない。社會の最大多數の階級が、自分の外的嗜好と共に、、、、を知り出したのは、それに應ずる新らたな智的、情操的榮養品を產出せしめる刺戟であるに相違ない。次ぎの時代の教育機關、學術機關がいかなるものであるかは、その學問的內容の性質と共に、この新興階級の生活環境によつて決定され、條件づけられるであらう。（完）

婦人界見たまゝ

山川菊榮

『政友會の婦選案』『婦選獲得同盟の暗礁』
『英國の平等參政權と婦人の過剩』
『パンカーストの死』『汎太平洋婦人會議』
『コロンタイの戀愛論』

政友會の婦選案

瓢簞から駒が出ると思はせた政友會の婦選案も、ともかくも野黨の機先を制して名乘をあげたばかりで、折角ながら、今までのところでは、望み通りの人氣も湧かぬのみか、徒らに取つてつけたやうなその沈默したきり喜色をすら浮べる樣子がない。

政友會が、その平生の反動政策と矛盾する婦選案を提唱した裏には、二重の意味がひそむやうに察せられる。その一つは見え透いた人氣取りであり、他の一つは、現行の選擧法からどの道取除かねばならぬ幾多の制限のうち、性の制限を部分的に撤廢することが、支配階級にとつて最も安全な、犧牲の少い政策であるといふ點である。婦人參政權はすでに國際的に承認せられたブルジョア的原則であり、試驗濟みの安全な側面であつて、これを實施することによつて、支配階級は、何ものをも失ふことなくて、却つて有力な味方を獲得するのが普通である。婦人の政治的無自覺は、到るところ、無條件で社會の現狀維持に味方する結果を生じてゐる。婦人參政權に[illegible]

しかしその要求が事實にあらうとも、[illegible]一事には、元より何人にも異存のあらう筈はない。要は條件の問題である。[illegible]られるように男子と異る年齢上の制限を附するといふような特殊の條件づきのものであるとするならば、無産階級は積極的にこれに反對しなければならぬ。なぜならば今や現行選擧法の諸種の制限撤廢が要求されてゐる矢先、それらの制限を擁護する代りに、特殊の條件つきの婦選を承認することとならば、婦選は明らかに徹底普選の實現を阻止する意味において利用されるものに外ならないからである。無産婦人の要求する婦選は、徹底普選の一部分としての婦選であつて、徹底普選の意義を沒却し、又はそれを阻止するための婦選であつてはならない。

婦選獲得同盟の暗礁

動機はともかく、日本で始めて婦人參政權が政治上の問題として、輿論によつて取あげられたといふ歴史的な時機に際して、在來婦選獲得を唯一の目標として結成し、運動してきた小ブルジョア婦人團體が、一せいに沈默を守り、故らに批評を避けてゐる消極的な萎縮した態度は、異様な現象として、吾々の注意をひかずにはおかなかつた。

婦人參政權を目標とする婦人團體とはいつても、他は、大衆拔きの、看板だけの團體にすぎないので全く問題でない。問題となり得るものとしては、最も進歩的な、有能な要素を集め、常に小ブルジョア婦人運動の急先鋒となつて活動してきた婦選獲得同盟あるのみである。

[illegible]ろの[illegible]婦人協會の一派と、これに對立し、[illegible]渉る持たずに、別個の潮流を形づくつてゐたところの、より保守的な婦人團體――一段上の社會層を代表する婦人團體――とが結合して、婦選獲得を唯一絶對の目標として成立したものである。婦人界における[illegible]要素を打つて一丸としたものであるところに、その強味もあれば、弱點もある。

曾て婦人協會の前身である青鞜一派の人々が、『元始太陽は女性であつた』といふ象徴的なスローガンのもとに婦人解放の戰ひを宣した時、これが反對運動の急先鋒となつたものは、女流教育家と宗教婦人であつた。 十年後、青鞜一派の運動がより廣汎な規模と、より發達した思想的基礎との上に再建された時、それらの保守的な上層小ブルジョア婦人は、もはや積極的に敵對はしなくなつた代り、冷然としてこれを默殺してゐた。更に數年、婦選獲得同盟が成立するに及んで、其等の保守的な要素は、進んでこれが支持者となるに至つた。これは其等の保守的要素が質的に變化したことを意味するものではなくて、一に日本の資本主義の發展に伴ふ社會的條件の成熟が、二十年前、青鞜一派によつて叫ばれた時には、『破壞的な思想』であり、『反道徳的』な行爲であつたものを、今や普遍的、一般的な、常識として、道徳として承認せしめるに至つた結果に外ならない。

婦選獲得同盟は、小ブルジョア婦人の先頭に立つて、或程度の迫害

や壓迫と戰ひながら、婦人解放の運動を進めて來た先進分子と、それを迫害し妨壓するために戰つて來た保守的要素とを、參政權といふ唯だ一つの目標のもとに結合させ得た點では一見成功を博したものゝ、さういふ保守的な要素の壓力が加はつたために、內實進步的分子の活動が制肘され、ともすればその力に引ずられて、舊勢力に對する鬪爭力が弱められてゆく危險を感ぜしめずにはおかない。新しき婦人と、その敵であつた舊き婦人との妥協とによつて成立した協同戰線には、本來無理があつた。

政友會の婦選案に對するその態度の曖昧なことなとは、特にその著しい例である。婦選獲得同盟は、現行選擧法の法文中から『タル男子』の一句を削除することにより、男女平等の選擧權及び被選擧權の實施を要求して連年議會に運動し、第五十二議會では法律案として提出せられ、委員會で審議未了となり、第五十五議會では民政黨より五十餘名、政友會よりは八十餘名署名の法律案が提出され、兩者共にしばく日程に上りながら、停會のため審議未了に終つたものである。既にかゝる法案を提出した責任がありながら、今更の如く、男子以下の特殊な差別的條件を附した婦選案を議せんとする政黨者流の矛盾は固よりながら、これを冷然として看過してゐる婦選獲得同盟の態度も、甚だ異樣なものとして映ずる。婦選獲得同盟は、無產婦人團體と立場を異にするが故に、その政黨の何たると、その動機の何たるとを問はず、婦選獲得の目的を達しさへすれば足るといふことは、一應は尤もである。けれどもさういふ立場に立つにしたところで、政友會の的條件づきの婦選案に對し、また民政黨の、婦人公民權のみを可とする態度に對して、婦選獲得同盟として、積極的な批評も、註文も加へぬといふことは、大衆をして歸趨に迷はせるものではなからうか。婦選獲得を唯一の目的とする團體が、政府によつて始めて婦選が眞面目に問題にされようとする最初の重大な時機に當つて、故らにその態度を明らかにせず、努めて批評を避くるが如きは、暗默のうちに、それが在來採つてきた主張を擲ち、男女平等の參政權及び公民權の代りにいかなる程度のものにもせよ、ともかくも婦選と名のつくものでさへあれば、一應それに妥協しようとしつゝあるのではないかといふ疑ひを抱かせるに十分である。その在來の使命からいへば、同盟は、政友會の婦選提唱によつて、婦選の宣傳と、その要求の貫徹とに利用すべき絕好の機會を得たもので、この機を逃さず、自己の主張する婦選の條件を大衆に訴へると同時に、在來その主張に同意し、その主張による法律案を議會に提出した責任ある代議士連を糾合して、政友會の婦選案の上に、能ふ限り、自己の主張を反映せしめるために努むべきではなかつたらうか。

然るに同盟は、この重大な時機に際して態度を明白にして大衆に訴へる代りに、努めて批判を避ける態度を取つてゐる。

同盟のこの不活動は何を語るか？

それは同盟がわが國婦選運動における先進分子としての地位をすて

に[illegible]
らない。婦選を唯一の目的として[illegible]した婦選が、この[illegible]
政界によつて取上げられようとしてゐる重大な時機に、何らの積極的な
る意見をも發表し得ず、從つて何らの積極的、指導的な活動を起し
えないといふことは、まさしく政治團體としての無能力を表白するも
のに外ならない。今日以後、わが婦選運動を導くものは、闘爭の回避
に腐心するところの、この種の八方美人的、投げ錢的團體ではなく
て、眞に婦人解放のために既成勢力と戰ふことを辭しないところの、
戰闘的な團體、無産階級の團體より外にはないことが、この事實によ
つてもます／＼明白となつた。

婦選獲得同盟の提唱によつて成立した、各種婦人團體の共同委員會
も、實質において、指導者間の單なる意見交換會に留まり、行動の上
の一致團結は不可能に終つた。婦選獲得同盟としては、その唯一の目
的たる婦人參政權のために、ブルジョア政黨たると無産政黨たると
を問はず、思ふまゝに利用しようとする。彼等が共同委員會に參加して
ゐるのはこの意味による。然るに無産婦人團體においては、婦人參政
權は、さほど重大な、絶對唯一の目標ではなく、黨の發展と充實、黨
の指導下における大衆運動こそは、より重大な意味をもつのである。
彼等が共同委員會に參加してゐるのは、かゝる大衆運動の一部分とし
て、小ブルジョア急進分子の指導下にある婦人大衆に働きかけるため
に外ならない。けれどもブルジョア政黨が婦人參政權問題を取上げる
[illegible]
一[illegible]
ようとしたにすぎないが、ブルジョア婦人[illegible]
的反動的となり、無産階級的に既成政黨の[illegible]に甘んずる[illegible]
ゝなるのに明白である。今日でこそ各團體の事情に意見を[illegible]にし、從
つてその目的であるところの協同動作が——演説會以外——不可能に
なつてゐる共同委員會は、ブルジョア婦人團體の中で唯一の急進的な
ものであつた婦選獲得同盟がその闘爭力を消耗し、日一日と無氣力な
保守的なものとなるにつれて、全くその意義を失ふに至るであらう。
そして在來彼等の指導下にあつた小ブルジョア層の青年婦人は漸次に
無産婦人團體の指導下に動員され、組織されるやうになるであらう。
青鞜以來、小ブルジョア急進婦人の先鋒であつた平塚明子氏が、婦
選獲得同盟の現狀にあきたらず、その内部における若き同志に向つ
て無産政黨の支持を要求してゐられるのは、まことに當然なことであ
る。今日の婦選獲得同盟は、形において平塚氏らの當年の主張と既成勢
力に對する反抗的傳統とを留めながら、實質においては、まさしくこ
れを裏切り、平塚氏らの指導された當年の婦人解放運動の壓迫者によ
つて占領せられ、指導せられんとする危險を孕んでゐる。その構成要
素が小ブルジョア上層婦人、既成政黨關係者等の間に相當に多いこと
は、その政策の不徹底と共に、この事實を裏書きするものではあるま
いか。

英國の平等參政權と婦人の過剩

多年の懸案であつた英國の選擧法改正が實現されて、男女平等の參政權が獲得された。男女數の不均衡のために、女子有權者數（千四百二十萬）が男子有權者數（千二百萬）を凌ぐ結果として、英國の政治は婦人によつて左右せられるだらうといつて心配する向もある。

女子人口の優越は、大戰前から歐洲諸國の特徵的な現象であつて、この事實を指摘することにより、婦人參政權は必然に婦人の專制的支配に導くものとして反對說を唱へた者も多い。世界大戰によつて三千萬の死傷者を出したことによつて、女子人口の過剩は一層その度を强めた。

しかし男子人口が女子に比して過剩なる場合には、男子の專制支配が問題とならず、從つてその事實が男子から參政權を剝奪する口實とされないにもかゝはらず、女子人口の過剩なる場合に限つて、女子の專制支配が問題にされるといふことは、それ自身、根柢において男女平等の觀念を裏切るものである。女子が數的に優越なるが故に參政權を剝奪せられねばならぬとすれば、單に小數者なるが故に、男子は參政權を獲得し、[illegible]與へねばならぬことになる。

要するに女子人口の過剩を、女子の專制支配と結びつけることは單なる性的偏見の現はれにすぎないが、一方、婦人參政權論者のこれに對する態度も、甚だ不徹底なものである。曰く、『なるほど數的に女子有權者の優越なことは事實である。しかし婦人のうち特殊の例外者を除けば、大多數の者は政治に關與することを望まず、依然家庭と育兒に沒頭して暮すに違ひないから、女子有權者の過剩にもかゝはらず女子專制の事實は現はれずに濟むだらう、』と。

これは、資本主義社會では、參政權は、婦人が有權者中の多數を占むる場合と雖も、その地位に實質的な變化を及ぼす力はなく、政治の實權は依然として男子の手に握られ、そして極めて少數の例外的な女子を除くのほか、大多數の女子は政治の圏外に留まり、被壓迫者、被搾取者の地位に留まるのであるといふ確信の上に、女子有權者の過剩を承認するものである。從つてこの議論は、婦人が消極的な投票者たるに留まらず、進んで直接に政治機關に參與し、男子と共にその實權を握る恐れがあるとなれば、忽ち女子專制の叫びをあげて、過剩有權者に對して呪詛の聲をあげずにはゐないのである。

[illegible]なり、同時に、[illegible]ブルジョア・デモクラシーの[illegible]をあばく無產者の主張を裏づけるものである。單なる參政權の賦與は、婦人と勞働者の數的優越にもかゝはらず、決してその解放を成就する力はもたない。現在の社會的機構にして存する限り、敎育の平等、職業の平等、參政權の平等々、一切の形式的な平等にもかゝはらず、搾取者と被搾取者男子と女子との間には平等があり得ないといふ無產者の確信を裏づけるにすぎないものである。女子有權者の過剩にもかゝはらず、男性支配の社會組織に何らの根本的な變化をも及ぼさないといふ前提の上に主張せられる婦人參政權は、恰かも、無產有權者の數的優越にもかゝはらず、ブルジョアジーの階級支配を脅かす危險性を伴はぬといふ論據のもとに普通選擧が主張せられる場合と等しく、婦人と無產者にとつては、味方の側よりも、敵對者の側からなされる主張にすぎないものであり、參政權の强味よりは、むしろ缺陷を指摘し[illegible]ものにすぎないのである。

ロシアのようにブルジョア諸國とは全然政治組織を異にし、民衆が直接に政治機關に參與するためにあらゆる利便と努力とが講ぜられてゐる國でさへ、數的な優越な婦人に、男子と平等の參政權を與へるだけで、積極的に活動を見ることはできないので、政治機關は、少數の例外を除くのほか、依然として男子の手にある。ブルジョア社會の遺物たるこの狀態を一掃して、婦人を一層積極的に、直接に政治に關與させ、名實共に男子と平等の立場に立つて國家を管理せしめるために[illegible]の方法が行はれてゐるかは、[illegible]ある。

婦人をして實際に國政を管理せしめるためには、單なる形式的な平等參政權の賦與をもつて足れりとせず、進んでそれを可能にする政治的、經濟的條件を完備させなければならぬ。これなき限り、婦人參政權が意味するところの男女の平等は、畢竟するところ、空文であり欺瞞である。

そこで、女子有權者の過剩にもかゝはらず、英國の政局には何らの本質的な變化も起らず、又その數的劣勢にもかゝはらず、男子の專制支配が、資本主義と共に存續するであらうことを、日本の反婦選論者の安心のためにくり返して申添へておく次第である。

パンカーストの死

大戰の直前、全世界の耳目を衝動させた英國のミリタント・サフラジェットの祖エメリン・パンカースト夫人は、六月十四日、彼女が畢生の事業とした平等選擧權が上院を通過した當日、七十四歲の高齡をもつて逝去した。

彼女はマンチエスターの辯護士で獨立勞働黨所屬の社會主義者であつたリチヤード・パンカーストの妻であつた。リチヤードは今日なほ同市の社會主義者の間に尊敬と愛慕とをもつて[illegible]

士で、婦人及びすべての被搾取者のために戰つた人物である。エメリンも夫と共に久しく獨立勞働黨に屬したが、夫の死後、婦人社會及び政治同盟を組織して、フォーセット一派の『立憲主義』諸團體、即ち言論戰に終始する參政論者に對抗して、暴力的手段に訴へる方法を發展せしむるに及び、婦人參政權を唯一の目標としない獨立勞働黨と手を分つことになつた。

『男子はその政治的權利を擴張するためには常に血を流して來た。力の使用が最も確實な、最も有效な手段であることが男子の先例によつて示されてゐる以上、婦人もまた同一手段に訴へることが、何で不合理といはれよう？』

『政府は、、、、、一壓迫されない限り、決して民意に聽從しないものである。故に吾々は言論と共に、、に訴へて政府を吾らの意思に屈服せしめねばならぬ。』

『民衆は、直接の物質的利害に訴へるのほか、その政治的無關心から喚びさまされることはできない。故に吾らは彼等の最も執着する、、、、、することによつて、その注意を喚起せねばならぬ。』

かゝる立場から彼女とその一派は死物狂ひで、個人的に、又は集團的に、力を使用する

『これぞパンカースト夫人と多くの婦

とが手を分つた所以であつた。人々は彼女の如くに戰ひ、かゝる婦

權を唯一の政治的論點とするか、さもなくばありとあらゆる方法でなやまされ、攻撃される敵とならねばならなかつた。勞働黨婦人の或人々は彼女と共に去つた。が他の人々はさうすることができなかつた。今にして省みれば、彼女の政策や活動が、參政權の實現を促進したことは否まれない。戰後における戰鬪的手段の新たなる勃發に對する恐怖、あの生命知らずの婦人達を抑壓する厄介千萬な任務こそは、戰時中勞働婦人が遂行した仕事に對する感謝よりも、一九一八年に參政權を承認せしめた所の遙かに大きな理由であつた。現に、『戰時勞働者』の大多數は、その選擧法に包含されてゐなかつた位である。婦人參政權は、どの道、實現されるにきまつてゐた。然しパンカーストがゐなかつたたら、あの時、實現されたであらうか。婦人參政權は、ドイツ及びオーストリア、ポーランド及びチエツコスロバキア等の新しい國々では、戰後の革命の結果であつた。わが英國においては、革命は起らなかつた。けれども吾國の政府はここでも革命が起りはせぬかと恐れてゐた。一九一八年の選擧當時のロイド・ヂョーヂの演說は、特にその點

乗馬の手綱を掴んで、気にもとめず、遂に蹴殺されたエメリー・デビッソンの死もの狂ひの突進の如く、思慮をめぐらした生命の犠牲等、すべて吾らの生活の異常なる動揺と騒擾は、今や遠く過ぎ去つてしまつた。けれどもそのヒロイズムは、この国の婦人運動に消し難き痕跡を與へた。その運動は、婦人の權利を獲得するために、いかなる犠牲が拂はれたかを永久に忘れることはできないであらう。』

フィリップスはパンカーストの献身的な精神とその功績とを十二分に認めつゝ、彼女が勞働婦人を裏切つて保守黨に投じた晩年をかう批評してゐる。

『パンカースト夫人の政治的勢力は、この偉大なる婦人解放の首領たる婦人が、この世において最も尊しとする一切のものゝ否定に外ならぬ戰爭の遂行に、殆んど盲目的に身を投じた刹那に消滅した。大戰後彼女の政治的立場はいよ〳〵ます〳〵明確となつた。不正に對する、火のように熱情的な、献身的な叛逆によつて名聲を博した婦人が、その晩年に至り、それをもつて自から戰つた情熱によつて弱められた時、多年あれほど憎みかつ戰つて來たところの、特權、偏見、及び壓制の社會そのものを維持する仲間にひき込まれたのであつた。保守黨員としてのパンカースト夫人は、その全生涯の事業を無に歸せしめた。

『ある一つの思想のために死を賭して戰つた多くの人々にとつては、勝利の瞬間こそは、その戰ひの眞實の最後である。モーゼの如く、彼等は自から指導して足を踏み入れさせた約束の土地を始めて見た時に、死んでしまつたこと、開戰後まもなく、一九一五年、大戰、軍需品勞働者募集の行列を組織した時、パンカースト夫人は、その全生涯つて闘つてきた一切のことを裏切つてしまつたのである。』

日本の婦人參政權論者の中に、彼女たちのその偉大な献身的精神と、、、、、とを學ぶことなしに、婦人參政權に對する盲目的なファナシズムと、特に彼女が晩年に陷つた誤りとのみを學ぶ者が出なかつたら幸ひである。

汎太平洋婦人會議

アメリカ紳士が國際的社交機關の一つとして組織した汎太平洋協會とやらの主催による、汎太平洋婦人會議なるものが、此八月、ハワイで開かれるとのことで、ジャーナリズムのうつ太鼓の音に賑々しく送られて廿名余りの日本婦人代表が出發した。筆者も昨年中同協會からその會議への出席方を求めた招待狀をうけたことがあつたが、もとより多少知名であるといふだけの理由で出たらめに出席を要求して來るような無責任な態度だけでもその性質は見え透いてゐるので、問題にするまでもなく、招待狀を一讀したきり忘れてしまつた。後に聞けば、この時、筆者以外の數人に同様の招待狀が發せられ、市川房枝氏もその一人だつたとのことである。

この會議が問題となつたのは、かく先方からの直接の指名によつて市川氏が、その代表する婦選獲得同盟と圖つて出席の準備をしてゐら

れる所へ、別に井上秀子氏ら、より上層の保守的な婦人を代表する一派が恣に代表者の詮衡委員會を組織し、先方からの直接の指名者及び有力な他の婦人團體を無視して、手盛りで代表者を獨占したことから諸方に非難と不平が起つた結果だとのことである。そしてこの詮衡委員會に對抗し、またはそれとは無關係に代表者として出發したものが市川房枝氏及び小學女教員會の數氏であるといふ。

最初この會議を、婦人界に對する刺戟劑として利用し、今ではそのお祭り騒ぎに當惑してゐられるといふ市川氏一派、即ち小ブルジョア婦人の中の急進分子と、井上氏一派の保守的な集團との對立は特に著しく感ぜられる。井上氏一派は、本來自分らのやうな貴婦人仲間の閑遊會であるべきこの會議に、いはゞ隣家のおさんどん同然の市川氏や小學女教員の連中に割込まれたので相省みて苦笑してゐる體であり、又市川氏の方は、虚禮と反動のかたまりにすぎない貴婦人の閑遊會に、木綿着物と荒れた手で割込んで、相手の當惑ぶりを見ることに些か痛快味を感じてゐるらしく見うけられる。

市川氏がこの會議を宣傳に利用された心中は、氏としては尤もでもあらうが、その利用し方は的外れの恨みがなかつたであらうか。日本婦人の無自覺を呼びさますためには、かゝる會議の性質、その組織や構成要素を明らかにして、その價値、その重要性について日本婦人の蒙を啓くべきではなかつたらうか。實際のところ、宣傳に乘つてさわぎ出した婦人達は會議そのものについて殆んど何らの理解もなく、たゞ世間しらずの餘り、國際會議といふものゝ珍らしさに浮かされ、少自己宣傳を交へた彌次馬氣分で、吾も〱と押し出した恰好がないでもない。第三者から見ると、山登りの講中でも見るやうに、多少滑稽味の加はつた、田舍臭い氣の利かなさを感ぜしめられる。旅費を支辨し得る個人が、てんぐ〱に勝手な氣焔をあげるだけで、何らの拘束力もなければ、寸毫の權威もない、かゝる會議に對して、多少の期待を抱くものがあるとすれば、むしろ不見識な至りではなからうか。貴婦人の閑遊會は、貴婦人に一任しておいてはどんなものか。

コロンタイの戀愛論

コロンタイの小説が譯出せられて、青年男女の間にその戀愛論が問題になつてゐるらしい。勿論それは主として小ブルジョア・インテリゲンチアの男女の間のことで、無産者運動の内部にある人々の間では、殆んど話題にすらも上つてゐないらしい。私の知つてゐる限りでは、運動に對して、熱心な若い婦人たちにとつては、極右極左の分裂主義によつて攪亂された戰線をいかに統一し、再建すべきか、特に殆んど全然未組織狀態に留まつてゐる工場婦人に對していかに働きかくべきか、といふやうな問題が最も緊急な、最も痛切な問題となつてゐるのみで、直接に運動と關係のないコロンタイの戀愛論などは、余り問題となつてゐないやうに、見受けられる。

『赤い戀』は女主人公が不幸な家庭生活の經驗に[illegible]す。飽まで忠

[illegible]として、[illegible]を[illegible]、[illegible]國家の保護のもとに協同的に養育する方針をもつてするところに、新社會の婦人の行くべき道を暗示したものと思はれる。これは資本主義直後の、新社會の思想的、習慣的遺物が無數に殘つてゐる社會で、その中に住む男女の經驗し、打克つてゆかねばならぬ數多くの矛盾や苦惱を描いた點で成功してゐたのであらうが、陳腐な戀愛場面がうるさく連續し、それが全體の大きな部分を占めてゐるには、少からず倦怠を感じさせられた。それ故にこそ、この書が青年男女に歡迎されるのかもしれないが

女主人公の苦鬪とその最後に到達し、解決とは勿論尊敬すべきものに違ひないが、それとても、今日、必ずしもロシアに限らず、必ずしもコムミュニストに限らず、普通一般に資本主義國の多くの女性——特に發達した個性と才能とをもち、男子の侍婢たり、玩弄物たるに甘んじない女性——の經驗してゐるところで、別にストライキングな印象は與へられない。『赤い戀』の一篇は、今日どこの國でも見られる、そしてイブセン以來多くの文學者の取扱つてきた、淺薄な、身勝手な卑俗な現實主義の、いはゞ亡びゆく資本主義そのものを象徴したような舊式な男性と、未來の社會を暗示するような、毅然たる性格と高い理想とをもつ、眞摯な、純潔な、新しい女性との戀愛葛藤を描いたもので、舞臺が革命後のロシアであり、主要人物がコムミュニストであるといふの外、取り立てゝ新しい見地に立つものでも、新しい問題を[illegible]新しき[illegible]つけてゆくべき道を指[illegible]一つにすぎなかつた。

「戀愛の道」の中で問題になつてゐる三代の女性は、さういふ[illegible]性關係の型が崩壞したあとに、また新しい、より高い兩性關係形態に發達しきらない、過渡期の混亂と矛盾とを描いたものと感ぜられる。その中の祖母は、嚴正な一夫一妻主義で、愛人のために夫を捨てたが、その愛人に裏切られると共にその許を去り、娘を自分の手一つで育てた。其娘は成長して革命家となり、革命の鬪士を夫に持ちながら、政治的立場において相いれぬブルジョア紳士をも同時に愛することによつて惱んだ。更に孫娘は、活動的な黨員として寧はなき關係上、異性を愛することなしに、たゞ自然の欲望を滿たすために多くの男子と一時的に關係した。遂に彼女は母の夫である青年とさへ關係した。彼女は姙娠したが、それが母の夫の子であるか、その他の何人の子であるか、彼女自身も知らない。そしてこの狀態を彼女は、戀愛をする暇のない現下の狀勢においては、完全に合理的、道德的なことであると考へ、母が自分と共にそのことを理解しないのを歎いてゐるのである。「自分は母から何ものをも奪つた覺えはない。自分と彼とは愛し合つてはゐないからだ。自分はこのことによつて母の幸福が破壞されると知つたなら、最初からかういふ行爲は避けた筈だ」と娘はいふ。

私はこれを讀んで故大杉榮氏を眼前に思ひ浮べぬ譯にはゆかなかつた。コロンタイほどに有力な同盟者を得た氏はどんなに[illegible]

ことであらう。氏が口づから述べた氏一流の戀愛觀は、殆んど正確に、この孫娘に同意してゐるコロンタイの意見と一致してゐたからである。たゞ氏においては、かういふのが人間のノーマルな狀態であり、コロンタイにあつては、過渡期の、變則的な、餘儀ない狀態として承認されてゐるといふ違ひがあるだけである。『甲を五だけ愛し、乙を三、丙を二と、各々異つた程度で、或は五と五といふように、同じ程度で同時に愛することに何の妨げがある。自分は最初から他の女を愛する自由を擲つといふ條件で、婦人に愛を求めた覺えはない。また自分が愛情の問題をよそにして、一時的な滿足を求めた所で、何人の權利を犯したことにもならない。』かういつて大杉氏は、自分を獨占しようとする愛人達を嘲つたものだつた。

人には英雄崇拜の心理があるために或る一點で、もしくは數箇の點で群を拔いた人物がある時、その人を偶像化し、その人の一切を合理化しなければやまぬ傾向を生ずることがある。大杉氏が英雄的な人物であつたがために、その愛人達が自己にとつて不利益な無理な戀愛論をさへ鵜呑みにして喜んだように、コロンタイが、無産婦人の中の國際的に有名な代表的人物であるために、その戀愛論をも鵜呑みにする

を求めてゐる人間の苦しみと惱みとを代表した

究極の解決そのものを暗示してゐるものではないのである。吾々はこれをもつて強い道德が亡びて、新しい、より高級な兩性關係への發展の過渡期において、ロシアが經驗しつゝある矛盾と困難の一例として見ることができる。これは結婚年齡にある男女數の著しき不均衡、女性に對する男性の一般的な時代おくれの無理解な態度、一般婦人の智識水準が極度に低く、ために少數活動分子が、新社會建設のために異常に重い負擔を課せられてゐること等、活動的な女性に對して正常な永久的な結合を不可能ならしめる諸條件のもとに、強壯な若い婦人が自然の本能を滿足するために採ることを餘儀なくされてゐる手段の一つとして提示されてゐるので、問題の解決よりも、むしろそれの提供として見らるべきものである。

コロンタイの女主人公は、資本主義下ならば、一生禁欲生活を強要される、働らき者の謂ゆる老孃タイプである。それが革命直後のロシアであるために、反對の極致に走り、異性を人として愛することなしに、たゞ事務的、機械的に、本能滿足の手段として利用する傾向を

じたものであらう。

側に於ける第一の[illegible]である。兩性關係の場合[illegible]ここ[illegible]とつても、子孫——即ち人類の未來にとつても、自然な、[illegible]態が、絶對的禁欲にもあらず、無選擇の、手當り次第の一時的滿足でもなく、精神的に、肉體的に均衡を得た正常な本能の滿足にあることは明白であるが、客觀的條件がさういふ狀態を不可能にしてゐる間はより高き兩性關係の發展への過渡期における、避け難き矛盾と困難の一として、犧牲的經驗の一として、潔癖な禁欲者と並んで、無關心な刹那的享樂主義者を生むことも余儀ないことであらう。性の問題もまたロシアが惱んでゐる生みの苦しみの一つである。しかし「三代の戀」の孫娘のような態度が、さういふ境遇にある婦人の採るべき一般的な原則として、積極的に支持せらるべきか否かは自から別問題である。この點について多くの共產黨員、特にその婦人の中に有力な反對論者のあることは當然であらう。

吾々はこの孫娘ゲニアの態度に、兩性關係における、新しい、指導的な見地を發見することはできずに、飢餓時代における單純な原始的な食欲の方則が、そのまゝ性的關係の上に適用せられてゐるのを見るばかりである。かゝる無選擇な、原始的な形における本能の滿足が、例外的な場合にはともかくも、個性の發達した近代人にとつて、一般的な原則としてうけられないことはいふまでもない、戀愛は個人の私事であるとは、その結果が種族の衰微退廢を招かない限りにおいてのみ認めらるべき原則である。食欲の滿足は個人の私事ではあるが、其結果がチブス菌やコレラ菌の撒布蔓延を助ける限りでは、社會的に種々なる制限を受けるのが當然である。人間が社會的存在である限りは、い[illegible]ないことは、[illegible]下にとつては殆ん[illegible]の自由を、女子にとつては[illegible]を原則としてきた。かゝる原則に反對する新しき女性は、古き男性の[illegible]則を、新時代の兩性共通の原則として承認するのでなく、幾千年來の因習によつて墮落し頽廢してゐる男子を指導し統制して、過去のそれよりも遙かに高級な新しい原則の確立に向つて進まねばならぬ。たゞ目前の餓を滿たすに急であるの餘り、兩性關係の高い道徳標準によつて男性を選擇する權利を自から擲つならば、その結果は、種族の墮落頽廢を招くに過ぎないであらう。私有財產時代の兩性關係の腐敗は、經濟的條件が女性からその選擇權を奪つてゐた結果である。未來の社會は、女性をして十分に選擇權を發揮せしめる一切の條件を備へなければならぬ。いかなる理由にもせよ、種族の母である女性をして、男性を選擇することを不可能ならしめ、又はその選擇を輕視せしめるような條件の存在することは、その社會の未發達を語るものではなからうか。

ヨーロパの女優の中には、戀愛關係によつて生ずる拘束を厭ふ餘り、沒個性的な男奴を本能滿足の機械的な道具として使用するものがあると聞く。コムミュニストたるゲニアの場合はこれと共通で、たゞ前者はそれを藝術のためと考へ、ゲニアは戀のためと考へてゐるだけの相異である。

コムミニストもまた人間でなければならぬ。人間的な感情をもたぬ機械のようなコムミュニストは、部分的にはともかくも全體として真に指導的な[illegible]なコムミュニストであるといふことは[illegible]

生物學上より觀た近親婚と雜婚

駒井卓

近親婚

（一）

人が近親即ち血緣のあまり近いものと婚する事を忌む事は、大古から又どこの民族にもあつたやうである。舊約聖書の中などにも「汝等凡てその骨肉の親に近づきて之と淫するなかれ云々」とあつて、それからどう云ふ結婚はいかぬと一々の場合を擧げて詳しく誡めてある（利未記十八章）。それでカトリックでは此近親の結婚を嚴重に禁じて居た。新敎ではそれ程やかましく云はないやうであるが、それでも、之を良いとはしてゐない。その習慣が殘つて今日の西洋の法律の基礎になつた。

基督敎國ばかりでなく、回敎國でも佛敎國でもやはり一般に近親の婚姻は惡いとしてゐるやうである。又蠻人の仲間でも多くは近い種族の結婚を忌む風がある。それで交通不便の孤島とか山間とかに住む蠻人仲間では、危險を冒して他の種族を襲ひ、其中の娘たちを奪つて來ると云ふ風習のあるものも珍らしくない。

けれどもこれには例外があつて、近親結婚をさほど嫌はぬ人種もある。セイロン島に住むヴエッダと云ふ種族では兄妹の結婚を差支ないとしてをると云ふ。古代のスパルタでも血族結婚が盛んに行はれた。それにも拘らず歴史あつて以來、最も優秀な種族の一つが出來た。

どこの國でも太古交通が不便で人の少かつた時には、隨分近親間の婚姻が行はれたやうである。吾國の古典にもそれが見えるし、舊約聖書等にも可なり此例が多い。古のエジプトの王族トレミイは中にも兄妹、叔姪の婚姻が盛んであつたと云ふので名高い。

それにしても古今に亘り東西を通じて、又文野の別なく近親結婚を忌む風が一般に行はれてをるのはなぜであるか、私の知つてをる限りでは、これには明かな説明がないやうである。或は異人種との雜婚を嫌ふのと同じやうに、深い心理的の原因があるのではないかと思はれる。然し實際にかやうな婚姻が屢々恐るべき結果になる事は人の日頃

經驗する通りで、此經驗が近親婚を天理に背くと考へさせるやうになつた事もありそうである。即ち吾等の周圍で見ても、從兄妹の夫婦等から生れる子の中に、精神病痴呆聾唖等のあるのがよくある。又統計的に多くの場合を調べた結果にも、やはり同じやうな事が屢々見られるのである。

たとへばフェイ及ベルの兩學者が一九〇〇年アメリカで行はれた國勢調査の材料によつて、當時全國から集つて來た盲者及聾唖者に就き、其父母の血族關係を調査した。即ち彼が全國の六萬四千七百餘の盲人と八萬九千三百許の聾唖者から得た回答を基礎にして知り得た處は、生れ乍らの盲者又は聾唖者が同種の先天的缺陷ある系統の近親結婚より出た者の多い事であつた。ドイツ、フランス等に於ける同種の統計によつて見ても大體同じ事が云へるし、又盲や聾唖ばかりでなく、精神病等に就ても同じ事である。

又地理上又は社會上已むを得ず、或は自ら望んで、他から孤立したやうな種族には、屢々種々の缺陷が著しく現はれる。アメリカの東海岸の島や半島から、かやうな實例が多く報告されてをるが、例へばマサチユセッツ州にある島のマルサス・ヴヰンヤードでは一八八〇年には二十五人に對して一人の聾唖があつたと云ひ、それからあまり遠くない小島のブロックでは、そこに住む人口の大部分は皆近親結婚の產物で、一家の子供が揃つて低能ばかりであるやうなものも多くあつた。フロリダ半島東南方にあるバハマ群島の中には盲や白痴の非常に多い處があるが、何れもひどい近親結婚の結果であると云ふ。

有名なジューク一族はニューヨーク州の山間の交通不便な處に於て、しかも社會上附近の人々から嫌がられて孤立の境遇にあつたため、可なりひどい血族結婚をやつた。それがため結婚によつて劣等の遺傳質が一層純粹になり、代を重ねるに從つて益々劣等の人間を生じたやうである。ジューク一族の系圖を見ると、三代續いて從兄妹間の結婚が行はれ、終に生れた男女の殘らずが低能になつた實例がある。

血族結婚はかやうな社會一般から排斥された階級にもあつたに、又自らを社會一般より一段高いとした王族貴族等の階級にも行はれた場合がある。然し公平なる自然の法則は王族貴族とドン底階級とを選ぶ事をしなかつた。

王族で血族結婚を激しくやつた有名な例はスペインの王族である。即ち十五世紀にスペインの王位に居たフエルヂナンド五世及皇后イサベラは共に英邁の質であつて、コロムブスを助けてアメリカ發見をやらせただけでも、歷史上有名であるが、其子孫が政略の犧牲になつて盛んな血族結婚を行つた結果、多くの精神異常者をスペインの王位に見るやうになつた。即ち彼等の娘のヨアンナは精神病者であり、他の娘マリーの子のカルロ五世は偉い處もあつたが、殘忍性の強い王であつた。此王に前のヨアンナの娘のイサベラが妃となつてフヰリップ二世を生んだが、これ亦精神上缺陷があつた。此王が更に其從妹を娶つて生れたものが、狂暴性の精神病者で父王を殺さうとして返り討にな

り、オペラの中に名を殘してをるドン・カルロスである。

（二）

此等の結果を見ると、明かに人類の近親結婚が惡い結果を生じてをるやうである。たゞに人間ばかりでなく、家畜などで見ても、畜産家は一般に家畜で近親のみの繁殖を續けてゆくと、次第に生れる子の數が少くなり、又子が弱く、畸形が多く病にかゝり易くなる。之に就て二三の實驗を紹介すると、アメリカの或畜産試驗場で豚のヨークシャア種の最も良いものを撰んで、兄弟姉妹の間で繁殖させて見たが、三四代すると、死產が多くなり、又生れても丈夫に育たず、終に四五代にして此豚の系統が絶えた。又バアクシャア種で同じやうた實驗をやつて見たが、之に似たやうな結果になつた。鼠に就ても同じやうな實驗をしたが結果は同じ事で、數代續いて血族繁殖をすると體が小さく弱く、卵を生む數が減じ、生んだ卵の孵る率も下る。

一般の動物を見ても、天然には雌雄同體の動物、即ち雌雄の生殖器官を兩方とも持つてをるやうな動物が珍らしくない。蝸牛、蚯蚓、蛭等は其最も普通の例であるが、こんな動物でも殆んど例外なく二匹か

なつてをる事が多くある。

植物でも同じ花の中に雌蕊と雄蕊とのあるものでも、成熟する時期が別になつてゐたり、又花の構造の上から自分の花粉で自分の卵に受精することはできぬやうになつて居たりする。又たとひ同じ花の花粉を雌蕊につけて見ても受精の起らぬ場合がある。そして同じ花に雌蕊と雄蕊とがあるに拘らず、わざわざ色々の方法で、或は甘い蜜を出したり、良い香を出したり、きれいな色をしたりして蟲を誘つて花粉の媒を頼んだりするやうになつてをる。植物でこの他花受精と自花受精とがどれほど違つた結果になるかといふ事を最も良くしらべたのはダーウヰンである。其著「植物界に於ける他花受精及自花受精の影響」にあるやうに、彼は十幾年もかゝつて根氣よく多くの種類の植物に就て自花受精と他花受精の結果の比較試驗をやつた。そして得た結論は「自然は自花受精のみを續ける事を嫌ふ」と云ふのであつた。

右にあげたやうな事實を見ると、近親間の繁殖はいつも惡い結果になつて、全く天理に背くものであるやうに見える。

處が又一方にはちやうど此結論に反對のやうな實例も多くある。即ち近親結婚が無害であるばかりでなく、却つて有益又は必要だと思はれるやうな例である。

少しばかりの人數の間で近い血族の間ばかりの中で繰返したり重ねたりして代を重ねても、更に惡い結果の出なかつたやうな例も少くない。例へばジヤバのテンガーと稱へる山の中に印度人の一部落があるが、永く血族結婚をしたに拘らず、體格の最も優れた立派な男女ばかり居るといふ。アメリカの東岸の方の島などにも、血族結婚をつゞけても、一向かたわ等の出て來てゐない處もある。

王族の中でもプロシアのフリードリヒ大王は從兄妹の結婚の子である。其兄弟姉妹合せて八人の中四人までは何れも優れた人たちであつた。ダーウヰン家は血族結婚を多くした家であるが、中にもチヤルス・ダーウヰン夫妻はいゝとこ同士であつた。それにも拘らず二人の間に天體物理の大家ジヨージ・ダーウヰン、植物生理の大家フランシス・ダーウヰン、英國優生學會會頭のレナード・ダーウヰン等を出した。かう云ふ家に生れた所爲であらう、此ジヨージ・ダーウヰンは物理學者でありながら、血族結婚問題の研究家で「英國に於けるいゝとこの結婚並其結果」と云ふ論文を書き、血族結婚の家に子孫が少いと云ふ事、又聾啞、精神病、低能が多いと云ふ事は誤りであると云つてをる。

家畜に就て見ても、今ある優良な品種の多くが近親繁殖の產物である。昔は前に云つたやうに、近親繁殖は有害だと云ふ事が畜產家の常識のやうになつて居た。それを十八世紀の半頃にベークウエルと云ふ人が居て、レスター種の羊について兄妹間の繁殖ばかりをやつて見た。ところが三十年程する間に非常な成效を擧げ、收益が今迄に數拾倍すると云ふ有様になつた。此有様を見て[illegible]つた[illegible]、畜產家たちも爭つて彼の法を採用するやうになり、それから多くの家畜が盛んに此法で改良せられた。それで今ある多くの優良な品種の系統を遡つて見ると、僅かに數頭の先祖から、血族繁殖のみで殖えてゆき數千萬頭にもなつたと云ふやうなものも少くない。

植物でも前に云つたやうに、他花受精でないと、健全な種子の出來ない種類も多くあるが、之と共に專ら自花受精ばかりで繁殖してをるものも珍らしくない。しかも大豆、稻、小麥、大麥、燕麥、煙草、トマト等云ふ重要作物は專ら此法で實を結ぶのである。此等の植物では花が閉くと同時に花粉が雌蕋につくやうに出來てをるものもあり、又中には花が出來ても開かず、それで立派に種子の出來るやうになつてをるものもある。即ちちやうど他方に他花受粉が行はれるやうに樣々のしかけがあるのと同じやうに、こちらでは自花受粉が行へるやうにうまく出來てをるのである。

（三）

かやうにして見ると近親結婚の良否については、良いと云ふ方の根據と惡いと云ふ方の根據と兩方あつて、一どちらとも判斷がつき兼ねるやうな有樣である。畜產家の云ふ事を聞いて見ても、昔からの云ひ傳へや、自分の狹い經驗次第で、或者は近親繁殖は大なり小なり必ず有害だと云ひ、又或者は決して有害[illegible]

のには是非なくてはならぬ方便だと云ふ。又中にはどちらつかずの意見で、或時は有害で或時は有益だと云ふ。これは品種の種類により、又近親繁殖の程度によつて違ふのだと云ふ。

それでどうしても此問題の解決には、專門の學者が實驗室内や試驗國で、嚴密に分析的に研究をせねばならぬ事になる。實際かうした研究を動物に就てした者も少くない。

處で此やうな研究をするには、どうしても小さくて速く育つて速く殖える者を使ふのが便利である。それで自然鼠とか二十日鼠とかモルモツト、蛹などが材料として多く用ゐられた。

殊に前世紀の終頃にはドイツでワキスマンを始めとして、此問題に關する實驗を、鼠や二十日鼠でした人が數人もあつた。此等の結果は皆大體同じ事で、一言で云へば兄弟姉妹の間だけの繁殖のみを十數代も續ける中には、交尾をしても子が出來なかつたり、又子が出來ても一腹の數が少くなり、生れる子に病に罹るものが多くなると云ふ結果になる。

今世紀に入つてからは、更に多くの材料を用ゐて、細かな實驗が行はれるやうになつた。

其一つの例はアメリカの農務省のロムメル及ライトの兩氏の行つた

此實驗の結果を見ると、大體に於て… 即ち一腹に生れ…に全體としての活力が減ずる傾があつた。即ち一腹に生れる…少く、又死亡率が高く、體の大さが小さく、成育が遲くなつた。

然しこゝに注意すべき事は、かやうにして二十代も近親繁殖をする間に、種々の性質の違つた系統が分化した事である。即ち一方には生殖力は弱つてゐるが體は必ずしも小さくない系統が出來たかと思ふと、他方には體は弱いが生殖力は劣つて居ないやうな系統も出來上つた。又或系統では死亡率は割合に低いが子の數は少いと云ふやうなのもあつた。又中には弱い小供ばかり生れる血統も出來たが、又總ての點で即ち生殖力も子供の大きさも發育の有樣も全く初めと少しも變らぬ系統もあつた。

此終に述べた事は大切な事であつて、若し近親繁殖が眞に有害であるならば、その系統に於ても何程か不良の影響が見えさうなものである。それにも拘らず或系統には更にかやうな影響が見えないで、最初出發の時の狀態と少しも異る處がないと云ふ事は、近親繁殖そのものには別に害はなく、たゞ屢々之に伴つて出て來る別の原因から不良な結果が起るのではあるまいかと云ふ疑が起る。そして此疑問は次の實驗を見ると明かになつて來るのである。

さそうな實である。鼠の飼養地を發達するは理想的なもので日本の神戸に寄宿舍の料理場などよりずつと衛生的に出來てゐる。こゝには鼠の前の正しい、系統のよく記錄された標準鼠もあつて色々の實驗に此系統從利に出來てゐる。

そのウヰスター研究所で先年ミス・キングと云ふ有名な婦人動物學者が頗る大袈裟な近親結婚に就ての研究をやつた。これは鼠五萬頭四十代に亘り常に適當な比較材料を用ゐたよほど嚴密な實驗であつた。即ち先づ最初にそれまで既に何代か近親結婚で繁殖して來た系統から一腹に生れた雌雄二對を取り、之を起點として每回兄弟姉妹間の繁殖のみを行つて遂に四十代に及んだものである。

初めの間は生れる子が少かつたので、生れる雌は大抵繁殖に使用したが、數代すると數が殖えて來たので、一番體の大きな丈夫な雌のみを選び、之に又選り拔きの雄をかけ合せた。かやうにして常に最良のものを選んだ處に今迄の實驗と違つた處がある。

かうして丁寧に生れる子供一々について生れた時の目方を計り發育の狀態をしらべ、又生殖力を記錄していつた。代が重なるにつれて生れる子の數があまり多くなつてから後は、各系統から三腹乃至五腹位を選んで代表としその發育狀態を精密にしらべた。さうすると最初六代程の間は今迄の他の人の研究と同じやうに不良の狀態が見えて來た。即ち生殖力が弱つて子の生れる數が減じ、畸形のものが生れ、又子の體が小さくなつた。處が幸にして此不良の狀態は全然近親繁殖には關係のない別種の原因から起るものだと云ふ事が分つた。それは同樣の不良の狀態が近親繁殖をしないだけで他の點では、同じ系統から云つても育て方から云つても全く前者と違はない選擇された比較材料に於て同じやうに現はれたからである。そして此理由を丁寧にしらべたところが、主に食物の所爲だと云ふ事が分つた。そこで食物を改善したら、忽ち不良な狀態が無くなつて第七代目からは再び健全な狀態に復した。若し此實驗に比較材料を用ゐず、又詳しく事情を究める事がなかつたら、直ちに此食物に因る不良の狀態を近親結婚のためだと早合點して其儘全く違つた結論を出したであらうが、幸にして此等の點に最も周到な注意があつたので、眞相を見誤らなかつたのは誠に幸であつた。

そこで此第七代目から後は、最も極端な近親結婚である兄弟姉妹間の繁殖のみを每代繰返していつた系統が、近親繁殖をしない比較材料に比べて、總ての點で、生長度でも繁殖率でも、體の健康さでも命の長さでも、優つても劣らぬ事を見出したのであつた。たとへば第七代目より十五代目までについて體重を比べて見ると、雄では近親繁殖の方が比較材料より平均一割二分方重く、又此研究所で常にしらべて分つてをる雄鼠の一般平均體重より一割八分程重い。雌ではこれ程の違ひはないが、とにかく比較材料や平均材料よりも何程か重くなつてをる。又十六代より二十五代は大體に於て比較材料と同じであつて、之を更に選擇を加へない一般平均材料の體重よりは遙かに優つてゐた。

又白鼠の一腹の子供の數は平均六・七疋であるが、此近親繁殖の材料は最初の六代迄を除けば、殆んどいつも之より多く、第一代より二十五代迄の平均は七・三九疋、二十六代より四十代迄は七・三七疋で、何れも一般平均の一腹の數より多く、同時に比較材料よりも大きい(比較材料では二十五代迄平均六・七五、二十六代より四十代迄六・二三疋)。又命の長さ病に對する抵抗力も優れてをるし、腦の目方を計つて比べて見ても大抵平常以上であつた。

そこでミス・キングは一九二一年の萬國優生學會の席上で、此實驗を報告した後、結論として云ふに「此等の實驗の結果は全體として見て、鼠に於ては近親繁殖の必ずしも有害でない事を示す。しかも兄弟姉妹間の繁殖を四十代即ち人間で云へば百年に三代を重ねるとして千三百年にも當る長い間續けてもこの通りである」と。

此研究の結果から吾等の知る事は、此場合のやうに代々嚴密な淘汰を行つて、惡いものを除いて良い者のみを取ると云ふやうにするならば、近親繁殖は必ずしも惡い結果にならない。即ち近親の素質を交へると云ふ事それ自身には別に害はないと云ふ事である。若しそうでなくて近親繁殖そのものに害があるなら、いかに淘汰を行はうが、惡い結果を免れる事が出來ぬ筈である。處が實際そうでないのは近親結婚に就て今迄考へられて居た繁殖力の減退とか、生れる子が弱いとか畸形が多いとか、生長が遲いとか云ふのは、近親結婚それ自身の害ではなくて、之に伴つて起り易い別の原因に因る事を示すものである。

(四)

それでは實際多くの場合に於て、吾々の日常の經驗から云つても、又畜産家や園藝家たちの實驗から云つても、又多くの學者等の研究の結果から見ても、近親繁殖が多くの場合に不良の結果になるのはどう云ふわけかと云うと、それはかうである。即ち多くの動物や植物には大抵其發育を妨げ又繁殖を害する如き素質が潜在してをるものである。之は動植物を數多く育て、丁寧に觀てをると分る。例へば今から十七八年前からアメリカで果物の醱酵してをるものに集る小さな蠅を飼つて遺傳の研究に用ゐた。此蠅の御陰で遺傳學が急速な進歩をなしたのであるが、此十七八年間に此蠅に少くも四百通の新しい變りものがあらはれた。此等の變り物は、或は翅が小さくなつて飛べぬものがあり、翅の脈が不規則になつてをるものがあり、又脚が曲つて歩けぬものがあり、又は眼が無くなつて盲になつてをるものがある等、多少其發育を害し生活を妨げぬものはない。或は其性質が純粹になると全く蠅の生命を奪ふものも多くある。又多くは生殖力を減じ生れる子の數を少くする。

これは蠅に限つた事でなく、鼠でも又人間でも植物でも同じ理屈である。現に白鼠と云ふのは皮膚に色素のない鼠の白子で、普通の鼠に比べると、光線に對する抵抗力が弱く、又外敵に見出され易く生存上明かに不利の狀態にある一種の變り物である。

かやうに總ての動植物にはいろいろの生存上並に種族上有害な素質があるものであるが、此等の性質は多くの場合に於てメンデリズムの所謂劣性であるため、其のない系統のものと結婚をしてをる間には外に現はれずに濟む。白鼠でも之をあたり前の鼠とかけ合せると生まれた子は悉く鼠色になるから、白の性質は少しも外に出ないで居る。處が一度血族結婚をすると、かやうな素質を持つたものが出會ふために、此隱れて居た悪い素質が明るみに出される。例へば前の白の性質の潜在してをる鼠が二疋で子を生むと、其次の代には白鼠が平均全體の四分の一だけ出て來るのである。

人間でも同じ事で、吾々には様々の缺陷が潜在的になつてゐる。或は耳の働きを妨げて聾にするやうな性質もあるかもしれぬ。又は精神に障害を起して氣狂ひにする様な性質もあるであらう。けれども系統の違つた人と縁組をすれば、互ひに其缺陷を補ふやうになるため此等の缺陷が明るみに出ないで濟むので、吾等は精神的にも又身體的にも缺陷のない子女を得て大に幸福がるのである。處が一旦血族と婚するとなると、お互同士の同じ缺陷がぶつかるので、ちやうど白の性質を隱し持つた黒鼠が二疋出會つたやうに、忽ち自分では全く氣附かずに居た缺陷が子女に現れて、非常に悲觀すると云ふ譯になるのである。

之が近親繁殖の適當不良の結果になる理由である。それだから若し其系統の中に不良の性質の潜在するものがない場分には、近親繁殖は更に不良の結果を起す道理がない。前のミス・キングの實驗のやうに不良の性質を持つたものは繁殖に用ゐぬと云ふやうに、段々に不良の素質を除いてゆけば、繁殖に用ゐられるものは純良なものばかりであるから結果は決して悪くならない。又潜在性の素質が近親繁殖によつて一層明るみに出される爲に、不良な素質に限つた譯でなく、優良な素質が若しある場合には、之に就ても同じであるから、近親繁殖によつて、潜在的の優良性が明るみに出される事になる。前のフリードリヒ大王やダーウヰン一族等は此方の例であらう。

かやうにして近親繁殖は善悪の別なく潜在性の素質を明るみに出す力を持つてをるものであるから、之を幾代も續けてゆけば、善き素質を持つた系統と悪き素質を持つた系統とが嚴密に辨別されて來る。換言すれば近親繁殖は善悪の素質を掘り起して之を篩ひ分ける作用をするのである。此事は前のロムメル及ライトのモルモットでした實驗の結果に於て明かに見られる。即ち種々の點に於て夫々特徴のある多くの系統が長い近親繁殖に於て分化して來たのであつた。

人間でも長い間の血族結婚をすると、遂にかやうな状態になる。其一つの例を擧げると、マルチンと云ふ婦人が今から五年程前に發表した調査の結果がある。これはニューイングランドの海岸にある一つの小さな町の事であるが、其一つの小町は其住民の全部が昔英國より渡來した十家族許の子孫よりなり、どこへいつても又どんな職業をしてをる人の中にも、同じ名前ばかり出會はす。即ち今迄血族結婚が盛んに行はれて來た證據である。こゝの住民は多くは智力も相當にある方

中には大學の卒業生もあり、又一般に音樂の才能があり、文學の作家も居る。ところが何故か自殺者が非常に多くて、一族中に天壽を終へたのは少いやうな家もある位で、其爲め此町に自殺町の名がある程である。

今一つの町Yはやはり海岸の古い町であるが、傳説によると、最初こゝに渡つて來たのは何處とも知らぬ南の方から來た漂浪の男と其妻なる低能の女と外に數人の同類であつた。處が彼等がこゝに來て魚を捕つたり貝を掘つたり、又林に入つては樹の實を集めたりした原始的の生活をしてをる中に、類を以て集るいくらかの仲間が殖えたのであつた。から云ふ連中を先祖とする現在の町の住民は、血族結婚の盛んに行はれた結果、やはり町中親類のやうな有様で同じ名ばかり幾度も出て來るやうな風になつてをるが、其多くのものは體格が惡くて若いのに老人のやうに見え、又低能で怠惰で落附いた稼ぎを嫌がり、手くせが惡く性關係がひどく亂れてをる。

即ち此二つの町の住民は二三百年間の血族結婚の間に、各々其特徴が分化して、Xは性能は平常であるが自殺者の純系となり、Yでは先祖の低能不節制の性質が子孫に於て判然となつて來た次第である。

畜産家たちが良い品種を造るに近親繁殖の必要を經驗したのは、即ち此方法によつて良い系統と惡い系統とを分化させ、惡い系統は捨て、良い者を取り、此良い者を又同じ方法で愈々純粹にしてゆき、終に順良無類の良種を得るやうになつた爲めに外ならぬ。近親繁殖の功過は先づ右に述べた通りである。

されば吾々の實際問題としては、血族結婚

た事はない。惡いか惡くないかは一に不良の素質が潜在してをるかをらぬかできまるのである。然しこれを完全に事前に見分ける法は全くないので、やつて見ない中は何とも分らない。それで若し一族中に盲、聾、精神病等があつたら無論之を避けねばならぬし、ない人でもやらぬに越した事はない。先づ此位の事しか云へないのが今日の吾等の此問題に關する智識の程度である。

雜婚

（一）

雜婚即ち類縁の遠いもの、例へば動物や植物で云へば違つた種の間、又は品種とか變種とかの間、人間ならば違つた人種の間の繁殖は、其違ひの程度により又組合せ方によつて色々違つた結果になる。

先づあまり縁の遠いもの同士の間には全然雜婚は出來ない。犬と猫、牛と羊、稻と麥等の間には決して子供は出來ない。これは交尾の器官の状態にもよるけれども、それ以上もつと根本的の、即ち兩者の體をこしらへてをる物質の上の相違によるものと考へられる。時とすると極めて例外の場合に子の出來るやうな組合せもある。羊と山羊、獅子と虎、孔雀と七面鳥等の組合せは此例である。かやうな雜婚のよほどむづかしい場合は、例へ子供が生れてもそれは概して弱く小さくして

中々育ち惡いものである。

之よりも少し近い種類のものになると、割合にたやすく雜種が出來る。例へば馬と驢馬とから騾が出來る等はこれである。かやうな場合には間ひの子は體が丈夫で發育力が大に盛んである事が屢々あるが、大抵發育力ばかり盛んで生殖力と云ふものは全くない。或は雌雄の一方だけ生殖力がある事がある。騾は滿洲邊で盛んに使つてをるやうに、體が丈夫で病氣にかゝり惡いが、雌雄共全く生殖力がない。それだから騾から騾を生ませる事はできないで、いつも雌馬と雄驢を交はせねばならぬ。牛と西藏邊に多く居るヤクやアメリカ等に居る大きな野牛即ちバイゾンとかけ合せると、雌には生殖力あり雄にはないものが生れると云ふ。又牛とインドで耕作等に使つてをる瘤牛即ちゼブとの雜種は病に對する抵抗力强く、且肉の味がよいと云ふので、ブラジル邊では實用にしてゐるそうである。驢馬とアフリカ産の野生の縞馬即ちゼブラとの雜種も相當によさそうな者が出來るそうであるが、縞馬を手に入れる事がむづかしくてとても實用にはならぬ。モルモットを野生の似た種類とかけ合せると、親のどちらの種よりも發育の優つた雜種が出來るが、其雄には生殖力がない。

植物でも同じやうな事がある。例へば大根とキヤベツとの間ひの子は中々難かしいが、稀に出來る事がある。此間ひの子は草丈が非常なものになり、ちやうど御伽話にあるやうな大木になる。然し草丈が大きなだけで種子は一つも出來ない。

處が今少し種の近いもの同士をかけ合せると、生育も能く又生殖力もある雜種を得る事が出來る。殊にかう云ふ場合に生育力に於ては親の何れよりも優つてをる事が珍らしくない。之は雜種の著しい特徴であつて、牛羊豚雞等の家畜家禽の違つた品種のかけ合せの際によくある事である。蠶でも東洋の在來の品種と歐洲種とをかけ合せた間ひの子は一代雜種と云はれ、生育が良く絲の量も多くて、經濟上大に利益があると云ふので、蠶業家に持てはやされてをる。二十日鼠でも普通の二十日鼠と其變種のコマ鼠とをかけ合せて生れる子供にメンタルテストをして見る、即ち迷路を驅け拔けて食物のある處にゆく事を、何度くり返せば間違はないで直にゆくやうになるかと云ふ事を試驗して見ると、親の種類のどちらよりも頭がよくて上の成績を取る。

植物でも同じやうな事があるので、適當な種と種との間、又は品種と品種との間の雜交は屢々發育力に於ても又生殖力に於ても、非常に優れたものを生ずる。即ち發育が早くて丈夫で大きくなり、實の收穫量も多いと云ふ事がある。昔より老樹名木と云つて、天然記念物にでもなるやうなものには、かやうな雜種がよくある。先年アメリカで在來の栗と日本種の栗との雜種を造つたところが、非常に見事な栗樹が出來上り、當り前ならば日本栗は六年位アメリカ栗は十二年位せぬと、實がならぬのに、此間ひの子の一本は二年足らずで實るやうになつたと云ふ。

タウモロコシには色々の品種があるが、皆雄花と雌花とが別々になつてゐて、雄花は莖の頂に穗になつて着

ら出て、其花柱が馬の尾のやうに垂れ下つてをる。此雌花には通常他の株の雄花から花粉が飛んで來て實が出來るのであるが、同じ株の雄花の花粉でも實らない事はない。そこで此同じ株の中で實を結ばせる事を何度かくり返してをると、あたり前より小さい、草丈も低く、實の軸も短いものがいろいろ出來る。其低い程度短い程度は色々あるが、とにかくかやうにしてをると、終に前に云つた理由によつて色々の系統が分化して來るのである。そこでかうなつた處で違つた系統のかけ合せをすると、忽ち草丈は親のどちらよりも遙に大きく實の軸も長くなつて、たくさんの實のつくものが現はれて來る。かくタウモロコシは此種の實驗に一番明瞭な結果の出る植物である。メーウキンは此植物の雜種に就いても念入りの研究を遂げたが、色々の種類のかけ合せに就て、雜種と元の種との生えてから花を開くやうになる迄の日數の比較をしたら、全體の八割迄元の種のどちらよりも雜種の方が早かつたと云つてをる。

かやうに雜種には組合せによつて發育力の盛んなものが出來るのは、動植物全部に弘くある事で著しい事であるが、これは主に第一代目だけの事で、第二代目からはあまり見えず、たゞ兩方親の種類の中間になるのが多い。そこで此雜種の强勢とでも云ふべきやうな事實は何に因つて起るか

たやうに、一般生物には大抵其

る。此等の性質には色々あるであらうが、中には潜在でた

はれて何かのわざをなし、實際生育を幾分妨げてをるやうなものもある。そこへ違つた系統と雜婚を行ふと、系統が違ふから自然同じ缺陷が出會はす事はなくて、缺陷を互に補ふやうな結果になるから、雜種第一代が特に勢よく育つと云ふ事になるのだと云ふ說明である。これで此現象の全部が說明が出來るかどうか疑はしいが、少くも一部の說明になるには相違なからう。

今一の雜婚による著しい結果は、其子孫に於て新しい變りものが出來ると云ふ事である。尤も嚴密に云へば全く新しいものが現れるのではなく、今迄あつたものの新しい組合せが出來ると云ふ譯である。例へばモルモットで毛の黑いそして滑かな品種と毛の白いそして粗い品種とかけ合はせると、黑と粗はそれぞれ白と滑に對してメンデリズムで云ふ優性であるから、雜種の第一代は毛が黑くて粗い。それから此雜種第一代の雌雄から第二代を得ると、第一代と同じい黑粗と親の代と同じい白粗と黑滑とそれから白滑と都合四通りできる。此中で黑粗と白滑とは初めはなかつた新しい組合せである。

これは一番簡單な場合を例に取つたのであるが、かやうに對をなす

らう。又良い性質のみの組合せも出來る筈である。此良い性質の組合せを持つたものを取つて其中で近親婚をやり、惡いものを遠く淘汰して良い性質を純粹にすると云ふ方法を取れば、終には理想に近い品種を得る事になるのである。昔より多くの優良な家畜や作物の品種が作られたのは大抵此法によつたのであつて、牛馬豚鷄等盡くさうである。殊に犬などは世界の至る所の犬に似た動物、例へばアジアの狼、ヨーロッパのジャッカル、オーストラリアのヂンゴ、アメリカのコヨート等と雜婚した結果、今日の種々の特徴ある品種が出來上つたやうである。即ち雜婚は近親婚と相俟つて現在ある重要な家畜や作物の諸々の品種を造り出す最も大切な方法であつた事疑ひない。

（二）

次に特に人類に於ける雜婚に就て述べる。

有史以前の事は暫く措くとしても、有史以後にも人種の間には盛んな雜婚があつた。殊に激しい戰爭の後など征服者と被征服者との間に盛んな雜婚があつた事は歷史に明かな事である。今日の歐洲人にしても、例へばイギリス人ドイツ人イタリア人などと云つたところで、決して純粹な一つの民族ではなく色々の人種の混血である事牛や豚と更に變りがない。けれども此頃交通が開け往來が便利になつたため、違つた民族の間の雜婚が大に盛になつて來た。殊にアメリカ全土、アフリカの一部等では從來曾てなかつた程度の大規模の しかも甚だ異なる人種間の雜交が行はれてゐる。これに[illegible]場合にこう判斷してよいか、[illegible]云ふやうな[illegible]に見て[illegible]結果になるか、どの程度の利害があるかと云ふ點について確かな事が一向未だ分つてゐない。それで本來ならば此問題に就ては生物學者が指導的の發言者であるべきところを、其間に意見が區々であるので、現在の處此重要な生物學的の問題が專ら政治的經濟的若しくは常識的に取扱はれて居る狀態である。

人類の中にある種々の品種即ち人種間の雜婚はいかなる組合せでも雜種の生殖力に影響がない。白人と黑人との雜種ミュラットーは生殖力が劣つてをると云ふ說もあつたが誤りのやうである。此事が人類が皆同じホモ・サピエンスと云ふ生物學上の種に屬するとされる主なる理由である。

次に雜種の發育が親の品種より優つてをると云ふ事實が人類にもあるかと云ふに、アフリカ南部のボア人とホッテントットとの雜種、カナダの白人とインヂアンとの雜種、ハワイのハワイ人と支那人との雜種は或は身長體格に於て原種の何れよりも何程か優り、又は優らずとも可なり優秀な雜種を生ずると云ふ。其他に人類では雜種の體格の原種のどちらに比べてもよいと云ふ例はあまりないやうである。

世界の交通が開けて以來、地球上の至る處で未開人が白人の壓迫を受けたので、そのために既に絕滅した人種もあり、又絕滅に近くなつた人種もある。かく餘り力の違つた二つの人種[illegible]

一方が一方を滅ぼすやうな結果になつてゐる。然し稀には兩者が雜婚し、其混血兒が一團をなして、割合に事なく平和に暮して居る處もある。オーストラリアと南米との丁度中間の太平洋上の孤島ピトケルン島の現住民、南西アフリカの元獨領であつたレホボートと云ふ一地方の現住民等此例である。

　ピトケルン島の現住民は今より百餘年前こゝに少數の英國の水夫等がポリネシアの土人と共に移住したものの子孫である。それは一七八八年の事、元キャピテン・クックと世界週遊を共にした事のあるジョン・ブライと云ふ男が英國政府から「バウンチイ」と云ふ船に長としてタヒチ島に赴き、そこにあるパンの樹を西印度に移すやうに命ぜられた。處が此男は部下に酷であつたので水夫等に惡まれ、途中十八人の部下と共に其船のランチに移乘させられ、彼等は之を海中に棄てたまゝ船をタヒチに返してしまつた。不幸なる船長等はそれよりあらゆる困難と戰つて洋上に漂ふ事三ケ月の後終に幸にも三千六百餘哩を隔てたチモル島に着き、其由を官に訴へ出たのであつた。そこで英國政府は軍艦を派して謀叛水夫共を捕へやうとし、其一部をタヒチでつかまへて處罰した。處が殘りの仲間なる首魁と九人の水夫は土人の六人の男と十二人の女をつれて、いち早くそれより稍離れたピトケルン島に遁げてしまつた。その後二十餘年彼等の消息は絶えて知るよしもなかつたが、一八〇八年米國の一海豹船が此島を訪れた時、當時の仲間の中の唯一の生存者ジョン・アダムスと云ふが、八九人の女と多くの子供を連れて出て來たので、始めて彼等の消息が分り、又此男の口から過去二十年間の島の歴史が物語られたのであつた。即ち彼等が其島に移つて後、暫くは仲間に種々の論爭が起り無秩序狀態が續いたが、遂に此アダムスが彼等の間に道德と宗教を教へたので、皆おとなしくなり、それから全島に平和の日が來たと云ふ。その後七年して「ブリテン」と名づくる船が此島を訪れた時には、其船長は此島民の蕩々として太平を樂しんでゐる如き樣にひどく感服した。一八五五年には島の住民は增して二百となり、長さ二哩幅一哩の小島が狹過ぎるやうになつたので、住民の一部は西方に離れたノーフオーク島に移住した。今ピトケルン島には百二三十人の人が住み、ノーフオーク島には一九〇一年の調査で八百七十の人口が居るが、多くは此ピトケルン島に渡つた初め數人の英國の船夫と土人の女とからなつた一群の子孫であると云ふ。

　南西アフリカのレホボートと云ふ一地方のボア人とホッテントットとの混血種の先祖は昔英國の政治に厭きたらぬボア人たちが、深く土人の中に入り込んで彼等と同化したものから起つたものである。彼等の子孫は其中に白人の優等な血が混じてゐる事に誇りを感じ、近傍の土人と緣組せず又純歐人たちとも別になつて、幾代も經た。其後此地がドイツ領となるや、彼等の所在がドイツ人に見出され、フヰツシヤーと云ふ學者が自ら往つて彼等を研究したのであつた。此人の報告によると彼等は強健な體格を有し、又盛んな繁殖力を持つてゐるが、其仲間に毛の形、眼や皮膚の色、骨骼などにいろいろの變化があつて、

いかにも人間の精神の試驗の結果として面白いものであると云ふか。

（三）

比較的優等な人種と劣等な人種との混血が最も盛んに行はれつゝあるのは云ふ迄もなく過去並に現在のアメリカである。白人と黑人の雜婚の結果を見ると、色でも體格でも又精神的の特徴でも白黑の中間になり、其次の代になると種々の程度の差違のものを生ずるやうである。そして第一代の雜種に特に精力の盛んなものを生ずると云ふやうな事はあまりないやうである。精神上の能力に就ては公平な眼から見て黑人は白人よりも劣等であるが、雜種は大抵純粹の黑人よりは優れた才能を持つてをる。黑人の中より出で名を成すやうになつた人々は大抵混血兒であり、又黑人の共和國なるハイチ等で見ても政府等で重い地位に上るのは殆んど皆混血兒でしかも黑人の血の少いものである。それから此黑白の血を交へるものには性格の統一の缺けてをるものが多いと云ふが、これは全く其雜種であるためであると云はれる。

馬と驢馬との雜種の騾に生殖力がないのは、其卵や精子の生ずべき時に、兩種の染色體の狀態に不調和の點があるため、性細胞が出來ぬためである。餘り離れた種と種との間の雜種等に生殖力がないのは大抵このやうな理由によるやうである。又牛と野牛卽ちバイゾンとの雜婚では姙娠中に羊水が多く出來過ぎて分娩を困難にする。又殊に雄の子の頭の形が生れる事をむづかしくする。そのため雄の子は特に死產が多いと云ふ。此等に自然に起つた雜種の[illegible]雜婚によつて父母の種の色々の性質の種々の組合せが出來るが、其中には甲乙相調和せぬやうな組合せも出來る。今のは此例であるが、なほ一二の例を擧げると、雞のレグホンは卵を良く產む品種であるが、卵を孵す事をしない。ブラマは卵を孵し雛を育てる性がある。此レグホンとブラマとの雜種は卵を產んで孵しはするが、雛を世話する事をせぬので雛が凍えて死ぬと云ふ。犬のコリーと名づける品種は羊等の番をする犬である、又フオックス・テリアは獵犬で獸を殺す性がある。此雜種は此番をすると殺すと反對の性質が兩方傳はるため、二つの間に矛盾が起つてどちらの目的にも適せぬものになる。人間の雜種にもかう云ふ事があつて、例へば齒の大さと顎骨の大さとが不調和になり、齒並が惡くなる事がある。或は內臟と身體との大さの比例がとれないために、見かけ倒しのひよわい體になる程の事がある。たゞ體格の上に不調和が起るばかりでなく、性格にも之が起る。黑人と白人との混血兒の或者は白人の野望と黑人の無能とを併有してをる。そして徒に志のみ大きくして實行力が之に伴はず、そのため失望と焦燥の中に日を送つて、或は不逞の徒となり犯罪者となるものが少くない。之は正しく彼等の雜種である事から起る性格上に於ける不調和のためであると云ふ。云ふ迄もなく之は彼等が混血兒である事のために、社會から受ける種々の差別待遇からも起る事であるに違ひないが、今云つたやうな事も亦必ずしも奇矯のみでない一つの面白い見方で[illegible]

アメリカ勞働階級の政治行動

佐佐弘雄

緒言

アメリカに於て、従來とても、勞働階級の政治行動は決して輕視すべき程度のものではなかつたし、獨立勞働政黨の企ても幾度か繰返されたのである。譬へば組合運動者がその經濟鬪爭の爲に政治運動を試みるとか、又は社會主義者が社會黨を組織してアヂテーションをするとかその例に乏しくない。けれども今日に到る迄全國的勞働黨の基礎が確立してゐないのは、一面云ふ迄もなく資本主義の絶えざる進展とその攻勢に歸すべきであるが、他面その政治運動の內在的缺陷に求められねばならない。

組合運動者のそれが如何にオツポテユニズムに墮してゐたか、又その他の急進的運動が啓蒙時代を脱し切つてゐなかつたか、そしてこの運動內部の事情が如何に獨立勞働政黨の成立を妨げ來つたかをその歷史的經過に就いて概觀し度い。而して此の失敗の蔭に勞働獨立政黨への要望が幾度か埋沒されつゝも、日々にその新たなる復活を熱望したかを歷史は物語つてゐる。

日常生活の緊急必要の充足の爲は勿論、その解放途上の指南車として獨立勞働政黨を翹望しつゝあるところのアメリカ勞働階級が如何なる段階を經過しつゝあるかを更に叙し度いと思ふ。ゴムパース既になく、「不拔の勇氣と献身的誠實の龜鑑」であるところのデブスが一九二六年十月廿日に、更にルッテンベルグが一九二七年三月二日病歿して、功績多き古き指導者が各羽翼に於て失はれた今日、その歷史を叙して現段階に及ぶのも或は時期を得たものであらう。殊に大統領選擧を前にし、苦境時代に沈潛しつゝある米國勞働階級は資本の攻勢の直面に於て、分裂の弊に悩み、統一的組織の缺除に苦しむでゐる。單一無產政黨が中心題目となりつゝある日本の現狀と對比考究するも讀者の一興味であらう。

吾人は歷史的に勞働組合運動の各時代に於て、幾多の罷業その他の情勢の下にそれがいかなる政治行動を執り來つたかを看、且つそれに相呼應するところの各時代のイデオロギーの變遷を略記して、最後

に直接に政治組織に依る政治行動の研究を試み度いと思ふ。換言すれば、政治行動を中心として見たる米國勞働階級の各般の運動を叙述することにする。

一、米國勞働組合運動の初期

「米國勞働者政策」の中にコーヘンが云つてゐる樣にソレル流のサンデイカリストが「法律並に秩序」と云ふ詞を資本家が無産者を奴隷とする爲めの好辭柄だと見てゐるのは必ずしも正當ではない。社會の改造、又は革命運動には各時代に種々の傾向が存在したことは歷史の示すところである。サンデイカリストの態度もある一定の限度に於て存在の理由があると同時に所謂「法律並に秩序」を看板に出してゐる漸進運動も歷史的の一段楷として必要とされたことは否み難い。サンデイカリストは「法律並びに秩序」を極端に排斥してゐるけれども其の目指す所とて、彼等の云ふ眞の法律並に秩序の世界を所謂「法律並びに秩序」の世界の廢墟の上に打建てんとするにある。

勞働組合運動は日常經濟鬪爭の組織として漸進的であり、保守的である傾向がある。其の運動にはサンデイカリストの「行卽法」の主張の如き天才的閃きもなければ、又社會主義運動の如きイデオロギーの絢爛さもない。けれども其の主要なる特徴たる勞働階級の生活經驗より得たる自己救濟の團結運動であると云ふ點を顧るならば此の運動が日常要求、經濟鬪爭に如何なる貢献をなしつゝあるかについて、その重大さを否定し得ないと同時に、寧ろ其處にそれが米國勞働階級のあらゆる運動の根幹源泉であること、延いてはその政治行動の根幹、原動力であることを思はざるを得ない

故に吾人は米國勞働階級を論ずるに先だつて、否その叙述に入るの順序として勞働組合運動の記述から始めるであらう。米國に於ける勞働組合運動は惟ふにこれを三期に區分することが出來る。第一が一七七〇年から一八六〇年に至る間で、第二は一八六〇年から一九一九年に至る迄である。而して一九二〇年以後の時代を第三期と名づけ度いと思ふ。

一七七六年には紐育印刷工がストライキの爲め一時的の同盟を結んだ。これ此種の運動の先驅である。一七九二年にフィラデルフィアの靴工の團體、其他紐育ワシントンの印刷工組合等があつた。一八二七年にフィラデルフィヤに機械工組合が起り一年位繼續した。一八二九年には勞働組合の十時間勞働制に關して政治運動が勃興して來たが一八三四年他の政黨が十時間制に贊成するに至つて自然その運動は消滅した。一八三三年には紐育一般勞働組合が政治不關與を標榜して成立した。それと前後して大西洋岸の各都市に組合の成立頻々たるものがあつた。一八三四年に至つて地方的の諸組合が全國的の組合を作つたが二年位續いた許りである。斯くの如く第一期に於ては勞働組合運動は頗る斷片的であつて、時間的に云つても極く一時的のものに過ぎない。組合の必要があつてもそれほど切實でないため永續的性質のもの

に乏しく、多くはその時期の一時的社會的事情に依つて興亡する有樣であつた。

二、A・F・of L・の成立並にその政治政策

勞働組合運動は第二の時期に入つて始めて組合運動の體裁を具備して來たと云つてよかろう。一八六〇年を期して全國的勞働組合が相繼いで興起したのである。一八六三年には機關工組合、一八六四年には煙草職工組合、一八六五年には煉瓦積立工組合、石工組合等皆全國的性質の組合である。一八六六年には八時間制を主張することを主要目的として全國勞働組合成立し一八七二年迄繼續し此年農夫組合と提携して大統領候補を指名するなど政治運動を始めたが之れが禍因をなして遙かに瓦壞の運命に瀕し、後永く組合の不關與政策の原因を爲したのである。八時間制は一八六六年議會を通過したが大の年に幾分修正されて舊制をも許すこととしたので其の効力は薄いものになつた。此時代に「クリスピン騎士團」なる團體が起つたが餘り重要なものではなく、それよりも一八六九年に成立し一八七一年に勞働騎士團と稱したところの團體は一八八六年頃には七十萬餘の會員を擁して米國最大の組合であつた。産業本位であつて、

國の組合の總同盟を作つた。是れが後年彼の有名な國勞働總同盟の前身をなす所のものである。

一八八六年にA・F・of L・と云ふ名稱をとるに至つたのであるが一八八一年を第一回總會として爾來連綿として今日に及んでゐる。一九一八年の調査に依ると、同聯盟は約二七三萬の組合員を包括するのであるから世界有數の組合といはねばならぬ。その根本的の態度は「勞働に對する正當なる報酬を得しめ、以て生活の安定を確保する」にあるものであつて、決して勞働騎士團の如く賃銀制度廢止といふ樣な近世的な急進的なものではないのである。卽ち職業本位の組合の總聯盟である。唯例外として鑛山勞働者聯合組合の如き産業別組合も加入してゐるが、大部分は皆職業別である。

米國勞働總聯盟は整然として一糸亂れざる組織を有してゐる。本部をワシントンに置き會長一人、副會長八人、其他、國に譬へれば内閣ともいふべき理事會がある。而して本部の事務は數多の局課に依つて行はれ其の機關雜誌としては〝American Federationist News〟〝Letters〟などを有してゐる。

聯盟を構成する組合の大體の組織を説明すると、先づ地理的區分に

千七百五十五に及んでゐる。其他ある地方で同一職業に從事する者の十一人以上の團結を支部と稱し、又一地方で同一職業に從事する者が十一人に達せぬ場合は他の職業に從事するものを交へたる團體を聯合勞働組合と稱して共に聯盟の例外的構成要素として州組合全國的組合國際的組合と併立せしめてゐる。其數は八百五十四に上つてゐる。此等は一九一八年の調査に依るものである。

米國勞働組合の運動はA・F・of L・に盡きてゐるといつても過言でないと一般に信ぜられてゐる程、その勢力は優越的のものである。と云つても、同聯盟に加入しない組合が皆無といふわけでもない。例へば七萬二千人の組合員を有してゐる機關手組合の如き、又は四萬九千人を有する鐵道經營團、九萬人を有する火夫、機關士組合、十三萬五千人の多きを包含する鐵道乘務員組合等は加入せぬ中の主なるものであつて、その勢力も決して輕視すべきものでない事、固より謂ふを俟たない。

A・F・of L・は從來の歴史が示す様に、組合の政治運動が多くの場合失敗であり、剰へ組合そのものの瓦解をさへ招致したといふ事實に深く鑑みる所あつて、その根本政策として政治不干渉主義を採つたのである。政治不干渉の政策はその傳統的の原則であつて、同會の創立以來の會長であるゴムパースの如き同會幹部連の堅く執つて動かぬ所である。マロット女史が其の著「米國勞働組合」の中に云つてゐる様に、總同盟が政治不關與の原則を固執するのは「政治的活動は其の本質に[illegible]政治に於ける勢力を得[illegible]に於て、[illegible]がある爲で政爭が黨の一致團結に害あるは[illegible]である[illegible]う。然し乍ら同會は必要の生じた場合と雖も絶對不作爲の態度を採るものではない。一九〇三年にはレーヴェ會社といふ帽子製造會社が他の組合と同様に北米帽子勞働者合同組合の原則である所の「同組合員以外から勞働者を雇ひ入るゝことを得ず」「組合の定めたる標章を會社の商品に付すべし」といふ二ケ條を否定した事に起因して、同組合の激烈なボイコットが勃發した。此問題は一九〇八年二月三日の高等法院の判決によつて始めて解決されたのである。此の判決の趣旨は組合のボイコットを以て、一八九〇年のシャーマンのトラスト禁止法案中に規定してある營業妨害の一種であるとし、不法行爲として損害賠償の責任を組合に負はしむるにあつた。

一九〇六年には同様の爭議がブックス・ストーヴ會社で勃發しその解決は同様の結果に終つた。斯くの如き適用は罷業を不可能ならしめ、組合の根本的立場を失はしむるところの卑劣なる壓迫方法であつて、いかなる政治的手段によつてでもその撤回をはかる可きことを痛感せしむるに至つた。云ふまでもなく此の解決は痛く米國全勞働組合を刺戟し、勞働總聯合の如きはゴムパースを先登に必死の運動を試みたのである。此の運動はインヂャンクションの廢止と云ふ標語に依つて導かれた。インヂャンクションとは裁判所が營業妨害の行爲を豫め禁止するの判決處分であつて、上述の場合の如きも勿論組合に向つて

先づインジヤンクシヨンが發行されたのである。一九〇八年の大統領選擧に於てゴムパースは此の運動に甚き同情のある民主黨候補ブライアンを援助したのであるが勝利者たるタフトも大いに努むるところがあつた。然し一九一二年にゴムパースなどが極力支持した民主黨候補ウイルソンが大統領に就任しその盡力で、一九一四年クレートン・アクト(Clayton Act)が下院を通過した時初めて此の運動の目的を達することが出來たのである。此法案は勞働者の組合はトラスト禁止法の適用を受けざるものであつて、同法の下に營業を妨害する不法なる團結なりとの解釋を受くることなく更にインヂヤンクシヨンの使用を大いに制限せんことをその要旨としたのである。けれどもA・F・of L・のこの政治運動の意味はマロツトの云つた如く普通の政黨に勸說してその候補者名簿に議會への代表者として聯盟の會員を指名せんことを要求すると云ふ風に間接的方法に依つたものである。一九〇六年から一九一〇年に至る間に此方法で十人の代議士を議會に送ることが出來たけれども其の間接政治政策の不徹底に對する批難は社會黨は勿論聯盟内部にも絕ゆることがなかつた。然し聯盟幹部はその態度に變更を加へるの意思は毫も持つてゐない。例へば一九一二年の總會でゴムパースは教書を發して

ことから始めねばならぬ、と主張しつゞけてゐ同樣のことを一九一三年に決議してゐる。同じ勞働組合でも一九〇五年成立したI・W・W・(世界工業勞働者組合)の如きは賃銀制度廢止不熟練工糾合を標榜して直接行動主義により、時には成功し一九一二年のローレンスのストライキには宜くその勝利を獲得したのである。而し乍らかゝるサンヂイカリストの組合が大衆的、永續的大組合たり得る筈はなく不斷の壓迫のもとに少數者の集團としてとゞまつた。

當時に於けるA・F・of L・の政治不關與の態度は全國的組合組織の成長の爲めに蓋し已むを得ざるものであつたらう。罷業に際しても本部はその救助を必要とするが、事實本部には充分の資金なく、必要な場合別途會費の徵收若くは鬪爭に參與してゐない組合の義俠的寄附で調達する限度であつたから、大規模に政治行動を起し得なかつたのである。

一九〇二年ペンシルバニアに於ける炭坑夫の罷業(十五萬人參加六ケ月繼續)一九〇五年賃金引下げに對し再び四十五萬人が六週間も罷業してゐる。一九一三年から一九一四年にかけてコロラド炭坑夫はロックフエラーと對抗してゐる。一九一七、一九一八年戰爭中もI・W・W・

最大のものとする。六時間勞働と[illegible]の賃銀を要求して、三十萬人約一ヶ月以上の罷業を斷行した。[illegible]の火夫等も罷業するに到つた。坑夫も同樣の要求を提げて之に次で起ち參加者七十萬人一週間繼續した。これ等主なる罷業の外、大罷業七十件に及び一九一九年の罷業總數三、三七四件に上り、その件數は一九一六年の三、七八九件一九一七年の四、四五〇件、一九一八年の三、三三七件に比し増加とは云へないが大規模のもの多く、内二、四九三件丈けでも四百十一萬人を超ゆる參加者を數へてゐる。此等の罷業は戰爭に依る動搖、資本家の莫大な利益、生活必需品の騰貴並びに組合の威力の増大等がその原因である。政府の統計に依ると工場勞働者の年收平均一九一八年に一・〇七八・弗から週平均二〇・七三弗であつたのが、一九二〇年には年收一・三六七・弗週收二六・三〇弗（一九二一年不況時代に入り週收二〇・弗）となるであるから一見これ等の罷業が不當であるが如くであるが、一九一三年から一九一九年に亘る賃銀の増加率は五五%だのに生活必需品は一〇四%の増加率を示してゐる。故に實際の賃銀は一九一三年より低下してゐる。一九一九年の賃銀年收一・三六七・なる係數は單に數字上の増加に過ぎない。合衆國勞働統計局は同一家族が相當な生活を維持する爲に年收二・二六二・弗强、週收四三・弗半を必要とすと發表してゐるから、それよりも九〇〇弗少く、不相當な生活に甘んじねばならない譯である。

三、共同戰線、組合統一の時代。

A・F・of L・は一九一九年の六月七日から廿四日の間行はれた會議に於て「改造綱領」を採用し「平和的基礎に立て國民生活の改造の時期」に際して最も完全な提案として産業的デモクラシー、公共、半公共物の官有等を主張したのであるが、肝要な政治行動については從來の傳統を捨て得ず、自己自身の政黨に就てのアメリカ組織勞働者の苦き經驗は政治不關與政策を是認するものであると宣言してゐる。この大衆的政治行動の缺除、政治組織の不整備が頻々たる罷業を有力に解決し得ない重大な原因である事は否み難い。故にその政治行動とは單に會長ゴムパースが大統領ウイルソンと個人的に、且つ秘密裡に交渉するとか、中央委員に「大統領の希望——とはストライキを欲せぬことであるが（筆者）——と一致すべく努力す可き」事を命令する以上のものではあり得ないのである。

スティール・ストライキは斯の如き原因に生起し、斯の如き條件の下に進行したる不幸なる失敗に外ならなかつたが、然し乍らそれに依つて得たる教訓は多大であつたことを史家は指摘してゐる。その主なるものの一は支配階級は重工業、その他基礎的の工業に勞働組合を組織せんとする運動に對して、あらゆる手段を盡して之が絶滅を計るを如實に示したといふ事である。第二にはローヴストーンも指摘してゐる通り、不熟練勞働者の大衆を組織して[illegible]

不可能であるとか、又はその大部分は外國生れであり、それだから之等の大衆は永久に企業主の奴隷的道具として甘んじ米國生れの勞働者の賃銀を引下げ勞働條件を低下せしむるものであるとかいふ從來の見解が誤謬であつたことを明瞭に證據立てたものである。

その得たる教訓がいかなるものであつたに拘らずこれを轉期として鋼鐵トラストは勞働者に對して猛然攻撃に移つた。工場主協會その他雇主の團體は「勞働組合を斃せ！」「工場、産業に對するアメリカの計劃萬歲！」等々のスローガンが喧傳されたのである。此の攻勢はいかにして可能であつたか。それは經濟上の諸條件が有利であつたからである。戰時中多大の收益を得て組織勞働者に對する鬪爭に於て基金に事缺くことがない。又資本家が政治的に進出し、政府が大企業家、トラスト、諸協會の手中に完全に歸したこと合衆國の史上空前であつた。且又戰時中徵募された軍隊が復員され數百萬の兵士はその從來の勞働に從事する爲に工場に復歸したり、外國市場に於ける米國品の需要減じ米國の輸出は根本的に減退し一〇一億弗（一九二〇—一九二一）から六三億弗（一九二一—一九二二）に減退したゝめ、失業者は增大せざるを得ず數百萬の賃銀勞働者が市場に溢るゝ結果となつた。此等の諸條件は資本家の攻撃の好機會でなければならぬ。これに對して舊來の指導者は機會主義的な政策を依然として採用してゐるのでこの攻撃に耐へ可くもない。ニューヨーク州の工業委員會の調査に據ると（一千六百餘の營造物に就いて）一九二〇年に比し一九二一年は二〇%だけ賃銀低下し、ウイスコンシン州の調査では四五%低下、その他の州に於て甚しきは七五%低下せしめらるゝに至つた。反之資本家側の利益は譬へば米國電話電信會社では五千二百萬弗に近き前年收益に對し一九二一年は五千四百萬弗を超えてゐる。米國羊毛會社では純益四百六十萬弗餘の前年度の成績に比し一九二一年は六百萬弗を超えてゐる。而も資本の攻撃は無遠慮に行はれ頻々たる爭議が勃發するに至つたのである。一九二〇年には西ヴアジニアの坑夫が鑛山勞働者聯盟へ加入する爲め鑛主並に政府の反對に會して鬪爭を開始してゐる。全鑛區に亘つて戒嚴令が布かれ流血の慘事をすら見るに至つた。鐵道從業員の組合幹部の意に反した非公法的能業が行はれた。斯くて一九二二年の恐慌が治まり未曾有の激甚な階級鬪爭」（Lovestoneの言葉）が展開されたが、これに對するA・F・of L・の指導者は、「雇主等と共に卓を圍んで熟議」するに過ぎないで、却つて勞働者の團結を弱め、その抵抗力を減じたと非難される狀態であつた。資本家達は公然とその目的と希望を公示してアメリカ産業界より組合を驅逐し去るにありと謂ひ、合衆國商業會議所は四に對する一、六七六票の多數で、團結權を否定し「勞働者、資本家が相互にその勞働條件を決定することは契約自由の個人權の重大な本質である云々」と云ふ決議を決定してゐる。雇主の強固な團結が企圖され組合は猛烈な切崩しを蒙むつた。例へば國際海員組合は十一萬五千（一九二〇）から五萬人（一九二一）に、A・F・of L・は七〇萬を減じると云ふ有樣であつた。

その他國際印刷組合は一九二一年五月一日罷業を起しその經濟的損失一千萬弗であつた。結果は組合の徹底的勝利とまで行かなかつたが資[illegible]度組合の現狀破壞の企圖を喰ひとめ得たのである。顔料工業の勞働者が一九二一年五月五日組合擁護と賃銀低下阻止の爲めストライキを起したが會社側はボス等をして「會社御用組合」を組織せしめ一時間八、五仙の賃銀低下を提案し承諾せしめると云ふ狡猾な手段をとつた。政府の調停局が低下を認可せずその仲裁に委す可く要求したが會社側反對し、ストライキは永續し勞働者側の敗北に歸した。同年八月にはニユー・イングランドの織物業者は二〇%の賃銀低下を敢行したが組合組織なきため終に屈服するの外はなかつた。

此等の諸ストライキの内注目す可き二個のストライキに就き其の大要を記して、鬪爭の尖銳化並にその變質が一時期を組合運動に劃す可き所以を明白にしよう。其の一つはウエスト・ヴアジニア並にウスタアン・ペンシルヴアニアの十萬の未組織勞働者と鑛山勞働組合五〇萬人の參加せる大罷業であり、他の一つはパツサイク(Passaic)の紡織業勞働者の罷業である。前者はその强暴性に於て後者はその性質の特異性に依つて重要視せらるる。

前者は一九二二年に二年間の契約更新の時期到來し二五、乃至三五%の賃銀切下げを資本家側が主張したるに端を發するのである。數百萬の失業者をして罷業破りをするとの可能性、並に過剩の貯藏炭があつたのでこれによつて市價を保持し得る事情にあつたため斷然攻勢に出たのである。ペンシルヴアニアのスプルール(Sproul)知事は[illegible]官に命令して「未然に反亂を鎭壓す可し」と言つた。六月に[illegible]實あり多數勞働者に負傷者を出してゐる。勞働者側が却つて二[illegible]の賃銀增加を要求し、瀝青炭と無煙炭區兩者一致せる承諾を必要とする旨を主張した。(此事は共同ストライキとして組織し勝利を確保するに肝要である。)都鄙共に戒嚴令下に置かれた勞働者、家族、小供等は襲擊、强迫、毆打さるゝに至つた。殊に南部イリノイス石炭會社に依り武力に依り罷業破りが敢行され二名の組合員が殺戮され、これに對し組合側が炭鑛を包圍し一九名の會社側の死者を生じた。陪審官は「直接間接に會社役員に責任あり」と宣したが、會社側は「復讐」を叫んで起ち、イリノイス商業會議所は會員から一〇萬弗を集め、二百十四人の罷業者逮捕され、殺人罪をもつて問罪されハーディング大統領は右會議所あてに「良心が今やその主張をなし」得るを悅ぶと祝電を打つと云ふ戰爭の樣な騷ぎとなつたのである。ハーディングは政府の軍隊を以て罷業を破碎せんことを望んでゐたがこのことは失敗に終つた。而し彼は二八州の知事に失業者を充分に保護して炭坑を開くべきことを訓令してゐる。スプルール知事は千百人の兵を、インデアナのマクノレー知事は千人の兵を動員してゐる。勞働者は「貴下は銃劍を以て採炭するを得ず」と宣言し最後まで武力に對抗した。家族は既に飢餓に瀕したが異常なる鬪志が勞働者を驅り立てたのである。八月に至り鑛夫聯盟會長レウイスの提議に依つて瀝青炭側分離して一九二[illegible]

終にストライキを終つた。取殘された無煙炭側は尚五ヶ月繼續の後同年八月協定した。賃銀低下は免れたが指導者の指導精神に對する信賴は地を拂ふたのである。況んや此の罷業に參加した一〇萬の未組織の鑛夫、それは鑛夫聯盟に加入を熱望してゐたのだが、指導者に依つて忘れられ(= forgotten)ると云ふ目に合ひ數ヶ月の鬪爭の後レウイス等に依り組合の援助の繼續不能の故を以て直ちに從業す可き旨をすすめられ終に屈服するの外はなかつた。此の罷業に前後して鐵道實子五〇萬人のストライキ(一九二二年)は一九二五年終末を公式に發表されてゐる。この敗北の原因も會社政府の結合、組合組織の缺除、A・F・of L・の全部的支持の拒絕等が原因してゐる。

此の強暴なる戰爭にも類する鬪爭は、そしてその鬪爭に現はれた諸條件は組合運動の新展開の原因となつた。第三者としての政府に對する信賴の失墜は云ふ迄もないが、舊組合指導者の機會主義が實質的に罷業者の實踐と背馳して來たことを意味する。A・F・of L・は嘗へその組織下の勞働者に對しては不滿足乍らある程度の要求を充すことが可能であるとしても未組織大衆の、更に又失業群の何等の救援たり得ざることを暴露したのである。然らば勇敢なるラディカリストI・W・W・はどうであるか。I・W・W・の迫害は戰後もなほ引續いて行はし

るを得ず、力と非合法的手段を採ると同時に

彈壓を下しストライキは必ず壞滅すること經驗の教ふるところで

る、而して第三に此組合の目的とする建設的事業の志向をかゝる手段は破壞するからであると假面もなく附加してゐる。斯くて其れは理論的瓦解と機會主義への完全な降服を意味する。「建設的の事業」を資本主義制度に於て行ひ「舊套の裡に新社會を構成する」ことを目的とするに至つた。四百七十八萬(一九二〇年)の組合員が減じたりとも尚二百九十萬(一九二三年)を維持するA・F・of L・は實勢力の把持者である。然るにI・W・W・の如き量的に貧弱なる組合の而も此處に理論的に無意味に歸したのは、云ふ迄もなく勞働大衆の指導力の皆無となりしを物語る。A・F・of L・の如き大組織、I・W・W・の如き戰鬪的組合、共にその存在理由を單に歷史的意義に見出すの外なしと痛罵するものさへある。

パッサイクの纖維工業勞働者の罷業が大衆から深甚な注目を受けたのは、かゝる組合の現狀に當つて、その指導並に戰術の特異性が一つの刺戟性をもつてゐたからである。

パッサイクは典型的な新織業都市であつて、工場の所有者が都市並

るに至つた。一〇％の賃銀増加、週四十四時間、組合の承認等が勞働者側に要求して起ち婦人小供も示威に加はる秩序整然たる罷業であつた。全國的に金、生活資料の救援が行はれた。そのスローガンは「ボスの共同戰線に對する勞働者の共同戰線」であつて、紡織業勞働組合を通してA・F・of L・への加入、並に全紡織業勞働者の結成を目的としたものであつた。此罷業は一九二六年十二月に勞働者の勝利に歸し(1)合法的組合組織結成權(2)苦情あるときは團體交渉の權(3)閉出しをせぬ(4)問題につき双方一致せぬときは工場側、勞働者第三者の協議に委し勞働者は依然從業す等根本的要求を貫徹してゐる。僅か一萬六千人の罷業であつたが共産主義者によつて指導され、共同戰線の標語で且つそれが成功したことが注目に價するのである。A・F・of L・は初め此罷業との無關係を表明したのであるが、共産派の罷業指導者ワイズボード（Weisbord. R.）の指導權拋棄を條件として終にこれを支持し、U. T. W（合同紡織業勞働組合）への加入引いてはA・F・of L・への加入が實現されたのである。

一九二〇年以後が爭議の酷烈さに於て、而して又、A・F・of L・の指導精神が指導力を失ひ何等か新たなる方向の發見が努力されつゝある點に於て一時期を劃するものである。殊にパッサイクのそれの如く未組織の勞働大衆が既成組合の外に於て——既成組合内に於ても決して滿足す可き狀況にはないが——いかにその活路を見出す可きであらうか。既成組合の指導が彼等の不滿足の原因であることは云ふ迄もない。然らばこれに代る新しき指導勢力が生起しつゝあるであらうか。パッサイクは確かに期待す可き罷業であるが、然し乍らこれを以て直ちに共産系指導權の確立と云ひ得可きほどにしかく、重大なるものであるとは推測し得ない。組合の一大共同戰線を政治運動に於ける獨立勞働政黨の樹立と共に主張するは正しい。併し乍らこのスローガンの正しさは直ちに指導者の實踐の正當さを意味するものではない。そのスローガンが達成されるが爲めには、客觀的諸條件の把握をその實踐が意味してゐなければ不可能事である。その所謂實踐が客觀的諸條件の獲得と乖離する場合、近くは、I、W・W・の覆轍があるではないか。

サッコ（Sacco, Nicola. 1891—1927）ヴアンセッティ（Vanzetti, Bartolomeo. 1888—1927）は此の時代の特長を物語る最近の一事件である。ニュー、イングランド地方の指導者であるが嘗つて外國無政府主義者として逮捕されたことがあるが殺人罪を以て一九二七年八月處刑せられた。「吾等二人が死ぬだけだ。而して、吾理想、汝等、吾同志は幾百萬となく生きる。」と悲壯な言葉を殘して死んでゐるが、その全國的助命運動これ亦一つの共同戰線問題として意味があつたのである。紐育のサッコ、ヴアンセッティ危急委員會（四〇萬の組織勞働者）ボストンの委員會（社會黨、A・F・of L・の指導者等）合法非合法の運動に手をつくしたのである。

此の鬪爭激化の情勢に於て、古き組合は滿身創痍を蒙むりつゝも兎も角その組織勞働者をある程度擁護し得たのである。併し乍ら四百萬

の組織勞働者數に比して組織可能の未組織勞働者は三千萬の多數あるところの米國に於て新局面の打開が強く翹望せられつゝあることは想像に難くない。アメリカ勞働組合教育聯盟T・U・E・Lはその一つの表現であらう。一九二〇年十一月創立されたのであるが、その主張は共産派從來の二重組合主義（dual Unionism）――既成組合に潜入して內部からこれを破壞すると共に外部に新組合を創設する――を拋つて、既成組合內部に協働して、これを産業的基礎の上に再建設する方針を執つてゐる。それは全勞働組合運動の進步的革命的要素の集團であつて組合組織ではない。一九二二年の宣言に依れば米國組合の赤色國際勞働組合への加入を主張してゐる。同年八月市俄古に於ける第一回の全國大會に於て米國、加奈陀の大工業中心から四十五人の代表者が來集してゐる。その主唱の要點は(1)既述した方針の外職業別組合の合同(2)獨立せる勞働階級の政黨組織(3)未組織勞働者の組織等である。シカゴのA・F・of L・が大合同贊成の決議を爲した外組合に對する影響は相當に多大であつた。既成組合との抗爭が發生す可きは云ふ迄もない。鑛山勞働者同盟のレイウスがT・U・E・Lは「A・F・of L・その他の組合を破壞し、米國の民主政府を捨て、米國の文化的組織を破壞し去らんとするものであると非難したのをキツカケに既成組合からの排除運動が起り、A・F・of L・も一九二三年の年次大會で共産系の代議員ダン（Dunne, W. F.）はグリーン（Green, W.）――一九二四年ゴムパースの後を襲つて、A・F・of L・の會長となる――のために放逐される有樣であつた。

米國勞働運動史の示す通り不況時代が來て資本の攻勢が始まるとストライキは破れ、組合は失望し、指導者は信望を失し唯屈服の一途が殘されてゐる。而して組織と鬪爭の代りに空想と危險な計劃のみが考へられるのが常である。戰線統一、組合合同の要求は此の弊を救ふ肝要な方法でなければならぬ。それは唯に共産系の獨占するところでなく、米國の進步的大衆、殊に未組織大衆の熱烈な願望である。米國勞働組合に依つて最近企てらるゝ勞働銀行（Labour Bank）又は勞働保險（Labour Insurance）の如きに多大の希望をつなぐものは、單に空中樓閣に住はんとするの愚に等しいであらうと識者は指摘してゐる。B・O・案は、バルテモアとオハイヨ鐵道に、始めて組合側の採用したものであるが、生産促進、浪費節約、生産費低下、利潤獲得の障碍となる好ましからぬ勞働者又は組合の勞働規則を廢止する使命をもつてゐる技師を組合が撰び組合の基礎を固くすることを目的とする。これは會社は勞働を供給する所の一種の企業組織に組合を變質せしむるものであるがグリーンを始めこれを支持してゐる。斯くの如きB・O案も一つのたちのわるい空想に過ぎない。況んや無組織大衆にとつては會社やボスよりも苦手に相違ないと推測される。

此の一九二〇年以後の不況時代に於て、此等の案が大衆の要望に合致す可しとは思はれない。舊組合指導者の指導權は失墜した。T・U・E・L・がこれに代る可く活躍してゐる。併し乍らどれだけの實力を

もう、客觀的諸條件を把握し、且つ大衆化し得るかは甚だ疑問と云はなければならぬ。

三千萬余の未組織にして、組織を熱望しつゝある大衆がそこにある。而して又組合大合同、勞働者戰線の大統一の目標がある。而してこれと不可分に獨立政治行動の主張がある。吾人は此處に一歩を進めて勞働運動内部に素材として横つてゐたところの政治行動への意慾が如何に組織化され具體化されたかに就いて項を改めて叙述を試みよう。

四、社會黨の成立と、統一勞働黨

政治運動の理論並にその開始は社會主義運動に始まる。社會主義運動は他の諸國の例に洩れず知識階級に依つて發達したものであつて組合運動との接觸は餘り密接ではなかつた。永く空想派社會主義の實驗場たるの觀を呈したのである。米國の經濟的豐富と政治的自由が比較的存在してゐたゝめ階級對立が餘り尖銳化されなかつたのである。工業發達し、土地の獨占が次第に急激に進むに從つて、十九世紀の後半は近世的社會主義の運動が勃興し來つた。一八六八年の「紐育及近郊社會黨」が恐らくその最初と見る可きものであろう。併し乍ら一八七四年成立したS・D・W・P(社會民主勞働黨)ほど注目す可きものでないことは云ふ迄もない。七七年に至つてS・L・P(社會勞働黨)と改稱し、社會主義の急激なる理論を主張し、大衆と隔絶し丁度組合運動に於ける勞働騎士團の如く凋落を免れなかつた。九七年に至つてデブス派が分離してS・D・P(社會民主黨)を組織し[illegible]的大衆的政[illegible]動を開始したのである。デブスが大統領候補として選擧を爭つたのは一九〇三年のことであるが各州の議會選擧等に活躍をつゞけたことは勿論である。一九〇一年にS・L・Pより脱退せるロッチエスター派と合併してS・P(社會黨)となり急進的政治運動の先端に立つて勞働大衆の政治運動の前衛を形成してゐたのである。一九一七年にS・L・PとS・P提携が計劃されたのであるが成功しなかつた。S・L・Pは啓蒙時代のラヂイカリズムを殘存する爲めに發展を期待し難いが、S・Pは勞働階級の政黨中最大の政黨として重きを爲しつゝある。而して此の傾向は依然として歐洲戰後の政治主義の横溢と共に特に著しくなつたのである。

歐洲大戰後生活費の高騰に伴ふ頻々たる罷業の發生、それに對する干渉壓迫約言すれば不況時代に於ける資本の攻勢が意識的に勞働階級をして政治的手段に依る局面の打開を思はしめるようになつたのである。加之英國に於ける勞働黨の成功は之れに類する大勞働政黨の結成の可能を想像せしむるに充分であつた。故にロシア革命が一面共產黨の興起を刺戟したように勞働黨の成功が組織勞働者、S・P・等を勇氣づけたことも想像に難くない。傳統的には政治不關與の態度をとれるA・F・of L・の内にすら、例へゴムパース[illegible]り歡迎せぬにも拘らず、勞働[illegible]盟のフイッく

を結成し多くの地方に勞働黨が随時興起したのである。殊に其の翌年紐育に於て大紐育の勞働黨の組織を見、ゴンパースの「米國は英國と事情を異にす」との反對論も多く顧慮されなかつたのである。同年の末シカゴに全國的「米國勞働黨」成立し政治的、社會的、産業的民主主義の原則支持の爲めに頭腦及筋肉勞働者を糾合する」ことを目的とするに至つた。而してその宣言綱領等S・Pの指導精神が浸潤してゐるのである。S・Pの偉大なる成功と謂はなければならない。

併し乍らこの全國的L・P・も龍頭蛇尾に終り、徒らにゴムパースをして先見の明を誇らしめたのである。がネストリーブスケも說いてゐる通り、「是等勞働黨は結局或地方だけでも、勞働組合と社會黨の運動との間に架橋したものであつて概して力強い關係が成立した。」ことは否み難い事實である。從來の小政黨と同樣にこの全國的L・P・も機會主義的に目前の選擧にのみ眩惑し、永續的政黨組織としての政治的見識、と政治的用意に欠くることがある爲めそれでなくとも強力な資本主義の攻擊を前にしては、一たまりもなかつたのである。選擧騒ぎを終へれば彗星の如く、興味を遽ちにして喪失してしまふのである。英國勞働黨の影響は米國のその當時の四圍の狀況に於て此の程度の効果を與へ、而してこの程度の効果に終つたのである。然らばロシア革命の影響はどうであつたらうか。吾人は此處にC・P・の發生を敍し、それがいかに「この程度」の壘を摩するにも至らなかつたかを說いて、S・P・又は大組合の政治運動との關係を觀察し度いと思ふ。而して米國に必然的に發達す可き形體の統一的大政黨が未だ[illegible]にあることを指摘し度いと思ふ。

五、左右政治行動の抗爭

S・P內に於ける左右兩翼の發生對立は次第に顯著になつて行つた。第二國際の攻擊もせぬと同時に第三國際に對しては單に言葉だけで聲援を與へてゐる。大戰並に歐洲に於ける革命的風潮による情勢の變化に應ずるために黨の綱領を積極的に改變しようと試み、且つ明確に第三國際を支持せんとする一派は、同黨內の左翼を形成し、次第に「社會主義への漸進的發展」を主張し、議員選擧によつて勞働者の解放、社會主義者の議員を以て共和黨、民主黨の議員を驅逐する政策をとる傳統派、右翼と對立するに至つたのである。「ロシアの直譯派」「ブルジヨアの味方」と相互に非難を戰はすと云ふ有樣である。「直接に勞働者の利益を計り、その生活程度を向上せしめ、その實力を增大し而して資本の攻勢に對する抵抗力を强固ならしむる」右派と、「無產革命と無產者獨裁」の左派との對立となつた。一九一八年頃殊に左翼は優勢となり、「S・P左翼の宣言、綱領」を宣布して、「S・Pは此の切迫せる時期に於て依然として社會改良的立法」のみを事とす可きであらうか。「立法府議員の選擧と、投票の見地のみから」問題を取扱ふ可きであろうか。否「政治鬪爭に依る可きである。」「それは議員選擧を主眼とするのではなく、「階級的自覺ある經濟的政治的行動に迄勞働者を起た

しめ、しなければならぬ。而して第三國際を支持す可く、第二との關係を斷絶す可しと、眞正面から右派に對して挑戰したのである。その猛勢當る可らず右翼は次第に壓倒され、黨員の七八割は左翼化し、中央執行委員十五名中十二名迄その占むるところとなり、國際勞働代表選舉の如きもベルゲル（右派）の四、八七一票に對しリード（左派）は一七、二三五ヒルキツト（右派）の四、七七五に對しヲヘア（左派）の一三、二六二の優勢を以て左派が獨占するに至つた。右翼は屈せず「支配か然らずんば破壞」の態度に出て、緊急全國大會の開催を計劃したがそれでも少數となる危險があつたゝめ斷然ロシアに對すると同時に左翼的地方支部（ミシガンその他）と關係を絶つに至り、六萬の會員を失ふに至つた。左翼は此處に紐育に九四名の代表を集め（一九一九年六月）てS・Pの指導權と新政策を議した。然るに此の會議に於て多數派と少數派に分れ多數派はS・P・の緊急大會迄黨内にとどまつて鬪爭を繼續す可きことを主唱し、少數派は即時共産黨の結成を力說した。其の比は五五對三八であつて、遂に分裂し少數派は同年九月一日を期して新黨の樹立を決定した。八月卅日のS・Pの大會でS・Pに踏みとゞまつた左翼は終に出席を拒否され之れに抗爭するや警官につまみ出され憤然退場してC・L・P（共産勞働黨）を即日組織したのである。九月一日豫定の如くミシガン派、並に外國語聯盟等の極左はC・P・A（米國共産黨）を樹立したのである。C・L・PとC・Pは斯くして一日違ひで成立したが共に、大同小異の共産主義綱領を宣明し、第三國際と提携するのであるがその合同に成功したのはつい先頃である。組合運動に於て共に二重組合主義を採用してゐたが翌年黒勞合の改造をその主義とすることに變遷したのである。併し乍ら一九二〇年に始まる大彈壓それは檢事長パルマアを首班として組織的に行はれたのであるが共産黨は最も大打撃を蒙むつたこと云ふ迄もない。パルマアの元老院に於ける報告に依れば次の如くである。

一九一九年七月以來一九二一年一月に至る間に逮捕した外國無政府主義者……………………六、三二八

右、令狀を執行したもの……………………四、一三八

右、逮捕取消したもの……………………二、九一九

右、追放を命じたもの……………………一、一一九

右、既に追放されたもの……………………五〇五

而して司法省官吏は日當八弗昇給、省年の豫算の四〇%は過激主義者の調査の爲めに費やされる大げさなものであつた。爾來共産兩黨とも地下運動に沈潛するの外なくなつたのである。兩黨とも表面の運動を欲しつゝも其の組織なきためその目的を達するを得なかつた。併し乍ら一九二一年五月兩黨の合同成立しC・Pの名を冠するに至つた。二重組合主義の拋棄、獨裁政治の主張を把持するが日常要求の爲めの日常鬪爭にも活躍する旨を宣明してゐる。併し乍らその黨員は一萬二千を超えないし、その實勢力も微弱である。併し乍らS・Pも一九一四年九萬三千より一九一九年には十萬四千に到達したのが二三年には一萬

二千に激減してゐる。而もS・PとC・Pの對立は次第に尖鋭化されつゝある。一九二一年十二月に至つてC・Pは社會主義者の左翼を加へてW・P(米國勞働者黨)を紐育市に組織しその陣容を整備したのである。政治闘爭を力說し、日常闘爭を勞働者共和國建設に迄發展せしむと論じ米國の帝國主義を非難してゐる。C・Pは此のW・Pの外に地下運動として存在したが一九二二年ブリッヂマンの大會も解散され三十名の代議員が拘引され、その成立不可能を覺つたためか、二三年にW・Pに周圍の事情が許すようになれば第三國際の米國支部と自から宣明する權利を附與し自から解散を決議したのである。自來W・Pが唯一の共産系の政黨となつたわけであつて、議會主義を包含する無産階級の全政治行動を主張し、市町村、州、中央政治を以て支配階級の組織的政治權力なりと論じてゐる。併し乍ら一九二四年の大統領選擧後に黨內に勞働黨組織に關し二つの意見が執行委員の內に對立し、相抗爭するに至つた。多數派は「勞働黨組織の問題を此のスローガンに依つて勞働者大衆を即時の階級的政治行動に動員する手段に用ゐ得るや否と云ふ觀念から見、勞働黨組織のスローガンが現在及近き將來に於て此目的の爲めに有効に用ゐ得べからざるものなることを斷言す」と力說するのであつて少數派はそれに對しW・Pの第一の使命は大衆的C・Pたるにある。故に此の目的の達成の爲めに勞働黨組織に果敢に從事するが正當である」と反駁するのである。第三國際にその最後決定が委ねられたが少數派の見解を支持するに決定したのである。此處にローア派(Lore Group)は機會主義なりとして終に排[illegible]黨組織に突進することになつたのである。二四年初頭から勞働者日日(The Daily Worker)發刊され、二七年九月には第五回年次大會開催され黨內の結束と擴張が努力せられつゝある。勞働黨組織、外國生れ勞働者の保護、支那ニカラガへの帝國主義侵略反對、勞働爭議干涉反對、サッコ、ヴァンセッティ事件、パッサイク罷業等ゝ極左的活動をつゞけてゐる。青年勞働者聯盟を組織して、青年社會主義聯盟に對抗して、その一翼としてゐる。

一九二〇年から二四年に亘る不景氣時代に於て農業が殊に打撃を蒙むり破産小農二百萬に達したゝめ、これ等無産階級化せる農民の間に既成政黨を離れて勞働黨を組織せんとするの運動が熾烈となつて來た。その外舊勞働組合內部に於ても新しき政治行動の慾求が次第に旺となつて行つたのである。一九二二年二月シカゴに開催された「進歩的政治行動」の討議會はその著しき一例である。主として勞働組合が參加したのであるがS・P並にF・L・P・(農民勞働黨—シカゴに本部を置き一九二〇年大統領選擧に二六萬票を獲得した。)も參會したのである。進歩的にして、よりよき代議士選擧を目的としたものであつて新政黨組織までは行かなかつたのである。時を同じうしてW・PとT・U・E・Lは既に獨立勞働黨組織の名乘りを擧げてゐる。シカゴ勞働聯盟、鑛山勞働者同盟、合同衣類勞働、國際婦人衣裳組合がその聲に應じ、S・Pはもとよりそれに賛成してゐる。故に「政治へ」の聲は全

運動を席捲し最も切實な論題となつたのである。一九二二年十二月のクリーブランドの第二回「進歩的政治行動」會議は多大の感興と期待とを以て迎へられたのである。勞、農の組織勞働者三百萬の代表が來會する盛況を呈したのである。此の會議では地方組合代表に投票權を拒否し、W・P・とY・W・Lとは忌避されたので獨立勞働黨組織問題で火花を散らす迄に至らず右派の勝利に歸し、S・P・初め政黨組織支持の組合も大衆と離脱する點を顧慮し之れに追隨するの態度に出たのである。F・L・Pはこれに失望して脱退して二三年矢張シカゴに同一の問題で全國大會を開催し、W・Pはそれを熱心に支持したがS・Pは「進歩的政治行動會議」に望みを囑するが故に、且又W・P・と事を共にするを欲せず終に參加しなかつた。加之會議直前シカゴ勞働聯盟のフイッパトリック、ノッケル、ブック等A・F・of L・の勸說に追隨したので、地方組合とW・P系統の小政黨が參加したのみで明らかに失敗に終つたのである。而も召集者たるF・L・P首領フイッパトリックは新黨組織の意なきこと、並びにW・Pを除き其他の諸團體がF・L・Pに加入を希望する旨宣言したゝめ混亂に陷つたが、四〇に對する五〇〇票で新黨組織を決議し「聯合農民勞働黨」が成立した。共産系の約十萬人が結成されたにとゞまる。而して、八時間勞働、產業の國有、最低賃銀、少年勞働禁止、農民の借財に對し五年のモラーリウム、地主制度の廢止等即時要求を決議したにとゞまる。

此の政治行動についての左右二個の見解はなほ激烈な内部闘爭を持續して行つたのである。ミネソタのF・L・P（元百姓黨にも州二三回にも議席を有す）が一九二四年六月セント・ポールにて大統領選擧對策と全國的農民勞働黨の結成の爲めに全國大會を召集し、共產系が一せいに立つて支持すれば、一方、七月、クリーブランドにC・P・P・A（進歩的政治行動會議）が大會を催うし、元老院議員ラフオレットを大統領に指名すると云ふ風にその抗爭の度を深めたのである。セント・ポール派はその大會に於て豫期通りの氣勢も上らぬため（a）同派の中央委員はクリーブランド大會に出席しC・P・P・Aに選擧の期間の提携を提案すること（b）ラフオレットがF・L・Pから立候補しセント・ポール中央委員の指揮に從ふならこれに投票する。（c）中央委員會は組合、諸政黨、勞働者、貧農の大衆を打つて一丸とする勞働黨結成に不斷の努力を拂ふことの三點を決議したのである。

C・P・P・A は共同戰線を拒否したことは云ふ迄もない。而してラフオレット自身の政綱、條件でこれを支持することに決定したのである。A・F・of L・はこのラフオレット支持が獨立勞働黨組織を意味するものでないことを併せて宣言してゐる。合同衣服勞働組合、S・Pの外F・L・P又はセント、ポール派のミネソタF・L・Pさへもラフオレット支持に傾きW・Pは四面楚歌の悲境に陷つた。セント・ポールの中央委員會から脱退して獨立の政綱に立つてその候補者を立てるに至つた。

一九二四年の大統領選擧でラフオレット支持の

P・Aは四百八十二萬票、S・L・P・は三萬三千、W・P・は三萬三千票を得てゐる。選擧後A・F・of L・は直ちに脫退し、其の他の諸勢力も四分五裂の狀態になつてしまつた。C・P・P・Aは選擧後シカゴに開かれたがラフオレットも出席せず、組合の代表者達は新黨組織を否定して今やC・P・P・Aも政治的に無力な結成となつてしまつた。

現在ミネソタのF・L・Pが一九二七年再び結成し政治的に活動準備しつゝあること、又はノース、又はサウスダコダ、ワシントン等の農民黨運動或ひは又ペンシルヴアニアの勞働組合、コンネクティカット、マサチュセッツ等で勞働黨運動が散在し勃興しかけてゐる（皆共產系の運動）外は、既成のS・P、S・L・P、W・P等の不斷の併し乍ら微弱な運動あるのみである。その他主として敎育事業に從事するP・P（プロレタリア黨）シカゴ全國農民勞働黨、ミネソタ農勞黨（下院議員二名、州立法府六十名を出す――一九二六年）マサチュセッツ農勞黨等相當に活躍してゐるが、例外を除き地方的運動の範圍にとゞまる。

S・P・はデブスの死後WDEBSなるラデイオ宣傳設備を計劃すと傳へらるゝ。現在はベルゲル（下院議員）ヒルキット等こ縮るしア

Pに劣る。

C・P・P・A・の崩壞は一九一九年の勞働黨の有名無實に歸したのとその成行を等しうするのである。併し單に目前の選擧對策に重きを置いて黨結成の努力に缺くるところがある。然し乍ら一面W・Pも獨立勞働黨組織のスローガンを一手專賣して、その都度孤立に陷りつゝある。その失敗の原因は惟ふにW・Pの大衆黨と云ふ手の內が見え透くからであらう。而も所謂前衞の意識行動を自意識するに急にして、大衆とかけ離れることも原因であらう。

農民の苦境がその政治行動を活潑ならしめつゝある現在の情勢に於て、F・L・Pの側から興起する勞働黨結成の運動は、然し乍ら組合勞働者の側よりする運動と同樣に、否ある場合には、それ以上の價値を置かねばならぬ。A・F・of L・の態度改善の機會を待ちS・Pが急劇に進出するが如き機會が近き將來に現出し、これにF・L・Pの勢力が來り加はることを假定したならば統一政黨の成立が憶測され得るのであるが、然らざる限り、目下の大統領選擧を前にして急にどうかうと云ふ形勢の急轉は豫測し得ざるところである。露國に於て九百萬の組織勞働者を數ふる（一〇〇%）は問はずとも、英國に於て一

現段階を顧みれば、米國勞働階級政治行動の不統一も已むを得ざる必然の運命であらふ。けれどもS・L・Pのパターソンの「得票も會員の數に於ては具體的に增加する所はないが、勇氣、確信、黨の團結は益々強固になりつゝある」と云ふ獨善的な言葉に勞働階級が滿足の意を表し得ない限り、その要望は不斷に、新しき政治行動に精進して行くであらうとは、C・P・P Aに失望しW・Pを嫌惡するところの米國大衆も等しく豫期し得るところであらう。（一九二八、七六。）

——參考書目——

Bimba,—"History of American Working Class,"

Marot,—"American Labour Union"

Hillquit,—"History of Socialism in the U. S."

Cohen,—"An American Labour Policy"

Groat,—"Organized Labour in America"

Beard,—"A Short History of the American Labour Movement,"

Bliss,—"The New Encyclopedia of Social Reform."

Commons,—"History of Labour in the U. S."

American Federation,—"History Encyclopedia Reference Book"

The American Labour Year Book, 1917—1927.

Semler,—"Geschichte des Sozialismus und Communismus in Nordamerika,"

Nestriepke—"Die Gewerkschaftsbewegung,"

第二次世界戰爭の切迫とその意義

荒畑寒村

一 沒落期の資本主義と帝國主義戰爭

(1) 資本主義發展の不均等と地球の再分割

一八七〇年の普佛戰爭以來、一九一四年の歐洲大戰に至るまで、約三十五年間に世界資本主義の特徴をなしてゐたものは、それが帝國主義の段階に入つたことであつた。

レーニンはその名著『資本主義最後の段階たる帝國主義』の中で、帝國主義を定義してから言つてゐる。

『帝國主義の最も簡潔な定義が必要であるとすれば、帝國主義は資本主義の獨占的段階であると言はねばなるまい。この定義は主要點を含んでゐる。蓋し、一方に於て金融資本は少數の獨占的大銀行に集積され、そして獨占的な企業家同盟の資本と融合せる銀行資本であり、他方に於て世界の分割は、未だいかなる資本主義强國によつても占領されてゐない地域を犧牲にして、障害にぶつからずに擴大して行くことが出來た植民政策から、すでに餘すところなく分割され終つた地球の獨占的支配の植民政策への過渡だからである。』

更にレーニンは、帝國主義を一そう詳細に分析して曰ふ。

『……吾々は……次の五大特徴を含むやうな定義を見出さねばならぬ。五つの點とは、

一、經濟生活にとつて決定的な獨占を作り出す程の高度の發展段階に到達した生産及び資本の集積。

二、銀行資本と産業資本との融合、及びこの金融資本を基礎とする金融寡頭支配の成立。

三、商品輸出とは異なる資本輸出が特に重要な意義を得たること。

四、世界を自分達の間に分割する國際的獨占的資本家團體が成立せること。

五、資本主義列强間に地球の領土分割が完了せること、之れである。』(同書)

此のレーニンの定義から明かなる如く、先進資本主義諸國の資本主義は、その成熟の結果、全資本主義經濟を一の新たなる段階へ押し進める程の轉化をなしたのである。即ち先進資本主義國はその發展の爲

に、自國の商品及び資本の輸出地、並びに原料産地として、植民地の占領或ひは勢力範圍の獲得を必要とするに至り、かくて遂に全地球を分割し了したのである。

だが、この地球の分割は一回限りで終了せるものではなく、資本主義强國間の發展の不均等は、更に全地球の再分割を惹起するのである。遲ればせに列强の仲間入りをしたドイツは、英佛に比して植民地や勢力範圍を領有することが尠なかつたが、ドイツの資本主義の發展は甚だ目醒ましく、その發展のテンポは、遙かに兩國のそれを凌駕してゐた。これはドイツの領土擴張熱を不可避的に强大ならしめ、從つてすでに完了せる地球の分割を、更に新たに分割し直さしむるに至つたのである。

かくして新興のドイツ資本主義は、强大なる領土を有してゐるイギリスと正面衝突を爲さゞるを得ずして、遂に全資本主義世界を震撼せしめた歐洲大戰を惹起したる主因を作せること、既に人の熟知せる所であらう。

以上の如く、帝國主義段階に於ける各國資本主義發展の不均等は、必然的に植民地及び勢力範圍の再分割を惹起したのであるが、この可能性は、決して歐洲大戰の終了と共に消滅したのではない。否それは寧ろ、世界資本主義が歐洲大戰後に開始せる沒落の過程に於て、益々頻繁に且つ廣汎に現はれてゐるのである。

(2) 資本主義の相對的安定と市場の問題

歐洲大戰は戰前、世界資本主義の中心地であつたヨーロッパの經濟に重大なる損害を齎らした。この戰爭の爲に各國における生産は文字通りに破壞され、又は軍需品産業に振り替へられて、生産に從事してゐた數千萬の勞働者は殺傷された。かくて生産の基礎が破壞されると共に、資本の蓄積も停止して、歐洲各國の經濟力は根本から崩壞してしまつたのである。

歐洲の地にかゝる破壞が行はれて居た間に、アメリカ、日本、南米、インド、又は支那等に資本主義が急激に發展したのであるが、就中、北米合衆國の發展は目醒しかつた。アメリカは戰前には歐洲の資本投下地であり、商品の輸出先であつたのに、戰爭は一躍この國をして歐洲に對する債權國たらしめ、又全世界に對する商品並びに資本の輸出國たらしめた。また日本の資本主義の急激なる發展も極東に於て、アメリカの全世界に對すると、同樣な變化を齎らしたのである。

一方歐洲に於ける資本主義の破壞と、他方米國、日本等における資本主義の發展とは、戰前における世界資本主義の均衡を根本的に變更せしめてしまつた。

歐洲大戰爭は、單に世界資本主義の均衡を變化せしめたのみではない。戰爭による生産力の破壞と各國勢力の均衡の變化とは、一九二〇年來の大恐慌となつて現はれた。この恐慌の原因は、（一）歐洲に於

る參戰國の經濟力が悉く破壞されてしまつて、殘れるものは夥しい軍需品の堆積に過ぎず、他方國民は戰爭の爲にその實收入が著しく減少し、從つて、一般に消費能力を失ふに至つた。そして(二)歐洲に於ける生產の破壞の爲に、俄かに急激なる發展を遂げた國々の戰爭中の對歐輸出が杜絕して、それ等の國々に最早需要されない商品が堆積され、所謂過剩生產恐慌が生じた爲である。

この二つの原因によつて、一九二〇年以後世界資本主義は全體として大恐慌の襲來に會ひ、極度の混亂に陷り、大戰爭と共に開始された資本主義の沒落過程は益ゝその速度を加へたのである。この恐慌は、歐洲大戰によつて生じた世界資本主義の均衡の破壞と、現實の生產力の破壞の直接の發現であつたが、それは全生產裝置を破壞し、流通行程を攪亂し、或ひは阻害した。かくて全世界の資本主義の生產は減退し、國際貿易は減少し、爲替關係は混亂に陷つた。

かゝる資本主義經濟機構崩壞の危機から脫する爲に、各國の資本主義は一方、勞働者階級に對しては政治的、經濟的攻勢に出で、從來の搾取關係を維持すると共に、他方、過剩資本を整理し、企業を集中し、生產の合理化を行ひ、以て再び生產力の增加を圖らんとしたのである。その結果、一九二三年頃よりいづれの國に於ても漸やく生產の回復を見、流通行程の整理を見るに至つたのであるが、既に述べた如く、歐洲諸國の國內消費能力は全く減退してゐる結果、生產の回復は直ちに外國市場獲得の欲求を刺戟するに至つた。また直接に戰爭の惨害を蒙らなかつたアメリカや日本では、過剩生產恐慌が起つたのであるから、これ等の國々もこれを切り拔ける爲にはおのづから强大なる海外市場を必要としたのである。

かくの如く、資本主義國は悉く以前にも增して海外市場を要求するに至つたのに、海外市場は却つて以前よりも遙かに縮少してゐるのである。卽ち

一、歐洲に於ては戰後、帝國主義列强の政策によつて小國家が簇生し、各々その間に高い關稅壁を設けて——或は財政的理由により、或は金融資本の政策によつて——商品市場の制限が以前にも增してひどくなつた。また各國の金融資本家自身が、自國の關稅を極めて高く引き上げて、自ら保護するに至つた。

二、全世界の面積の約六分の一を占め、戰前歐洲の資本主義に取つて、極めて有力な市場であつたロシアが一九一七年、遂に資本主義的秩序を破壞して、プロレタリア國家を建設した。而してこの國家は社會主義的經濟制度の確立のために、國際貿易を悉く獨占統制してゐる。この事實は全世界の資本主義國、特に歐洲の資本主義國の海外市場を狹少ならしめるものである。

三、インド、支那、南米、カナダ等、戰前資本主義列强の重要な市場であつた國々に於て、戰時中に資本主義が發展し、自ら資本主義國家として獨立せんとする傾向を示すに至つた。

各國の資本主義安定政策が、先づ海外市場の確保、擴張を必要とし

ために、海外市場が却つて以上の如くにして縮少した事は、それ等の國々の市場獲得競爭を更に猛烈ならしめる所以である。而して海外市場は一應すでにある國々に附屬してゐるか、若しくは獨立してゐるので、この國々を資本主義强國の海外市場として獨占するためには、必然的に武力による爭奪戰、或は征服戰を惹起せざるを得ない。この傾向は、歐洲大戰以前の形勢よりも更に激烈を極め、從つて亦、帝國主義戰爭を再發せしむる最大の禍根を作してゐるのである。

(3) 重工業の肥大症と戰爭の危機

吾々は帝國主義戰爭の禍根として、世界資本主義の發展の不均等とその勢力均衡の不斷の破壞、及び歐洲大戰後の資本主義安定政策と市場の縮少との間の矛盾を擧げたが、更に戰爭の重要なる原因として資本主義生産部門内の變化を擧げねばならぬ。

資本主義の發展と共に、資本の有機的構成が高まり、從つて生産手段、生産部門の生産は消費手段、生産部門の生産に比してその割合を增大して行く。此のことは實際には、資本主義强國における重工業——鑛業、冶金業、機械業等——の急速なる發達となつて現はれたのであるが、歐洲大戰はこの傾向に一大飛躍を遂げしめた。

戰爭の規模及びその激烈さは、重工業及び化學工業の發展の程度によつて決定されるのであるが、逆に戰爭自身がこれ等産業の急激なる增大——他の産業部門を犠牲にして——を惹起する。實際、歐洲大戰中に各國の重工業及び化學工業は、遂に軍需品工業として極めて急激なる發展をとげた。そして重工業の肥大症と呼ばれる現象を呈したのである。

戰爭の終結は、決してこの重工業の肥大症を治癒しなかつた。それは全部平時産業に復歸することを得ず、未だに膨脹したまゝ軍需品產業としてその存在を續けてゐる。而してこの産業を支配する資本家も——それは最も强力なる組織に結合せる金融資本家である——自らの利潤を擧げる爲には、この産業の生産品を賣却せねばならぬ。然らば彼等に對して最もよい販賣の機會は何であるか、それは云ふ迄もなく戰爭である。

そこで彼等はその動かし得る全機關をあげて、自國の軍備擴張の爲に活動し、又は他國に、時に小國に武器を賣り込むために活動するのである。これは、武器を購入した國々の間に、戰爭の危機を更に增大せしめ、その性質を益々狂暴ならしめずには措かない。更に重工業はその原料の占有のために最も力を注いでゐる。たとへば、國際的競爭が最近、石油を中心として廻つてゐるが如きはこの例である。

斯の如く生産部門内の變化、即ち所謂重工業の肥大症も亦、戰爭の危機を大戰前にも增して强める重要なる原因を作してゐるのである。

(4) 帝國主義戰爭と資本主義の崩壞

吾々は以上の見解より、第二次帝國主義戰爭が理論的に

られ得ざることを知つた。

然らば、この來るべき戰爭は、全資本主義制度に對して、果して如何なる意義を持つであらうか。

本文の劈頭に述べた如く、資本主義は十九世紀末より新なる特徴を持つた段階、卽ち帝國主義の段階に入つたのである。そしてこの段階は實にレーニンの言へるが如く、資本主義制度より社會主義制度への推移の過渡的段階を作してゐるのである。實にこの段階に於て、資本主義機構そのものに內在する矛盾の蓄積が、最も激烈に爆發して全資本主義制度を震撼せしめ、プロレタリア××××××が現實に現はれて來るのである。而してこの矛盾の蓄積の最も激烈なる爆發が彼の歐洲大戰であり、またそれを機會として、プロレタリア××××に開始されたのであつた。

今や資本主義が强烈なる內在的矛盾を孕みつゝ、猶且つ熾んに發展しつゝあつた歐洲大戰前を以て、帝國主義的段階の第一期、或はその興隆時代と呼ぶべくば、吾々は歐洲大戰を機會として實際にプロレタリア××××××××時代を經、その沒落期と呼ぶことが出來やう。

この資本主義の沒落期に於ては、資本主義機構の動搖乃至は一部の破綻は、直ちにプロレタリア××××せしめ、强力ならしめる條件

資本主義諸國が自己を維持せんとすれば
るのであるから、プロレタリア××××は戰爭の危機の切迫
必然的に促進されると考へられる。

かくの如く吾々は、來るべき帝國主義戰爭を以て、資本主義の現實の××、從つてプロレタリア×××の契機として、重大なる意義を有することを認識し得るのである。

二　帝國主義戰爭の切迫

(1) 英米の爭覇戰

歐洲大戰後、資本主義諸國間に於ける勢力均衡の最大變化は、イギリスとアメリカとの位地の顚倒であつた。戰前まで全世界に跨がつてゐる植民地を領有し、商品の輸出に於て、資本の輸出に於て、世界に冠たりしイギリスは、戰後その地位をアメリカに讓らねばならなくなつた。

一方、イギリス帝國を形成してゐる各植民地、殊に自治領に急速に資本主義が發展し、從つてこれ等の地方は、政治的にはイギリス本國より獨立するの形勢を示すに至つたが、この傾向はイギリス帝國會議

にイギリスが凌駕して居り、又オーストラリアが嘗ての本國植民地に對する合衆國の輸出は、イギリスのそれを犠牲にして増大してゐるのである。

更にまた、戰前イギリスの重要なる商品輸出先であつた南アメリカ諸國や、支那に於ても、イギリス資本主義はアメリカの競爭を受けて四苦八苦してゐるのである。

この英米の競爭は、植民地その他に於て行はれてゐるのみならず、歐洲自體に於てもまた然るのである。戰前モンロー主義の故を以て、歐洲の問題に關係するを欲しなかつたアメリカ合衆國は、大戰以來、深く歐洲の問題に干與するに至つてゐる。

アメリカ合衆國は、その歐洲に對する巨額の債權によつて、現在では經濟的に全歐洲を支配してゐる。ルール占領以後、アメリカは一時イギリスと相結んで、フランス帝國主義を屈服せしめるに至つたが（ドウズ案の實施）、しかしその提携はほんの一時的部分的に過ぎないで、イギリスでさへ全く合衆國の經濟に追隨せざるを得ない破目に陥つてゐるのである。

既にその生産力に於て、資本力に於て、イギリスを凌駕して世界資本主義に君臨するアメリカ合衆國の存在と發展とは、今や漸次沒落の過程を辿りつゝあるイギリス資本主義に取つて、最早や堪へ難きものとなつてゐる。何故なら、イギリスが世界に於ける自己の位地を維持せんとする努力は、必然的に地球の隅々に於て、自國の生産力の發展に[illegible]新たにその[illegible]せざるを得ないからである。

この衝突は、單に經濟上の範圍に止まるものではなく、既に重要なる政治的意味を帶びてゐる。例へば、昨年行はれたる日、英、米、三國の軍縮會議の如きは、明らかにこの英米の世界覇權爭奪戰の端的なる表現であつた。この會議の不成立は、實に兩國の關係が戰前に於けるドイツとイギリスとの關係に彷彿せることを示してゐるのである。

果然、アメリカは本年に入るや、尨大なる海軍擴張を企て、その一部はごく最近實現されるに至つた。そしてこれは、直ちにイギリスに重大なるセンセーションを捲き起し、その對抗運動が行はれ出して、兩國は今や激しい軍備擴張競爭に入る前哨戰を續けてゐる。この兩アングロ・サキソン國の對立は、決して緩和され得るものではない。個々の場所に於て、或は一時的には、提携の存せるにも拘はらず、その對立は帝國主義强國間の最大の對立として、漸次爆發に向つて濃度を増してゐるのである。

(2) 歐洲に於ける諸國の對立抗爭

帝國主義諸國家間の、更に戰爭の危機を導き易き動因は、歐洲内に於ける各國の對立である。

大戰以來、歐洲大陸に於てはドイツの勢力が急激に衰ろへ、フランスがこれに代つて支配者の位地に就いた。フランスは重工業の原料地

として、最も重要なアルサス・ローレーンの二州を回復し、一躍して重工業國としての位地を確保したのである。このフランスの歐洲に於ける優勢は、直ちにイギリスとの對立を惹起した。賠償問題を中心とする英佛の抗爭、或は近東に於ける兩國勢力の衝突は、孰れかその現はれでないものがあらうか。

ヴエルサイユ條約を利用せるフランスの優越は、ルール占領を以てその絶頂をなしたが、それは歐洲の資本主義そのものをも危殆に瀕せしむるの結果、即ち一九二三年のドイツの革命的情勢を惹起せんとした。然し乍ら、フランス資本主義自體も、この武力的侵略政策を長く續けることは危險となつた。何故ならば、かゝる武力の行使はフランスの全國民經濟を混亂せしめ、ひいて資本主義の破綻をも招くからである。これを根據として、アメリカ資本、一部分はイギリス資本の干涉が始まつた。ドウズ案はアメリカ資本主義の歐洲安定政策であつたが、同時にそれはイギリス資本主義に取つて、歐洲に於けるフランスの優越的位地をたゝき落すべき絶好の機會でもあつた。

イギリスはアメリカと提携してドウズ案を實施し、ドイツを助けて自己の味方に引き入れ、フランスと對抗するに至つた。この政策は首尾よく成功して、爾來イギリスは再び歐洲に覇權を握るに至つたのである。この形勢の政治的表現は、ロカルノ會議であつた。アメリカとイギリスとは、ドイツを援助して歐洲に新たなる勢力均衡を作り出した。ロカルノの安全保障條約の結果、フランスは全く後退せざるを得ざるに至り、そしてドイツはこの時以來、以前までは自己の位地を維持する上に賴みとしてゐたロシアと手を切つて、イギリスと接近し出したのである。

ドイツは國際聯盟に引き入れられ、重要な政治的位地を與へられた。然しながら、この頃に至つてイギリスの經濟的衰退は益々甚だしくなり、その缺陷は一九二六年のイギリス總罷業によつて遺憾なく暴露された。このイギリスの衰退は、また歐洲に於ける勢力均衡の變化をひき起した。ドイツの經濟はイギリスの衰退によつて急に上向し始め、ドイツはイギリスの敵として現はれるに至つた。そこで一時孤立したフランスは、忽ちにしてドイツに接近し出したのである。これは一方、獨佛二國の重工業を中心とする國際カルテルの成立に、また他方、フランスのドイツに對する讓步（トアリー協定）に現はれてゐる。

この獨佛の接近は、直ちにイギリスとイタリーとの接近を齎らした。是より先、イタリーは地中海の制海權問題、北アフリカの植民地問題、バルカン半島問題等に於て、フランスと鋭く對立してゐたのであるが、イギリスとの接近はその對立を更に激化せしめたのである。

歐洲に於ける英佛の對立を廻つて、各國に千變萬化の離合集散が行はれてゐるが、その特に甚だしいのは東部歐洲である。

歐洲大戰後、東部歐洲には、ポーランド、リトアニア、エストニア等の小國が成立し、また墺匈國が分裂してオーストリア、ハンガリーチエツコ・スロヴアキア等の諸國が對立し、バルカンにおても、各國

の勢力關係に於ては全然その様相を異にしてゐる。これ等の國々は各々入亂れて對立し互ひに關稅壁を高くし、或は領土の所屬問題で激烈なる鬪爭を續けてゐる。そして此の小諸國間の鬪爭は、更にその背後のイギリス、フランス、イタリー等の鬪爭と結び付いてゐる。

それ故、これ等の國々に於て一度戰爭が勃發せんか、それは直ちに背後にある强大なる國々の公然の宣戰布告と化せざるを得ない。況んやこの危險は、帝國主義列强の傀儡となつてゐる諸小國の數、戰前よりも更に增加し、その關係が一そう複雜化してゐるが故に、戰前に存在してゐた危險以上に、次の大戰爭を誘發する可能性を有せるをや。

國際聯盟は名のみは平和の機關であるが、實際に在ては決してこれ等の對立を完全に阻止し、以て眞に平和を將來するの機關ではない。それは寧ろ帝國主義强國が勢力の均衡を自國に有利ならしめんがために策動し、陰謀をたくらむ爲の機關なのである。

國際聯盟は或は國際經濟會議を召集し、或は軍備縮少會議を召集して平和のために盡力してゐると公言してゐるが、然し資本主義の最近の發展段階そのものに內在する矛盾が取り除かれざる以上、單に一時鋭き對立を將來に延期し、或は一時抑止してゐるに過ぎぬ。その矛盾は暗默の間に蓄積せられ、その爆發は最早防止し得なくなり、却つて聯盟を操縱してゐる强國間の戰爭と化すであらう。

(3) 極東に於ける帝國主義的對立

[illegible]
[illegible]に於ても等しく認められる。

アジアに於ける帝國主義的紛爭の中心地は、勿論支那である。既に述べた如く、市場獲得の問題が列强に取つて焦眉の急を告ぐれば告ぐる程、支那は全世界で最も開拓の餘地ある市場として、帝國主義列强が垂涎の的とならざるを得ない。然るに支那自身は歐洲大戰中より漸次資本主義的に發展し、更に他方では支那に對する列國の勢力關係は大戰後一變した。この二つの變化が交錯して、今や複雜なる對立の大旋風を大平洋上に捲き起してゐるのである。

戰前までは、支那に最大の勢力を持つてゐた國はイギリスであつた。然るに戰時中に於ける日本資本主義の急激なる發展は、支那に對する日本資本主義の位地を强めた。即ち×××××××××××××その後を襲ひ、更にその勢力範圍を擴張(××××××××××)して、イギリスの對支經濟的關係をも浸觸するに至つた。これは戰前まで、極東に於てロシアに對するイギリスの××としてその××の默諾を受けて、帝國主義政策を實行して來た日本をして、一躍東洋の覇者たらしめた。イギリスは戰爭と戰後の衰微とのために漸く支那に於ける位地を失ひ始めたが、その間、日本帝國主義の强敵として現はれたのがアメリカ合衆國であつた。戰爭中に世界一の資本主義國家となつたアメリカに取つては、支那市場は[illegible]

その重要性を増したので、この市場獲得の問題を中心に、アメリカが日本と鋭い對立をなさゞるを得ないのは、殆んど必至の勢ひである。

一九二一年のワシントン軍縮會議は、實は平和を將來するための會議でも何でもない。それはアメリカがイギリスと提携(日英同盟の破棄)して、日本の海軍力を自國の海軍力より遙かに劣位に落し、太平洋の制海權をアメリカ資本帝國の掌中に歸し、以て支那に於ける自國の位地を有利ならしめんとする手段に外ならなかつた。それ故、この會議に支那が問題(實はこれが中心問題であつた)となつて、日本は戰時中に×××に獲得した優越權を、一部分放棄せざるを得ないハメに陷ゐつたのである。

ワシントン會議の結果、日本は極東に於て、孤立するに至つたが、この時以來、日本の對支政策は一變し、支那に對して漸次親善接近の態度を取り、且つ一九一七年以來、最も鋭く對立して來た革命ロシアをも、遂に正式に承認せざるを得ざるに至つた

アメリカ帝國主義は、極東に於てはイギリスと結んで日本を孤立に陷ゐれると共に、支那に對して極めて親密なる態度を示し、所謂平和的侵略を寸時も休むことなく續けて行つたのである。此のアメリカ帝國主義と日本帝國主義との支那市場獲得の鬪爭は、アメリカの勝利を以て一先づケリがついたが、往年の大震災が更にアメリカに對する、日本の位地を低下せしめたことは言ふまでもない。そして日本との同盟を破棄してアメリカと提携したイギリスは、大平洋上に於ける日本との角逐準備の爲に、シンガポールに大海軍根據地を建設するの手段に出たのである。

爾來、支那を廻つて日、英、米、三國間に絶えず激烈な鬪爭が行はれて來たが、この關係は支那に民族革命運動が勃發し、それが進行するに連れて更に複雜な變化を齎らした。即ち革命運動の發祥地たる南支那に、その勢力を振つてゐたイギリスの地盤は、革命の進展と共に覆へされたので、イギリスは支那革命運動に對して狂暴なる彈壓政策を行はんとした。

然るに日本は、國民黨のブルジョア分子を支持し、この革命をブルジョア革命に終らしめて、以て將來の支那市場擴大の爲に資せんとした。アメリカも亦、日本とは別箇に、支那革命をブルジョア革命に終らしめんとする同樣な努力をなしたのである。

反帝國主義の旗の下に開始された支那革命は、かくてマンマと分裂せしめられ、支那ブルジョアジーは帝國主義國の援助の下に×××××の運動を、血に染つた毒手で絞殺しつゝある。若しこの革命が帝國主義國の分裂政策に禍さるゝことなく、正しい政策によつてプロレタリア・××××へ轉向せしめられたならば、恐らく列國は共同して更に猛烈な武力干渉を試みると共に、この革命の進展の内に帝國主義崩壞の重要なる要素を認め、この革命を支持して來た勞農ロシアに對しても共同の鋒先を向けたであらう。

だが、大平洋を中心とする戰爭の危險は、今も決して去つては居ら

ぬ。支那革命が一時頓挫しても、誰が支那に於て覇權を握るかといふ點に、帝國主義諸國間に激しい競爭の可能性が殘されてゐる。或はまた、一時外國の帝國主義と自國のブルジョアジーの下に彈壓された勞働者農民が再びその活動を開始し、全ブルジョアジーに對して再び世界的の脅威を與ふるに至らば、再び支那革命の武力的彈壓とロシアに對する帝國主義諸國の戰爭は免がれぬところであらう。

一九三一年には、ワシントン條約の期限が切れる。今のところ、それが更に續けられると思はれる材料はない。日、英、米、三國は軍備擴張競爭によつて更に戰爭の危險を增すであらう。又、××××××××××される理由は、滿洲に於けるその帝國主義的特權の維持と、支那革命及びロシアに對する帝國主義的攻擊以外には考へ得られないが、この點からしても——×××××、×××ロシア及び支那に對して接近政策をとつてゐるにせよ——吾々は極東の天地に於て帝國主義戰爭の暗雲がかなり濃厚になりつゝあることを知ることが出來る。

(4)　勞農ロシアに對する帝國主義戰爭

帝國主義諸國の激しい紛爭の間にあつて、獨りこれとは全く別箇の存在を續けて、發展しつゝあるのはソヴエット・ロシアである。ソヴエット・ロシアはあらゆる資本主義國からの迫害の內にあつて、社會主義建設の道を進みつゝ、既に十年の歲月を經、今や單なる回復の時代を脫して擴張の時代に入りつゝある。

この社會主義への道を進みつゝあるロシアの存在は、國際的資本主義國家に取つて大なる脅威である。何故なら、國際的プロレタリア××の發祥地として、又その中心地としての此の社會主義共和國の存在そのものが、既に他の資本主義國に於ける勞働者及び農民に對して、國際的プロレタリア××××××を指示し、彼等を×××に達して鼓舞するからであり、更に資本主義國家によつて××されてゐる植民地、及び半植民地の×××××××××に、最も重要なる支點を與へてゐるからである。

この意味に於て、ソヴエット・ロシアが資本主義世界に脅威たるのみではない。全地球の六分の一の面積を占め、一億四千萬の人口を有するロシアが、社會主義的建設の道を進んで行くことは、さらでだに狹少を告げつゝある列强の海外市場が、全く彼等の手から分離して行くことを意味する。故に列强は、ロシアを再び資本主義的發展の軌道に引き戾し、この國を資本主義回復の爲の支持點たらしめんとし、現在もさうしようと努力してゐるのである。

この二重の意味に於て——即ち一は國際的プロレタリア××の中心地を剿滅する意味と、他は資本主義存續の爲に市場を回復する意味に於て——、帝國主義列强はソヴエット・ロシアに對してその成立の當初より、或は武力的干涉を行ひ、或は經濟的封鎖を行つて來た。然しながら、從來この運動は全然失敗に歸したので、列强はこの國と再び平和的に接近するの道を開き、ロシアをその商品並びに資本の輸出市

場としようとした。ロシアもまた、社會主義への建設に一歩を進める爲に新經濟政策を實施し、資本主義國との經濟的交渉の回復を必要とした。かくして、所謂資本主義國家と社會主義國家との並行的存在が、平和的な形態を採つて行はれるに至つたのである。

然し乍ら、この結果は果して永續するであらうか。この經濟的交渉の結果、ロシアは急速に社會主義國家としての存在を强固にした。資本主義は一時的安定を見、從つてその政治的勢力も鞏固——反動的勢力が强まつた意味に於て——となり、更にその安定を强めるために、强烈な帝國主義的政策を必要としてゐる。玆に於てか、この强まつた社會主義國と、直接の××的狀勢より脫して一時的に安定し、その反動的政治勢力の强まつた資本主義國との間には、以前よりも更に强い衝突の可能性が生じて來る譯である。

この衝突は、現在ます〱切迫しつゝある。即ち沒落しつゝある資本主義國の典型として、最もジレムマに陷ゐつたイギリスは、その經濟の一時的安定の爲に最も反動的な手段を取らざるを得なくなつた。國內の勞働者階級に對する政治的、經濟的の彈壓と欺瞞、民族解放運動の彈壓、自國の勞働者階級の急進化に與かつて力があり、また支那、インド、エジプト等、植民地の民族解放運動の强い支持點となつてゐるソギエット・ロシアを絕滅するための死にもの狂ひの鬪爭、——これが現在、反動的イギリスの根本的政策である。

イギリスは勞働黨內閣が崩壞して、保守黨內閣が成立して以來、この政策を熱心に遂行して來た。その內閣の成立以來、ロシアに對して公然と挑戰的態度を採り、ロシアの正式承認を拒否した。單にそればかりではない。支那革命に於て國民革命軍よりブルジョア分子が脫退して、一時反帝國主義運動に頓挫を來すや、イギリスはこの形勢を利用して、本國及び支那に於て公然とロシアに挑戰的態度を取り、爲に兩國の國交は遂に斷絕するに至つたのである。

是より先、イギリスはロシアの邊境にある小國に干涉して、反ロシア軍事同盟を組織せしめ、或は國際聯盟にドイツを引き入れてロシアを政治的に孤立させ、また國際經濟會議を利用して、經濟的にロシアを孤立せしめやうと試みた。この政策は、明かに一部成功した。そしてドイツ、フランス等に於ても、反ロシア的態度を露骨に示し、イギリスの政策を支持するものが現はるゝに至つたのである。

歐洲に於けるロシア孤立政策の成功、支那に於ける國民革命運動の一時的頓挫は、イギリスのソギエット・ロシア包圍政策を益々强めるに至つた。イギリスはロシアに對して、武力干涉に出づべき準備をとゝのへ、その端緒を求めて、遂にアルコス・ハウス搜索事件、北京及び上海のロシア領事館襲擊を組織し、これによつて戰爭を誘發せんとしたのである。この戰爭勃發の危機は、ロシア側の隱忍、巧妙なる外交的駈引によつて避けられたが、ロシア對イギリスを中心とする、反ロシア同盟との武力的鬪爭の可能性は、決して消え去つたのではない。

この社會主義共和國と、資本主義國との對立の尖鋭化に、帝國主義諸國間の戰爭の危機と等しく、全世界に新戰爭の危機を孕ひつゝある。またこの對立こそ、現在に於て最も新世界戰爭を勃發せしめる危險を帶びてゐるものである。

三　帝國主義戰爭に對する國際無產階級運動の二傾向

(1)　日和見主義者と帝國主義戰爭

言葉の上の社會主義だが、實踐では資本主義の支持者に外ならざる第二インターナショナルの日和見主義者どもは、來るべき帝國主義戰爭に對しても亦、プロレタリアートの階級的利益と全く相反する態度を採つてゐる。

彼等は先づ、第二次世界戰爭の必然を頭から否認する。即ち彼等は現在の資本主義の一時的、相對的安定を、資本主義の隆々たる發展と解し、ドウズ案、ロカルノ條約、國際經濟會議、諸種の國際カルテルの成立等を見て、資本主義は組織的資本主義、超帝國主義、或は資本主義の社會主義化の時代に入つたなどと宣傳し、以て資本主義の相對的安定に含まれてゐる全矛盾を抹殺し、世界戰爭の危險を否認するのである。而して彼等は是等ブルジョアジーの彌縫政策を支持し、美化し、理論づけ、之れによつてプロレタリア大衆をして、資本主義の現實に有用な[illegible]の、大衆[illegible]に民主[illegible]を起させてゐる。

レーニンは一九一五年に、既にこの傾向に對して警告の聲を放つてゐる。

『勞働者階級を愚鈍化する諸形式の一は、平和主義及び平和に對して抽象的に賛辭を投げることである。資本主義の下に在ては、就中、帝國主義國家の治下に於ては、戰爭は不可避的に勃發する。××××××××××××××、現時に於て平和主義を宣傳することは、幻想を生み出し、……勞働者大衆を交戰國の秘術外交の手中に躍る道化役者たらしむるものである。』

社會民主々義者は、理論的に帝國主義的世界戰爭の必然を否認し、且つその歷史的意義を理解してゐないが、單にそれのみに止まらぬ。彼等は戰爭が現實に切迫しても、猶且つ實踐的にこれに反對行動を採らず、××××××××近代科學の精を蒐めた×××××として引渡す。彼等は公然と、幾度でも、一九一四年八月の汚辱を繰返へさうとしてゐるのである。

植民地の××××に對しても、彼等は全く無關心であり、或るものは文化的ヨーロッパ（先進資本主義としての）の爲に、植民地の必要をさへ力說してゐる。從つて彼等は、佛領モロッコ反亂の際にも、或は一昨年來の支那國民革命運動に對しても、單に精神的な聲明をするだけで、實際にはこの被抑壓民族の止むを得ざる×××を批難し、以

て資本主義國への奴隷的屈從を強要した。

革命的ロシアに對しても亦、彼等のある者は同樣な態度を採つてゐる。彼等によれば、ロシアは反動的であり、非民主的であり、從つて第二次革命（實は反革命）を組織することを力說し、ある場合にはイギリスを盟主とする反ソヴエツト聯盟をさへ支持してゐる。

彼等は既に過去の戰爭から苦惱に滿ちた經驗をなめ、支配階級の××××に對して深い憎惡を示してゐる××××の利益を裏切るのみならず、あらゆる欺瞞手段によつて×××××に際して全く去勢し去る爲に活動してゐるのである。

彼等は來らんとする第二次世界戰爭に際して、再び一九一四年八月の裏切りをなすべく準備してゐるのだ。實に彼等こそは、帝國主義戰爭に當つて勞働階級内にあるブルジョアジーの手先として、巧妙に民衆を戰爭に結合しようとしてゐる者である

(2) 戰鬪的無産階級と帝國主義戰爭

上述の如き日和見主義的社會主義者の行動に、眞向から對立してゐるのは××的プロレタリアートの對戰爭態度である。

彼等は帝國主義時代に於ては、その經濟的、政治的組織の内的矛盾の發展によつて、戰爭が不可能

を左の如く決定した。

『戰爭に抗する××』、『帝國主義戰爭の××××××』、『帝國主義戰爭に於ける××××××』。

『戰爭に抗する××』は、決して帝國主義戰爭が勃發し、××××××が一時大衆を抑壓する時に始めて開始されるのではなくて、ブルジョアジーが絶えず××××をしてゐるやうに、プロレタリアートもまた絶えず『戰爭に抗する××』の××をせねばならぬ。

たとへば戰爭の勃發した時には、『×××』を以つて之に答へよ、これのみが戰爭防止の唯一の手段であると主張する者がある。然しこれが、何等發展性のない××である場合には、たとへ×××と雖も帝國主義戰爭を防止する能はない。戰爭反對運動の重心は、常住不斷の執拗なる××××××××、及び××××に置かれなければならぬ。平時に於ける××××××と××××とが有効に行はれてゐる場合にのみ、戰爭の危險を防止し得るのであり、又その勃發した際にも、この危機を利用してプロレタリアートの×××××を、××××××せしめ得るのである。

無産階級は、その大衆に犧牲を強要する帝國主義戰爭に對して、×××××せねばならないが、戰爭を防止するに力及ばずして、戰

は資本主義の矛盾の大規模の爆發であり、この戰爭によつて——そして戰爭が長びけば長びく程——資本主義の機構そのものが全體として動搖するのである。そしてこの場合こそ、×××××××××××××××が造り出されるのであるから、プロレタリアートは、この機會を利用して、帝國主義戰爭を××××せねばならぬ。而してこの×××のために、帝國主義戰爭の際に於ける××××××に向つて、××××しなければならない。これこそ支配階級の全政治機構の××、××××××××××をなすものである。

前述の如く、現在資本主義は一時的安定の時代にあつて、現實に崩壞の危機に當面しては居ないが、然しその內的矛盾のために、その開始の第一段である帝國主義戰爭の勃發すべき條件は、作り出されつゝある。而してその最も危險なる地點は、ソヴエツト・ロシアに對する帝國主義列强の進擊である。それ故、『戰爭に抗する××』の××に於て、現在最大の役割を演ずるものは、この戰爭に對する反對運動であるが、それには更に重要な理由が加はる。それはソヴエツト・ロシアが社會主義國であり、國際無產階級運動の××であることである。この故に、ソヴエツト・ロシアに對する帝國主義戰爭の反對運動は、戰爭反對のスローガンと同時に×××××××××のスローガンを以て進まねばならない。

更に支那××に對する帝國主義××××××に對しても、同樣の態度が取らるべきである、

結論

以上で大體、資本主義の現段階に於ては、帝國主義戰爭の絕對に避け得られぬ事を論證し、又それが歷史的に如何なる意味を持つかを示した。そして現實に、如何なる方面に帝國主義戰爭の勃發する危險が濃厚になりつゝあるかを示すと共に、この帝國主義戰爭に對する國際無產階級運動の陣營內の二つの態度に、簡單ながら觸れたのである。

之を日本に就て見るに、日本は極東における帝國主義强國であり、支那及びロシアに對しては地理的に接觸してゐる。それ故に、若し支那革命にして進展せんか、××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××、×××××××、反革命軍の援助により、革命軍の戰線に對する分裂政策により、或は實際に×××××的民衆の××によつて、×××××××を行つてゐる。

極東に於ける日本帝國主義の位地は重大である。日本は帝國主義戰爭に於て、——現在では特に××××××××××——重要な役割を演ずるであらう。それ故に、更に國際無產階級運動の一翼を受持つ日本無產階級運動の任務も、その重大さを加へ來らざるを得ぬ。吾々は×××××××××× ×××××、×××××に從つて吾が國の××××××、×××××、××××××××、帝國主義戰爭に反對する×××××××××しなければならない。

無產大衆黨の背景

山川均

一

『無產大衆黨』の結黨は、新興階級政治運動の内外において、相當の注意を喚び起こしたといふばかりでなく、異常の衝動を起こしたかの如くにさへ見える。なぜならば、舊勞農黨の正統の遺產相續人をもつて任ずる新黨組織準備會をはじめとし、舊勞農黨の謂ゆる極左的分子の『排擊』は、いまやこの新生の無產勞農黨の上に集中せられてゐる。かつては、日本勞農黨、社會民衆黨をもつて、或る意味では既成ブルジョア政黨以上に憎むべき存在物として、その上に集中せられてゐた排擊の砲火と闘爭の全精力とは、今日は、さらに日本勞農黨社會民衆黨よりも一そう憎むべき敵として、無產大衆黨の上に轉換され、この一點では、日勞、民衆兩黨は、却つてこの新生の無產大衆黨

大衆黨の新生が、新興階級政治運動の間にこれほどまでに重大化せられたのは、何故であらうか？ 誕生匆々の無產大衆黨は、社會民衆黨日本勞農黨よりも、また無產大衆黨の構成要素の一部分が曾つて屬してゐた舊勞農黨よりも、量的に小さなことは想像するに難くない。また將來の發達はいざ知らず、現在においては、それはわが國の政治的中心地であるといふ點でその他の地方とは性質を異にするとはいへ、ともかくも東京地方における、地方的政黨たることを免れぬ。そして地方的な無產政黨は、すでに無產大衆黨以前にも存在した。さらにその掲ぐるところの綱領政策を見ても、何ら人目を聳動するものはない。たとへば舊勞農黨は、『我國の國情に即し』て行動することを、特にその綱領のうちに力說した。『國情』といふ文字が、いかに含蓄の深い言葉として、[illegible]

かつた。とは云へ、そのために無產大衆黨が、異常な性質のものに變じたとは思はれぬ。それは依然として、民衆黨日勞黨などゝ何ら異るところのない、合法的な一政黨にほかならぬ。

かやうに何づれの點から見ても、それほどの重大性を要求するに足りないかの如く思はれる無產大衆黨に、却つてそれほどの重大性が賦せられたのは、そも〳〵何故であらうか？ 舊勞農黨正統派の『排擊』は、無產大衆黨が、『裏切り者』、『卑怯者』、『分裂主義者』、『階級の敵』等々であることを吾々に敎へてゐる。今日は、裏切り者と、卑怯者と、分裂主義者と、なかんづく有力な階級の敵に乏しくない。無產大衆黨がこれらの無產階級の諸敵のうちに主敵たる重大性を——舊勞農黨の正統派から——賦與せられたのは、そも〳〵何故であらうか？ 忠實な生徒は、敎師の敎への中から、敎師の敎へてゐる以上のことをも學習する權利を持つてゐる。

二

無產政黨形成の過程は、今日までに二つの主要な時期を現はした。政黨組織が具體的な問題となつてから、勞働農民黨の成立にいたるまでは、單一無產政黨といふ目標が、大體において全運動を支配した。勞働者と農民と、その他の一切の無產者的大衆を、ブルジョアジーの政治的勢力に對して階級的に結合する政黨は、ひとり左翼的なスローガンであつたばかりでなく、大衆の現實な必要と要求とを代表し、從つて大衆によつて支持せられたる政黨でなければならなかつた。當時一部の指導者の間には、單一政黨に對して大なる疑惑を持つ人々もあつたにもかゝはらず、なほかつこれに協力することを餘儀なくされ、殊に公然の反對を不可能ならしめたのは、その爲めであつた。また當時にあつては、組合運動中のむしろ意識の低い水準を代表してゐると見做されてゐた農民組合が、單一政黨への最も有力な推進力となつたことが、これを證據だてゝゐる。農民勞働黨の禁止は、一時、單一政黨を危うくした。大正十四年十一月二十九日の一夜は、單一政黨の絕望的な危機に瀕してゐた。そしてこの危機から單一政黨を救うたものは、何よりも先づ第一に、直接に地方大衆を代表して、政黨準備委員會のそとに集會を開いてゐた地方無產團體協議會の代表者會議であつた。

第二の時期には、勞農黨から日本農民黨と社會民衆黨と日本勞農黨が分裂し、一つの單一政黨の代りに、吾々は四つの對立政黨を見た。これは單一政黨に對して、當初から疑惑を持つた右翼的指導者が、戰術的に勝利を得たことを意味してゐる。

この時期を支配したものは、いふまでもなく、種々なる形を取る分裂主義であつた。無產政黨の對立抗爭の狀態は、右翼主義者によつては、右翼主義的に正當化され、左翼主義者によつては、左翼主義的に理論づけられた。右翼主義者は主として、現に單一政黨が破壞せられたこと、現に無產政黨が分裂對立してゐる事實をもつて、現狀を肯定したにすぎなかつたが、これに反して左翼主義者（精密には極左主義

者)は、『マルクス主義的理論』をもつてこれを裏書きした。かうして單一政黨としてその第一歩を踏み出した(といふよりも、寧ろ、單一無產政黨組織運動の到達點として現はれた)勞農黨は、極左的分裂理論の旗の下に、すべての黨派のうちで、最も勇猛果敢な對立鬪爭を遂行する黨派となつた。けれども注意すべきことは、この時期にあつても、勞農黨は依然として、その內から生まれて來た卵の殼を、どこかにくつ附けてゐた——すなはち、勞農黨は依然として、『單一無產政黨』といふ傳統的なスローガンを、忠實に守つてゐたことである。たゞその實現は、勞農黨がその『マルクス主義的』指導精神によつて、その他の對立政黨をことごとく征服する時まで、延期されたにすぎなかつた!

勞農黨の分裂と同時に、單一戰線恢復の要求——合同の主張——の現はれたことも事實である。けれどもこの時期を支配した主たる傾向は分裂主義の進行であつて、合同の要求は、漸次にその力を加へたにもかゝはらず、この時期の特徵ではなかつた。たとへば大正十五年十二月十日には、日本農民組合の統一を維持しようとする熱烈な要求が槓杆となつて、日勞黨との卽時合同論が、ほとんど勞農黨を動かさうとした。けれども十二月十一日の一夜は、形勢を一變し、地方支部の卽時合同の訓令を帶びて集まつた代議員にして、十二日の大會においては、合同の反對者となつたものが少なくない。それは十四年十一月二十九日に對する、好個の對照であつた。かつては大衆の聲が單一政黨を救ひ、今は極左指導者の說得が、勞農黨の『輝やける指導精神』を救うたのであつた!(十四年十一月二十九日の地方無產團體協議會の代表者の多くは、この大會の代議員として集つてゐた。けれどもこの時は、勞農黨地方支部の『指導者』としてゞあつた。)

十二日の大會においては、『日本勞農黨の現在の指導精神にして變更せられざる限り、絕對に(合同に)反對す』といふ有名な決議が採用され、この決議は、さらに翌年五月の、『わが黨は、わが黨の光輝ある指導精神に基き、あくまで日勞黨の指導精神を排擊する』といふ聲明書によつて確められ、それは事實上、解散の瞬間にいたるまで、合同問題に對する勞農黨の態度を支配したといつてよい。(政治戰線統一の要求を決定的に敗つたこの光輝ある役割のために、極左主義者が撰りに撰つた似合はしい代表者——極左的分裂主義の人格化せられたもの——が、秋和松五郎氏その人であつた。秋和氏今何處に在る!?)

(三)

極左的分裂主義は、合同の要求を敗つたが、合同の要求の生まれて來る事實をまで敗ることはできなかつた。これは一般には勞働者と農民の大衆の間に、なかんづく勞農黨の內部においても、戰線統一の要求が漸次に有力になつたことによつて知ることができる。極左的理論の指導の下に、勞働組合と農民組合とは、潰滅狀態に急いでゐた。極左主義がなほ最高潮を保つてゐた昭和二年五月において、勞働組合評

議會があわたゞしい『新方向轉換』を試みなければならなかつたことが、これを證據立てゝゐる。この『新方向轉換』は、その頭の上のマルクス主義的（！）極左理論と、その脚の下の『卑俗な』事實と必要との、唐臼の間から搾り出された呻きであつた。言葉をかへて云へば、謂ゆるマルクス主義的極左理論と、勞働者の鬪爭の必要との、二つの主人に事へようとする忠實な試みであり、極左的理論の舊るい革嚢のうちに、昨日まで、彼らが『折衷主義』の烙印をおした實踐を詰め易へようとする企てゞあつて、その結果は謂ゆる『折衷主義』への（或る程度までの）自ら承認しない屈服であつた。評議會の『新方向轉換』は、いふまでもなく、直接には、勞働組合の運動方針における極左主義の破綻を示したものにすぎなかつた。けれども分裂主義は、これと引離すことのできない、極左主義の一屬性にほかならぬ。組合運動における極左主義の淸算の要求は、必然に、政治運動における極左的分裂主義の淸算の要求とあい補足する。勞農黨の指導者は、かの『光輝ある指導精神』を忠實に擁護しつゝ、外に向つては、『執拗果敢』に對立無產政黨と鬪爭し、內に對しては、その脚下から起る『合同論』を、假借なく鎭壓した。けれども、黨の內外における戰線統一の要求は漸次に熾烈となつたばかりでなく、日勞黨は來るべき大會において、合同運動のイニシエチーヴを取ることが明らかとなつた。

十二月十八日、勞農黨はかの有名な『急旋回』によつて、『指導精神にこだわらざる』『全ての無產政黨の合同』を提唱した。この提唱は、何ら具體的な成果をも擧げなかつたし、また具體的な成果を目的としたものとも思はれぬが、それにも拘らず、合同運動の上に、一新生面を開いたものであつた。のみならず、この時まで、合同についての多くの人々の意見は、まづ勞農日勞兩黨の合同を實現し、新たに形成せられた新勢力によつて、社會民衆黨との合同の機運を促進するといふことにあつた。從つて合同の主張は、單に勞農黨と日勞黨との合同の主張であるかの如き觀を呈してゐた。勞農黨の新提唱は、地方政黨をも含む全ての政黨の即時合同であつて、合同問題に對するかような限界を打破することによつて、合同問題の眞實の性質を明らかにした沒すべからざる成績があつた。（この時すでに成案を得てゐた日勞黨の提唱もまた、全ての政黨の合同であつたと傳へられてゐる）。勞農黨の提唱には、たま〳〵斯くの如き功績があつた。けれどもそれと同時に、勞農黨の提唱は、たゞ單なるマヌーヴルであるといふ印象以外の、如何なる印象をも與へることができなかつた。合同問題は、投機と思惑の對象となつた。

單なるマヌーヴルとしての合同の提唱は、勞農黨が――若くは、勞農黨を通じて極左主義が――取り來つたところの、單なるマヌーヴルとしての協同戰線の提唱と、全くその性質を同じくするものであり、その一變形であるといふことができる。從つて、かの十二月十二日の『光輝ある指導精神』の固守と、何らの牴觸をもせぬものであつた！

（四）

しかしながら單なるマヌーヴアーとしても、『指導精神にこだわらざる』合同と、『わが黨の光輝ある指導に基き、あくまで日勞黨の（その他の政黨はいふまでもない）指導精神を排撃する』こと〻の間には、いかに極左的理論の石炭殻をもつて埋め立て〻も、なほ埋づめることのできない多少の間隙があつた（註）。この間隙は、後日、極左理論家によつて、次の如き操作によつて埋づめられた。即ち、『指導精神にこだわらざる全ての政黨の合同』のうちから、その不純な前半、『指導精神にこだわらざる』といふ殘屑を捨て去つて、その純粋物たる後半、『全ての政黨の合同』のみを殘しておくことであつた。

かように極左主義者は、十二月十八日の『指導精神にこだわらざる』合同の主張は、たゞ一回の提唱をもつて、暗密の間に放棄したが戰線の統一に對する高まりゆく大衆の要求、ことに勞農黨の內部における大衆の要求の前に、もはや合同の主張をまで放棄することはできなかつた。そこで『わが黨の光輝ある指導精神に基づき、あくまで他黨の指導精神を排撃する』マルクス主義的（！）理論と卑俗な現實——大衆の要求と壓迫——との調和のために發展させられたものが、かの『戰鬪的統一戰術』であつた。

この態度の變更は、抽象的には合同『一般』を承認することによつて、大衆の要求と合同論とによぎなき追隨をしたものであるにもかゝはらず、具體的には、依然として在來の、マヌーヴアーとしての協同戰線の持ち掛けないしは『共同戰鬪の持ち掛け』から一歩も出でないものであつた。即ち、改訂せられた極左理論によれば、彼らは熱心な戰線統一論者であり、政黨合同のイニシチーヴを取るべき、唯一の有資格者であつた。けれどもこの戰線の統一は、この合同は、全體としての黨と黨との合同によつて實現せらるべきものではなくて、徹頭徹尾、對立政黨の切り崩しによつて、その指導者から大衆を自黨に獲得することによつてのみ、實現せらるべきものであつた。彼らのマルクス主義（！）はかく命じた。そして共同鬪爭の展開が、その手段であつた。

かように、極左主義者の合同に對する理論に改訂され、全ての政黨の合同は一般的に、抽象的には承認せられたが、その實現は依然として、勞農黨がその輝やける指導精神によつて、全ての政黨を征服し終るの日まで延期せられたのであつた。

合同問題に對する態度の動搖と相伴う、これに離るべからざる關係にあるところの、勞農黨そのもの〻性質と任務に對する極左主義者の見解も、この時期において動搖を始めてきた。勞農黨とは何ぞや、階級的大衆黨とは何ぞやといふことが、極左主義の陣營では新たに問題となつた。その結果は、勞農黨は前衞黨ではない、前衞黨は大衆黨に解消し、または依存することなく、その謂ゆる『獨自の行動』をしなければならぬといふ、大發見のなされたのも、この時であつた。た

しかに、この發見のおくれたことは、勢ひ勞農黨を前衛黨でゝもあるかの如きものに變質せしめ、その上に『輝やける指導精神』を押しつけしめざるを得なかつた。けれどもこの誤謬を、論文のうちで發見することは、容易であつた。けれども、これを勞農黨のうちで具體的に清算することは、極めて困難であつた。吾々は、松葉杖に依存してはならない。哀れな廢兵は斯う叫んだ。けれども、松葉杖を手離すことは、直ちに步行を不可能にすることを意味してゐたとせば、どうだらう。

それにもかゝはらず、極左主義の陣營內において、過去に對する誤謬の清算が開始され、または開始されんとしてゐたことは、疑ひがない。戰線統一と合同問題についても、究極においてこの問題の基づくところの、勞農黨の本來の性質と任務についても、たゞに理論の範圍內においてさへも、極左主義は、その誤謬を完全に、大膽に、徹底的に清算するにはいたつてゐなかつた。けれどもかゝる態度の動搖は、明らかに、この清算への方向を指すものであつた。

しかるに他方においては、極左的指導に對する勞農黨內部における反對勢力も、漸次に增大した。黨の中央部及び地方支部において、この反對の傾向を代表した少數の指導者は、勞農黨自身の內部的結束の必要から、極めて消極的な態度を取つてゐたが、漸やくその態度は積極的となり、その勢力は、なほ依然として、微弱な少數派たるに過ぎなかつたが、その行動は漸次に大膽となつた。一般黨員大衆の間にあつても、極左的指導に對して疑問を抱いてゐたものは、漸やく勢力を持つて來た。

勞農黨の內部における、かやうな反對勢力の成長は、必然に、四月の擴大中央委員會にあたつて、合同問題に對する黨の態度を重ねて明らかにする聲明書に反對して、少數派の對案をもつて公然と鬪ふことに、その一端を現はした。この鬪ひは、極左的指導の壓倒的な勝利に終つたが、その結果として擴大中央委員會が採用した聲明書は、すべての無產政黨の構成を、本質的に均しいものと見、これを前衛黨と完全に區別し、かゝる論據の上に、全ての無產政黨の合同の可能を認めてゐる點において、完全に反對派の見解に屈服してゐるにもかゝはらず、新たに『勞働者農民の政府』を直接の鬪爭目標とすることをもつて、事實上、合同の條件とすることによつて、あらゆる具體的な合同を不可能ならしめるものであつた。

かの『指導精神にこだわらざる』そしてなほその上に、『誠意』一點張りの合同論に猪突した後で、極左主義の陣營においては、勢ひこれに對する反動の作用を見た。この反動作用は、極左主義者をして、事實上、それ以前の『指導精神の排擊』と、共同鬪爭によつて『大衆を吾黨に取ること』に復歸させた。しかるに勞農黨の內外における合同論の主張は、益々有力となつた。極左主義者が四月の擴大中央委員會によつて、勞農黨をして、重ねて合同問題に對する態度を決定せしめる必要を感じたのは、そのためであつた。聲明書は、その前半におい

ては、彼らの最近の大發見を公式立て、その後半においては、彼らの最新の輸入品——社會民主主義の徹底排撃——を實用に供した。それはその前半によつて、反對傾向と妥協し、その後半によつて、合同のより有効な障害物を装置することによつて分裂の現狀を維持し、その松葉杖の把握を確保すべき任務をもつてゐた。

かやうに一方においては、極左主義の陣營内において、避くべからざる過去の清算が開始されようとし、他方においては、これを強要する反對勢力が擡頭し來つたことは、直接には、勞農黨の歴史に新しい時期を開き、間接には、全無產政黨運動の歴史に、新しい時期を劃せんとするものであつた。しかしながら、精密にいへば、この二つの傾向は、決して勞農黨の内部においてのみ對立したものではない。たゞこの對立がその焦點を結んだのが、勞農黨であつた。從つて、この意義深くも興味ある二つの傾向の對立が、いかに發展するか、吾々の凝視の的であつた。

四月十日の勞働農民黨に對する彈壓は、惜しいかな、この發展の正常な過程を、この段階をもつて斷ち切つたのであつた。

註　私は先頃、ある外國の一刊行物において、當時の合同提唱の問題に對する次の如き批判を讀んだ。わが國における極左主義者が何故に、指導精神にこだわらざる合同

私は異つた見解をもつてゐるも
對する徹底的排撃と、指導精神にこだわらざる合同との間隙のあることを知るためには、この批判は固より參考となる。

『....最近の出來事に徹して明かなる如く、勞働農民黨、日本勞農黨社會民衆黨の無條件合同案に抗爭しなかつたことは....一つの重大なる過失であつた。かくの如き合同案は、一般に協同戰線戰術の形體と見做さるべきものでない....

『中央派的日勞黨と合同せんとする勞農黨の提唱も、この合同運動が社會民主主義的な指導幹部に向けられるのみならず日勞黨自身の改良主義的指導者にも向けられるといふ前提の下に行はれたものなることを確言しておく必要がある。

『右翼社會民主黨（社會民衆黨）をも合同に引き入れんとする日勞黨の提案は最も惡質な、改良主義的分子の手に指導權を掌握しようとする目的をもつものであつた。この提案に公然と反抗し、勞農黨の孤立化を目的とするかゝる社會民主主義的指導者の奸計を、中央派及び社會民主主義の團體に屬する勞働者の面前において曝露することを怠つたのは....一つの過失であつた....。』

こゝに興味あることは、この批判者が、全くわが國の實狀に通じて

く、事實は正に反對であつて、一方においては謂ゆる『折衷主義者』の勞農日勞兩黨合同論を排撃しつゝ、たゞに社會民衆黨ばかりでなく日本農民黨をも含む全ての政黨の合同を先づ提唱したものが、極左的指導の下における勞農黨であつた！　そして日勞黨は、勞農黨の『全ての政黨』といふ提唱を逆用して、單なる勞農黨との合同を拒絶する理由に用ひた觀があつた。そこで日勞黨は『この提案に公然と反抗し』その奸計を『勞働者の面前で曝露』こそしなかつたが、少なくとも、第一の提唱者にくらべれば、その過失が少ないといふ、奇妙な結論に到達するのである。

（五）

勞働農民黨の禁止は、この發展の正常な過程を妨げた。けれども、この過程の發展を妨げることはできなかつた。さらにこの過程の本質を變化することはできなかつた。

勞農黨の經歷の跡には、直ちに再組織の運動が現はれた。そしてこの再組織運動の第一歩において見たものは、再組織についての、相反した二つの傾向であつた。

第一の傾向は、舊勞農黨をそのまゝの姿で（いふまでもなく、そのまゝの魂を持つて）再興し復舊しようとするものであつた。この運動は新黨樹立の運動であるが、この意味での『新黨樹立』とは、舊勞農黨の元のまゝなる再現であつて、『新黨』とは、『舊』勞農黨以上のものでも以下のものでもない。それは精密に、舊勞農黨の復活であつて、これを具體的にいへば、マルクス主義（！）政治意識にまで進出し昂揚せられた舊勞農黨の構成要素が、社會民主主義に對立した輝やける指導精神と、『勞働者農民の政府』等々のスローガンとを携へて、民衆黨日勞黨の如き『エセ無産政黨』を征伐する（恐らくは、共同闘爭の『持ち掛け』なるものによつて！）ために再臨することにほかならぬ。

その輝やける指導精神をもつて、舊勞農黨をそのまゝに復興しようとする努力は、固より尊むべき努力であつた。けれどもその結果が、決して舊勞農黨のそのまゝなる復興を約束せぬことも、明らかであつた。舊勞農黨の一般大衆のことごとくが――いなその内の一大部分が――善い意味においては固よりのこと、惡るい意味においてさへも、謂ゆるマルクス主義（！）政治意識を戰ひ取つた要素であると考へるほど、大なる幻影はない。現にたゞ一回の選擧戰に伴うた壓迫が、日本農民組合の最も主要な構成部分を文字通りの全滅に歸せしめたことが、何よりも有力にこれを證據だてゝゐる。從つて、かゝる意味での新黨樹立の企ては、意識的には、舊勞農黨を精密に復生しようとする企てゞはあるが、實際の結果においては、舊勞農黨の構成分子のうちから、さらに意識の水準の高い（或は、もつと正確に云へば、さらに極左的傾向の強い）分子をさぐり出し、これを舊勞農黨員大衆から分離せしめたところの、舊勞農黨よりも遙かに少數な要素の結合に歸着するにちがひない。かような意味での新黨樹立運動が、極度の禁壓に

抗しつゝ、相當の期間に亘つて持續し得られたとしたならば、この樹立運動の進行する過程そのものが、直ちに舊勞農黨の構成分子から、比較的意識水準の低い要素を、漸次にかつ加速度的に篩ひ落し、從つて彼らを、無產階級の組織せられた政治勢力から陶汰し去る過程となることは自明であつた。

第二の傾向は、新黨樹立に對する日本農民組合の決定であつて、それは極めて不明白な（或は婉曲な）形でゞはあるが、新黨樹立をもつて輝やける指導精神をもつた舊勞農黨をそのまゝに復活する代りに、この新黨樹立の過程をもつて、同時に、舊勞農黨の一切の誤謬を淸算し、これを本來の大衆的黨として更生せしめる過程と解し、さらにこの新たな大衆的黨の樹立によつて、全ての政黨の合同を實現しようとする見解であつた。

委員會においては、第一の傾向が勝利をしめ、舊勞農黨の輝やける指導精神を繼承して、新黨樹立準備會が創立され、日本農民組合は新黨樹立運動から退いた。

新黨樹立準備會の運動が、決して坦々たる大道を踏むが如き運動でないことは、云ふまでもない。それは事實上の活動を、ほとんど不可能とするほどに、多難な運動であつた。かゝる狀態の下に、新黨樹立に對するこの第一の傾向は、間もなく、次の如き見解に發展した。

『……今、左翼は、新黨組織にのみ浮身をやつすべき時ではない。中央の頭だけで、机の上だけで、如何に組織を作り、立派な黨名を考へても、それは決して鬪爭のための組織たり得ない。先づ差し當つて左翼のなすべき任務は、今回の大暴壓に對する反抗運動と日常鬪爭とを活潑に且つ强力に行ふために、地方々々に勞農協議會を作ることだ！……』

『……支配階級の權力が、左翼に向つて、大衆的政黨すら作ることを許さないならば、――少くとも、コムミニストの排除を條件としなければ政黨組織を許さぬとするならば、政黨といふ形體を强いて取らなくてもいゝではないか……當面の必要としては、先づこの日常鬪爭並びに暴壓反抗を活潑に行ひ得る組織があればよいのだ。我々は須らく、鬪爭によつて組織を作らねばならない！　力强く暴壓反抗と日常鬪爭を展開し、その過程を通じて勞農黨を再組織し、進んで諸勞農政黨の合同へ進め！』

『……われ／＼は、黨の再組織の必然的過程として、勞農協議會の組織を提唱する。』（以上、無產者新聞）。

『……多かれ少かれ左翼的戰鬪分子を排除し、社會民主主義に屈服せざる限り、その結黨は不可能である。それ（地方政黨）は地方的分散性の固定化と、戰鬪的前衞の排除による武裝解除――議會主義改良主義への屈服――の貢を以て、支配階級の分割支配の前に降服することを意味する。』

『現在、勞農大衆は、戰鬪的勞農政黨を一日も早く再結黨せよと呼んでゐる……彼等が公認の政黨を云々するのは、彼等が政治鬪爭の舞臺に

登場して以來、公認された政黨としての鬪爭以外の經驗を持たないが故である。』

『…新黨組織準備會は、ひとへに新黨を組織せんとするブロアジをその任務とするものでは斷じてなくて、實に勞働者農民の日常の利害のために戰ふ戰鬪的組織なることを、實踐を以て示すだらう…。』

（以上、勞働農民新聞）。

今日、新たな政黨を組織することは、必然に、支配階級の前に自ら武裝を解除することを意味してゐる！ 大衆が合法的政黨を要求してゐるのは、彼らが、合法的政黨以外の鬪爭の經驗を持たないために生じた誤つた要求である！ 吾々は、政黨の代りに、勞農協議會を組織しなければならぬのみならず再組織運動そのものからしてが、實は原則的に誤つた運動でさへもある！

『…何づれにせよ、自然發生的な變則的な大衆黨、而かも二つにも三つにも分立してゐる大衆黨を再組織することは誤りである。』（無產者新聞）

では、『黨の再組織（そのことからしてが、原則的に誤謬であるところ）の必然的過程』としての勞農協議會とは、そも〳〵何だらう？

『勞農協議會は、各地方に於て、舊勞農黨々員のみならず、他團體の構成分子、未組織大衆を加へて組織する…。』（無產者新聞）。

『…飽くまで勞働者農民の自主的組織であつて…この組織の進展こそが、勞働者農民の××樹立のために、その基本的組織として巨大な一歩を踏み出すのだ。』（勞働農民新聞）。

『…勞農協議會の獨立發展の過程に於てのみ、一定の條件の下に、社會民主主義者に對する徹底的批判の自由を留保して、實質的戰線統一たる全國的單一勞農政黨を組織し得るであらう。その日こそ、我々の結黨の日であらねばならぬ。』（同上）。

二つ三つに分裂した大衆黨も再び組織することは、根本的に誤つてゐる！ この根本的な誤謬を達成する『必然的な過程』として、吾々は、勞農協議會を組織しなければならぬ！ この勞農協議會は、勞働者農民の××樹立のための基本的組織の萌芽である！ 新黨組織準備會は、新黨組織といふ、この根本的な誤謬を放棄したものではない。また全ての無產政黨の合同の主張を放棄したものではない。たゞその實現の日が、勞働者農民の××樹立のための基本的な組織網が、全國的に張り廻はされる時まで、保留せられたゞけである。

これが舊勞農黨の、輝やける指導精神のその後の發展であつた。

新黨組織準備會の運動が、かやうな性質に固定した結果として、舊勞農黨の內部においてこれと對立してゐた要素は、もはやこの全國的な新黨組織運動に包容せられることができなくなつた。舊勞農黨の二つの傾向は、こゝに初めて、截然として分岐した。舊勞農黨の傳統を繼承した新黨組織準備會は、こゝに再び『不純な分子を陶汰し得たことによつて、一層强くなることができた』。しかるに第二の傾向は、各地における、過渡的な地方政黨の運動に發展した。無產大衆黨は、この發展の一つの現はれにほかならぬ

（六）

かような背景のうちにおかれた時、初めて無産大衆黨の（その他の地方政黨もまた）出現には、無産階級の分裂した政治戰線に、さらにもう一つの政黨を加へること以上の意義を認めることができる。

無産大衆黨の構成分子のうちには、恐らくは、舊勞農黨員の多くを含んでゐるものと思はれる。この範圍においては、舊勞農黨の解散によつて離散した分子の、再組織たる性質をも持つてゐる。けれども無産大衆黨は、これを産み出した經路と立黨の宣言（私はまだ、新聞に掲載せられた以外の全文を讀まないが）がこれを物語つてゐるように、それは決して、舊勞農黨の再現をもつて滿足するものではない。いな反對に、無産大衆黨にとつては、新黨組織の過程そのものが、（舊勞農黨員に關する限りにおいては）舊勞農黨の誤謬を清算する過程の必要不可避な一部分をなすものなのである。

けれども無産大衆黨の意義は、たゞ單に、舊勞農黨員を、本來の大衆的黨に組織するといふことのみではない。無産大衆黨は、あらゆる所に生長してゐる統一戰線の要求と、分裂主義に對する反對勢力とを代表しなければならぬ。分裂主義に對する反對の勢力は、ひとり舊勞農黨の内部にのみ生長したものではなくて、到るところに生まれ、到るところに生長しつゝある。無産大衆黨は、あらゆる戰線とあらゆる團體の内部における、この傾向によつて生み出されたものだといふことができる。けれども、これは必ずしも、無産大衆黨がこれらの要求を現實にその黨員とすることを意味するものではない。無産政黨の合同の實現をもつて、明らかにその綱領の一項目とする――從つて、この意味においては過渡的政黨たる――無産大衆黨は、これらの要素をその團體から自黨に獲得することによつて、自己を強大にする必要がないからである。これに反して無産大衆黨は、現實なその黨員以外の分裂主義に對する一切の反對勢力の上にその影響を擴大することによつてのみ、その任務を有効に遂行することができる。

無産大衆黨が、既成の勞農政黨の影響外に立つ廣大な要求を獲得するために、積極的に行動すべきことは云ふまでもない。種々なる情勢のために、既成勞農政黨のいづれにも參加を困難とした要素を包容することも、無産大衆黨の任務の一つである。

無産大衆黨の意義は、ひとり分裂主義の清算のみではない。無産大衆黨は、分裂主義と密接に結合したあらゆる誤謬を清算する必要によつて迫出せられたものであつた。この新政黨が、たゞに無産者の政黨であるばかりでなく、同時に大衆の政黨たるためには、勞働者と、農民と、一般勞働民ないしは勤勞民の最も初歩的な利害と要求とを代表することを、恥辱とすべきでない。極左主義者の輝やける指導精神か見棄てた卑俗な現實の大衆は、この新政黨によつて、無産階級の陣營に迎へ返へされなければならぬ。

新政黨は、その合同運動から、一切の投機と思惑とを一掃しなけれ

ばならぬ。共同鬪爭の展開は、いふまでもなく、合同を實現するために必要欠くべからざる手段であるばかりでなく、成功ある共同鬪爭そのものが、或る程度における戰線の統一を意味してゐる。けれども共同鬪爭は、單なるマヌーヴァーであつてはならぬ。それは限られた鬪爭の目標を達成するために、分散した鬪爭よりも共同した鬪爭のより有効であり、より有力であることを、大衆に實證するものでなければならぬ。かゝる共同鬪爭の展開によつてのみ、大衆は戰線の統一に確信を持つてくる。またかくの如き鬪爭によつてのみ、誰れが最も忠實に大衆のために鬪ふ者であるかを立證することができる。

無產大衆黨の出現を止むべからざるものとした形勢は、この新政黨に對して、これらの事柄を要求してゐるにちがひない。けれども無產大衆黨を生み出した形勢が、この政黨に何を求めてゐるかといふことと、現實の無產大衆黨が、どの程度に成功的にこの任務を遂行するかといふことは、別個の事柄である。そしてこれはたゞ、無產大衆黨の將來をして、自ら答へしめるのほかはない。たゞ無產大衆黨を前景に押し出した全背景は、この政黨の意義を、すべては人々の目に極めて大きく映ぜしめてゐる。これはやがて新政黨の上に、多くの期待をかけしめると同時に、新政黨をして、反對傾向からのあらゆる非難と排撃の下に立たしめてゐる。

(七)

そこで無產大衆黨の反對者が、この新政黨を、いかなる態度をもつて迎へてゐるかを一瞥することは、極めて興味がある。

無產大衆黨の組織準備の報が傳はるや、新黨組織準備會では、これに對する聲明書を發表した。その一節には、かう書いてある。

『今新黨準備會は、その組織を全國的に立て直して、日勞黨との無條件合同に努力しつゝある。この新黨準備會を除外して、寧ろ除外することを目的としてならんとする無產大衆黨組織の意圖は明かである。』

私がこの聲明書を紹介する目的は、讀者諸君の自由な批判を求めるためであつて、私自身の批評を試みるためではない。たゞ私が、喜びを禁じ得ぬことは、新黨準備會が今日は、『日勞黨との無條件合同』の主張者であるといふ事實をこの聲明書によつて、初めて知り得たことである。

そもそも『合同問題』は、勞農黨と『日勞黨との無條件合同』の提唱として初めて公けの問題となつた。そしてこれは不幸にして、勞農黨の輝ける指導精神が、絶對に許るさぬこととなつた。すべての對立政黨の指導精神の徹底的排撃——その大衆の我黨への獲得——無條件合同論の徹底的排撃——指導精神にこだわらざる全ての政黨の即時合同——戰鬪的統一戰術——民主主義の排撃と勞働者農民の××のスローガンを規準とする合同——大衆的政黨再建の誤謬——黨の再組織の必然的過程としての勞農協議會——勞働者農民の××樹立のための基本

的組織の巨大な一歩——日勞黨との無條件合同！　吾々はいま、再び合同問題の出發點に立つてゐる。

無産大衆黨に對する反對批評から吾々の受ける第一の印象は、この新政黨が、一顧に値ひしないものだといふことである。『無産大衆黨の成立は、勞働者農民にとつてはさまで重要な意義はない』、『取るに足らぬ無産大衆黨の一細事』、『わが準備會は……微動だもするものではない』(勞働農民新聞社說)。『しかしながら……新黨準備會の陣營は微動だもせざることを全勞農大衆諸君に報告し得ることを喜ぶものである』(聲明書)。『正體のない幽靈のやうなものにすぎないのだ。』『舊勞農黨の反幹部派なるものは、幽靈に違ひないが、しかし……』、『我々はこの黨が、新黨準備會に對して何等の影響を與へ得るものでないことを知つてゐるが故に、その點から兎や角いはうとしてゐるものではないが、しかし……』、同紙、大山郁夫氏の論文)

吾々が第二に受ける印象は、それにも拘らずこの新政黨が、新黨準備會の妨害物だといふことである。『彼等は、支配階級の暴壓によつて奪はれたる勞農黨奪還の鬪爭を放棄してゐる、否、反對に、勞農黨再建の鬪爭を妨害する……』、『我が準備會は……勞農黨の再建と、その日勞黨との無條件合同實現を期するものである、而して我等の戰線統一の努力を妨害せんとする……』(聲明書)。『鬪爭の爲の全階級戰線統一の必要が著しく痛感せられて

吾々が第三に受ける印象は、[illegible]

裏切りの行爲であり、なほその上に、勞農國的破壞な[illegible]動政府との明白な通謀だといふことである。『吾々は大膽に明言出來るのである、即ち(新黨組織は)大擧を期して再び強行される支配階級の勞働者農民の戰鬪的組織破壞計畫……に密接なる通謀を有する……』(勞働者農民新聞社說)。『彼らは……勞農黨再建の鬪爭を妨害することによつて警視廳の意を迎へんとする』(聲明書)。『この黨は、第一に、戰鬪的左翼分子を排斥することによつて、全線的統一の實現を妨げようとする……陰謀である』、『左翼戰鬪分子に對する支配階級の血の出るやうな彈壓に對して新たな口實を與へる……』、『階級的裏切り的な企てを默過する譯にはゆかない』(大山氏論文)。等々。

もしこの見解に從ふなら、これはもはや無產者運動の內部における異つた傾向間の抗爭の問題でないことは、言ふまでもない。

新政黨の組織について、私が何らかの關係があるかの如く報導した新聞があつた。私は今日以後も、新政黨を或は公然と批判し、或はこれに對して公然と希望を述べる機會があるかも知れぬ。けれども私はその組織について何ら關與せぬことを、私自身のためと、同時に新政黨のために、この機會に斷はつておく。即ち、新政黨のためには、新政黨は私の有する意見に何[illegible]責任を[illegible]

階級戰線を攪亂する無産大衆黨の出現

大山郁夫

一 本論に於ける筆者の態度の基準

無産大衆黨の成立に至るまでの經緯ならびにその成立後の經過に關しては、私はまだ詳細な情報を得るに至つてゐない。從つて私がこの小論の基礎的材料として用ひ得るものは、その目的のために特に得られたものではなくて、大抵はブルジョア新聞に報道されたものゝ範圍外に出るものではない。さうしたものを對象として、私は舊勞農黨の鬪爭精神を固守してゐる新黨準備會の立場から、些かばかりの批判を試みようとしてゐるものである。

かうした事情から、私は最初、多少この小論を書くことを躊躇した。だが默つて考へて見ると、新たに產まれた無産大衆黨が、それと新黨準備會との對立を何にもまさつて——さうだ、それと支配階級との對立にさへもまさつて——强調してゐる以上は、我々が新黨準備會の立場からそれに對して感じてゐることを一言するのは、決して無意義なことではない筈だ。萬一我々のそれに對する批判の何づれの部分かが我々の得た報道のために誤られてゐることが證明された場合には、我々はさうした部分を訂正することをも、場合によつてはそれを撤回することをさへも、躊躇するものではない。それは、我々が我々の立場を棄てることなくしてなし得ることだ。否それは、我々が我々の立場に忠實であればある程、一層我々がそれをなすべき義務を感ぜしめられることでさへあるのだ。だが、いづれにせよ、現在の瞬間に於て我々の立場が彼等のそれと對蹠的地位にあるといふ根本的事實だけは、何物を以てしても變へることは出來ない。それは實に、我々の側からよりも、寧ろ彼等の側から持ち上げられた一要點なのだ。

それで結局、この小論に於ける私の論斷は、その枝葉的な各部に於ては縱し決定的なものでないにもせよ、その根本的重要點に於ては私の動かせない確信を反映してゐるといふことになるのだ。

尙ほ今一つ言ひ添へておきたいことがある。それは、この小論に於ては、私は無産大衆黨の組織者たちの人的關係については一切口を噤ぐまうとしてゐるといふ點だ。さうした人的關係を通して同黨を見る

といふことは、同黨の本質を知る上に於て大切なことであるかも知れない。否、大切なことであらう。だが、それは私には出來ないことだし、また縱し出來ても、私はそれをすることを欲しない。私はたゞ、無產大衆黨の出現を一個の所與のさうした現象として見て、それを我々の立場から如何に解釋し得られるものであるかを、また如何に解釋すべきものであるかを、一應吟味しようとしてゐるまでだ。

二　新黨準備會の立場と無產大衆黨の出現

無產大衆黨が七月二十二日に結黨式を擧げた直後に於て、各方面から我々に向けられた質問は多岐多端であつたが、それらのいづれもの中心點は、大抵の場合、「それの出現が新黨準備會の上に如何なる影響を及ぼすであらうか？』の上に傾いてゐた。

さうした質問は、しかし我々には可なり無意義なものに聞えた。それは、その質問に對して任意に與へ得られる內容の故にといふよりは寧ろそれの提出者の態度なり附帶的質問なりによつて與へられた一の示唆のためであつた。

何がその示唆であつたか？　それは、『無產大衆黨の出現は新黨準備會の基礎に動搖を與ふるものではないか？　また新黨準備會の特殊的立場を危くするものでないか？』といふやうなことであつた。そして、質問者たちは、さういふ見地から、無產大衆黨の出現が如何にも新黨準備會にとつての一大事だと我々が思つてゐるかのやうに考へてゐるやうであつた。少くとも彼等は、我々にさうだと思はせようと［…］でゐるやうであつた。

それが少からず、我々に微苦笑を催ふさせたのだ。もとより、無產大衆黨の出現には本來さうした意味が含まれてゐたのであらう。また支配階級がそれの出現を寧ろ歡迎したやうに見えたのも、矢張りそのことが彼等の意中にあつたからであらう。だが、その點からならば、我々は無產大衆黨の出現を別に意に介するほどの大事件だとは思つてはゐなかつた。同黨の組織者たちの意圖が何うであつたにせよ、また支配階級が同黨の存在に託してゐた希望が何ういふものであつたにせよ、新黨準備會そのものは、さう輙すくその馴訓者の術中に陥るものでもなく、また新黨準備會を熱心に支持してゐる戰鬪的大衆は、さう輙すく彼等の欺瞞者の口車に乘るものでもない。我々はそれを熟知し確信してゐたから、さういふことのために我々の面前に掲げられた脅威らしきものをも、牛の角に蚊がとまつたほどにも考へてゐなかつたのだ。

それに、新黨準備會の特殊的立場と言つたところで、現在の帝國主義ブルジョアジーの指揮下に出現せしめられてゐる極端な反動時代の支配階級の果てしなき、、、、と彈壓とに抗して惡戰苦鬪してゐる階級意識の熾烈なる勞農大衆の一般的立場と背馳したやうな立場は絕對的にそこにあり得ないのだ。それは實に、新黨準備會の前身である舊勞農黨の活躍時代からの一貫した傳統の然らしめることなのだ。

さうした戰闘的勞農大衆は、今日何を最も熱烈に要求してゐるか？それはいふまでもなく、現在彼等に不可避なものになつて來てゐる闘爭を強力に展開するための無產階級戰線の統一以外の何物でもないのだ。從つて、新黨準備會が今代表してゐる立場——そして同時に新黨準備會の存立を意義あらしめてゐる立場——にしても、それが特殊の立場といへるといへないとに拘はらず、さうした意味に於ける階級戰線統一の目標に嚴密に從屬せしめられてゐるものに外ならないのだ。

この事もまた、單一無產政黨の標榜の下に起つた舊勞農黨以來の傳統に屬するものである。今日舊勞農黨を分裂主義を以て誣ひてゐるものは、殆ど皆舊勞農黨の陣營から分離して行つた人々であるといふことは、まさに一個の不思議なる歷史的事實である。無論、舊勞農黨の單一無產政黨主義は、その分裂時代以來益々階級的となり、益々戰闘的となつたので、それにつれて同黨は猛烈に階級的理論の立場から、分離して行つた他の無產諸黨の指導精神を攻擊しだしたとは事實である。だが同時に、舊勞農黨は理論に於て攻擊を加へてゐたそれらの諸黨に向つても、行動に於ては共同闘爭を持ち掛けることを寸時も怠らなかつた。そして、それらの二つの事柄の間には、何等の矛盾がなかつた。卽ち兩者は共に、闘爭のための戰線統一の方向に、その尖端を向けてゐたのである。更らに舊勞農黨が、如何に昨年秋の府縣會議戰に際して、勞農大衆の階級的結成を高唱してその政治的自由獲得闘爭を一層強力に展開しだしたかとか、また如何にその府縣議戰後に於て、大衆の間に自然發生的に燃え上がりはじめた共同闘爭の氣勢を[illegible]として、勞農諸政黨の合同問題を提起し、且つその解決のために熱心に努力しつゝあつたかとかに關しては、今玆に特に回想するまでもないことである。

舊勞農黨がその短き、だが輝ける闘爭の歷史を懷いて玉碎した直後に、その廢墟の上に起き上がつた新黨準備會は、同黨が提唱して實現するに至らなかつた勞農諸政黨の合同問題を取り上げて、全力的にそのために戰つて來たのだ。もとより、新黨準備會の聲明されたる直接目的は舊勞農黨の再建にあつたが、しかしそれは最早、闘爭のための階級戰線統一への道程としてのみ意義あることとなつてゐたのである。支配階級の全面的攻擊の急速なる進捗は、今や無產階級の全勢力の大規模に於ける結束による對抗を焦眉の急策とならしめてゐるのである。それ故に、新黨準備會の他の一つの試みであつた日勞黨との卽時無條件合同への努力もまた、矢張り同じ根據から出たものに外ならなかつたのである。

かくして新黨準備會は、現在に於ては眼前に去來する一切の事象を、闘爭のための階級戰線統一の視角からのみ見てゐるのである。それは實に、それ自身の存在の理由をさへも、そこに見出してゐるのである。それを措いて新黨準備會の立場——特殊的のそれであらうが、なからうが——がある譯はなく、またそれを立場とすることによつてのみ、新黨準備會の立場は、階級意識の熾烈戰闘的な勞農大衆の要求

と一致するのである。

それ故にまた、我々が新たに生まれた無產大衆黨を見る眼も、必然的に我々のその立場によつて制約されざるを得ない。同黨の出現そのものが新黨準備會の基礎に微動をだも與へるものでないとは、我々がその當時から信じてゐたことであり、またその後の諸事實が着々その誤まりでなかつたことを證明してゐることでもある。だから、その點からは、我々は言ふべき何物をも持たないのだ。だが、一たび觀點を換へて、鬪爭のための階級戰線の統一の視角から同じ現象を見るとき、我々は最早それを默過することが出來なくなるのだ。假りに若し、無產大衆黨の出現がその一點から是認することが出來たものだとするならば、たとへそのために新黨準備會の存在が永久に失はれようとも、我々はそんなことには一切頓着なく、當然衷心からそれを歡迎することが出來たであらう。だが、不幸にして、我々から見れば、實はその點からこそ無產大衆黨の出現は最も痛烈に批評されなければならないものだつたのだ。私は次に、それに關する私の所見を、出來るだけ簡單に、だが毫末も忌憚なく語るであらう。

三　無產大衆黨出現の印象

まづ我々は一言、我々の感じから言はう、無產大衆黨が出來た當時に、私は、ふと『何をなすべきか?』のうちの次の文句を、私の記憶の上に喚び起した。

『隙間なく團結し、しつかりと手を執り合つて、我々は嶮しい困難な道を續けて行かう。我々は四方から敵に取り卷かれてゐる。そして殆んど絕え間なく、彼等の砲火を浴びながら進んで行かねばならないのだ。我々は、敵と鬪ふために、また、近くの沼地へ落ちないために、各人承知の上の覺悟で結びついてゐるのだ。その沼地の主人達は、我々が和解よりも鬪爭を選ぶ特殊な一團を作つたことについて、絕えず我々を非難攻擊してゐるのである。ところで、最近我々のうちの若干の人々が、「沼地へ行かう!」と我々に云ふ。で彼等にその恥を知らせようとすると、彼等は抗辯して云ふのである。諸君は何といふ時代遲れの人間なんだ! 諸君は我々がもつと良い道を辿るようにと諸君に勸める自由を拒否して何とも思はないのか?」と。どう致しまして! 諸君が我々を勸誘するのは自由である。のみならず、諸君が善しと思ふ道を續けるのも諸君の自由である、たとへそれが沼地であらうとも。いやそれどころか、その沼地こそ諸君のほんとの居場所なのだ。我々はいつなんどきでも諸君が其處へ轉居するのをお手傳ひしよう。だが然らば、諸君は我々の手を放して貰ひたい。我々にかぢりつくのを止して貰ひたい。そして自由といふ立派な言葉を汚さないで貰ひたい。我々も亦、我々が善しと思ふ道を續けて行く「自由」を有つてゐるのであるから。そして沼地と鬪ひ、沼地でまご〲してゐる連中と鬪ふ自由を有つてゐるのであるから。』(齊野季吉氏の譯書から。)

右の引用文は、初めに言つた通りに、我々の感じに關聯して引き合

りに出されたもので、それ以上に私は、その一々の文句が我々の場合に當て嵌めて具體的意味を帶びさせようとしてゐるものではない。この點は、起り得るあらゆる誤解を防ぐために、特にキッパリと明言しておく。

だが、感じを言つただけでは餘りに漠然としてゐるといふなら、私は私が當時考へてゐたこと、並びに今日でも考へてゐることの一端を以下に摘記しておかう。

四　左右兩翼への挑戰

無産大衆黨の宣言には、階級戰線統一への努力が簡約されてある。即ちそれには『我々は一方に於て斷乎として謂ゆる極左翼分裂主義の傾向と戰ひ、他方に於ては、今や高まらんとする右翼分裂主義と鬪爭し、我國勞農大衆の熾烈なる階級的要求たる、單一無産政黨の結成實現のために努力するものである。』(傍點筆者)と述べられてある。

だとすると、同じく階級的戰線統一を急務とする我々に於て、毫もそれに反對する理由がないやうである。だが、問題はさう單純には片附かない。人が自分がかういふものだと思ひ込んでゐる自己評價をそのまゝ事實と符合してゐるものだと決めて掛かることの危險に關しては、マルクスが一再ならず警告してゐる。しかし、今その點を離れて考へても、我々が無産大衆黨の右の聲言に贊否を表白する前に、我々は尚ほ、同黨の意味に於ける階級戰線統一は、果して我々の意味に於ける階級戰線統一と同一の意味に屬するものであるか否かの問題を決しなければならない。そして、この問題に對する我々の答へを端的に言つておくことにすると、それは斷然『否！』である。

我々の意味に於ける階級戰線統一を最も簡單な言葉で性質づけると、それは對支配階級鬪爭のための階級戰線の統一であつて、しかもそれは、それへの道程に於ても絶えず對支配階級鬪爭を重ねることによつてのみ到達し得られるものである。ところが、我々の見るところでは、無産大衆黨の意味に於ける階級戰線統一は、決してそれと揆を一にするものではない。この相違は根本的相違の一つである。そしてこの點は事實によつて立證されなければならない。で、私は段々にそれを試みて行くであらう。

無産大衆黨が、一方に於て階級戰線統一への努力を聲明しつゝ、他方に於て極左翼分裂主義および右翼分裂主義に對して敢然として挑戰してゐることは、具體的事實を離れて單純に抽象的に論ずる場合には、我々は別にそれに對して異議を言ひ立てる必要を認めない。我々も嘗ては舊勞農黨に於て、究極の階級的單一無産政黨を目指して進みながら、同時に他の諸黨の指導精神を猛烈に排撃して、しかもその間に別に何等の矛盾を感じなかつたものだ。だから、それはそれでいゝ。

更らにそれを現實問題として考へても、無産大衆黨が右翼分裂主義に抗爭すると宣言してゐることは、我々も或る意味に於て同感が出來る。のみならず、若しそれが、左翼戰鬪分子との合同を極力拒否する

新たに產まれた無產大衆黨も、新黨準備會攻擊にかけては、產まれない前から既に、決して後れを取つてはゐなかつた。遂に彼等は、その結黨式の際の宣言に於て、それの上に『極左翼分裂主義』の烙印を捺しつけるに至つたものだ。

極左翼分裂主義！　さうした式の攻擊は、舊勞農黨や新黨準備會にとつては、決して珍らしいものではなかつた。嘗て舊勞農黨の鬪爭が熾烈化すればするほど、右翼および中間派の陣營から、それに向つて『左翼小兒病』の罵聲が濫發されたものであつた。しかもそれは、その言葉の創始者の權威によつて、甚だ勿體ぶつて放たれたものであつた。さうした際には、我々はよく、『惡魔も聖書を引用する』と、どこかで讀んだシェクスピアの文句を思ひ浮べたりなどしたものであつた。最近に至つては、反動的論客の側からもマルクスからの引用句が屢々發射されるやうな世の中とさへなつた！

だが、新黨準備會に『ウラトラ・リンケン』のレッテルを貼りつけるとは、無產大衆黨にとつては、一の存立問題だつたのだ。それは『我々こそ穩健な政黨だ』といふことの實證を示し、當局に『これなら許してもよからう』と言はしめる根據を示すために必要だつたのだ。それ故に無產大衆黨に對して內務當局は、『これまで當局の調査した限り

いはならない』といふことを條件としてだが、とにかく許られてゐる。（七月二十四日附『東朝』夕刊、傍點筆者。）また、警視廳當局は、『もし宣言、綱領に不穩當な條項があらば、その部分だけ抹消して、他に差支ない際は、官憲の方と黨の方とが會見し、懇談的にその部分の改訂なり削除なりを行ふものと思ふ』と言つたとも傳へられてゐる。（同上。）同黨にとつては、誠に以て天下泰平至極の仕誼である。だが、內務當局をして何時までも『必要に應じて必要の處置』をとらせないやうにするためには、同黨の當事者としても、今後隨分と氣骨の折れることであらう！

六　合法性強調の蔭に潜む眞意圖

無產大衆黨の宣言は、同黨が合法的大衆黨であることを特に強調してゐるが、これは恐らくそれ自身と舊勞農黨および新黨準備會との對立を明白にしようがためであらうが、しかし生憎にも、舊勞農黨は合法的大衆黨であつたし、また新黨準備會が再建しようとしてゐる新勞農黨も同じく合法的大衆黨であるべく企てられてゐる。だが、他方に於てはまた、無產大衆黨が頻りに『合法的』を振り廻はすのは、當局

宣言中の表現を用ふれば、それが[illegible]を露骨に表明した黨だつたからであつた。だからこそ、鈴木前內相の如きも、議會に於て舊勞農黨および外二團體の解散理由を說明した際には、それらが非合法的のものだつたとは言はないで、共產黨と一脈の血が通つてゐた、とかいつたやうな名文句でお茶を濁ごしたのであつた。しかも、舊勞農黨が共產黨と一脈の血が通つてゐたことを示す、、が當局に持ち合はせがなかつたとは、同黨の解散に關して新黨準備會が提起した行政訴訟の第一回公判の狀況によつても知られる。かういふ我々自身の經驗から出發しても我々は、『合法的可能性を極度に發揮』し得る政黨といへども、たゞ大衆の結束の力で戰ひ取るより外はないことを確信してゐる。ところが、無產大衆黨はさうではなくて、口でこそ階級戰線統一を叫んでゐるが、しかし同時に左翼の戰鬪的分子には極左翼分裂主義の烙印を捺して、それと『斷乎として』戰ふことを誓つてゐるのだ。さういふところからもまた我々は、同黨のいはゆる階級戰線統一の眞の意味を充分に讀み取ることが出來るのである。しかもさうした立場を取る同黨が當局に解散の口實を與へまいとすれば、勢ひ舊勞農黨が解散を強制されたのは同黨に罪があつたからであることを示唆して、當局と懇談的に事を運ばなければならなかつたであらうことも、段々に諒解ができる。さうだ！　餘りによく諒解ができる！

無產大衆黨をはじめ、その他の諸無產黨が一團となつて、舊勞農黨及び新黨準備會に極左翼の罵聲を浴びせかけ、そして前者がさきに解散の憂目に會ひ、後者が今なほ[illegible]ことには、まの卑しむべき小兒病のためだといふ意味を示唆してゐるのには、我々が一度倒れたら永久に起き上がることが出來ないもの[illegible]上に立つてゐるものでなくてはならぬ。それは馬鹿げきつたことだ。我々はマルクスと共に、ブルジョア側の諸運動が如何に花々しくとも、一たび躊躇すると忽ち槿花一朝の夢に終るのを習はしとするに反して、プロレタリアートの諸運動は、幾回となく起つては倒れ、倒れてはまた起ち、と言つたやうな過程をつゞけながらも、遂にその究極目標に到達するまではその進行をやめないものであることを確信する。それ(プロレタリアートの運動)は、『第十九世紀のそれらの如く、常にそれ自身を批判し、不斷にそれ自身をそれ自身の進行過程に於て中斷し、一見恰かも完了されたものゝ如く見えるものゝ上にもそれを再び開始しようがために立ち歸つて來、それの最初の試みの中途半端さ弱さ慘じめさを無慈悲に根本的に侮蔑し、それがそれの敵を倒すのは、彼〔敵〕をして大地から新鋭の力を吸收して再び巨人の如くそれ自身の進路に立ち塞がらせるための如くさへ見え、又しても又してもそれ自身の目的の不測の偉大さに畏縮し、遂に如何なる退却も最早不可能だといふやうな局面が創り出され、當面の事態そのものが「ロドスはこゝだ！　踊れこゝで！」と呼びかけるに至るのだ。』(『ブルメール十八日』から。)さうだ！　我々は現在我々がおかれてゐる地位にあつても、少しも意氣沮喪などしてゐるものではない。

七　誰れが眞の分裂主義者か？

我々は既に、無產大衆黨の意味に於ける階級戰線統一と、我々の意味に於けるそれとの間の根本的差異を見て來た。それは玆に來て必然的に、『誰れが眞の分裂主義者か？』といふ問題に連繋する。

今若し假りに、舊勞農黨および新黨準備會が、無產大衆黨の幹部諸君が強調する通りに、極左翼小兒病の批難に値するものであるにしても、しかもそれは彼等が、支配階級に對して以上に『斷乎』として挑戰すべきものであり、如何なる場合にもそれとの共同鬪爭を絕對的に拒否すべきものであり、合同問題の圈外へ放逐しなければならないものであらうか？　極左翼小兒病患者にしても、同一陣營內に籍を持つてゐる以上は、それを支配階級以上に憎惡し、それを徹底的に無力化することを使命としてゐるやうに見える無產大衆黨の幹部諸君の態度は、果して階級的立場から是認され得るものであらうか？　要するに彼等の態度は、我々には階級的立場からは、遂に理解することが出來ないものである。特に彼等が警視廳當局とさへ懇談的に事を運びかねまじきことを新聞で讀んだりなどする場合には、我々は尙ほ更らその感を強くしない譯にゆかないのだ。

我々はさきに、若し無產大衆黨の宣言中にある『右翼分裂主義への抗爭』が、左翼戰鬪分子との合同を拒否するところの右翼（いはゆる中間派を含めての）諸黨の幹部諸君の態度への批難をも含むものとするならば、我々は積極的にそれに同意することを躊躇するものでないとの趣旨を述べた。そして我々は尙ほそれに關聯して、舊勞農黨も當て階級的單一無產政黨の目標を目指して進みながら、同時に他の諸無產黨の指導精神を猛烈に排擊したことをも述べた。その際に我々が更らに一言それに附け加へるべくして實は今まで保留しておいたことが一つある。それは、兩者のさうした態度の間には、かゝる著るしき相似點があるにも拘らず、別にまたそれにも劣らず根本的な相異點があるといふ一事である。それは眼前の局面に對する兩者のそれぞれの地位の相異から來てゐるものである。その點を今少し詳しくいへば、舊勞農黨は同黨から實際に分離して行つた他諸黨に向つてこそ、それらの態度および行動を支配した指導精神に對して挑戰したのであつた。ところが、無產大衆黨はこれに反して、舊勞農黨もしくは新黨準備會から實際に分離——脫退——して行つたものゝ多數をその黨員として擁してゐて、その立脚地から、それらの脫退者たちの母胎であるところの、舊勞農黨の後繼者としての新黨準備會に向つて『斷乎として』挑戰する傍ら、右翼分裂主義への抗爭をお相伴的意味に於て聲明してゐるにすぎないのである。かゝる形式上の事柄も、我々から見れば、『誰れが眞の分裂主義者か？』の本質的問題を解決する上に於て、至大な關係があるものなのだ。

更らにまた、無產大衆黨が新黨準備會の上に『ウルトラ・リンケン』の烙印を捺すことによつて、それへの支配階級の彈壓に肯定の根

態を異ふるが如き反動的役割を演じてゐることも、日農が意識的もしくは無意識的に分裂主義の地金を發揮してゐるものと見ることができるのである。同時に、同黨のその遣り口は、從來勞農黨および新黨準備會を支持しながらその意識がまだ成熟の途中にあるやうな若干の後れた人々を畏怖せしめ退却せしめる効果をも持つ可能性が充分にあるものとさへいふことが出來るのだ。

次に無産大衆黨が、日勞黨との『後日の合同』を保留條件として組組されたと言つたやうな廻り道を辿つてゐることは、徒らに平地に波瀾を起すことによつて、無産階級戰線を無用に攪亂し、それだけ支配階級の攻撃力を强めてゐるものであり、從つて間接に支配階級の分裂政策を幇助してゐるものだといふことができるのである。

要するに、我々の所見を忌憚なく直言すれば、無産大衆黨は、支配階級との闘爭が要求されてゐるところにそれとの懇談もしくは妥協の態度を持ち出して來、無産階級の全勢力の結束が要求されてゐるところにその攪亂を惹起し、闘爭のための階級戰線の統一の實現が要求されてゐるところにその幻影を浮き上がらせてゐるものである。

だが、無産大衆黨がいつまでさうして態度を持續してゆくことが出來るであらうか？　それは一個の疑問に相違ないが、しかし解きがたき疑問では決してない。支配階級は既にその、、を通じて、無産大衆黨に對しても遠慮なく、將來『必要に應じて必要の處置を取る』であらうことを警告してゐる。他方、反動諸團體は、既に日勞黨の解散に味を占めて、[illegible]までを、支配階級に迎合せしめてゐる。この上、[illegible]の漸次的接近は、支配階級の攻撃を[illegible]化しつゝある。等々。かくて近き將來に於て、かゝる諸傾向に對して、無産階級の全線に亘っての共同闘爭要求が益々熾烈に燃えさかるであらうとき、そのとき彼等の行く方は？　そのときは、彼等は現在よりも更らに一層意識的に右翼化して、公然と社會民主主義者たるを誇りとするに至るであらうか？　それとも彼等は竟に闘爭のための戰線統一の實現への努力にまで追ひつめられて、敢然意を決して左翼戰闘分子との合同をも拒まなくなるに至るであらうか？　我々はその何れたるに拘らず、我々自身の一本道を追うて着々前進し、眞に闘爭のための階級戰線の統一實現に貢献することならば、如何なることにでも全身的努力を捧げることを辭さないであらう。

日支條約破棄と經濟關係の將來

國民政府の條約破棄と其波紋

嘉治隆一

（一）

政友會政府は東三省に於ける青天白日旗樹立の阻止と所謂「濟南事件」の解決とを成し遂げさへすれば、支那問題は解決するかの如く考へてゐたものゝ如くである。然し乍ら若し張學良に戒告を發したり、拔目のない周圍の連中に借欵を交渉したりして辛うじて五色の旗を守り續けさせても一向大勢に影響のない事は餘りに明白である。現に所謂「幣原外交」の前外相すら「滿洲に青天白日旗の飜るのも始めから豫想し得られたことである。從つて對支政策を今更ら立直すなどゝ遽く

南方政府の統一策に反對の態度をとる如きに至つては……蹶起して政府彈劾に出でねばならぬ」（同二十二日）と云つてゐる位である。それ程であるからこの旗印のとり換へなどは大した問題でなく、隨つてそれが政府の思わく通りに決着した所が問題は依然として殘されてゐる。「濟南事件」にしてもさうである。政府としてはあれほどの反對を押し切つて二千五百萬圓の國帑を煙にした上に少からぬ犧牲者をまで出した以上は、何とかきまりをつけなければ面目玉が潰れる譯である。それだけに仲々夢中であるけれども、之も支那側から延引々々を

そこへ一個の新たな問題が國民政府から提起されたのである。不平等條約の廢棄がそれである。之は少くとも政友會政府の問題としてゐた處に比べると遙に興味の備つた問題である。蓋しそれの背後に時勢の流れが潜んでゐるからである。

（二）

國民政府が今この問題を提出した動機に就て考へるに、それが對內的にも對外的にも多分に政策的意味を含んでゐる事は見逃せないが、然し、そこには場當り以上の根强い基礎があると見なければならない。

由來、打倒帝國主義と不平等條約改正とは國民黨多年の持論である。而して前者はヨリ多く破壞期の問題であり、後者は主として建設期の問題である。今日、國民政府が完全に建設期に入つたと見ることは勿論早計であり、現在と雖も直接に外國の帝國主義を打倒すべき必要は依然として存續してゐるけれども、目下の所は從來よりも建設期に入つてゐることは何といつても爭へない事實である。或は言葉を換へて、武力から外交に移る餘裕を生じつゝあるとすることも出來るであらう。

打倒帝國主義が列强の抑壓、侵略及び干涉に反對する運動であることはいふまでもないが、第二の不平等條約の改正は之を大別して關稅自主權の恢復と治外法權の撤回（領事裁判及び居留地の回收等）との二にすることが出來やう。而して今度、國民政府によつて廢棄を聲明されたのは日支條約中で主として通商に關するものである。而して此の日支通商條約は一昨年（一九二六年）十月十九日を以て一旦滿期となつたものであつて、其の當時北京に於て改正の交涉が始められたにも拘はらず、戰爭、政變其他の故障によつて協議不調に終つた結果、終了期を少し宛延期して現在に到つたものである。然るにその最後の期限がこの七月二十日に當つてゐたゝめに、國民政府はこの日を以て滿了を宣言し、直ちに新なる交涉に入つて條約の改正を協議しやうと提案し、それが出來るまでの間は、應急的に臨時辦法を以て之に當て度いと通告して來た。

之に對して政友會政府の解答は、この條約の第二十六條に於て、有效期間を定めた條項を見るに該條約の批准交換の日である明治廿九年十月十九日より起算して滿十年を以て有效期間とするが、滿期の年月日より起算して六ケ月以內に締約國の一方より通商及稅率に關する項の改正が提議せられなければ、又次の十年間は有效に存續すると定められてゐる。所が最近の滿了期たる一九二六年十月十九日より六ケ月以內、即ち昨年四月十九日までに有效なる改正提案がなかつたゝめに、當然、舊條約が存續し、更に十年間、即ち一九三六年（昭和十一年）十月十九日まで有效である。隨つて今日俄に條約を破棄しても無效であるといふにある。

支那は廢棄を通告し、政友會政府は之に應じない。而も各々が道理のある所を主張して相下らないとなれば、要するに水かけ論である。

之を決するのは唯力あるのみである。然し、力にも色々ある。武力も力であれば、世界の大勢も力である。その何れかによつて事が決せられるか、或は又、何れによつても決せられないか。このことは事實に據つて判斷するの外はない。

（三）

日支條約を論ずれば支那の稅權と法權とに制限を加へるものに外ならないが、この種の不平等條約が締結せられたのは、例のイギリス資本主義の印度を通じてなした支那壓迫の最初の現れたる鴉片戰爭（一八三九—四二年）の結果として締結せられた南京條約を嚆矢とする。爾來、世界に於ける資本主義の先進國イギリスは各種の特權を其手に收めると共に關稅と司法とに關する利益をも完全に得るに至つた。其後長髮賊の亂（一八五〇—六二年）があり、督軍雷以誠によつて始めて仙女鎭に釐金稅が課せられたり（一八五三年、これは內亂平定後必ず廢止せられるといふ約束であつたが其後繼續して今では釐金各七百九十、分局五千三百以上に達するといはれてゐる）した間に、イギリスは天津條約（一八五八年）を結んで益々既得權を確保したが、次で列國は最惠國條項によつて、この特殊利益に均霑し、當時は同じく差別的條約に苦しめられてゐた日本すら、日清戰後之に均與するに至つたものである。其後更に一九〇〇年の團匪事件の結果として列國は支那に於て益々優越的地位を占めるに至つた。

日本は一九一五年に所謂對支二十一ヶ條をつきつけて支那に於ける特殊的地位を獲得したが、ヴェルサイユ條約（一九一九年）及びワシントン會議（一九二二年）等を經て漸次、列國と相携へて支那の差別待遇廢止の原則を認めるに至つた。之については英米等の、、もあつたことは見逃せないが、一九一九年五月四日の五四事件に續く排日不買同盟の、、も輕視してはならない、その後、支那の資本主義的洗禮と勞農ロシアの影響等により、漸次この國が獨自の立場を發揮して列國に對抗する樣になつた形勢に動かされて、日本も一九二六年の北京の關稅會議には率先して支那のために計らんと努力するに至つた程である。不幸にして會議は支那の政變と戰亂とによつて中止するの外なかつたとはいへ、その時の事は世人の記憶に新なる所であらう。

然るにその後約二ヶ年を經た今日、支那は這次の通牒（七月十九日）を發したに對して北京日本大使館は同三十一日付を以て「條約の廢棄は法理解釋上從來の交渉の經過に顧み絕對に同意出來ないこと。國民政府が若しも條約廢棄の主張を撤回するなら改訂の協議に應ずるに毛頭異存ないこと、」（八月二日「東朝」）を解答した。

嘗ての日本と今日の日本との間にどれほどの事情の相違が發生してゐるであらうか。單に外務當局が變つたといふ簡單な理由から今日の日本の强腰を說明せんとするは餘りに皮相の見たるを免れない。（例へば北京公使は當時も今も同一人である。）肝要なことは政友會政府が、かくの如く對外硬であると同時に對內硬であることである。隨つて何

故にそれが支那に對して強く出るかとの理由は、何故にその同じ內閣が國內に於て無產階級運動を彈壓し、そして又、議會を開いても殆ど休會ばかりで通したかといふことの理由を考へ合せれば自ら分るであらう。他國に對して強硬に出る政府で、國民を、、に取扱はないものは未だ曾て稀である。日本も曾て自らの條約改正のために長年苦しみ抜いた經驗をもつてゐる。その時の印象は未だ充分に殘つてゐる筈である。又、年來、日本こそ支那の眞の盟友であり、唯一の同文同種の強國であると力說し來つたことも彼等の記憶に新な處であらう。然し乍ら、政友會政府は、他の立場を考慮する前に、先づ自らの立場を護らなければならないのである。

（四）

それは兎に角として支那の條約廢棄は啻に日本にのみ向けられた矢でなかつたことは勿論である。之より先、七月十七日には先づイタリアに向つて同じことが通告せられたが、ムッソリニの政府は勇敢に之を拒絕した。然るにその後二十五日に至つてアメリカは突然自ら進んで支那との間に差別的條約の撤廢を協定し、一九二九年一月一日以後、支那の關稅自主權を回復し、國定稅率の適用を容認し、それと同時にアメリカは支那から最惠國待遇を許されることゝなつた。このアメリカの特權破棄は列國を驚かしたことといふを俟たないが、その眞意が那邊にあつたに關しては、この聲明を發した同國國務卿ケロッグが一方に於て、六月二十一日各國に向つて不戰條約の締結を提案したのと同一人であることを見れば、蓋し思半に過ぐるものがあらう。要するに同國の肚は日本の支那滿蒙に於ける軍事的行動に掣肘を加へ、巧みに支那の意を迎へて利益を得やうとしたのである。所が、この形勢に眩かされたイギリスも亦、八十年來の特權を棄てゝ同じく不平等條約改正の交涉に入らんとしてゐる外、フランスも亦佛領印度支那と共に同一の交涉を開始しやうとしてゐると傳へられる。ドイツも亦、公使館を南京に移して、國民政府を承認する積りの如くであり、他の主なる列強も之に倣はんとしてゐる。(但し日本は飽くまで北京を離れない決心と新聞紙は傳へてゐるが、眞僞は未詳である。)何れにしても、イギリスを代表して海關の元締をしてゐる總稅務司エドワード自身が上海稅務司ホワードを伴つて國民政府を訪れ事務の報告をなすと共に今後の諒解を得たといふ事實は何よりもこの問題の前途を暗示するものではなからうか。

殘るものは、唯、ムッソリニのファシスト政府と田中大將の政友會政府とである。而も惡い事には彼が拒絕を聲明することによつて失ふ可きものを殆んどもたぬに對して、之は又失ふ可き餘りに多くのものをもつてゐるのである。今後一體どうなつて行くか。恐らくは政府自身にも見定めがついてゐないのではあるまいか。

（五）

アメリカが斯くも列國を出し抜いて國民政府の歡心を迎へたことは右にも述べた通り、日本政府の政策に對抗して粟よくば之にとつて變らうとする目的があつたことは否めないが、又、一つには、支那の政情が安定して統一政府が成立して呉れゝば安全な市場が開拓されると考へて、その時に利益を得ることを心から望んでゐるためとも見られる。そして大陸に於てイギリスも同じ立場をとる事が出來るし、フランスは又、南西の一隅で支那から利益を得てゐるのであるから、南方政府とはどうしても好意的關係を保つ必要がある。其他、多少とも支那に於て利害をもつてゐるベルギー、オランダ、スペイン、ポルトガル等も恐らくは之の前例に倣ふものと察せられる。

さて、之等の形勢を見て取つた國民政府は愈々潮流に乘つて、治外法權の撤廢を求めるであらうことは當然の徑路であるし、最後には各國の撤兵をすら要求するに至ることは必定である。既に第二の段階に移らうとする實例が七月二十日及二十八日に上海に於て現れた。卽ちイタリア人に關する裁判についてイタリア領事の會審が拒否せられたのである。（七月二十二日及三十日「東朝」）而もこれは恐らく今後も頻發するに相違なからう。そして曾ては同じ樣に非常な危惧を感ぜられてゐた日本が兎も角、治外法權撤廢の弊害もなく、今日の

入口の有名な立札の文句支那人入る可からず。犬
（Chinese and dogs are not permitted）の如きも、今日ではもはや見て過ぎる譯には行かなくなつて來た。

續いて起る可きは必ずや各國駐屯軍の撤廢運動であらう。之も團匪事件（一九〇〇年）の產物であるが、米英佛伊日等が公使館區其他に僅か許りの兵隊を置いても巡警以上の威力を示すことは困難である。日本にしろイギリスにしろアメリカにしろ、一朝事ある時はいつでも本國の軍隊を派遣して目的を達してゐる事實を見てもそれが分る。而もそれ位の小軍隊（各國合せて五千人位）が支那にとつてはどれほど不愉快な目の上の瘤であるかは想像に難くない。、、、、、、、、、、、、、、、、駐屯軍はやがて全部を引上げる時が來るであらう。而してその時に眞先に贊成するのはやはり英米であるに相違ない。英兵の長江駐屯當時の撤兵、先頃の米兵の開灤炭坑引上等の經驗が之を裏書してゐる。かくして國民政府の諸要求は次々に充足せられるの外はなからう。

利用して世界の變革を目論んだ國である。それは實に一度は頓挫したにとはいへ、勞農ロシアその者が滅亡しない限り、必ずや捲土重來して初志を貫く機會を狙つてゐるに相違ない。

次には支那の無產階級である。彼等は曩に香港、上海、青島、開灤等に於て排外的罷業を決行することにより、燃え盛る國民革命運動に油を灌いだ末、遂には運動そのものを漸次左向せしめんとする氣配も見えたが、時利あらず、國內軍閥、買辦、地主、資本家と外、列強との壓迫によつて屏息したかの如く見えはするが、それは決してその儘に果てるものではない。

假に國民政府の手によつて全國の統一が出來ないまでも、今少しく政情が安定し、各都市を中心として再び產業が勃興する樣になれば、彼等は又新なる力を盛り返すであらう。彼等にとつて過去の失敗は教訓であつた、而已ならす、若し現在の國民政府が列國に對するその要求を貫徹せんがために、今後、罷工、廢市其他の排外運動を起すことでもあれば、その時は無產階級の乘ずる時であらう。彼等は外國の勢力驅逐の運動に參加し、その極、終に國民政府自身をも葬り去らんと努めるであらう。國民政府たるもの、對外剛の態度を示さなければ、大衆の信賴を失つてその地位が危くなり、而も實質的に對外剛の手段に移らんとすれば無產階級の支持を得るの外なく、而も彼等の力を借りることは軈て自らの墓穴を掘る事となる。正しく痛し痒しの矛盾に苦しまざるを得ない立場にある。

(七)

支那に於いて國民政府の諸政策の成功する事は必ずしも總ての資本家諸國にとつて脅威を齎すものではないかも知れない。それは現にアメリカの如きが進んで差別撤廢に努力してゐることを見ても分る。乍併、半植民地支那の復興は、之を取圍む諸地方、即ち各國の領土、植民地、保護國の擡頭を促さずには措かない。英領印度を始め、東印度諸島及半島、フイリッピン、それに、昔支那の直轄の下にあり、今日列強の勢力下にある安南、暹羅、緬甸、西藏、其他の地方、さては又少し離れたトルコ、ペルシア、アラビア、アフガニスタン等までが必ずや動搖を免れないであらう。そして之等の國土の動搖は勢ひ、之を領有する各帝國主義諸國に傳はらざるを得ない。

それと同時に、一面に於て支那の復興は、支那自身を變革すべき無產階級を發展せしめるが、それが又、一方に於ては右記諸領土の被壓迫民族を刺戟して之を結束せしめると共に、他方に於て之等諸領土の征服者たる諸強國自身の中に多くの無產階級を振興せしめるに至る。—そして彼等はいつかは暗默の中に提携をなすであらう。廣東の支那非三國交通勞働者會議(一九二四年)、漢口の汎太平洋勞働組合大會(一九二七年)及び被抑壓民族會議(一九二七年ブラッセルに開かれ、アジア、アフリカ、アメリカの代表集る)等はその適例である。

要するに、國民政府の提出した這次の條約破棄の問題は、それが彼

等の操縦に委ねられるに止つてゐる間は、問題が簡單である。然し、その波紋はやがて擴大し、海を距てた諸地方にも及ぶに相違ない。そしてその反射が寄せ返す時、即ち國民政府そのものゝ葬り去られる時であり、而も其時こそ支那の無産階級運動が、、、、、、時である。

日支經濟關係と武斷政策

高橋龜吉

一

過去幾度かの「對支武斷政策」が、結局、排日貨の外、何ものゝ收穫をも齎らさなかつたと云ふことは、我が資本家階級が何人よりもよく之を知つてゐる。かつては、我が對支發展の唯一の「力」であつた「軍隊」も、いまや、その「威力」を發揮する餘地なく、却つて、日支經濟關係を「惡化」さす作用のみ徒らに大であると云ふことは、過去數ヶ年の歷史が繰返し教へてゐるところである。國民政府の駐日公使に決定せる朱兆華氏が、東京朝日新聞の記者に語つて――同紙香港

現に、所謂「濟南事件」がア丿樣に、、、、、、、、、、せられたるにも拘らず、我が國民の感情は、軍閥の豫期せし如く「激昂」しなかつた。今度の國民政府の「條約破棄」に對しても、田中內閣異常の「大決心」にも拘らず、國民一般の態度は「冷靜」だつたと云ふに躊躇しない。尠くとも、之を過去の斯種事件に比し、一般國民の態度は著しく批判的であつた。

此間に於て、一見、極めて不思議なる現象は、「排日貨」運動のため直接に最も大きな打擊を蒙る資本家階級一般が、少からず「強硬論

[illegible]濟實力に由つて發展すべきである」と。

いかにも、かつてに英佛獨等何れも、武力を以てその帝國主義的發展の「武器」とした。しかし、かくて或る程度まで自國經濟の發達するや、彼等は、露骨に「武力」を振り廻す代りに、之を奧深く秘めて、表面上「平和的」に經濟力を以てその帝國主義的發展を續ける手段を撰ぶに至つた。就中、イギリス帝國主義の秘訣はそれであつた。我國自由主義者の一派は、日本の資本家も亦、此の途を追ふべきだと主張する。時代は已に、世界的にも國內的にも、その時期に這入つて了つたのだと云ふのがその理由である。

斯樣な考へ方は亦、多少內外の事情に注目を拂へる我が資本家、政治家、軍閥等の間にも、「議論」としては一應認められてゐないわけではない。事實、「武力に由る對外發展の時代は最早過ぎた」と云ふことは、シベリヤ出兵以來の幾多の體驗に由つて、軍閥それ自身の間にも、近頃漸く認められつゝある傾向だと云ふ。にも拘らず、我が對支外交が、依然、武斷主義に偏し、資本家階級亦之を謳歌し支持しつゝある理由如何?!

二

最も後れて支那に發展の天地を見出さうとする米國は、日英佛其他の已得權の繩張りを不便とし、由來、之を打ち破る方法として「機會[illegible]に對して、米國は最近に於ても、最も「自由主義的」政策を採たこともも亦當然である。その上、米國の經濟力は「特權なし」の丸裸の競爭に於ては、日英佛その他の資本と競爭して、優に勝利を占め得る實力を滿に有せるのみでなく、今後支那資本主義經濟が發達すればするだけ、それに所要の機械その他の設備を買込み、以て、將來益々對支發展を遂げ得る事情に在る。之れ、等しく帝國主義的野心を藏しながら、米國の對支政策が、常に最も「自由主義的」である所以だ。

之に對し、英國の對支政策は、日本のそれに比すれば少からず「自由主義的」ではあるが、しかし米國のそれに比すれば著しく武斷的である。思ふに、その根因は要するに次の二點に在る。即ち、米國よりも著しく武斷的なるわけは、英國の對支已得權が米國に比し遙かに多いからだ。かつて武力に由つて贏ち得た已得の「特權」を守らうとすれば矢張り武力に由る外に方法はないからだ。之に反し。日本の對支政策に比すれば英國のそれが遙かに進步的であり自由主義的であるわけは英國の經濟力が日本のそれより遙かに强大であるからだ。例へば、英國の對支輸出及び對支投資は、今日の「特權」を失ふも、前途尙ほ少からぬ發展餘地あるも拘らず、日本のそれは、今日の「特權」を失へば、その前途の發展力は前述の如く極めて限られる事情に在る。斯樣のわけで、英國の對支政策は常に日米の中間に在る。

以上英米の對支政策に比すれば、周知の如く、日本のそれは、常に

著しく「武斷的」である。しかも、己述の如く、その「武斷政策」が結局、排日貨の外、何ものゝ收穫をも齎らさゞること明かなるにも拘らず、依然、我が對支政策は、、、、、、、、、、を續けてゐる。蓋し、我が經濟の對支發展は、己得の「特權」をモギ取られゝば、その殆んど全部が、その發展力を喪失するに至るからだ。而して發展力を維持する唯一の力は、いまも昔も、その「武力」以外にない。之れ我が帝國主義者が、英米の如き「自由主義的」態度を以て、支那に臨み得ず、ことく\に、、、、、武斷政策を弄する所以である。

しかし乍ら、此の我が對支武斷政策は、或る一派の信ずるが如く、日本帝國主義の對支「進出」を指標する意義を有するものでは決してない。反對に、私見に由れば、それは、宛かも、溺れるものが藁をも摑まんとする場合の如く、我が帝國主義者の漸く「希望」を失ひつゝある徵候を示すものに外ならない。見よ、武斷政策の背後にある人々を。彼等には、いま「武力」に由つて對支發展を所期し得る自信はない。少くともその自信は浮草の如く動搖してゐる。だが、英米の如く、スッ裸な「經濟力」で以て、今後に於ける對支發展を期待する力は、現在の日本經濟にはない（後述するであらう）。こゝに於て、致方なしに、十を失ふよりも八を失ふの方法を・・・・と云ふの意味に於て、[illegible]

ありく\と見へること等々之を證明する材料に乏しくない
、、、、、、の夢が周知の如く敗れたのだ。、、、、、、、、、をやつたところで、精々のところ、己得の特權が或る程度まで守られるに過ぎず、、、、「、、」に値する新たな收穫は到底之を期待し得ない——各國の帝國主義的勢力のバランスと支那民衆の自覺とが之を許さない——ことは明かなことであるからだ。しかも、その「己得權」すらも、帝國主義間の利害の矛盾から、漸次に之を吐き出す外にないこと（現に治外法權の撤去、關稅自主權の回復については原則的ながら之を認めざるを得ず、その實現も遠からざる大勢にある）は周知のことである。これでは、、、、、、、、、、、、、、、、、、、得ない筈であらう。

三

さきに私は、現在日本の經濟力では、『己得の特權』を離れては、啻に今後の對支發展を期待することが出來ないのみでなく、現狀維持すらも困難であると云ふ意味のことを述べておいた。以下、そのわけを概述するであらう。

云ふところの我が經濟の「對支發展」は、要するに（一）對支從

以て我の對支經濟投資である。一體に、資本主義一般の法則に從ふと、これだけの巨額の資本が、日本から支那に流れ出すと云ふには、支那は勿論英米その他の資本よりも、日本の資本の方がそれだけ有利であつた結果、競爭に勝つたのだと云ふことを前提とする。しかし、事實はこの對支投資は、日本の經濟力が支那及び英米その他のそれに優つて、有力であつた結果を示すものでは決してなくて、主として、日本の得たる「特權」が、その甘味を以て吸收し得たる資本の高を示し、特權の力を語るものに外ならない。

顧るに、日本の經濟は、歐洲戰中の一時を除き、常に資本の不足に苦しみために其の資本は、歐米よりも遙かに高利であつた。現に、歐洲戰前に於て約二十億圓の外資を輸入してゐたこと、及び戰中一時之を支拂ひたるも現在再び二十億圓を算するに至つたことに由つて、以上の事情を窺ふに難くないであらう。從つて、若し、何等かの「特權」と云ふ特殊の誘引なき限り、我が資本の支那に流出し得る餘地は、經濟的には全く無かつたのであつた。然るに、日清、及び日露の兩戰役の結果、日本はその「武力」の御蔭で、各種の「特權」を支那に得た。斯くて、その「特權」の力で、我が資本は、「人爲的」に支那に投資せられるに至つたのである。このことは、我が對支經濟投資高の約八割が滿蒙及關東州に集中せる一事に由つて明かである。

謂ふ所の特權の第一は資源その他に對する政治力に由る「獨占」である。特權の第二は治外法權の下に支那內關稅を免かれ、支那資本よりも著しく有利の位置を確保させることである。特權の第三は治外駐兵の下に支那資本よりも有利な「安寧秩序」を我が資本家に確保し、以て、法外に低廉なる支那勞働者の雇傭を容易ならしめたことである。我が資本が、その本國の資本缺乏にも拘らず、尙ほ對支投資に巨額を流出せる根本の理由はこれ等の「特權」だ。

從つて、若しも、これ等の「特權」を一度び失ふに至らんか、乃至はその特權を輕減せられるかせば、我が資本は到底支那に於て今日の位地を保つことは出來ない。況んや、將來の發展をや、この點は、英米等の資本が、何等の「特權」無くして、尙ほ日本に約二十億圓の投資をなしてゐるのと對比することに由つて、更によくその意味するところを把握することが出來るであらう。之れ、我が資本家が、その已得の「特權」を守るに必死となり、歐米資本家の如く、進步的な態度になり得ざる根因の一つである。

四

我が對支經濟發展の他の一つである「對支輸出」も亦、その大部分が、關稅權に於ける「特權」に生きてゐるものである。云ふ意味はかうだ。英國にせよ、米國にせよ、その對支貿易は、高級の消費品か、乃至は機械その他の生產要具である。從つて、いま、支那に關稅自主權を賦與するも、支那產業の競爭のためその輸出の減退する憂殆んどなきのみならず、若し、保護關稅の結果、支那資本主義產業の發達を

見るに至らんか。その機械その他の設備品の需要に由つて、今後益々對支輸出を增進し得る事情に在る。

然るに、日本の對支輸出品は、若し支那に關税自主權を與へ、支那をして日本なみの保護關税を採用するの自由を有せしめんか、我が現在の對支輸出の殆んど全部は之を失ふの外なかるべき事情に在る。例へば、我が對支輸出品の約七割三分（支那本國のみではその約七割八分）は、別表（一）に詳示せる如く、或る程度の保護關税の下に於て、容易に支那に於て製造し得られる性質の品種である。

（一）我國對支輸出品表（昭和二年分）

輸出品名	支那合計價額	關東洲價額	支那關東洲合計
	千円	千円	千円
精糖及氷砂糖	二五、二三三	二、八五一	二八、〇七四
麥酒（罎入）	二、〇九三	六二五	二、六六四
化粧石鹸及其他の石鹸	六〇五	七九八	一、四〇三
化粧用品	八三一	九二五	一、七五六
硫酸	六九四	四八	七四二
硫化曹達	五五五	六五	六二〇
燐寸	九一〇	八五	九九五
コールタール染料	二六二	[illegible]	[illegible]
綿絲	一七二[illegible]	[illegible]	[illegible]
繻子及其他の絹織物	一、四四七	六六八	二、一一五
白木綿	五、四四五	八八四	六、三二九
綾木綿及綾金巾	二〇、八八二	一、三四〇	二二、二二二
綿フランネル	八、〇六三	五三〇	八、五九三
生金巾及生シーチング	一四、二四七	二、二三五	一六、四七八
更紗	八、〇五三	六七五	八、七二八
天竺布	三、二二四	五四四	三、七五八
其他の綿織物	六三、五八七	六、七二三	七〇、三一〇
綿ブランケット	四〇〇	四八	四四八
綿メリヤス肌衣	八二三	三八七	一、二一[illegible]
帽子	一、四八九	六〇七	二、〇九六
鈕釦	一、〇四三	二八九	一、三三二
帶子	五九二	一三〇	七二二
印刷料紙及其の他紙類	一〇、七三〇	三、七四三	一四、四七三
セメント	二三一	五〇四	七三五
陶磁器	一、五九六	一、一八九	二、七八五
硝子及同製品	二、六三八	六〇五	三、二四三

[illegible]電[illegible]品	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]製品	二、四二[illegible]	二、六[illegible]	五、〇[illegible]
掛時計及置時計	八六六	四[illegible]	一、二五八
學術器	六三四	九七[illegible]	一、五〇八
ゴムタイヤー	一、六五七	三三一	一、九八[illegible]
電氣機械	六〇六	一、二四七	一、八五三
紡績機及織布機	二、四四〇	一一七	二、五六七
其他の機械及同部分品	二、一三四	三、三四七	五、四八一
以上A小計	一九九、五五〇	四〇、五三六	二四〇、〇八六
石炭	一四、七七五	—	一四、七七五
以上B小計	二一四、三二五	四〇、五三六	二五四、八六一
總計（其他共）	二七五、三八九	八〇、二三五	三五五、六二四
總計に對するA小計の割合	七二％五	五〇％三	六七％五
仝B小計の割合	七七％八	五〇％五	七一％七

我國には、英米の如く鐵の資源がない。獨乙の如く化學工業の發達に惠まれてゐない。支那産業の發達につれて、その機械その他の設備品を供給して前途の「發展」を期待する資格に缺けてゐる。しかも、現在の對支輸出品は、粗工業に少し毛の生へたばかりで、到底、英米獨等の精工品に及ばず、支那産業が保護關稅の庇護下で、少しフン張れば直ぐと支那內地から驅逐せられる運命にあるものだ。之れ、我が對支輸出業者が、「武斷政策」に基く、目前の「排日貨」に怯へつゝも尙ほ、已得の特權を維持するため、極力、武斷政策を、、せざるを得

五

さり乍ら、「武斷政策」は、結局現在の如き我が對支經濟關係の破滅を、一日延ばしに極力延ばさんとする無策の策に外ならないこと已述の如くである。然らば、英米の如く、武斷主義を奥深く秘して、經濟力で以て、對支發展を期待し得るかと云ふに、この角力に於ては、到底、日本は英米等の敵でないこと之れまた已述せるところに由り明かだ。事實、從來、日本の帝國主義が、世の嵐の如き非難を浴びながら、依然、武斷的政策一本槍で「一等國」の體面を維持せざるを得なかつた根本理由は、要するに、その經濟力に由つて、帝國主義的發展を所期することが出來なかつた結果に外ならない。果して以上の如しとせば、我が現在の對支經濟關係は、武斷政策に由るも、自由主義的方策に由るも、到底、之を維持し發展せしめ得る望みなき狀態にありと云はねばならない。好むにせよ、好まざるにせよ、それが事實だ!!

しかし、我が大衆は、決して悲觀するに方らない。なる程、資本家的輸出について考へ、資本家的對支投資について云ふ限り、以上の如く全く行詰つてゐる。否、我が對支經濟の位地は急速に崩壞しつゝある。だが、このことは、決して「日支經濟關係」の破滅を意味しない。思ふに、いまや時代は、從來の如き輸出、又は投資が世界的に行詰りつゝある秋にあり、之に代つて、新しき意味の輸出又は投資が生れ出づべき事情に在る。

顧るに、從來の輸出は、工業品に由る外國の搾取を意味した。され

ばこそ、工業品を輸出する國は榮えた、工業品の輸出が極力資本家に由つて謳歌せられた。しかし、斯の如き意味の輸出は、世界各國に、工業が或る程度まで均等に發達せる暁に於ては、到底之を續けることは出來ない。紙數の制限上之をこゝに詳述することは出來ないが、要するに、今日に於ける世界的輸出産業の不振は、その反映である點が大部分である。

今後の貿易は、文字通り、有無相通ずる意味の輸出入でなくては發達する見込はない。從來の如く、輸出することが利益だと云ふが如き意味の輸出ではなく、輸出するも輸入するも、等しく同等の利益である貿易が今後の貿易である。それは從來の資本主義的貿易とは、本質的に異る貿易である。

日支の經濟關係も亦、今後、斯くの如き意味の關係に歸らねばならない。然るに、この意味から云へば、いま、支那よりの輸入品は、別表(二)の如く、その約八割五分までは、日本になくてはならぬ食料品及び原料である。又、支那から云ふも、之を日本に輸出して、他の何ものかと交換せざる限り、その農業その他は、その生産を捌くに困る事情にあるものである。

されば、日本としても、之に代るに、支那の必要とする物にして、しかし日本の方が有利に生産し得る種類のものを供給し、以て、有無相通ずる途を開けばよいのである。それは、今日の資本主義的輸出品の如く、又はその對外投資の如く、「、、」に依頼する必要はなく、專ら日本人の技術と、日本の天然とに依頼すればよい。我が國人の技術と、その天然との有つ長所を自由に發揮せしめ得る經濟組織と、、、、とを新に創ればよい。我が將來の國際經濟は、好むと好まざるとに拘らず、この方向に進む外はないのである。

(二) 支那よりの重要輸入品内要(昭和二年分)

輸入品名	支那合計價額	關東州合計價額	合計
大豆	千円 一三、六二七	千円 二〇、八六一	千円 三四、四八八
其他農産品	二六、六七五	一〇、三三二	三七、〇〇七
牛肉	六、七一六	四七九	七、一九五
鳥卵	九、九八一	一	九、九八二
食鹽	一、六七八	八六二	二、五四〇
皮毛骨脂	八、四二六	一、一四四	九、五七〇
漆	四、〇七六	—	四、〇七六
實綿及繰綿	四九、二五九	三八	四九、二九七
其他纖維原料	一二、七八四	五九六	一三、三八〇
石炭	六、八二三	二三、七〇七	二九、五三九
鐵鑛	四、二六四	—	四、二六四
錫(塊及錠)	四、一二二	—	四、一二二
豆粕	三五、〇四八	五一、七〇六	八六、七五四
其他肥料	九、五三〇	九九五	一〇、五二五
以上小計	一九一、九九七	一一〇、七一九	三〇二、七一六
總合計	二三五、〇八一	一三一、八四五	三六六、九二六
總合計に對する小計の割合	八五%〇三	八四%〇	八四%九八

床次氏の新黨宣言と政局への影響

緒方竹虎

鹿兒島にある南洲神社に行くと、南洲翁の遺物を保存する寶物庫の一室を仕切つて、床次氏が大正天皇の御即位大典に着た衣冠束帶が飾つてある。それを觀た者は、いくら鹿兒島のピカ一（?）であるとはいひながら、南洲翁の遺物と並べて、物もあらうに自分の着古した衣冠束帶を並べるとは、面はゆくもあらうし、第一遠慮したら良さそうなものだと、誰しも考へる。同時に、英雄崇拜熱の高い三州青年が、誰か崇拜の目標なくてはならず、床次氏をもつて南洲に比し、南洲の跡を繼がせようとしてゐるその可憐さが、思ひ浮べられる。ところが何うであらう。今度の床次氏の脫黨は、全く南洲の心持を逆に行つたものではないか。南洲は一萬の子弟が起つと聞いた時、『たゞ身一つを打捨てゝ若殿原に報いなん』と、一身を擲げ捨てゝ、些の不平不滿もなかつた。その理屈も辯解もなく、笑つて子弟に殉じたところが、南洲の値打であり、勝海舟をして羨しがらせた境涯であるのだ。しかるに床次氏はといへば、付けられぬ理屈を付けて自分一人先づ脫黨し、笑つて成敗を眺めるのかと思へば、泣言をいつて來り投ずる者の少いのを怨んでゐるのである。それでは率ゐられる部下も困るが、何よりも南洲神社の衣冠束帶が始末に困るであらう。

床次氏が何故に今急に民政黨を脫黨せねばならなかつたかは、床次氏以外の誰にも解らない。脫黨と同時に理由書が公にされたが、それがホントの理由であらうとは、もちろん誰も考へてゐない。新黨宣言書の中には、民政黨の對支方針に慊らぬことが書いてある。狼狽へた民政黨は、床次氏の脫黨を見ると同時に、對支第二聲明書は元來措辭が拙づかつた、幣原外交には民政黨の多數も實は滿足ではなかつたのだなど、舊本黨員を引留めんとして却つて床次氏の脫黨理由を裏書した形であるが、しかしながら、いはゆる『幣原外交』は、民政黨結成後急に湧いて出たものでなく、政友本黨が憲政會に合併する以前から今日まで、民政黨の中樞政策として、誰も疑はなかつたものである。否、若槻内閣の末期頃から、南京事件をはじめ、支那の問題が多かつたゞけ、『幣原外交』は特に朝野の注目を惹いてゐた。その外交方針が面白くないといふて、それを理由に脫黨するのは、餘人はイザ知らず、民政黨顧問床次竹二郎氏の言分としては成立たぬのである。

床次氏の身邊には、特別議會頃から種々の噂が立つた。尾崎氏の政

治國難決議案、實は鈴木内相彈劾案が通つて内相が罷めた時、床次氏をその跡釜に引張つて來るといふ噂もあつた。これは、政友會内の鈴木一派に快からざる人等が、將來田中總裁の引退を見越し、鈴木一派の擡頭を抑へるための計略からも劃出されてゐるとのことであつた。ところが今度の脱黨に際しては、その時の謀士等にも何等事前の相談がなかつたといふことである。もちろん、内相説に滿更でもない色を見せてからは、あらゆる策士が床次氏の門に出入して勝手な劃策をやつてゐたらしい。しかし、床次氏が、七月三十日の夜、急に脱黨を決意したのは、これらの策士の筋書以外、何か大きなキツカケがあつたに相違ないのである。

そのどういふキツカケであつたかは、憶測の限りでない。たゞ何が直接の原因をなしたにしろ、床次氏が、將來總理大臣となる上から、民政黨に止るが有利か、政友會に復歸するが有利か、將又、名分は兎も角頭數を揃へて第三黨を作ることが有利かについて、非常に思迷つたらうことだけは、しかして、その煩悶の空虚が容易く誘惑に乘ぜられたことだけは、想像し得る。一口にいへば、總理大臣病だ。

かゝる事情であるから、新黨宣言書を眞面目に批評するのも、その中から脱黨の理由を見出さうとするのも、實は大人氣ないのである。しかしながら、『眞に基礎强固なる政黨政治を行はんと欲せば、宜しく現行選擧制度を改正して、小選擧區制に還元するにあらずんば、到底政局の安定を期し能はざるを信ず』といふことゝ第三黨組織とは、如何にしても辻褄が合はない。小選擧區制は要するに二大政黨對立を前提とした制度である。小選擧區單票制には、新しい政黨の生長を困難ならしむるとか、投票數と議席數との間に合理的結果が得られないとか、投票の過半數に近いものが常に議會に代表されないとか、種々の非難はあるが、いはゆる二大政黨對立が小選擧制によつて最も實現され易く、從つて比較的强固な政府が得られることだけは事實である。大選擧區比例代表制によれば、選擧だけは極めて合理的に行はれる。が同時に小黨分立の勢ひを作ることは免れ得ない。小黨分立の結果は、久しくフランスの政界に見たやうな、政變相次ぐ不安定な政情を馴致する。その結果は、徹底した政策を行ふ機會をなからしむるばかりでなく、政情の不安は人心の不安となり、ムツソリニのやうな煽動政治家の投機を容易ならしむることにもなる。要するに大選擧區と小選擧區とは一得一失だが、『基礎强固なる政黨政治』の實現を主にして考へれば、小選擧制を擇ぶ外ない。こゝまでは床次氏の宣言書は理路が通つてゐる。しかしながら、小選擧區制は、本來、小黨分立を防ぎ、一黨をもつて政府を組織し得るやうにするための制度である。選擧人をして、主たる政治的傾向にしたがひ、みづから政府を擇ましむるための制度である。この小選擧區制を主張しながら第三黨を唱へるのは、それ自體非常の矛盾でなければならぬ。ことに『現にあるが如き勢力相若く二大政黨の對抗による政界の不安定を以てしては』云々と、二大政黨の對抗が政界不安定の原因であり、民政黨の第三黨が時に政友

會と馴合ひ、時に民政黨と結託することによつて[illegible]政界が安定すると考へるに至つては、全く救ふべからざる暴論といはねばならぬ。

しかし、靜かに考へると、そこに床次氏の注文があるのだ。思ふに床次氏の意圖は、民政黨政友會の双方から同志を集め、第二黨を組織して次の政權を取らうといふのであらう。そして政友會と交互にいはゆる政權の盥廻しをやり、民政黨に冷飯を食はせようといふのであらう。これがすなはち、『二大政黨の對立を政黨政治の理想』としながら、一時の機宜として第三黨の必要を唱へる所以であり、小選擧區制論は、その政權を占めた後において民政黨を除外した二大政黨對立を實現せんがために外ならぬのである。隨分虫の好い注文ではあるが、これ以外にはあの宣言に對して解釋の付けやうがない。もちろん、當ごろ、交渉團體數を集めることさへ覺束なく見えるが、第二黨を夢みる新黨樹立は、今のところ何とかは先方から外れる。第二黨を夢みる新黨樹立は、今のところ

さらに驚くのは、床次氏の政黨および代議士觀である。床次氏は脫黨の朝、新聞記者に對して決意を語り、『この際僕を一人ボッチにするか、政本黨系の人がどれ位ついて來るかは、いゝ僕にとつての試金石であると思ふ』と述べてゐる。それから少し景氣の惡くなつた六日にはまた、政本黨代議士の集會に對し、『私の志を遂げしむべく一緒に行かうといふ一黨同情の發[illegible]しいのである』と[illegible]てゐる。これでは床次氏と政本黨代議士との關係は、主義主張によつて集つた同志でなく、全く封建時代の主從關係ではないか。一[illegible]代議士[illegible]。[illegible]つ[illegible]する政黨の主義なり主張なりが、選擧民の共鳴を得たことによつて選まれたのである。したがつて選擧民の承諾なくしては黨籍を變へることは出來ないはづである。しかもなほ選擧民の承諾なくして黨籍を改め、選擧當時の言質を裏切つた代議士に對しては、リコールの制度によりその資格を失はしめねばならぬとさへ、近來評論されてゐるのである。その時に際し、少くも他人には意味の分らぬ脫黨を敢てし、理窟の通ぜぬ一片の宣言を發表したゞけで、『この際僕を一人ボッチにするか、政本黨系の人がどれ位ついて來るかは、いゝ僕にとつての試金石である』とは、全く代議士、政黨、議會政治のイロハからして理解せぬ人の言草としか受取れぬ。しかもこれは、ひとり床次氏のみの政黨觀、代議士觀でなく、恐らくは床次級の人々に共通した政黨觀、代議士觀であらうと思はるゝところに、さらに興味があるのである。

かくのごとき第三黨が、床次氏の注文通りの頭數を集め、第三黨變じて第二黨となることは、常識をもつては想像されない。しからば、床次黨は斷じて失敗かと問はるれば、必ずしも、そうとも答へられぬのである。子を見る親に若かず。公に唱へ得る理由も示さず、自分一人先きに脫黨して、『僕を一人ボッチにするか、政本黨系の人がどれ位ついて來るか、僕の試金石だ』などいふのは、第三者から見れば、[illegible]

分人を馬鹿にした態度であるが、床次氏としては、その本黨以來の情誼を知り抜いてゐるだけに、頭の中にか懷ろの中にか、今に見ろ、大きな事は云うてゐても……』といふ自信があるのかも知れない。たゞ第三者としても、これだけのことは豫言し得るのである。すなはち、舊本黨系が新黨に走るにしても、踏止るにしても、多數は同一行動をとり、一緒に行動せぬのは極めて少い除外例であることである。四国の形勢が、どうも新黨に有利でないとなれば、大多數は結局民政黨に踏止まることになるであらう。その代り、新黨に走る方が萬事都合が良いといふ勢ひが動けば、どや〳〵と新黨に行くかも知れない。それには民政黨の最高幹部が如何に形勢をリードするかといふことが、最も重要な役目をつとめる。既に明かに新黨入りを表明してゐる者、公然これと往復を重ねてゐる者に對し、何時まで寛大傍觀の態度をとるか、どの邊で斷乎たる處置に出て黨規を振肅するかは、民政黨最高幹部の、見識の問題であると共に、鼻下の長さの問題とならう。

しかしながら、床次氏の意圖が、政友會を對象に第二黨となるにあらば、これだけは明かに失敗である。いはゆる二大政黨の政友民政兩黨の間に、その主義上政策上、どれほどの差もないのは、民政黨の第三次聲明による對支政策の接近によつても分る。本來をいへば、今後の政黨は、イギリスの政界にすでに現はれ[illegible]

以外に思想的社會的に政黨の分野を決するものは、[illegible]本の政黨も、理論からいへば、今後無產勢力がだん〳〵伸張して來ると共に、政友民政は合して一となるべき運命にあるといへる。たゞそれが理論通りにいかぬのは、歷史と共に感情の抗爭があるからである。イギリスの自由黨は、戰後勞働黨の勃興と共に、多數は保守黨に行かずして却つて勞働黨に行つた。日本では恐らくは、假りに無產政黨が非常の勃興を示す時が來ても、政友民政が提携する機會は到底來ぬであらう。それほど濃い感情上の流れが、自由改進の昔ながらに、今日の政友會民政黨を分つてゐるのである。床次氏の新黨宣言が政權に對する焦燥から來てゐることはいふまでもないとして、若しそれ以外その進退を理由づけるものがあつたとしたら、矢張りそれは、何となく舊憲政系と舊本黨系との渾一融和を妨げる、自由改進以來の感情であつたらう。それだけに、若し床次氏の第二黨意圖が、民政黨を對象とするものならばイザ知らず、政友會を對象とし、これと盥廻しを目錄見るのであるとすれば、それは歷史の流れに逆らうものであり、『一點同情の涙が欲しい』といふ程度の怪しい腰付で、無論實現されそうにもない。それどころか、第二黨としても果してどれほどの壽命を保つか。宣言書には、對支外交、思想問題、財政緊縮、金輸出解禁と、

の何れに行くかを考へるのは、考へるだけでも馬鹿氣てゐるが、馬香だけは確かに政友會へ轉ぶ順番である。

×　×　×　×　×　×　×

こんな怪しい第三黨ではあるが、しかしながら、第五十五議會がこれによつて解散なしになつたことだけは、斷言し得る。政友會との默契説を否認する世間體に、床次氏は『今に政友會も當が違つて驚くだらう』といつてゐるが、假りに政友會との默契がないにしても、淸浦內閣の總選擧で苦しい經驗を嘗めた床次氏が、同じやうな輿論の砲火の下に、二度と好んで選擧を爭はうとは想像されない。この結果は、少くも次の議會は無事。同時に、議會さへ切拔け得れば、如何に對支外交の馬を壁に乘りかけても、田中內閣が自發的に辭職しよう筈はない。そこに持つて來て、民政黨までが、床次氏の脫黨に驚いたのか、急にその第一、第二聲明を取消し、『吾人は東三省は如何なる政治的變動あるも歷史と實際の上に確立せられたる帝國の緊切重大なる權益に對しては斷じて一指を染むるを許さゞるを主眼とす』と聲明して、少くもそのトーンにおいて田中外交を裏書したやうな態度を示してゐる。いはゆる幣原外交にも議論はあるが、兎も角もそれは民政黨の傳統的外交方針であり、世間からは民政黨の中樞政策とも考へられ、改めて第二次の聲明ともなつてゐるのである。それを民政黨みづから修正するのでは、脩本黨系を引取める方便になつたか否かは別とし、決して民政黨の信用を厚からしむ所以でもなかつた。これでは田中內閣

は認めたくも、認められまい。滿洲に實際に存する權利利益の尊重せねばならぬことは、いふまでもないとして、日本の經濟上の交渉はむしろ長江以南に多い。それを、國民の感情に訴へ易いからとて、滿洲だけが日本の運命のかゝる所のやうに絕叫し、排日が深刻になつても、長い將來の面白からぬ結果が豫見されても、どの政黨も率直に信ずるところをいひ得ぬところに、ウエルスではないが、今の政黨政治の弱點がまざ〳〵と暴露されてゐる。床次氏の第三黨は今のところ明かに失敗のやうだが、議會の解散を無くする意味においての政局安定と、政治界の假面を剝ぐことに於いては、成功だつた。

無産大衆黨の成立、その前途

鈴木茂三郎

帝國主義ブルジョアジーに率ゐらるゝ田中反動政府によつて、無産階級陣營の分裂體の一隊なる勞働農民黨外二團體に、解散の暴壓が加へられてから百餘日になる。

此の百餘日は、階級的全戰線の總退却であつた。

一、組合運動の鬪爭力は萎縮した。組合評議會は解散直前の、全組合員實數二千三百人から一千人にも滿たないものになり、全日農と合同前の日本農民組合は、その主力の一つ香川が全滅し、岡山などでは、悲壯にも組合旗を燒いて解散したり、解散する氣力さへ喪失したものがあつた。

二、舊勞農黨の大衆は、政黨に對する中立から、政治に對する中立へ、さらに政治的無關心に陷つた。

舊黨員の實數幾萬であつたかはともあれ、今や大衆を、黨と共に喪失したところの新黨準備會の下には、僅かに幾百を組織してゐるに過ぎないことは確かである。といふことは、新黨準備會の鬪爭力と動員の實績によつて、動かし難い事實とされてゐる。しかし觀客には擴大鏡によつて虚大な姿に映し出されてゐる。例へば舊東京支部中の中堅だつた蒲田勞友會などにしても、そこは政治的中立のわきみちへ逃避したものの一つだのに、勞働農民新聞の正確と稱する報導によると、青年部は無權者大會を開いて、準備會の府議候補を支持することに決したとあるから、よく調べてみると、たつた一人の組合員を、他のさうした會合へ出席させようと準備會が努力したことだけが正確だつた。或は無産大衆黨に反對する組合員は、百五十名に達すると、まことしやかに報導されてゐるので、これも眞相を洗つてみると、百五十名の十分の一の、十五部づゝの勞働農民新聞が持ち込まれてをり、しかも眞實に讀まれてはゐないことが正確だつた。

三、發溂たる政治的日常鬪爭は全國的に休止的狀態に陷つた。組合運動の鬪爭力の萎縮や、無産大衆の政治的無關心への傾向も、一面また、かうした政治的日常鬪爭の休止的な影響に基くところではあるが、一般大衆を動員するには、缺くことの出來ない政治的日常の鬪爭機關としての合法的政黨を喪失した以上、やむを得ざる結果とはいへ、眞の大衆的な、日常鬪爭は休止された。

四、右翼化の傾向に彌漫し、支配階級の彈壓に加重された。

政治、經濟の全戰線に亘つて、右傾化の傾向の彌漫しつゝあるは爭はれない。何にせよ、鼻づらを引きづり廻はされる牛のやうに、黨の所謂前衛分子に、引きづり廻はされた黨大衆が多かつたゞけに、さてからなってみると、共産黨事件に對する新聞紙の恐怖的な報導や支配階級の彈壓の前に、射すくめられたかたちで、「廻はれ右」して、大衆は獣々として後退するなど、之れ又、已むことを得ない結果ではあつた。

殊に慘ましい挿話は、總選擧戰に於て東京第五區の選擧協定を破つて、日勞黨の對立候補として、「吾等の前衛、輝ける革命的勞働者」の折紙付で立候補した某が、「廻はれ右」の前衛となつて逃げ出したなど、あまりにも悲慘な事件ではあつたが、それはともあれ、かゝる右傾化的傾向の彌漫しつゝあるに乘じて、右翼的指導者は、右翼勢力の統一的擴大の野望をすゝめ、支配階級の彈壓政策は、意のまゝに無產階級の全戰線を、その泥靴に踏み躪つた。

かやうな無產階級全戰線の總退却が、舊勞農黨指導者諸君の極左的戰略と戰術の誤謬と、右翼指導者諸君の分裂主義とに基く、無產階級陣營の分裂、混亂に原因することの多大なるはいふを俟たない。

しかし、かゝるとき逆流に抗しつゝ、全戰線をとりまとめて、支配階級の彈壓との抗爭に轉向せしむる、階級的な努力は爲された。

農民組合運動を全線的に統一せんとする日本農民組合、全日農組合の合同、勞働組合運動を全線的に統一せんとする全[illegible]成立、解散された組合評議會の再建と產業別組合を確立せんとする全國單獨組合總聯合の結成、或は組合總同盟、社會民衆黨の內部に、生長しつゝある合同への傾向など、さうした當面の緊急な任務なる戰線の統一のための階級的な努力が、有効的に遂行された。

そして、ここに結黨した無產大衆黨も、かうした、あらゆる方面に於ける、戰線統一への階級的努力に對應すべく、政治戰線の眞の統一への任務を、有効的に果さんとするもので、無產大衆黨が、舊勞農黨の黨大衆に訴ふる大ぎの檄文の一節は、ここに述べたところの勞農黨解散後の一般的狀勢と、黨の當面の任務、その統一への目標を、簡結に要約されてある。

「舊勞働農民黨々員諸君!

政治的日常鬪爭機關としての勞農黨を奪はれてから、舊勞農黨戰線に於ける日常の潑溂たる政治鬪爭は殆んど休止的狀態である。

此の結果は何にをもたらしたか。

一般大衆は政黨中立から、政治中立へ、さらに政治的無關心に陷らんとし、之れと共に組合運動の鬪爭力も亦、萎縮した。

その間隙に乘じて、右翼化の傾向は彌漫し、支配階級の彈壓は加重されたのである。

舊勞働農民黨々員諸君!

かゝる傾向と鬪ひ、彈壓と有效に抗爭するには、眞の大衆的鬪爭に

よる外ない。しかも政治的日常闘爭機關を缺く限り、無産大衆を大衆闘爭に動員するは困難である。

「新黨準備會」の所謂大衆闘爭の失敗は、實践に於て、之れを示してゐる。

而して大衆を眞に動員し得る、かゝる機關は、少くとも現存の狀勢に於ては合法的政黨を除いて他に、之れを求むべくもない。

踏み躪られた戰線の建設、統一、擴大も、今や無産大衆の切實なる要求となれる無産政黨の合同も、合法的政黨を俟つて、始めて成功的な段階に這入り得る。」

ここに一應、かくて日常政治闘爭機關を、再建した無産大衆黨は、後退しつゝある舊勞農黨々員、組合戰線に復員して、政治的中立に逃避した舊黨員、或は日常闘爭機關の再建に努力しつゝあつた舊黨員、それらをわが無産大衆黨の旗の下に再組織すると共に、一般の無産大衆、勞働者、農民、小市民をも、日常的闘爭の展開によつて、急速にわが黨の戰線に動員しつゝ、踏み躪られた戰線の建設、統一への擴大と、無産政黨の合同による政治戰線の統一へ、一路邁進せんとするものである。だが、無産大衆黨は斷じて舊勞農黨そのものの再生産ではない。之れは重要である。といふ意味は組織の範圍を、單に舊勞農黨々員に限つて

を強制する所謂戰闘的合同、幹部の官僚的支配、甚く戰略、戰術の誤謬、右翼派的愛黨主義など、一ダースにも餘るほどの、あらゆる誤謬に汚がれた衣服を、かなぐりすてゝ、新たなる階級的容貌のもとに結黨した、といふ意味に於て、無産大衆黨は、だから、舊勞農黨そのまゝの再生産ではない。

それ故に、なほ汚がれた古着をまとつてゐる舊勞農黨の幹部による新黨準備會の極左的指導精神とは、無産大衆黨は尖鋭に對立する。

殊に、極左的指導精神は、舊勞農黨の戰線の再建と無産政黨合同の實現に對する、無産大衆黨に課せられた當面の緊急な任務の遂行を妨害するものである。

前掲の、舊勞農黨々員に訴ふる檄文は、新黨準備會に對するさうした無産大衆黨の見解を、明確に、しかも純眞な態度によつて規定してゐる。

「舊勞働農民黨々員諸君！

新黨準備會幹部の諸君並にこれを支持する團體の大衆のなかには、吾々と意見を同じくされるものが多數ある。我々はそれを知つてゐる。

然るに新黨準備會の名を以つて我が無産大衆黨の發起大會をさへ開かない前に、

諸君！　吾黨は、それにも拘らず今日まで諸君に答へなかつたか？　又今後も答へないであらう。

踏み躙られた無産大衆の要求するものは、排擠や混合戰ではない、合法的政黨と活潑なる眞の政治的日常闘爭である。諸君！　すでに、新黨準備會の下に、支部を組織される諸君は、その罪過と誤謬の徹底的清算を、準備會幹部に要求しなければならぬ」

もとより吾々は、準備會の下に、少數の若い闘士の諸君が、彈壓との果敢なる英雄主義的抗爭を、なほつゞけてゐることを知つてゐる。

しかし、方針の誤謬と、無力との故に、せつかくのさうした努力は、眞面目な宗教家の慈善的努力と同樣な結果に陷り、全無産階級的見地よりすれば、戰線統一への若干の妨害とはなつてゐる。

又吾々は、無産大衆黨の出現によつて、新黨準備會の幹部諸君のなかに、動搖的な意見の衝突がおこつたり、會員間に合法政黨要求の聲が高まつたり、或は漠然と、期待を準備會に投げかけてゐた所謂支持團體の自覺意識が眼覺めたりしてきた事實を知つてゐる。

それは清算運動への、轉向の契機たるであらふ。

だが、一般無産大衆と價黨員大衆の壓倒的支持の下に、今や戰線の再建に向つて、光輝ある任務の重大を覺ゆる吾々にとつては、さうした新黨準備會の小ひさい存在にはかまつてゐられない。

結黨後旬日を出でないのに、東京に於ては、市電自治會、蒲田勞友會、關東ゴム産業、豊島合同、借家人組合全國同盟、關東木材産業、職業[illegible]、[illegible]組合、關東電氣、市従業員組合、有志の協力とによつて、[illegible]勞農黨よりも質と量に於て有力となつた、西多摩、北豊島、荏原、川崎の支部結黨式をあげ、又深川、本所、淺草、芝、南葛に支部準備會を確立したので、山口縣徳山、門司、埼玉、新潟、長野、秋田、神奈川、北海道、岡山の、支部組織の準備が整つた府縣地方に、八月末には本部員の總出動を行ひ、九月には全國的に約七千人の小作農民を組織する某農民團體の政治的再編制の新たなる事業に着かねばならぬ。かくて事實上、全國的の政黨となるであらふが、さらに戰線の擴大的再建と、無産政黨合同の急速なる實現のために、潑溂たる日常闘爭を展開するであらふ。そして、千葉勞農黨、秋田勞農黨、兵庫大衆黨、信州大衆黨の、强力なる地方政黨を緊密なる友黨として持つことは、わが無産大衆黨の前途を、一段と光輝あらしめてゐる。

無産大衆黨の前途は多忙だ。

西園寺公評傳

白柳秀湖

「一」西園寺公とパリ・コムミユン

明治十三年十月二十一日、西園寺公は三十二歳で佛蘭西の留學を了へて歸朝したが、それから間もない頃のことであつた。或る宴會に招かれて、席に侍つた藝妓の三味線の調子の外れて居るのを氣にし、チヨツと御見せなさいと去り氣なく云つて棹を受取り、二三度轉軫を拈つて居たが、サア是ならよいでせうと、輕く笑ひながら三味線を藝妓にかへした。客も藝妓も凡そ其席に居合せたほどのものは何れも眼を見合せて公の風流振りに驚かされたといふよりも、寧ろ公に如何なる餘裕があつて、かやうな風流を學ばれたかといふことを訝らずには居られなかつた。

公は明治三年、二十二歳で佛蘭西のパリに遊學し、居ること十年、その佛蘭西に上陸した當時は普佛戰爭の眞最中で、パリが落ちるか落ちぬかといふ非常の場合であつた。明治四年（西暦一八七一年）には、有名なパリ・コムミユンがあり、西園寺公はちやうど其時、パリに居合せて、親しく一揆のパリケードを築くのを目撃したといふ話もある。かやうな大變動の時代を彼地に在りて専ら法制の學に心を潜めた公が何として、佛蘭西人の民權思想に無關心で過されよう。十年の留學を了へて歸朝した公は、モウ、昔見たやうな淸華の一貴公子でなく、廣く交りを草莽の志士と結び、自ら自由の使徒、民權の木鐸を以て任ずる天下の一平民であつた。

維新以前の公は、所謂九淸華の一を以て數へられた西園寺家の家督で、門地は頗る高かつたが、その家計の豐かでなかつたことは、公卿一般の例に洩れなかつた。維新の大號令と共に參與に任じ、山陰道鎭撫總督となり、東山道第二軍總督となり、更に轉じて越後口の大參謀に任ぜられたが、兵馬倥偬の間にありて三味線の稽古でもなく、維新の兵亂が斂まると直に陸軍を辭して、佛蘭西遊學の志を立て、その準備に忙しかつたのであるから、公が佛蘭西から歸つて間もなく、紅閨紛陣の間に在りて、悠揚三味線の轉軫を拈したといふことは愈おかしいのである。

併し、世間といふものは案外に獨合點なもので、此事があつてから公を一代の風流兒、名門の大通人として稱へたものであつた。然るにそれは全く根も葉もないことで、西園寺公にはそれまで全く折花攀柳の風流はなかつたのである。然らば、公は如何にして三味線の調子を合せることを心得て居たか。其處から公の悲しい少年時代の追憶が始まるのである。

「二」西園寺姓の起原

西園寺家は公卿の中では、所謂五攝家に次ぐ名門として知られて居る九淸華の一である。九淸華といふのは、源氏の系統に屬する久我、廣幡、藤原氏の系統に屬する三條（轉法輪）西園寺、德大寺、花山院、大炊御門、今出川（菊亭）醍醐の九家をいふのである。此九家の中で、三條、西園寺、德大寺の三家は全くの同一門で、その祖先を共にして居る。その太祖は、朱雀、村上、冷泉の三朝に時めいた關白藤原實頼の弟に師輔といふのがあり、兄關白を佐けて當時宜しきに適ひ、度量寛宏、長者の風ありとして評判よく、天暦元年右大臣に拜せられ、正二位に進み、村上天皇の寵遇を一身に聚めたことは、史上に著しき事實であるが、此師輔の第十一子に公季と呼ばれたのがあつた。此公季が所謂閑院[illegible]藤原氏の[illegible]

公實といふ人があり、多くの男の子があ[illegible]が三條家の祖となり、其次に通季といつたのが西園寺家の祖とな[illegible]其次に實能と云つたのが德大寺家の祖となつた。さうして此三家から更に小枝が岐れて結局閑院家といふものはすべて二十四家に岐れて居た。右の如き事情であるから、三條、西園寺、德大寺、此三家の間には代々の養子緣組など頗る複雜な關係もあつたに相違ないが、それよりも、根が全くの同一門であつて、其親しみは到底尋常一樣のものではなかつた。

西園寺家は藤原通季から數へると、當主で三十三代になる。更に遡つて、公季から數へると三十八代になる。西園寺の祖を公季とせず、通季とするのは、通季の時から西園寺の姓を稱したのによるか、それとも、通季の時、三條家、德大寺兩家と岐れて別に一家をなしたのによるのか。恐らく後者であらう。僕の知れる限りでは、此閑院通季の子孫が西園寺の姓を以て稱せられたのは通季から四世の孫に當る公經以後のことで、其書に見えたのは『増鏡』新島もりの中、承久元年正月二十七日、實朝横死のくだりに、『扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひき。』とあるあたりが初めであらう。實氏は公經の子で、承久兵亂の後、父公經と共にしきりに世に時めいた[illegible]

を以てするのと同じ事情ではなかつたであらうか。儂は閑院通季の子孫が、西園寺を以て稱せられるに至つたのは、公經が承久兵亂の後、北山の別莊に佛堂を營み、西園寺と名づけて以來のことゝ解して居る。但しかやうなことの考證には別に專門家もあらうから、強ちに主張するわけではない。

『三』 西園寺家と承久の兵亂

通季四世の孫に當る公經の名は承久兵亂の文獻に著るしい。公經は內大臣實宗の子で、左近衞中將から藏人頭に進み、承元の初め正二位に叙し、權大納言に任ぜられた。其妻は『增鏡』に、『北方、一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北方の故大將のはらからなれば一方ならずあづまを重くおぼして』云々とある如く、源賴朝の妹の夫に當る藤原能保なるものの女である。そんな次第で、公經は早くから鎌倉の勢を背後に負ふ形があり、關東嫌ひの後鳥羽上皇とはとかく圓滑を缺く所が多かつた。健保五年に大將が缺けたので、上皇は豫ての約束により、公經を之に任じようとされたが、太政大臣賴實から其子の師經を推擧されたので、上皇も已むを得ず、之に從はれなければならなかつた。其處で使を公經の許に遣して、慰諭されたが公經はひたすらに上皇を怨み奉り、此上は朝に在るも何かせん、披髮して世を遁れ、鎌倉に赴いて實朝に寄るべしと答申した。上皇は之をきいていたく憤らせ、斷然公經の朝參を停めさせたが、此事は實朝の救解によつて、ともかくも、宥さるることを得た。實朝が殺されて源氏の血統が絕え、關東から公經を通じて、『君だち一所、下し聞えて將軍になし奉らせ給へ。』とあつた時も、上皇は皇子を下して將軍となすことを許されなかつた。其處で關東では公經の女の攝政藤原道家に嫁して產んだ子の、賴經と云つて當年二歲であつたのを迎へて將軍とした。前に述べた如く公經の妻は賴朝の妹であり、その女の產んだ子であるから源氏とは緣が深かつたわけである。公經はかやうにして、征夷大將軍の外戚となつた。承久の擧に際して、上皇が公經を忌避されたのも無理はない。

亂が歇んで後堀河天皇が立つに及び、公經及び實氏は俄に世にときめいた。公經は先づ內大臣となり、翌年太政大臣に陞り、尋いで從一位に叙せられた。寬喜三年病に罹つて剃髮し、名を覺勝と改めて遁世したが、寬元二年七十四歲で死んだ。

孫の賴經が迎へられて征夷大將軍になつたことは前に述べた通りであるが、その女の中一人は後嵯峨の中宮となり、他の一人は後深草の中宮となり、權勢赫灼一代を光被した。西園寺を北山の別莊に造營し、殿宇の莊麗、庭園の幽雅天下の奇觀を以て稱せられ、爾來西園寺の名が自然にその姓をなすに至つた。

『四』 德川時代初期の皇室の御料

かくして北條氏九代百十四五年の間、西園寺家

相違なく、室町時代に入つては皇室の式微とその運命を共にした。織豐二氏は幾分心を皇室の事に用ゐその用途を助け奉つたとは云へ、それは決して皇室の威嚴を保たせ奉るに十分のものではなかつた。家康が初めて皇室の事に手を下したのは慶長六年九月――關ケ原戰爭に打勝つた翌年であつた。彼は先づ禁裡仙洞の御料を査定し、京都の地子錢を以て之に充て、公卿の料には、それぐ\京都附近の土地を以て之を定めた。越えて慶長九年には皇室の定額供御として更に一萬石を加へ奉り、同十二年には皇居を修理し、併せて女院の第を改築し、それまで御所の内に在つた關白の邸を他に移して境域を廣め奉つた。慶長十六年には諸大名に命じて再び皇居を造營せしめたが、同十八年には更に三十四人の大名に命じて、皇居の大修築を行はせた。元和九年秀忠が、其子の家光と共に、朝覲した時には、命じて從來皇室の供御と定められて居た京都の地子錢を免除し、その代りとして綴喜、相樂、愛宕三郡の田から產する一萬石を以て御料と定めた。此措置は朝廷の御料を增し奉つたといふよりも、寧ろ京都の市民を喜ばせた結果となつたに相違ない。寛永七年には上皇湯沐の邑として三千石を獻じ、後、更に七千石を進めた。

かやうに書いて來ると德川氏はしきりに皇室の御料を增し、王事に心を用ゐたやうであるが、その總額から云つても皇室の御料は僅に三

ても、諸王の御料にしても、共に進獻した次第ではなく、其土地を支配するものは依代、若しくは代官であり、それらが租税として取立てるものの中から、料を定めて進獻したのであるから、洵に恐れ多い申分ではあるが、皇室は一種の俸給生活者にて在したわけで、同じく三萬石と云つても、大名と違ひ、餘分の收入といふものは絕えてなかつたわけである。況んや、その出納には幕府から附けた吏員があつて眼を光らせて居たといふのであるから、御不自由の事情は察し奉るべきである。之を要するに德川氏は慶長以來諸大名に命じて再三皇居を造營し、表面に皇室を敬ふ如くに見せかけて居たけれども、その供御の點に至りては極度に之を制限し、一方にはその課役によりて諸大名の富を涸渴せしむるの策を取ると同時に、他の一方には、皇室をして常に何事をも籌畫するの餘地なからしむるやうに仕向け奉つた形跡が十分である。皇居は玉を磨いて、其莊觀昔日に倍したけれども、供御の乏しきは、尚寛正（足利義政の時代）にも及ばざるべしと仰出された後水尾天皇の『年中行事』は遺憾なく此間の消息を傳へたものといふことが出來よう。

『應仁の亂より、諸國の武士おの／＼の力を爭ひて社領、寺領、公私の所領を押領するこ

依することになりぬ。紙中東照宮遂に武を以てし、四海の波瀾をしづめ、絶えたるをつぎ、すたれたるをおこし、上を尊敬し、下を[illegible]せらるる志深かりしかば、金闕再び光をかゞやかす。あひつい台徳院大相国（秀忠）今の征夷大將軍左府家光に至りて忠節をつくし、殊に百敷の古き軒端をあらためて玉をみがきなせる功、他日に倍せり。しかれども、よろづのこと猶寛正のころだにも及ばざるべし。御禊、大嘗會、其外の諸公事も次第に絶えて、今はあともなきが如くになれば、再興するに便なし。』

剛毅英邁の資を以て、幕府を戰慄させた後光明天皇が、承應三年二十二歳にして疱瘡の爲崩御となつた時、京都の富商、伯屋入兵衛なるものが、貲を奉つて諸卿の間に奔走し、天皇の御在世中常に火葬を忌み、上代の土葬を望ませた大御心に對し、御遺骸を土葬に附し奉つたとあるのは、事の疱瘡に關する訛傳であるといふ説もあるが、市中の一商賈が貲を獻じて、御大喪の儀が行はれたといふだけでも、當時皇室の供御の乏しかつた事情はよく分る。

「五」 公卿の貧乏と副收入

禁裡から右の如き有樣であつたから、諸王公卿の窮乏は推して知るべきである。

徳川氏が禁裡を始めとして、仙洞、院、宮、親王、公卿、門跡、院家、女官、尼御所及び諸役人等、すべて朝廷方の御料として畿内、丹波及近江の地から差出して居たのは總てで十二萬石ほどであつた。今[illegible]い。

禁裡、	二萬九千餘石
仙洞、院、宮、	一萬五千餘石
親王、公卿、	四萬四千餘石
門跡、院家、	一萬九千餘石
女官、尼御所、	七千五百餘石
諸役人、	二千三百餘石
合計十二萬餘石	

勿論此總額及び割當は、其後に多少の變更があつたにしても、大體に於いて、幕末まで同じであつたに相違なく、之を各家の收入に就して見ると親王家は約三千石、攝家及び公卿は最高三千石から最低百石くらゐまで、其他の諸家には三十石、三人扶持などいふ憐れなものもあつた。即ち親王家の貴きを以てしても、其御料は旗本の中位に過ぎず、堂上と稱せられる公卿の中にも、其收入の藏前取と呼ばれた小身の旗本若しくは御家人にも及ばぬやうなのがあつたのであるから、その貧乏は推して知るべきである。太田錦城の『梧窓漫筆拾遺』に、三十石三人扶持の公家のことが書いてある。一種の讒論に落ちては居るが次に援用して置かう。

『院參町といふ處に、三十石三人扶持といへる公家四十人ありと。是れは靈元院の御時か、東山院の御時に、公家の[illegible]に召し仕はれたるもの、[illegible]

愛のものもあり故、諸大名より婚姻を結びて諸大名より扶助を受けたるものなり。今は世隔りて、扶助のものもなく、微祿にて困窮せざるものもなし。公家といふ名にて、同心足輕と同祿なること、是れも所謂の至當を得たりとも思はれず。凡そ薄祿公家といふものを、二百俵高に被仰付て可然ことなり。』

之等の公家がかやうな薄給の爲に到底その身分の尊嚴を保つことが出來ず、其生計の爲には如何なる内職にても之を卑しとせず、品位も體面も顧るの遑がなかつたことは人のよく知る所である。但し、堂上と呼ばれた上級の公卿の間には有職と云つて、各種の儀式典例詩歌技藝を司掌する特權があり、衣服、器具、家居、技藝に至るまでそれぞれ有職の家に就いて免許を得なければ、之を用ふることが出來ない制となつて居た。若し免許を得ずして、濫に之を用ふるものがあれば、大名と雖も重責を免れることが出來なかつた。此免許料こそ、有職の諸家に限られた公然の、而も唯一の副收入であり、此副收入によつて比較的餘裕のある生活を營むものもないではなかつた。

例へば松木、持明院家の兩家は筆道の家元であり、冷泉家は和歌の家元であり、園家は挿花の家元であり、飛鳥井、難波の兩家は蹴鞠の家元であり、山科、高倉の兩家は服飾衣冠の事に關する家元であり、庭田、綾小路、五辻の三家は郢曲の家元であり、高辻、東坊城、唐橋の三家は紀傳の家元であり、五條家は相撲の[illegible]であり、久我家は[illegible]であつた如きそれである。

さうして西園寺家は所謂九淸華の一で、傳奏、議奏に選ばれることの出來る家柄であつたが、有職家としては、琵琶の免許を司るものであつた。

『六』西園寺家は琵琶の家元

アルプスのサンゴタルドを踰える鐵道のやうに、ひどく曲り迂つた話になつたが、明治十三年に西園寺公が佛蘭西から歸つて間もなく或る宴會の席で、藝妓の三味線の轉軫を拈り直して、大通人の虚名を博したのは、此西園寺家が琵琶の家元である處から、公がその幼少の時に家來共から習ひ覺えさせられた琵琶の祕傳に因む惡戯に過ぎなかつたのである。

西園寺の家祿は表向六百石と云はれて居たが、實は四百石であつた。公の懷舊談（大正十五年十二月九日、某氏筆記）によると、その頃、百姓の年貢に幾何升、筍何本などいふのがあつたさうで、之等は恐らく表高六百石の不足分に對する代納ではなかつたかと思ふが、それは確める由もない。家來には諸太夫五人、（太夫は五位の通稱で卿の最下位、士の最上位）六位の侍四人、近習四人、外に下部雜掌など

お、[illegible]にか[illegible]
い。琵琶の免許料が何ほどかその家計を助けて居たことであらう。

西園寺家には昔から正室といふものがない。今の西園寺八郎氏に至つて初めて正室を置くこととなつたわけであるが、老公まではそれがなかつた。西園寺家に代々正室のなかつたことは、例のお花さんの噂などに絡んで随分世間に知れ渡つて居ることであるが、さてその由來を知る人に至つては極めて稀れである。然るに西園寺家に正室のないのは、その琵琶の家元であることに因んだもので、此一事を以てしても、西園寺家が徳川時代を通じ、琵琶の収入を如何に重く見て居たかがよく分る。西園寺家では、代々その正室は竹生島の辨財天であると、信じもし、言ひ觸らしもして來た。竹生島の辨財天が夢枕に立つて琵琶の秘曲を傳授するといふので、西園寺家の免許が世間から殊に有り難いものに思はれて居た。

西園寺公は三歳の時、養父に死別し、九歳の時にはその養母に當る人にも死別したといふからその琵琶を習ひ覺えたのは、養父からしたのではない。太夫どもが、左右から熱心にそれを勸めもし、敎へもした。公は性來琵琶を好まず、詰らぬこととして等閑に附する傾きがあつたのを、家來どもが心配し、家柄なればとて強ひて學ばせた。物心がついて、何かの折に琵琶など詰らぬものだといふやうな口吻を洩すことがあると、家來どもは、眼に角立てて、さやうなこと仰せられては、御生計に障りますなど、嗜めるのが常であつたものださうであ

う。

『今はそうきれいに忘れてしまつたが、その頃には未だ[illegible]覺えた琵琶の秘曲で三味線の調子を合せるくらゐのことは出來たものである。』と西園寺公は當時のことを追懐して昵近の某氏に語つて居る。忘れずとしても、宴會の席でそんなことをして見せようといふほどに脂の乘つて居た時代が公にもあつたかと思ふとおかしいやうである。

西園寺家の琵琶の收入は何ほどでもなかつたらしい。前に擧げた有職家の中で、飛鳥井、難波兩家の蹴鞠、久我家の檢校、吉田白川兩家の神官など何れも少からざる收入があり、一概に公卿貧乏といふ中に、その富をさく〳〵大名の内福なものに劣らぬやうなものもあつたとのことである。

人も知る如く、西園寺公は故大勲位公爵徳大寺實則の實弟で、現公爵公弘の叔父に當る。徳大寺家は既に述べた如く、藤原師輔の第十一男で閑院家の祖と稱せられる公季五代の孫公實の第五男、左大臣實能の後である。實能は三條家の祖實行、西園寺家の祖通季と兄弟で、同時に別家して徳大寺家を立てたものである。實能から二十六代公純に至り、長男實則が家を嗣ぎ、次男公望が出て西園寺家の跡を襲ひ、三男隆麿が住友吉左衛門の養子となり、四男威麿が京都府の人、末弘千代浦の名跡を立てた。

「七」關白職の由來及び其家柄

三條、西園寺、德大寺は久我、廣幡、今出川、花山院、大炊御門、醍醐の諸家と並んで五攝家（近衞、鷹司、九條、二條、一條）に次ぐ家柄であるが、昔から關白にはなれなかつた。關白は、秀吉が微賤から起つて之に任じたのを例外として藤原基經以來、藤原氏の嫡流である五攝家のものときまつてゐた。後陽成天皇の時に至り、菊亭（今出川）晴季が秀吉を唆かして關白の職を望ませた。此時の關白は二條昭實であつたが、秀吉は之を排して關白に任じ、從一位に敍し、辭いで太政大臣に補せられた。

德川家康が天下の實權を握ると、秀吉が二條昭實を威脅して强奪した關白の榮職を五攝家に返還し、自ら源氏の嫡流、武家の頭梁として、征夷大將軍を以て甘んじた。政治の實權を確實に掌握して、空位空名を公卿の手に返還し、同時に五攝家を以て、自家掌中のものたらしめようとした彼の聰明を見るべきである。家康は又、關白の下に傳奏を置き、幕府と朝廷との間に在りて、奏上宣下の事を斡旋させた。傳奏には、寺社傳奏と武家傳奏との二つがあつて、武家傳奏が最も重んぜられた。傳奏はその就職の初めに當り、幕府に對して粗略なく、何事も隔意を設けずして報告すべきを宣誓させられた。傳奏

て、實務はなかつた。傳奏、議奏に任ぜられたのは、久我、三條、西園寺、

院、大炊御門、廣幡、醍醐、中院、嵯峨、三條西、日野、烏丸、柳原、廣橋、橋本、淸水谷、四辻、西洞院、正親町、小倉、中山等の諸家で、就中、九淸華の最も重んぜられたことは云ふまでもない。

「八」光格天皇と鷹司輔平及び西園寺公

右に述べたやうな次第で、西園寺家から關白は出なかつたが、公の祖父は實は鷹司輔煕であり、輔煕四代の祖、關白鷹司輔平が閑院宮直仁親王の第八子で、光格天皇尊號一件の大立物であつたことは確實であるから、公には閑院宮家の貴い血が流れて居る。明治天皇を始め奉り、歷代天皇の御信任が篤く、その待遇の倫を絶して居るのも固より其所である。今少しくその次第を左に述べて置くとしよう。

東山天皇（貞享二年―寶永六年）の御子に直仁親王と申したのがおはし、寶永七年八月詔命によつて閑院宮家を立てさせた。一品に敍し、彈正尹に任じ、三宮に准ぜられ、寶曆二年六月御年五十にして薨去あらせた。之が現におはす閑院宮家の祖である。（前掲閑院公季の後裔と混同してはならぬ）此第一世閑院宮の御子に輔平と申されたのがあつて、鷹司家を

如く、史上稀に見る賢明の君におはし、[illegible]に通じ政を親らし給ふこと三十七年、其間に廢絶を興し、[illegible]を振起し、尊號一件では十五代二百五十餘年の幕政を通じ、第一流の大政治家を以て稱せらるる松平定信を向ふに廻して正々堂々事の理非を問はせ、幕府の威信に對して致命的の大打撃を下されたと評せらるるほどの英主におはしたが、輔平の關白職に在る間は、假令一時でも、其議を寢し止まらせておはす處を見ると、此輔平といふ人も、尋常一樣の人物でなかつたことが推察せられる。尤も光格天皇は閑院宮典仁親王の御子典仁親王の第六子におはす上から云ふと、輔平はその叔父に當つて居る。天皇が善く關白輔平の言を聽かれたのは、さうした關係によるのかも知れぬが、又一面から考察すると閑院宮家の血が、すべて容易ならず傑出したものであつたといふことが云はれる。

寛政三年三月に關白が交代して、一條輝良が職を襲ぐと、天皇は再び尊號の事を寢し立たせ、之を朝議に附された。此時も前關白輔平は、其子左大臣鷹司政熙外一兩人と共にいたく其議を不可としたが、關白一條輝良、右大臣二條治孝以下六十五人の朝臣が、所謂大多數で之を可としたので、天皇は翌年議事の謄本に内旨を添へて幕府に御諮詢あらせ給ふこととなり、玆に近世史上に著しい朝廷と幕府との紛議が避け難いこととなつたのであつた。

尊號一件は其原因、顛末及び兩者の論爭に關して史家の間に種々の異說があり、容易に斷定を許されぬこととなつて居るが、その關白として[illegible]を私にしようとしたこと[illegible]に反對した[illegible]に反對した輔平父子の[illegible]にも、相當有力な[illegible]、其[illegible]必ずしも幕府の走狗となり利の爲にしたのでないことは、現に知られて居る定信側の記録に照しても明かである。

政熙の子を政通といひ、政通の子を輔熙といひ、之が西園寺公の血統上の祖父に當つてゐる。西園寺公の曾祖父鷹司政通は太閤の稱を許され、英邁剛毅の孝明天皇も常に憚りおはしたほどの傑物であつた。古來太閤は關白の父でなければ許されなかつたのを、政通は關白の父にあらずして之を許された。西園寺家も、太政大臣は出して居るが、關白を出す家柄ではない。併し徳大寺家には鷹司家を通じて光格天皇と同脈の血が流れて居り、輔平、政通の血が流れて居り、從つて公も出仕の初めから、上の御覺えめでたく、御近習（侍從）の中に在つて、特に重きをなした跡のあるのは爭はれぬ事實である。

明治天皇と公との關係が、普通の君臣のそれと異り、維新以來、國家の利害休戚に關する大問題に關しては、隨分立入つた、時には烈しい御下問があり、公も亦至誠を竭し、正と信ずる所は御納得の行く所まで憚らず之を奏上して毫も懼れる色のなかつたことは、少しく事情に通ずるもの丶皆知る所で、それも偏に君德の宏大海の如きによること勿論であるが、公の如き身分、家柄の人でなければ到底出來難いことであつたに相違ない。

「九」學習院に於ける西園寺公

公は嘉永二年十月德大寺家に生れ、間もなく西園寺の養子となつたものらしい。嘉永四年養父師季が死し、それからは養母に當る人（前述の如く西園寺には正室なし。）の手に鞠育せられ、諸太夫の傅導をうけて人となつたのであるが、公は性來不羈飄逸の資であつた上に、家長なければいよ／＼我儘氣隨にふるまひ、屢その家來達や、老女を困らせた。實兄、德大寺實則は、世人も知る如く、渾厚篤實の人で、家庭も嚴格であつた爲に、その言語動作は少年ながら成人の風あり、近隣の評判ものとなつて居たらしい。久しく西園寺家に仕へて最近高齢で身まかつた老女が、當時のことを人に語る毎に、西園寺家の隣屋敷に綾小路といふのがあり、親達が口癖のやうにその子達を誡めて、『隣家の西園寺の眞似をするな。德大寺を學べ。』と云つて居たといふことを一つ話にして居たさうである。（大正十五年十二月八日談、某氏筆記）

安政四年、公は九歳でその養母に當る人を喪つたが、文久元年十三歳の時には、十五歳といふ觸出しで元服し、少將に任じ、侍從に補せられた。侍從は所謂御近習で、是から孝明天皇の御側に仕へること〻なつた。

歳以上、四十歳以下の公卿の子弟約二百人ばか……五人を教師としてをうけて居た。淸華二家の外に處士の學力あるもの五人を教師として居たが、公の入學した時には、教師に劉石秋、山陽門下の樺、中沼某などいふ人が居た。公の語る所によると、之等の教師は何れも平凡で、普通に經書の講義をするくらゐのものである。公の入學する前には伊藤仁齋の學派で、伊藤某といふものが教鞭を執つて居た。之は相當識見のある學者であつたとのことであるが、公は此人からは教育を受けなかつた。

習字などは云ふまでもなく、家の太夫どもからも之を授けられた。

學習院の教育は、かやうに極めて平凡なもので、時勢に對して見識のあるやうな教師は殆ど一人も居なかつたのであるが、それにしても其教育の効果は決して輕視さるべきものではなかつた。思ふに、それまでの公卿の品性志操といふものは、極めて卑しいもので、國家有事の際、役に立たうと思はれるほどのものは全く見うけられなかつたのを、光格、仁孝の兩帝がいたく歎かせ、彼等の子弟の爲に學校を設け、先づ學問によつてその品性志操を教養し、追々時勢に對する眼を開かせようと覺立されたのであるが、何分さやうな計畫の立ち難いことを目的として極度に切詰められた御料のことであるから、登用の出で

て凱然志操を高尚にし、時務に對する識を深かせる事實を與へたといふ點に於いて其缺點は非常に偉大なものであつたと云はねばなるまい。

「一〇」孝明天皇に近侍し奉る

公はかくして實年十三歳の時から、孝明天皇の御側に侍することゝなつたのであるが、それは公卿の子弟にとつては非常に名譽とされたことであつた。御側には侍從即ち御近習の外に、御稚兒といふものがあつた。之は當今の給仕ともいふべきもので、多くは身分の低い公卿の子弟の中から選ばれて居た。

公の懷舊談（同上筆記）によると、其頃同役（侍從）は六十人ばかりであつた。之を三分して交代に勤務したが、六日に一度の出仕であつた。朝九時頃に出仕して、其夜宿直し、翌朝他の組と交代に退出したものださうである。侍從には劍璽係、書類係、などそれ〲受持の役があつたけれども、勤務と云つて格別の用事もなかつた。宿直の夜は百物語などで却々賑やかであつたものださうである。

孝明天皇の英邁剛毅、稀に見る英主におはしたことは史上に炳乎たる事實で、それに關しては、立派な文獻も整つて居ることであり、本誌にも德富蘇峰氏のその邊のことを中心とした史論が連載されて居ることであるから、茲に詳しくそれを述べる必要はない。その剛毅果斷は後三條天皇に似て規模の大は之に過ぎ、その聰明英邁は後醍醐天皇に[illegible]の[illegible]に[illegible]たといふ史實と[illegible]に[illegible]を[illegible]のであらう。維新の[illegible]が大部分此帝の御在位中に定まつて居る事實から推して考へても、その大器を察し奉るに餘りあるではないか。

公は少年時代此英主の御側近く奉仕して、次から次と矢繼早に起つて來る國家の難問題に、日となく夜となく、宸襟を惱まさせた當時の事どもを眼のあたりに見て居るのであるが、奈何せんそれを一々記憶せんには、公の年齡があまりにいとけなく、勤王志士の動靜、堂上諸卿の去就、幕吏、諸大名の頻繁な參退などに、そのやはらかい少年の胸をとゞろかし、熱い血しほをたぎらさんには、公を束縛した因襲の力が餘りに强かつた。公は當時のことを人に語つて「孝明天皇には御側近く奉仕したけれども、何分幼年のことで、記憶に殘るほどのこともない。當時兄（德大寺實則）には既に、政治的意識があつたものと見え、何かの時、時事に關する意見を申上げると、若輩者が何を申すかとの御叱りをうけ、ひどく恐縮したことを自分に話したことがある。政治のことで記憶に殘るのはそれくらゐのものである。自分として幾分政治に興味を感じ、時事に心をひかされるやうになつたのは、崩御後、一ヶ年ばかりの間のことである。」と云つて居る。（大正十五年十二月九日談、某氏筆記）

孝明天皇の御在位中に起つた内外幾多の重大問題を歷史の上で讀んで居るほどのものであれば、此場合誰でも何とか、自分一人で見て來たやうな自慢話がして見たかりさうなものである。それを何分幼少の

時のことで、更に覺えないといふ所に公の恬淡にして而も愼み深い特殊の性格がよく窺はれる。之は世間のまだ深く注意せぬことであるが、公の傳記といふものはまだ是まで一として世に發表されて居ぬ。明治天皇より三歳の年長で、孝明天皇崩御以來、御側に奉仕して、或時は御學友の關係ともなり、又、或る時は文字其まゝな輔弼の臣となり、國家の重大問題に關して烈しい議論を上下して來た公は元勳中の元勳と云つてよく、明治天皇崩御の際などに、所謂『謹話』など申上る資格のある人を求めたら、公の如き先づ第一に僂指さるべき人であつたに相違ない。然るに公は明治大帝崩御の際にも、曾て『謹話』なるものを申上げたことがない。又、自分の傳記らしいものを書かせたことがない。明治大帝の崩御を機會として、明治の元勳功臣と稱せられる人は大抵その傳記を書かれたり、書かせたりしたものである。然るに公の傳記だけは、新聞の續きものにも、雜誌の特別號にも、列傳體の單行本にも到頭發表されずして今日に及んでゐる。さうして、雜誌の特別號も、列傳體の單行本も皆公の傳記は當然此中に掲載せらるべくして、之を果し得なかつたことを遺憾とする旨端書して居る。公の傳記としては、植松孝昭といふ人の『明治史傳』といふのがあるだけであるが、此本からは公の政友會總裁としての政治的經歷以外には何ものをも學ぶことが出來ぬ。

は世間の所謂『謹話』なるものの提供や

君子に祭上げ、如何なる場合にも極度の讚辭を奉つて、却つてその

聖德を蔽ふやうな結果に陷り易いのを深く歎いて居る。大正十五年十二月八日、公は其興津の邸で筆記の爲訪問の某氏に對して次の如く語つて居る。

『臣下として主上の御性質などを物語るは愼むべきことなれども、、、、、、、、、、、。例へば英國にて植民地の領事などが皇帝の人となりを自由に大膽に品評するのを見るに、隨分大膽にして無遠慮な談話の中に、自ら君德を宣傳して、聽者に敬仰の念を起させる。然るに、、。かやうな談話といふものは却つて眞實を誤り、聖明を蔽ひ、君德宣傳の意味をなさず、却つて反對の結果を招く惧れがある。』

僕は西園寺公から直接此話を聽いた人に會つて、初めて是まで世に公の『謹話』なるものの發表されたことがなく、又、同時に公の傳記らしいもの、懷舊談らしいものの發表されたことのない理由を知り得たのであるが、それより以前、偶然に現侍從次長河井彌八氏を御訪ねする用向きがあり、氏が新聞雜誌の記者から如何にせちがられても、

に西園寺公から學び得たものではないかといふことを思つて見たりした。

「一二」 西園寺公と青蓮院宮

孝明天皇の顧命の臣で、唯一とまで云ふことは出來ずとも、第一といふことの出來るものが久邇宮朝彦親王であつたといふことは、本誌で德富蘇峰氏の詳しく論述されて居る所であるが、文久元年、十三歳から帝の御側に侍した公も亦それは恐らく、賀陽宮であらうと云つて居る。久邇宮朝彦親王のことを、賀陽宮といふのはおかしいやうである。何故となれば、現今の賀陽宮家は、朝彦親王の第二王子、邦憲王を第一世とするもので邦憲王は慶應三年六月朔日の御誕生でおはした故、孝明天皇御在位中に賀陽宮といふものはおはさなかつたと思ふ人もあらうが、當時宮中では朝彦親王のことを常に賀陽宮と申上げて居たものと見える。賀陽の名の古く史に見えたのは、恐らく桓武天皇の皇子で、賀陽親王と申し奉つたのが、天資聰明にして意匠に富ませ、手工に巧みにおはしたとあるのが、その初めであらう。一條天皇の女御で、閑院太政大臣公季の女、義子を賀陽門院と申し奉つたこと、又、鳥羽天皇の后で、關白藤原忠實の長女、泰子を同じく賀陽門院と申し奉つたことなども、史を讀む者のよく知る所で、朝彦親王のことも、普通には賀陽宮と申上げて居たものと見える。西園寺公がこの賀陽宮に關して記憶する所は、次の如き斷片である。

『孝明天皇は殊の外、賀陽宮を[illegible]せられた[illegible]に見[illegible]た。或る年、常の御殿の近くに東宮の御殿を[illegible]されることがあつた時、普請場から火を失して、あはや大事に及ばうとしたことがあつた。自分（西園寺公）の家は、御殿に近かつたので、急ぎ參内して見ると、帝には四五人の女官を從へて小御所に移く、廣き廊下に立たせ、火勢を御覽じていたく御軫念の體に拜せられた。火なれば程なく鎭火すべき旨申上げると、賀陽宮に直ぐ參内するやうにとの御諚である。自分で驅けて行かうかとも思つたが、御側が無人のことを思ひ、召連れた家來に命じ、急ぎ宮方へ御諚を傳へさせた。程なく宮が御出仕になり、帝にもいたく御滿足の御様子であつた。

『かやうな場合にも、直に關白をと仰せられず、賀陽宮を召されたのは、帝の不安深く賀陽宮を賴ませたのによることであらう。孝明天皇顧命の臣といふは、先づ此賀陽宮あたりのことであらう。』（大正十五年十二月八日談、某氏筆記）

此時の火事はいふまでもなく大事に及ばずして終つたものらしく、安政元年四月六日、内裏から火を發して、宮城全燬を燒拂ひ、町家に延燒して町數凡そ百九十、同戸數五千八十八戶を灰燼に歸せしめたのとは全く別ものである。

帝が此小火にもいたく驚かせたのは、先年の大火の網[illegible]に[illegible]せた賢所の上の打撃の餘りにも甚だしかつたこと、大御心の[illegible]た御憐みの餘りにもきびしかつたことによること[illegible]

れよりも、外は西洋諸國に對し、內は德川幕府に對し、形勢頗る切迫の折柄とて、如何なる異變の御身邊に突發せんも計り難しとの御軫念が主であつたに相違なく、それには、一天合座主として叡山の大衆を擁し、自分も常に武事に心を傾け、私に建武の大塔宮を以て任じさせた賀陽宮が御側に在すといふことが、何ほどか御心强きことにおはしたであらう。公に對して先づ賀陽宮を召せと仰出されたのも道理である。

「一二」 西園寺公の朝彦親王觀

併しその賀陽宮の人物に就きて、公は又次の如く語つて居る。

『賀陽宮は夙に英明の聞えあり。自分も一度宮方へ參つたことがあつたが、子供心にも格別此御方はと感心するほどのこともなかつたので、その後は止めた。西郷も初めは賀陽宮に矚目して謁を通じたけれども、、、、、、、、、、、、、、、更に二三の宮家公家を物色して、後遂に岩倉と結んだものである。此邊のことから考へると、西郷は人を見るの明があつた人と云はねばならぬ。』(同上)

之は勿論、西園寺公の子供心に、賀陽宮に接近して見た觀察であつて、僕が西園寺公の此觀察を全然信ずるといふわけではない。世間には[illegible]ふやうなことを云ふ人もあるが、それは飛んでもないこと[illegible]眼には、接近すれば接近するほど、其物體の一部分をハツキリと見ることは出來ても、全體を見ることの出來ぬ弱點がある。廬山に居るもの廬山を見ずとはよく云つた諺である。僕は西園寺公が青蓮院宮の昵近者であつたといふ理由の一つで、史家たる蘇峰氏の朝彦親王を中心とする維新史の解説に茶々を入れようとするものではない。西洋の歷史家の中にも、事件はそれが起つてから凡そ五十年經過した後でなければ、歷史として記述すべきものでないと云ふことを云つた人がある。全くその通りで、物事の因果の關係は如何に聰明な、直覺力を持つ天才でも、その事件の渦中に居り、若しくはその事件と時を同じうしては、正確にその事件の原因若しくは結果を論斷し得るものではない。事件には秘密がある。その秘密は往々にして、事件の中心人物である或る個人の胸に藏されたまま大地の底に葬られるものである。併し『時』はその秘密を訐く。社會多數の眼に映る數限りなき因果の絲を、『時』は忠實に一ケ所にたくり寄せて、後世の人に、一旦湮滅した秘密を數へて見れる。『眞實とは自分で自分の心を闚ることのみである。』と唱へて、頑強に社會的興味を文藝の門から排斥して來たブルヂョア作家の金科玉條は[illegible]

つた[illegible]信ずる　少くとも[illegible]に
罷免さすべきではなかつたと思ふ[illegible]で来なかつた。[illegible]も
飛んだ所まで脱線して来たが、[illegible]は西園寺公の朝彦親王觀を、公[illegible]その昵近者であるといふ唯一の理由で、全然之を信ずるものではないが、同時に又、昵近者の報告として十分敬意を拂ふべきものであると信ずる。何故となれば、若し吾々が富士山に接近することが出來ず、或は、富士山に登つて、親しくその熔岩の絶壁を攀ぢ、千仭の谷を俯瞰することが出來ないものとすると、富士山は遂に八面玲瓏、玉の如き東海の名山としてのみ信ぜられる懼れがあるからである。

朝彦親王が孝明天皇と共に終始して、維新の大舞臺に活躍される所のなかつた所などから察すると、或は誠忠餘りありて、識見足らず、時代の急激な變轉と共に、自然舞臺裏の人となられたのではないかとも察せられる。

「一三」西園寺公と岩倉具視

慶應二年孝明天皇崩御の時には、公も御近習の中から十人ほど選ばれた『酉盧』の一人として、大喪の儀に加はり、靈轜に侍し奉つたとゞめる。公は此時まだ僅に十八歳であつたが、諒闇一ヶ年ほどの間に身心ともに大人びて、漸く政治の事に興味を感ずるやうになつた。

西園寺公の懷舊談にもある如く、西郷も初めは青蓮院宮朝彦親王の名聲をきいて謁を通じたが、其時代の趨勢を達觀するの明に於いて

に、[illegible]
つた[illegible]
身となつて[illegible]岩倉村に幽居するやうになつてからのことであらう。人も知る如く岩倉村に退くまでの具視は熱心な公武合體論者で、かの勤王の浪士達をして切齒扼腕せしめ奮起せしめた和宮御降嫁の一件なども、朝廷方では殆ど此人が主となつて幕府との交渉に任じたものである。されば岩倉も一時は勤王の浪士達から佐幕派の巨頭として睨まれたものであるが、その岩倉村に幽居中、蛤御門の變があり、尋いで長州征伐の事があり、一旦全く調停の途なしとまで見られた薩長の乖離が、土藩の浪士坂本龍馬、中岡愼太郎等の熱心な奔走によつて案外迅速に收拾せられ、薩長聯盟の形勢が成つた頃から岩倉の態度も亦一變した。さうして彼は、西園寺公に所謂政治意識の生じた頃には、モウ青蓮院宮に代つて、隱然朝廷方の中心人物となり、勤王討幕主義の志士を結束して着々擧兵の計畫を進めて居た。之を要するに青蓮院宮が最も花々しい活躍を遊ばされたのは、西園寺公が侍從として出仕する以前で、西園寺公が出仕した頃から、時勢が更に急轉して、朝廷方にも更に新しい識見あり、手腕ある人物を要するやうになつて居たものと見るのが妥當であらう。

かやうにして西園寺公の政治的生涯は孝明天皇の崩御と共に始まつたが、その初舞臺とも云ふべき山陰道鎭撫總督の使命は、岩倉の計畫と重大の關係があり、その關係を知るためには少しく溯つて岩

倉の人物、その朝廷に於ける地位及び岩倉を中心とする薩長土その他各藩志士の動靜に關して、一通りの豫備知識を作つて置く必要がある。

岩倉家は、堀川、梅溪、久我、久世、千種、植松、東久世、六條、土御門、中院、愛宕、北畠、大河内、赤松の諸家と共に、村上源氏の系統に屬するものである。具視は同門堀川前中納言康親の子で、文政八年誕生、幼名を周丸といひ、岩倉具慶が養つて子としたものである。岩倉家の幕府から定められて居た家祿は百五十石であつた、九清華の一たる西園寺家の六百石に比較して、その門地の低かつたこと知るべきである。

具視は天保九年仁孝天皇の時十四歳で元服し、從五位下に叙し、昇殿を聴された。堂上としては正しく最下位にあつた。天保十二年從五位上に進み、弘化二年二十一歳で正五位下に叙せられた。安政四年西園寺公が九歳の時、三十三歳で侍從に出世した。云ふまでもなく孝明天皇の御取立である。西園寺公は十三歳の時、十五歳といふ觸出しで直ぐ侍從に任ぜられて居るのに、岩倉は出仕してから二十年目で、漸と其處まで出世したわけである。門地の距りを見るべきである。

「一四」 岩倉の名初めて顯はる

岩倉は資性深沈にして智謀權略あり、善く各藩の英俊を收攬してその能を竭さしめ、幼帝を輔佐して維新の鴻圖を大成した鎌足以來の功臣

であるが、初めてその[illegible]を[illegible]られたのは、安政五年[illegible]篤が自ら上京して[illegible]の勅許を得ようとした時であらう。其より先、幕府は米國の水師提督ペリーの威嚇に遇つて一歩も讓することを得ず、嘉永七年三月三日、老中阿部正弘は勅許を得るに及ばずして十二ヶ條より成る我國最初の國際條約に調印し、[illegible]亞に於て許諾した。元來幕府の政治は、多く將軍の獨裁で、朝廷に對しては唯、其結果を奏上するに止まり、勅許を俟ちて事を行ふといふ例は[illegible]てなかつた。況んや諸藩に諮詢して事を行ふといふ樣な例は、[illegible]人の夢にも想ひ及ばなかつた所であるが、幕府は米國の強硬にして[illegible]を極めた威嚇に接して周章度を失し、嘉永六年米使ペリーを[illegible]の久里濱に引見し、明年の回答を期して一時の急を遁れた後、事を具して朝廷に奏上し、且つ其國書を諸藩に示して意見を徴した。これ幕府がその無爲無策から事を諸藩に諮詢した初めであつて、此時から幕府の威信は全く地に墜ち、諸藩は幕府の内兜を見透して、事毎に其施措の緩慢を批難し、其結果は延いて處士の横議を醸成し、天下騒然として、また收拾すべからざるの端を開くに至つた。然るに幕府は一日[illegible]の如くにして事を朝廷に奏上し、且つ諸藩の意見を徴して置きながら、其翌年（嘉永七年）三月三日には朝廷の允許を經ずして恣に米國、其他と條約を締結し、越えて安政三年米國領事ハルリスが、下田に來て前年の條約を改正し、更に開港地を増加して貿易を開始せんことを要求するや、再び其强壓に屈して安政四年十月之を江戸城に引見

し、勅使に謁せしめた後、翌安政五年五月二十六日を期し、下田に於いて新條約に調印し、六月中旬から之を實施せんことを約した。處が此時幕府は如何に血迷つてか、既にハルリスと條約の大綱を決し、その調印の日取りまで約して置きながら、其改正案を諸藩に下して利害得失を論ぜしめ、越前侯松平慶永の議を容れて朝廷の勅許を乞ふことにした。その狼狽の狀見るべきである。

是より先、幕府では、譜第大名中、隨一の外國通を以て稱せられた堀田備中守正篤が老中となつて、阿部正弘の上に班し、攘夷論の急先鋒であつた水戸侯徳川齊昭を斥けて、著々其漸進的開國主義の政策を實現しようとして居たのであるが、茲に至つて同じ開國論者である越前侯の進言を容れ、朝廷の允許を請ふこととなり、先づ林大學頭等を遣して、其旨を奏上せしめたのであるが、此時の朝廷は最早昔日の朝廷でなく、その背後には囂然たる天下の輿論があり、諸大名の支持があつたので、諸卿の意見も却々強硬で、幕府が既にその大綱を決し、調印の日取りまで約束した後で勅許を請ふといふのは不埒であるといふので、遂に之を却下されることになつた。之が岩倉の侍從に任ぜられた年の暮で、彼の活躍は正しく此時から始まつたのである。

其處で其翌年、即ち安政五年正月には大老堀田正篤が自ら京都に上つて具に狀を奏し、條約調印の勅允を得ようとするに至つた。正篤は此時、林大學頭等の報告によつて大體に朝廷の空氣を知つて居たので、關白九條尚忠を[illegible]一[illegible]閣を閉して、その目的を遂しようとしたのであるが、[illegible]正しうして一門は之を斥けたとある。之は其[illegible]にありと、大に偏忠の志を[illegible]したのであると云はれて居る。[illegible]を知り抜いて居た正篤は、誘ふに黄白を以てせば、關白とて何程のことがあらうかと高をくゝつて居たのであるが、茲に至つて大に狼狽し、彦根の藩士で、よく堂上諸家の内情に通じて居る長野主膳といふものを縦つて、先づ九條家の諸太夫、島田左近に取入り、左近をして關白を籠絡せしめたといふことである。

かやうにして朝議は急速に軟化し、愈、勅答の評定に入らうとしたのであるが、其中に外交上の事は擧げて幕府の措置に一任するといふ意味の一句があつたのを、岩倉がきいて大綱に關する一大事とし、盛に暗中飛躍して中山大納言忠能以下、八十餘人の強硬論者を結束し、連署してその不可なる所以を上奏した。孝明天皇之を嘉させ、直に勅して、その案文を改めさせた爲に、正篤は志を得ずして空しく歸東することとなり、幾もなくハルリスと朝廷との間に板挾みとなつて職を辭した。

『一五』 憚られた薩州と憎まれた水戸

正篤の上洛を一期として、諸卿の間に於ける[illegible]野が愈明確を加へて來た[illegible]

家は論外として、九條尚忠は爾來益々その開港論の支持者たる態度を明かにし、正篤が失脚してから後も、その後繼者たる井伊直弼と氣脈を通じて盛に活躍した。之に對して近衞忠煕、鷹司輔煕、三條實萬、中山忠能の諸卿は水戸家を背景とし、且つ島津家の勢力を恃んで熱心に攘夷論を唱へ、孝明天皇の御信任もあつて其勢頗る盛であつた。岩倉が此時既に盛に活躍して居たことは前述の通りであるが、その表面に立つて働くには、その門地が餘りに低く、其官職も餘りに卑しかつた。

安政五年六月二十日、井伊直弼は遂に朝廷の允許を得るに及ばずして、日米修好通商條約に調印し、京都へは堀田、松平、久世、内藤、脇坂五閣老連署の宿次奉書を以て其顚末を奏上した。

朝廷は此悲報に接して大に驚き、三家若しくは老中の中上京して、委曲を奏上すべき旨勅命を下された。此勅命が幕府に到着して間もない七月六日といふに、久しい間問題とされて居た將軍家定が薨じ、幕府の困惑は實に名狀すべからざるものがあつた。是より先、將軍家定の暗弱は天下に隱れなく、且つ三十歳を越えて未だ嗣子がなかつたので、閣僚は勿論、諸大名に至るまで一日も速に賢良公明の嗣君を立て、之を輔弼として國家非常の難局に處せしむべしといふのが一般の輿論であり、堀田正篤の時代から閣老は皆、齊昭の子で一ツ橋家に養子した慶喜に嘱目したものであるが、慶喜を迎へることは第一に將軍家定が喜ばず、第二に急激な攘夷論者である齊昭に乘出される懼れもあるので、井伊直弼が大老となると、先づ慶喜を[illegible]排して、之を紀州家から迎へることとし、日米條約に調印を了した五日後、即ち六月二十五日を以て公式に紀州宰相慶福（當時十三歳）を儲君に立ててしまつた。此專斷が條約の調印と共に水戸烈公を首腦とする攘夷論者の非常な激昂を買つたことはいふまでもなく、彼等は單に外交問題ばかりでなく此繼嗣問題に關しても力を朝廷に藉り、一ツ橋慶喜を擁立しようとして策動した形跡が明かに見えたので、井伊は勅命に接して水戸侯、尾張侯の中、孰れかを上洛參内させることに非常な危險を感じたのである。かゝる折も折、七月六日に將軍家定が薨去となつたのであるから、その困惑の狀は察するに餘りある。其處で井伊は非常の決心で、先づ臺命と稱して尾張大納言慶恕、越前中將慶永を退隱させ、水戸齊昭と共に謹愼を命じ、同時に一ツ橋慶喜の登營を止め齊昭の子中納言慶篤にも謹愼を命じた。彼はかやうにして尾張侯と水戸侯とを禁足した後、京都にはその腹心の老中、間部下總守詮勝を代理として派遣したのである。

關東で井伊直弼がかやうな大鉈を揮つて居る間に、京都では近衞、鷹司、三條等の攘夷派が彌々勢力を加へ、九條尚忠に迫つて關白職を辭させ、遂に水戸の齊昭と聯絡して幕府の失態を責め、其横暴を鳴らして、尊王攘夷の氣勢を煽つた。薩藩の日下部伊三次が水藩の安島帶刀と謀つて靑蓮院宮並に三條、中山の諸卿を說き、井伊大老を斥けて一ツ橋慶喜を將軍に代らしめ、以て國家空前の難局を打開せしめよと

招いたのも此時である。梅田源二郎、梁川星巖、賴三樹三郎、西郷吉之助、大樂源太郎、吉田寅次郎、橋本左内の諸士が盛に攘夷派の公卿と往來して畫策する所のあつたのも此頃のことである。僧月照、小林良典、高橋常安、近衞家の老女村岡など、尊王論の勢力を得るにつれて、特志家は意外の邊に現はれた。かやうにして八月八日附の密勅は遂に水戸藩に下つた。別紙に『右は國家の大事は勿論、徳川家を御扶助の思召』云々とあり、表面の趣旨は、飽くまでも公武の合體を主として極めて穩やかなものであるが、其内容は明かに井伊の條約調印と、尾張、水戸兩家の處分を痛烈に非難されたもので、取りも直さず三家及諸大名に對する井伊内閣の彈劾狀とも見るべきものであつた。

さうしてその勅書が幕府及び薩藩に下さるる前に、水戸藩の留守居、鵜飼吉左衞門に下され、吉左衞門の子幸吉が之を小石川なる水戸中納言(慶篤邸)に致したのが、同じ勅書の幕府に到着する一日前であつたといふことなども、井伊をして所謂安政の大獄を決意せしむるに十分であつた。

此大獄で累の多く薩藩及びそれと最も深い關係のあつた近衞家に及ばなかつたことは注意して置く必要がある。勿論、西郷吉之助が清水寺成就院の前住職僧月照と共に嚴しく追窮せられたこと、西郷と行動を共にした有村俊齋(海江田信義)北條右門、伊地治龍右衞門(正治)等が同じく捕吏の嚴察をうけたことは勿論であるが、流石の所司代(酒井忠義)も、薩藩と近衞家とには手を下し得なかつた。之は一つには齊彬の人格が至誠の所産で、その平素抱懷した公武合體の主張も、少も己の階にすると云つた形跡がない。誠心誠意、國家百年の大局に處するの途として之を提唱し、其實を擧げる爲に朝廷に接近して居たといふことは正弘以來、歷代の閣僚もよく之を認めて居た。その上に徳川氏は島津家とは十一代家齊以來の緣戚で其關係も一通りでない。その次第は、將軍家齊の室は島津家から出で、齊彬の祖母、即ち島津重豪の正室は、徳川家から出て居る。かやうに重ね〲の關係がある上に、前將軍家定の繼室、天璋院も島津家から出て居る。縱令怪しいと睨んでも薩藩に對しては手を下し兼ねるのが道理である。況んや島津家は家康以來、徳川家の鬼門である。下手に手を下して、最後の決心を固められた場合は何うなるか。それに此大獄に先ち、齊彬は將軍家定と殆ど時を同じうして病に仆れ、跡には齊彬の弟、久光がその子茂久(忠義)の後見として事實上の藩主となり、佐幕派の巨頭たる島津將曹を用ゐ、西郷等矯激の徒を排して、齊彬の遺策である公武合體主義の徹底を期するに汲々として居る。幕府として之を追窮するは猶ほ眠れる獅子の毛を吹くよりも愚策である。さてこそ累の近衞家及び近衞家の下廻りであつた岩倉等に及ばなかつた所以であらう。

其處へ行くと、水戸家は此の大獄の目標として根こそぎやられた形がある。烈公齊昭は齊彬のやうに渾厚圓滿の人でなく、幾分偏狹のきらひがあり、殊に物事を固執して、それが[illegible]

傾もあつたらしく、堀田正睦と衝突して水戸に隠退してからは、その反對黨を克服せんが爲に朝廷に氣脈を通じ、朝廷をして事毎に幕府の施措に反對させたといふ傾きがないでもなかつた。水戸は天下の副將軍といふので他の諸侯のやうに窺覦をせず、その格式こそ堂々たるものであつたが、尾州、紀州の二家に比して頗る貧乏の地に置かれた。殊に安政の大地震で戸田忠敬、藤田彪（東湖）の二傑を失つてからは、水戸の氣勢甚だ揚らず、幕府も之を見縊りきつて居たものらしい。青蓮院宮を始めとして、鷹司、三條など、水戸の息のかゝた諸卿の此大獄に連累したのはそれが爲であらう。

「一六」各藩上士階級の文久維新

安政大獄の後、その當然の歸結として井伊直弼は水戸浪士の襲ふ所となり、櫻田門外に斃れたが、薩長を始め各藩の上士階級は、之を機會として一齊に下士階級の尊王討幕運動を抑壓し、阿部正弘時代の公武合體論に後戻りして、幕府と朝廷との中間に立ち、天下を指導するの地位を占めようとして、互に競爭するやうになつた。

長藩では長井雅樂といふものが上士階級の立場を代表して宇内の大勢から開國の止むを得ざるを察し、公武合體、擧國一致して國威の發揚に努むべきを主張し、先づ藩主父子の同意を得て江戸に出で、熱心に閣老等に說く所あり、其内旨を受けて上京し、數千言の開國論を朝廷に上り、九條は勿論、中山、正親町、三條の諸卿に就いて朝議を一變させようと努めた。然るに此運動は藩内下士階級の尊攘論、及び下士階級によりて支持せらるる福原越後、久坂玄瑞等の同志によりて覆へされ、雅樂は罪を得て文久三年遂に死を賜はるの止むを得ざるに陷つた。

薩藩では齊彬が死んで、忠義が嗣ぎ、其父久光が政治の實權を掌握すると、一方には佐幕派の島津將曹を用ゐ、穩和なる漸進主義を標榜して幕府の意を迎へて居たが、井伊直弼が斃れ、安藤信正、久世廣周等が代つて幕政の樞機を執るやうになり、幕府の威令が全く行はれなくなつたのを見て取つた久光は漸くその鋒鋩を露はして尊攘派の小松帶刀を擧げて家老とし、大久保市藏（利通）伊地知貞馨を拔擢し、西鄕吉之助の罪を赦して、京攝の間に於ける激徒の妄動を制するの使命を授けた後、文久二年三月兵を率ゐて上京の途に就いた。果然！京攝の間に於ける激徒は久光の上京を聞いて討幕の機至るとし、狂喜して之を迎へたのであるが、久光上京の目的は全く齊彬の遺志を繼いで公武合體の實を擧ぐるに在り、浪士の期待する所とは尙ほ多大の距離があつた。

薩藩がかやうな穩和な政策に立戻つた際、岩倉が最も熱心な公武合體論者となつて、九條尙忠を輔け和宮御降嫁の一件に奔走したことは注意を怠つてはならぬ。既に述べた如く、岩倉は巧に韜晦して安政の大獄を遁れ、萬延元年右近衞權少將に任ぜられ、安藤對馬守正信等の意をうけて九條尙忠と皇妹和宮親子内親王の御降嫁に斡旋し、翌文

久元年には三十七歳で正四位に叙せられ、十月內親王の御降嫁に屈從して關東に下り、閣老に就くに、安政の大獄に連累した青蓮院宮を**始め奉り、[illegible]卿の[illegible]を[illegible]すの議を以てし、その內諾を得たとある。**

島津久光の兵を率ゐて上京したのはその翌年である。

久光は大膳長州の永井雅樂の試みて失敗した政策を逆に行つたのである。即ち雅樂は先づ幕府を說き、閣老の內旨をうけて朝議を動かさうとしたのであるが、久光は反對に先づ朝廷に建策し、朝廷の命令によつて幕政を改革し、公武合體の實を擧げようとしたのである。久光の上京を以て討幕の機至れりとして期待した浪人どもから見ると頗る歯痒い態度であつたが、之を德川幕府の紀綱といふ上から見ると、久光の行動は、正しく維新史に一新時代を畫すべき仕事であつた。何故となれば、大名が幕府の命令によるにあらずして兵を京都に進め策を朝廷に獻ずるさへあるに、天子から禁闕の警衞を命ぜられるといふことは、德川氏の傳統政策から見て何ういふものであるか。『公武法制』が僞物であつてもなくても、之は明かに幕府の事實上の崩壞でなくして何であらう。況んや久光が勅使左衞門督大原重德を擁し、堂々と江戶に乘込んで幕政に干涉し、慶喜を將軍の後見とし、慶永を政務の總裁とし、會津侯松平容保を京都の守護職に、桑名侯松平定敬を京都の所司代に任じ、彥根侯の封邑十萬石を削り、間部詮勝、安藤正信を追罰し、諸侯參覲の期を緩め、その妻子を國に移すことを承認するの止むを得ざるに至らしめたに至つては、實に事實上の王政復古と云つてよいではないか。久光が[illegible]を[illegible]せんとするに[illegible]、[illegible]動して大事を誤らんことを恐れ、[illegible]

し、[illegible]

大英斷といふを妨げぬであらう。

『一七』 各藩下士階級の明治維新

久光の此成功を見て、長藩、土藩が何で默止すべきであらう。長藩の家老福原越後、久坂玄瑞、大阪の留守居宍戶九郎兵衞等は、久光がまだ京都を發せぬ前から朝廷に迫り、薩藩と同じく京都警護の命を賜はらんことを請ひ、岩倉をして私かに龍虎相搏つの形勢を招致せんことを憂慮せしめたほどであつたが、毛利慶親は勅使一行の江戶に發せんとする前日、即ち六月六日卒然江戶を去り、路を中仙道にとつて上洛の途に就いた。八月には土佐侯山內豐範も兵を率ゐて京都に入り、島津、毛利の二氏と共に京都警護の命を賜はつた。かやうにして岩倉の憂慮した薩長衝突の禍機は、漸く熟しつゝあつたのである。

岩倉は巧に韜晦して安政の大獄を逃れ、熱心な公武合體論者となつたまではよかつたが、安藤對馬守の內旨をうけて、和宮御降嫁のことに奔走したのは、何と云つても走り過ぎであつた。彼の行動は明かに公武合體主義の域を脫して佐幕主義の境にまで入つて居た。[illegible]幕府の政變と共に青蓮院宮が幽閉を解かれ、[illegible]が其[illegible]勢を復すること[illegible]文久、[illegible]

ればならなかつた。九條尚忠、久我建通、千種有文、富小路敬道等諸卿の失脚と共に岩倉も勅勘の身となつたが、九月二十五日には更に洛中の住居を禁ぜられ、其采邑愛宕郡岩倉村に蟄居しなければならなかつた。さうして文久三年正月十三日には更に重謹愼を命ぜられた。和宮一件の御惡しみが如何に深かつたかを察すべきである。

然るに此一旦佐幕派とまで睨まれた岩倉具視が岩倉村に蟄居中に、各藩上士階級の公武合體主義を一足飛に飛越えて、薩の西郷、大久保、小松、長の桂、廣澤、山縣、品川等と結んで討幕擧兵の計畫を進めて居たのであるからその人物の一通りでないことを知るべきである。

果然、薩長の軋轢は刻々甚だしきを加へて來た。文久二年十一月には長藩によりて支持せらるゝ勅使中納言三條實美が長藩及び土藩の兵を率ゐて關東に下り、勅命を將軍に傳へて攘夷の決行を促し且つその上京を促した。文久三年正月には將軍が上京し男山の御幸となり、攘夷決行の期日宣布となり、長藩の福原越後、益田右衞門介、久坂玄瑞桂小五郎等は散々に將軍を苦しめ、薩藩の計畫を妨げ、朝廷の諸卿を攘夷討幕主義に抱込んだ。かゝる間にも長藩の陰謀は愈進んで、八月十三日は畝傍山御幸を觸出しに愈大阪城を襲擊することゝなつたが、其計畫は一夜にして薩藩及び會藩の爲に覆され、青蓮院宮は復飾し、毛利父子は罪を得、三條實美以下七卿は長州に走つた。翌元治元年六月には蛤御門の兇變となつて、幕府の長州征伐は勅允を得た。薩藩の公武合體主義は今や一轉して幕[illegible]上の佐幕主[illegible]藩下士階級の間に磅礴しつゝあつた尊王討幕主義を剋殺するの爪牙たらんとするに至つた。

此時に方り、土藩の下士階級に屬する坂本龍馬、中岡愼太郎の兩士は薩長の反目が竟に尊王の大義を沒し、幕府の頑迷派をして漁夫の利を得せしむるに終るべきを憂へ、熱心に兩藩の間に奔走し、薩藩の小松、大久保、西郷に說き、長藩の桂、高杉を宥め、遂に下士階級を中心とする薩長聯盟を結成することゝなり、慶應元年一月二十三日、小松、大久保、桂、坂本の四人が西郷吉之助の宅に會して六ヶ條の盟約を締結した。是より先、西郷は元治元年二月を以て久光から其罪を赦され、蛤御門の兇變に先つこと四ヶ月、卽ち三月十七日を以て京都に馳せ上り、薩藩の下士階級を代表して、目覺しい活動をすることゝなつた。彼が青蓮院宮に謁を通してその公武合體主義に失望し、岩倉村に蟄居中の岩倉具視を訪うて、互に相容すに至つたのは此頃のことであつたに相違ない。

西郷が赦されたのは、全く薩藩に於ける下士階級が政治上に勢力を得るやうになつたからで、黑田淸綱、伊地知元治、三島通庸、川村純義、篠原國幹、桐野利秋、柴山龍五郎、永山彌一郎などが、その赦免運動の中心となり、久光の近習役高崎正風が熱心に斡旋したものであつた。久光はその主義の上から西郷を擇ばず、西郷も先君齊彬ほどに久光にゆるさなかつたのであるが、上士階級に人物がなく、折角成功

した文久二年の籌策が、長藩人士の手により一朝にして覆へされたことなどを思ふと是が非でも西郷を起たせなければならなかつたのであらう。

薩長聯盟が成立してからは時局が更に急轉直下し、幕府が長州の下士階級革命である高杉晋作の奇兵隊征伐に對して干渉の手を下さうとした時には、薩藩はモウ久光の意の儘には動かず、幕府は竟に長州一藩に打克つこと能はずしてその政權を投出さねばならなかつた。

「一八」西郷、岩倉の山陰道秘策

既に述べて來た所によつて見ても分る通り、薩長土三藩の中では、長藩が他に率先して最も早く下士階級の尊王討幕主義によつて藩論を一定して居る。薩藩は近衛と縁故があり、朝廷に取入る點に於いては、長藩に先鞭をつけて一泡吹かせたが、西郷が幾度の流謫から歸參を許されるまではまだ何と云つても、久光の公武合體主義以上に進出することが出來なかつた。土佐にも下士階級に傑出した人物は多かつたが何れも脱藩して藩政に臨らず、それに老公容堂が相當の利けものであつた上に、後藤象二郎といふ上士階級出身の人傑が居て、政治の實權を握つて居たから、之は維新の間際まで公武合體主義を稱し、慶應三年十二月九日夜、小御所會議の席上では具視と容堂との間に激論あり、土藩は危く朝敵の汚名を被せられようとしたほどであつた。土藩の坂本龍馬は薩長聯盟を斡旋して尊王討幕主義の爲に時局の急進を促したのであるが自分ではそれほどの仕事をしたとは思はず、長崎に本舗を置いた海援隊の隊長として活動し、薩長の援助を受けて、海軍と貿易とを兼ねたやうな仕事をして居たが、其處で後藤象二郎と相識り、その人物に感心して後藤の抱懷して居る公武合體論的進取の主張に引入れられてしまつた。後藤は坂本を携へて慶應三年六月十四日、長崎から京都に入り、坂本を通して岩倉具視を中心とする、小松、大久保、西郷、桂、廣澤、山縣、品川等の擧兵討幕計畫を知り、既に其期日まで決定して居ることに驚かされたが、藩主容堂を說くと稱して其期日を延ばさせ、歸國して居る間に慶喜に勸告して大政を奉還させる一切の準備を完了してしまつた。當に驚くべきペテン師である。二條城に於ける彼の成功は實に目覺しかつたが、それは直ぐに小御所會議で岩倉に覆へされてしまつた。

慶應三年十二月九日、王政復古の大號令が下ると同時に、朝廷は官制を改めて、總裁、議定、參與の三職を置くことになつたが、西園寺公はそれより十日ほど後れて十二月二十日、參與職に任ぜられ、茲に始めて新政府の樞機に參與する身となつた。此時公はまだ僅に十九歲であつた。翌慶應四年正月三日は鳥羽、伏見の戰爭で、大阪から慶喜に率ゐられて京都に向ひ進軍中であつた會津、桑名兩藩の兵が、薩州、長州、藝州三藩の兵と衝突して、兩軍の間に火蓋が切つて放たれた。四日には議定嘉彰親王（後の小松宮彰仁

せられ錦旗節刀を賜は

に任ぜられ、薩長二藩の兵、各一小隊を率ひて京都を進發した。

此山陰道鎭撫總督といふものは、鳥羽、伏見兩街道の戰爭が官軍の大勝利に歸して、慶喜が大阪から江戸に遁れ、戰局が關東に移つてしまつた爲に、今日から見ると甚だ間の抜けた役目のやうになつて居るのであるが、實は嘉彰親王の征討總督と同時に任命されたものであつて、維新史の上からいふと實は重大な意義と使命とを有するものであつたことを見遁してはならぬ。

一言にして云へば、鳥羽、伏見兩街道に於いては、既に兩軍の間に戰端が開始せられたけれども、當時、幕軍は總數一萬と稱せられたのに對し、薩長藝三藩の兵はまだ僅に三千人に過ぎず、尾張、越前、土佐此三藩の態度も明白でなかつたので、戰局は決して樂觀を許さなかつた。其處で岩倉具視は豫て西郷吉之助との間に打合せのあつた、萬一官軍不利の場合は、丹波口から車駕を奉じて山陰道を藝備に下り、此地に行宮を定め、天下に檄して義兵を募るといふ計略を實行する爲に、さてこそ當時十九歳の西園寺公に、此大役を命じたのであつた。

抑も此山陰道鎭撫に關する戰略は、慶應二年から三年にかけ、岩倉を中心として、小松、大久保、西郷、桂、廣澤等の間に討幕擧兵の謀議が進んで居た時、西郷から岩倉に獻策する所のあつたのが初めで、岩倉は鳥羽、伏見の兩街道に砲聲が起ると直に之を決行したのである。世に西郷の獻策として傳へらるるのは、次の五ヶ條であつた。

（一）討幕策決せば、發前玉印御發行の事。

（二）砲聲相發し候節に臨み、堂々と鳳輦を移

（三）山陰道に御移り被爲在る可き事。

（四）浪華の戰と相成らば御動座無之る可き事。中卿は、是非御供す可きが、其外幾人に可宜哉、人數調べ置く事。

（五）岩卿は如何にも跡に踏み止まり、彈丸矢石を冐し、十分戰闘の事。

右の中、玉印は即ち乘輿、中卿が中山、岩卿が岩倉であることは云ふまでもない。又、鳥羽、伏見の戰爭に先ち、岩倉が、西郷、大久保、廣澤と密議した秘策といふのは、

（一）幕軍勝つて京都に迫る事あらば、主上には女裝して、宮嬪の輿に召され、准后等と共に闕を出で、三條、中山の二卿を從へさせ薩長二藩の兵之を守護し奉り、丹波より山陰道に入り、藝備に行宮を設くる事。

（二）岩倉は總裁宮を擁して飽迄京都に踏止まり、力戰支へ難きに及び、伴つて鳳輦を擁護し、群卿扈從して叡山遷幸の體を裝ふ事。

（三）主上叡山に遷幸ありたりと聞かば、幕軍必ず蟻集して攻圍すべし。其間に仁和寺宮を東北諸國に派し、義兵を募り、江戸城を衝く事。

等であつたと傳へられる。何れにしても山陰道鎭撫總督が、開戰の翌日、征討總督と同時に任命されて居るのは決して無意義でない。

「一九」參與としての初舞臺

西園寺公が十九歳で岩倉から此大役を命ぜられたのに、その門地の高きによること勿論であつたが、公の機鋒が既にその頃から頭脫し、岩倉をして斯兒用ふべしとして登用させる所がなければ、到底有り得べからざることであつた。然らば岩倉が初めて西園寺公の器量を認めたのは、果して何時のことであつたか、或る人の話によると、慶應四年正月二日、慶喜が大政を奉還した後の朝廷の冷遇に憤恚し、其臣瀧川具知に命じ、君側を淸むるの上奏文を携へて上京せしめた後、會津桑名二藩の兵を先鋒とし、姫路高松等譜第諸侯の兵を合して總勢一萬を率ゐ、上京の途に就きたりとの報に接した時、既に述べた如く、鳥羽、伏見兩街道に配置された薩長の兵は三千に過ぎず、尾越二藩は尙ほ最後の調停を試みようとして居たし、土佐藩の老公容堂は初めから岩倉の態度に不服であつたし、形勢は必ずしも樂觀を許さなかつた。此時行はれた小御所の緊急會議には西園寺公も參與として列席したが、西鄕でさへ土佐藩の向背を顧慮して躊躇の色があつた時、西園寺公は井上聞多、大村益次郎等と意見を同じくし、土佐は初めから幕軍に附くものとして、大事を決しては何うですかと、岩倉の顏を見上げ、憚る色もなく進言した。岩倉は西園寺公の此進言を聽くと思はず識らず膝を打つて『小僧出來した。』と叫び遂に開戰の命令を發したといふことである。之に關して僕の先輩某氏は岩倉が西園寺公の如き名門の貴公子を小僧など呼ぶわけがない。それは自分の識れる限りでは小川平吉氏が公から聽いて來たといふのが初めのやうであるが、自分の公に向つて認めた所によると、小僧と呼んだといふことになく詭傳のやうであると云つて居る。何れにしても、公はかやうなことからその人物を岩倉に見抜かれ、山陰道鎭撫總督の大任を託されたものと思はれる。

西園寺公は五日京都を發し、當時佐幕の色彩の頗る濃厚であつた龜山城（松平氏）を避けて、嵯峨から小倉山を迂廻して水尾に出で、丹波に入つて第一日の本陣を馬路村に置いた。之は馬路村の土豪人見龍之進、中川祿左衞門、中川武平太等が夙に志を長藩勤王の志士と通じ、朝廷と氣脈を通じて居たからである。此處でも僕は明治維新の動力となつて働いたものが（1）各藩の下士階級（2）地方の土豪即ち地方ブルジョア（3）都市の富豪即ち都市ブルジョアの三者であつたといふ好個の實例に逢着したのである。僕は是までに地方ブルジョアの代表的なるものとして、土佐の長岡我部黨、下總の千葉黨、越前の杉田氏、大和の土倉氏、武藏の原氏（武田黨）澁澤氏、福島の河野氏等を擧げ、都市ブルジョアの代表的なものとして京都及江戸の三井氏、大阪の鴻池氏、住友氏を擧げ、兩者の中間性にあるものを半農半商の『酒屋』であるとし、酒田の本間氏の如きはその最も代表的なものであるとし、前者の中にも既に酒屋を副業として居たものがあり、後者の中にも元酒屋であつたものが多いといふことを指摘して、維新史の經濟的解釋に一石を投じて來たのであるが、茲に於て前記土豪の一例と

兩氏を數へ得るの光榮を有するものである。人見、中川兩氏の如きも前職諸氏と同じく純粹の地頭、即ち武士の階級に屬するものでなく、又純粹の百姓、即ち農奴の階級に屬するものでもなく、武士と百姓との中間に發生した一種の中產階級であつたといふこと、而もその土着著發の原因が室町幕府の末葉に於ける社會の著しい經濟的變動にあつたことまでが、白柳說と符節を合するが如く一致して居るのも妙である。

「二〇」丹波馬路村鄕士の勤王

但し、人見、中川兩氏の中で人見氏の土着は大に古く、茫邈として知り難いものがあるけれども、中川氏の此馬路村に入込んだのは、明に永祿、天正の間で、鐵砲の渡來、貨幣經濟の發達に共因する社會上の變動が最も著しかつた時代である。人見氏は北條氏の時代既に馬路村にありて、時頼が月讀神社に參拜した時にはその案內役を勤めたものであるといふことが、同村人見惣助氏所藏の舊記にあるさうである。（中川人見兩姓戊辰唱義錄）

人見氏と中川氏とは各その祖神を異にし、人見氏は橘諸兄公を祀り、中川氏は藤原鎌足公、六孫王經基及びその七世の孫である中川冠者源重義を祀つ[illegible]代を通じ、連綿として榮えて來たが、永祿四年[illegible]略せられてその莊園を失ひ、足利義輝に屬して丹波に下り、西山、[illegible]井二郡に跨る今の馬路村に土地を賜はつた。之が中川氏の馬路村に土著した始まりである。馬路村附近一帶の地に、美濃の中川莊と同名の小字が多いのは、中川氏がその故鄕を懷しんで附けたものであらう。

間もなく明智光秀が織田信長を本能寺に襲ふことがあり、中川氏の嗣中川重政は父兄の讐を報ずる爲に一軍を率ゐて之に加はり、信長の子信忠を二條城に攻めて殊勳を立て、美濃安八郡外八郡の領主に轉封せられたが、光秀の、須臾にして亡ぶるや、再び馬路村に轉入して深くその態度を韜晦した。二條城の攻略で得た軍用金を鄕民に頒與して新田の開墾に資し、馬路村の西部古河以西一帶田畑と大河以西今津方面の一帶の土地とを得て、大に村民の感謝を贖ひ得た。豐臣秀吉の部下として賤ヶ嶽に驍名を馳せた中川瀨兵衞清秀も亦此中川氏の一族であり、馬路村の出身であつた。（義鄕）秀吉の時、細川幽齋が田邊城に居り、一時丹波、丹後を支配したが、關ヶ原の役後、德川氏は園部、龜山、笹山、福知山、柏原、綾部、山家等の地に譜第の小諸侯を分封し、其間に將軍の直轄地や、旗本の領分を交へて水も洩らさぬ配置を整へ萬一の場合に警戒して居た。猶[illegible]丹後は王城に近く、政治[illegible]

あらう。西園寺公が本營を置いた時、人見、中川の兩姓に下された命令書にも、『桑田、船井兩郡元徳川領、旗本領』云々とある。馬路には杉浦の代官所があつて、小島某が之を預つたものらしい。恐らく將軍直轄の代官所ではあるまい。但し馬路村は普通の旗本の采地と異り、日本制外の地三ケ所中の一として、種々の特權が人民に與へられて居たものらしい。中川緑左衛門は弟武平太と共に勤王の志厚く、常に志を朝廷に寄せて居たが地頭杉浦の監察が嚴重で、容易にその鋒鋩を露はすことが出來なかつた。緑左衛門の手記に次のやうな一節がある。（唱義錄引用）

『丹波馬路は制外の地とて日本制外三ケ所の一也。殊に王城に近き所なる故、勤王といふことを忘れぬやう常に親子の咄也。私二十一歳、嘉永六年に亞米利加渡來、翌寅年二月六日江戸行とて地頭杉浦の御命にて、兩苗五十余人、其中の一番出立に加はる。翌卯年に徳川將軍勢揃ひとて七月八日出立にて杉浦屋敷に參る。萬延亥年に又異船渉來士分召寄せとて江戸に參る。地頭の用向にて都合三度出府す。』

幕府が狼狽して其直轄地の民を勞した有樣が手に取るやうに分る。

「二二」　西園寺家と中川小十郎氏

元治元年七月十八九日、阜居九門の激戰には緑左衛門、弟武平太と、二十日馬路村を發して京都に入り、愛宕山に參拜し、頂上から京都の形勢を窺つた。然るに當日京都の混亂は例へんやうもなく、混沌として鎮り難いので二十五丁目まで下りて偵察すると、大砲で[illegible]天龍寺、虚空藏堂などが遂に炎上し、其有樣は宛として地獄の樣を見るやうであつたとある。鹿王院内の正眼庵に武平太の弟周殿（幼名順三郎）といふのが居たので、それを尋ね始めて薩長衝突の大勢を確めたものであらう。二十一日一旦馬路に歸ると二十三日には六十餘人の同志を結束し、手に手に手槍を携へ、後鉢卷、捲毘布、町高袴、割羽織といふ勇しい扮装で、大御所奉伺を名とし、再び京都に入つて二條城に伺候した。此時將軍家茂は二條城に在り、閣老が之を守護して居たが、渡邊伊勢守一同を引見し、飯をふるまつた上、只今の處では先ず平穩と思ふから引取つてくれ、又何時御賴み申すかも知れぬといふ挨拶で、一同馬路に引揚げ、兩祖神に參拜して解散したとあるが、之は地頭杉浦の睨んだ通り、あはよくば長州勢に味方して討幕の志を成さしめようとしたものに相違なからう。地頭杉浦は一には馬路村の中川緑左衛門等が、自分を出し拔いて直接二條城に伺候したことを憾つたにもよるであらうが、早くも人見、中川兩姓の間に漲る尊王討幕の氣分を嗅付け、會津藩の爪牙であつた壬生の浪士を手先として盛に兩姓を羅織し、多數の入獄者を出した。固より其拷問の方法は苛酷を極め、人見寅治、人見龍藏の如きは遂に獄中に悶死するに至り、一村を擧げて幕府の措置を憤り、愈々尊王の志を堅固にするに至つた。然るに其後如何なる評議があつたものか、馬路村の人々は、前記二名の獄死者を除き、無罪放免となり、一同弱りはてはしたが兎も角

も無事に歸村した。その時獄中に河内山半吾と呼ぶ長州藩の浪士が居り、深く一同の心境に同情して他日相携へて王事に盡すべきを誓つたが、一同の出獄後、京都明暗寺の徒弟となり、虛無僧に化け、鈴木建男と變名して馬路村に入込み、同寺の出張所西勝院に滯在して一同と聯絡を取ることゝなつた。曾て東京高等工業學校の校長であり、東京女子高等師範、東京高等師範などの校長に歷任した中川謙二郎翁の如きも當時河内山から劍術を學んだ一人とのことである。その河内山は慶應三年七月十八日と、同年十一月二十七日と前後二回、深東中川の家を訪れ、同志を集めて密議を凝らし、天明に及んで飄然立去つたが、十一月二十七日に訪れた時には中川武平太の家に來り、薩長討幕の謀議が熟して擧兵の期の切迫したことを告げ、岩倉、西鄕等の山陰道に關する機略を授けて去つたらしい。

河内山が去つて後の馬路村は何となく色めきたち、官軍迎接の準備や、地頭の陣屋襲擊の謀略、軍用金穀の調達等で殆ど寧日なき有樣であつたが、正月三日から砲聲が聞え、五日には早くも山陰道鎭撫總督が間道から馬路村に乘込まれるといふ牒報があつたので、人見瀧之進、中川武平太の兩名が兩姓の總代となり、輕裝して總督を途中まで出迎へ、村內に案內した。

馬路村に入つた西園寺公の第一に着手しなければならな

へ奉るのには龜山城の外にない。然……ら四日間續いて、初めから幕府の旗色が顯かつた故であ……には龜山城主松平圖書頭が家老外四五名のものを簡派して敬意を表しに來た。參謀小笠原美濃介、諸太夫瀧崎和泉守兩名が之を迎接したけれども、其態度が未だ十分でないといふので、一擧にして龜山城攻略の議を決し、使者の跡を追つて、全軍直に龜山城に殺到した。此時馬路村の壯丁七十餘人は武裝してその先鋒となり、大堰川を渡つて薩長の兵を龜山城に導いた。松平氏風を望んで大に懼れ、直に歸順の誓書を出したとある。

かくて西園寺公は正月七日を以て馬路村を發陣、山陰道を巡撫して、三月二十八日伏見に凱旋したのであるが、沿道の諸藩風を望んで歸順し、一劍に衂らずしてその使命を果すことが出來た。此行西園寺公はその出師第一日に於ける人見、中川兩氏の功を多とし、特に其重立ちたる者を精つて中軍に置き正月八日を以て徵募した丹波の弓箭組二百餘名を統率させた。又、行列行進の場合には、兩族中から勇壯の者十人を選拔して馬脇に立たせた。中川謙二郎翁の如きも此馬脇の一人であつた。又中川武平太、人見勝次の兩名には錦旗守衞の取締を命じ、中川昌二には記錄を掌らしめたとある。

[illegible]として、彼はその[illegible]として、[illegible]として、[illegible]兼行として櫛風沐雨の艱苦を共にした。

中川小十郎氏が西園寺公によつて文部大臣秘書官となり、文部省參與官となり、內閣總理大臣秘書官となり、現に西園寺家の事實上の家宰であることは何人も知る所であるが、其小十郎氏が前記中川祿左衞門の長男であり、弟武平太の養子となつて帝國大學を出で、公に用ひられるに至つたものであることを知る人は極めて稀れである。

「二三」 北陸道官軍の形勢不利

是より先西園寺公は三位中將で山陰道に發向されたのであるが、三月二十日、大阪天滿圓正寺に滯在中、中納言に任ぜられ、三月二十八日伏見に凱旋してから、閏四月五日東山道第二軍總督を命ぜられるまで約一ヶ月間、岩倉の帷幄に參して、百事更新の朝政に執掌したが四月十九日に至り但州府裁判所總督に任ぜられ、兼ねて山陰道裁判所總督を命ぜられたのは山陰道鎭撫の功によつたものであらう。是より先、慶喜が鳥羽、伏見の戰に敗れて大阪に退き、正月六日軍艦に乘つて江戸に遁れ歸るや、朝廷は七日慶喜の罪惡を聲し、征討の大號令を發布された。乃ち正月十日總裁有栖川宮熾仁親王を征討總督に拜し、西鄕隆盛を總督府參謀とし、少將、橋本實梁を東海道の先鋒兼鎭撫使に、海江田武次、木梨精一郎をその參謀に、大夫岩倉具視を東山道の先鋒兼鎭撫使に、板垣退助をその參謀に、三位高倉永祜を北陸道の先[illegible]使に、[illegible]嘉[illegible]親王を[illegible]總督に、[illegible]の參謀に[illegible]陸路及び進み、沿道の民を招撫し江戸城を攻略することを命ぜられたのであるが、閏四月五日には更に西園寺公を東山道第二軍總督に任じ、先に發した岩倉第一軍（參謀板垣退助）の跡を逐つて東海東山二道を江戸に向つて進軍すべき命があつた。其命令書に『總督副總督爲ト遂評議、時機ニ由リ東海、東山二道ニ立別レ進軍可致候事』とあるのによつて考へると、當時、東海東山の第一軍は既に江戸に入り、上野の大慈院に入つて謹愼中であつた慶喜は水戸に徙され大勢は略決して居たが、諸藩の中には尚ほ戰意の熾烈なるものが多く、殊に榎本武揚の率ゆる優勢な海軍と、佛蘭西の喜んで應ずるであらう援助とは彼等の大に恃む所であつて、北陸及び奧羽の形勢は未だ遽に樂觀を許されず、從つて東海、東山の二道にも所謂殘徒の出沒するもの少くなかつたので、西園寺公に對し、更に東山道第二軍總督の命令があつたものであらう。然るにその形勢が一變して會津を中心に、仙臺、米澤、南部、二本松、白河、長岡等の聯盟が成り、東北の諸藩と官軍との間に一大決戰の機が迫つた爲であらう。西園寺公は閏四月二十三日を以て北陸道鎭撫使を命ぜられ、三等陸軍將に任じ、五月十日を以て京都を出發し、越後に在りて、長岡の兵と對峙中であつた官軍の總督に任ずることとなつた。丹波園部藩の人見、中川兩氏が公に

請うて從軍を許されたのも此時である。

是より先北陸道には、三位高倉永祜が先鋒兼鎭撫使となり、小林兼吉、津田山三郎の兩人が參謀として發向したことは既に述べた通りであるが、江戸が官軍に歸する頃から會津、桑名、水戸の激徒が續々此地方に入込み、高田に本營を置いて鎭撫の事に從つて居た官軍に對し、松之山、千手、小千谷、柏崎、鯨波と信濃川左岸の地に一線を劃して、會津、長岡の兩藩を後楯に死者狂の抵抗を試みることとなり、官軍は爲に頗る苦戰に陷つた。此時北陸道の官軍には、既に加賀、富山、高田等の諸藩が加はり、薩長の兵を援けて居たが、その中堅となつて戰ふものは、もとより薩長の兵であつて、總督府では初めから、かゝる事態を豫想しなかつたものか、此方面は東海、東山兩道に比し、兵力も頗る手薄であつた上に、參謀もその人を得ず、戰況は日に日に不利に陷るばかりであつた。

其處で總督府では此方面の參謀として長藩の山縣有朋、薩藩の黑田淸隆を急派することとなり、兩人は閏四月二十日を以て高田に到着し各その部署を定めて官軍の指揮に任ずることとなつた。當時官軍は本營を高田に置き、本隊は、海岸線を柏崎、靑海川方面の敵に向つて進軍し、支隊は高田から中央街道を北上して松の山、千手方面に進出[illegible]

なる六日町を占領し、二十六日左折して堀之内に進[illegible]隊を後方浦佐から魚沼川を渡つて小出島に迂廻せしめ、双方から猛烈に攻擊して、敵を會津の六十里越方面に退却せしめた。此時千手から小千谷に向つて進んだ一隊は、二十六日雪峠の敵を擊攘して之を片貝方面に走らせた。

是より先海岸線を柏崎方面に向つて進んだ本隊は、二十七日鯨波の敵を攻めて之を破り、柏崎を占領したので、茲に小千谷方面に在る支隊との聯絡がたり、協力して片貝、妙法寺、出雲崎の敵を擊攘し、長岡包圍の形勢が先づ成つたのである。

「一三」 河井繼之助と山縣有朋

長岡の藩主は牧野駿河守忠訓であつた。其家老、河井繼之助は當時天下に知られた學者で、政治家で又用兵家であつた。幕府の大政を奉還するや、藩主忠訓に進言して官軍にも加勢せず、同時に又、幕府にも味方せず、只管その境を守り、民を撫し業を勸め、超然たる和平の一侯國を以て自ら居るの大方針を決定し、其趣旨を總督府に致して諒解を求めんとしたが、激徒の爲に支へられて途通せず、空しく悶々の中に日を送つてゐたが、官軍が近く千手、小千谷に迫り、[illegible]

軍の形勢を覽ふるを見て大に懼れ、遂に歸順して恭順を表し、官軍に投ずるに至つた。

西園寺公が北陸道鎭撫總督として任命せられたのは、越後の戰況がかやうな重大な形勢に在るのに、薩長の聯絡がとかく圓滑を缺き、山縣、黒田の重きを以てするも、到底完全な統一を見ること不可能と見られたからであらう。公は五月十日を以て京都を發し、越前敦賀から乘艦、五月二十二日今町に上陸、連日戰線を巡察して將士の勞苦を慰ひ、其功を賞して士氣を激勵した。是より先、河井繼之助は榎峠の要害を占領して散々に山縣の軍を苦めたが、山縣亦その部下を激勵して三佛生の陣地を死守し、十九日三好軍太郎が出雲崎方面から信濃川を渡渉して、長岡城に薄るを俟ち、之を策應して猛烈なる攻擊を開始し、遂に一旦長岡城を占領することを得た。

二十一日には繼之助其主牧野忠訓を六十里越の間道から會津に落し、身輕になつて其本營を加茂町に置き、縱横馳突、奇兵を縱ちて今町を占領し、三好軍太郎、堀潜太郎を傷け、尋いで見附を陷れた。六月七日頃からは、自ら先鋒となつて長岡城の奪還に着手し、筒場、十二潟、福島方面を襲擊すること前後數回、七月二十五日の夜、官軍の虚に乘じて遂に之を奪還した。

是より先、河井の奮闘目覺しく、官軍の苦戰甚しきものあるを見て、總督府は會津城攻略の作戰上、速に越後の敵を掃蕩することの必要を認め、六月十四日を以て西園寺公の北陸道鎭撫總督を罷め、仁[illegible]にその參謀を命ずると同時に、[illegible]こととなつた。六月二十六日には[illegible]一隊、毛利内匠が長兵二中隊を率ゐて來援し、二十九日には吉井幸輔が薩艦乾行に搭乘し、御親兵二中隊を率ゐて柏崎に入るといふ有樣であつたが、而も之等の增援隊によつて軍の統一は彌困難となり、命令は益統一を缺くやうなことになつた。仁和寺宮が海路柏崎に着船せられたのは七月十五日であるが、是より先、西園寺公は六月二十日附で、越後口大參謀に任ぜられた。公を普通の參謀として遇するに忍びなかつたものと見える。以てその朝廷に重きをなした事情を知るべきである。

かくて長岡は七月二十五日の夜、一たび河井の手に奪還せられたが、二十九日には早くも山縣の籌畫に成る總攻擊によつて再び之を陷れ、其占領を確實にした。此戰で河井は八月一日左脚に負傷し、會津に落ちたので、餘衆全く潰え、新發田藩の如きも逸早く款を官軍に通ずるに至り、越後口は間もなく完全に官軍の手に歸した。西園寺公が京都を發してから約三ヶ月目である。

然るに此戰爭のかく永引いたのを西郷がもどかしがつたことは非常なもので、到頭自身乘出して、海路新潟に到着したのが八月十日過ぎ頃であつた。西郷の來着した時にはモウ長岡城も官軍の手に歸し、大勢定まつた跡で、彼の手を下すべき餘地はなかつた。此事に就き、西園寺公は次の如く語つて居る。

『西郷越後の戰況をもどかしがり、自ら赴き援けんとした時、大村益次郎西郷を支へて、それには及ぶまい。貴殿が彼地に着く頃までには、戰爭も片付くだらうと云つた。西郷は大村の忠告を聽かずして出掛けたが、果して大村の言の如く、手を空しくして歸つた。但し之はその頃の噂であつて、自分の親しく與つたことではない。』（大正十五年十二月九日談、某氏筆記）

「二四」 伊藤と相識る、洋服の著初め

尚ほ此時西園寺公と前後して、四條隆謌も參謀として越後口に派遣された。隆謌は文久三年長州に落ちた七卿の一人である。此四條と大村との關係に就いて、西園寺公は次のやうな話をして居る。

『越後口の戰がもつれた時、四條といふ公卿も應援の爲同地に派遣されることとなつたが、兵の少きを憂へ、總督府に增兵の交渉をした。すると大村が冷然として之に答へ、それほど恐ろしく思はれるなら、おやめになつたらよろしいでせうと云つた。後で隆謌が此時のことを自分に語り、大村といふ奴は實に怪しからん奴である。その時はカツと腹が立つて、ブン毆つてやらうかとも思つたと云つて居たことを記憶して居る。』（大正十五年十二月九日談、某氏筆記）

越後口が平定したので西郷は秋田の官軍赴援の爲に去り、公は仁和寺宮に從ひ、山縣等と津川口の敵を掃蕩し、阿賀川を渡つて八月から九月まで戰を續け、若松市外の天屋村に本營を置いて、會津城攻擊に參加した。九月二十二日會津城が降り、奥羽が全く平定したので、公は十一月二十八日を以て出發、京都に凱旋した。

是より先、公はその會津に滯陣中、新潟府知事に任ぜられた。當時の府知事は諸侯若しくは總督と同じで、其地位が非常に高かつた。然るに公はその時任命を受けたままで同地に赴任しなかつたものと見え、明治二年正月二十四日には、『新潟府知事被仰付置候通、早々彼地へ罷下、府政取計可有之旨、再御沙汰候事』といふ命令をうけた。

ちやうど此頃のことである。西園寺公は兵庫縣知事の伊藤博文に頼んで神戸の外商に調製させた洋服を著用し、瀟洒たる文明の紳士になりすまして御所に出仕した。すると、文久二年島津久光の護衛で勅使として關東に下向した大原重徳が、公を支へ夷服を著して禁闕に入るの不敬を詰つた。公は笑つて、今でこそ夷服とか、戎衣とか云つて不淨のもののやうに云はれるけれども、一ケ年と經たぬ中に文武官とも皆洋服を著用することとなり、卿も亦その所謂戎衣を著用するの餘儀なきに至るであらう。若し、疑はるるならば、玆で賭をしてもよいと云つたさうである。

伊藤博文は文久三年五月十二日、藩の内諾を得、遠藤謹助と共に表面脱藩といふ形で、井上（志道）山尾、及び野村の三士が藩の内命をうけて英國の見學に赴く汽船に乗込み、ロンドンに著いて熱心に見學中、或る日新聞で生麥事件の顛末、下關に於ける外船砲擊事件など攘夷論者の輕擧妄動に關する記事を讀んで今更の如く喫驚し、井上と

共に留斷して藩論を一變せしむる間に心血を濺いて藩士での從の首領を殺さ、攘夷黨の兇刃の下をくぐるやうにして四國聯合艦隊との間に調停を試みた。かやうな經歷から博文は英國公使パークスと別懇で、明治政府の出現と共に缺くべからざる外交官の一人として用ゐられ、慶應四年、一月十三日外國事務總裁仁和寺宮の下に外國事務掛として神戸で六國公使と會見し、王政復古を布告するの國書を交附して其承認を得ると同時に、折から係爭中であつた備前兵の發砲事件をも解決して大にその手腕を認められた。此會見の後、伊藤は百姓上りの一下士から、直に參與職に拔擢せられ、天下の耳目を聳動させたが、五月三日には大阪府判事兼外國判事となり、二十三日前記の如く兵庫縣知事を仰付けられた。西園寺公と伊藤博文とは此時から互に相識るやうになつた。西園寺公此時二十一歲、伊藤博文二十八歲であつた。伊藤が兵庫縣知事であつた頃、神戸の奈良屋を我家の如くし、女將お悦を對手に權判事田中光顯、佐々木高行等と遊びに夜を更し、其所から毎朝縣廳に通つたことは人のよく知る所である。

「二五」 大村益次郎と西園寺公

西園寺公は明治二年三月十五日附で、「依願陸軍將被免候事」の辭令を受理し、同年七月更に「勤學中官位辭表被聞届候事」の辭令に接して居る所を見ると、先に陸軍將を辭したのは洋行の用意であつたに相違ない。さうして明治三年十月には愈正式に佛蘭西への留學を命ぜられて居る。公の洋行は大久保、木戸などが公の人物を識つて之を命じたのであらうといふ說である。それは木戸の日記に、「公は他日大に人才たるべし」[illegible]て洋行させ、之に仕事をさせなければならぬといふ意見であり、大久保も夙に公の人物を推稱して居た。竹越三叉氏の話によると、公は越後口の參謀で雨注する敵彈を物ともせず、陣頭を馳驅して將卒を督察し、士氣を鼓舞することに努められたものださうで、薩長の武人間にその評判が頗るよろしかつた。大久保が公に屬目するに至つたのは、恐らくそんなことからであらうとのことであつた。

然るに西園寺公自身の談話によると、公を洋行させたのは木戸でも、大久保でもなく、全く自身の思立ちでその相談對手は大村益次郎であつたとある。尙ほ公が明治二年から三年にかけて兵庫縣知事であつた伊藤博文と親善にし、洋行歸りの伊藤の羽振りのよい事、其仕事の花々しいことを眼のあたりに見たのは、大にその動機を助けたものではないかと思ふ。之は僕の推察である。併し何れにしても公が戰陣から歸つた後、軍人をやめて、文官で立たうと志して居たことは確實で、西園寺公は當時のことを次の如く語つて居る。

「大村益次郎とは親しく交り、與に師事して軍事の敎育をうけた。洋行しようといふことを大村に話すと、何處へ行くかときくので、佛蘭西へ行きたいと思つて居ることを告げると、大村は自分が軍人を志して居るものと誤り、陸軍志願はお止めなされ、貴下は軍人に向かぬとのことであつた。自分はもとより軍人を望んで居ない。佛蘭西は歐洲文明の中心、法律制度も整つて居るとのことであれば、[illegible]政治の學を修めたいと思ふと告げると、大村も大に[illegible]決心を固めた次第である。[illegible]

かやうに公に大村と親しくし、師事してその教へを受けたが、大村の人物に就いて公は次のやうに語つて居る。西郷と大村との話、四條と大村との話などと合せて考へると大村の人物が髣髴として眼前に浮ぶやうである。

『ちやうど其頃のことである。長崎から海路品川に出ることがあつた。すると大村は品川まで出迎へ、海上は何うでしたかと尋ねるので、至極平穩であつたことを告げると、大村は笑つてそれは惜しいことをした。大荒れに荒れて困難されたら、それに懲りて洋行も中止とならうものをと云つた。自分は餘りに馬鹿らしく、大村が自分の臆病を嘲つて居るやうに思つて横を向いたことがあつた。』(同上)

公はまた次のやうに語つて居る。

『四條のことといひ、又右の一條といひ、大村といふ人はさういふことを平氣で云つて人に憎まれもしたけれども、元來が親切で、物を訊ぬれば諄々として敎へてくれ、自分にとつては、まことによい師匠でもあり又、相談對手でもあつた。或る人が自分に話をした。長藩戰爭の時、大村は一方を受持つたが、戰線を下つて、何時も安全な所にばかり居るので、隊長もモツト出なければ困ると促したものがあつた。すると大村は之に答へイヤ、之が軍の規定であると云つて動く氣色もなかつた。その人は大村といふ男は全くの螺吹きであると罵つて居た。』(同上)

大村を螺吹きとしたのはその人が西洋の陣法に暗かつたからであらう。日本でも永祿、天正以降は士大將の陣頭に立つことを固く禁じて居る。

『二十六』洋行

かくして公は明治三年十月日本を發して佛蘭西に渡り明治十三年まで前後十年間彼地にありて、熱心に佛蘭西の制度文物、人情風俗に關して學ぶ所あり、十三年十月二十一日歸朝して、折から勃興しつゝあつた自由民權思想の爲に、嚮導の炬火をかゝげて立つこととなり、一門同族はもとより、薩長藩閥の巨頭をして顏色なからしめたのである。

公は佛蘭西から歸朝してから、今日に至るまでに凡そ三度その花を咲かせて居る。その一は自由民權思想の嚮導者としての活動であり、その二は政友會總裁としての出馬から、鐵道國有の斷行に至る活動であり、第三は長州軍閥の寵兒、桂太郎との對峙、大正政變の大立物としての目覺しい活動である。すでに與へられた紙數も超過したから、次號に纏めて公の後半生を說くこととする。

(後記)本文中に敍述したやうな次第で、公は今日まで唯の一度でも他の元勳達のやうに『談話』なるものを發表させたことがなく、又、自分の經歷とか、手柄話とかいふものをしたことがない。その爲に、是まで發表せられて居る日本歷史の明治維新に關する記述が、殆どすべて公の山陰道鎭撫總督としての重大な使命、越後口に於ける奮鬪の事實を逸して居る。明治天皇崩御の時も、昭憲皇太后崩御の時も、大正天皇の崩御の時も、殆ど一切の新聞雜誌及び刊行物が、公の懷舊談若しくは公の略傳を逸して居る。本篇は善かれ惡かれ、公の生立ちから、維新前後に於ける公の活動を傳した最初のものである。若し此粗略なる一篇によつて、多少でも便利を得る人があるならば、筆者の苦心は酬ひられたのである。(以下次號)

黒人帝國

―面白いアビシニア―

大山卯次郎

不思議なアビシニア

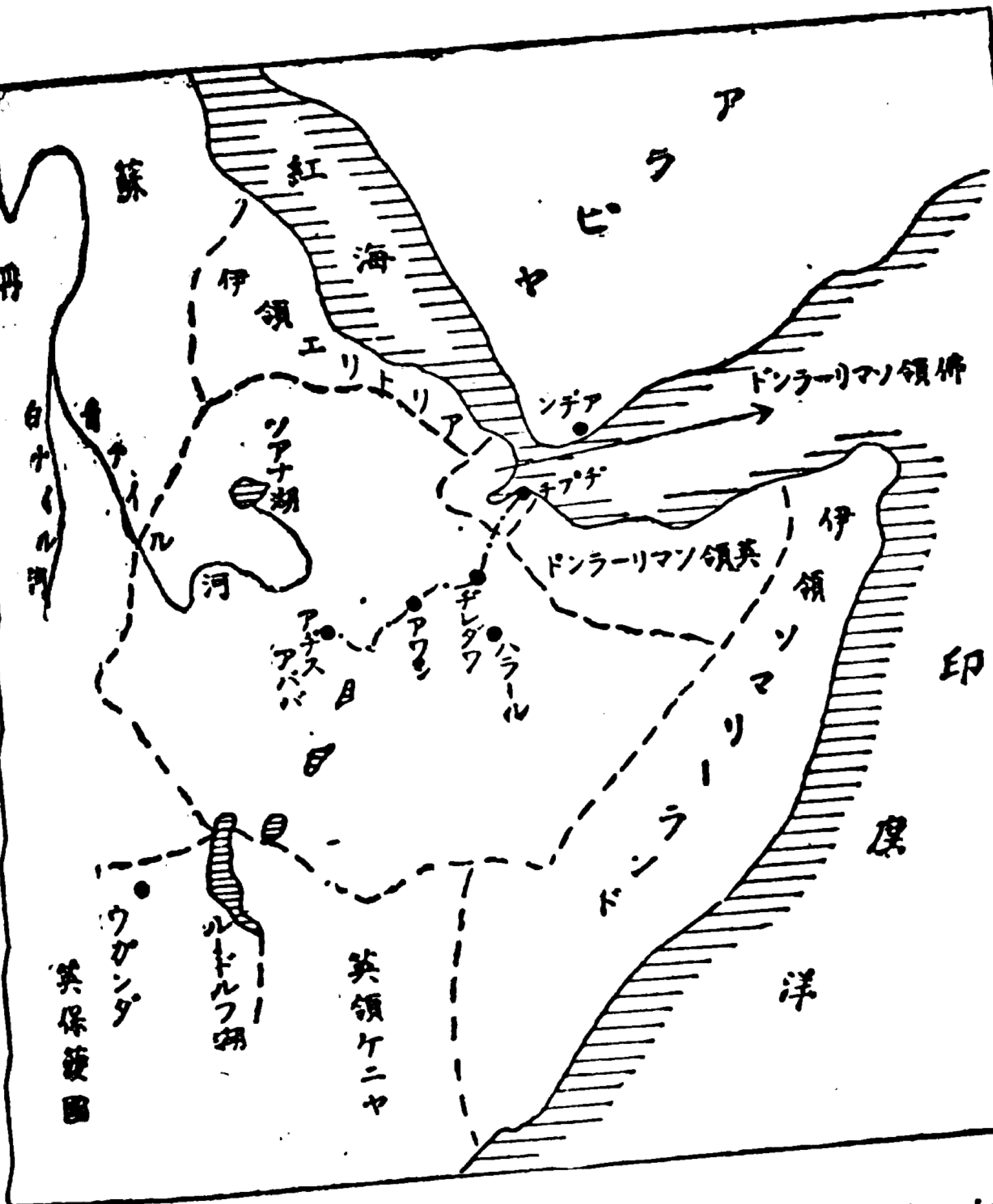
アビシニアは世界に於て最も不思議な國である。先づ第一に夫が黒ん坊の帝國である。黒ん坊の帝國必ずしも不思議とは云へないが、現今黒ん坊の國が何れも皆歐洲人の羈絆を受け、黒人種は支配せられるものと相場の極つた世の中に、獨りアビシニアが獨立の帝國として世界列國の間に伍すると云ふ事は、聊か異數の感なきを得ないのである。次にアビシニアは古來暗黒の幕に包まれ、世間とは殆ど没交渉である。只近年歐洲諸國との間に條約が出來、又最近我日本とも調印を終つたが、其國情は今尚不可解である。

要するにアビシニアは未知の國たる事を免れない。之を世界の新國と云ふのも敢て不當ではない。併しアビシニアは其の實世界に於て最も古い埃及と匹敵する程の帝國であつて、或は太古の時代に其のツータン・カーメン王朝に金銀財寶を贈つた事があると云ひ、或は又昔イスラエル人が埃及よりモーゼに連れられ、カナーンの里即ち後の世の猶太に逃れた時、其内の或者が本隊から離れて道を失ひ、幾年か紅海の邊に彷つた末、其當時月の嶺と歌はれた風光明美の山中に落ち付いたのが、今のアビシニアであると稱せられ、みならず、其風俗と云ひ、其習慣と云ひ、由緒深山な面白い國柄なるのみならず、其風俗と云ひ、其習慣と云ひ、實に奇々怪々の事多く、之を世界の不思議國と云ふも敢て過言では無いと思はれる。

皇統連綿三千年

アビシニアの最も珍とすべき事は、夫が古來皇帝に依りて支配せられ、其皇統が今日迄三千年の間連綿として絶えないと云ふ事である。傳ふる所に依れば紀元前一千年の頃である、猶太國王ソロモンよゼ…サレムに在りて威を四鄰に[illegible]

—（黑人帝國）—



を極め、美女三千人を擁して然かも飽く事を知らない。時にシーバの女王として知られたアビシニアの女王マケダが、世に得難い美人であると云ふ事を聞き、忽ち之に思ひを寄せ、矢の様な使を立てゝ其人宮を促した。そうして若し女王が否む様なれば、兵力にも訴へかねまじき氣色であつた。然るに女王に於ても豫てソロモン王の偉人である事を聞き、且つ深く其文化に憧れ、王を敬慕して止まなかつたので、忽ち意志が疏通したと見え、假に吉日を卜し盛儀を凝して王の宮殿に幸した。そうして間もなく其間に生れたのが多分王の様な黒ん坊の皇子であつた。是が即ちメネリツク第一世と云ふ、現在のアビシニア皇室の祖先であると云はれて居り、アビシニア人は之を其大なる誇として居る。

斯くて皇子は翌年母王と共に一旦アビシニアに歸つたが、頓て又猶太に赴き、ソロモン王の許で教育を受くる身となつた。そうして父の如く大に智徳兼備の素質を發揮し、父王の寵愛を受くる事一方ではなかつたが、十八歳の時に及んで母の國に歸る事と成り、猶太人壹萬人を率い、アビシニアに於て最も要害な且つ地味の豐かなチグレの高原に都を定め、國の基礎を固めたのだと云はれて居る。

然るに面白い事には、皇子が猶太を去るに臨み、彼はモーゼの十戒を認めた國書に心を寄せ、密に之を携へてゼルサレムを飛び出した。併しソロモンの宮殿では直に之を知つたので、忽ち追手の兵を差し向けた。皇子は捕へられては大變と、間道から急いで紅海の岸に驅け付けた處が、大地が裂けてアビシニア迄の抜け道が出來たので皇子は一行の者等と共に夫を通つて難なくチグレ州のアキサムと云ふ處に飛び出した。そうすると大地が又自然に閉じたので、追手は皆土中に埋められたが、惜い事には其時右の國書が抜穴の中に取り殘され、今も其儘アキサムの土中に埋つて居ると云はれて居る。其真僞は素より保證の限りでないが、同國外務大臣の話に依れば、皇統の連綿たる事は旣

間にも儼然と殘つて居り、何等の疑が無いとの事である。尤もアビシニアが今日の様に帝國として統一せられたのは、一八八九年以後の事。其時迄は群雄が各地に割據して互に爭ひ、戰亂が絶えなかつたのであつて、今の皇室の勢力は、或時は微弱と成り、又或時は強大と成り、其間の變遷は實に窮り無かつたのであるが、十九世紀の末に至り、其皇孫のショア國王マリアンと云ふのが、中央の高原に於て大に威を振ひ、遂に一八八九年に至りて國内の群雄を壓倒し、略ぼ統一の大業を終へたので、メネリック第二世として皇帝の位につき、中興の英主と仰がれる様に成つたのである。其處でアビシニア人は此國が由緒の正しい、世界第一の舊國であると云ふ事を誇とし、勅語の冒頭には必ず「征服者たる猶太の獅子王　神の選君、諸王の王、エチオピア皇帝云云」と云ふ矢ケ間しい文句を並べて居る。目出度しと云ふべし。因にアビシニアと云ふ言葉はアラビア語の夷敵と云ふ意味だと云ふ事で、同國人はアビシニアと呼ばれる事を喜ばない。そうして自らエチオピアと云ふて居る。

地理的に天佑の國

アビシニアは歴史的に珍奇な國柄であるのみならず、地理的にも亦大に變つた特色のある國である。先づ第一に夫は阿弗利加の東北隅に於て恰も茶碗を伏せた様な形の山國である。然かも其多くは五千呎乃至八千呎の大高原であつて、其周圍は砂漠か、砂漠で無ければ山又山の天險である。一夫之に當れば萬夫も通り難い趣がある。是れアビシニアが長く世界の他の國から隔絶せられ、地球上の別天地として、孤立の地位を保つて居た所以であつて、阿弗利加の他の部分が或は奴隷狩の災厄に遭ひ、或は歐洲列國の餌食となつて立つ事の出來ないにも拘はらず、獨りアビシニアが其危難を遁れ、太平の夢を貪つて居る事の出來たのも、必竟斯る地理的天險のお蔭である。然かも其面積は三十五萬平方哩に亘り、恰も日本の本土の四倍に相當する位の大きな國なるが、惜むらくは海岸線が無い。そうして四方は皆歐洲強國の領土に依りて取り圍まれ、北には伊領エリトリアと佛領ソマリーランド、西には英領埃及蘇丹、東には英領及伊領ソマリーランド、南には英領ケニヤ及ウガンダと云ふ風に諸外國が並んで居て、恰も甕の中の鼠の様な趣がある。其代りに是等諸國の間には、勢力均衡の問題が矢ケ間しい。一國の抜駆に對しては他の國が承知せない。其お蔭でアビシニアは外國からの侵入に就ては先づ以て安全である。但しアビシニア人は何處までも自力で其國を支へて居ると思ふて居る。お目出度い哉アビシニア人、彼は世界知らずのお山の大將である。

氣候と衛生

アビシニアは山の國である。赤道には近いが、土地が高い爲に氣候は恰も温帶の様である。首府アヂス・アババの如きは海拔八千呎であるから、暑さも寒さも共に和かである。我等一行が此に滞在したのは

多の最中であつたに拘はらず、百花爛漫と咲き亂れ恰も我國の春の様であつた。然かも盛夏の時でも決して酷暑と云ふものは無い。是は熱帶地の高原の特色であつて、他の地方に於ては到底見られない所である。併し低地は無論暑氣が酷烈で衛生狀態が宜しくない。マラリヤも多い、熱病も多い。其他の熱帶性の病氣は大抵ある。四月から十月迄の雨期と其直後とに最も甚だしいと云はれて居る。尤も高原地にも多少はあるが極めて尠い。但し高度な地方は空氣が稀薄である。又アジス・アババの如きは非常な乾燥地であるから、心臟又は呼吸器の弱い人には宜しくない樣である。

土人の間に最も多い病氣は梅毒である。皮膚病も中々多い。然かも彼等には衛生の思想が無い。人口は其爲め段々減少して居る。

首府には病院が三つある。其一は政府の經營、其二は攝政の經營、其三は米國長老教會の經營せるもので、一と二は佛國の醫師、三は米國の醫師が管理して居る。是が全國を通じての衛生設備であつて他には何もない。病氣をすれば只自然の淘汰を受けるのみである。

右の內長老教會の病院に就ては面白い奇篤な話がある。夫は今から數年前の事である。主任のラムビー博士が此病院建設の爲め米國で資金募集の遊說中、一夜オハイヲの片田舍で其會を催した處が、聽衆の一人である百姓風の男が其總豫算を尋ねたので、建物其他內外の設備[illegible]

昔少年の時、[illegible]市の[illegible]
であつた。爾來本人は其恩に酬ゆる爲、且は[illegible]の紀念に成[illegible]てたいと思續けて居たので、今其心願を果したのだそうである。奇篤の人と云ふべきである。

土人は皆黑ん坊

アビシニアの人口は色々に見積られて居る。最も少いのは四百萬人、多いのは千三百萬人と云ふて居るが、何れも精確た根據のあるものではない。併し最も信ぜられて居るのは一千萬人と云ふ說であつて、英國政府年鑑は此說を採用して居る。そうして是等の土人は皆黑ん坊である。尤も黑ん坊と云つても、夫が色々の種族に分かれて居り、色の極く黑いの、薄黑いの、頭の毛の大縮れ小縮れ、顏の柔和なの獰猛なの等多種多樣であるが、其內容貌の最も優れて居るのはクーチツクと云ふ種族であつて、人口の約三分の一を占めて居る。現今チグレ、アマラ、ゴージヤム、ショア等の北部及中央高原に居る土人は主として此種族に屬し、現皇室の如きは其最も純血なものと云はれ居る。蓋し此人種は他の阿弗利加の土人と同じく、此地方に於ける有史時代の最初の人種とも云ふべきネグロー人種と、後から流れ込んで來たハミチツク人種との混血から出來た雜種[illegible]、此國の土人の[illegible]

化したセミチック人が其他の異人種との雜婚に依りて同化せられた者もあり、其混血の程度に依り種々な種族を生じて居るのであるが、其の體格は概して中肉中背、眼は茶、髪は黒、皮膚の色は薄黒く銅色を帶び、中にはヲリブ色を加味するものもある。

次にガラと云ふハミチック系の大種族が有る。是はアビシニアの人口の約二分の一を占め、人數に於て最も優勢ではあるが、被征服者として見下され、純アビシニア人の内には算へられない。此人種は現今此國の西南及南部一帶の高原に居り、アルシ、ハラール等の地方を含む東方一帶の地方にも可なり多く發見せられるが、皮膚の色がクーチックよりも遙に黒く、顏の造作も大に劣り、如何にも獰猛さうである。尤も中央高原に進むる者は多くクーチックと雜婚せる爲、其差違が顯著ではないが、遠隔の地方に住む者は著しく相違して居るのみならず、男女共裸體の上に毛皮を着け、原始的な生活を營んで居る。

又東南及東部地方にソマリー人、東北部地方にダナキル人と云ふのがある。是は孰も遊牧の種族であつて、極めて獰猛な相貌をして居り、文化の程度は極めて幼稚である。但し彼等の最も澤山居る處は、鐵道沿線のソマリーからヂレダワ、アルシに至る一帶の地方であつて、鐵道は屢々彼等から妨害せられ、殊に女の腕輪頭飾等を作る材料として電線を盜まれるには最も困難するとの事である。併し彼等の武器は主に手槍であつて、銃器を所持しない爲、甚だしい騷擾を爲す迄には至らないとの事である。

[illegible]ニヤ及ウガンダの國境に跨る一帶の地方に居る大種族であつて、[illegible]の色は最も黒く、頭髪は黒くて小さく縮み、唇厚く、鼻低く、容貌の醜惡な且つ智識の低い人種であつて、生粋のアビシニア人は之を蔑視してシャンカラと云ふて居る。

此國にては奴隷は嘗て英國との條約の結果表面禁ぜられては居るが、實際には今も尚廣く用ひられて居り、夫等は總て此地方から狩り立てるのである。尤もアビシニア人が奴隷狩をする場合には國境抔は少しも斟酌しない。スーダン側にも入れば、ウガンダ又はケニヤ側にも入るのであつて、夫等の地方に於て手當り次第に土人を捕へて連れ歸るのである。勿論家畜の略奪などは朝食前の事である。英國でも之が僻地の出來事であり、又慓悍な土人のする事であるので、如何とも致し難く、殆ど持て餘まして居るとの事である。或る人の話に、ウガンダとアビシニアとの國境にメジと云ふ村がある。アビシニア側は極めて峻嶮な絶壁の上の高原で、ウガンダ側は同じ高原の山地ではあるが、アビシニア側に比べると大分低地に成つて居る。夫處でウガンダ側から云ふと、同地はアビシニアの蠻人から背後を襲はれる恐のない要害な土地であるから、衞兵屯所を置いて其邊を警戒して居る。さうすると、アビシニアの土人が毎朝必ず斷崖の上から、俗諺の面白く、「臭い臭い英國人の血が臭ふ。あいつ捕へて打つ叩き、燒て粉にして麵麭にして食べろ。ウエーイ、ウエーイ」と[illegible]

る。之には手の附け樣がない。土人も中々いたづらである。

以上は極く重立つた種族であつて、此外にも小さな幾多の異種族があるのみならず、更に又夫々が內面的に多數の人種に分れて居り、各々が異なつた習慣や風俗を維持し、違つた言語を傳ふて居るのであるから、其錯雜なるは想像するに難からぬのである。

複雜で不便な言語

此國の人民が如何に多くの種族に分かれて居るかと云ふ事は前に說明した通りなるが、是等の人種は夫れ夫れ異なつた言語を使用して居るのみならず、同じ人種でも地方に依りて違つた言葉を用ひて居る。從て言語の種類の多い事は實に驚く許であつて、其數が無慮七十五に達して居ると云はれて居る。其內で最も重要なのは商用語としてのアラビヤ語、公用語並に北部及中央部に於ける優等人種の常用語としてのアマラ語卽ちアマリック、寺院の典禮及古文書語としてのゲーツ語、ハラール地方のハラリー語、及ガラ種族の言語等であつて、諸官署に於ては歐米人に對し英語又は佛語を用ひ、外務省には英語及佛語の通譯官各四名、伊太利語の通譯官二名を置いて居る。

女皇と攝政

アビシニアの現在の元首はゾウヂツ女皇であつて、其從兄弟のラス・タファリ・マッコンネンと云ふのが攝政且つ皇太子と成つて居る。攝政を置くと云へば女皇が無能力者の樣であるか、夫は[illegible]の際に爭があつて妥協の結果、先帝の姫君であるゾウヂツ女王が女皇と成り、同時に夫に對立して居た親王が攝政且つ皇太子と成つたのであつて、女皇が無能力者だと云ふ分けではない。但し女皇には夫君があつたが、皇子の出生を氣支ひ、即位の條件として夫君を離別したのであつて、詰り皇位と夫君とを交換したのである。夫れで政治は重大事件は女皇の裁可を要するが、其他の事は萬機皆攝政に依りて專行せられて居る。斯る事情であるから、必然相方に黨派があり、先帝の老臣僧侶抔の保守派は女皇に屬し、比較的時勢に通ずる進歩主義の靑年等は攝政に附いて居る。そうして兩派は嘗て猛烈に爭ふて居たが、今日では段々攝政派が勢力を增し、女皇派は大に凋落した模樣である。

中央政府には內務、外務、財務、陸軍、商工務、農務等の諸省があり、各省には大臣がある。併し重要な事は總て攝政に報告し其裁斷を仰ぐのであつて、大臣は攝政の秘書官又は書記官の如く、實際上の大臣は攝政自身であると云ふ事である。尤も攝政は家庭に於て佛國人の教育を受けたのであつて、別段學問の素養がある樣ではないが、極めて賢明なるのみならず、嘗て歐洲諸國に遊歷した事も有り、可なり世界の事情に通じて居り、當國第一の人物なりとて內外人間に大層評判が善い。

大名の參勤交代

此國は不完全ながら獨立の帝國である。併し諸大名も無ければ三百諸侯も無い。形に於ては皇帝は全國を支配する專政の君主であつて、各地の知事は皇帝が任命する事には成つて居るが、實際は其知事達が孰も勝手に兵力を蓄へ、其管内を自由に支配して居る。そうして知事と其地方の人民との關係は恰も主從の如く、人民の生殺與奪の權は知事が握つて居り、皇帝は人民に對しては直接に何等の權力を持つて居ない。此國の諺に「如何なる犬も其主人の主人を知らない」と云ふ事がある。是は此國の制度を巧みに云ひ現はしたものであつて、如何に地方官が皇帝に對して獨立の地位を有するかを示すに足るものである。併し彼等は皇帝に反抗するほどの實力はない。其處で表面は矢張り皇帝の官吏と云ふ事に成り、自分に不利益とならぬ限りは中央政府の命令を奉じて居る。從て皇帝と知事との關係は、恰も我德川時代の將軍と大名との關係の樣なものであつて、萬事が封建制度其儘である。去れば皇帝は常に地方の知事を如何にして威服し、又如何に之を悦服せしむべきやと云ふ事に心を盡し、其手段として、每年又は二年若くは三年每に知事を首府に呼寄せ、恰も我德川時代の參勤交代の樣な事をやつて居る。尤も德川時代の制度は大名の妻子を江戸に置き、之を一種の人質とし、各地から時を期して參勤せしめたのであるが、アビシニアには人質の制度はない。又參勤も定期に行ふのではなく、皇帝が自分に都合の善い時に、或は三人、或は五人位づゝ、首府に召集するのであつて、呼ばれた知事は其勢力に應じ、或は數十人、或は數百人、或は夫以上の行列を揃へて、堂々と首府に乘り込んで、皇帝に對して恭順の意を表する事になつて居る。尤も道中の費用は通過地の人民が負擔するのであつて、夫が政府に對する一種の租税と見做されて居る。尚皇帝に於ても知事が首府に滯在中は屢々宮中に召して御陪食を仰せ付け、又部下の兵士等に對しても、ケバーと云ふ極めて勇壯な生肉の賜宴がある。そうして召された兵士等は、其生肉に向つて、腰から小刀を取り出し、盛に切つて食するのだそうで、其有樣は如何にも蠻人らしくて勇ましい。現に我等がアヂス・アババに滯在中、或有力な知事が參勤して居り、部下の兵士が約二千人位ゐ郊外の廣い丘の上に見渡す限り天幕を張り詰め、野營して居たのを見受けたが、每日皇帝の賜宴が有ると云ふので、宮中も市中も兵隊さんで大に賑はつて居た。

江戸時代其儘の風俗

此國で最も面白いのは、生粹のアビシニア人が腰に三日月形の刀を差して居る事である。日本では昔大小を差して居たが、アビシニアでは夫が一本である。夫も腰に吊るすのではなく、帶を結んで夫に差し込んで居るのである。殊に身分ある者は馬又は騾馬に乘つて居る、そうして夫にはお祭の飾馬の樣な、金色燦爛たる[illegible]て居る。勿論少くとも三人[illegible]

たたない雑兵、日本で云へば草履取と云ふ格の者である。そうして勢力ある者は夫を澤山に連れて居る。又奥さんは白い帛で顔と頭とを包み、目丈け出して、權那と同樣に或は馬或は驢馬に乗り、鐵砲持槍持雑兵抔の從者に其前後左右を取り卷かれ、威風堂々と大道を濶歩して居る。夫が二組や三組ではない。彼方此方にぞろ〳〵と市内を往來して居る。何れも近在其他の方面から出て來た者で、其光景の珍なる事は恰も昔の錦繪で見る江戸時代の風俗の様である。斯う云ふものは世界廣しと雖も、今の時代に他所では到底見られない。我江戸時代の光景を見んと欲せば宜しくアビシニアに行くべしである。

前に述べた通り、士人の内には生粋のアビシニア人と、之に征服せられた蕃人とがある。生粋のアビシニア人は云はゞ士分と云ふ様で、決して働かない。詰り労働は武士の威嚴に關はるものと心得て居る。そうして働くのは被征服の蕃人である。併し彼等は好んで主取りをする。主人の無いのは何れに出ても幅がきかない。云はゞ浮浪人と見られ武士の仲間には算へられない。それで奉公をすれば主人から土地を與へられる。土地を與へられゝば、蕃人の小者又は奴隷を抱へて夫に耕作させる。そうして自分は毎日懶けて居るのである。

斯う云ふ風に彼等は仕事は しないが、中々尚武の氣象に富んで居る。先づ幼少の頃から非常に武器を愛する。男の子が十歳にもなれ

を買ひ入れる。尚其上に少し

馬を飼ひ、従者を抱へ、大に殿様氣取をするのであ

事とか又は其他の有力者になると、孰も皆多大な兵力を蓄へ、外出する時には、大變な供備をして堂々と街路を往來するのであつて、其小なる者は吾昔の野武士の如く、大なる者は大小名の様である。然かも兵士は孰も無帽徒跣、単に主人の装飾と成る外には何の能もないのである。

勇壮で丁寧で無邪氣な土人

アビシニア人は全くの世界知らずであつて、自分が一番強いと思ふて居る。從つて非常に元氣が善い。私は人間に自信と云ふものゝ大切な事を思はざるを得ない。アビシニア人は此自信が強い為に元氣が溌溂として居る。此點に於てアビシニア人は阿弗利加の他の土人とは大に異なるものが有る。或人の話に、「阿弗利加の土人は非常に從順である。外國人が之を統御するには威力を以て臨めば夫で充分である。併しアビシニア人に對し下手に威力を示すならば、直に彼等の自尊心を傷け、其反抗心を挑發する」と言はれたが、是はアビシニア人の性質を善く言ひ著はしたものである。左れば土人の間には種々な武勇談が澤山にある。或は猛獣を手捕りにしたとか、手槍で突き止めたとか、

一點人官圖一

先帝メネリク親二世の老將で、今は陸軍大臣の要職に居る。是れが勇敢な鈍物らずの剛の者であつて、アビシニア武人の權化と云はれて居る。此人には嘗て或人が[illegible]之れ[illegible]け樣とする心持が分からない。彼は冷笑一番歐洲人は戰をする事を知らぬと云つて居るとの事である。又此國には無論飛行機抔は無い。或人彼に向つて飛行機買入を勸めた處、彼の云ふには若し人間に空を飛ぶ必要があるなれば、神樣は吾等に翅を與へられる筈である。神樣の必要としない樣なものが無ければ戰が出來ぬ樣では困るでないか、と答へたと云ふ事である。彼の智識は兎に角、其勇氣と自信とは、誠に就て大に買ふべき所である。

斯んな風にアビシニア人は勇壯ではあるが、極めて禮儀に厚く丁寧である。若し知人が途上なり其他の場所で遇ふ時は、其上體を深く前へに屈めて、日本人其儘の樣なお辭儀をする。又最も親しい者は互に抱き合ひ、唇を兩頰に摺り付け、如何にも愛情に滿ちた挨拶をする。殊に上長の者に對しては、其身分に應じ、或は手、或は足に額を付け、又は膝を突いて接吻する。そうして上體を稍前方に傾け、面を和らげ、兩手の掌を組んで前に垂れ、鞠躬如として立つて居る。其態度の懇懃な事は眞にアビシニア人獨得の感がする。

次にアビシニア人は非常に慈善心に富んで居る。是は宗教上の訓練の結果であつて、習慣上人から惠みを乞はれた場合には、之を拒絕する事が出來ない。夫で此國では乞食が餘程善い商賣だと見え、夫が爲る處に[illegible]居る。特にお氣の毒[illegible][illegible]んかも知れないが、[illegible]或は又早くより乞食をするのか容易い爲であるかも知れない。まあ此國の人は何れにあるとしても乞食の多いのには驚かざるを得ない。そうして或る乞食は驢に乘つて御旦那振りをすると云ふから遣り切れない。尤もアビシニアでは驢が非常に安い。乞食が驢に乘つたとて不思議はないかも知れない。たゞこれに就て面白い事は、或西洋人が安い賣物の驢を買ふた。そうして一日夫に乘つて外出した處が、其驢が人の軒下毎に止るので、果て妙と思ひ、克く克く調べて見ると、其驢の以前の持主は乞食であつたと云ふ事である。

又アビシニア人は中々の酒飲みである。彼等は何れの家庭に於てもテヹと云ふ稗の樣な穀物と蜂蜜とからビールに似た酒を造り、夫を無暗に飲んで太平樂をきめ込んで居る。アラビヤ人の諺に「アビシニア人は酒を飲めば直ぐ二人力に成る」と云ふ事がある。以て彼等の[illegible]を察するに足るのである。

但し何のアビシニア人も決して煙草を喫はない。是は曾て先帝が之を嚴禁した爲であると云はれて居るが、兎に角善い習慣である。或米國人の直話なりとて傳へられる處に依れば、今は故人になつた有德なアビシニアの最高の僧正を招待した時、饗應に飲酒の[illegible]

は何事が始まるかとは思つたが、兎に角其望に應じ給仕人を遠ざけた處が、僧正衣の袖から巻煙草を取り出し一本喫ふたとの事である。何事にも裏があり例外のある世の中なれば、斯る事は他にもあるべし。穴賢。

無學も便利

土人は總て無學である。近頃政府は首府に二つの學校を經營し、新舊基督教會も首府と地方とに若干の學校を經營して居るが、孰も皆小學校程度のものであつて、教育と云ふ程のものではない。但し從來讀み書きし得る者は大抵僧侶に限られたものなるが、其僧侶とても、僅にゲーツ語と云ふ今は實用の無い昔の經文又は古記錄の言葉を知つて居る位なもので、夫以外の事は殆ど何も知らないのである。

此樣に皆が無教育であり、文字が讀めぬと云ふ事は嘸々不自由であらうと思はれるが、夫はアビシニア人の心を知らぬ吾等の考へである。アビシニアでは誰も手紙を書いて寄こす者が無いから、返事を差し出す必要もない。詰り文字を知らねばこそ世間との交渉も起らないのであつて、結局其方が遙に氣樂であらう。聞く所に依れば、此國では大臣又は大臣に近い高官の者でも、文字の讀めない、又名前の書けない者が少くないとの事である。併し克く聽いて見ると別に不自由はない樣である。他から書面が來れば祐筆があつて夫を讀む。當人は耳で聞いて居れば分かる。又物を書く樣な事があれば祐筆に書かせる。又サインをする必要もない。印を押せば宜しい。夫故高官は胸間に……字も要らぬ。腕節が強く、家柄が善ければ澤山である。又下民は手紙……を出すにしても、其書き方は、本文の始に何誰より何誰に送ると書き、次に用件を認めれば夫で善いのであつて、本文以外に受取人の宛名とか、差出人の署名とかは必要でない。勿論印なども要らないのである。只お寺の坊さんにでも頼んで書いて貰へば夫で善いのである。

併し流石の土人も偶には無筆の爲に失策を演ずる事がある。嘗て南アビシニアに駐在する英國領事が、當國外務大臣の發行した旅行劵を以て旅行した處が、或村の關門で役人が旅行劵の提示を求めたので、夫を見せると云ふと、其役人は旅行劵を逆に見ながら、夫を讀んで居る樣な風をして「是はだめだ」と云つて其處を通さない。然かも其旅行劵迄も還さうとせぬ。領事は勿論色々と說明をしたが聞かれない。併し其内に部下の文字の讀める者が來て內容が分つた結果、役人は大狼狽を始め、深く領事に陳謝したと云ふ事である。是は役人が賄賂を取らうとして、字の讀めない爲に、相手を見誤つたのだと云ふ事であるが、爾來同領事は田舎を旅行する場合には、再び斯る面倒に出合はない樣、關門通過の前、村長に少し斗の贈物をする事にして居ると云ふて居る。

併しアビシニアに於ても時折は文明式な事を遣つて居る。夫に就て一寸驚いたのは我等が首府に到着した日の翌日である。何心なく旅館の窓から往き來の人の風俗抔を打ち眺め、大に興に入つて居ると、一

點の砲臺を耳にした。果して何者かと訝りながら、傍人に聞いて見ると、夫は午砲で有つたのである。此點に於てアビシニアは確に阿弗利加に於ての先進國である。夫に就て或人の話に、其人或時午砲掛の人に如何にして午砲の時を定むるかと尋ねたるに、其役人懷中時計を示しながら、之れに據りますと答へたので、再び其時計の時は如何にして正すのかと尋ねた處役人先生真面目な顏して午砲に合はせますと答へたとか。之は一場の戯談であるかは知らぬが、アビシニア人の無邪氣を語るに足るものである。

面白い兵隊さん

此國の兵隊は徴兵でもなければ、又志願兵でもない。兵士と大將との關係は、主人と家來との關係であつて、いざ鎌倉と云ふ時に、家來共は皆刀を差し、鐵砲を擔ひ、又は槍を携へ、主人の御馬前に集るのである。尤も此國にも常備軍と臨時軍との區別があつて、常備軍は各地の知事が平時に備へて居る軍隊と、皇帝の親兵とを云ひ、相方相併せて四萬人乃至五萬人位と云ふ事である。又臨時軍とは、皇帝と知事とが有事の時に編成する非常の時の軍隊であつて、其兵數は定まらないが、銃器其他の軍需品との關係もあれば、過大な兵力を集めると云ふ事は到底出來ない。精々十五萬人乃至二十萬人位の所であらうと云はれて居る。併しアビシニア人の有つて居る銃と云ふのは、或は十年前の式もあれば、二十年前の式もあり、又三十年乃至五十年前の式もあるであつて、啻に粗造極まるのみならず、口徑にも種類が多く、必ずしも銃と一致するものではないそうである。從つて彈丸に缺乏した際しても如何程の鐵砲があつても役に立たぬ事になる。之れ此軍隊には兵種の區別がない。例へば工兵とか砲兵とか歩兵とか云ふものがないのみならず、衛生隊も無ければ、輜重兵杯も無論ない。然かも平素の訓練もなく、只雜然とした烏合の衆に過ぎないのである。併し士官は勿論普通の兵士も、從軍の場合には大抵妻と從者を随へ、軍需品の運搬、炊事等の仕事に當らせる事になつて居る。尤も是はメキシコ杯に於ても同様であつて、アビシニアにのみ限つた制度ではない。又兵士に制服と云ふものは無い。只揃つて居るのは彼等が皆洗足であると云ふ事丈である。

着物は皆日本から

アビシニア人の生活狀態は一般的に云へば、極めて原始的である。家屋は皆掘立小屋であつて、天井もなければ床もない。只草と木の葉で雨覆をした丈けであつて、其外には何の細工も設備もない。其處へ土人等は裸體で住まつて居たのであるが、近來は彼等も段々と文明の感化を受けて着物を着る樣に成り、硝子器陶器エナメル器杯と云ふ樣な外國からの輸入品迄も用ゆる樣に成りつゝあるのであるが、首府は勿論他の重要な都會地にては、殆ど裸體の土人を見[illegible]る。蓋し彼等の着物は、[illegible]

たない雜兵、日本で云へば草履取と云ふ格の者である。そうして勢力ある者は夫を澤山に連れて居る。又奥さんは白い吊で顔と頭とを包み、目斗り出して檀那と同樣に或は馬或は驢馬に乘り、鐵砲持槍持雜兵抔の從者に其前後左右を取り卷かれ、威風堂々と大道を濶歩して居る。夫が二組や三組ではない。彼方此方にぞろ〳〵と市内を往來して居る。何れも近在其他の方面から出て來た者で、其光景の珍なる事は恰も廣重の錦繪で見る江戸時代の風俗の樣である。斯う云ふものは世界廣しと雖も、今の時代に他所では到底見られない。我江戸時代の光景を見んと欲せば宜しくアビシニアに行くべしである。

但し前にも述べた通り、土人の内には生粹のアビシニア人と、之に征服せられた蕃人とがある。生粹のアビシニア人は云はゞ士分と云ふ格で、彼等は決して働かない。詰り勞働は武士の威嚴に關はるものと心得て居る。そうして働くのは被征服の蕃人である。併し彼等は好んで主取りをする。主人の無いのは何れに出ても幅がきかない。云はゞ浮浪人と見られ武士の仲間には算へられない。それで奉公をすれば主人から土地を與へられる。土地を與へられゝば、蕃人の小者又は奴隷を抱へて夫に耕作させる。そうして自分は毎日懶けて居るのである。

斯う云ふ風に彼等は仕事はしないが、中々尚武の氣象に富んで居る。先づ幼少の頃から非常に武器を愛する。[illegible]ば、外出するには必ず一腰[illegible]くとし[illegible]を買ひ入れる。尚其上に少しでも生活に餘裕があれ[illegible]馬を飼ひ、從者を抱へ、大に殿樣氣取をするのである。殊に地方の知事とか又は其他の有力者になると、孰も皆多大な兵力を蓄へ、外出する時には、大變な供備をして堂々と街路を往來するのであつて、其小なる者は吾昔の野武士の如く、大なる者は大小名の樣である。然かも兵士は孰も無爲徒食、單に主人の裝飾と成る外には何の能もないのである。

勇壯で丁寧で無邪氣な土人

アビシニア人は全くの世界知らずであつて、自分が一番強いと思ふて居る。從て非常に元氣が善い。私は人間に自信と云ふもの[illegible]な事を思はざるを得ない。アビシニア人は此自信が強い[illegible]潑として居る。此點に於てアビシニア人は阿弗利加の[illegible]に異なるものが有る。或人の話に、「阿弗利加の土人は[illegible]る。外國人が之を統御するには威力を以て臨めば夫で[illegible]しアビシニア人に對し下手に威力を示すならば、[illegible]傷け、其反抗心を挑發する[illegible]

…を接續する
…はなく、或は谷合、或は
…路の類に過ぎないのであつて、乾燥時
…か、雨季には或は川となり、或は泥濘膝を没するものであ
つて、とても通れるものではない、そう云ふ處を時候の良い時丈け駱

…は佛領ソマリランド
…アデン港と相對して紅海の入口を守
…海路よりアビシニアに行く者は先づヂブチに上陸す
るのであるが、日本から行くとすれば、我郵船會社の歐洲航路船でア
デン港迄行き、其處から接續船でヂブチに乘り替へるか、又は佛蘭西
船で日本から直行するのであるが處で此ヂブチと云ふ處は海岸の砂漠
地に作つたのであつて、陸地は全體に水で洗つて乾した樣な砂と家と
斗の處である。或西洋人の書物に此町の事を…
ク、エンド、エム…

迄の長さの立襟筒袖の上衣に、足先を穿つた股引を着け、男は上衣の襟を高くし、女は股引の上にスカート形の下衣を用ひ、男女共に上衣の上から、シャムマと云ふ幅三碼長さ二碼乃至四碼の白布を肩に巻いて居る。此シャムマと云ふのは上等品はアビシニア産の棉から作つた手織の薄物であつて、僧侶及上流社會の人々の使用するものは、兩端に赤又は青杯の筋を織出し、皇族の使用するものは金銀の刺繍を入れた極めて精巧なものであつて、普通の商店には無いものである。尚身分の善い者は男女共に其又上から黒羅紗黒繻子又は黒天鵞絨のマントー形の外套を着て居る。而して右の着物の材料は總て白木綿であつて、殆ど皆外國から輸入せられ、其内の約八割は日本から供給して居る。即ち此國の一個年間の總輸入額は大凡二千萬圓見當であつて、其半額が木綿である。然かも驚くなかれ其約八割即ち大凡八百萬圓、之を數量で云ふと約三萬五千俵が我紡績會社の製品である。尚此外にアヂス・アババでは日本製の厚地の白木綿を、病院其他の上等家屋の天井又は壁に用ひ、其上からペンキを塗つて居る。是も中々の需要高に上つて居ると云ふ事である。

茲に一言云ひ加へて置かねばならぬ事は、綿布其他の日本品の輸入及卸賣業が、全然印度商人の手にある事である。但し彼等は或は孟買の自店又は取引店（此内には同地に在る日本人の商店もある）より、

は何等直接の關係かなし
れるのであるから、夫で差支ない様なものではあ
萬圓を下らない我商品の賣込を、全然印度人の努力に任かし、一人の我商人もが、直接に關係せぬと云ふ事は、甚だ痒い處に手の屆かない恨みがある。況や、此地方に對する商賈には現在賣込まれて居る商品の外に、今後大に賣込まねばならぬものが幾等もある。是等の商品の販路の開拓は、之を印度人の努力にのみ待つわけには行かない。勿論儲かると極まつた商品なれば、印度人が其賣込みに盡力するのは敢へて疑はないが、併し我海外貿易を自に發展せしむる爲には、儲かるとか又は儲からぬとかの見込が確かで無い場合にも試みに賣つて見ると云ふ必要がある。之には我商品に對する同情がなければだめで、此同情を外國の商人に求めるのは無理である。之は是非共我商人に求めねばならぬのである。私はアビシニアの貿易に我商人が進で參加しないのを非常に遺憾とする。因にケニヤ、ウガンダ及タンガニカの英領東阿に於ける日本生木綿の需要が年額約三萬俵此金額約七百萬圓であるのに對し、アビシニアの夫は約三萬五千俵此金額約八百萬圓であつて、後者の方前者に比して遙に有望である。序で當業者の爲に附言して置く。尚又アビシニアに於ては、獨り綿布のみならず、土人の生活向上と共に銅器陶器硝子器エナメル器等の家具及莫大小其他の雜貨の輸

然して日本商人が未だ此方に入込まざる爲、日本商品の賣込は始じて見棄てられて居る模様である。又當國には珈琲獸皮象牙麝香等の夥しい輸出がある。殊に珈琲は年額約一千萬圓獸皮も亦約九百萬圓に上り、其内には黒豹白猿等の珍奇な毛皮も尠くないのであつて、是等に對しては吾國にも相當の需要があるのみならず、假令其需要がないとしても之を他に轉賣し得るものなれば、我商業者は宜しく速に人を派し我商品の輸入を圖むと共に、是等商品の輸出をも試むべきである。因に此國の珈琲にハラリーとカファとの二種類があつて、ハラリーと云ふのは名高いアラビヤのモッカ珈琲と共に世界で第一等の優等品なるが、モッカの方廣く人に知られて居る爲、アラビヤ人はアビシニアより此珈琲を輸入して、或はモッカと混合し、或は之をモッカと稱して販賣して居る。但しモッカとハラリーとは同格と云ふ事には成つて居るが、人に依りては、ハラリーの方香氣豐なりとて之を好む人が尠くない様である。

内地の旅行

此國には道路と云ふものがない、尤も首府と重要な地方を接續する小路はあるが、夫は人間の手で造つたものではなく、或は谷合、或は川底、或は又踏み固められた野路の類に過ぎないのであつて、乾燥時には通れるが、雨季には或は川となり、或は泥濘膝を没するものであつて、とても通れるものではない、そう云ふ處を時候の良い時丈け馬とか、驢とか、騾とか、又は徒歩で旅行し、辛じて通行するのである。尤も首府には以前から可なり廣い道はあつたが、夫は只廣い丈けであつて、路面は一體に凸凹を露はし、恰も岩山の様であつたのであるが、兩三年前より皇居と鐵道停車場及公使館區域との間に自働車路が出來、今では皇室各國公使館及其他の自働車が約八十臺ほどあつて、可なり頻繁に動いて居る。

道路の現狀は右の通りであるが、茲に一の例外は佛領チブチと首府アヂス・アババとの間に一本の鐵道のある事である。此鐵道は佛國人の經營するフランコ、エチオピヤ鐵道會社の敷設せるものであつて、一八九四年アビシニア政府より九十九年の特許を受け一八九九年に工事を起し、一九一七年に竣工したのである。全線の延長が四百八十七哩あつて、運轉は晝間丈けで夜間は動かない。夫でチブチより首府迄二泊三日を要する事に成つて居る。但しチブチは佛領ソマリランドの港であつて、アラビヤ側の英領アデン港と相對して紅海の入口を守つて居る。其處で海路よりアビシニアに行く者は先づチブチに上陸するのであるが、日本から行くとすれば、我郵船會社の歐洲航路船でアデン港迄行き、其處から接續船でチブチに乘り替へるか、又は佛蘭西船で日本から直行するのであるが處で此チブチと云ふ處は海岸の砂漠地に作つたのであつて、陸地は全體に水を洗つて乾した様な砂と家と斗りの處である。或西洋人の書物に此町の事を、サンド、エンド、ロック、エンド、エムプチーと書いて居る、誠に穿ち得て妙である。但し

奥地には沃野千里の大高原がある。又其處には四時春の様なアヂス、アババと云ふ首府があり、皇統三千年を誇るアビシニアの皇室が獨りで太平の夢を樂んで居る。偖て汽車は一週間に日曜日と水曜日と二回兩端驛から發車する。

第一日は午前六時半チブチ出發、山又山の急坂を越え、凡そ四時間六十五哩にしてダオウンと云ふ國境驛に着く。茲には閘の上にアビシニアの緑赤黄の三色の國旗が翩々と飜つて居る。彌是れからがアビシニアの本舞台なのである。併し見渡す限りチブチと同様に砂と石と斗りである。然かも夫が焼山であつて何の風情もない。但し折々は遠近に駱駝の群を逐ふソマリー人の隊商を見る。流石に熱帯の氣分を味はずには居られない。午後五時ヂレタワに着く、此はチブチから一七三哩地高海抜約四千呎、是より當國第二の都ハラールへ三十五哩、當驛は其分岐點としての重要地である、人口八千人、水道あり並木あり、空氣が極めて澄んで居る、ホテルの設備も可なりに善く、足を延ばし、旅の疲勞を慰むるには充分である。

第二日目は午前七時ヂレダワ發、今日も山を出ては、又山を上つて行く、但し次第に草原となり、折々は灌木の林の間を縫ふて行く。家畜の群を逐ふガラ人の牧童を見る。前日とは大分光景に變化がある。行く事數時間丘の彼方に大海を見る。進めども進めども近寄らない。夫は蜃氣樓であるからである。午後五時アワシに着く。此行程一四七哩、アワシは當國野獣狩の出發驛であつて、是一度此驛より十五哩乃至二十哩位奥地に入る時は縞馬麒麟大象小象猿豹其他の野獣が多に群を爲し、射撃勝手次第である。或人の説に遊獵地としてはアビシニアの方が彼の有名なケニヤの高原より尚遥に優つて居るとの事である。此地のホテルも可なりに良く、一夜の夢を結ぶには充分である。但し此地は五月から九月迄の雨季と、其直後とは蚊群の盛な事で有名である。我等通過の時は一月から二月の乾燥季なりし爲無事であつたのは幸である。

第三日目は午前六時アワシ發、此日も亦山を上つて行く。驚いたのはアワシを出て約三時間位と思ふ頃、嘗て火の海であつたと云ふ愴絶慘絶の燒地に入る。線路の兩側は見渡す限り皆黒焦の様な色をした溶岩の大砂漠である。勿論植物は草も植ゑない。世界に於て恐くは他に見る事の出來ない光景である。此を通り過ぎると土壌の豐かな草原に入る、有名なアルシの沃野と云ふのは夫れである。此地はアワシ河の沿岸に擴かつた大平野であつて、將來綿作に最も有望な處と見なされて居る。併し現在は僅に大麥小麥杯を少々耕作せる位であつて、多くは未開の儘に棄てられて居る。恨むらくは此方面には森林がない。尤も遠近に多少の木立を見ないでは無いが、要するに總てが殺風景な草原である。併し首府の郊外に至つて其景色が俄然一變する。今迄の草原がユーカリプタスの森林と成り、緑に包まれた山の頂、谷の間から亭々と聳えた皇宮寺院、原始的な土人の小屋杯が隠見する。道行く牛車の數も尠くない。物資を山の様に積んだ驢馬騾馬の通行は更に多

い。自轉車さへもぼつ〳〵きしつて居るを觀て不思議の感の様である。然かも空氣が晴朗で砂漠からオーシスに入つた様な感じがする。午後五時首府アヂス・アババに着く。アヂス・アババと云ふのは新花と云ふ意味、花の都と云ふ心である。地高は海抜八千餘呎、四方にはエントト山其他の有名な高山が雄姿を揃へて、步哨の様に立つて居る。氣候は温和で春の様である。人口は約十萬人、商賣は殆ど外國人に依つて行はれて居る。其内優勢なのは印度人、次は希臘人であつて、外にアラビヤ人、アーメニヤ人杯もある。旅館は西洋式で三軒ある。何れも可なりの設備を調へて居る。市内には電燈もあり、電話もある。上流社會で最も流行して居る遊戯は乘馬である。普通の良馬は一頭三十圓位、八十圓も騰れば駿馬が買へるとのことである。

面白い裁判

此國の裁判は非常に簡單で且つ面白い。土人の間に何か爭が起ると云ふと、夫が日常の小事件である場合には之を裁判所に訴へない。併し通行人でも又其他の人でも、手近の者を捕へて夫に裁判をして貰ふ。頼まれた人は夫を拒絶する事が出來ない。早速相方を其邊の軒下なり又は木蔭なりに連れて行き、適宜に話を聞いて、夫に裁判を與へる。さうして其裁判には相方共に服從するのが習慣に成つて居る。野蠻地には至極簡便で適當な制度であると思はれる。尤も當事者が此方法に據らず、裁判所に訴へて出る場合には、若し夫が日常の小事件なれば裁判官は必ずしも自分で裁判せず、適當な仲裁人を招いて、夫に[illegible]させる事に成つて居る。

次に面白いのは[illegible]場合には双方が共同で種々な事を立證する爲に、牛とか羊とかを賭ける事がある。其場合には勝つた方の者が其八割を取り二割を裁判所に納めるのだそうである。又裁判中の裁判官の食事杯は關係の訴訟人が負擔すると云はれて居る。

玆に此國の裁判で最も奇妙なのは、債權執行の方法である。例へば或者が金を借りて仕拂はぬ事がある。夫が裁判事件と成り、裁判が確定すると云ふと、裁判官が債務者の手と債權者の手とを鎖で繋ぎ合はし、債務者を債權者から逃げさせない様にする。其處で債務者は債權者と鎖で繋ぎ合はせられた儘、其親戚、友人又は慈善家を訪問して金を集める。さうして債務の辨償が終る迄債務者から離れない。さうすると結局誰かが金を出して仕拂の義務を果すそうである。併かし若し夫れでも何仕拂を終らぬ時は、債權者は債務者を勞働せしむる事が出來るのである。吾等の者から云へば斯う云ふ取立方法は、即ち債權者の迷惑となると思はれるが、時間の損失を何とも思はない土人の事であるから、債權を確保する爲めに最も安全な方法として、[illegible]て居るそうである。

最後に最も變つて居る事は、[illegible]人の[illegible]

ものではないと云ふ事である。此国の諺に「眼に対しては眼、歯に対しては歯」と云ふものがある。其意味は人の生命を奪つたものは、己も亦其生命を奪はれる。又他人の手なり足なりを傷けた者は、己も亦夫に等しい傷を与へられねばならぬと云ふのであつて、刑の執行は主として被害者又は其遺族に遣らせる。故に若し被害者又は其遺族が金で済ませようと思ふならば、夫で差支ない事に成つて居る。夫は刑罰の精神が公安の為でなく、被害者の復讐の為であるからである。

夫に就て面白い事は或時罪人が木の下を通行して居ると、其木の上に居た者が足を踏み外して落ちた為に、其通行者が押し潰されて殺されてた。是が裁判に成ると、過失致死ではあるが、殺人に違ひないと云ふ所から、加害者の身柄を被害者の遺族に引渡し、其遺族は被害者の受けた通りの方法で加害者を殺しても善いと云ふ事に成つたが、偖て遺族に取つては刑を執行する為には、加害者を木の下に立たせ、自分が木の上から落ちなければならぬので、結局刑の執行を廃め、其代償として身受の金を取つたと云ふ事である。アビシニアの刑の精神は先づこんなものである。

淀君を繞る人々

呉　文　炳

平泉の金色堂は屋根に至るまで金箔を置いたゝめ、その燦爛たる光りは衣川に映じて多くの魚族を光りの下に集めたといふ傳説が今日でも寺傳に殘されてゐる。けれども桃山城大阪城といふやうな大規模の建築に金色の瓦を葺いたことは何といつても豐公築造時代の反映でなければならぬ。圍まれて落ちた幾多の城には薄命の女性に絡むだ哀話がいくつも殘されてゐる。天目山に於ける勝頼の妻、北の庄に於ける小谷の方などは最も後世の人々からの同情に値する。

城塞を深くし、高い天主閣を聳えしめた城廓は桃山時代の文化の一代表物であつた。此の時代は城廓を單に軍事上の實用物とのみ考へてはゐなかつた。そして多くの大名は城廓に政廳を兼ねしめたのである。隨つて城廓も住宅向的性質を帶びるやうになつてきて、こゝに多くの裝飾が施され纎細な技巧が應用される時がきた。地方人であつた大名たちも文化の方面に於て京都の古い文明に對抗するため、新しい文化への創設に急いだ。鐵砲の傳來によつて西洋文化の頼むに足ることを知つた國民は如何なるものでも長所を選擇し得るものならば直に採用することを敢てした。實際的に役立つものであるなら、それは古今東西を問ふ必要がなかつたのである。

天文十八年に輸入した切支丹宗に對してすら、反省の餘地もなく、この新宗教も忽ちの中に四方へ擴がつた。かういふ風に無制限に西洋人の日本に入り得た桃山時代に於ける國民の新生活は果してどんなものであつたらうか。吾々は桃山時代の屏風を見て如何に多くの人々が狂ひ踊つたか、又かぶき草紙のうちの見物人に多くの西洋人を見出し、出雲の阿國の踊り姿に西洋の珠數と十字架とを發見した時に、此の時代の捉はれない生活の一面を考へずにはゐられない。秀吉が小田原征伐の戰陣に多くの美しい婦女があつたり、名護屋の滯陣に、大名が商人に假裝し、商賈の眞似をしたり、醍醐の花見に[illegible]分を[illegible]はしめた點など、新時代としてこの時代をみるのも興味があらう。又南蠻屏風などを見ると、大きな洋船のうちに歡樂の宴の催されてゐる所などは、冒險的船乘生活の一面を雄辯に物語つてゐる。かういふ立場から、この時代の女性を觀察することも亦、面白からう。

武事に專心ならざるを得なかつたのに比べれば、遙かに文事にも親しみ得る機會が多かつたであらう。信長が天下統一の基をひらいて安土に築城した際には軍事上のものとしてより、寧ろ居住所としての特色をよりよく發揮したもので、同時に政治上の事務所をも兼ねたものであつた。贅を盡して應用した天下の美術は、平和時代に入る準備とも見られやう。平和時代には京都の公卿や京都化した室町將軍の文明に拮抗する必要上、安土文明を形造るに全力を注いだ。秀吉の聚樂殿、大阪城、桃山城なども、かういふ新時代の代表作物の一つであつた。そして平和を享樂し得た秀吉に豪奢な吉野山花見、醍醐の花見などがあり得たのである。秀次は文祿四年二十八歳で死んでゐる。彼は信長の戰國活動時代に生れ、秀吉の京都中心時代に人となつてゐる。そして秀吉の聚樂殿の落成と後陽成天皇の行幸を仰ぎ奉つたことゝは天下統一の象徴ではあつたけれども、此頃には田舍武士も京都の文化に洗錬されて、扈從の武將の多くは公卿と共に歌を詠んでゐる。であるから秀次が京都文化に於て他の武將より一歩進んで垢ぬけのして居たことも別に不思議ではない。

桃山時代に於ける文藝復興の功勞者の一人である秀次の一面に殘忍性があつたと云はれてゐる。

そして濫んだもの丶常の如く、惡逆を放たれて居り、殺生關白[illegible]

る際に、風流韻事を超えて、聚樂の[illegible]晴らすためであつたらうか。既に秀吉自身すら鶴松の死に[illegible]決意をしたと、その時代の人々に考へられた位だから、秀次が感情に支配されたとて、強いて彼を咎むべきではないかも知れない。況や秀頼が生れ、心弱くなつた晩年の秀吉の缺點に乘じて、乘り出した石田三成が、淀君を抱き込んで打つた芝居が成功して來ては、秀次の不安も一層重づてくるのも無理はない。しかし、秀次は武將として大なる功勞のあつた譯でもなく、寧ろ小牧山の役に見苦しい負け方をして秀吉の面目さへ失つた程である。彼が關白に取り立てられたのは單に血緣の爲であるといふ理由に過ぎないから、秀頼の生れた際に運命に服すべき覺悟位は持つて丶欲しかつた。とはいへ秀吉は秀頼の愛に溺れながらも秀次に全國の五分の四までを割かうとした位であり、秀次の女を秀頼に嫁せしむるまでのことをして、彼の面目を立てやうとしたのであるから、秀次が飽くまで自己の地位を保たうとしたことは決して彼のために得策ではなかつた。秀吉は秀次の缺點を充分に知り拔いて居り、小牧山で敗戰した際にも彼を「無分別ノウツケニテ候者」と罵つてゐる。秀吉は鶴松の死後、關白職を秀次に讓るに當つて彼に與へた注意書に常に軍事に怠りなく、政治に於ては法律を嚴にし、不公

さ見にて、殿原、衆々お端をいたし、人をこなひ、食、なに事しかゝりす傍輩衆はとりたか、うつちたか、あいく＼にしるべく、殿、悩ひ女の事は半數の内に置き、五人なりとも十人なりとも召しからず候、外にて見れかはしく女狂ひ、たのゝたか、茶湯にて秀吉如くにいたらぬ物のかたへ、一切罷り出候儀無用たるべき事」

女狂ひの度を過すなといふ、すぐ下に自分を眞似るなと云つてゐるこの注意などは待合に出入する叔父が放蕩息子に意見してゐる恰好その儘である。老人雜話に

「羽柴長吉は太閤小姓無類の美少年也、太閤或時人なき所にて近く召す。日比男色を好み給はぬ故に、人皆奇特の思ひをなす。秀吉問ひ給ふは汝が姉か妹ありやと、長吉顔色好き故也」

秀吉の好色はこれでもわかる。しかし律義と噂された家康の關係した女が秀吉以上であつたところから見れば、時代として或は珍奇なことでなかつたかも知れない。實際歴史に知られてゐるのは第五夫人までである。それにも拘らず、秀次に對しては幾人の女を置いても邸内なら差支へないと云つてゐる所などは、餘程寛大であつたと見てよい。

秀次は秀吉から女を集める許があつたとは云へ二十八歳の時既に三十一人の女を集めてゐる。公卿、日野氏の息女である三十四歳の第一夫人から十三歳まで三十人餘もあり、山口、越前、奥州の遠國から若い女を呼び集めてゐる所から見れば、好色、物好みの度を超してゐることがわかる。しかし、當時關白であつた秀次に若い女たちを所々に囲隠してゐたらしい。最上の方と呼ばれた十六歳の少女が秀次の事件に連座した時よんだ歌に、

罪なきにきえぬる身にしかなしきは
のこれる母のさこそ思へば

その外二十二歳のおあこの御方、二十歳のおこちの御方、およめの御方などは秀次を夫とよび、千代の契りと叫んでゐる。女から女へ目の移るやうに移つてゆく彼でありながら、多くの夫人たちに大した不滿をも與へなかつたらしくみえる。

官能の滿足が慘酷に骨までも舐らなければならないところまで行くものとすれば、秀次の如きは、まさにその好標本の一つであつた。彼は若し今日生れたなら立派な不良少年の一人であつたらう。彼の慘忍性は狩獵などにあらはれてゐる。秀次は文祿元年に正親町天皇の崩御あらせられた諒闇中不謹愼にも狩獵をしたので、

先帝の手向の爲めの狩なれば
これや殺生關白といふ

と一條の辻に札を立てられたといふ話を殘してゐる。又秀次が或時天主閣に上つて四方を眺めてゐた際、懐姙の女が苦しげに、野邊の若菜を摘んでゐるのを見て、女の腹が非常に大きいから双生兒であるだらう。呼んで來れと命じた。

家來等はこの女の懐に澤山の芹薺を入れさせ、ふくれてゐるのは

又秀吉の晩年の子である秀頼に對する可愛の發露なのか、あるひは秀次の妻妾のうちには懐妊者も潜むでゐるといふやうなことを恐れて、一網打盡的に死刑に處したかはよく判らない。今日、三條河畔に殘つてゐる秀次の墓は德川時代の交通の恩人、角倉了似が涙の供別である。

秀次の塚を畜生と稱へたことに二三の說がある。靈山に於ける狩獵は佛教六道の畜生そのものに當る。即ち狩獵される動物は畜生の悲しさである。この畜生への殘虐が靈地に於て行はれたから、畜生を連想せしむることも寔に無理でない。處が、川角太閤記に新說が出てゐる。それは秀吉の愛女の一人であつた菊亭右府の娘である。彼女は病氣で父の許に歸つてゐた際に、秀次が之を知り、父の菊亭を竊かに呼出して談し合ひ遂に己れのものとした。これが秀次の第二夫人らしい。石田三成はこのこと即ち親の女を奪つて妻としたといふことを口實とし、關白樣御塚を畜生塚と命名せしむるやうに建言した。そして秀次には御謀叛の御思召は毛頭ないと辯護してゐる。生前さへ畜生的行爲のあつた秀次は死後にも畜生道へ陷るといふことから畜生の名を冠せしめたけれども、半分は菊亭女に對する秀吉の悋氣も加はつてゐるとのことである。若い女を奪はれた秀吉はその女をも殺し、その女と秀次との間に死後迄悋氣したといふ川角太閤記の說も中々面白い。假令と云つても秀次は若い貴公子であつたから、老いたる秀吉がどう焦慮つても、これだけはどうにもならなかつたらう。

しかし、秀次に愛された女の一群は誠に不幸と云は……に愛された女たちは皆その運命を諦めてゐた。そのうち奥州最上義光の娘の如きは天正十九年秀次が奥州一揆の征伐に向つた時に無理に彼女を強掠的に自己のものとしたので、伊達日記が一大名に似合はざる天下のあざけりに候」と非難したことも尤もである。彼女はおいまの方と呼ばれ殺された時は十九の盛りであつたから、秀次につれられて來た時は、花も蕾の一少女に過ぎなかつたのである。彼女の辭世は

うつゝとも夢とも知らぬ世の中に
すまでうかべる白川の水

遠國の奥州から物心もない時に父母に別れた彼女としては、夢とも現とも世の中を觀じたことは無理もない。濁れる世の中の象徴としての白河の水は彼女にとつては常時清くなることはあるまい。運命に弄ばれた彼女は矢張り、濁れる流から逃がることが出來なかつた。彼女には秀吉も秀次も惡魔であつたに相違ない。

太閤記には彼女等を「世に在りし時は、花やかなる有さまにて有べきが、昨日に今日は引かはり、白き出立の外はなし、若君姫君を御乳母にも、はやそひまゐらせず、御母おやの膝にいだき給ひしは、假初心もなく、おちこちへなんとのたまふの、いたはしさ、あはれさ、此上あらんとも覺え侍らず」

とある。平治物語に記されてゐる源義朝の愛兒の殺されたのに比べて更に哀れであつた。彼女の最後は餘りに慘酷であつた。秀次にと

つては短い命ながらも、自己自身で犯した不徳から來た罰であつたらうけれども、その道伴れとなつた彼女等は、餘りの運命の果敢なさに泣き悲んだのも無理はない。罪なき侍者を斬つた秀次への因果の報は餘りに早かつた。そして秀次憎さに彼の謀叛といふだけで極刑に処した豐臣家にも同じ呪ひのかゝらない筈はなかつた。秀次を陷れた三成が關ヶ原に敗れて亡び、次で淀君を中心とする大阪城の運命が更に大きな魔手を擴げられることになつて來るのを何うすることも出來ない。呪はしい戰鬪時代よ。

秀頼事記に淀君を悩ます秀次の亡霊のことをかいて

「關白秀次我枕上に立ち、打恨みたる氣色して、我のみならず過なき者共數多罪に沈み、中にも絶えて悲しきは、花にも月にも準らへて、愛しと思ふ女子供、卑しき者の手に觸れて、首を刎られ、恥を天下に曝すこと、此恨み何の世にかは散ずべき。是等の執心晴るゝ隙なく、苦みに沈みて浮ぶ事なし。今より後は、秀頼に恨を申すべしと、雨栗の如く涙を流し、現の様に見て侍る此面影ひしと身に添うてある心地して、容恐しく侍る」

秀次の亡んだ一因として、秀頼の生れたゝめに秀吉の秀次に對する愛情が冷かに、そして熱愛が秀頼に集つたゝめであるとすれば、秀次の秀頼に對する怨恨心は生前既に生じたらう。然し實際は秀吉も秀次に對しては非常に憚つて居り、秀頼には日本の五分の一だけを譲りたいと洩かしたことなども、然うした秀吉の一時的の態度を秀次に反こたとのみは見られない。それは老年になつて得た子として秀頼は目に入れても痛くない程でもあつたらう。しかし同時に自己の餘命の幾何もないことを考へてみれば、秀頼の安全第一といふことが浮んでくるに相違ない。彼は秀次を亡ひ、後に自分の運命に覺悟をした際には五大老に頼みきつてゐる。戰鬪時代の權謀術數のみが行はれてゐる時代であつてみれば、放蕩息子ではあつても秀次が繼承者であるだけに、頼みになるものと考へたに相違ない。さればこそ、秀吉は自己の面目を失はしむる無恥の甥として之を除かうとまで考へを運んだにも拘らず、關白職をつがせてゐる。であるから秀頼が生れたからと云つて直ぐ彼を排斥しやうと迄は企てなかつたらう。どこか純朴な所があつてその性質を偽ることの出來ない秀次の我儘は自分の嫌ひな人々に對する憎しみと冷笑とに變つてくる氣持を抑制することが出來なかつた。彼は叡山に狩猟した計りでなく、僧房の厨に鳥獸の腸を捨てるといふ有様で、亂暴狼藉とはいへ、或は破戒無慚の叡山の僧侶達に對する反抗心のムラ〳〵と起つたその現はれだとも云はれてゐる。そして秀次の行狀が亂暴になればなる程、他から乘ぜられる機會を投げ出すやうなものである。この機會を取り逃さなかつた人は石田三成その人であつた。聚樂物語には秀吉秀次の離間策に全力を注く、三成の罪行を記してゐる。そして三成の手足となつた人は田中兵衛が第一で彼は三成のために間諜の役をつとめ、謀叛のことを探つたけれども、掴む何物

もなかつた。そこで前田徳善院が秀次の傍に近づき、空涙の一掬を演じた。彼は秀次の前に出てものをも云はず、空涙を流し、秀次が之を怪しみ、その仔細を問うたところ、「愚人は勝れてゐるものを常に嫉むでゐるものである。君のことを讒言したり、又誹謗などで秀吉に密告するものもあらう。秀吉のことであるから之を採用はしまいが、かういふことも度々になれば、或はそなたの野心を疑はれ、又何か意恨でもあるのではないかと疑ひを起すやうになる。さうなると杖柱とも頼んだ木の下に雨の漏ることになる」と木下とは云ふ迄もなく木下一族のことであり、雨漏るといふことが秀吉が秀次を信用しなくなり始まるといふ意味である。正直な秀次は自分は幼少の頃から恩寵を蒙つてゐる。であるから自分に逆心があつても與するものが一人もあるまい。自分に野心があれば神佛から罰を蒙るだらうと、徳善院に執言を乞うた。これで秀次がうまく陥穽に引つかゝらうとした。

だから三成は今度は秀吉の侍女の幸蔵主を兼ねて遣はすことにした。この幸蔵主は

「女なれども智恵深く、辯舌達しければ、御前を去らず、萬の事を推量りけれども、一度も御心に反き奉らず常に關白御參りの時も、此尼ならで、御挨拶申す者なし」

といふ程である。則ち彼女は女ながらも悧巧であり、常によく秀吉の心を[illegible]

徳善院の如く鈍二の[illegible]執成で秀吉の機嫌も直り、過ぎ去つたことや將[illegible]い御言葉があり、そして涙を御流しになり、徳善院を遣はし給は[illegible]た。そなたが人に疎まれたり、讒言せられるのも、どこかに私心があるからでせう。天下を治めて行く人は、萬民を自分の子のやうに憐み給ひてこそ、その人の代も長くつゞく譯ですから、關白のそなたが天道に背き給ふことのないやうに私共に訓へと御考へになつて、この事を申上げるやうに私を兼ねてお遣はしになつたのですから、どうか伏見の方に御出になり、秀吉公に御對面なされ、種々申上げたら、きつと御願ひも叶ふでせう」と舍利弗の智慧を以て説いたから、家來の諫めも容れないで江州に聚樂殿を出たのであるが、このことが彼の最後を早めることになつた。

何となく小説めいた所もあるけれども、三成が秀吉に侍べる人々をうまくその術中に陥れ、淀君を取りまく幸蔵主を利用したらしい。であるから秀次が祟るならば三成にこそ祟るのが本當である。しかし又冤罪のために殺された妻妾たちが河原者の手にかゝり、あらゆる侮辱をうけ、幼い子迄が皆殺されてゐるから、秀吉の愛妾とその子に妄執の念を晴らすことも考へられないことではない。

の如く捨てる意味でもあるまい。又寧ろ悲しい封建時代の婦人に同時にまた、あきらめも早かつた。然るに秀吉の晩年を飾つた有名な醍醐の三寶院花見は長い年月苦楽を共にした彼れの老妻への最後の餞別であつた。太閤記は

「夫惟、白髪は貴賤を不レ分、月は雲を不レ除、死は時を期せぬ習、目前なり、いざ此春は、北政所に醍醐の花を見せしめ、環堵の室を出やらぬ女共にも、いみじき春に合せ、胸の霞をはらし、一樂一樂に世を忘れさせせんと、思ひ寄りしなり」

と。妻を奴隷視する慣習のあつた時代に秀吉のこの企ては北政所に對する變らぬ愛の發露である。淀君對北政所は豐臣一家の興廢に重大な關係を有してゐる。それは加藤、福島等の舊臣は北政所に關係が深く、石田、小西などは淀君と結び、双方が對抗しつゞけ、豐臣家の舊臣が天下分目の關ヶ原の戰に、關東方に味方をするやうになり、それが豐臣家の滅亡を誘引したのである。

淀君の母は信長の妹で、淺井長政に嫁し、淀君以下三子を生んだが、夫の長政は信長に殺されて後家となり、後に柴田勝家に再嫁した。彼女は小谷の方と呼ばれ絶世の美人であつたことは高野山持明院に殘されてゐる彼女の肖像畫によつても、窺ひ知ることが出來る。多くの諸將が若い後家である彼女を得やうとし、秀吉も亦その熱心なる者の一人であつたと云はれてゐる。然るに柴田勝家に射落され、三人の連れ子をして北庄に嫁いだ。然し、勝家は秀吉に滅ぼさるゝといふ運命に捉へられた。彼は北の庄の城を秀吉に囲まれた際に逃れ出る隙もなく、遂に天守閣によつて最後の酒宴を開いた。此の際は力山を抜く項羽の最後の悲壮そのものであつた。たゞ勝家はこの危急に當つても流石に昔を忘れず、愛妻を助けやうとし、

「御身は信長公之御妹なれば出させ給へ。急ぎおはしましきと存しかば、小谷御方涙くませ給うて、去秋の終り、岐阜よりまゐり、かくまみえぬる事も前世之宿業、今更驚くべきに非ず、こゝを出去ん事、思ひもよらず候。しかはあれども三人之息女をば出し侍れよ。父之菩提をも問せ、又みづからが跡をも弔はんためぞかし」

といふ、最もなる願望を述べたので、それならばと云ふことになり、その事を姫君に傳へたところ、

「姉君、いやとよ、母上共に、同じ道に行かんものを」と、悲しんだにも拘らず、無理に城外に出されてしまつた。時に淀君十七歳と云はれてゐる。

「夜半の鐘聲、殿守に登りしかば、御二所深間に入りぬ。彼四面楚歌の夜の夢、楚王虞氏が深き恨みも、かくやと思ひ出にけり。いづれも様々へ引入、まどろまんとすれば、はや郭公音におとづれ、哀れをもよほし侍るに

小谷の方

さらぬだにうちぬる程も夏の夜の
わかれをさそうほとゝぎすかな

夏の夜の夢路はかなき跡の名を
雲井にあげよ山ほとゝぎす—

甫庵太閤記中の名文學である。血を吐くほとゝぎすに短夜を誘はれて行く心をよんだ小谷の方の悲壯な心裡は劇的シーンのクライマックスといふてよい。淀君は既に物心のついた年齢に達してをり、死ぬる母を後にして、後髪を引かれつゝ、小さい妹たちと共になつかしい土地を去つたのである。惠まれない彼女よ。淀君は秀吉の主人である信長の姪であり、然もその父は淺井長政であつた爲めに命を全うすることが出來た。しかし、彼女は二十歳の頃、五十の老年に傾きかけた秀吉の愛をうけいれねばならなかつた。

秀頼事記は秀吉の一面を「人の上中下といふ品を別つに誤り給へり、只時の間に合ふ善惡をも知らず、御心の儘に、私欲遊宴を恣め申す賤人貴人の時を得たる、色を好み、遊宴に耽り、心身共に疲勞して病身になり給ふ。蓍婆が醫術も叶はず、神社の幣も靈驗なし」と叙し、老年者の若い婦人を嫁ることによる身心の衰弱と批判を下してゐる。確かに淀君は秀吉から無限の寵愛を受けてゐる。彼女は小田原の戰陣や名護屋の軍營にすら伴はれて行つた。夫人を戰場に伴ふ習慣は日本の古代に於て屢見受ける所で、かの日本武尊の橘姫に於け…

…くる。男勝りと云はれた…巴御前が義仲の愛妾として戰陣に向ひ、勇婦の行を…かし…あつても、彼女は源平盛衰記作者の假設の人間であるらしい。

淀君の秀吉に陣中へ伴はれたのは決して勇敢な彼女を戰亂に見出す爲めではなかつた。秀吉は長い戰ひの慰みとして、又彼女の傍を離れることに淋しさを感じたがためである。秀吉は天正十八年に小田原城攻撃の際には淀君を伴つたが、更に進んで陸奥征伐に向つた際には淀君を先に近畿地方に歸した。彼は七月淀君にわかれ、九月に凱旋したけれども、淀城にゐる淀君にあふ暇がないために彼女に送つた手紙は、その愛情の如何に切なるものゝあつたかを物語るものである。その一節に

「廿日頃に必ず參り候て、若君抱き可申、その夜さにそもじをも側に寢させ申べく候、御待ち候べく候」

とある。稍露骨の所があるけれども、秀吉の天眞爛漫な性質がそのまゝに出てゐる。

日本の女性史上に於て淀君はどうかすると頼朝の妻政子に比較される。それは秀吉の第二夫人と云ふ立場からである。たゞ政子の場合は頼朝との結婚は命懸けであり、共に年若かつた時であり、隨つて政

ためにその愛人を使者の任に當つた侍臣に對し、可なり手厳しい處置をした。殊に鶴松の誕生は殊に面子を避くべく、愈々盛々たる有樣であつた。然るに淀君は若い第二の夫人であり、そして秀吉とは三十も年齡が違ふのであり、同時にその寵愛の美は秀吉をも動かし得た。然も北政所は面子のやうに態度を鄭重にあらはすことが殆となかつたらしく、又秀吉としても第一夫人に對する愛を捨てるやうなことがなかつた。耶蘇教史によれば秀吉が秀次に關白職を讓つた後も何となく氣まづい所があり、且つは關白職を讓つたあとに、秀次が秀吉を聚落第に饗應した時に、世間では秀吉を歡迎の際に秀次方に何か陰謀でもあるらしい風說があり、そのため秀吉も多少躊躇の色があつたけれども、北政所は秀吉より一日前に聚落第に赴き多くの贈物を秀次にして、兩者の意志の疏通を計つたことを記してゐる。この耶蘇教史の記事は多少明瞭を缺いてゐる。關白職を讓つた計りの直ぐあとなら、西教史にかゝれてゐる政所は秀吉の母の大政所であるとも考へられるけれども、秀吉、秀次の不和の風說は秀頼が生れて後のことであるから、秀吉の第一夫人の北政所と見た方がよささうである。

淀君は父として淺井長政、叔父として信長を有し、見方によつては彼女は主人筋に當るのであるから、彼女の勢力も可なり助長され得る譯である。然し戰國時代では夫人が門地の上からその夫を侮蔑するといふやうなことは少なかつたらしく、淀君の母の小谷の方の柴田勝家に對する態度なども日本夫人らしい慎しみを持つて居り、信長の妹であると云ふやうな夫人風を吹かせなかつた。淀君も[illegible]を尻に敷くやうなことはしなかつたらしい。たゞ淀君以外の[illegible]家来の加藤清正が秀吉から蟄居を命ぜられた原因が、小西、石田の中傷にあつたなどからすれば、淀君の勢力がかういふ所にも少からずあらはれてゐるやうにも見える。

然し淀君は北條政子のやうに、非常に賢明であり、多くの家來を處理し、政治上の權力を握る野望を有する程の大政治家でもなく、又女傑でも勿論なかつた。彼女の武器は絶世の美人であり、そして秀吉の寵一の駒子である鶴松、秀頼の母であるといふことであつた。それにしても彼女は決して第一夫人北政所に對し、之を凌ぐ大勢力を持つた譯でもない。それは秀吉は晩年の子である秀頼にその愛の全部を傾けた頃は、自然その母である淀君のみが眼中にあるべき筈であるのに、秀吉の最後の思出となつた醍醐三寶院に於ける花見の首座を第一夫人の北政所に選んだことによつても、淀君が秀吉を獨占してゐなかつたことがわかる。淀君は後世の歴史家の考へるやうな陰險な野心家では決してなかつた。たゞ秀吉の逝去後右大臣秀頼の母として、然も秀頼の年が母の保護を必要とする程若かつた關係上秀頼の代理をしなければならなかつた地位にあつた。然し淀君は政子のやうに親族や外戚を抑へて自分が政治上の勢力を何處迄も振らうとしたのに比べれば、淀君の政治的欲求的の誇りに終始する

機敏な石田三成は秀吉の秀頼に對する盲目愛を感知し、秀頼の擁護者である秀次を陥れることによつて、將來に於ける自己の政治上の位置を確保すべく準備した。秀吉の最後はたゞ最愛の繼嗣者である秀頼の將來の安全を期するためにのみ焦慮した。彼が家康、利家以下の五大老に遺孤の將來を托した苦心は寧ろ涙ぐましい程である。然るに綿の中に鋭鋒をひそめた家康の野心は秀吉の沒後に明瞭にあらはれてきた。家康の乘ずる所は豐臣一家の人々を離間することにあつた。尾張以來の舊臣と、中途以後の家來達との間、即ち加藤、福島一派と石田、小西一派との軋轢は說明する迄もなく舊臣の背後に北政所があり、新進の後楯には淀君があつたとの說にも首肯すべきものがある。たゞ賢大人と云はれた北政所一派が、淀君一派に對する私の感情から家康に買收された形になり、豐臣家の滅亡を導いた結果に對しては彼等は果して責任がなかつたゞらうか。

關ケ原の戰は戰爭そのものよりも、今日の政黨戰をより思はしめる。それは家康方でも三成方でも、一人でも有力な大名を味方につけることであつた。そして豐臣家の舊臣から見たなら、この戰を三成一存の野心の發現と片付けた方が都合がよかつたに相違ない。そして秀頼親子を戰亂の圏外に置いたことによつて、彼等の豐臣家に對する

此の戰が天下分け目のものであり、戰後[illegible]ぎなくなる結果を洞察し得なかつた豐臣家の舊臣たちの單純な心[illegible]眞實賞讃に値すべきものであらうか。

秀頼の將來に夙くから注目をした三成は、淀君との關係が親密であるべき筈であるのに、關ケ原の戰に淀君などの一派を味方にし得なかつたことは、どういふ譯であつたらうか。秀吉の生前にはその懐刀であつた三成も、武將が政治的に成功し過ぎたゝめに、多くの豐臣家の人々に憎まれたのである。老人雜話に「石田治部少輔太閤御存生の時、權柄を專らにする故に、人を讒すること多し、是故に諸大名恨有者少なからず、太閤御他界の明年に伏見にて、已に事起り、早や石田が館に押寄せ伐亡さんとて、今晩か明晩かと云程に有しを、東照宮和議に入りて、のたまふは、先左あらんことに非ず、治部を澤山に遣し置て、少も國政に參與させじとて、途中を護して澤山に遣す」とある。三成の反對者は秀吉の舊臣等である。政治家である家康は豐臣家の家來を巧みに引き寄せてゐる。そして關ケ原の戰に勝つた際には、島津、毛利の如き勢力ある大名を抑へつけたに拘らず、大阪方に對しては「是は治部少輔仕わざなり、秀頼御幼少故、無御存知候間、只此儘無別條可被置と御意被成候故」と川角太閤記にもかいて、その寛大ぶりを見せ、す[illegible]

―淀君を繞る人々（七）―

側には自から淀君一人にかぶさつてくるに從つて淀君の聲價の方はこの秀吉以後にあらはるべき筈である。然し關ヶ原に成功した家康が淀君、秀頼を相手としての野望はもう苦心を要する程のものでなくなつた。けれども家康が征夷大將軍に任ぜられ、名實共に政治上の唯一の權力者になつた翌々年即ち慶長十年方廣寺に於て催された豐國祭は京都をあげての大騷ぎであつた。歌舞全盛のこの時代に公卿も侍も町人も種柄の假裝の下に狂ひ踊つた。關東に家康が政治上の勢力者として控へてゐても、豐公の天下を統一した一代の豪奢ぶりの名殘りは平和後の日本、殊に近畿地方に發揮されたのであつた。殊に東山の大佛は京都の繁昌を期する目的であつたから、此の佛殿の前に豐臣祭の行はれたことも京都人としては然るべきである。桃山城も聚落第も、大阪城も豐公の遺物としてその過去を物語つてゐる。斯くの如く豐臣氏の潜勢力は未だ／＼到る處にある。そして家康は老年に、內大臣秀頼は成長して行く、今度は鳴くまで待たうといふやうな氣長も云つてゐられない。家康は段々と焦慮り出し、秀頼を強請して、神社佛閣の建築などをさせ、その財政を攪亂せしめやうと劃策し、遂に方廣寺が出來て、その供養といふ段取りになつて、例の國家安康の難題を持ちかけ、大阪方を窮地に陷れた。

慶長十九年に至り、時期は熟したとみてとり、方廣寺の鐘銘に難くせをつけ、大阪方を詰問する時に當つて、秀頼、淀君の名代としては片桐且元、大野治長、木村重成、織田有樂齋、大藏卿局などがあつたに過ぎない。當時淀君は既に四十の坂を越えてゐた。世のである。治長は淀君の親しい寵臣であるといふ風評が當時起つたけれども、その眞僞は明瞭でない。然しこの治長も淀君の寵を笠に着て、關東方、否な家康を一手に引受ける程の智者でも勢力家でもなかつた。片桐且元が大阪を代表して、國家安康の鐘銘事件の辯明に努めたけれども、家康はこの問題について、觸れたやうな觸れないやうな不得要領の態度をとり、大阪方を不安に陷れながら、一個人としての且元に對しては寧ろ恩を着せてゐる。福島正則の如きも關ヶ原の戰には中立はさせて置き家康のために働くまでに買收されてしまつた。且元も駿府から歸つた際には大阪城內から常に疑ひの目を以てみられてゐた。然しそれだからと云つて彼は家康方にもなりきれず曖昧模糊の中に茨木の城に退いてしまつた。このことに付て家康の意をうけてゐた本多上野介、板倉內膳正と二人から且元宛に書いた書簡のうちに

「一書申入候、仍大佛殿御事、大阪無二相違一茨木迄被二御立退一成候由、板倉伊賀守より被レ申候、其段申上候處に、一段神妙なる儀と被レ成二御意一、大形も無二御座一、御聚之儀共に御座候間、御滿足に可レ思召候。然者、最前大阪雜說有レ之由被二聞召一候付、大御所樣可レ被レ成二御意一候旨に御座候て」

とある。この手紙の日付は慶長十九年十月五日であり、家康は既に二十日に上洛しやうとした時であつた。且元の大阪[illegible]になつたのは家康の大阪[illegible]

めに逆意のあるものであると多くの人々から疑はれるやうになり淀君の如きは山林に隱遁せよと命じたと云はれてゐる。けれども大野治長の如きは且元の退去に付きその子信濃守をして益々逐らしめ、別宴さへ開いてゐる程であるから、何か何やら不得要領のうちに大阪から立去つたのである。そして且元は後に家康に對してその意を諜する趣きの手紙を送つてゐる。且元の忠、不忠の問題も從つて極めて曖昧たるを免れない。淀君は大阪城が圍まれた際に「我は信長の姪、淺井が娘なり、いづれも武將の譽なりと、誰かは知らざらん、我は女なりとも、所存は男に劣るまじ、自然の時は具足揃て、一方の大將にも成るべし、方々も此度の事なれば手柄を顯はし、名を後代に留めよと」（大阪物語）由々しく云つてゐるけれども、女の淺ましさは目に餘る敵を見てからは急に秀頼の身の上を案じ煩ひ、「黒白も分かぬ御有樣にて、ひたすらに御心弱り給ふにぞ、儚きも卑しきも子を思ふ道に迷ふとは思ひ知られて哀なり」（大阪物語）といふ有樣である。彼女は右大將の母としての誇りがあつても、それは境遇そのものであつて、彼女は決して烈婦、勇婦と云ふやうな型の人ではない。

且元の立場からすれば彼が不義の疑ひを蒙つたのは冤罪であり、たゞ秀頼等が事件の眞相を究めよ……引くやうなことはない。然し彼は家康に感謝しつゝ……れば、彼は兩端を持し、優柔不斷であり、大阪落城にも大した涙を流さなかつたと云ふ有樣であつて、戰國武士の如く無邪氣な單純な心の保持者ではなかつたらう。

この且元に對する淀君の態度を所敎史は「秀頼の母は聰明剛膽の女なれば、兩端を開くをも厭はず、公方の計を看破し、悉く之を行はしめず」と、家康の壓迫に堪へ切れなくなつた時であるから淀君にも、最早決心がついたのであらう。大阪物語の記載の如く淀君は母性愛に驅られい女性であつた。家康に誠意があつたなら彼女は關東に人質として赴き秀頼の安全に對して身を犧牲にすることを敢て辭さなかつたであらう。たゞ此の時の大阪方へ持ちかけた問題は明瞭なものでなくて徒らに大阪方を激怒せしむるに過ぎなかつた。であるから談判は破裂し冬の陣が起り、一旦和睦にならうとした際に大阪方から持ち出した條件のうちに

「秀頼御老母江戸へ越可申候、御諚次第にて候、又四國之被下候得、御城渡候はんと被申候、さりながら、御城へ入り候浪人共に、御扶持を被下候と被申候、尤も秀頼に御如才有之まじ

從に身分の低いものと[illegible]講和であつたが、一切の防禦を[illegible]といふことで、城の外濠を埋め、浪人の解放などの條件に治まつた。然し誠意のない關東方は內濠をも埋めて、どこまでも無據に、最後の戰端をぬいて夏の陣が始まつた。かうなれば、豐臣氏の運命が定き、その亡ぶることは最早時の問題である。たゞ、秀頼の妻は家康の孫女であつたから、流石冷靜の人も孫姬に對する愛情から秀頼母子の救命を計るであらうと城の內外共に一縷の望みを繋いだ。殆ど當てにならないこの望みに對して淀君は猶秀頼の餘命をつなぐことに全力を傾注してゐる。大阪物語に

「今は御母堂もしほれさせ給ひて、命さへ恙なくておはしまさば、縱ひ蝦夷が島にても兩御所の仰せの儘に從ひ給ひとありけれど」

といふ程に秀頼のためなら一命を失ふことすら辭さなかつたやうである。然し秀頼としても武士である以上、恥を知らざる筈はなく遂に切腹して果てた。彼は二十三歲の莟みの花であつた。大阪物語に秀頼の最後に絕望の聲を放つた淀君の言葉として

「われ太閤の妻となり、幸淺からず、世の人には左樣の事もなかりしに、前世の報深くして、二人の君を設けしが八幡太郞は三歲にて失せ給ふ。秀頼は神佛を深く賴み奉りし故にや、今迄恙なくおはしければ、一度天下の政道をも、執り行はせ奉りて見ばやとこそ、日頃思ひしに、世には神も佛も御座せぬかや、情なの兩御所や、恨めしの浪人共やと、掻き口說きければ」

といふ傳記で、[illegible]

逆に[illegible]愛に生きやうとした女性であつた。

[illegible]と云はれた北政所が家康と好意を結び、彼女の故舊の舊臣に最も親しかるべき尾張以來の舊臣たちが皆家康に好意をよせたことは果して何ういふわけか。家康方に味方した加藤、福島の兩家の江戶幕府に亡ぼされてしまつたことから見て、彼等は大阪城で亡びずに、その家名をつゞけ命を全うしたものと見らるべきであらうか。秀吉嫡嫡の妻であり、最後の愛を醍醐の花見に手向けられた、北政所が豐臣家の滅亡に念佛を稱へて命を全うしたことは果して幸福であつたらうか。淀君は秀頼守護の中心人物として大なる責任者でなければならなかつた。然し、三成に對する私情が、秀頼に對する忠心を篤くした豐臣家の舊臣たちの行爲は、その精神に於て豐臣家を忘れなかつたとしても、豐臣家の壯烈な最後に馳せ參じたものゝなかつたのを如何で辨じ得やう。諫めを用ゐられないで退き、秀頼の滅亡を眼前に見せつけられた且元の道德論に、どれだけの純眞が籠つてゐたゞらう。信長の姪と大言壯語した淀君は眼前に攻せ寄せる大軍を見て節度を失つた。彼女は細川忠興の妻のやうな烈婦傳中に入るべき女傑では勿論ない。彼女はその母と同じ、傾國の美を有し、秀吉の寵愛を一身に享け、秀吉の死後その位置が一層高められたのであるけれども、それは寧ろ環境の力であり、生得の德であつた。然も彼女は秀頼のためには、その高い位置を捨てる決心を常に抱いてゐた。

淀君に比べたなら家康の孫女である千姫は秀頼の妻として大阪の城內にはあつたけれども、彼女は戰國時代の所謂、人質であり、人格を無視された一女塊に過ぎなかつた。彼女は秀頼母子の救命の餌となつて、自己の家族をすて丶、命を全うすること丶なつたのであるが、その自己の救命者である坂崎出羽守を、憤死に導いたとさへ云はれてゐる。吉田御殿の婬魔と呪はれたことは彼女の貞節に對する考への稀薄であつた證據である。報知新聞主催の浮世繪展覽會に出品された、尾州家の「平八郎後繪姿」は彼女と若い本多平八郎との愛を畫いたものだと云はれてゐる。三ツ葵の衣服を着た少女の戀文を送る所などは、如何にも千姫を偲ばしめるものがある。勿論、この繪は彼女の眞の歷史を示したものではなく、當時浮名を流した人々を手本にした草紙を繪にあらはしたものに過ぎないだらう。大名の娘の露骨な戀慕は本朝二十四孝に於ける八重垣姫のやうに敵將にさへその貴い命を捧げやうとしてゐる。たゞ千姫にはどうしてもある意味のモダンガールの要素を具へてゐたと云つてよからう。

慶長三年秀吉の薨去の時は淀君は三十二歲の女盛りであつた。そして彼女が大野修理を愛したといふ當時の風說は必ずしも嘘とは限らないだらう。然も淀君の艶聞を傳へた相手こそ當時の[illegible]

「其比雜說に、淀殿名護屋山三郎と密通にて、秀頼は[illegible]

懇按、文祿元年三月廿六日、太閤出京名護屋へ赴き、秀頼は、其留守にて、同二年八月三日誕生、是は太閤故ありて、態と山三郎等の閨門へ出入することを、密に免し給ひ、淀君は淫婦故密通と云也」

面白い話ではあるが、秀吉が肥前名護屋へ淀君を伴つたことは事實で、この間に姙娠したから彼女を畿內に歸したのである。美しい淀君と美少年の山三郎と並べた所に小說的の面白味がある。同じく、武家閑談に

「秀次公の愛せられし不破萬作と山三郎、天下の美色也、浪人して伏見へ登り、父富饒故、奉公をかせがず、山左衞門と改め、衣類過奢を好み、風流の驚目、出雲の阿國と云、妓女になれて、歌舞伎と云事をおこし、淀君の右筆小野お通に談じ、淨瑠璃と云事を始め、人形をまはさしむ、牛若十二段と云事、お通か作にて、是であやつりの初なり」

美しい阿國と美少年の山三とを夫婦にして歌舞伎を始めたと云ふことも面白い、が然し、歌舞伎草紙は歷史であるといふことに疑ひを挾む文學者などのある如く、この說もどうやら草紙らしい。たゞ草紙が實在のヒーローを捉へて書いた時に史實と歷史との混同が生じてく

鎗仕鎗仕ハ鎗ケレド、那古屋山三ハ一ノ鎗と。この山三が小歌に歌はれ、更に踊りになると、彼れ自身が役者であるやうに傳へられた。骨董集に歌舞伎の始を引用し、北野に於て名護屋山左衛門、絲竹の所作を傳すとある。又たそれが日記に絲竹櫓三郎の名を記してゐる。こゝに山三郎より權三郎に轉じてきて、近松門左衛門の鑓の權三郎の話が作れてくる。

秀次の最後を彩つた不破萬作は西教史にまで、その最後の壯烈さを討の綺瑳を殘した傳説すらある。美しく生れ出たものは幸である。傳へられた。之に對して山三郎は阿國との艶聞を傳へられ、歌舞伎役者に迄、祭りあげられてゐる。強い萬作が赤つ面、優しい山三が白面で廓の鞘當ての二人が舞臺に上つたのが恐らく元祿以後のことであらう。そして雲と燕に象徴された衣服の對照にも、古代歌舞伎の面目は躍如としてゐる。史實の傳説的發展にも亦興味の津々たるものがあるではないか。淀君に傾國の美がなかつたなら、彼女を中心とする人々の活動は呆つけないものであり、佳人もその周圍に展開されなかつたらう。

豐臣家滅亡の大責任を淀君にきせることの誤つてゐることは繰り返して論ずるまでもない。十七歳の時、北の庄の天守に火藥を裝置して悲壯な最後を遂げた美しい母を後に去つた彼女は、また難攻不落の大阪城の櫓庫にわが子の愛を叫びながら最後の輝きを亡くした。夕空に

沈みゆく大阪城のやうに！（昭和[illegible]年七月二十[illegible]日）



人民の中に行く

神近市子

二ケ月ほど前であつた。K――はあるところに無政府派の演説會を聞きに出かけた。

政府のかうした集會に對する態度に、よほど手心が加へられ出したといふ噂があつた頃であつた。無論無事に散會するものといふ考へから別に警戒もせず、聽衆までが心なしか腰を落ちつけ熱心に演說に聞き入つてゐるやうに感じられ、彼が二重に心を落ちつけやうとする矢先きであつた。どこからとなく一種のビラが會場一體にふり撒かれた。演說會は無論解散になつた。

K――は、やゝ後れて廊下に出た。

まだ小競合ひが廊下の

證をピタリとつけて揉み合つた。

この密集團の中で揉まれてゐたK――は、ふと誰とも知らず何かを自分の右手につかませた者があることに氣づいた。

『あなたは、K――さんでせう。』

小さた聲が、彼の耳許でさゝやいた。

『秘密書類です。預つて歸つて下さい。僕はあの出口が危險です。』

四五間先きには、警官が網の口をしめたやうな形に並んでゐて、『赤い』と自分達が睨んだ者を出て行く聽衆の中から引拔いてゐた。

K――には、自分の背後

手を、しつかりと力を入れて握つた。そして記録を外套の内ポケットに注意深くしまつた。

『あなたの名は？』

K——の頭は、四十度にどより轉廻させることは出來なかつた。

『名はい〻です。折を見てとりに行きます』

密集隊が、何かのハヅミを喰つてゆれた。この時漸やく背後を振り返る機會をつかんだK——は、丁度同じ瞬間に自分の背後をはなれて行く一人の男を認めた。鳥打帽とロイド眼鏡の下で、尖つた青い顔がK——の視線を感じて微笑した。鼠色のオーバを見た丈けで、彼の視覺は周圍の雑沓に混亂してしまつた。

K——は、持つて歸つた書類を電燈の下で披いた。一枚々々と讀んで行くうちに、何時か彼の表情は石のやうに堅く、唇は彼の心中の極度の緊張を語つて引釣れた。又、彼は屢々深く吐息をして眼を閉ぢた。

彼の前には、微笑を含んだロイド眼鏡の顏が幾度となく現はれては消え、消えては現はれた。——それほどに、彼はその未知の友に好意と關心とを感じた。

翌日から、彼は待つた。

一週間。

十日。

二十日。

一ケ月。

二ケ月。

朗らかな初夏の朝が來た。

新聞を手にしたK——は、ロイド眼鏡の男が、もう恐らくは永久に預けた品物を請求する爲めに自分を訪ねることはないであらうといふ確信をつかまされた。

『おい、燒かう！』

彼は傍らの妻を顧みた。ロイド眼鏡の男と自分との間に置かれた距離が、K——を失望せしめ、又憂鬱にした。

『危險だ！』

『さう、燒く！』

彼の妻は、恐しく尖つた夫の神經により多くの恐怖を感じた。

『けれど、これだけは、置いても差支へないでせう。』

K——の妻は、部厚な假綴ぢのノートをとり上げた。

作者は、K——の妻君の手に殘されてゐるこのノートを一見した時、少なからず創作慾を刺戟された。この一小篇は、その刺戟によつて編まれたものである。

×月×日

今日の二時頃、ヤツと會計委員から先月分の給料が渡された。

十圓五十錢也。

先月野田に寄附を出した時二圓前借したのと、選擧で寄附を頭割で徴發して差引かれたからだ。でも、十圓札が拜めるなんて、ほんとにタマ々々のことだ。

心なしか、今日は皆が元氣だ。

食料にありつけるほど、俺達に幸福なことはないのだ。その食料の大部分を奪つて、俺達を窮乏と飢餓とに曝して置くのは誰だ。

歸りに××君と二人で、三十五錢の牛飯で夕飯を喰つた。そこを出て那の店でコーヒーを一杯づつのんで別れた。××君は十二圓五十錢貰つたと云つて、自分で俺の分迄拂つてしまつた。

×月×日

二ケ月散髮をしないでゐたから、今日は先づ出がけに床屋に行つた。それから欲しい本を買つて置くことにした。

×社會民主黨の農村綱領

×轉換期の經濟政策

×マツセンストライキ

しめて二圓三十五錢也。あとを數へて見たら、七圓八十錢あつた。

これでは今月も月給までは

×月×日

今日は久し振りで早く手が拔けた。昨日彼女に逢はなかつたから、どうかと思つて電話をかけて見た。丁度時間の都合がよくて一緒になれた。

彼女は少しやせたが、しかし栗鼠のやうに元氣だつた。來月開く婦人部大會の準備委員會で會合攻めにあつてへこたれたのだといふ。

二人で、『みよしの』に入つてお汁粉をたべた。それから電車通りをブラ〳〵と公園に入つて見た。

園丁が、花畑で忙しさうに働いてゐた。

めつきり暖かくなつた故か、公園を散歩する人が馬鹿に殖えた。

芝生のあるところに來たら、そこに自動車をのりすてゝ食前のレエジュアを樂しんでゐる一家族があつた。スマートな揃ひの洋服を來た八つに九つ位な女の兒が、同年位な身なりの整つた男の子と繩とびをして遊んでゐた。

女の子供達によく似た母親は、姉妹かと思はれる位若くて美しい女だつた。父親は、少しはなれたベンチで外國の雜誌を見てゐた。

●この一家に行合つた時、俺は何故かハツとした。この一團はそれほどにも美と教養とに惠まれてゐて、斷然あたりの散歩者を拔いてゐ

來て止つた。

俺は、彼女の心を往來してゐる懸念が何であるかよく分るやうな氣がした。俺は彼女を見てゐることは、彼女に對して同情のないやり方であるやうに考へた。

俺は、彼女が立止つたのを氣付かなかつた振りをして、先きに彼女を歩み拔けて來てしまつた。

すぐに彼女が追ついて來た。

果して、彼女は見るからに憂欝で暗い顏を、焦茶のオーバの上にのつけて來る！　俺は彼女を散歩にさそつたことを後悔しかけた……

『瀬田さんの子供は、牛乳代がなくて死んだのですつてね。』

貧民窟に生活に喘ぐ寡婦の手から、子供を奪つた死だ。死んだ子供を何日となく抱いて、失心したやうになつてゐる僚友の寡婦を發見した日から、彼女の連想はともするとそこに落ちついてしまう。

『私はあれから、美しい着物を着た幸福さうな子供に逢うのが心から恐しくなつた。理窟ではなくて、あの小さな愛らしい手が、瀬田さんの子供のやせこけた手から牛乳瓶を奪つてゐるやうな幻影が浮んで來て、すぐに自分がかつとなりさうなので。』

羨望に幾分の懊惱と悔ひとを交へた彼女の感情を想像して、獨り羞ぢ獨り怖れしてゐた俺は何だ。

明るい清々しい靈魂の殺戮者！

俺が自分の頭に往來してゐたことを告白すると、彼女は寧ろ幾分の明るみを認めて顏に現はして、

『馬鹿ね、あなたは。私達、×××でないこと。』

と、云つた。

さうだ！　俺達は×××だ。だから、俺達には、あんな幸福を享けるやうな運命の幸福はないのだ。

俺達にあるのは、共働、追放、別離、牢獄。その先きに何が待つてゐるかは、俺達は知らない。

俺達が知つてゐることは、俺達の愛と信念とは、權力も死も××も奪ふことは出來ないといふことだ。人類が俺達の死屍を越えて榮えやうとする意志を、俺達に示してゐるといふことだ。そして俺達の愛が、この人類の意志を感知する毎に强められて行くといふことだ——

『ちよつと、ちよつと！』

俺達は、何時か公園を拔けて交叉點の方に歩いてゐた。

『落選議員がお歸りだわ。ほら、あれH——さんでせう。』

なるほど、H——さんだ。

××君の喜捨である中折れを、やゝ阿彌陀にずらして、これも選擧地に出かける時に奉加帳を廻して柳原で仕入れたオーバアを一着に及んで、その上に兩手は荷物の二つの小山だ。

『H——さん、お歸りですか？』

と、聲をかけると、あのキヨロリととび出た眼をグルグル廻し乍ら、一つの方の小山を地べたにころがして××君の喜捨に手をかけた

ものだ。

「やあ、到頭落選しましたよ。」

地べたのバスケットと風呂敷包みとを丹念にひろひ上げてゐた彼女が、タスリと無遠慮に鼻を鳴らした。

「H――さん、豫定の落選でせう？」

「や、それはさうです。」

いくぶん、慌て氣味だつた。

「なら、何も珍しいことでもないわね。」

H――氏は、彼女に荷物を持たせることをひどく恐縮する割に、彼女の云つたことを理解はしてゐなかつた。どこかに認識不足のところがあつて、「落選」がこの人をひどく感傷的にした痕がある。

俺は、この感傷を拂ひ落すことの急務を感じた。

「B――君も、昨日青森から引上げて來ましたよ。」

「あゝ、B――君。さうですか、逢ひましたか。」

「逢ひました。」

「元氣ですか。」

「元氣。東京を出かける時より五百目以上も體重が殖へたと云つてゐました。」

「やはりひどかつたのでせうな。」

「しかし、それにしても成績は仲々よかつ

「さうです。大分前景氣がよくて、運動員をつれて行かれる途に

も當選しさうで、内心ヒヤヽヽとしてゐたものださうです。」

「内心ヒヤヽヽですか。」

H――さんはさういふと、先きに立つてゐた彼女が何事かあつたかと足を止めたほど大きな聲を出して笑つたが、そのはずみに何時か東海道を大事さうに抱へて來た、例の感傷をどこかに吐き出してしまつた。

「いや、實に多くのいゝ經驗を獲得しましたよ。それに地盤擁護の事務は、完全にはたして來ました。」

遲い認識が、いかにもこの人の人柄にはまつてゐて、俺には笑へない。

俺は、ホッとした。

門のところまで來ると、H――さんに荷物を引渡して別れて歸らうとする彼女を引止めて、俺も久し振りでメ本部をのぞいて行くことにした。

「のん父さん」式のH――さんの都入りは、若い人々の人氣を集めてしまつた。

ひらいた眼をグル／＼と廻し乍ら窮屈さうに立つてゐる。とろけるやうな幸福の感情が、一時的にこの人に行動することを忘れさせてしまつた。

「だいたい、H――さん、今日は少しばかり締りがなさすぎる。」

一隅に落ついてゐる彼女は、父に對するやうな感情をもつて見てゐるH――さんが脱線しさうなのを、子がする如くに心配してゐるのだ。

しかし彼女の若さは、少しばかりの興奮が何時でもH――さんをこの通りに他愛なくしてしまうこの善良さを買うことができない――

誰かが動議を出して、H――さんの歡迎茶話會を開くことになつて、帽子が廻つた。

今日は××も珍らしく上機嫌だ。帽子が前に來ると紙入れから五圓札を一枚丁寧にとり出してそれを態々二つに折つて帽子に投入れた。

ウワーツ！ といふ喚聲だ。誰かが壽司屋にとんだ。

×月×日

今朝は、二時間ばかり早く出た。

代表者會議といふ名で、全國の主なオルガナイザーが召集されたのが三日の後に迫つたので、今日あたりボツ／＼着く人があらうといふ見込みからだ。

果して、NにKにTが正午までについた。午後は、MもWもFもついた。皆、東京につくとすぐその足で本部に來た譯だ。

此前の代表者會議があつた時から、もう半年立つてゐるのだ。皆本部からオルガナイザアとして地方に出され、ドン／＼立派な成績をあげてゐる連中だから、さうでもないのかと思うと、仲々どうして東京は戀しいものらしい。指令が來て態々東京に行かれるとなると、子供が遠足を樂しむやうに發つまで四五日は夜もよく眠られないといふことだ。彼等が本部の粗末な椅子にユツクリと腰を下ろして缺け茶碗でまづい番茶をすゝりながら、久し振りで自分の家に歸りついたものゝ安心と好奇心とを見せてどんなものでも興味をもつて觀察してゐるのを見守つてゐるのは、俺れの樂しい休息だ。こんな時に、人類の再生についての俺の信仰が、泉のやうに俺の心に湧いて來て俺の生活を暖ためる。

「せめて歸つて來るオルガナイザアの爲めに、彈機のしやんとした椅子を二十も揃へたかつたな。」

俺の隣りのU――君が、フトから云ひ出した。

「おい、笑はれるよ。」

俺が注意したけれど遲かつた。

F――の隼のやうな眼が皮肉に光つた。

「止して貰はうぜ。本部に皮張りか何んかの椅子でも持込まれたら、座り心地がよくなつて誰も尻を上げて山奥のオルガナイザアになんか行く者はなくなるぜ。本部がこの位ゐ汚なくて俺達のホームシツクが

いゝ位緩和されるのだ、なあ、N――君。」

學生上りのU――君が、一遍にペチャンコにしよげてしまつた。

「F――君、」

俺がU――君に注意したのを聞いてゐたM――が、立上つた。そしてポケットから問題になつてゐる代表者會議にかける議案の草案を出して私語し始めた。

M――が出て行つてくれたからよかつた。でなかつたら、F――があれ位で止める筈がないからだ。

F――は、インテリゲンチヤとセンチメンタリズムが大嫌ひなのだ。F――によると、インテリゲンチヤは折角社會的不安といふ大波に揺られて階級矛盾といふ本殿に辿りつき乍ら、センチメンタリズムのお賽錢だけ拂つて歸つて行つてしまふ。それだから階級的に沿つて最も救はれない存在だといふのだ。

この寓話は、可なり支持してゐる人があるやうだ。

實際F――がセンチメンタルを嫌ふことは本能的でさへある。

「あれをやられると、俺は半日食慾をさらはれてしまふ」

と、云つてゐるが、若い時救世軍にゐたとかいふことだから、その頃のことで何か思ひ出すことでもあるのかも知れない。

半日二階に上つて謄寫版刷りを手傳つた。夕方歸らうと思つて下り

と、踵をかけるとヒョイと振り返つて、

「達者か」

と云つた。

「太つたぜ」

と云つた。

「ウン、狩太川の生鮭をたらふく喰つてゐるからな」

と云つた。

俺は去年の春、秘密なレポをもつてR――のところに出かけた時發見した雪の北海道のことを思ひ出してゐた。

東京ではブルジョアーが喰つてゐない飛切りの燻製の鮭や、おいしいキヤベツの鹽漬けが豐富にあつて、それでR――と二人で燒酎をのんだ。狩太川で氷を割つて釣つたのだといふ生鮭を組合の幹部が持つて來て、刺身だのフライだのにしてくれた。

「あいつは甘味しかつたな。」

俺がそんなことを考へ乍ら外套を着込んでゐると、R――が切り上げてやつて來た。

「おい、行かうぜ。」

「ああ、しかし……

も耐へるんだ。今夜は君と外氣を喰ひたいんだ。』

俺達は露月町の通りまで出て、前にR――と一緒によく來たことのあるめし屋に行つた。

『おや、R――さんですか。お珍らしいな。』

めし屋の親爺が、注文のビールの栓をぬき乍ら顔馴染のR――に挨拶をした。

『父つあん、達者かね。お兼ちゃんはどうしたい？』

『兼ちゃんですか、とう〳〵玉の井に賣られましたよ。』

『玉の井か。何ていふ家だい？』

『緑屋とかいつて、天神樣の方によつた橋の袂だとか云つてゐましたよ。』

『緑屋か。一つ顔を見に行つてやるかな。』

R――は、何の感情も含ませないで云つた。

R――の聲を聞いて、婆さんまでが顔を出した。

『R――さん、行つておやんなさい。ほんとにあなたは罪だよ。兼ちゃんをあんなに想はせて置いてほつといたりして。』

R――も、お兼ちゃんを想つてゐなかつたことはないのだ。

『婆さん、さう譏しるなよ。まだ俺達やお兼ちゃん達の時世ではねえんだ。俺達の時世になつたら玉の井に自動車で迎ひに行つてやらあ、なあ、C――君。さあ、もう一杯いかう！』

R――は、ビールを俺のコップについだ。

彼は淋しいのだ。

俺は、彼の氣持がよく分るやうな氣がする。彼の『義務』が次々に彼を呼んでゐる。義務が重くなればなるほど、彼は生活上で孤獨になつて行く。

だまつて、まづさうにビールをのんでゐる彼を見てゐると、うづくやうな親愛の感情が俺の心には湧いて來る。

『君、勉強はもう大概すんだんだらう。』

俺が自分の物思ひに落ち込んでしまつてゐると、不圖R――が口を切つた。彼の顔には何かを思詰めた感情がたゞよつてゐた。

『あゝ、すんだ。大體眼をつけてゐたものは荒まし讀んでしまつた。あとは働き乍らボツ〳〵讀むんだ。』

『うむ。なら都合がいゝ。ぜひ君を要するところがあるんだ。來ないか。』

R――は、ビールのコップを置いた。

彼は自分がオルガナイザアとしてやられてゐる鐵山が不景氣で、最近整理の噂が立つて組合が一種の危機に立つてゐるところを無理に出て來たのは、俺を自分の共働者にして北海道に誘つて行かうといふことがかねてから二重の目的として豫定の中に入れてあつて、それを思ひ切ることが彼にはどうしても出來なかつたからだといふのだ。そして俺が承諾さへすれば彼は明日にでも本部に出た時その事について了解を得て置いて、鐵山の模樣次第では明日の夕方にでも北海道に歸つて

行からといふ腹なのだ。
R——の友情の前に俺には何をいふ資格があらう。俺は無條件で彼の希望に訊くより外はないのだ。
『よし、行かう。俺もそろ〳〵どこかに出て見たいと考へてゐたところだ。』
『來てくれるか、安心した。』
R——は、力を入れて俺の手を握つた。
『俺は、こんなに嬉しいことはない。』
『行先はどこだ？』
『K——だ。』
『組合は？』
『自由勞働者だ。荷揚げ人足だ。』
『よし、足場はできてるな。』
『できてる。大體お前が來るだらうと思つたから、俺がポツ〳〵手入れをして置いたんだ。』
『有難う。俺はほんとにどこまでもお前に苦勞をかけるな。』
俺はほんとに染々と、この俺の先輩であり盟友であり、ある意味で肉親以上の肉親である同志の顔を眺めた。そして俺をこの男に偶然に引合はす役割を努めてくれた古い友人のA——を思ひ起さずには居られなかつた。

と、その明快な批判とに心を引かれた。そし
に知ると、戀の蹉跌から自暴自棄に近い生活に陷つて、東京の街を
畫の妖怪のやうにフラ〳〵と目當てもなく歩いてゐた自分の生活が恥かしくなつて來た。
新しい人生の理想が、私の心身を新しく生れ代はらしてくれた。
『俺の生活や戀愛や、全く明日の人類とは何の係はりも持たない行詰まりの中にゐたんだな。』
俺はとう〳〵、さう告白した。
『甚しい時勢後れだよ。そいつを君の小ブルジョア性ぐるみ、サッパリと捨てなくちや。』
頭から水をかけられたやうであつた。
俺はそれでブルジョアの女からスッカリ覺めた。
R——は俺を古い戀愛觀念から離脱させてくれた。彼女が俺に古い戀人を裸に逆立ちにして見せてくれた。彼女を知つた時、俺は今迄俺が知つて來た女は、女の半分でしかなかつたことを知つた。從つて俺は『女』を半ばしか愛してはゐなかつたことを知つた。
『私、あなたが昔ブルジョアの女を死ぬほど思つてたと思ふだけで、侮辱を感じるわ。』
彼女は、辱に顔を心持ち赤らめて彼女の癖である左の拇指の爪を咬

はないのだ……」

「彼女は？」

「達者だ。昨日逢つた。」

「何だか君達までが戀愛感情の不足者になりはしないかつて、心配してゐる人があるやうだよ。」

「大丈夫だ。彼女も勉強してゐる。」

しかし俺は、昨日も逢ひは逢つたものの、夕飯を一緒に喰べて少し散歩すると別れて來てしまつたことを思ひ起して居た。單純なキッス・でさへ、俺達は何週間忘れて來てしまつてゐるだらう。

「K――に來ると、當分は彼女にも逢へないな。」

「でも、お粂ちやんのやうに彼女を玉の井に賣る者はゐないからな。」

R――は大聲を擧げて笑つた。しかし、すぐ淋しさうな顏をした。

俺は惡いことを云つてしまつたと思つた。

×月×日

まだ床の中にゐるうちに、彼女の聲が聞へた。慌てゝ階段をのぞいて見ると、何かの紙包みをさげて元氣に彼女が上つて來る。

「R――さんが泊つてゐるんでせう？」

「泊つてる。」

「昨日本部で聞いたから。」

彼女は昨日俺に逢はうと思つて電話をかけたのださうだ。そして俺がR――と二人で出かけたことを聞いたのだといふ。

「なら、すぐこつちにやつて來ればいゝのに。」

「さう思つたのよ。それで出かけやうとしてゐるところを、應援演說に引張り出されたのよ。」

「本所？」

「さう。」

そして彼女は、今朝仲間のところを起きぬけにとび出して眞直ぐこつちに來たのであつた。

「R――さんに早く逢ひたいと思つて。」

R――もよろこんだ。

彼がよろこぶと、煙草の煙をパッ、パッと吐く。

「昨日も君の噂をしてゐたんだ。」

「有難う。私それを知つてたから今朝はおいしい御飯を造へて上げやうと思つて、神田で仕入れて來たのよ。」

紙包みの中からは、コーヒーにパンにバタにハムの罐詰めに果物がころがり出した。

「ブラボオー！」

R――がまづ歡聲を上げた。

俺達が部屋を片づけると、彼女はガスをつけて湯を沸かし始めた。

そして俺が顏を洗つて町角まで新聞を買ひに出て歸つて來ると、[illegible]上にハムサンドキッチと果物のサラダが[illegible]

んだ。人生は再演を許されないドラマ
ては入れないんだ。』

R——が辛さをとり做すやうに云つた。そして二杯目のコーヒーが何時か冷たくなつてゐるのを、ズウ〳〵音をたてゝ啜つた。

俺達は疊の上に寢ころんで、日光浴をし乍らあれこれと取止めもない話に時を過した。

R——が煙草を買ひに出て行つた時、彼女はだまつて俺を横から抱いた。

『東京にゐても、私達長いこと逢はないことがあつたわ。』

俺の心にも、彼女戀しさが泉のやうに湧いて來た。

俺はだまつて彼女を胸に抱きしめた。長い陶酔するやうなキスが續いた。

『今夜、こつちに來てもいゝんでせう？』

俺はもう一度彼女に息づまるやうなキスを與へた。

×月×日

朝、彼女が起き出して湯をわかしてゐる間に、俺は朝刊を買ひに出かけて歸つて來ると、近所にゐるY——がやつて來て彼女と話してゐた。

暖かいコーヒーが、おいしかつた。

彼女は俺がK——に行くことを聞くと、一寸淋しさうな顔をした。

『一緒に來ない？』

俺は彼女が少しも俺の足手纏ひにはならないことを知つてゐる。彼女は乾度K——に來ても自分で自分の組合を造つて、自分で活動する場所を開拓するだらう。彼女はそんな質の女だ。

『まあ、よすわ。』

彼女は、きつぱり云つた。

『その代り、私も△△に行くわ。』

『△△に？』

『さうよ。あすこJ——さんが行つてゐるんです。けれどJ——さんはきつと少し疲れたんだわ。東京に歸つて少し休みたいからつて代りをよこしてくれつていふ手紙が、私のところに來たのよ。私は自分が名指されてゐることはよく知つてゐたけれど、決心つかないでゐたの。あなたがK——に行くと決まれば、私、心がきまつた。今日にもJ——さんに手紙を書いて置かう。』

△△は、日本でも指折りの大きな、紡績工場のある町だ。こゝで下ろされてゐる資本は、日本の纖維業に下ろされてゐる資本の二十パーセントからを占めてゐるのだ。彼女にとつては、決して役不足なことはない筈だ。

——僕らよくは分らないが、來賓席のF——君の演説が喧騒したらしい。中止！を喰つたもので F——君が怒つて何かゞなつたんだ。それで解散になつたのを、そいつを少し揉んだんだ。』

『君は行かなかつたの。』

『あゝ、印刷の方の部會に出てゐて行かれなかつたんだ。』

俺は氣が急いて來た。

『すぐに行つて見やう。』

三人でコーヒーを飲むと、俺はジヤケツのボタンをつけ直してゐる彼女をせき立てた。

本部に行つて見ると、昨夜から活動しつゞけで碌に眠る間がなかつたんだと云つて、××君が赤い充血した眼をして電話をかけてゐた。

俺達は、すぐに手分けをして活動した。そして漸く夕方までに、明日は歸してくれるといふ言質をブルジヨワの×××からむしりとつた。

これで今日の準備會はお流れになつた。俺は今日から校正が出るので印刷屋の方に廻ることになつた。

×月×日。

昨夜は校正をすますと一寸時間があつたから、××君に頼まれた用事でD——さんのところによつて見た。

D——さんは留守で、マダムが勉強最中だつた。

『これを、』

と、マダムは獨逸語の「共產黨宣言」の讀みさしを俺に見せた。

『やつと半分讀みました。もうどうやら獨逸語で分るから、これからは何もかも原書でやつつけやうと思うんです。』

俺は五十に手がとゞかうとするこのマダムが、一昨年あたりから急に新しいイデオロギーを獲得しやうといふ情熱からマルクス主義に關するものを讀み出して、とうとう獨逸語までものにしてしまつた根氣にはまゐつてしまつた、マダムもすぐ好いマルキストになるだらう。

『書齋派から何時實行派には進出するのです。』

『さあ、それには何時といふ確信は持てません。』

『家庭が邪魔になるんですか。』

『えゝ、それは一つの理由には相違ないんですが、しかし單純にそれだけでもないんですよ。』

マダムは、自分が働く持場についてまだ充分な確信が持てないのであらう。例へば犧牲者の救援事業とか消費組合とかいふ種類の半ば日常の平和的鬪爭が自分達の持つべき範圍ではなからうかといふ意見を何時か洩してゐたことがあつた。

昨夕D——さんの歸りがおそくて到頭逢へなかつたので、今朝出がけにもう一度よつて見た。××君に依賴された原稿は、出來てゐた。

D——さんは、どこかに震災の時外國から救濟品として送つて來たブランデーをウンととり込んでゐる家があつて、そこの不孝な息子が

昨日歸りに△△社に寄つて見たら、仕事があるといふので、二三日つゞけて看板描きの手間取りをすることにした。七時頃迄かゝつて七圓五十錢分描いた。最後の分の仕上げをやつてゐると、彼女の聲がする。

『御苦勞樣ね。』

『なんだ、來てゐたのか。何時？』

『もう一寸前よ。』

『よし、もう濟むところだから待つて。』

仕上げが濟むと彼女と二人して△△社に行つて金を貰つた。

『今日は夕飯を何でもおごる。』

俺は仕事着の上にオーバを引かけて彼女と並んで歩いた。秋頃から見ると、彼女は幾分やせて、代りに智的な深味を顏に見せ始めた。

何時ものところに行つて、鰻の上辨を喰べて側のカフエーでコーヒーを一杯づつ飲んで歸つて來た。

『そして、あなたはK——には何時行くことになるの？』

俺はR——が協議會をすまして歸途にK——に寄つて、そこから決定的なことは云つてよこすことになつてゐるが、種々の關係からK——が澁かそろ／＼賑はつて來る四月の半ば頃にならうといふ見込みを語つた。

『四月？ おきね。』

『私？ 私もその頃にして貰ひたいものだ

結局彼女は△△に行くことは決定して、彼女の同志は彼女が行

をすぐにも期待して待つてゐるのだが、彼女はなるだけ俺と前後して東京をはなれたい氣持でゐるものらしい。

『田舍に行くと困るんでせう。私貯金をあなたと半分づつ持つて行かうと思ふの。』

五年間、彼女は印度人の商館でタイプライタアを叩いて貰つたうちから二百圓を積んでゐたのであつた。そして田舍に出かけて行くオルガナイザアが、薄給の上に不慣れな土地で何時も經濟的に可なり苦しむのをよく聞いて知つてゐる彼女に、俺にその半分を持たせやうといふのだ。

俺は彼女を膝に抱き上げた。俺は何か常識的な感激の言葉が、自分の唇を割つて洩れさうなのを恐れたのだ。

俺は、彼女が薄給の中から二百圓を積んだその理由の眞中に、俺自身がゐることを知つてゐる。彼女はそれを俺に二人で營む一種の生活樣式を始むる時の費用に積んで來たのだ。

俺は彼女がこれまでになく懷かしく離れがたくなつて來た。

『別れて暮すことは淋しいけれど、俺達が忍んで暮す三年が、人類の未來に與へる××××を築く一つの礎石になるのだ。』

『えゝさうよ。それに私達は×××ですもの。』

彼女の割に冷靜な、俺の混惑を少しも氣付かないこの言葉が、俺を救つた。

さうだ。×××は俺達には生命以上のものだ。×××が俺達を要してゐる以上、俺達は戀愛に遊んでは居られないのだ。俺は何時の間に俺の固い信念を失つてゐたのだらう?!

行かう! 俺の仕事がまつてゐるところに俺はどこへでも行かう。その代り、今度東京に歸つたらどんな犠牲を拂つても一緒に生活しやう。

俺は同志に對する僅かな見榮から、彼女と離れ〴〵に暮して來た過去を悔んだ。

『ブラボオ! 到頭!』

彼女は俺の決心を聞くと、歡喜して俺の膝の上に躍つた。

俺が彼女のいたづらな小さな脣の媚態に惱まされて、俺の脣をそれに近づけやうとすると、彼女はそれをすばやく交して逃げた。

俺は焦立つて次第に狂暴になつて來た。彼女を求むる感情が、嵐が平野を這ふやうに俺の全身を包んで來るのを俺は感じた。



四六

父よ悲む勿れ（五）

麻生久

母親が暗い心を抱きながら、娘の室に近ひに來た時には、多榮子は朝飯も食べずに、蒼白な顏をして、凝つと机の前に坐つてゐた。彼女は、神經が昂奮して、昨夜も殆んど一睡もしなかつた。とろ〳〵としたかと思へば、種々雜多な夢を見て、直ぐ眼がさめた。

彼女は、客間の方に、話し聲のする間、凝つと蒲團を着て寢てゐた。彼女の耳は、非常に鋭どく物音や話聲を聞いた。玄關の方で聲がしてから、彼女は寢床から離れた。彼女はその聲で、直覺的に定雄が歸つて去つたのを知つたのである。けれ共、彼女の不安は刻々に增して行つた。それは、軈て、父が此事を知る時刻が近づいて來たと思つたからである。彼女は、その時を、恰かも死刑囚が斷頭臺にのぼせられるのを待つ樣な氣持で、自分の室の障子の開けられるのを待つてゐた。

母親は、障子を開けて、机の前に坐つてゐる悄然とした娘の姿を見ると、何となく胸がいつぱいになるやうな氣がして、ひとりでに淚が兩眼からにじみ出る樣に思はれた。

『まあお前は、火もない處にそんなにして、もう御飯は食べたのかい』

『いゝえお母さん。私少しも食べたくないんですもの』

彼女は、母親の優しい愛に滿ちた聲を聞くと、何か知ら悲しい氣持に襲はれながら、母親の方を眺めやつた。

母親は室に這入つて來て、娘の傍に坐ると、娘の兩眼が赤く血走つてゐるのを見て氣遣はしげに云つた。

『まあ、お前の眼はどうしたのだえ。眞赤に血走つて』

けれ共、さう云ふ母親の顏は、長い間の何やかやの心配で、ひどく憔悴して、其兩眼は急に落ち窪んだ樣に思はれた。多榮子は、母の樣

子を見ると、思はず「まあ、お母さんは」と云ひ掛けやうとしたが、それでも堪へて、何も云はなかつた。

母親は憂鬱な聲で口を切つた。

「お父さんが、お前を今書齋にお呼びなのだよ。叔父さんからお父さんにお前の事をお話ししたところが、お父さんは大變にお怒りで、お母さんも今、さん〱叱られたところなんだよ。お父さんにもほんとに御氣の毒で、お父さんがお怒りになるのも決して無理はないのだからねえ。お母さんは、いつでもお前達の味方で、お前たちさへ幸福であつてお呉れなら、お母さんはどんなになつてもかまはないけれど、兄さんもあんなにおなりだのに、又お前までもそんなにおなりでは、お父さんもあんまり御氣の毒でねえ……」

激しくさう云つた母親の眼には、いつの間にか涙がにじんでゐた。凝つと齒を食ひしばるやうにして、母の言葉を聞いてゐた多榮子の眼からも、大きな涙の粒がほろ〱とこぼれ落ちて、彼女の青白い頬を傳つた。彼女は思はず、

「お母さん……」

と、云つて机の上に俯伏して仕舞つた。

多榮子が、母親の後について書齋に這入つて行つた時には、室の中は、陰欝で不安な空氣に閉されて、父親も叔父も、默りこくつて暗い顔をしてゐた。

父親は、多榮子が室の中に這入つて來るのを見ると、何とも云へない不愉快な顔をして、じろりと娘の方を見遣つた。彼女は、一寸頭を下げてから、默つて母親の傍に立つた儘、俯向いた。

すると、直ぐに、非常に不機嫌な父の聲が、彼女の耳もとに響いた。

「多榮！」

彼女は、その聲と一緒に、心持顔をあげて父親の顔を眺めた。其の二つの眼は、激しい怒りに燃えて彼女の方を睨みつけてゐた。彼女は、何とはなしに恐怖に襲はれて、直ぐに眼を伏した。すると、第二の聲が激しく彼女の耳に響いた。

「俺の前で、お前の考へてゐる事を云つて見い。お前は、叔父さんやお母さんの前で、氣儘放題な事を云つたさうだが、お父さんの前で、も一度その通りな事を云つて見い。お前にも立派な考へがあるさうだが、どんな立派な考へがあるのか云つて見い。お父さんがよく聞いてやる」

四七

多榮子は、父親の締めつける様な言葉を聞いてゐる間に、自分の心が、段々痺れて行くのを感じた。彼女は全身を、ぶる〱顫はせながら、齒を食ひしばつて俯向きながら默つてゐた。すると又、締めつける様な父の聲が彼女の耳に迫つた。

「何故默つてるのか。お前も相當の學問をしてゐるのだ。お父さんの前で云へる事と云へん事位ゐな區別は分つてる筈だ。云へんのが當然

だ。

親の事も、家の事も考へん樣な奴は、犬畜生にも劣つてる。お前の兄を見い。大學まで親のお蔭で卒業しながら、する事もあらうに、親に弓を引く樣な事をしをつて、監獄にまでぶち込まれた。昔なら手打になつてゐるのだから監獄にぶち込まれる位ゐは當然ぢや。あんな奴が生きてゐるから、世の中が騷がしくなるんだ。俺にはあんな奴を生かしてをく今の政府の氣が知れん。俺はいくら自分の子供でも、未だ武士の血が通つとるから、あ奴が死刑になつても可哀さうだとは思はん。あんな奴は殺されて仕舞つた方が國家のためだ。勞働者を煽動して騷動を起すやうな奴は、今に日本を亡ぼして仕舞ふ奴だ。俺が政府の役人だつたら、あんな奴は片つ端から縛り上げてやるのだ。その方が社會のためにも、國家のためにも幸福ぢや。』

多榮子は、父親の憎惡に燃えるやうな言葉を聞いてゐる間に、怯えた心がだんだん強い反抗的な氣持に變つて、皮肉な程の冷靜が、頭を擡うて來るのを感じて來た。

それでも彼女は相變らず齒を食ひしばつて默つて俯向いてゐた。

父親の言葉は又續いた。

『お前は、今度の結婚が不足ださうだが、何か不足なのだ。親は自分の子供のために惡くは、はからはんのだ。昔から日本の女は、親が見つけた男を夫に持つに定まつてる。何か不足だ。

てやらうと云ふのだ。それも見ず

らんやうでは、いくら金があつても熊田家の娘はやれんか

氏素性のちやんと分つた立派な家柄だ。それに具合のいゝ事にはお前も小い時から、よく知つてるのだ。誰が聞いても、こんな良緣があるか。お前は、お父さんや、叔父さんが、お前の返事を聞かぬうちに、話を進めたのが不服だと云つてる相だが、何が不服だ。云つて見い』

それを聞くと、多榮子は、顔をあげて父の方を見遣りながら、冷靜な、落着いた聲で答へた。

『私は、そんな事を、ちつとも不服に思つてはゐません』

『そんなら、何が不服だ』

多榮子は再び俯向いて頑強に默つて仕舞つた。それを見ると、父親は焦々した聲で怒鳴り付けた。

『それぢや、貴樣は俺に愈々弓を引く氣だな。あの馬鹿者の忠雄の奴と一緒になつて、親も家も足の下に踏みつけて、勝手な眞似をしやうと云ふんだな。おい、貴樣の考へを云つて見ろ』

彼はさう云ふと、愈々怒りに燃えた眼を輝かせて、多榮子の方を睨みつけた。

母親は、その樣子を見ると、おろおろして、

『まあお父さん……』

その瞬間、多榮子は、不意に顏をあげて、父親の顏を眞正面から見詰めながら、勇敢に、判然した聲で云つてのけた。

『私は、兄さんのして居る事を正しいと思ひます。今度の結婚は厭です。私は炭坑主の奧さんになるために結婚するのは厭です』

その瞬間、

『何ッ』

と云ふ父親の雷の樣な聲と一緒に、何か知ら、大きな物が飛んで、窓の硝子が、激しい音を立てゝ碎け落ちた。そして、

『まあ、お父さん』

『そんな亂暴な事を』

と云ふ、叔父と母親の狼狽した聲と同時に、猛獸のやうに立ち上つた父親は、二人に抱き止められてゐたのであつた。

四八

多榮子は其夜、家の中が寢靜まつてから、そつと寢床を拔け出して机の前に坐ると、ペンを執つて手紙を書き出した。

彼女は、最早、自分が此家を去つて兄の許に走るべき時が來たと思ひ定めて、明日の朝早く家を拔け出さうと決心したのであつた。

彼女は先づ父に殘すべき手紙を書き始めた。

……お父さん、私は昨日大變惡い事をしたと後悔いたして居ります。お父さんのお怒りになるのを少しも無理とは思ひません。私はお父さんから、いくら叱られても有難いと思つて居ります。皆、父として子供のためよかれとこそ思つてなさつて下さつた事ですもの。私としては、たゞ有難いと思ふ事より外には何もありません。

……けれ共、悲しい事には、私は、どうしても今度の結婚が厭なのです。一と口に云へば、あの青年の人と結婚して、此炭坑を手離さずに、自分が又炭坑主の奧樣となる事が厭なのです。お父さんの、せつば詰つたお氣持から云へば、さうする事が、黑田家のためであり、又私の幸福であるとお考へになりますけれど、私には、どうしても夫れが幸福な事だとは思はれません。

……お父さんは、私があの方と結婚して、あの方が炭坑を引受くれば、それで、最早一切の事が片附いて、私達は永遠に、お父さんの炭坑は安全であるやうにお考へでしやうけれど、こんな大きな仕事は、少々な資本では、到底やつて行く事は出來ないと思ひます。殊にM炭坑會社は、此地方の炭坑を皆自分のものにしなければ承知しないのですもの。

……假りに私達がやつて行くとしても、此不景氣や、何時起るか分らない瓦斯の爆發や、あのM炭坑會社との競爭やのために、長くないうちに又私達が今度のやうな羽目に陷つて、結局は、こつちのお金を注ぎ込んで、あの會社に奪はれるのが落ちだと思ひます。小資本の者は大資本の者にはかなはないのですもの。お父さんも御存知の通り

けれ共、それまでは、お母さんはどんなにか辛い事でしやう。それを思へば、私はお母さんに對してほんとうに不孝者のやうな氣がします。

……こんなにして、今夜きり此室に別れ、たとへ暫時でもお母さんの傍を離れると思へば、私の心はちぎれさうです。そしてお母さんの胸にとりすがりたい氣持で、いつぱいになります。

……どうか私の事は心配しないで下さい。私は兄さんの處に行くのですもの。

多榮子

母上様

五〇

多榮子は、夫れを書き終ると、もう一度讀み返して、狀袋に入れると、丁寧に表書を書いて、父の手紙の上に重ねた。

それから彼女は、もうこれで、古い生活の一切に終りをつげたかのやうに、ホツと安心した様な深い溜息をついて、ペンを机の上に置いた。

彼女は又、凝つと机の上に頰杖をついて、今彼女の前に開けて來つつある新しい生活の幻影でも追ふかのやうに、長い間一點を見詰めてゐた。

暫時すると、彼女の瞳には、悦ばしげな微笑が現れて、彼女の一點にすきとほつた清い瞳には、ぽつと美しい[illegible]

彼女は、ペンを取上げて、最後の手紙を書き始めた。

……道子さん。先日は忙がしい處を、ほんとに御世話様でしたねえ。お蔭様で、私は、四年振りに、無事に兄に逢ふ事が出來ました。私にとつて、夫れがどんなに悦ばしい事であつたかは、貴女にもお分りになるでしやう。兄と會つた結果は、私の身に降りかゝつた一切の事が解決されるやうになつたのですもの。そして私が、此家にゐるのもあと一時間かそこらになりました。此手紙を書き終る頃には、窓の外が明るんで來るでしよう。その時が、此家にも、私の一切の古い生活にも別れをつげる時なのです。

……私は最早ほんとうに自由な、一人切りの身になりました。もう私は炭坑主の娘でもなければ、未來の炭坑主の奥さんでもありません。私は今日、父の前で、今度の縁談をさつぱりと斷つて仕舞つたのです。

……道子さん。貴方も、今度こそは、ほんとに、私のために悦んで下さるわねえ。そして、心から私の前に貴方の手を差し出して下さるでせう。今までは、私の心が、いくらさうであつても、何の蟠りもなく、私の前に貴方の手を差し出して下さいとは、どうしても私には云へなかつたのですもの。今[illegible]心の廣い、貴方[illegible]

どうぞ手を差し延べて下さいと云へますわ。何故なら、私はもう何も彼も、苦い生活を打ち棄てゝ、兄の弟子入りをしたのですもの。

……けれ共、まあ、何と云ふ、すが〳〵しい心持なのでせう。今まで牢獄に繋がれてゐた者が、その高い煉瓦塀の外に放たれて、さあもうお前は自由だから、どつちにでも行きたい方に行けと云はれたら、其人はどんなにか自由なすが〳〵した氣持がするでしよう。私の今の氣持は、ちやうどそんなだと思ひますわ。私は今でも、組合から命令が來て、何處のストライキに行けと云はれたら、直ぐに飛んで行つて、その戰に加はる事が出來るやうな氣持がしますわ。

……夫れにしても、兄達の話の樣子だと、近いうちに、あちこちで大きなストライキが起りさうですわねえ。この炭坑も、私がこんなになれば、近い内に、あのM炭坑會社に合併される事になるでせう。さうすれば、屹度、こゝでも何か問題が起らずには濟まないでしよう。そして、夫れをきつかけにして、大きなストライキが始まるかも知れないわ。ほんとうに私達は、今のうちから覺悟して、すつかり準備をとゝのへる事が必要ですわ。どこの山でも、不景氣を口實に賃金を下げたがつてゐるけれど、組合があるので未だ夫れを遠慮してゐるのですものねえ。今度は先づ組合を潰しにかゝつて來るわ。

……今度そんな事が起つたら、私も貴方達と一緒に、其戰の中に加はる事が出來るのですね。若しそのために監獄に入れられるならば、私は悅んで入れられるわ。監獄は勞働運動者の學校だと云ひますものねえ。そして又、どんな仕事にした處で、係い縲紲なしに出來る事はあり得ないのですものねえ。私達は女であつても、運動の爲に、男と何の變りもないと思ひますわ。

……私は、今こんなにして貴方に手紙を書いてゐる間も、何となく自分の心が未來の生活に對して躍るやうな氣がします。

五一

……道子さん、貴女はあの夜、佐多さんと云ふ人の事を、棒のやうな人だと云ひましたわねえ。貴女の云つた事は間違ひありませんわ私も曲り角に立つてゐるあの人の姿を最初に發見した時に、ほんとに棒が立つてると思ひましたわ。

……けれ共まあ、何と云ふ正直な氣持のいゝ棒でしやう。それに其棒は、ほんとに勇敢で丈夫で信頼する事が出來るのですもの。あれでは、會社が怖れるのに無理もないですわ。

……私は、今度、私と結婚したいと云ふ青年と比較して、同じ人間でありながら、こんなにも氣持が違ふものかと自分ながら、吃驚しましたわ。私は、もう智識階級の立派な紳士達に對しては、爪の垢ほどの興味もありません。あの人達は、生きてゐながら、死んでゐるのですものねえ。

……私はこれから、貴女や、佐多さんや、兄達と、一緒になつて働らして行けると思ふ丈でも、どんなにか幸福な事でせう。貴女は未た私

の兄に會ふ機會がなかつたのですけれど、私の兄に會つて下さつたら
……それは近いうちの事でせうけれど……屹度、貴女も私の兄を好いて下さるわ。

……あゝ、私は何のとりとめもなく長い手紙を書いて仕舞ひました。時計を見ると、もうそろ〳〵六時に近くなつて來ました。出掛ける用意をしなければなりません。

……でも貴女は、此勝手氣儘な手紙を怒つては下さらないでせう。私の心は、ほんとに悦びに燃え立つて、この悦びを誰かに聞いてやらなければ、氣が濟まないのですもの。

……私達のやうな境遇に生れた者は、自分の境遇から脱け出して、貴女達と一緒になると云ふ事丈けが大變な事なのです。私は自分が自由になつた事と云つて悦びましたけれど、貴女から見るならば、ほんとに馬鹿らしい事ですわねえ。

……私が、贅澤な室の中で、こんな手紙を書いてゐる時に、貴女は、家族を養ふために、最早寢床を離れて、働きに行く用意をしてゐられるのでしやう。さう思ふと、私は何とも云へない氣がしますわ。

……もう長い間、御尋ねもしないのですけれど、お父さんの怪我は相變らずですか。どうか、お父さんにもお母さんにも宜しく御傳へ下さい。そして、此炭坑が愈々M炭坑會社に合併される事になれば、私

……それでは、さようなら。いや、さやうな
たらいゝでしやう。これから、ほんとに一緒になるのですものねえ。
でも、矢張り今夜丈けは、さようならにして置きましやう。私は、佐多さんの處に暫時、兄と一緒に居ります。そして近いうちにほんとの貴女の御仲間として、同志として御目にかゝりますわ。さようなら。

多榮子

道子樣

多榮子は、それを書き終ると、直ぐに封筒に入れて、所番地と一緒に宛名を書いて、三錢切手を貼つた。そして急いで時計を見た。時計の針は、最早、六時を廻つてゐた。窓の外は、昨日に續いて相變らず粉雪が降つてゐるらしかつたけれ共、窓の硝子には、最早、黎明の色が映つてゐた。

彼女は立ち上つて、急いで帯を締め直した。そして、戸棚から、又例の將校マントを取り出して、それを上にひつかけ、黒い頭巾を頭からすつぽりと被つた。

それから彼女は、父と母とに宛てた手紙を机の眞中に置いて、その上に一冊の本をのつけて、直ぐには發見されないやうにし、道子宛のは懐に入れた。そして、そつと障子を開けて廊下に出ると、一寸そこに凝つと佇んでゐた。家の中は未だ森閑として誰も起きてゐる氣配はなかつた。そこで又、そつと障子を閉めると、彼女は、便所のそば

現世相に於ける賣笑婦の狀態

草間八十雄

恁うして樣々なる種類を見るやうになつたのは、時代向きの歡樂氣分に當て嵌まる賣笑婦を迎へると云ふ要求によるのであるから、或種の賣笑婦は古い型から脫け出さない限りは幻滅と退步の已むなき情勢に襲はれてゐる。又或類ひの賣笑婦は今や行詰らうとしてゐる。之れと反對に或種の賣笑婦は時の流れに當て嵌まり、頻りに浮れ男の群れにもて囃されるので、常に之れが迎合に心を凝らし進化に步みを運ばせてゐる。かくの如く將さに行詰りから衰頹となり、更に幻滅を招徠せんとするもの、新起と擡頭の情勢にあるもの、此等の賣笑婦の狀態を具體的に語るには先以て(一)藝妓、(二)娼妓、(三)酌婦、(四)女給、(五)其他、以上各接客婦につき今昔に亘る人數を掲ぐれば、此頃何れが全盛であり又何れの類ひが衰頹の氣分に襲はれてゐるかゞ略ぼ頷づかれる。

○驚く可き賣笑婦の增加

各府縣を合せた賣笑婦の人數

昔は柳暗花明の色里で笑ひを賣る女の種類は、藝妓と娼妓と此外に酌婦と稱する私娼の三つが主なるものであつたが、更に近頃となつては新らしくつくられた歡樂の巷に群がるカフェの女給とモダン式のダンサーで、此種接客婦の中には竊かに笑ひを賣るものがある。更に女店員女事務員看護婦派出婦のやうな職業婦人の中にも、常に脂粉の香を漲ぎらせ潛在的に怪しい振舞に出るもののあることは否まれない。言ふまでもなく賣笑婦の中で嫖客に接すれば露骨に將又必然的に娼行爲に應ずるものは娼妓であつて、次は私娼の一種である銘酒屋女が其れである。妥協と必然の中間で娼行爲に出づるものは藝妓である。此る以外の酌婦高等內侍女給其他の類ひは條件的妥協から必然性となり娼行爲に陷るものがある。一覽するに賣笑婦は段々と多くなり尙ほ其種類も樣々となつてきた。

各府縣藝娼妓及び酌婦	明治拾七年	大正四年	同七年	同拾四年	昭和元年
藝妓數	八六五二人	四九五〇九人	五九一六一人	七九三四八人	七七九三四人

娼妓	二八四三二	五〇八〇五	四八二六八	五三八八六	五〇八〇〇
酌婦	—	—	四四一五六	四八二九一	一〇一九六六
合計	三七〇八三	九六三一二	一五一五八五	一八〇五二五	二三二七〇〇

明治拾七年と大正四年には酌婦の數は不明であるが、藝娼妓を合せた數は明治拾七年から大正四年に至る參拾餘年間に三倍弱の増加となつてゐる。大正七年には酌婦の數が明らかに分り、私娼の少くないことが知れたのである。そして昭和元年には之等賣笑婦の總數は二拾三萬二千七百人に上るのである。故に四拾餘年前の明治拾七年と比較すれば、實に拾九萬五千六百餘人を増し、約七倍の増加である。然して既往四拾餘年を通じて觀ると、比較的其數を増せるものは藝妓と酌婦であることが分る。殊に藝妓の如きは九倍半、又酌婦は八ケ年間に二倍半を増してゐる。然るに娼妓は四拾余年の間に増しては居るが、割合に増加の數が上らない。殊に大正四年と昭和元年とをくらぶれば、寧ろ減少せるのであつて、何處までも靜態的數字を保つてゐる。

藝妓も或時期は著るしく増しては居るが、最近では數の動きが少なく、之れもつまり靜態的で今や漸く全盛を通り越し行詰らうとしてゐる。獨り酌婦のみは屢々と其數を増し、大正拾四年に四萬八千余人であつたものが、翌年には拾萬〇一千人となり、二倍からの數を見るのである。か[illegible]いものは之れを酌婦と認め、取締上何れも酌婦[illegible]最近一ケ年の統計には著るしく其數が多くなつてゐる。

○東京地方の賣笑婦の人數

東京地方の藝娼妓並に私娼と女給の數につき順次に表を掲げてみやう。

東京地方藝妓娼妓人數 年	明治拾九年	同三拾五年	大正元年	同拾年	同拾四年	昭和二年
藝妓	—	三〇四一	四八二三	九九三〇	一〇二四七	一〇三三三
娼妓	四一四八	五五三二	六四一一	五七三三	五一五三	五七五八
合計		八五七三	一一二三四	一五六六三	一五三九九	一六〇九〇

藝娼妓は明治三拾五年と、二十三ケ年を經たる昭和二年とを較べると約二倍となつた。

又東京地方特有の私娼である、俗に銘酒屋女は、大正五年警視廳でその撲滅にかゝる當時、淺草千束町と外拾三ケ所の魔窟と謂はれる私娼街に居つた女の數は、三千七百八拾五人と云ふ多數で、其年の五月から愈々猛烈に撲滅にかかつたので、大正七年拾二月には淺草に約二百人、龜戸約七拾人、合せて二百七拾人ほどゝなり、他の拾二ケ所は崩壞されて終つた。然るに大正[illegible]

は再び擡頭され、以後龜戸、玉の井の二ヶ所となる。玆に昭和元年拾二月末日現在玉の井と龜戸の娼家戸數並に私娼の數を擧ぐれは次のやうである。

昭和元年拾二月現在	娼家戸數	女將兼私娼	抱へ私娼	私娼合計
龜戸	四八三戸	一五一人	七一一人	八六二人
玉の井	三六八	一〇二	六六七	七六九
合計	八五一	二五三	一三七八	一六三一

以上の如く二ヶ所の娼家は八百五拾一戸、私娼の數は千六百三拾一人に上る。然し此種私娼の旺盛期であつた大正五年の當時と比較すれば二千百餘人から少いのである。此大東京の膨脹的人口增加の上から觀ると、此種私娼の增しかたが少ないやうに思はれるが、此反面には不見轉藝妓が却々と增加し、更にカフエー、レストラン、バーの女給は勿論、此以外の接客婦で潛在的に春を鬻ぐものが多いやうであるから、銘酒屋女の不足は其れで埋め合せがついて居るやうに看做される。

次に女給の數であるが、之れは未だに的確の計數が見出されない。然し大正拾四年に內務省方面での調べに依れば、東京市內女給の數は七千三百拾九人で、大阪市內の女給數は四千二百三拾人であるそうだ。東京大阪とも市外の數は不詳であつた。其處で當該官憲の見込による、昨今に於ける東京市及び市外の女給數は一萬三千人と云つてゐる。又此女給と客商賣の家に働く女中を合せると、一萬四千人に上るそうである。斯うして段々と計數的に說いて來ると、此廣い東京には現在藝妓と娼妓で一萬六千人餘りと、銘酒屋女と稱する玉の井龜戸の私娼が約二千人で、即ち必然性のものと妥協性のもので一萬八千人に上り、此以外女給或は客商賣の接客婦或は潛在的に出沒する高等內侍、下層に彷徨する街娼などを合すれば、賣笑によつて生活する婦女の數は、蓋し二萬人を越えるものと觀るのが妥當であらう。

○男子百二十九人に一人の賣笑婦

然して更に此賣淫的狀態を全國的に觀るとせば、(一)必然的賣笑婦、(二)妥協的賣笑婦、此類ひを合せ之れを第二次國勢調査による各府縣男子人口三千〇一萬二千八百一拾人に對し、昭和元年の賣笑婦の數二十三萬二千七百人を割當てると、男子百二十九人に一人當りとなる。然も其れは生れたばかりの幼な兒から八拾乃至九拾の白髮翁までを通しての割合であるから、壯齡であり血氣であり性的能力の旺盛なる年頃のものが、上記百二十九人の三分の一であると假定すれば、尠くなかれ四拾三人の元氣もので一人の笑ひを共延し歡樂を味ふのである。況んや此藝娼妓酌婦以外に竊かに又潛在的に春を鬻ぐ女が少くないのであるから性的享樂の波がいかに擴く流れてゐるかゞ分る。

○賣笑婦の實質を知る前身調べ

青壯の年頃であつても未だ妻を有せざる男が性慾を抑へがたく、賣笑婦によつてそれを滿足させやうとするもの、或は妻をもつ身でありながら性的の放肆から賣笑婦にたわむれるもの、或は配偶の有無にかかはらず心の爛れから女の色香に耽溺する放蕩ものさへある。だが年三拾を過ぎても境遇の上から又經濟的事情から妻をもつことの出來ないものは、已むなく一夜の假り妻によつてセメても性の滿足を果すと云ふ、卽ち必要已むを得ざる生活の要件を賣笑婦に據つて果すのである。故に賣笑婦に近寄る目的と所以は第一は性的滿足であらねばならぬ。次には愛嬌に親しみ歡樂を享くるにある。此性的と享樂の對象となる賣笑婦を需めるに當り其嫖客の理想は、(一)容姿の美なる女、(二)女の愛情とその感受力の强弱である。尙ほ嫖客の自己本意の上からは、(一)遊興費と經濟的關係、(二)保健と危害關係、(三)體裁と秘密關係、此等をも理想とするのである。此理想と希望に適合するやうに或嫖客は藝妓に近寄り、或者は娼妓に馴染み、或者は私娼を抱擁し、或男は女給其他の接客婦に近づき、かくして優越的に性と愛とに娯しまうとする。恁うした事象を見るのは、近代の生活が複雜であり多岐であるが如く、賣笑の機關も昔のやうに曲輪に籠もる遊女を的にするが如き單調では押通されないからである。卽ち賣笑婦も其時々の時代の流れにつれて活動せねばならぬ。從つて賣笑婦自體が時代化されねばならぬ。

う。言ふまでもなく、(一)其女の前境涯と生ひ

のである。此處に此頃の賣笑婦と接客婦の實質を窺ふ上に於て、(一)藝妓、(二)娼妓、(三)私娼、(四)女給などの前身と教育程度は如何なるものであらうか。

東京の藝妓一萬〇百九拾五人の前身は次の如くである。

農一五八、商三六四、家事手傳七三〇三、女中四〇四、女工九四、料理店女中二〇八、宿屋女中三三、飮食店女中二四二、看護婦二、事務員六三、內職一二三、裁縫八〇、妻一五八、子守三八、女髮結一一、學生一九二、其他七二二、計一〇一九五

以上の如く藝妓の前身を見ると最も多きは家事手傳であつて、卽ち總數の七割一分六厘はそれである。家事手傳とは藝妓になるまで家庭にあつて、之れと云ふ職業のなかつたものである。故にそうまで貧しい家の娘でないやうに思はれる。然るによく〳〵詮鑿をして見ると娘を賣らねばならぬものは概ね無產であり、貧困者であり、殊に酷く貧しいものは娘を年頃まで持ちこたへることが出來ないので、拾才又は拾二三となれば周旋屋の手を經て藝妓屋へ賣られて行く。此身代金は小娘のことでもあるから最低百圓、高値で三百圓位ゐなもので、恁うして幼ない身空らで賣られる女は別段に前職をもつ譯もなく、

のもあろう。然し其れはそうまで多くはない。其詳細は昭和二年の藝妓總數一萬〇三百三拾二人の中に小藝妓と稱へる彼の半玉が九百六拾二人に上り、即ち總數の約〇九分を占めてゐる。此半玉は滿拾四才以上でなければ稼業を許されないのであつて、此許可年齡に達せざる以前に概ね家庭を離れ、かゝる色里に這入り、さうして一通り遊藝を仕込まれ、拾四才となれば振袖姿の半玉となつて座敷勤めに出るのである。其れから拾六才に達すれば一本となり、抱主との稼業條件も改まるのである。

次に比較的前身の多いのは其他と云ふのである。これは、曾て藝妓であつたものが再び左褄を取るやうになつたもの、或は妾生活にあつたもの、又は待合の女中を勤めたものなどで、既に花柳の巷に生活せるものである。然して此處に注目すべきは智能的職業に在つたものが割合に少ない。事務員の六拾三人と準智能的とも言ふべき看護婦の二人がそれである。學生であつたもの百九拾二人は中産階級の成れの果てと見るべきであらう。

次に曲輪勤めと言はれ、籠の鳥と言はれる娼妓四千九百七拾七人の前身を調べると、次の如くであつた。

農二八五、商二三、家事手傳五四九、女中二二六、料理店女中一四七七、宿屋女中一二二、飲食店女中三八二、電話交換手三、看護婦一、內職一〇四、事務員一、裁縫二九、妾四六、女髮結一二、子守三四、學生二、娼妓八五五、藝妓一八八、女工四九〇、其他一四八、合計四九七七人

藝妓として[illegible]六厘に當る。然して此料理店女中と言ふのに[illegible]女中ではなく、概ねは田舍の怪しい料理店の女中で、既に賣笑の境涯に沈へる女が娼妓に轉換せるのである。第二は曾て娼妓であつたもので之れが一割七分二厘であり、第三家事手傳の一割一分、第四女工の〇九分八厘、第五飲食店女中の七分七厘、等で智能的職業に就いて居たものは四千九百七拾一人の中に事務員が只つた一人と電話交換手と看護婦とが合せて四人に過ぎない。又學生であつたものは僅に二人であつて、之れによつて觀るも娼妓の素質と其程度のいかに低級で、然も貧しい家に成育せる氣の毒な人々が如何に少くないかが分る。

次に玉の非の私娼六百五拾三人の前身を擧げて見やう。

農一一一、女工一〇二、飲食店女中二二五、料理店女中八三、活動女給七、待合女中一六、娼妓九　藝妓一六、飲食店を營めるもの五、妾二、裁縫七、宿屋女中一三、看護婦三、女髮結四、事務員四、遊藝人一、其他四五、合計六五三人

飲食店女中であつたもの最も多く三割四分五厘に當る。此飲食店とは其處此處で營める小料理屋は何れも許可名義は飲食店である。大東京で飲食店名義で許されてゐるものは、一品料理、そばや、カフエー、料理屋、其他で二萬七千百〇八軒ある（昭和元年）。其內で當質的料理屋と言ふべきものは、八百五拾二軒に過ぎない。故に私娼の前身はカフエーから落込めるもの、場末の小料理屋から轉落せるもの、更に田舍の酌婦とその果てなど多く、次は農の一割七分、第三女工の一

割五分六厘、第四料理店女中の一割二分七厘等、であるが、此種私娼も前の境遇は眞面目な途を辿れるもの少なく、矢張り色の巷に彷徨せるものゝ果てが比較的多いのである。加之ならず娼妓と同樣に智能的職業に就て居つたものは少數である。

此度は東京に働らく、カフエー、レストランなどの女給一千六百七拾人の前身を擧げて見やう。

家庭に在り別段職業なきもの八三四、家事手傳四三、從六〇、學生八五、裁縫九九、內職一六、親戚寄食四二、結婚生活即ち人妻四一、遊藝稽古一、小學教員三、雜誌記者一、事務員五〇、交換手一二、商店員一八、看護婦一一、髪結五、仕立業見習三八、女中一四二、女工三一、宿屋女中二二、遊戯場勤め六、遊藝人一〇、女優五、不明九五、合計一六七〇人。

前掲藝妓娼妓私娼等の前身と此女給の前身とを比較すれば格段の相違がある。即ち一千六百七拾人の中で最に有業の境遇にあつたものは、教員、記者、事務員、交換手、商店員など智能的職業に就けるものと、此以外の勞働に從へるものとを合せて三百五十四人であるが、家に在りたるもの、手傳、學校に在りたるもの、人妻、裁縫、內職、寄食、遊藝稽古など事實上無業、若しくは其れに等しいものは、一千二百二拾一人に上り、總數の七割七分五厘、眞に有業者であつたものは二割二分五厘に止つてゐる。而うして有業者であつたものでも三百五拾四人の[illegible]

娼妓四千九百九十餘人の中に事務員一人、私娼[illegible]務員四人を見るのみであるのと比較すると、此女給には其れの如何に多いかゞ分る。尚ほ同樣に學生であつたものが娼妓には僅に二人のみであるのに、女給には其れが多く、要するに其れだけ女給は智質が優つてゐる。

○教育の程度に表はれたる賣笑婦の實質

尚ほ笑ひ女と其素質を忖度する上に於て、見逃せない問題は教育の程度である。茲に藝妓娼妓、並に私娼の教育程度を述べ、更に女給に就てはその具體的の調査材料はないが、其かわり、女給一千餘人から集めた感想錄があるから、其の要點を擧げて、彼等の思想と智識程度に智能の一端を窺ふことにする。

藝妓の教育程度

藝妓一萬〇百九拾五人の教育程度を見ると次のやうである。

尋常中途七八五、尋常卒業及高等小學未了と同卒業せるもの九〇〇二、高女一二年のもの二二七、同三四年のもの九六、同卒業八五、合計一〇一九五人

藝妓には無學一人もなく、尋常未了のもの〇・七分七厘、同卒業高小未了同卒業が八割八分三厘、高女一二年〇・二分二厘五毛、同三四年〇[illegible]

娼妓の教育程度

娼妓五千百五十二人の教育程度を見るに無學者割合に多く、又有教育者と雖も低級のものが却々多いのである。

無學八一八、尋常一二年九三一、同三四年一二三四、同五六年一九六二、高小一二年一七六、高女一二年一八、同三四年一三、同卒業〇

此娼妓の教育程度を窺へば、實に同情の思ひに堪へない。即ち無學は總數の一割五分八厘八毛に上り、又義務教育を終らざるもの丶多き、更に高等女學校を卒業せるもの一人もなく、之れによつて觀るも娼妓を出せる家庭のいかに貧弱であり、彼等の實質の如何に劣れるかを知るに足るのである。

私娼の教育程度

次に玉の井の私娼二百五拾人に就て、其教育の程度を窺へば、此種の娼婦にも無學が少なくない。左にそれを掲げやう。

無學三六、尋常一二年二二、同三四年五二、同五年二一、同卒業九五
高小中途五、同卒業九、高等女學並に實業中途七、同卒業三、合計二五〇

無學者は一割四分四厘に當り、娼妓に比すれば幾分少ない。又義務教育を終つたものは三割八分であり、更に高女卒業者は一分二厘に當るから、娼妓の其れの八厘三毛に比較すれば中等教育をうけたものの割合に多く、要するに私娼には無學者もあるが、一面には程度の高い教へを授けられた者も比較的に多いのである。

○女給の思想と境遇を表はせる感想數

女給の教育程度に就ては、前に述べたやうに具體的調査の纏まつたものがない。で、曩に内務省中央職業紹介事務局で、東京の女給から感想を申告させたことがある。此申告に應じたものは一千百七拾五人であつて、其感想を分類して見ると、(一)經濟的事情と見るべきもの之れを告げたものが三百拾一人、(二)現職に對し惡いと言ふもの三百〇五人、(三)現職に對し良いと言ふもの三百三拾二人、(四)其他の事柄に就て拾八人、(五)何の考へもなきもの二百〇九人、合せて千百七拾五人であつた。其處で、(一)の經濟的事情と見るべきものでは次の如き想ひを述べている。

(イ) 境遇及び家庭の事情で仕方なしに百二拾九人、(ロ)他に比し收入が多いから百拾七人、(ハ) 貯金及び着物が出來るから二拾一人、(ニ) 堅氣の女中奉公より金になるから拾五人、(ホ) 家庭に送金したさに拾五人、(ヘ) 自活のため仕方なしに六人、(ト) 近頃は不景氣で金にならない三人、(チ) 堅氣の奉公では子供の養育に困るから二人、(リ) チップを澤山下さる方を望む二人、(ヌ) 勉學の金を欲しさに二人、

(二) 現職に對し惡いと言ふもの

(イ) 良いと思ふことなし九拾六人、(ロ) 良いと思はない早く止めたい八拾四人、(ハ) 他に仕事がないので仕方なしに五拾四人、(ニ) 女給を世間の人は理解しない四拾人、(ホ) 一部女給のため世間の人

から卑しく見られるが殘念二拾三人、(ヘ) よいと思つて居たが惡い處だ三人、(ト) 早く一定の職を求めたい二人、(チ) 前職の歸結に早く歸りたい一人、(リ) 客の前で虚僞の言葉や態度をしなければならないのが情けない一人、

(二)現職に對し良いと言ふもの

(イ) よいと思ふ百三拾八人、(ロ) 社會の狀況及び男の心理が判るからよい五十八人、(ハ) 心がけ一つでよいと思ふ四拾三人、(ニ) 將來獨立するには良い二拾七人、(ホ) 多くの人と交際するからよい二拾一人、(ヘ) 體が自由になるからよい拾人、(ト) 傍で見るより良い職業九人、(チ) 容易に就職出來るから良い六人、(リ) 教育のないものには良い職業だと思ふ五人、(ヌ) 體の弱いものには良い仕事五人、(ル) 藝妓より良い二人、(オ) 女工より樂だ一人、(ワ) チップ制度でないから良い店だ、よい服装が出來るから良い、以上各一人である。

かくの如き感想を徹して觀ると、今や流行的にもて囃されてゐる女給生活の表裏と共れから彼等の思想と實質の程度はどんなものであるかが略ぼ頷づかれる。

○藝妓の種類と抱られ行くときの契約條件

藝妓には(一)仕こみ、(二)丸抱、(三)分け、(四)七三、(五)逆七、(六)看板、(七)自まへ、恁うして類ひが分けてある。斯うして(一)の仕込は更に、(イ)仕

こみと云ふのは拾才前後或は拾二三までの小娘を抱へ頃まで遊藝を仕込み、尚ほ義務教育を修了させねばならぬ。其れは東京地方では職令をもつて尋常六年を卒業せざるものは藝妓稼業を許さぬからである。(ロ)の一本仕こみと稱するのは、年頃であり娘盛りであつても遊藝の心得がないので其れに遊藝を仕込むからである。(ハ)の半玉仕込みと謂ふのは、是又年頃であり妙齢で而も藝事は出來るのである。けれども生娘で座敷馴れがしてゐないから、客の取扱ひ座敷の勤め振りなどを教へる。(ニ)の箱屋仕こみとはイ)の仕こみと同じ年頃の小娘を抱へ常に箱丁に使ひ、藝妓の出場所に行くとき三味をもつて供をする。斯うして其傍はら遊藝や藝事を修めさせる。東京では牛込の或る藝者屋に其狀を見るのみで、他では恁うした仕こみを抱へない。

丸抱へ、此丸抱へと云ふのは俗に一本の年頃の女を、年期をきめて抱へるので、前にも述べたやうに、藝妓には有年期で抱へるものと無年期とがある。有年期の類ひは、(一)仕込、(二)丸抱へ此二つで、(一)の仕こみの年期は例外もあるが、概ね二拾明けと云つて二十才までが年期で、身代金は百圓から三百圓位ゐまで、然も中には養女名義で買はれるものさへある。

よく法廷の問題となる藝妓養女取戻しは、かゝる形式で人身賣買に

身代金は三年で最低五百圓、多いのは千圓以上である。然して藝妓の稼ぎによる所得を見るに、(一)の仕こみは幾ら稼いでも其儲けは抱主に收められるのである。此種藝妓の契約證を見ると、「營業に從事せし上は一切の收益金を其都度貴殿に交付し其全部を貴殿の所得とす」、とあるから、辛らい思ひで働らきながら、鐚一文にも有りつけない。然し抱主仲間では慣習として稼高の一割を小遣に與へる。けれども之れは恩惠的であるから、與へないと言つても弱い女は泣き寢入るより外はない。で、契約の上に次のやうな定めがある「習業中の稽古料食費小物四季の衣類は貴殿に於て負擔すること、營業に從事せし上は營業税並に營業の衣類器具其他斯業に要する一切の費用及前條の費用は貴殿の負擔たること」、貴殿とは即ち抱主のことで、以上の如く年期中は恩惠的に小遣を與へられ、絕對的に衣食住は抱主が支へるのが仕込みの稼業條件である。

次に丸抱へは三年なり或は其れ以上の年期で抱へるので、契約證の第一條に「營業期間を滿何年と合意す但し前記の期間は就業の日より起算す」先以て年期を契約し、此度は藝妓の稼ぎによる所得につき「營業上一切の收益金は其全部を貴殿に交付し尚ほ其全部を貴殿の所得とする」、之れも前の仕込みと同樣儲けは悉く抱主が收め、恩惠的に稼高の一割を與へられるもの、或は賣れ子であると二割位ゐまで與へられ、又衣類賄などは仕込みと同じ契約で何れも抱主の負擔である。大藝妓と唱へる一本は東京に九千余人から居る、此內の五千五百人までは此等で、殘り數は、分け、七三、逆七、前記、自前の類ひである。

分け、此分と稱するものは次のやうな契約で抱へられる藝妓である。其れは此社會で俗にカセギヌケと稱し、無年期で賣られ行く女となるのである。

衣類平常着器具小物一切は自分の負擔であつて、稼高は抱主と藝妓で半々に分けるのであるから一ヶ月三百圓の稼高であれば藝妓は百五拾圓を所得する。此所得で衣類を拵へ又小物と言つて化粧品髮結料などに充て、殘りを前借金に入れ又小遣ひに用ゐるのである。で食費は主人のもちであるから、前記の仕こみ抱へなどにくらぶれば條件が有利である。其かわり無期限であるから病氣に罹つて稼げなかつたり、賣れ子であつても、「ヒモ」と言つて性の惡い情夫をもち、其れに入り揚げたり、或は貧しい親に斷へず融通をつけたりしては、前借金の還へしやうがない。故に何時になつても解放されないで、柳暗の巷に果敢ない思ひで日を過ごさねばならぬ。

七三、此類ひの藝妓は契約條件が前の分けと似たもので、即ち稼高の七分を抱主が收め、三分を女が收めるから七三と云ふのである。然して分けと異なる點は、稼業上必要なる器具衣類などの分擔別で、(一)座敷着の長襦袢及びシゴキ平常の衣類三味線小物などは藝妓の負擔である。(二)座敷着の衣類並に帶は抱主の負擔である。斯うして抱主が七分を收めるので、前の分けのやうに衣類だの器具一切は藝妓もちでな

く、殊に金のかゝる座敷着は抱主がもつのである。之れも無年期であるから前借金を完濟するまでは何時までも解放されない。

逆七、此種のものは抱主が三分を收め藝妓が七分を收めるもので、藝妓の中で比較的割合のよい契約で稼業について居る。で之れは衣類でも小物でも一切を藝妓がもつのであるが、斯の種の優秀藝妓は、場末の色町だの田舍藝妓には殆ど居ない。多くは本粹地と謂つて、新橋柳橋或は其他一流の花柳界に働らいて居る。

看板、此類ひのものは殆ど獨立自營に似たもので、從つて一厘の前借金を負はない。夫うして衣裳器具など自分もちで、之れなどは頗る優良なもので賣れ子でなければやり通せない。夫は或る藝者屋に寄寓して其處の八千代とか花香と言つて料理店待合へ出るのである。俗に稼ぎ先きを出場所と云ふ、故に(一)或家に寄寓すること、(二)此寄寓の場所を根據とすること、かくの如き條件のもとに藝妓は看板料として月額若干づゝを藝妓屋の主人に拂ふのである。

即ち看板とは其處へ看板を揭げさせてもらふ意味であつて、其看板料は場所によつて高低がある。本粹地であれば一ケ月百圓、二流地であれば七十圓、場末であれば五拾圓と云つたやうに値段に高低がある。かうして月に三百圓の稼ぎ高があれば、其內百圓を看板料に出し殘りは自分の所得となるから、藝妓としては高等なものである。

自前、此れは文字の如く全く自主獨立の……の男がつかぬと出來ない類ひである。

○藝妓の稼高と裏面の事情

藝妓の種別は以上のやうであるが、さて藝妓は一體全體どの位ゐの稼ぎ高を上るものか、此處に最近消費された藝妓揚代金、並に藝妓一人當りの揚り高即ち稼高を表はして見やう。(但し東京地方のもの)

	藝妓揚代金總額	藝妓員數	藝妓一人當り平均稼高
大正拾三年	一千〇九拾九萬一千九百五拾五圓	九千九百八拾五人	一千百〇〇圓八拾五錢
同拾四年	一千〇八拾五萬六千七百三拾圓	一萬〇百五拾五人	一千〇六拾九圓二十一錢
同拾五年 昭和元年	一千百〇七萬二千七百七拾四圓	一萬〇百二拾四人	一千〇九拾三圓七十二錢

前表につき更に月割にして見ると、大正十三年には九拾一圓七拾三錢、同拾四年には八拾九圓拾錢、昭和元年には九拾一圓拾四錢である。

然して最近の稼高を見ると、昭和二年拾二月には藝妓の數が一萬〇三百三拾二人で、その稼ぎ高は一百〇一萬〇百七圓、一人當り九拾七圓七拾六錢である。

藝妓の前借金一人當りに就て調べると(大正拾四年)九百五拾九圓であつた。之れだけの前借をして、更に金のかゝつた衣裳を拵へ日每

一つの疑問が起る。然し前掲の稼高は揚代金のみであらう。[illegible]の玉代のみを表はしたものでツマリ收入の一部を其筋に屆出たもので、此他らに隱れた收入のあることを見逃してはならぬ。其れは(一)纒頭、(二)笑ひを賣る報酬此二つである。表面に屆出る玉代は一流の場所でも玉一本六十錢、次が五十錢、更に市內某所の不見轉は四拾錢である。嫖客に招かれゝば一座敷のきめは玉三本で、此勤め時間は約二時間で、此一座敷の勤めで一流の藝妓は必ずチップ二圓はつきもので、二流三流でさへ一圓五拾錢の祝儀をうくる。其れから藝妓悉くではないが、比較的その多くは燈燭の蔭によつて笑ひを賣る。此ことを俗に「寸法」と云ふ。

彼の飛び切りの優物はその値段は不定額で之れを手折らうとするには、一宵千金を惜まざるものさへあるが、大抵は階段的に其寸法がきまつてゐて、(一)拾二圓、(二)拾圓、(三)八圓、(四)七圓、(五)六圓、以下五圓四圓三圓と八通りになつてゐる。故に藝妓の稼高は(一)玉代、(二)祝儀、(三)寸法、此三つを合せたもので、其れならば幾何に上るかと言へば表面の玉代額の三倍と見るのが妥當であつて、即ち一ケ月一人當り三百圓位に上る。此內から出場所即ち料理店待合への刎錢がある。多い出場所であると二割、少なくて一割で、平均一割五分の刎ねを取られる。尙ほ檢番に玉一本で三錢乃至五錢を刎ねられる。で、ツマリ三百圓の稼ぎがあつても、其一割五分を刎ねられるとせば二百五拾圓餘りが實收で、之れを無年期の分けは五分、七三は三分、逆七は七分を收め、其代から[illegible]となる。でも[illegible]込と丸抱へに[illegible]に一割をもらひ、賣れ子は二割位をもらふものである。

○稼ぎながら借金の多くなる藝妓

一々數へ上げれば一流の藝妓は兎にかくそれ以下のものは表面は華やかなやうでも、生計に餘裕の出來やう筈がなく、從つて次の如く藝妓の中には前借金の外に追借の出來るものがある。此處に懸りして稼ぎながら追借の出來た二千五百五拾四人に就て追借金の高を見ると次の如くである。

百圓以下	百圓以上二百圓	二百圓以上三百圓	三百圓以上四百圓	四百圓以上六百圓	六百圓以上八百圓	八百圓以上千圓	千圓以上
九七五人	六三五人	三九三人	二一二人	二三二人	五〇人	三〇人	一八人

以上の如くであるから常に移動があつて、昨日までは神樂坂にゐたものが、今日は赤坂に住替へと轉々するものが多く、此住替へをするのは、稼ぎが思ふやうに忙しくない。借金は減らないで寧ろ增そうとする。其處で弱い女の心から環境を一新したならば幸運の光りを見るであらうと、悶えの果てが住替と云ふ段取になる。で、住替へをすれば當然の歸結として借金は前より多くなるものが少なくない。

即ち前には八百圓の借金がある、之れを整理するには、住替へ先きから千圓を借りねば追つかない。住替へには周旋屋へ五拾圓位の手數

料を取られる。ヤレ車代ソレ公正證書の作成料だの色々の雜費がいるので、然うしても借金を増さねば始末がつかない。然うして重荷を負つてから、又もや住替へをくり返へすものさへ少なくない。其證書には色香盛りを過ぎても尚ほ其淵に漂ふものが多く、東京の藝妓一萬〇百二拾五人に就て年齡を調べて見ると、蕾の花であり、又それを開いて花盛りのものでは、二拾才以下のもの四千四拾七人を見るのである。其れから二拾才から二拾五才のもの二千五百九拾七人で、年増と見るべき二拾五才から三十才のもの一千五百一人に上り、追々色香の薄くなる三拾才から三拾五才のもの七百二拾五人で、既に色香の褪せかゝる三十五才から四拾才のもの三百九拾二人であり、姥櫻と同じ四拾以上のものは實に四百四拾三人の多きに上る。然うして一度びかゝる淵に這入つたものは其處を容易に拔け出られないで、果敢ない波にあらはれてゐるものゝ多いことが分る。

○娼妓の前借高と一日に笑ひを賣る客の數

娼妓の生活を觀るには曲輪に賣られ行くときの身代金から說かねばならぬ。大正拾四年に東京の娼妓と其前借金を調べると、一人當り千二百二拾二圓であつた。其れから稼業年期は六年契約のもの最も多く、五千百五拾二人の中で四千〇八拾九人は六年の年期で、即ち總數の七

五人、七年か拾人であつた。并うして年期

一年の年期であつても前借金五百圓と云ふのがあり、六年のもので三百圓に過ぎないものがある。最も高値は六年で三千圓以上と云ふもの二拾八人に上る。要するに額の高低を通じ、一人當りは如上一千二百二十二圓であつた。然うした前借以外に帳貸と稱し、證書面以外の貸附をうけてゐるものがある。此事は別に說くことゝする。扨て以上のやうな前借で曲輪に身を沈めた娼妓は、常に如何なる働らきをするか、此處に娼妓一人當りの一日平均遊客數を擧げて見やう。

大正七年	十年	十二年	十三年	十四年	昭和元年
二人と一分	二人と五分	三人と四分	二人と五分四厘	二人	二人と〇九厘

此遊客數は、健康で現に働いて居るもの、又花柳病で入院中のもの、或は花柳病以外の病氣で休業中のもの、或は逃亡中のもの、何れにかゝはらず娼妓全體の數に對する遊客數である。故に病氣其他の事情で稼業に就かないものを引去ると、前揭より多くなる。で種々の事柄で不就業狀態にあるものは、總數の約一割と云つて居るから、推して知るべきである。

日に遊廓又は貸座敷に登樓するものは其數がどの位ゐあるかと云へば、驚くべき多數なものである。今一ケ年間の遊客數を次に揭げて置く。

○娼妓の稼ぎと配當の不公平

其處で前に揭げた遊客消費額であるが、之れは酒肴料と娼妓玉代とを合せたもので、娼妓は此酒肴料に就ては何の關係もなく、即ち一文でも配當がない。娼妓の儲けは言ふまでもなく玉代の配當である。其れならば此玉代は樓主と娼妓でいくらづつ分けるものか、此處に娼妓と樓主各一人當りの配當所得額を擧ぐることにする。

樓主並ニ娼妓玉代所得年額	大正八年	同拾年	同拾三年	同拾四年	昭和元年
樓主一人當り所得額	六千二百六拾六圓	九千三百四拾七圓	一萬二千六百八拾八圓	一萬〇三百五拾圓	一萬四百三拾六圓
娼妓一人當り所得額	三百八拾八圓	四百八拾四圓	七百九拾五圓	六百五拾五圓	六百二十六圓

以上を更に月割にすると次の如くである。

樓主並ニ娼妓玉代所得月額	大正八年	同拾年	同拾二年	同拾四年	昭和元年
樓主一人當り所得額	五百二拾二圓	七百七拾八圓	一千〇七拾五圓	八百六拾二圓	八百六拾九圓
娼妓一人當り所得額	三拾二圓	四拾圓强	六拾六圓	四拾五圓	五拾一圓

前に說けるが如く、娼妓は一日平均二人或は三人の遊客に接し、醜陋面を掩ふべき淺ましい勤めをしながら、其得る處のもうけは、甚だ少い。幷うして此内から前借金を拂ひ、場合によると前借の利子拂ひをする。殘りで衣裳を拵へ化粧品を購ひ髮結錢其外の小遣ひに用ふるのである。然るに資本家である樓主は、前表の如く不當な利益を得て居る。斯の如き利益分配は他に其比を見ないところであつて、如何しても搾取の誹りはのがれぬ。昨今公娼改善が叫ばれ、官憲も娼妓を保護し、樓主も娼妓の待遇を改善せりと言はれる。然し其待遇改善云々は、一日二食を三食に改めるとか、郭外への外出を自由に認めるとか、時々慰安會を催すとか、或は昔のやうに娼妓に高値で品物を賣りつけぬとか、苦しめの桎梏を緩めるとか、枝葉にわたる改善であつて、根本問題である利益の分配が改善されないで、昔の型であるから娼妓の苦しむものが絕えない。娼妓も藝妓と同じく稼業中に借金の嵩むものが少なくない。で、此處に其れを擧ぐることにする。

五拾圓以下	百圓以下	二百圓以下	三百圓以下	四百圓以下	五百圓以下	六百圓以下	七百圓以下	千圓以下	千圓以上
六四八人	三五七	七二一	[illegible]	四一九	三二八	二四四	二一七	三〇五	二三〇

之れは東京の娼妓五千百五拾二人に就て調べたもので、此内で前記追借のあるものは四千二百拾五人に上り、總數の八割一分八厘を占め、然も藝妓と比較すれば娼妓の追借額は高く、一千圓以上の追借ある藝妓は拾八人のみであるのに、娼妓には其れが二百五拾人からあつて、如何に娼妓の中には苦しい借金に悶掻くのゝ少くないことが分る。

○世間の裏に隱れたる私娼の稼業狀態

彼の田舍の怪しい料理屋に働らく私娼の一種である酌婦と、抱主と

の關係を見ると、契約の條件は娼妓よりも酷いもので、いかに働らいても借金の減らないやうに出來てゐる、現代で奴隷に似たものは、此種私娼であらう。

たゞ今此處にはかゝる私娼の内幕を詳さに語らないで後日に譲り、今や社會的に問題となつてゐる、東京の玉の井と龜戸に於ける銘酒屋女の稼業狀態を說くことにする。

日に日に擡頭を來せる此種私娼は、藝妓の短所を覗ひ又娼妓の短所をもつかみ、第一が經濟的で第二が簡單主義で押通ほそうとしてゐる。

曩に玉の井の私娼と前借關係を調べて見ると四百九拾三人の中で、家が貧しいとか己れの生計が行詰るとか恁うした貧困の事情でなく、一厘の前借金も借りないで、職業的に此濁り江へ這入つた女は總數に對する一割六分、實數七十八人に上つてゐる。之れなどは數の多い娼妓には見られぬことである。で、殘り四百拾五人に就き前借高を見ると、百圓以下七拾一人、百圓以上百四拾三人、二百圓以上百拾一人、三百圓以上五拾九人、四百圓以上二拾五人、五百圓以上四人、六百圓以上一人で、要するに百圓から二百圓のものが最も多く、何れにするも前借は小額で、負擔が輕いのである。恁うして負擔の輕いのに所得の割合が高い。此點が藝妓や娼妓が抱主と結ぶ契約條件に比し頗る趣きを異にしてゐる。其れは稼高の配當は抱主六分女四分で、前借のない女は分けである。賄主人もちで、それに餘のかゝる衣裳がいらない。女のことを(一)主人出かた、(二)出かた、に分ける。出かたを(イ)通り出かた、(ロ)仕込出か 前述の如く主人し ら客の相手になるものを謂ふ。た、かくの如くに分けている。

其處で遊客を二つに分ける。(一)をオプ、(二)を遊びと云ふ。(一)のオプとは誘はるゝまゝに遊客となり、たわむれの言葉を交はし若干の茶代を與へて歸り去るものを謂ふ。此オプから與へられた茶代のことをオプ代と稱す。此茶代は出かたの所得とならない。悉く娼家の所得となる。遊びは即ち賣笑で、此賣笑料は世の中の景氣不景氣に伴なひその値段に高低があり、又「ジンダイ」と唱へ客種によつて高値安値が定まる。其處で此遊びに二通りあつて(一)をチョン、(二)を「泊り込み」と呼ぶ。チョンとは一人の客に對する時間は極めて短かく、泊り込みは、午前零時頃から朝までに及ぶのであつて、一客に對し比較的長時間に亘り相手となるのである。

私娼街を逍遙すると賢しい女に誘はれて、暖簾をくゞるものが多いやうである。然し其れが悉く遊びの客でなく、茶だけをすゝるオプの客があるのである。其れならば遊客は一日にどの位ゐの數かと言へば、龜戸と玉の井を合せると四千五百人の見込みである。故に彼の大東京での大きな曲輪である吉原遊廓でさへ、昭和二年中の客數は百七拾五萬五千八百人で即ち一日四千七百四拾人であるから、此處と比較すれば、魔窟と言はれる二大私娼街の殷賑さがよく窺はれる。で、私娼の多くは一ケ月の中に生理的の故障で或は休業其他の事柄で五日位

ゐに保存する、故に一ヶ月[illegible]し、[illegible]に徹夜的の客を二拾五人、一時的の客を五拾人合せて七拾五人を對手とし、一時的の客から一人平均二圓、徹夜的の客から一人平均四圓を收めると、

一時的の月收一百圓、徹夜的の月收一百圓合せて一ヶ月の總高に二百圓に上り、抱主との契約が四六であれば、即ち抱主が百二十圓を收め、出かたが八拾圓を收め、無前借者であれば分けであるから双方百圓づつの所得であつて何れも賄は主人もちである。

○時代の流れは歡樂界に消長の波を漂はせる

斯うして藝妓遊に娼妓と互に私娼を比較して見ると、藝妓と娼妓は其待遇が古い型にはまつている。之れは昔の人身賣買の遺風であらう。又此等に對する取締制度も時代後れの制度で此頃の社會狀態に當てはまつていない。故に之に代つて女給と銘酒屋女が擡頭して來る。この擡頭の動機をあたへたのは(一)經濟的から、(二)時代化であるため、(三)女の賣質が或客商賣の女より優さつてゐる。

以上が主なる關係でかゝる歡樂の泉は已に日に日に涸くなる。例へば料理屋に出かけ藝妓を呼むで、單に酒席の相手にするにも一座敷の玉代三本と祝儀を出さねばならぬ。而も一座敷限りでは切り上げられない。此社會で酒席の相手だけで切り上げることを平遊びと云ふ。此平遊びでさへ藝妓の玉代祝儀に一流であれば三圓八拾錢、二流では[illegible]カフエー、[illegible]女給相手に[illegible]しく騒ぐもの、斯うしてハイカラ[illegible]あり、[illegible]に現代的であり、話しは時代的の浮世話しが上手であり、容姿にモダンであるから、今や平遊びを的に古い型の藝妓を相手にするよりも、女給相手に酒を飲むのが經濟的であつて、更に思想的であるから、藝妓の領聞を侵しつゝある。又曾ては大衆的性の享樂對象は曲輪であり娼妓であつたが、之れに對抗すべく現はれたのが銘酒屋女で、第一が安價主義であり、次に簡便手輕であり、更に次は相手の女を選擇が出來るので、蟻の甘きにつくが如く此處が大衆的の歡樂地となつた。其れから斯る色里の淵に這入る女の多くなつたのも、言ふまでもなく經濟的に有利であるから、素々娼婦的の女は此の淵へドシドシ落ち込み、己れも歡樂の味にしたつてゐる。

更にカフエーの女給にしてもこれと五十歩百歩で、彼等の收入は素破らしいものである。某署で銀座一流のカフエー女給の月收を調べて見ると、一人當り平均百五拾圓で、此内から出錢と云つて、多い處で八拾錢、普通五拾錢づつ、女給の方から毎日主人へ拂つてゐる。此出錢に就ては兎かくの批難もあるが、女給に言はせると出錢の高い處ほどチツプが多いそうで、故にカフエーで女給さん入用の募集をしても、出錢制度のない處、又は其出錢の少ない處へは、優良の女給は傭はれるのを厭ふのである。然し女給の收入が多いと云つても、其れは場所柄と店の格式が高い、即ち一流のカフエーのことで、全體に就て

見ると次のやうなものである。

曩に職業事務局で、東京の女給一千五百五拾二人の收入狀況を調べたが、此内で最も多數なのは月收三拾圓以下で、之れは二百七十八人に上り、次は五拾圓以下百八拾七人、四拾圓以下百八拾四人、三拾五圓以下百二十二人、金高の多いものは百圓以下三拾二人、二百圓以下拾三人、三百圓以下一人で、ツマリ數の多い三流のカフエーに働らく女給は、三拾圓内外の月收であることが肯定される。

今や時代の流れは、色里へも變化をあたへやうとしてゐる。　故に時代的に改め時代に迎合するやうに營むものは榮え、其れに伴はないものは衰頽の已むなきに至るであらう。で、藝娼妓此二つは時代の流れに後れてゐる。燈りにたとへれば、曲輪は行燈で、時代の流れに押され、今では漸く行燈の芯を太め油を多く注ぎ、其れから圍りを硝子張りに改めたやうなもので、未だ行燈の形と油だけは舊のまゝである。藝妓は石油ランプで、照りは弱くないが舊式は未だに改められない。其れならば電燈に似たものがあるであらうか、其處まで進むだものは必然性の賣笑婦には今尙ほ見當らない、只彼の妥協性のカフエー、レストランの女達が新らしがつて居るが、さて何處まで變つて行くか其推移のほどは分らない。

漱石の思ひ出（十三）

夏目鏡子述
松岡讓筆錄

五十三 呑氣な旅

夏には子供たちを鎌倉へ海水浴にやつてやらうといふので、鎌倉に居らつしやる菅さんにお願ひして家を見ておいて頂き、私が出掛けてきめて來たのですが、菅さんが又神經質で、あの家は肺病やみが居たからいけない、あの家はどうと中々詮議がむづかしいのを、材木座の、私が若い頃よく行つた大木さんの別莊の近くに、小いほんの二間かそこいらに臺所のくつついてる家を借りることに致しました。一夏百二十圓ばかりだつたと覺えて居ります。

七月の末に學校が休みになると、子供たちがぞろ〳〵其頃文科大學の學生だつた岡田さん（現臺灣の高等學校教授林原耕三氏）に引率されて參ります。程へて自分でも行つてとまつて來ましたが、狹いのにびつくりして、夜になつてみんな とまると家中足の踏み場もない程人で人でいつぱいになる有樣に、こゝでかうやつて修養して居れば、いついくら叱言しても驚かないなどゝ申して居りました。子供と一緒になつて海に入つて泳いで居たさうです。

ところがさうやつて子供たちは鎌倉に居り、私たちは東京に居りますうち、一番末の男の子が猩紅熱に罹つたといふ報知に接しまして、驚いて私が急行しますと、今入院させたところだといふところへ參りました。それからといふものしばらくの間手が離せないので、私も共々鎌倉に止まつて、東京の家には私の母を頼んで居て貰ひました。其うちに病氣の方も次第次第に快調になりかけて參ります。自分でも見舞旁々參りまして、その足で中村是公さんの別莊の方へ行きました。そこで御約束が出來たものか、御一緒に旅行に出るといふ下相談をきめたものらしいのです。

それからしばらくたちましてから、中村さんと一緒に善光寺の方へ旅行するとにしたが、お前が居ないと仕事が出來ない、……てくれと申して迎へに參り……

つて何かと仕度をして居りますうち、愈々明日たつといふ晩になつて、急に私がひどい腹痛をおこして了ゐました。折から松根東洋城さんが來てられていろ／＼世話をして下さるやら、そこへ森田草平さんが見えて手をかして下さるやらで、大分落ちつきはしましたもの丶、まだ不安心でなりません。で、明日の旅行はどうしやうかといふわけ。ともかく一日のばして樣子を見て、それで大事ないやうだつたら出かける、でなければ取りとめといふので、ともかく中村さんも準備してらつしやるだらうから、其事を傳へて、一日おくれて出發するといふ事になり、女中は山出しで用は足りず、夏目が自分で自働電話をかけに參ゐりました。

かへつて來て、今交換孃に叱られたと申しますから、皆さんが面白がつてお聞きになると、何でもチリン／＼とベルをならして交換手を呼び出すが早いか、先方でお入れなさいとも言はないうちに、五錢玉をチンと落して了つたのださうです。だからさあお出になつたから料金を入れて下さいと言はれた時には手にお金がないのです。で、さつき入れたのですがといふわけ。そこで交換手の方から自働電話の講釋よろしくあつて、それでも親切にも、今度だけはつないで上げますけれども、この次からは氣をつけなくてはいけません、そんなことをしては無効ですよとこん／＼と意見されたので、ハイ／＼と畏まつて用

と松根さんなんかは大笑ひをされて居りました。

い丶案配に腹痛も大した事もなかつたので、一日おくれてたつて參ゐりました。鹽原へ行き、それから日光、日光から輕井澤、上林溫泉、赤倉とまわつて、八月三十一日かに十六七日目にかへつて參ゐりました。

これは至極呑氣な旅で、中村さんが御馴染の新橋柳橋あたりのきれいどこをお連れになつての旅でして、夏目さんと御一緒ならとお宅の方でも御安心なさるといふので、何でもかんでも一緒に行けと誘はれての上の、つまりだしに使はれて參ゐつたやうなものでした。お宅の方には、夏目の外に連れがあるのは大方內緒だつたのでせう。歸へつてから笑つて居りましたが、行く先々で、中村さんのお馴染の御茶屋の女將さんや女中さんに手紙や繪端書を出すのに、君は字が上手だからとかその方が專門なんだからと言つて、夏目に代筆をさせる。片方も呑氣なもんで、面白半分繪端書に書くこともないので、この大佛はい丶男でせうなんぞと勝手なことを書いて出すのださうです。ところが奥さんのところへおやりになる御手紙ばかりは代筆でなく、自分で几帳面に書いて居たよなどゝ申して居りました。

こんな風にどこへ行つても呑氣だつたのでせうが、その代りどこへ

はうまいんだからといつて、自分では碁を打つて勝負にばかりおしつけて居られたさうです。藤原では妙心寺に平元医学師が居られて所謂されたものでせう、かへつてから妙心寺派といふ評を得いて遊つて居りました。

其頃、矢來の兄が職をやめられまして、僅ばかりの恩給だけになりましたので、その方へいくらかづゝ補助をして上げなければならなくなりました。ところが前々から私の實家の方にも少しづつ補助をやつて居たのです。兩方ではとてもやり切れない、私の弟も大學を出たのだから、少しでも月給をとつて家のたし前にしてくれなければといふことになり、弟もその氣になつて就職口をさがして居ましたが、この旅中もそれで夏目から中村さんの方へ御願ひしていゝ手蔓があつたやうでした。

上林の溫泉宿の話でしたが、中村總裁にお會ひしたいといつて土地の有力者が訪ねて來ましたところ、宿のものが女ものゝいつぱい下がつてる部屋へとほして了つたさうで、中村さんが、本統に氣のきかないことをすると困つてらつしやると、ナーニ知らないのは東京の奧さん位で、みんな知つてるのに、あいつまだ誰も知らないかと思つて馬鹿な奴だとばかりに茶目振りを發揮して喜ぶといつた工合で、ともかくこの旅行は非常に呑氣なものだつた樣子でございます。

かへつて參りましてから、賴まれたのだと言つて、一緒に行つた葭町か柳橋かの藝者に繪を二三枚書いてやつて居りました。何でも菊の花を描いて、それに俳句の讃をしてゐたことをおぼえて居ります。

九月に入つてから又々持が惡くなりまして、神田錦町の佐藤病院に參りました。丁度私が前から惡くて臥つて居たのですが、行つたつ切りかへつて參りません。何でも又手術をしなければならない病勢で、それにはすつかりお腹のものをきれいに洗つて、それからは流動食で居なければならず、かれこれ一週間位入院しなければといふので、自分でもすぐ入院する氣になつたものと見えて、さう言つてよこした切りかへつて來ないのです。私もどんな工合ひか行つて見たいのですが自分の方で臥せつてる始末に、森田さんに賴んで行つて見て頂くと、

「先生、おとなしくねてましたよ。」

といふ御報告。豫定とほり一週間もするとかへつて參りましたが、まだ床を敷いてねたまゝ人樣にお會ひしたりして居りました。床の上でねながら人に會ふと、大變自分がえらい殿樣にでもなつたやうな氣がするなどゝ申して居りました。

夏目がかうやつて病氣ばかりして居りますのに、私は又、三十迄はやせて居たのですが、この頃はだんく肥えて參りまして、まるで別人のやうに肥えて了ゐました。よく夏目が、今に一人では用が足せなくなつて亭主を使ふだらうなどゝ言ひ言ひしたものでした。でも亡くなる時二十日ばかりの看護をし、それから何やかやで大分瘦せましたが、それからといふもの、前のやうな馬鹿ふとりはしなくなりました。

芝居は死ぬ迄行くには行きましたが、とう〲あんまり好きになりませんでした。けれども義太夫は好きで、前に呂昇の好きな話は致しましたが、此冬文樂の越路が來た時にも、よく一緒に參りました。外にも私の母とか小宮さんなんぞを誘ひ合はして、幾日も幾日も行きまして、何でもどなたかにお貸したお金がかへつて來たのを、これ幸 とみんな――といつても勿論大したお金ではないのですが――越路で使つて了ゐました。

長女がピアノを習ふやうになつてから、よく連れて音樂會に參りました。芝居を見る時には、芝居より棧敷の方を見る位なものなのですが、音樂會の時には非常に几帳面で、いつぞや長女が一緒に行つた時、一寸後ろを振りかへつたら大變怒られたと申して居りました。こんな時にはキチンと御行儀よくして居なければ承知が出來ないのでせう。さうして自分でもキチンとしたなりをして行くので、だらしのない見ともないことをするのは非常に嫌ひでした。

此頃になつて、先年奥さんを亡くされた大學の大塚さんに、後添を貰はないかといふ話がちよい〲あつたものと見え、其うちの一つで、あるところから口がかゝつて來て居るから、どうだらう、自分にはよくわかつ[illegible]

つてるのか、歐洲なんてものは仕様のないもんだ[illegible]たま〲世間へ出ても、それも西片町から大學迄通ふ間位のものだが、それも其間地面ばかり見て歩いて居て、どんな女がそこへらに居るもんかまるで知らないんだらうから默つちやうなんかとひどいことを申して居りました。それ位ですから自分では中々氣のつく方で、道を歩るいて居ても芝居小屋なんかに入つても、いつの間にかちやんとどこそこに綺麗な女が居るとかなんとか見てゐるのです。それに女ばかりではなく、道具屋へ入つてもその調子で、隨分目が早かつたさうです。

これに關聯して面白いことがあります。すぐ近所の大通りに紙屋がありまして、そこのおかみさんがあの邊の町家には珍らしいほつそりした色の白い人でしたが、それが大變なお氣に入りで、と言つてそれをどうしたのかうしたのといふのでは勿論ありませんが、散歩の度にのぞいて見たりして來るのでせう、今日はどうしてゐたとかかうして居たとかかへつて來て言つてるのです。さうして子供たちに、冗談とも眞面目ともつかず、あのおかみさんはお父さんの好きな女の方だから、みんなあの前を通ほる時には恭しく御時宜をしてお通りなさいなんかと申して居りました。別に下卑た口調でも何でもないんですが、そんな[illegible]

だとか何とか申して居たものですが、この女も先年亡くなつて了ゐました。

五十四　二度目の危機

機嫌がよくつてにこ〳〵して居るのですが、暮から妙に顔が火照つてかつ〳〵して居るので、變だ變だと思つて居りますと、又も例の頭がひどくなつて參ゐりました。丁度この前にひどかつた時から十年目にあたります。此年は正月から六月迄が一番ひどくつて、揚句の果はとう〳〵胃を惡くして寢込んで了ゐました。胃が惡くなると、それで段々頭の方はなほつて來るのでしたが、此時は始めは兩方でしたから、隨分大變でございました。

何でもお正月の二日か三日のことです。どうも女中が變だとか何とかひとり語を言つて居りましたが、やがて女中に向つて、そんなことは言はないでくれとか申します。しかし女中は別に何も言はないのですから、怪訝な顏をして、何も申しませんでございますがと答へると、怖いいやな顏を默つて了ゐます。後で私に、

「あんなことを言はせちや困るよ。」

と大層不興氣にたしなめて居りました。火照つた顏と言ひ、とんちんかんなことをいふこと〻言ひ、先づ耳から始まること〻言ひ、又も例の恐ろしいのが襲つて來たのだと感付きましたから、女中達にも子供達にも、あんまりべちやくちやおしやべりでないよと警戒して居りましたら、それでも不便のことですから、何かの拍子にそんなことを話されて了つてはぷり〳〵怒つたりします。すると自分のことを笑つてでも居ると思ふのですか、大きな聲で叱鳴つたり呼びつけて叱つたりするのです。さうして尻尾はいつも私に參ゐります。子供たちがポン〳〵ピアノを叩く。それが又氣に食はないで一喝を喰らはします。からなつて來ると家中は急にひつそりかんとして、全く虎の尾を踏む心持と申しますか、みんな爪先立て〻足音をぬすんで歩るくのです。ちつとでも音を立てやうものなら、コラツとやられて了ゐますといふ工合です。

此方でみんなかういふ工合に警戒して、さはらぬ神に祟りなしと注意に注意をして居りますと、夏目は夏目で一生懸命聽き耳を鋒て〻あらぬ妄想を構へて、疑の上に疑を築いて、根掘り葉掘り飛んでもないことを考へるらしいのです。それも自分の狂つた耳を土臺にして、そこへ突飛な想像をつけたして、いろ〳〵なことを描くらしいのですからやり切れません。それ丈ならまだしも、その自分で勝手にこさへ上げたものからこん度は逆に實際に私たち、殊に私に當つて來るのだからたまりません。

例へば女中が何か自分の惡口を噂してるのを聞いたといふ風に感じますと、それを私が放ちらかしてさせておくか、或は進んで私が言はせるといふ風にとるらしいので、そこでむきになつて突つかゝつて來るのですが、又始まつたと思ふものですから、成るべく相手にならないやうにして居ります。すると默つてればいゝかと思つてる、自分一

人にしゃべらせて、自分を馬鹿にしてると言つて怒ります。

それから自分でもさうなつて來るとしきりに難題を吹つかけるのですが、言つてゝも自分でそれを知りながらこれでもかこれでもかと先へ先へと裏へまはつて考へ進めるのです。どうしたつて氣に入る筈はないのですから、その手には乗りませんよとそれを見て見ぬ振りをしてすまして居ますと、亭主が惡いことをし、無理なことをしてゐると知りながら、默つてゐるとは何事だ。忠言をして人格をなほさせるのがお前の本分ぢやないかと、自分が百も承知で人をいぢめておきながら、いふことがなくなるとこんな難癖をつけるのです。

それでもちやん／＼と小說は書いて居りましたが、終ひには胃と兩方を惡くしたので、一時執筆を中止致しました。それは「行人」でしたが、こんな頭で書いたものか、この小說は隨分疑り深い變な目で人を見てるところが書いてあるかと思はれます。とにかく小宮さんが私に電話をかけて來ましたら、自分で出て行つて、何の用だ、人の細君を呼び出したりしてとか何とか言つてどやしつけます。森田草平さんでも鈴木三重吉さんでも、隨分ひどく怒られたりして、手のつけられないことがありました。

電話では頭が惡くなると始終問題をおこして居りました。其頃家に電話をひいたのですが、非常にベルの鳴るのを氣にしまして、時には

から、知りませんよと言つて切つて來てやつたなど

やらわからずぷり／＼怒つて居つたことなどもあります。

間違つた電話のかゝつて來た時は大騷動です。自分で電話口へ出て行つて、交換手を呼び出し、何故間違つたのだ、どうしてそんなに間違ふのだ、其理由を言ひなさい、大方人を邪魔し馬鹿にするのだらうなどゝ、常にはそんなことをいふ人ではないのですが、かうなると遠慮會釋なくどん／＼とやり込めるので、聞いてる此方がヒヤ／＼する位でした。さうしてそんな間違つた電話なんか聞く必要がない、五月蠅いとあつて受話器を外づしておきます。局の方ではいくら呼び出しても誰も出て來ない。電話に故障があるのだらうといふので係が調べに來る。と受話器がかゝつて居ないのだと知れてお目玉を食ひます。と又歸へつた後からすぐにその故障が始まります。又も係りが調べに來る。それといふので受話器をかけます。かへると又外しておくといつた工合に、頭の惡い時には殊に電話を邪魔にするので弱りました。死ぬ前などにもこんな工合でしたもので、とう／＼離れへ移した位であります。

また寒い頃でしたでせう。女中が咽喉をいためて變なかすれ聲で電話をつぶして居りました。するとそれを大層氣にしまして、何故そんな

る。細工をして怪しからん奴だと言つて叱りつけました。[illegible]細工をしてると見るのが、病氣になるとこの人の癖でした。さうしてこれを非常に嫌つて憎むのでした。

この惡い最中のこと、私が留守の出來事でしたが、留守中男の子どもを外へ遊びにやつてはいけないと夏目が言つてゐたのに、いつの間にやら男の子どものこと、どこへか遊びに行つて了つたさうです。すると出すなといふのに何故出したといきり立つて、一人を廊下から下へ突き落し、一人が門のところへ出たのを追うて、門前の路の上で、人が見てるところでポカ〳〵擲つたさうです。女中二人は怒つて了つて、いくら御主人でもあんまりだ、まだ人の見てないところでひつぱたかれたのなら我慢もするが、こんなことでは今に何をされるかわからない、此上は一時も居られないといつて、そのまゝ私のかへらないうちに出て行つて了ゐます。それを見てゐたのが長女の筆子でいくら父でもあんまり無法なことをすると悲憤の涙にくれて居りますると、やがて夏目が出て來て、女中は出て行つたか怪しからぬ奴だと言ふので、そこで筆子が憤然と、それは出て行きますとも、あんなことなさるんですものと、女中の肩をもつて了つたのです。さあ、さうなると堪まりません。何だ。この生意氣な奴め、父に口答するとはといふわけで、ポカッと來ます。私が歸へつて參ゐりますと、女中は居ず、筆子は口惜しがつて泣いて居る。夏目は夏目であの奴怪しからぬ奴だと筆子のことを煩悶して居ります。今にも刃物沙汰でも仕兼ねまじい形相なので、これは危いと見てとつて、[illegible]から矢來の兄さんのところへ遊ばしてやりました。それにそれですんだんですが、女中をみんな追ひ出して了つたのですから、家内が困ります。そこで筆子が臺所をするのですが、矢張り自分でも心配だと見えて、時々臺所へ出張して來て、今日のおかずはきまつたのかなどゝ五月蠅く訊ねて居りました。

一番可笑しかつたのは、女中がないので、誰も書齋の縁側を拭く者がありませんから、[illegible]で自分でも氣持が惡いのでしたでせう。が自業自得だから誰も構ひません。たまに拭からうとすると、拭かないでもいゝと意地張つて怒つてるのでよりつかずに居りますと、堪り兼ねたと見えて、そのうちに一人で風呂場へ入つて、ガチヤ〳〵言はせて居りましたが、やがて猿又一つになつてバケツを下げて參ゐりました。どうするかと見て居りますと、自分で書齋の廊下に雑巾がけをするではありませんか。餘りのをかしさにこれを見た時、思はず長女と顔を見合はせてくす〳〵と笑つて了ゐました。

それから頭が惡くなると、朝早く四時半か五時に目をさまして、自分で起きて戸をあけ、それから「おきろ」と呶鳴るのです。家中のものがびりつとして一ぺんに起きて了ゐます。それから呶鳴らない時にも、湯殿へ入つて、安全剃刀を自動式の革砥でカチヤ〳〵カチヤ〳〵ととぎます。その音を聞くと皆飛び上つたものです。それからさうなると怖いもんで、てんでに寢床をあげます。それを自分が監督顔にま

家へ足踏みが出來ませんやうなことになつて了ひました。が時が時ですし、うつかり私からじやまつて見たところで、かへつて場合によつては藪蛇にならないものでもないので、まあ〳〵もうしばらくの間辛抱してらつしやい、其のうちには機嫌もなほらうからと、森田さんをなだめて居ました。何しろ森田さんも大分お困りの樣子でした。

といふのは、其時の事情を伺つて見ると、其の方が前の晩から森田さんのところへいらして、夜をとほして酒を呑んで、何やら管を卷いてられて果てしがありませんので、全く自分の手では持て餘して、ともかく自分達が先生と畏敬して居る夏目のところへ連れて行つたら、其方もおとなしくもするだらう、又どうにかなるだらうと思つて、實は思案に餘つて、唯一の救ひの途と連れて來たのがこの始末なのだとのことでした。森田さんこそ飛んだ御難です。

それから程經て五六月頃の、少しあたまの方も靜まつたある面會日の夜のことでした。玄關からは來にくかつたと見えて、臺所口の方から森田さんが覗いて、今日はどうでせうと樣子をお伺ひにいらつしやいました。大分機嫌もなほりかけて居る時だから、怒られたら怒られたで、其時は今度こそ私が責任をもつてお取りなしをするから、何も改まつた文句を言はずに、集まつてられる皆さんの中に入つてらつしやいと申しますと、それではといふので上がり込んで一座の中に坐はつて居られました。別に先生は默つ……ち、何にしに來たとか、怪しからん奴だとかとも言はれず、それなり有耶無耶のうちにこの事はすんで了ひました。

其頃女の方でいらつしやる方が中々ありましたが、其うちで變はつてるのを二三お話し致しませう。

自分でも『硝子戸の中』に書いて居りますが、自殺をするすると仰言る若い女の方がちよい〳〵いらつしやいました。この方は近所の喜久井町に宿をとつて居て、朝出がけに宿のかみさんに、今日は死ぬかも知れないから歸つて來ないかも知れません。若しかへつて來なかつたら後をこれ〳〵にしてよろしくとか何とか言ひおいては出るといふ一風も二風も變はつた方とやらで、よくいらしては夏目に身の上話や何かをなさいます。と夏目は、人樣のさうした死なねばならないなどゝいふ不幸な話には人一倍同情する質なものですからひどく同情しまして、歸へつた後で、氣の毒だなとか、どうとかならないもんだらうかなどゝひどく氣にやんで居りましたやうでしたが、其後少し機嫌がよくなりましてから、この話の出た時に私が申しますには、どうも少し變ぢやありませんか。死ぬ死ぬと廣告をして歩るいてるものもないもんだし、死ぬからどうでせうと人に相談に來る人もない、もんだ

かないのは癪ですよと言つて居いますうち、何かの雜誌の六號にこの女のことが書いてありました。雜誌の有ることないことを拔き集める六號活字欄なんかあてにはなりませんが、とにかくそれによりますと、其女といふのが、中々のしたゝかもので、手をかへ品をかへて夏目をだましに行つたがさつぱり驗がないので、此頃は河岸を代へて佐藤紅綠さんのところへしきりに行つてるといふことがありました。そこでそれ御覽なさい、食はせものでせうと申しますと、夏目はいやな顏をして默まつて居りました。

さうかと思ふと、女子大學の學生だといふ方が又しきりにいらつしやいまして、先生とお二人切りでこん度雜司ヶ谷を散歩しませうなどと言つて見たり、ねてらつしやい、按摩を致しませうなどゝ言つたりするので、一人ものぢやあるまいし、何を言つてゐるんだとばかりに急にいやになつたりして居たこともありました。かと思ふと、又數學ばかりやつてるといふ女の方が見えて、これ又散歩をしませうといつた按配に、おれが爺だと思つて、やたらに妙な女が訪ねて來やがるなどゝブックサ言つて、辟易して居たことがありました。

大正元年頃から、私は人にすゝめられて當時流行した岡田さんについて、岡田式の靜坐法を初めまして、自分では大變工合がいゝやうに思ひましたし、又岡田さんなんかも夏目のやうな人にはきつときくと言つてられましたが、夏目はそんなことをする氣もありませんでした。しかし大概人のやる事には干渉しない質で、私がいゝと思つてやつてることは全く私の自由に放任しておいてくれました。

五十六　自費出版

岩波さんが書店の商賣をお始めになつたのが此頃であつたでありませう。近頃でこそ岩波書店も押しも押されもせぬ堂々たる天下の大出版者でありますが、この創業當時は、さう申上げては失禮ですが、まあ〱微々たるものでした。それで時々お金の融通を私どものところへ頼みにいらつしやいました。

或る時岩波さんが夏目のところへお見えになつて、何かとお話しになつて居ります。と、夏目が私を書齋に呼びまして、いきなり株券を三千圓ばかり持つて來て岩波へ貸してやれと、藪から棒にかういふのです。何が何だか一向樣子がわからないので、一體どういふわけで株券を御用立てするのですかと訊ねますと、いや、話はわかつてるんだと面倒臭がつて居りますから、それではいけません、よく伺つた上でなくてはと訊ねますので、そこで事情を言つてくれました。

事情といふのは、其頃岩波さんがどこか大きな圖書館あたりの注文を一手に引きうけて、書物を澤山取り揃へてお納めになる、さうするとそれについて相當の利益があるといふ確實な商賣の口があるのですが、大事なお金がない、そこでかういふ確かな、間違ひつこのない話

通なんだから、その爲めにどうか三千圓ばかりしばらくの間貸してくれないかといふお話なのです。そこで仕事は確かだから貸してやつてもいゝが、家には現金がないから、そんなら少しばかりある株券を貸せるから、それを銀行で擔保にして資金を調達したらいゝだらうとかいふのでした。

一體其頃私どものところでは、長い間の貧乏生活からやゝ救はれまして、こゝ何年かはいゝ案配に、隨分の大病もしたこともあり、又多人數の子供たちも揃つて大きくもなつて、何かと物入りもあるのでしたが、どうやらかうやら少しづゝ殘る期間になつて居りました。勿論大した纏まつたお金の殘る道理もないのですし、其當時にあつては本が賣れるといつて見たところで、近頃のやうな大量出版だの何だのといふ派出なこともないのですから知れたものですが、それでも少しづつ殘るものを、其儘銀行にねかせておいてもつまらない。確かな會社の株券を少しづゝでもいゝから買つておくと、自然子が子を生むやうになつていゝものだと教へられ、そんなことには一圓無頓着だつた私どもも、成る程それはよささうだと感心しまして、丁度小宮さんの叔父さんで、ロンドンでお識り合ひになつた犬塚さんが銀行の重役をしてらして面倒を見てやらうと仰言るのをいゝ事にして、小金がたまるとは犬塚さんのところへお預けして、少しづゝ株券を買つて頂いておいたのです。その株券を金庫も何もないし、銀行の保護預りなんぞといふことも知らないので、たゞ家の用箪笥の抽斗に入れておくのでした。

そんなわけでしたので、岩波さんの事情を伺つて見れば、お貸しするのは差支ないのですが、ともかく三千圓といへば私どもにとつては大金です。なる程、夏目にも岩波さんにも當事者同志双方間違がなければ何のこともないのでせうが、人間のことですからいつ何時どういふことがないとも限らない。其時になつて、萬一面白くないことなどがあつては困るから、ともかくどちらがかけても第三者にもわかるやうな契約をして頂きたいと、私が株券を持つて出て、岩波さんを前にして一寸開きなほつた形で申したものです。岩波さんはこれは樣子が違ふぞとでもお思ひになつたものか、びつくりした顔をしていらつしやいました。一體かういふことには不氣な夏目のことですから、そんなに迄するのは氣の毒な位にも思つたでせうが、ともなく私のいふところに從ひまして、別に君を疑ふわけではないが、細君があゝ迄いふのだから、契約は契約としておいてくれ玉へといふことになつて、岩波さんも手續きをお踏みになつて、株券をお渡し致しました。

かういふ例があつてからといふもの、時々大口の註文などにお金が入ると、よく私どものところへいらして、事情を打ちあけて融通をつけていらつしやいました。或る時、やはりかういふ工合で融通をしたのが、期間が來てかへしていらした小切手が、たしか三千圓だつたと思ひますが、それを私が受け取つたまゝ用箪笥に入れておきました。いつもお金を入れておくところなのです。其うちに私も外出をしま

す、上の娘たちも居りません留守の間に、丁度渋い方にお金でも出して上げやうと思つて自分の財布をあけて見るとお金がなかつたのでせう。私がかへつて参りますと、一寸入用があつたから、そこから金をいくらく出したよと申しますから、さうですかと言つて居りますと、部屋の隅の屑籠の傍に小い紙切れが一枚落つこちて居ります。何でせうと思ひまして拾ひ上げて見ますと、つひ先頃岩波さんから受け取つたばかりの三千圓の小切手ではありませんか。吃驚しましてどうなさつたんですかと尋ねて見ますと、誰も居ないので金の在所がわからない。そこで一番小い娘の愛子にお金はどこに入つてるかと尋ねますと、そこの用簞笥の中だといふことに、入用だけの金を出したまでだといふので、自分ではそんな小切手なんぞがあるとも知らず、下へ落つこちてもいらない紙切れでも落ちた位にしか思つてなかつたものと見えます。こんなことには全く無頓着なものでした。すぐに見付かつて拾つたからいゝやうなもの丶、屑籠の中で焼けてでも了つたら一騒動やるところでした。

とにかくお金にかけては前にも申したとほり無頓着な性分で、私が時時机のわきにある用簞笥の中にお小使を入れておくのを、たまるとは人に借りられたりする方が多いのでしたが、中には随分ひどく図々しい方などがあつて、晩年なつてこのやり口が悪どいので、とうく夏目を怒らして了つて、段々足の遠くなつた方なども二三ありました。だからよく夏目が、さういふ連中などつまりふたりに居るのだから、おれは私を酷くしてくれられないなどとこぼしたりしてきまして、几帳面に誰それにいくら貸したなどと帳面につけたりしたことがありまして、今でもその帳面が残つて居りますが、なる程それで見ると、短い期間だけのほんの一部でしかないのですが、中々盛なものです。で、よくおごりつこたらてんでに厳格のわり前で行くんだよなどゝ申して居りました。そんなわけもあり、旁々自分で持つてると何か買ひたくなつて困るといふので、一切お金は自分が持たないで、お小使を私が入れておく外、少し入用のもので高いものなどになると、これは小使以外だよなどと断つて買つて居たものでした。

岩波さんのそんな工合に融通をして上げるにしましても、前にも申したとほり至極呑気なもので、時には銀行に少しばかりの定期預金などがあつて、それを途中で出して貸して上げるといふやうなとがあつても、そうなつたらどうなるものやら、そんなとは一向存じませんので、大説の説明をしますと、さうかとか何とか上の空で聞いてるといつた工合でした。

そんなこんなの岩波さんとの関係もあつて、大正三年の夏だつたと覚えて居りますが、『心』を出版するについて、方々の前々から関係のある書店からも出してくれるやうにといふ申出もあつたのですが、岩波でも出して欲しいといふとになり、どゝそれでは自費出版をしやうといふとで、岩波から出すとになりました。ところがこれ迄は一切出版のことは出版者がやつてくれたのですが、今度は一切合財面倒

は岩波へまかせるとは言つても、まだ創業當時の素人であり、一々相談をしてやらなければならないので、中々手數がかゝる樣子でした。そこへ持つて來て岩波さんが理想家で何でもかんでも一番いゝものを使つてひどく立派なものを作らうとする。いゝものは結構に違ひはないが、それならそれで高く賣れなければならないとか結局損をしなければならないとかいふ羽目になるので、そこで夏目が君のやうに何もかもいゝものづくめでやらうとしちや引き合はない。表紙がよければ紙を落すとか、用紙がよければ箱張りをもう少し儉約するとか、何とかそんな風に工面していゝ工合に本といふものは作るものだ。元手ばかりかけても、これが賣り物だといふ事を少しも考へなくては、結局皆目儲けがなくなつて了ふぢやないかと小言を申します。ところが岩波さんの方では、いくら小言を言はれたつて、何でもかんでも綺麗な本を作りたい一方なんだから、顔見る度に小言です。

それでも『心』は自分で裝幀をするといふので、表紙も見かへしもみんな自分で指圖してやつたやうです。表紙は橋口貢さんから贈られました石摺りから取つたものださうで、其後亡くなりまして全集を出す場合に、あゝでもないかうでもないの末に、結局全集の表紙には、夏目自身の裝幀した『心』の裝幀をそつくり借りるのが一番よささうだといふ事になつて、前の全集でも今度の普及版でも、みんなその『心』の裝幀によつてやつて居ります。

其後『硝子戸の中』の裝幀も、自分で更紗模樣の中から取つてこさへたやうでした。

自費出版ですから、最初の費用は一切私の方持ちで、その代り段々儲かるに連れて、岩波の方でそれを償却して行くといふ契約でして、それを年二期づゝに計算して、半期半期に儲を相半して持つて來るといふ随分やゝこしい方法でした。が亡くなる迄これを繰りかへして居りましたが、どうも面倒でたまりませんので、亡くなつてから普通出版に改めて了ゐました。

此の頃のことでしたでせう。いろ〳〵世話になるからといふ積りかお盆や暮かに岩波さんが、三尺四方位の卓を持つて來て下さいました。見るからに不景氣なので、どうせ呉れるなら紫檀の卓でもはづめばいゝとでも思つたものか、夏目がつけ〳〵と惡口を申します。すると岩波さんが、そんなに先生お嫌ひなら、折角持つて來たのですが、それぢや又持つてかへりませうとあつさり仰言ると、夏目も貰ひそこねちや損だとでも思つたのか、いや持つてかへるには及ばないとすまし込んで申しますので、みんなで笑つて了ゐました。

「フィルム」の配給組織と國產品保護問題

柳井義男

活動寫眞「フィルム」は映寫を唯一の目的とするものであるから、製作から映寫に至る迄の行程が圓滑に進行することを要する。此の爲めには他の商品に於けるが如く、「フィルム」の頒布を専門とする獨立配給者の存在することが便利である。のみならず、かくすることが製作者と興行者との間に在て、製作者と觀客との間に於て、眞に「フィルム」の需要價値を定め、自由競爭の立場に於て、「フィルム」の質的向上、從つて亦事業の經濟的發展を期する所以であると思ふのである。然しながら此の主張に對しては實際家側の反對がない譯ではない。今實際家側の云ふ所を要約して見れば次の如くである。今日の「フィルム」は商品化してはゐるが、他の商品と違つて作れば必ず賣れるといふ品物ではない。從つて製作者は配給並興行の各手段を統制し得るのでなければ經濟上の危險を脫することが出來ない。丁度新聞事業が營利事業としては自己の統制圈內に支局や販賣店等を有するのと同理であると云ふのである。之に依て見れば、前者が理論派の主張であるに對し、後者は實際派の主張であると云へるのである。で、此の兩主張は各國の映畫界に如實に具現せられてゐるのである。例へば我國に於ては一方に直營館(製作者が直接興行する常設館)、特約館(製作者又は配給者と常設館經營者との間に「フィルム」配給の定率賃貸料契約を爲すもの)及步合館(製作者又は配給者と常設館經營者との間に「フィルム」配給の步合率賃貸料契約を爲すもの)が存在するに對し、他方には自由館(常設館經營者が自由契約に依て「フィルム」を選擇上映するもの)が存在してゐるのである。而かも我國に於ては獨立の配給者が殆どないから、製作者が配給者を兼ねて直接興行者との間に「フィルム」の配給契約を爲してゐるのである。この事は何を物語るかと云へば、製作者が興行者に對し常に優越的地位に立つてゐることを示すものである。昭和二年の內務省の調査に依れば、我國に於ける常設活動寫眞館の配給種別は、直營館一一三館(前年に比して六館減少)、特約館五二一館(前年に比し四七館增加)、步合館二九七館(前年に比し二七館增加)、自由館二四一館(前年に比して四七館增加)となつてゐる。以上の中直營館、特約館及步合館は程度の差こ

くる等の手段を講じてゐたのであつた。併しながら、斯業の基礎、地盤其の他經濟的及技術的關係から、國產品の之に對する競爭は甚だ困難なる實情にあつた。之が爲めに數年來朝野の議は期せずして國家的保護奬勵の方策を講ずべしといふに一致を見たのである。既に一、九二五年には同國「フイルム」製作業者、賃貸業者及常設館主は共同委員會を設けて右方法に付て成案を立てたことがあつた。又一、九二六年十月同國「スカパラ」に於ける保守黨大會に於ても、本問題に關する決議を見、同年秋の帝國會議亦上述「フイルム」の國民に及ぼす影響の重大なること、殊に帝國內各地の事情を相互に周知せしむる上に於て其の最も有效なることを認め、一般經濟分科會に於て本問題を攻究せしむることにしたのである。そこで、同分科會は本問題に付調査研究の結果國產「フイルム」の保護奬勵の爲には、(イ)現在の關稅に依る保護の擴張、(ロ)「フイルム」の下見無し且包括的賃貸契約の禁止、(ハ)一定率國產「フイルム」の強制的供覽等の方法のあること及帝國內に於て「フイルム」の需要及製作の最も多き本國が率先して之に關する措置を取れば其の諸屬領に及ぼす影響多大なるべきことを指摘したのであつた。此の分科會の進言に基き帝國會議は本問題に付、帝國內にて供覽せらる、國產「フイルム」の量を增大することの緊要なるを認め帝國內各政府が本問題及對策に考慮を加へ處置すべき現狀に對應する爲速かに有效なる方法を採らんことを勸說す」との

加へられ、爾來同國商務省は之が保護
七年の帝國議會に活動寫眞「フイルム」法案を提出するに至つたのである。

右法案の目的は從來「フイルム」賃貸業者と常設館主との間に於て、「フイルム」の配給契約を爲すに際し、何等下見をなさず(Blind booking)且優劣品取交包括的に(Block booking)契約を爲す慣習行はれ、此間殆と國產「フイルム」の食入る隙なき事態を矯正し、進んで一定比率の國產「フイルム」の賃貸、供覽を強制的に行はしめんとするに在る。で、大略前述當業者共同委員會及帝國會議分科會の指摘せる所と其の揆を一にしてゐるのである。同法案の骨子とする所を擧げて見れば、(一)特殊のもの(時事、科學「フイルム」の類)を除き、總て「フイルム」は商務省に登錄するを要し(國產品は其旨登錄せらる)、右登錄は下見濟の「フイルム」に限られ、又契約の目的たる「フイルム」は爾後六ケ月內に供覽せらるゝを要すること、(二)賃貸業主は契約の目的として、一、九二八年度七%半、爾後一、九三五年度二十五%に遞增する比率の國產「フイルム」を包含せしめるを要し、又常設館者は、一、九二九年度七%半、爾後一、九三六年度二十五%に遞增する比率の國產「フイルム」を供覽するを要すること、(三)國產「フイルム」と認めらるゝには、製作者が英人又は英人の

上か英人又は英帝國內に住居する者に支拂はるゝことといふのである。

今右法案に對する同國一般の批評を概見するに、其の盲目的契約及包括的契約を禁止しやうとする規定に付ては、殆ど贊成に一致しており、一定比率の國產「フイルム」の强制的賃貸及供覽に關する規定に付ては、從來外國「フイルム」と競爭し得なかつたことは全く當業者の罪であつて、右規定の結果は却て劣等「フイルム」に保護を與ふることとなり、公衆及常設館主を犠牲として製作者を利益するものであり、殊に法案が「フイルム」の數量のみに着目して、其の質を考慮しないことは、社會的見地から面白くないばかりでなく、右規定の結果外國の反感を招く憂がないとは言へぬといふ論難を加へるものがない譯ではない。然しながら、概して外國「フイルム」の獨占が極端に確立して居る現狀に顧み、何等の保護を與へないで、競爭を强ふることは不公平であるばかりでなく、强制比率の例は獨逸にもあり、且右國產保護の結果は失業を救濟し、國庫の收入を增加し、外國資本の國內流入をも招來し、又今日の公衆の嗜好にては安價なる「フイルム」に對する欲求も決して少くないから、機會さへ與へれば國產品に對する需要も相當あるべく、且國內斯業繁榮の結果は漸次優秀なる國產「フイルム」の製作を見るに至るであらうと云ふ見解が一般に行はれたのである。尤も勞働黨は同年三月十六日下院に於ける本法案第二讀會に、「盲目的契約を制限し國內製作業者に公正なる競爭の餘地を與へんとする法案には贊成するも「フイルム」の賃貸公衆の嗜好を無視して商品の供給を强制せんとする本條には贊成し得ず」との修正を動議したのである。然し結局の所本法案はその後多少の字句の修正を見たるのみで議會を通過し、「一九二七年活動寫眞「フイルム」法」なる名稱の下に立派に法律となつたのである。

我國に於ては以前外國「フイルム」の供給を仰ぐに付、主として所謂特許契約に依り盲目的且包括的の取引を爲して來たのであるが、最近に於ては外國會社の多くは日本內地に支社を置き、國內の常設館主と直接「フイルム」の賃貸契約を爲すのを例としてゐるから、殆ど全部が自由契約の形を取つてゐるのである。又我國產「フイルム」の數量は遙かに外國「フイルム」を凌ぎ、本數に於ても卷數に於ても全長米數に於ても、大體外國品三に對し國產品七の割合を保持してゐる。（昭和二年末內務省調査に依る）之を常設館の上映「フイルム」別に依て見るも、主として日本物を上映する館は五五七館、日本物及外國物を混合上映する館は五五六館といふことになつてゐる。（同上調査に依る。）以上の樣な譯で我國に於ては今日の所外國の事例に見るが如く、外國「フイルム」の盲目的契約禁止、乃至國產「フイルム」の强制上映等を國策として實施することは、「フイルム」の國際的利用と內外「フイルム」の現狀とに徵し、俄かに其の必要を認めないやうである。然し將來の問題としては必要時に備ふるだけの準備を怠ることは出來ないと思ふのである。

馮玉祥

布施勝治

一

私は去る七月十四日馮玉祥の招待を受けて、外交大樓における午餐會に臨み、彼と四年振りの握手を交はす機會を得た。

私が初めて馮玉祥と相知つたのは、民國十三年の秋、彼が熱河より戰をかへして、北京クーデターを敢行し、曹錕大總統を幽閉して、直隷派の權力を一朝にして顛覆したときのことである。クーデターの翌日（十月二十五日）私は馮玉祥を北苑の兵營に訪ひ、彼が班師回京を決行した眞意の那邊にあるかを叩いたのである。

當時私の最も知らんと欲したところは、彼のクーデターの目的が誠に段祺瑞を推戴するにあつたか、否かの點であつた。この問題を中心として、私と彼との間に、左の如き問答がかわされた。

（私の問）貴下の布告中『賢達の士に更迭の局面打開を請ふ』とあるは、段祺瑞を指すか。

全般を指したのである。

（問）天津に使者を（段祺瑞推戴の）派したと云ふは事實か。

（答）特に正式の使者は出してない。

（問）もし段祺瑞が北京に來れば、彼をして曹錕に代らしめるか。

（答）段はしかし速急には北京にやつて來ないであらう。曹錕大總統の地位は國民會議によつて決する。國民會議に列するものは段一人でなからう、いづれとも豫斷を下しがたい。

以上の如く馮玉祥の答辯は頗る曖昧なものであつた。むしろいづれかと云へば否定的であつた。これによつて察するも、段祺瑞は決して馮玉祥意中の元首候補者でなかつたことが明瞭である。當時已に馮玉祥の胸中孫文を迎へて革命の大成をはかるの計劃が廻らされてゐたと云ふはあながち無稽の説でなかつたかも知れぬ。しかしその頃の北支那の形勢は、南方から飛び入りの孫文を以てしては到底收拾し得べく

執政府を樹立することゝなつた。しかし執政府は臨時に奉天軍と國民軍との所謂『二つの椅子』の上に坐するの苦境にたつたが、段祺瑞としては二者のうち、最初から奉天派の方により多く依賴してゐたらしい。翌年二月、北上せる孫文は北京到着後間もなく病死し、奉天軍の保守的勢力はグン／＼北京に侵入して來た。馮玉祥の折角見事に打つたクーデターの一幕も、その結果において、全く彼の志と相反するの狀勢を招來した。

馮玉祥はこゝにおいて快々として樂まず、張家口に去つて、鋭意國民軍の編制改革に專心し、ひそかに北京の執政府に對して、監視的立場にたつた。

しかし、私は今より顧みて、民國十三年の北京クーデターは、たとひ馮玉祥の豫期に反した結果に終つたにせよ、なほ且つ支那革命史上極めて重要なる出來事であつたと信ずる。馮玉祥はこのクーデターによつて、たしかに支那の革命を深刻化した。民國革命史上に新らしいエポックを打開した。民國革命はこの時からして、軍閥革命から民衆革命に移つた。『赤いロシア』の手を導き入れて、支那革命に『赤味』を加へたのもこの時からのことである。民國革命後十三年間なほ依然として國都の中央紫禁城内にその存在を續けてゐた宣統廢帝を逐ひ出したのも、北京クーデターの結果である。

二

辮髪の末裔、馮玉祥はたゞ新民屯に駐屯せる第二十鎭の一營長に過ぎなかつた。しかし彼はその當時已に北方軍閥の間にかくれた『革命の卵』であつた。

武漢革命の勃發するや、第二十鎭に從つて灤州の秋季演習中であつた馮玉祥は新派の將領王金銘、施從雲、白亞雨等と相はかり、密かに張紹曾を介して、宣統帝に退位を要求し、同時に武昌に通電して、清廷の退路を斷つの計をめぐらしたが、事つひに成らず、王、施、白等は捕へられて銃殺に處せられ、馮玉祥も亦保定に護送された。これがそも／＼馮玉祥の『革命戰への初陣』であつたのである。

民國四年、袁世凱が帝制運動をおこしたとき、馮玉祥は雲南の蔡鍔討伐を命ぜられ、敍府を發して南下したが、途中却つて蔡と妥協し、軍を成都にかへした。彼は更に四川將軍陳宧に屢々勸告の電を發して、四川省の獨立を促し、袁の帝政計劃に一大頓挫を來たさしめた。

民國六年張勳の復辟に際し、馮玉祥は廊坊に駐屯せる第十六旅を率ゐ、段祺瑞軍の先鋒隊として、七月十二日北京をつき、眞先きに安門を陷落し、天壇の復辟軍を投降せしめた。

かくして馮玉祥はその青年士官時代において、已に幾度か支那革命のために、少なからぬ事蹟をあげた。世人は馮玉祥を評して豹變常なしと云ふが、その豹變常なく、迂餘曲折に富んだ閲歷も、よくこれを仔細に檢討するに、終始革命を以て一貫してゐることを認めざるを得ない。彼は革命の變局毎にその舞臺にあらはれ最も重要なる役割を演

じた。而して彼はその都度歩一歩と革命の道程に深く足を入れ、歳とともに左傾した。

彼は清朝陸軍の一兵卒より身をおこし、民國革命の劈頭これに加はり、袁世凱の帝政と張勳の復辟運動と戦ひ、次いで吳佩孚等の舊式軍閥討伐の配下にあり乍ら、これを内輪から裏切つて、根柢より顛覆し、北京クーデターの後、ロシアの後援を利用し、南方と提携して、先づ段祺瑞を逐ひ、次いで張作霖を向ふに廻はし、北閥戰爭のために渾身の努力を傾倒した。

—(馮玉祥)—

三

馮玉祥の張作霖に加へた最後の打撃は、民國十四年秋、郭松齡をして叛旗を飜へさせた一幕である。自ら手を下さず、敵の内部に喰ひ込んで、叛亂をひきおこさせた手並はまことに嬉いものであつた。當時奉天軍の精鋭を擁つてゐた郭松齡の叛起は、張作霖にとつて、實に致命的打撃であつた一時北支那を風靡した張作霖の權勢も、民國十四年の秋は全く風前の燈火であつた。



馮玉祥

際にさし迫つて、俄かに頽勢を挽回し、

つけて、これを叩きつけることに成功した。まことに奇蹟的の勝利と云はねばならぬ。

郭松齡の叛起計劃の失敗後、馮玉祥は直接奉天軍と對抗することゝなつた。馮張戰爭はその最後においてこそ、馮の勝利に歸したものの、その當初においては、馮軍常に利あらず、屢々慘憺たる敗戰をくりかへした。民國十五年三月、國民軍は天津をすて、四月さらに北京撤退を餘儀なくされた。

民國十五年の春、馮玉祥は四圍の形勢の不利なるを見て、西北邊防督辦及び國民軍總司令の職を張之江に讓り、飄然として『赤いロシア』に遊んだ。ソウエート當局は失意の馮玉祥を迎へるに、さながら凱旋將軍を遇するかの如き大歓待を以てした。

馮の訪露の目的は那邊にあつたか。當時馮はいよ〳〵「赤化した」

の前途を雙肩に荷ふにつとめたと云ふけれども、それは國民一部のタクチツクスに過ぎない。彼はかうしてソウエート當局の歡心を買ひ、以てロシアから、物質的援助を得んとしたものである。敗軍の將馮玉祥は、ロシアを措いて他に救援を求むべき途なしと考へたのである。

馮玉祥がロシアに去つて後、國民軍の旗色は益々振はなくなつた。民國十五年の夏、南口つひに陷落し、同時に熱河方面の防備も破れ、國民軍は張家口を放棄して、遠く甘肅方面に敗退することゝなつた。馮玉祥が赤露漫遊を決意したのは、實に、南口陷落、國民軍大敗退の報を手にしたときのことである。かゝる場合凡庸の武將ならば、士氣更らに沮喪し、益々深く逃げをはるところであるが、流石は馮玉祥だけある。彼は國民軍の最大危急時に決然起つて歸國の途についた。そこに彼の革命的武將としての價値が認められる。

民國十五年九月十七日、馮玉祥は綏遠の五原に着し、敗殘の國民軍を糾合して、悲壯なる宣誓式を行ふた。これを五原誓師と云ひ、馮玉祥一代史上最も記念すべき出來事である。

四

馮玉祥が五原誓師によつて、臥薪嘗膽を誓ひ、捲土重來を策したとき、彼の周圍に集まれるは、連戰連敗の後、更らに長途の行軍で、疲勞困憊の極に達したまことに慘めな敗殘兵であつた。人口稀薄にして飲食に乏しい所をさまよひ歩くに任せられた兵士等には、殆んど飲食すべきものがなかつた、衣類も疾くに底をたゝいた、武器だけは馮玉祥のロシア土産で、多少補充はついたものゝ、まだ／＼十分とは云へない。それから五原を發し、疲れ切つた足を引き摺りながら、甘肅から陝西長安へ着くまでの苦心は實に慘憺たるものであつた。去る七月十四日、外交大樓における招宴の卓上演說で、馮玉祥は當時の苦心について左の如くもの語つた。

民國十五年九月十七日、余は五原で西北國民革命軍總司令に就職した。この時、軍隊は南口から退却して來たが、その間二千餘支里、將士は疲勞困憊全く隊をなさずと云ふ有樣であつた。殊に窮したのは食物の缺乏で、たゞあるものは羊肉と臭豆腐の二つである。羊肉と云へば結構に聞えるが、毎日食べては堪まらぬ。着るものは羊の毛皮これまた贅澤さらに見えるが、實はなめしてないので、こわばつて仕方がない。甘肅の寧夏附近では、二三百里の間、二日ぶつ通しで步いても、人家は一軒も見當らぬ。甘肅から陝西の長安に着いた時は、長安城の包圍八ケ月の後で、城内で餓死せるもの二萬人、その慘狀見るに忍びぬものがあつた。夫れから河南に出で、武漢と南京兩派の調停に當り、河南の東部及び北部に轉戰し、一省一區の力を以て、數省數區の力と戰ふこと數ケ月の後、漸やく今日京津の地に進出することを得た……

この日馮玉祥は更らに左の如き自家宣傳の一節を披露に及んだ。

馮玉祥は不鮮明な男だと云ふ人がある。馮は第一日に「不知道」

と云ひ、第二日目には忽ち飛び出して來る……と云ふのである。實はそんなこともたしかにやつたことがある。民國十三年の北京クーデターはその慣例の一つである。あの時は早くから孫岳と約束がしてあつたのであるが、事前にこれを公言することが出來なかつたのである。

馮玉祥には一つ最も明白な點がある。それは兵士と困苦をともにすることである。兵卒は八時間、將校は九時間働く。官高ければ高いだけ、眠るに遲く、起きるに早い……

五原誓師以後における馮玉祥の難行苦行は全く行者生活そのものである。彼は兵卒と全然同一の服裝をつけ、食事も區別なしである。汽車旅行に際しては、總司令部の參謀將校は一等車にのるが、彼自身は兵卒とともに無蓋車にのる。彼は午前五時に起床し、夜半まで勤務する。彼は好んで自ら剃刀と剪刀をとつて、兵卒のために髯を剃り、理髮してやる。彼は人に語つて、曰く

余が兵卒の理髮をなすは幾多意義のあることである。即ち(第一)快刀亂麻を斷ち、舊をすてて新をとるの精神涵養。(第二)理髮職人階級を賤む觀念の打破。(第三)勤勉、節儉及び互助の精神養成。(第四)官吏は人民の公僕であるとの觀念の表現。(第五)士官の生活の兵卒化等がそれである……

馮玉祥はまた屢々病院に負傷兵を訪ふて、自らその手足を揉んだり、洗つたりしてやる。彼は常に士卒とともに土工に從事し、所謂兵工政策の實踐躬行にあたる。あの巨大な體軀に、天秤棒をかつぎ、土石を運ぶ有樣は、[illegible]

[illegible]千石にな[illegible]い。膂力強き彼にとつては或はた[illegible]の相棒を承る士官はたまつたものでない。かつぎのお相手をやらされ、大いに弱つたと云ふ話である。

かつて私はモスクワにあつた頃、一九二〇年五月一日の有名な『全露土曜勞働』に參加し、鐵道工事に當つたことがあるが、この日レーニンも亦枕木の運搬に從事した。しかし、、、レーニンと雖も、その實際の筋肉勞働に當つたのは土曜勞働日の如き特種の日に限つた。然るに馮玉祥はこれを殆んど日常の仕事としてゐる。東西各國の武將、もしくは政治家にして、筋肉勞働、粗衣粗食、その他の苦行難行の實踐躬行において、馮玉祥の眞似をなし得るものは幾人あるであらう。この點レーニンも彼に及ばず、ムッソリーニも跣足で逃げ出さゞるを得ないのである。

馮玉祥の配下にあつては、飲酒、賭博、喫煙等、一切の道樂が許されぬ。甚だ窮屈なものである。加ふるに嚴しい軍紀に服し、行者的苦行に當らねばならぬ。しかし、一度この難行苦行をおし通し、あらゆる困苦缺乏に堪へたものは、馮玉祥の信頼益々厚く、メキ〳〵と出世するのである。現在國民軍の中堅をなすものは、主として彼とともに甘肅行軍の辛酸をなめた士卒である。

思ふに馮玉祥をして革命家としての修養を完成せしめたのは、實に五原誓師以後の[illegible]

なからう。

五

昨年春私が張作霖を順承王府に訪ねた時、彼は『余は閻錫山とも、また蔣介石とも、妥協を希望し、且つそれを充分可能のことゝ考へてゐる。たゞ一人馮玉祥とは斷じて妥協を許さぬ。余はあくまで彼を討つ決心である』と語つたことがある。而して馮玉祥も亦直隷派の驍將吳佩孚を一蹴して後、その眼中にある對手はたゞ張作霖あるのみとしてゐた。彼が五原に誓師して二年間臥薪嘗膽したのも、要するに張作霖と雌雄を決せんがためであつたのである。然るに北京に入れる張作霖は自ら大元帥となつて高くおさまり、奉天軍の精銳（第三四方面軍）はこれをあげて『若き將軍』張學良と、常に南方と款を通じて張作霖に對し、終始二心を抱ける楊宇霆に委して、自ら顧みるところがなかつた。果然張楊の率ゆる奉天軍は南方に對して毫も戰意なく、五月から六月にかけての京漢線における戰鬪において、馮玉祥軍の主力とはつひに決戰を交へずして、保定の線を敗退した。これがため張作霖自身も亦匆惶として都を落ち、奉天への途上、皇姑屯の奇禍に會して敢へなき最後を遂げるに至つた。

馮玉祥は七月初旬鄭州における蔣介石の歡迎宴において『余は最近の二三年間日夜張作霖討伐の戰意に燃えてゐた。然るに突如張作霖死去の報に接し、余は僅かに氣がゆるみ、三日間病床に就いた。爾來今日に至るもまだ全快するに至らぬ』と云つたさうである。恐らく馮は謙信が信玄の死を聞いて箸を擲げ『われ好敵手を失へり』と嘆じた史實を想起して、對照の興味をおぼゆる話柄である。

六

曾つて馮玉祥が張家口にあつた頃、蒙古視察に赴いた故大倉鶴彥翁の訪問を受けた。翁は馮にその波瀾多き立志談を話して聞かせ『自分が立身の基礎を築いたのは四十六才の時のことである』と語つたところ、馮は『余は今四十四才である。四十六才迄にはもう二年ある』とて手をうつて喜び、更らに『余は現下の各武將中年齡最も若く、膽力も亦最も強い』と語り、支那の天下をとるは乃公である……と云はんばかりの氣焰をあげたさうである。

當時支那各地に割據して權勢を張れるは段祺瑞、張作霖、吳佩孚、孫傳芳、張宗昌等で、彼等に比較すれば、馮玉祥は、たしかに歲も若く、また膽力も強かつた。然るに、その後僅かに三年しかたゝぬうちに、局面はからりと一變し、舞台の役者もすつかり變つてしまつた。段祺瑞は再び天津に隱遁し、吳佩孚は四川に逃げ、張作霖は皇姑屯の奇禍で倒れ、孫傳芳や張宗昌の如きもまた沒落の悲運にある。而して彼等に代つて中央の舞臺にあらはれた國民革命軍の巨頭を見るに、悉く若手揃ひで、最近北京に集まれる總司令五人の中、最も老いたるは、三年前群雄中最年少をほこつた馮玉祥その人である。

即ち馮玉祥は今年四十七、蔣介石は四十三、閻錫山は四十六、李宗仁は四十一、李濟琛は三十九で、馮玉祥を以て最年長者となす。然し、その腕力、體力、精力を問はんか、恐らく今日においても、馮玉祥に及ぶものは一人もなからう。

體格自慢の故武藤金吉氏が往年北京に來た時『支那三界に來ても乃公にならぶものがない』と誇つたが、一日馮玉祥に遭つて『乃公より大きい男がゐる』と驚いたと云ふ話がある。

北京に集まつた國民革命軍の五總司令中、資格から言へば、第一集團中の總司令であると同時に全軍の總司令たる蔣介石が筆頭で、儀式や會議の席において、馮玉祥は常に蔣の次席についたが、しかしその魁偉な風貌と、豪快な氣骨は、常に他の四巨頭を壓し、嶄然一頭角を拔いて居たかに見えた。

外交大樓における平津衞戍總司令閻錫山の招宴において、蔣介石が『北伐完成の日に當り、衷心から歡喜にたへない』と述べるや、馮玉祥は起つて蔣の言を駁し、

革命はこれからである。蔣總司令は『喜び』を述べられたが、余はむしろ悲しみにたへない。それには三つの理由がある。曰く不平等條約が現存してゐる。裁兵が實行されて居ない。東三省が征服されぬ……

とやつた。彼の演説は萬雷の喝采をもつて迎へられた。

馮玉祥の現在の勢力は如何、彼の誠の第一、孫連仲の第二、韓復榘の第三、宋哲元の第四、岳維峻の第五、石敬亭の第六、劉郁芳の第七、劉鎮華の第八、鹿鍾麟の第九各方面軍より成り、總勢二十六軍、四十萬人と號してゐる。而して、その根據とする地盤は甘肅、陝西、河南、山東の四省である。馮玉祥がかねてから垂涎してゐた直隸省は北京及び天津とともに閻錫山の手に歸し、また巳に第二集團軍の管轄に決定した山東省が日本軍の濟南保障占領のために、その意に任すことが出來ない。こゝにおいて彼は山東だけでも、この際一日も早く手に入れんとして焦せり、一面王正廷を背後からたきつけて、日支條約廢棄を聲明せしめ、頻りに排日運動を煽動しつゝあるが、同時にまた他の一面日本との親交を結ばんとして焦慮し、最近その長子馮洪國を日本へ派したとさへ云ふ。かくして彼の對日策には非常の矛盾がある。彼は排日と親日の兩政策を同時に行ひつゝある。その眞意の那邊にあるか、甚だ忖度に苦しむところである。或はそこに老猾なる馮一流のポリシーがあるのかも知れぬ。しかし私は信ずる、聰明なる馮玉祥は必らずや早晩、支那の革命家にして日本を敵として大成し能はぬ現實的非理の動かすべからざるをさとるであらうと。

日本の當局者間には馮玉祥を嫌ふ人が少くない。而してその理由と

のである。

馮玉祥自身もこの點を憂慮し、頻りにその『赤化』にあらざることを辯明してゐる。馮玉祥はこの六月末、輝縣百泉に彼を訪ねた大每記者田知花信量氏に向つて『ボロヂンを放逐したのは私だ』と大聲し、足で人を蹴る素振りまでして見せたと云ふことである。又去る七月十四日の宴席で、

馮玉祥は『赤』と人は云ふ。又南赤は『蔣介石』北赤は馮玉祥であるとも云ふ。もし『赤』と云ふことからして云へば、余は正しく『赤』であるに相違ない。余は赤人と赤血を以て戰ひ赤誠をもつて無數の困苦告ぐるなき窮民を救はんことを志してゐる。しかしあの共産主義の『赤化』とは違ふ。また布を量る尺『赤と同音）とも異ふ……

として極めて巧妙な諧謔を交へて辯じ、滿堂をして抱腹せしめた。

馮は眞に『赤』であるや否や。私の觀るところでは、彼のロシアに接近せるは、ロシアから物質的援助を仰ぎ、ロシアを自家の政策に利用せんとしたもので、彼れ自ら『レーニン宗』に歸依したと云ふは信ぜられぬ。彼の一時共産主義者らしく見せたのは、恰も數年前クリスチヤン・ヂエネラルと自ら稱したのと同じ調子で、その時その場における彼一流の豹變術に過ぎない。ひと皮むけば共産主義者でもなければ、クリスチヤンでもないのである。但しかりに馮玉祥は『赤』でないと斷定した場合でも、彼は幾多の點において（たとへば日支條約撤廢の主張や、濟南事件についての排日宣傳など）日本から惡まれ、また嫌はるべき理由をもつてゐる。しかしただかりに馮玉祥は共産主義者である、レーニンの弟子である、『赤』である……としたところで、この一事をもつて、直ちに彼を嫌忌し、排斥するは、聊か鮮氏の嗤ふある。たとへば同じく南方革命の巨頭たる蔣介石の如きも、馮玉祥と同様ロシアにも行き、またボリシエウイキーから援助を受けた。ただ昨年の秋以來、蔣は赤露と斷ち、また共産黨討伐を決行したので、わが當局の中には、蔣介石とならば手を握り、親交を結び得るとなすものがある。しかし馮玉祥も亦同じくロシアと斷交し、共産黨を排除した。馮玉祥にしてなほ日本の敵と目すべきならば、蔣介石も亦われと隔離すべきでないとしなければならぬ。

しかし、おもふに蔣介石も馮玉祥も畢竟同じ支那人である。同じ支那人を捉へて、甲を嫌忌し、乙と親善するは、到底偏見の譏を免れぬ。

『革命の支那』に對して、現にわが當局のとつてゐる態度を見るに、恰も往年『革命のロシア』に對してとれると同じく、對手の人物に對する『好き』『嫌ひ』によつて、その政策を加減してゐるやうに思はれる。而してその結果、對露策の全然失敗に終つた如く對支策も亦この點において失敗をくりかへしはせぬかと案ぜられる。由來國際のことは、對手方に對する『好き』『嫌ひ』によつて、加減し得るやうな單純なものではない。そこには複雜たる關係が錯綜し、表裏必らずしも一致してゐない。對手方に對する感情などに支配されて、冷靜な判斷

をあやまる如きことがあつてはならぬ。

八

以上の如く馮玉祥は(一)既往の閲歴において民國革命の上に、數多の事績をあげた。(二)特に舊派軍閥の二代巨頭吳佩孚及び張作霖と戰つてこれを打倒せるは最も特筆に値するところである。(三)彼の配下にはあらゆる困苦艱難をともにし、百戰練磨を經て來た有力なる軍隊がある。殊に彼の軍隊は他の國民革命軍に比して、結束堅く、全軍を通じて馮の命令が徹底してゐる。(四)彼は耶蘇の教徒にも扮すれば、レーニンのお弟子にも化け、臨機應變の術に妙を得てゐる。(五)自ら難行苦行の實踐躬行にあたり、以て配下の規律をかため、人心の收攬には獨特の手腕を有する。而して今や(六)彼は黃河の兩岸に跨つて廣大なる地盤をかためた。今後の彼は何事を企つるであらう。支那人間には、早くも、馮玉祥が北京に手をのべ、南京を乘つとる日も遠くあるまい……との豫想を下すものがある。現に已に南京には彼の片腕たる薛篤弼が內務部長の重職を占め、外交部長の王正廷も亦彼の一派に屬する。閻錫山の領分たる北京にも、馮の秘書長であつた何其鞏がその市長の職にある。

たゞしかし、近年支那の動亂に活躍する武將の多くは、常にその一

坊駅頭刺客の手に倒れ、緑林から身をおこして史上の人となつた快傑張作霖も亦皇姑屯の奇禍に會して史上の人となつた。馮玉祥も亦その身邊の危險を慎れ、この七月初旬北京に來た時の如き、常にその乘用列車の所在をかくし、須臾も警戒の手をゆるめなかつた。しかし、馮玉祥にして天運の禍するところなく、少くとも今後彼にかすに十年の歳月を以てせんか、彼は恐らく現代支那の巨頭中、最も大をなすであらう。革命支那の將來に思ひをよせる人士は、先づ馮玉祥の今後に、最も細心の注意を拂ふことを忘れてはならぬ。(三・七・二六)

プロレタリア演劇について

村山知義

日本のプロレタリア演劇の當面の任務と狀勢をたつた一と言で云はうと云ふのである。

三月の暴壓以來、反動の波が高くあがつてゐる。今やプロレタリア藝術戰線は倍加された力で押し進められなければならない。

次に、プロレタリア藝術運動は、單にアヂ、プロの藝術製作並びに持ち込みのみならず、プロレタリア藝術それ自身の完成のための努力がなされなければならないといふ所まで生長した。

そこでプロレタリア演劇運動が當面なすべき運動は、

1、アジ、プロのための演劇行動。

これは敏速簡便にモメントを促へて、工場や爭議團本部や家族懇談會やへ出動することの出來る移動劇場の形を取らなければならない。時としては金を集めるための手段ともなり、または娛樂を與へることを最大の目的ともしなければならない。それは直接にプロレタリアに接觸する强力なアジ、プロの手段であるから、鐵のやうに剛く、しかも柔軟性に富んでゐなければならない。しかし此處から自然生長的にプロレタリア藝術が生れて來ると考へるのは觀念的でしかない。そこで、

2、プロレタリア藝術完成のための演劇行動。

これは定期的な大公演の形を取らなければならない。敏速にモメントを促へるといふ點でたとへいささかの遺憾があつても、それは必ず充分な準備を持たなければならない。時間的にそれは相當長期間の稽古を必要とするのみならず、可及的完備した舞臺機構と、觀衆を吸收するために都合よい位置と大きさを具備する劇場を必要とする、かくてこの種類の公演は相當多額の經費を要するから、小ブルの觀客をも拒否することは出來ないばかりか、日本の現狀では、かかる公演には入場料の關係上殆んど全くプロレタリア大衆の觀客は持ち得ないことを豫期しなければならない。この形の演劇行動で我々は技術を練り、形式を探究し、智識階級、小市民を我々の側へ引きつけ、諸々の同伴者劇團、プチ・ブル劇團に働きかけ、檢閲制度改正運動のモメントを作り出し、新しい技術者を獲得する等々のことをしなければならない。

3、研究所の設置。

これは劇場員自身の技術の訓練、過去の藝術の批判研究、世界各國のプロレタリア演劇の研究等のための研究所と、新しい劇場員を外部から獲得養成するための研究所の二つに分れたる。

なほ此等のほかに演劇雜誌の發行、レポートの發行、外廓團體（ドラマリーグ等）の組織、批判會の開催等が行はれなければならない。

われも立ち士の列傳を說くも立つ旅順の山の二
百三尺

亡き魂の生きよ旅順の塔の廊踏めば初めに踊る
が如く

悲しくもこの世ならざる所より霧の寄せくる旅
順口かな

渤海に添ふ鹽田は旅人の涙の外に白くかわけ
り

霧かかり冷き船となりにけり白き旅順の塔は見
えねど

薔薇の路アカシヤの道車して滿の王女の逍遙す
る日

敦煌に掘られし唐の人形も鄉愁作る旅順に見れ
ば

金州

金州は劉半淸の河原さへ山に引かれてほの、赤き
かな

廢れたる烽火の臺よ心をば云ふにもあらず山に
殘れる

赤土の山平らにて頂にあるも羊の寢るごとき
寺

城外の南金校の先生と馬車を共にす柳絮の散る
日

皐月の日琥珀の如き金州の城外を愛づわれも柳
絮も

熊岳城

砂白き熊岳河に見る時は死にたる城も美くしき
かな

河原とも礫原とも知らぬなりところどころに溫泉湧上ぐ

魚の荷も古靴の荷も砂湯なるあるじも對す青龍の山

熊岳の川の砂原ほのかにも潤ふ朝を飛ぶ柳絮かな

母立ちて望小山に見しと云ふその都より遠き我子ら

風立ちぬ車の双城内の粽に走りかへりこぬかな

營口に行く

遼水の不思議を聞けど驚かず滿洲の野も戀をするのみ

悲しけれ渤海に行き人を見んことは見ざるに勝るたれども

雹ふれば車の方へ寄りてきぬ娘々廟を置ける草山

濁りたる遼河の流逆しまに動き初めけれ潮さして來て

逢ひがたき人と遼河の船にあり日よ大空の座をば動くな

湯崗子

むらむらに白き野遊の野の上の鞍山にのみ夕燒うつる

湯崗子左の窓に入りくるはかぐろき衣の千石は落日

來ん年もホテルの軒の巣に棲まん燕と似ざる遠き旅人

湯崗子君が馬して出でし日もこの夕にも散る柳絮かな

遂だにうら安からぬ野には似で溫泉の末に茂る葦かび

鬢に散り袖にかかるとこと戀り拂はぬ池にひろがる柳絮

泥湯をば浴びてあやめの花となる謂なければ過ぎぬ露西亞風呂

浴泉す奉天省の鞍山の後ろの背のみ見ゆるところに

千山

わが乘れる轎に遲れて同行の馬來る外は高粱の畑

流轉して知らぬ世界にわれを見る人かと思ふ女那の奴も

ことごとく四十八溪を越えぬまに寂しくなりぬ千山の路

淺みどり梨の若葉のそよぐ頃轎して入りぬ千山の溪

溪狹く轎を用ひずなりしのち身に沁みわたる山の夕風

紫丁香山寺に立つ煩惱のこころも混るうす色をして

紫丁香香の夕山に滿ちわたる中に立ちたる太安禪寺

寺の水溪に汲むとて惜むなり涙と同じ價ならまし

枕かな

禪院の日時計の刻傾きてかへり出づべき千山ならず

ほの白く梨の一木の殘りたるいただき近き寺の客房

端だにも溪の石かと冷たかり支那の御寺のあんぺらの床

山寺の堅き枕のいねがたし意にたがひたることならなくに

禪院の朝の勤行はてぬればまたなげかるる山上の客

梨の花白きをつたひ朝風の溪上りくる大安寺かな

あまたたび目覺めあまたの夢を見ぬ山寺と云ふ所に寢れど

曉の山の法師の經聲は支那といへども悲しかりけれ

朝風や峰づたひして鐘を幽かに聞ける千山のおく

昇天の龍の跡ある洞に居ぬ通力の無きこの羅漢達

起き出でて物を云ひなばいかがせん羅漢の洞に在ます人達

暫くは山とどろきぬ木の枝を山のいかだと云ふやうに引く

屋根白く日の當りたる木魚底唯一つ見えうぐひすぞ啼く

仰ぐ時龍洞見ゆれ岩山に道士の衣の袖口ばか

り

日光の陽明門の形するもののくづれて人跡を拔く

山二日一の輿丁の歌ごゑになびくならひの柴丁香かな

無量觀道士の寺の客堂に入ればたちまち山風おこる

大寺や道士のために備へたる椅子に凭れどもわれはかなかり

道士來て食めよと云へどいかがせん歸りうべしや僊人の食

無量觀わが捨てえざる思ひをば捨てえし人の靑き道服

道士達松風をもて送らんと云へりし如くうしろより吹く

薪をば抱き給へる道士にも道をゆづりて逸れたるつばめ

伴へる支那の奴が指立てぬ時を問へるや戀を問へるや

山畑に粉黛をして馬の口とれる人にもさびしからまし

旅人を風が臼にて擦るやうに思ふ峠の大木のもと

遼陽

白塔の第十三の上層の先づくづるるは悲しかりけれ

欄楯をば混ぜて燕の渦卷けり中にしたるに白塔こして

白塔の夢の外なる何ごとの夢をな見そねせめて阿片に

巴里にて柳のわたの散りし日に隣るここちす大路の柳絮

車中

温泉の柳絮古城に見し柳絮遼陽縣にちりつる柳絮

目を閉ぢて昔の夢を釣らぬまに釣魚の台を過ぎたる車

安東

遠山は曇りて白し柳絮ほどそれより白し大江の水

安東の灯に降る雨を見て立てばいかづち鳴りぬ義州の方に

山曇り鴨緑江の水の端雨にも濡れぬ色したるかな

尺取りが鴨緑江の三尺に足らぬを示すあし原の中

斜めする元寶山の裾に寄り網を引けるは支那のいさりを

網を引く枝に列なる花のごとまた花片かと予ら走りかふ

人ならば統軍亭と九連の台の如きは苦しからまし

船の唄聞かぬ大河の寂しけれ船多けれど水廣くして

江の中の筏いこへる小景に女もまじりなつかしきかな

われはまた北へ行くなり韓州てふ日本領にも近づきしかど

われ歎く滿ちたるもののめでたさと寂しさをもつ大江の水

五龍背

大河の濁るを見し同じ日に行くは溫泉の夕月の路

五龍背蔦の窓をば覗けるは柳の穗にも似るほどの月

支那の人營むと云ふ溫泉もあり前房は火に燒けしまま

砂河濟し昨日の雨の流るるとのみ侮られ川となさねど

なだらかにことを好まぬ風景へ五龍の山を一つ加ふる

水田あり柳の立てば旅人も晩歸の人のここちこそすれ

湯の宿の支那の手代のよく語る蔦の育ちし年月なども

鳳凰山

美くしき鳳凰山は峯多し芭蕉の卷葉むらがるやうに

蒙古車上

われは今地と云ふものの平らかさ教ふるさまの落日と在る

曠野なる蒙古の家よ一隅に物見作れど見んものも無し

都とは沙漠の空をゆきかへるめでたき鳥に[illegible]

るところぞ

ねぢあやめ地平の線に及ばずてここさへはては白き砂山

蒙古野に去年の出水の溜れるは五十年して乾ぬべしと聞く

逃水よ近く來よかし蜚蝱などわが幻をおきぬべきほど

遠方の胡沙に埋れる日ならずてうららかならば悲しからまし

昨日今日興安嶺を發したる河のみ見れど逢はぬ山かな

人の住む地はそこばくの秘密をば納めたれども蒙古然らず

日も空の小き一つのものと見ゆ蒙古に立ちて遠く望めば

洮南

旅人も鳥も顧みし楡枯れてのちになりたる洮南の城

いつの日か色ありしもの失ひて形のみなる洮南の街

蒙古にて十種の穀を試みに植うる畑をめぐる寂しさ

洮南の城を出づれば洮兒河北よりきたり草みどりする

旅人が思ひしさまにやや過ぎて寂し蒙古の夜の風の音

旅人が野の朝風に夕風によりどころなきここちする國

鞍山の鐵の砂より暗き雲蒙古の城の上にひろがる

齊齊哈爾

我身をば中華の貴女の逍遙の車に見出づ夕月のもと

嫩江の洲の柳原分けて來る月光色の奥夫人の靴

君折りて柳を船にさしたれば嫩江の水都にまさる

いと廣く直ぐなる虹のここちすれ嫩江に添ふ夕映の雲

嫩江を正しく前に横たへて閻浮檀金の日の沈み行く

日の色を混へて奥の柳原嫩江の水孔雀のごとし

旅人に奥竹色のうすものを人贈る夜の春のかりがね

月夜よし夫人手兵を作ひてわれを迎れる齊齊哈爾の城

劉園の蠟の灯影に歌書きし夜のめぐり來よわれに再び

哈爾賓

哈爾賓は帝政の世の夢のごと白き花のみ咲く五月かな

將軍の夜遊のむかし千人の集ひし園に溜れる楡錢

松花江岸にかかれるきざはしを少女は傳ふつばめのやうに

旅人は岸に入日は波に浮き船は對ひの水莊に去ぬ

向ひなる白き渚の清さには似ねどをかしき岸の馬車ども

哈爾賓の露西亞の御寺の石だたみ薇の花おく盆鏽のごと

おくつきに變らぬ愛を書ける文字故人の讀まず旅人の讀む

わが友が露西亞の墓地に讀み歩りく行の悲しけれ極東なれば

老夫婦來て花植うるその墓もその夫婦ほど古りて悲しき

十字架の斜めしたるも燈明を供へし墓も西方の人

古馬車の寡婦夫人を乗せたるが楡の大路を唯一つ行く

野の花の束ねしを賣る哈爾賓の街を歩むは溫室の花

梨の花復活祭をあとにして眞白き靴を人も穿くころ

哈爾賓の山梨白し少女子の優しき靴の行き通ふ路

水草の花の漂ふ如くにも靜かに踊るあけがたの人

露西亞少女スンガリイなる靑をもて目をばいろどりよく踊るかな

哈爾賓のキタイスカヤの明方の街を車す旅人なれど

車中

沼澤の分れ分れに眞白くて淸し東の蒙古の月夜

寛城子

マアルシユカナタシヤなんどの冠りものの稀に色めく寛城子かな

二道溝頭道溝も乾きたり寂しき露西亞の驛に續きて

吉林

わが汽車はたんぽぽの穗の白きをばつたひて入りぬ土們嶺站

土們嶺梅蘭芳の舞衣の袖のゆきほど長き山かな

胡風や吉林省に野飼ひする馬なまめかし雁の列より

その昔吉林省に王氣立ち淸朝の手にくづされし山

筏行く吉林城のかたはらを流るる頃は木の白くして

松花江星の色して閑きかな吉林城をめぐり行く時

旅路にて別るる友と來て立ちぬ吉林城の北山の亭

說書生彈き語りする蛇皮線に拍手をおくる楡の葉の風

北山のいただき近き所にて家赤く塗り美人鼓を打つ

大きなる河もろともにこ[illegible]

ところに

夕暮の蒲公英の穗の白き野に月ありそれを雲と
見なして

いにしへの柳條邊も夕月のあかりの中にありて
寂しき

牛を牽き七夕のごと野を歩む滿人見ゆる夕明り
かな

飲馬河と云ふ驛の名の讀まるるも白き柳絮の明
りならまし

長春

朝陽寺長春城も崩れたるつつみも川もおなじ灰
色

降り立ちて伊通の川に洗はるる馬車より城は穢
きものを

伊通河人多くして稻せまし斯からずもがな月夜
に行かん

文廟のあるべからざるところなれ城側は皆蒜の
香のして

城の口嵐立つなり長白の山貨積みたる車來れ
ば

公主嶺

夏雲が楡の大木のなす列にいとよくならふ公主
嶺かな

旅人の來て倚る楡の木の本へゆるく寄りくる牧
草の波

圓き楡まろき柳の枝となる羊飼はるる牧場に立
てば

馬の顏うまやの隅を向きたれば氣病みをしたる

子のここちする

數々の羊の家に朝日射し風芳ばしき公主嶺かな

撫順

時ならぬ人の手により新しき廢墟つくらる炭層のため

撫順なるかぐろき層を掘り下げぬ冬ごもりするペチカのために

望み見る山は淺葱の繻子の襞渾河は夏のうすものの襞

夕暮に渡しらじらと掻き立てて九つ遊ぶ瀋水の馬

石炭に琥珀混れり斯かる身も涙をうちに抑ふる如し

撫順をば夜半に立つなり遙かにも追ひくる灯をば哀れとぞ思ふ

奉天

宮門の濃き黄の瓦かがやきてかささぎ飛べる奉天府かな

便衣隊現るるとて走りかふ瀋陽の子もあはれはかなし

畑青し東三省は滅ぶ無し煩ふなかれよき隣人よ

松風がたび人に添ひ上りきぬ隆恩殿の青玉の床

あざみ咲く土に太宗おはします朱壁の殿舍威儀に立てども

柳絮散り隆恩門の壁上も大路のごとし車行かね

ど
ここちよき朝風吹きぬ屋の上の瘦せて尖れる獅
子の口より
白玉の柱なれども手ざはりの石にまさらず年を
經ぬれば
宮殿はなまめかしかる牌多し屋根も朱壁も欄も
柱も
なにがしの飯店に鳴る蛇皮線の音より速き夏の
雨かな
ほの暗し涙ならねど身に沁みぬ別れんとする瀋
陽の雨
奉天の小西門の暗く浮く窓にて聞きぬ夢の話
を
その半焦げたる汽車に將軍の弄びたる紙幣の白
し

歸途

吳夫人の生死を知らず初めより夢の花とも思ひ
けらしな
水莊の嫦娥よすでに天上に歸したる君をわれ見
たりけん
吳夫人の在る死の世界遠けれど金星のごと見る
よしもがな
わがために柳の枝をさしたりし船を夫人もわれ
も見がたし
嫩江の洲の柳原分けたらば必ず君と見んここち
する
吳夫人の死に給ふこと無しと云ふことさへ人の
消息にして

散文詩　蠹。外四篇

吉江喬松



一線の上

銅色に明け初むる埃及の黎明、
天地のけはひもつかぬおほらかな揺めき。
消えゆく闇を一角にたゝえたやうな巨塊の屹立——ピラミイト。
薄明の底から一道の生氣が立ちのぼる。
重い歴史の積層をはねのけて、
常に生きた姿を浮べて流るゝニイル、
老大陸の胸から無限の生命を澎湃として導き來る。
日はのぼる黃沙の果て、
影はゆらめく金字塔、
ニイルが育てあぐる一望の緑野、目醒めたる碧玉を地にしいて、
無限の黃沙と接續し、目路の果まで並行を展開する。
この兩界を太く劃する黃緑の一線、
その線上を走つてゆく小さな黑影がある。
一歩は緑草を、一歩は黃沙を、
この分岐線上を果てしなくまろんで行く。
地平線の彼方、雲は湧く、
舊き歴史と原始自然との交錯する埃及の曠野、
緑の生氣と無始無終の黃沙とが織り出す人文の色彩、
その分岐の一線上を悲しくもまろび行く小さな黑影！

それは立ちとまる、それは動く、それは走る。
或時は騒ぎ、或時は吐息をつき、
また或時は太い靜かな呼吸をする。
右せんか、左せんか、緑にゆくか、黄砂に就くか——依然として、
それは分岐線上を走つてゐる。

黄緑並行の曠原、
その果てにまた巨像が浮び上る、
人面獅身、半體を黄砂に沒し、不氣味な眼光は凝乎として緑地を
見すゑてゐる。
黄沙がその出生地か、
緑地がその生氣の源泉か、
この巨像をめぐつて、またさらに、
分岐線上の悲しき黒影は、先へ先へと、老大陸の胸の奥へとかけ
込んで行く。

青空の腕

松の林のなかへ、八方から紫紺の空の腕が伸ばされる。
新芽が目を醒ます。枝毎に、釦型の莟みの傍きに、空に黒線をとほして
ゐた松の森林は、俄に黄色の花粉を淡かな大氣のなかへ吐きいだす。
無數の樹木が吐きいだすこの香氣で、林間の空氣は重げに[illegible]
る。健康そのものゝ如き黄色の微分子は、八方へ、青色の空の腕に
抱かれて、その生動を開始する。
夏を告ぐる五月の松蟬は、この空間を埋めつくす黄色の微分子
を、小さな羽音で掻き亂しながら、花粉を呼吸しつゝ、森の奥から
一時に鳴き出す。
何を摑まんとするのか空の腕は、無數の紫紺の空の腕は、この松
林の中へ、黄色の微分子を貫いて、八方からさし伸ばさるゝ。
村舍の上をば、冷然と白眼に見下してゐる空、大海の上では、輝
きと爆發とで、抱擁を求めながらもたおろいでゐる空、原野の上で
は、悠然として、その全裸の姿を見せながら、わづかにその果て
で、物惜げにも口づけしてゐる空。
それが松の林では、何物かを摑かんとする如く、何物かを探し求
むる如く、八方から無數の腕をさしのべてゐる。
空は近い。空は降りて來る。松の梢の上へ來てゐる。その呼吸が
聞かれる。その鼓動が耳にはいる。松脂の生氣が四方に漲る。
息づきはじむるやうな黄色の無限の微分子、それは青空の腕がかな

にもまた我々は藝術の惱みの姿を見ずにはゐられぬ。北より南へ、傳說より自由へ、そしてまた我々は、その果てなる空に十字の金星の輝くを仰がずにはゐられぬ。

兩腕を左右に、長身を垂直に、無始無終の大空に囚はれて、その脚下に躍る紫紺の波を永久に眺めやつてゐる南方十字星よ、北より逃れし我々の眼にこそ新らしけれ、おん身はやはり永久呪ひの影を、處女の洋上に、冷たく、冷たく投げてゐるのではないか。

白山頌

連山の彼方に遠く沈みゆく日を反射して、
薄紅に匂ふモン・ブラン、
連嶺が刻みいだす空線上に遠く咲き出でた氣高き紅芙蓉。

サボワの森はほの暗く、ちり散じた羊を呼ばう牧童の角笛は、溪より
溪に谺して、夜の迫り來るを告げてゐる。
天地の間、おん身ひとりのみが暮れ残る巨大な花瓣である。

誰が吐息に揺らるゝか、微かに、かすかに、空際にゆれて、
やがても消ぬべきおほらげな姿
我等が呼吸を今日一日にあつめて吹きかくろをば、永久に包めよ
かし。

――おん身を仰ぐは罪なりや、
罪ならば、命と共に消えよかし、
我が生に二度とは來まじき光なれば――

薄紅は、濃紫に、銀灰に、
やがて空際の幻影は消え失せた。
我等が呼吸をすひこんで、
永久現ずる期なき地平線の彼方へとて。

アルプ連嶺の彼方遠く
今も匂ふか空際の紅芙蓉よ、
そして日毎に落暉を返照して、
今もなほ我等が吐息に揺れてもゐるか。

墓

新緑の迫まる溪谷の水中へ、時々ごとに、一つの泡が出現する。

何年その溪間に棲んでゐるのか、何人も知らない。寂然として眼を閉ぢ、白い幕を眼瞼からおろして、水中の岩の上に坐つてゐる。暗灰色のその背は苔むした岩の一部を構成してゐる。

しづかにその口が開く。まつたく徐々に、夜の闇の迫る如く、いつとも知らず開かれる。自然法の運行そのもの丶如き暗然さである。

そのなかへ、地殻の一部に缺陷の生じた如く、大氣と共に、空中に飛交ふ微小動物が吸ひこまれてゆく。音もなく開かる丶その口は、岩戸を切り落すごとく、驀然としてとざさる丶。

と同時に、眼が開く。若々しい元氣がほとばしる。皮肉な微笑が顔面にたゞよふ。闇の底に漂ふ孤獨者の皮肉な微笑！　それが何人に知られよう。

時とすると、この溪合から虹のたつことがある。山に亘り、青葉の照り映ゆる上に、燦然と輝く。

溪に棲む主の氣を吐くのだと、里人等は言つてゐる。蟇自身もまたさうだと信じてゐる。

暗い皮肉と、虹の輝きとを、蟇は自分の二つの表現だと思ひ込んでゐる。皮肉な微笑が發揚して、虹の輝きとなるのだと思ひあがつてゐる。

五月雨が溪谷へ降り注ぐ。青葉は音を立て丶滴を揺り落す。下草はうねりを立て丶水路を開く。溜水は盛り上る。蟇は頭まで没してしまふ。

蟇の天地は俄かに擴大する。樹幹にそうて、徐々にせり上がる。彼は樹の枝に、或は一段高い岩頭の岩に居處を移す。そして、漲溢し、昂上した己が領土を眺めやつて、得意の眼を輝かす。

彼は忙しい。溪底の盛り上ると共に、水中に、また空中に、今まで知られなかつた幾多の微生物が一層烈しく、彼の周圍に浮動し蠢動する。不氣味な彼の口の開閉と、呑吐とがしつきりなしに繰り返へさる丶。

けれど彼は得意である。何を呑まうが、何を吐からうが、何人からの干渉もない。小さなその體軀を思ふま丶膨らまして、一氣に青を吐き出せば、それが虹となつて、やがて、天日の輝くなかに、青葉の上に照り渡つて、燦然とかゝるでもあらう。

寂然として、巖頭に蟠居してゐる蟇よ、雨滴がいかにお前の面を叩かうと意にも介しない。かくて雨期のつくる前に、お前の虹が陸離たる光彩を空に放たない前に、何かお前の體内に醱酵することであらうぞ。何かお前の體軀を内部から潰裂せしむるであらうぞ。

孤獨で、皮肉で、得意で、頑迷で、暗愚で、魯鈍なる蟇！

葛西善藏を憶ふ

作家としての葛西善藏の一面

廣津和郎

葛西はあの通りの酒飲みである。自分は少しも酒が飲めない。自分が酒が飲めたら、葛西の醉つぱらつた時の傍若無人を許せたかも知れない。ところが自分は酒が飲めない。酒が飲めないものだから、自分が彼の事を『此奴弊に堪へない』と考へ出すと、正氣で本氣で弊に堪へなくなる。

そこで自分はよく彼に腹を立てた。もう當分この男に會はずに置いてやらう。そんな風によく思つた。

ところが、幾ら腹を立ててゐても、めつたに書かない葛西が、作を發表すると、何を措いても、それを讀まずにゐられなくなる。讀めば感心してしまふ。『やつぱり彼奴はえらい奴だ。うまい。うまい』さういふやうに思ふ。それで又彼に會ひたくなる。會つて管を卷かれると、此の文句では『憎可愛い』だが、可愛さをちつとも感じないで再び弊に堪へなくなる。

近寄る勿れ。遠くで見てゐるに限る。――いつの間にか、自分はこんな風に考へるやうになつてゐた。この考は自分ばかりではない。彼の周圍に近づく人々が、幾分はみな感じてゐた事だらうと思ふ。

『奇蹟』時代から、『作』『作をしてゐる』『作は出來るか』と彼の口から發音される『作』といふ言葉は、一種特別な響を持つてゐた。宇野浩二は、葛西を知つたのは大分後のことだが、その頃の宇野の或氣持から、『作』『作』と葛西が云ふ言葉に、多少の反撥を感じたさうだ。併しやがて發表された葛西の作を讀むと、『なるほど、葛西だからこそ、作、作と云つてゐても、差支へなかつたのだ。確かに作、作と云ふだけの資格がある』そんな風に思つたさうだ。――宇野はさういふ意味の事を何かに書いてゐた。

自分が葛西を知つてから、もう十七八年になるだらう。その最初から『作』『作』といふ彼の言葉は、始終一貫して耳に殘つてゐる。『作』『作』、一にも二にも作、十にも百にも作……實際『作』に一心を籠めれば、何も蚊もそれが救はれる。他の現世的な一切の事は、『作』の前に犧牲にしても構はない。『南無、信仰なくては叶ふまじ』と彼の初期の『惡魔』の主人公の叫ぶやうに、彼の心構へは、その信仰に生きてゐたと云へる。

『奇蹟』時代に、同人の原稿が集まらなくて困つた。一體[illegible]な

どといふものは、互に手嚴しく、所謂嚴正批評などといふもので、互の顏を赤らめて打合ふよりも、寧ろ、互に好いところを認め合ひ勵まし合ふ方が、ずつと効果があるらしいやうに思はれるが、『奇蹟』同人といふものは、さういふ事は反對で、何より同人の批判に及第するのが骨だつた。もつとも、舟木重雄のやうに、人の何處かに長所を認めようとする態度の人間もゐたが、葛西と來たら、眼で見るよりも鼻か何かで嗅ぎ出すのではないかと思はれるやうな、誰も氣のつかないやうなところから、缺點を嗅ぎ出した。

相馬泰三が原稿を書いてゐるところに出かけて行つて、相馬の書いてゐる一行一行を吟味しながら、『これはどういふつもりで書いたのだ。こんな言葉を使つて恥しくないか』などと頭からかしやくなくやつつけるので、相馬が書けなくなつてしまつた事もあつた。

そして彼自身は日に二行書き、三行書き、若し原稿用紙一枚か二枚でも書けようものなら、大威張りだつた。一枚書いた、とそこでお祝ひのために直ぐ酒だ。

『少し氣が乘つて調子がついて來た。だから今日は止めよう』彼はそんな事を云つてゐた。他の人は大概筆を取つて、一枚でも二枚でも書く中に、調子のついて來るのを待つのが普通だが、葛西のは、調子がつくと、止めてしまふ。調子がつく事を彼は恐れたのだ。調子がついてぐんぐん筆の進む事は、彼には危險に思はれたのだ。安易に流れる

する。調子がつきかかつて來ると又止める。そして

る。

彼が稀に見る寡作家だつた事は、いはれない事ではない。そしてその寡作の、多くは短篇の、その一行一行が、そん風にして積み重ねて行つたものである事は、彼の作の一つ一つをよく味はつて見ると合點される。

だから、後期の事は知らないが、初期に彼が『作』をしてゐるのを見てゐると、消しといふものが殆んどなかつた。又書き始めてしまふと、書直しといふ事も餘りしなかつた。前の日一行か二行か書いてある場合、翌日その後を續けようとすると、一寸書直したくなつたりするものであるが、彼にはさういふ事はなかつたらしい。原稿用紙に書く前に、一行一行を、はつきり頭の中に書きつけてしまつてゐたやうな觀がある。さういふ事は餘程一心になつてゐる人間でなければ出來るものではない。もつとも、寡作家にはいろいろの流儀があつて、人によつて書き飛ばした方が好いものが出來る場合もあるが、凡そ書き飛ばすとは反對であること、葛西のやうなのは尠いだらう。

○

さて此處で、自分の『文壇』から受けた注文に應へるか、それは注

併し作家としての葛西善藏を書くためには、自分はもう少し時日の餘裕が欲しいと思ふ。再び葛西善藏の全作品を讀み返して見て、そして改めて作家としての葛西善藏を考察して見た上でにして見たいと思ふ。そしてさうした上で葛西善藏論を書くといふ事は、自分に興味のある事でもあるし、やり榮えのある仕事でもあると思ふ。

併し今は自分にはその準備が足りない。

自分は彼の『作』についての心掛けが以上のやうなものであつたといふ事を述べて、人々に葛西の作の一行一行を讀み返して欲しいといふ事に止める。

葛西の作に讀者が尠い。『自分で信じた道を進めば、たとひ世に入れられないでも』といふやうな事は、昔からの藝術家の合言葉の一つだが、併し葛西はそれを文字通りに實行した。東洋味をあのやうに多分に帶びながらも、彼には日本傳統の文人氣取に墮してゐるところもない。日本では通俗作家になるのでなければ、所謂文人氣質を示さなければ、世間に持てないやうだ。尠くとも文人、と云つたところでは下りて行つて見ないと、俗衆には理解されない。葛西にはさういふ事は趣味の上でやり切れなかつたものらしい。和歌を作つて見ても、なかなか上手だつたし、字を書かせても、今の文壇では最も上手な一人だつたのだが、それを餘技として弄んで、ちんと澄して見せるやうな事が彼には出來なかつた。それだけの通俗味も、彼は虫が好なかつたのである。

併し彼の作がリアリズムを通してまでいつたやうにはなつてゐたかではどうかと思ふ。寧ろ彼に彼獨得の作品が十分出來たつた。彼は好んでその周圍に作の題材を取つたが、併しそれは忠實直截にその周圍を描いたやうに、正確を念頭に置いてはゐなかつた。周圍に題材は取りながら、彼はそれを彼獨得の雰圍の中に一遍入れて見て、そしてすつかり變形させて、世間に投げ出した。彼は彼の周圍の人間を殆んどゆがめて書いた。彼は生きて行く上で、彼自身に對して反省の鞭を加へる事は凡そ嫌ひであるし、嫌ひのままに押通したが、彼の周圍の人間を作の點景人物とする時には、思ひきり意地惡く、ゆがんだカリカチュアにしないでは置かなかつた。友人は半ちくな人間としてみんな描かれた。おせいさんまで彼をいぢめる動物的な女性として描かれた。そしてそれ等のカリカチュアの蔭で、好い兒の主人公は、いつでも何かいぢめられるやうに描かれてゐる。

が、そんな事は大抵大嘘である。

『この人生で、好い感激がなければ、せめて惡感激に生きる』彼はそんな事をよく云つてゐたが、併し『好い感激がなければ』ではなく、『惡感激でいいから、惡感激に生きろ』といふ方が、彼の趣味だつたのではないかと思ふ。『好い感激がなければ』は唯の文章上の對句的修飾で、寧ろグロテスクな、普通有り來りでない、『惡感激』が彼の好みではないかと思ふ。

大概の文學が彼に甘過ぎて見えたのもそのためではないかと思ふ。

『チエエホフさへ俺には甘過ぎる』と云つたのも、チエエホフの持つ、人生をあの素直な、温かい心臓で包んで行く行き方が、彼の性には合はなかつたためではないかと思ふ。――だから、葛西はその周囲の人間を、有るがままの形では見もしなかつたし、愛したりもしなかつた。彼の愛情が若し発露する場合には、人を愛撫しないで、コツンとその頭を撲つてかかるやうな態度だつたとも云へる。甲の作家の影響を受けてゐる乙の作家に会つたとする。すると葛西はその乙に向つて、『どうです、近頃は甲さんのお髯の塵を払ひに行きますか』などとイヤガラセを云ふ。相手がそのイヤガラセに気を悪くすると、『をかしいな。僕はお世辞のつもりで云つたのだが』と云ふ。そして実際それは葛西のお世辞だつたのかも知れない。イヤガラセが葛西の親愛の表現なのかも知れない。

相馬泰三の事を葛西は貝殻から時々べろり舌を出して、滋養分だけを吸収して、そして又貝のフタを閉ぢてしまふ男だ、と云つた事があるが、葛西は建長寺の山を棲家として、時々『都に出ては人を喰ふ』やうな男だつた。彼の作にかかると、片手を食はれたり、足を一本食はれたり、頬つぺたを片つ方食はれたり、した人間が、どの位あるか解らないと云つても、さう誇張ではない。

もつとも真正面から考へると、他人や人物を歪めて観察しなければ、彼の所謂『作』が出来なかつたといふところに、葛西の作家としての悩みがあつたと云ふべきだが、葛西に云はせると、又さういふやうなのが彼の『お世辞』であり、親愛の表現であつたのかも知れない。

併し何と云つても、彼は彼の思ひ通りの生き方をし、思ひ通りの作を書いて死んだ。その生き方のどの端をつまみ取つて見ても、又その作品のどんな部分を取つて見ても、徹頭徹尾葛西善蔵の独特の匂ひに充ちてゐないものはない。――生きて行く上では飲み荒し、作の上では食ひ荒して、そしてプイとあの世に行つてしまつた。我儘勝手な生き方をし、我儘勝手な作家生活をして、プイとあの世に行つてしまひながら、彼自身が果してどの位愛してゐたか解らない友人達から、こんなに愛されて、看護され、跡始末されてゐる彼は、運の好い男だと云へる。

自分は昔『新潮』に『正宗白鳥さんの強み』といふ題で、彼の印象を書いた事があるが、神様は毎日聖壇に跪く謙遜な奴よりも、神様に向つて尻ぐらゐ捲つて見せる我儘者を却つて愛するものだ。葛西なども一種の神様の寵児と云へる。誰が真似してもしくじるが、彼がやつたのでうまく行つた、と云つたやうな道をうまく選つて行つたと云へる。

作家の年齢はその仕事ではかるべきだとアルツイバアセフは云つて、チエエホフが十分生きた事を説いてゐたが、その筆法で行けば、葛西も四十二で死ぬのは早過ぎるが、併しその仕事はその年齢の間に完成してゐた。――さう思ふと、自分などは恐らく徐福程長生をしなければならないのだらうと思ふ。

（九月九日）

葛西善藏氏臨終記

佐佐木千之

七月十六日……

鮫島博士が往診に見えて、向後一週間位より保たないだらうと云つて歸られたことを、玄關の外で私は清藏君から聞いた。清藏君は去年の秋善藏氏の舍弟が急病で亡くなつた時以來、三宿に同居して兩親を見てゐる、葛西氏の甥にあたる早稻田大學の夜學に勉學中の青年である。そして、六疊と三疊の間に据ゑた鐵製ベットに近づくと、改造社へ行つて、山本社長に、「是非本人がお目にかかつてお話しておきたいことがあるから、一兩日中御都合よき日に御立寄ねがへませんか。」――と賴んでほしいとのことで、私はその日の午後、改造社を訪れた。

幸に山本氏は居られ、且つ、今夜か明晩行きませうとのお返事であつた。夕刻、三宿へ歸つて、この旨復命すると、「さう、御苦勞。僕は飮めないけれど、そつちで一人で一杯やつてくれませんか。」と、氣を遣はれたが、呼吸が苦しさうに見えた。夜、谷崎精二、舟木重信二氏の手で、そつと葛西氏のノートを往來へ持ち出したりして、青森縣浪岡の長男亮三君と、北海道、石ノ卷の二人の令姉へ危篤の電報が打たれた。

この日、鮫島博士に入院を諾ふやうに勸められ、谷崎、舟木二氏もそして私も頻りと促したが、「お金が出來るとハッキリ決まらなければ……」と言つて聞かなかつた。

七月十七日――

昨夜より衰弱が加はつて見ゆ。酸素吸入を自分で指揮してやつてゐられた。晝のうち山本實彥氏が來られ、懇談して見たとのことで、いくらか興奮の色も現はれた。――自分で直接、社長に話したいといふのは、全集の版權を賣り、それで酒屋その他一切の整理をつけて、郷里碇ケ關の山間に小さな小屋を營み、そこで自然療法を試みようといふ、謂はば最後の一策に就ての相談なのであつた。これは一ケ月程前から考へついてゐて、機會を待つて居つたのだが、昨朝鮫島博士から、轉地せずとも、この家でいいから安靜にしてゐよと注意されたので、交渉開始といふことになつたのである。

で、山本氏は、版權はそのままにして、別に、療養費として三百圓づつ三四ケ月出すから、安心して健康の恢復を圖れと言つてくれたとて、大へん滿足して居られた。その日の午後、私は改造社で山本氏から前述の金額を受取つて歸つた。

すると、もう看護婦が一人來てゐた。

午後三時、體溫三十六度六分。脈搏百〇二。呼吸二十八。危篤な

く、野菜スープ、重湯、林檎汁、アイスクリームなど各少量を攝る。ガタミン注射二本。

夕刻鮫島博士來診。看護婦二人になる。この日、葡萄糖液の點滴注腸を二回したが、大半は排出してしまつた。夜に入りて北海道の令姉出發したとの電報あり。風強し。

●七月十八日――雨。

昨夜十一時頃より今朝七時頃まで安眠。注射のためであらう。體溫三十七度二分。脈搏百十六。呼吸三十二。二時間毎に、チギフオリン、ガタミン、カンフル等の注射をする。飲食はアイスクリーム十瓦の外、葡萄五粒、メロン一片。

午前、改造社から全集第一卷の檢印を取りに來た。全集用につくつてあつた水牛の新しい印を捺して歸した。入れかはりに、舊友の病ひを案じて奈良から上京された舟木重雄氏が見え、病牀に近づいて、「やあ暫らく、善藏君！」と、元氣のいい、しかし顫えを帶びた一聲をかけられた時、この一兩日めつきり形相の變つた葛西氏は、「駄目だ。今度は駄目らしい。」と仰向いたまま頷いた。

舟木氏が「奈良の酒だ。今、飲んぢや困るが、治つたら飲んでくれ。」と四合罎を一本見せると、暫らく額越しに眺めてゐたが、「有難う。向ふの見えないところへ置いてくれ。」――そして、[illegible]

れが遺言なのであつた。

德田秋聲、谷崎精二、光川稔、三上於菟吉諸氏の外見舞客が多く、一人一人會つて話をされたので、隨分疲勞のあとが見えた。それでも改造社から全集第一卷が屆いた時、平福百穗氏の美しい裝幀を見て、ただ「いいやうですね。」と呟いたきりで、酸素吸入をしきりにかけたがつた。

醫者は、好きなやうにして上げよと言つてゐた。私たちは代る代る枕許へ行つて、何か食べたいものでないかと訊ねた。

「それでは、葡萄酒でも飲んで見ませうか。」

喘ぐやうにして言はれたので、甥の清藏君が近くにゐる相田主治醫のところから、藥用葡萄酒を少し貰つて來たのである。が、これが大變氣に入らなかつた。

「葡萄酒を分けに貰ふことはありませんよ。龜屋へ行つて買つてくればいいものを……。」

そして、序でにメロンも一つ、小さいのでよささうなのがあつたら欲しいからと、枕の下に挾めてある蟇口から、十圓札を二枚出して渡した。清藏君はすぐに自動車で使ひに行つた。

買ひ物の釣錢を自分でしまつてから、メロンに佛蘭西の白葡萄酒をかけ、氷のブッカキと一緒に、匙で看護婦に口へ入れて貰はれたが、

かつた。

午後七時頃、鮫島梅太郎氏。排便のため浣腸を嫌がる旨看護婦から傳へると、浣腸は止めても宜しいとのことであつた。黄綠色粘液便が夜までに三回あり、十數度に亘る小水は合せて二百八十瓦ばかりであつた。

午後十一時四十分、――體温三十七度六分。脈搏百三十三、しかも微弱。呼吸四十一。カロナジンの注射を一本した。意識は却つて明瞭である。終夜警戒。

七月十九日――雨。

午前六時、體温脈搏前夜に同じ。呼吸三十八、稍々小康を得た。朝來尿意頻數なれども量少し。三時間毎に強心劑の注射をする。食慾少し出で、九時頃、重湯三十瓦の外、メロン、葡萄酒、西瓜の汁等若干量を攝つた。

北海道の令姉と、長男亮三君とがつづいて到着されたが、直ぐには會はれぬ方がよからうとの看護婦の注意もあつたので、暫らくの後に、舟木重雄氏から、二人の來たことを傳へてもらつた。が、葛西氏は顏を顰め、

「會ひたくないから、すぐ歸つて貰はう。」

でも折角心配して來られたのだからと言つたら、

「矢鱈に親類なんか呼び寄せてくれては困つてしまふなあ……いけませんねえ。」と言つて、[illegible]

間もなく姉上を枕許に呼んで囁かれた

「どうして來たの？　電報でも見たの？」

「いいえ、電報も何も見ないけれど、たゞ兄さんに會ひたかつたから……」と、遠い土の涯で農事に從つて居られるといふ、純朴な四十ばかりの姉上は、十數年振りで相見る弟さんの、金剛杖のやうになつたその手首をさすつた。

「一人で來たの？」

嗄れた、低い聲であつた。

「一人で來たの。」

その時、落ち窪んだ葛西氏の眼からは一滴の涙が流れ出た。

やがてそばに近く呼んだ亮三君には、何んといふ電報だつたのかを訊ね、亮三君が「チチキトクシラセル」とそれつきりだつた旨、豫め私たちで智慧をつけた通りに答へると、

「さう、ちやピヨウキヨロシ、ダレモクルニオヨバズ――佐佐木さんに話して電報打つてもらへ。」そんな難題を持ちかけて、亮三君を困らせたりした。

葛西氏と縁故の深い、三宿の酒舖信州屋の爺さんの好意で、三丁ほど離れた爺さんの借家を一軒借り、交る交る休息することにしてあつた。何よりも姉上と亮三君を休ませようとしたが、なかなか肯じられなかつた。

正午に七度五分だつた熱が、四時には八度七分に昇り、脈搏も百二十六を數へ、呼吸も苦しさうであつた。それでも、鮫島博士に向つて、葛西氏は全身の苦痛を訴へられ、「昨日はお客さんが多かつたもので疲れた。」と話などされた。

午後、カロナジンとカンフルの注射を一本づつした。それに一時頃から黄綠色の粘液便が數回あつた。診察を了へた鮫島先生は家人に、「もうお出でになるやうな方がないやうでしたら、苦しませることはないでせう。」と言つて、注射も藥も一切止めになつたのである。——今夜いつぱいか、最早明日一日は持つまいとのことであつた。珍らしいほど強かつた心臓が刻々に弱りつつあつたのである。

石ノ卷の令姉からは來られぬといふ電報が屆いた。

夜半、意識稍々不明となつたが、やがてまた明瞭となる。數人の者は、家人と共にひとつ蚊帳の中で、臨室の苦しさうな寢息に耳をすましてゐた。——

すると、眞夜中時分である。看護婦が使ひに來て、「誰だか知らないが、少し鼾が高すぎるやうだから」といふ病人の傳言であつた。私たちは背廣のまま横になつてゐる某紳士に注意しなければならなかつた。

七月二十日。——

朝、體溫三十八度五分、脈搏百二十八
ハ絶エズ胸部ノ苦痛ヲ訴ヘラル」と看護日誌には書かれてあつた。夜明け方、黄綠色の軟便が多量に出た。葡萄一粒、水蜜汁三十瓦が口に入つた。が、食慾は全然なかつた。

午前八時、鮫島先生來診、呼吸器の方はそんなでもないが、心臓が弱つてゐる。それにあの顏色では……と語を低くし、「何でも好きなものを食べさせて上げなさいや。」と懇ろに注意して歸られた。

午後、葡萄酒二十瓦、メロン汁、葡萄汁各五十瓦。朝來の軟便は下痢に變り、且つ頻數であつた。尿また同じ。午前に比して午後は總じて良好に見受けられたが、衰弱激しく、それでも氷の入つた吸のみを、自分で取らうとした。

この日、曉のころ、葛西氏はおハナさんを呼んで、「この中に二百七十圓入つてゐるから、大事に使へよ。お金といふものは要るからつて出せばすぐなくなつてしまふものだ。」と、枕の下に置いてゐた蟇口を、初めて渡されたのであつた。それまでは一切、今までの通り自分でやつて居つたのである。

亮三君の紋附を急いで誂へるやうにと、そんなことを心配されたのも、この日であつた。自分でも「今夜か明日の朝だらう」と、あたりの者に話して居られた。

醉歡まず。遊びでも[illegible]が來たか、[illegible]しいこと非常なり。容態は小康。體溫も朝六度三分、脈搏百二十、呼吸も樂になつた。五時半には重湯二十瓦、つづいて葡萄酒少しばかりを攝ることが出來た。

午前中、鮫島博士の外、久し振りで相田醫師も見えた。同醫師には先月の末勘定を濟すと同時に、暫らく藥をやめて見るから、時々診察にだけ來てくれと、葛西氏自ら賴まれたので、今日相田氏はこの容態を見ては些か吃驚したやうである。

それに夜明けから綠色泡沫便が幾回にもあつた。これがいけないらしかつた。が、當人は何時になく氣分がよいと言つて、まだ明るくならないのに、新聞や手紙を蚊帳の中で讀んだりしてゐた。一兩日來、めつきり多くなつた見舞客のことに就き、新聞にでも出たのかも知れない。それが見たいと頻りに言はれるのだつたが、淸藏君も、「叔父さんのことだから却つて見せた方がよくはないでせうか。」と相談するので、淸藏君に一任した。前日の讀賣新聞に大きく出た「絕望の葛西善藏氏」といふ見出しの記事を切拔いて、ノートの紙に貼つたのを見せた。それには、この春病牀に坐つて撮つた近影も出てゐたのだが、無斷で寫眞なんか貸したりしては困ると、叱られることを恐れて、それは匿して置いた。

去年の暮、相州七里ヶ濱の鈴木療養所を退院して以來、世田ヶ谷三宿の自宅で靜養中だつた葛西善藏氏はこの十三日以來、病にはかに革り、遠く北海道と靑森から令姉令息を馳せつけて看護を盡してゐるが、今年[illegible]といふ[illegible]き、葛西氏に對しても手で持ちながら、黑い大きな眼鏡をかけさせて、繰返し繰返し讀[illegible]しまつてから、

「割合によく書いてある。」と一言言つた。

見舞客の多いわけも頷けたらしかつた。そして、卓上鏡を手にとつて、頻りと自分の顏を映して見てゐた。

舟木、光用、谷崎の諸「奇蹟」同人諸氏はじめ、私たち若い者など、休息所にあてられた空家との間を往來した。ひどい泥濘であつた。そして、そこでは萬一の場合の用意がすでに定められてゐたのである。お寺も、弟さんの場合のやうに谷中天王寺で、告別式といふことにしよう。しかし、文壇的に功績のある葛西氏のことだから出來るだけ立派にして上げたいと、親しい友人の方たちは話してゐられた。

そして、稍もすると、葛西氏の追憶談に花が咲くかたちであつた。が、何んにしても、病院にもつとゐればよかつたといふことと、酒を飮みすぎたといふことと、五月の雨降りに、二度も行水をつかつて感冒をひいたのが惡かつたといふことと、或る漢法醫の注射をすゝめられて試み、却つて病勢を増させたことと……其他ことごとく、思つても甲斐ないやうな話ばかりが出て來るのであつた。……

體溫もさして昇らず、葛湯やスープを少少攝取したほどで、この分なら、或は持ちこたへられるかと思はれた。

夜の十二時近くであつた。ドロップが食べたいと言つて、看護婦に

ある宮地嘉六氏が、病を押して見舞に見えたが、ちよつと眼を開いて頷いたきりで、夕刻谷崎精二氏が、耳元近く「谷崎だよ。」と言つた時は、もう全くわからないやうであつた。今まで止まつてゐた咳が出、痰が咽喉にゴロゴロと鳴つて來た。

かうして夜になつた。遲くなつて、相田醫師が三度び診察に見えた。脈は微弱で、辛うじて數へらるゝほどであつた。

痰がしきりにからまつた。

「痰を吐き出して下さい。お出しなさい。」と看護婦が大きな聲で言つても、最早それを口の外へ出すだけの力がなくなつてゐた。

緊張と不安とが重く、おつかぶさるやうであつた。次の茶の間では亮三君、清藏君、嘉村君、岡本君と私とがお茶を前に置いたまま、肥つた相田先生が、喉頭結核で咽喉に穴があいてしまつた患者を今日も往診して來たが、細君がガーゼをつめかへ、絆創膏を貼つて平氣で外を歩けるまでに癒つたといふ話をするのを聽いてゐた。

「絆創膏を貼るんですか？」と誰かが訊いた。

「だつて、風邪をひくといけないもの……。」

相田先生はじめ、みんなが笑つた。――そこへ看護婦が急いで來た。

「先生ちよつと。」と言つた。お醫者さんの後から、みんなも立つた。

「あちらの方に知らせなくては……。」

白い蚊帳を半分はづしたベットの上に、葛西氏は今さ

骨の一本一本突き出た小さな胸で大きな呼吸を一つした。心臟部に聽診器をあてゝゐた相田醫師が、時計を見ながら「眼を瞑らせて」と看護婦に言つた。

一指も亂れてゐなかつた。これが葛西善藏氏の四十二年の生涯の臨終であつた。「午後十一時八分死去、死後體溫三十七分二分」と看護日誌に記された。

休息所の方から、舟木重雄、同重信、光用穆、谷崎精二、宮地嘉六、佐藤榮七の諸氏が來られた時は、臨終から數分を經過してゐた。

亮三君はじめ、おハナさんが、――無心で眠つてゐたユウ子ちやんと久美子ちやんは私が代る代る抱いて、脣を濕はした。そして、舟木重雄氏が、「善藏、ゆつくり休め！」と感情をこめて言はれた時、何處からともなく歔欷の聲が起つた。――雨後、風のない靜かな晩であつた。

（昭和三年八月六日記）

稀代の好學家惡左府頼長

和田萬吉

藤原頼長と謂ふよりも惡左府の名で通りのよい此人は、藤原氏の嫡流で平安朝掉尾の權勢家たる准三宮忠實(富家殿)の二男で太政大臣忠通(法性寺入道)の弟であつた。幼少の時から頗る怜悧で所謂一を聞いて十を知る質であり、亦容貌までが端整であつた處から、父忠實の殊愛を蒙つた。兄忠通も器量人であつたが、是は父が十九歳の時の子で餘程甘やかされて育つた。それが次第に不良性を醞釀したものと見えて、青年の頃から兄を兄とも思はず、若し單身對抗が叶はぬときは父の袖にすがつて强がつた。されば官位の昇進も總領の兄のそれに劣らぬ早さで、十四歳の時に正二位大納言になり、十六歳で右近衛大將を兼ね、十七歳に内大臣、二十歳で皇太子傅左近衛大將を兼ね、三十歳には從一位左大臣に陞り、三十二歳には文書内覽と云ふ破格の待遇を被つた。兄忠通と云ふ當時の關白が在るのに、其弟に文書内覽の宣旨の降るなどは甚だ不思議の沙汰と、滿朝の公卿が目を聳てたとの事である。是れ皆父の執成の結果であるが、就中一つ乙子贔屓の甚しい例は、藤原氏の嫡統たる氏の長者の稱を忠通の手から捻取つて頼長に與へた一事である。與へたのは父(奏請を經て)であるけれど、與へるやうにさせたのは頼長である。是には藤原氏の一族が悉く呆れたらしい。併し父の威光を背後に控へた頼長は自分に心服せぬやうな貌をして居る公卿を、同族異姓に論無く誰をも彼をも假借することなく罵り散し蹴散すから、へぼ胡瓜宜しくと云ふやうな青公家連中は皆屏息して居る。併し人の口には戸が立てられず、誰言ふとなく惡左府の異名を以て彼を爪彈きするやうになつた。一説に惡左府と云ふは反亂を起して失敗した身後の貶稱とする人もあるが、それは當らぬ説である。人物の綽名や稱呼の上に惡の字を冠したのは、十の九まで當人在世の間に得たものを其死後まで持越す例であるのに徴しても判らう。頼長は仕たい放題に振舞つて忌み憚る所も無かつたが、只一つ心の儘にならぬことは、兄がまだ五十幾歳の男盛りで攝政關白太政大臣の職を退かず滿廷の重望を負うて貧乏ゆるぎもせぬ。さすがの不悌漢も是には施す術が無い。そこで大それた事ではあるが、忠通を一の人(太政

大臣)にしてゐる朝廷を倒壞して自分を太政大臣とする新政府を起立するに若かずと思つて、時節到來を待つて居た。するとかね〴〵皇位繼承の事で御不平で在らせられた崇德院が御弟近衞天皇崩御の後、御子重仁親王の踐祚を御期待あつたが事ゆかず、いよ〳〵御焦慮あらせられるのを窺つて、賴長は上皇に取入り、からにも無く兵を擧げて遂に保元の亂を起した。處が淸盛義朝と云ふ源平の古つはものが御白河天皇の將軍となり、敵は猛勢なり味方は無勢なり、又紈袴子のなさけなさには折角驅附けてくれた爲義爲朝を善用することを知らず、自ら事を作しながら敵に機先を制せられて脆くも一敗地に塗れ、口が利けぬ程の重傷を奈良まで運んで遂に自決して了つた。保元の亂の原因は別に紛糾したものがあつたのであるが、それは普通の史籍に讓つて爰に贅せぬ。とにかく兵亂を作して一世を驚すに至つたのは賴長が野心非望からである。賴長が唆し申さなかつたなら、崇德院が親ら謀主におなりなされるやうな事はあるまい。院の上を表に立てゝ自家の營利を圖つた賴長は慥に姦物に相違ない。彼は此くの如くして亂臣賊子の醜名を千歲の後に遺した。罪も無い子供等も一旦各地に配流された。後に赦されて歸洛した中に一子師長が太政大臣まで陞つたことは意外である。さて父忠實は變亂の當時宇治に隱栖して居た。賴長が矢疵を負つて都を落ちて最後の哀を老親に乞はうと思つて宇治に來た時は、さすがの親莫迦も世間の手前を憚つて門を閉ぢて面會しなかつた。親に

國史の表にあらはれてゐる處では賴長の行蹟は何[illegible]眞にヤンチヤン子供の惡戯の聊か念の入つたものに過ぎぬやうである。保元の亂の張本などと謂つてもあれだけでは呆氣無い。どうせ命を投出すならば、今少し智惠の有る行き方に出られさうなものとは誰も皆思ふ所であらう。累を崇德上皇御父子に及して罔極の罪を遂げたことは、勿論一死を以てしても贖ふべきやうも無い。併し賴長の作亂の仕方には單純淺薄味が勝つて複雜深刻氣が無い。もとより彼の心事に同情すべきものもないが、亦士を起して屍に笞打ちたい程の所も無い。彼は後年太政大臣を贈官されて、生前の望を死後に遂げた。此う謂つて了ふと、賴長は天下の愚人として憫むべき者となるが、意外にも彼には當時無雙の學問好と云ふ讃辭をあびせ得る。非々是々の見地から彼の佳所をも擧げて見よう。

平安朝は末期になつても漢學は猶流行して居る。その中で賴長の勉學は非常拔羣で、殊に詩文のやうな浮華の方面に就かず、かたくるしい經史の道に專念した狀は、なまなかの博士先生にも見られぬ程であつた。此の好學は誰に勸められてのことでは無く、自身から大々興味を以て精進するのである。隨つて典籍を蒐集し愛藏する心も深く、後には立派な私有文庫を建てゝ永代の保全を圖つて欣んで居る。珍書佳本の探訪にもあらゆる注意と努力を惜まず、殊に其頃追々我國に渡り始

の贈物に貫を供またかつたらうが、奮物に興をくれる者などに無かつた。此筋に於て頼長を見ると、後に保元の亂に非業の而もきたない最後を遂げるやうな惡夢を見て居さうには無い。此位行動の前後撞はぬ人が歴史を通じて又と有らうか。無類も無類、全く無類である。彼は三十七歳で下世して居る。それは自業自得の短命であるが、物心ついてからの二十數年を聖賢の道に捧げながら、最後の一月半月に無學文盲漢にも劣つた擧動をして大失敗に終るとは何たる事であらうぞ。

さりながら頼長が讀書研學にいそしんだことは實に驚くべきもので、菅江清紀の本業の人でも無く、而も富み且つ榮えて何の苦勞も無く、ともすれば花鳥風月を玩び遊惰淫逸に身を委ねさうな處を、只管聖人君子の遺業を究めようとした精神には見どころが有る。

今頼長（惡左府と云ふ貶稱を姑く去つて）が盛年期の十餘年間の起居動止を自錄した日記「台記」に據つてその勉學の一斑をかいつまんで見よう。

この「台記」は筆者二十三歳の康治元年（紀元一八〇二）から三十六歳の久壽二年（一八一五）までの日錄で、前後十四年に亘つて居る。卷數はもと二十卷、中間に缺文があり、又半ば重複になつて傳はつた一卷がある。頼長は保元元年（紀元一八一六）七月十四日に死んだ。此年に入つて擾亂を起し日記を書附ける暇が無かつたものと見えて、「台記」は其前年に終つて居る。「台記」の外に其「別記」「宇槐雜抄」の二錄があつて「台記」を補足して居る。

× × × × ×

先づ讀書の功課の一斑を見る爲に康治元年（紀元一八〇二）の一个年を摘抄すると、

此年正月二十二日に「春秋左氏傳」を讀み始めて公務（當時内大臣兼左大將）の暇に此書に沒頭し、三月二十八日までに即ち凡二个月餘で全部三十卷を終へて居る。「台記」此日の條下に「凡雖ニ性拙一於ニ春秋一隨ニ力及一所レ學也」と云つて、勉強して讀んで居る狀が見える。「春秋」は餘程氣に入つたもと見えて爾來しば〳〵日記中に出て來る。「左氏傳」が主である。

次で中一日置いて三月三十日から「春秋公羊傳」に取掛り、四月五日に至つて「公羊解徵」を讀了した。單に流讀するのでは無く、處々に首書を施し、又勾符を記し、其該當紙背に私案を漢文で評く。この裏書は書生に記させる。此日の條下に「不レ見ニ公羊解徵一者無レ通ニ春秋大義一矣」と云つて一見識を示して居る。餘程得る所があつたと見える。

次で四月六日「毛詩正義」を讀み始め、二十四五日の後即ち五月一日までに全部三十卷を了へて居る。亦首書を加へ私案の裏書をすること前と同じである。

翌五月二日に「尚書正義」を見始めて七月七日まで即ち凡そ二个月間に全部二十卷を了へて居る。

翌七月八日から「論語皇侃疏」に取掛り、同二十九日まで即ち凡そ

二十二日間に全部十卷を見了。

次に半月許り置いて八月十六日に「五行大義」を讀む。然るに此時は病氣加療中で捗が行かぬと嘆じて居る。

八月十八日佛典に移り、權僧正覺宗と云ふを家に招いて「千手經」を習ふ。習ふと云ふのは讀誦の仕方を教はることで意義の解釋を受けるのではあるまい。此う云ふ學習も年中に時々して居る。儒學では無いが當時道釋兩家を學ぶのも學問であつた。別して佛教は。

八月二十三日また儒書に戻つて「經典釋文」を見る。是は宇治の別業での事である。

九月二十八日復び「春秋左氏傳」を讀む。此は必要の處を拔讀したものと見えて一日限りである。

翌九月二十九日「尚書正義」に施して置いた裏書（私案の文）を校訂する。處が此日から大嘗會の公事が始まるので多忙となり、「左氏傳」の讀過を停めて、公事の參考に和書「北山抄」を批見するとある。

右大嘗會（近衞天皇御即位の時）の爲に頼長も學問に專らなることが出來なかつたと思はれ、以後十二月の終りまで讀書勸學に關する記事は見えぬ。

但十二月三十日の條下に、自分は漢學を專らにして我朝の書物に心を注がず、それが爲に我朝の故事に昧い。子孫の[illegible]

竹和歌の道は敢て勸めはせぬが、さりとて強いて禁じはせぬ。洒色の道の類は之を禁ずると云ふ意味を述べ、學問の要領を年末總勘定の日に當つて子孫に訓諭して居る所は、立派な道學者先生のやうである。こゝらも漢學かぶれの氣味か。二十三歳の若さで子孫の上を考慮する處は隨分ませた者である。

以上は前に述べた通り康治元の一年だけの概況であるが、此を以て以後毎年の狀勢を推測することにする。

× × × × ×

康治二年九月二十九日の條下に去る保延六年（紀元一八〇〇、時に頼長二十一歳）から康治二年（一八〇三、頼長二十四歳）今日までの三年間餘に讀了した書物の統計を錄して、一々の書名の下に閲讀の年代を註して居る。それから「太平御覽」百三十八卷を讀んだけれど、今一向に記憶する所が無い。藤原友業（頼長の邸に出入する儒者の一人）の言によると、此書は時に臨んで見るべきもので平常讀んで置くべきで無いと云ふ。如何にもさうであるから同書は今日限りで止めると述べて居る。その後に是までに讀破した書目を掲げてあるのが、凡そ七十二部千三十卷である。頼長の讀書力や當時學者必讀の書の如何を窺ふに足るから、やゝ煩はしいが左に轉載する。讀んだ書物の品種を知らなければ、彼の勉強の程度も分らないわけである。讀んだ

用に云つて置く、當時は我國では未だ印刷が流行せず、佛教の典籍だけ或場合に限つて木版で刊出されたが、一般の書物は悉く寫本である。佳本と云へば能筆の寫生が良紙良墨を以て精寫したもので、頼長あたりの藏書となるのは即ち此手である。それから書物の形式も九分通りは冊子製でなくして卷子製である。卷子製は體裁こそ上品であるが、捲舒開閉が不便で何時でも好む處を迅速に出す譯に行かぬ。それ故卷子本を披閲する人は卷首からじつくり落付いて讀んで、出來るだけ暗記に近い呑込をして置いて、後日其中の或事柄を捜す時に大凡そ所在の見當のつくやうに用意する必要がある。さうで無いと卷物の初を捲いて見たり末を開いて見たりの造作が五月蠅くてたまらぬ。一讀の後處々に部分々々の內容を標出首書することも他日再讀の時の便宜を考へての業である。その代り卷物は厚めの紙で紙背は白く殘されて居るから、裏書をするには都合が可い。表面の文章の中に勾符を點じて其該當裏面に私案などを書いて置いた目標とする。頼長に限らず研究的態度を以て讀む人は大抵この調子である。結局書物は讀者の手の多少這入つたものになつて、筆寫當初の奇麗な儘では無い。但し流覽一返で了ふ讀者が何の加筆をせぬ場合も素より多からう。寫本の事であるから自然誤字も脫漏も出來る。それを善本に據つて校合することや、又訓讀する爲にヲコト點や返り點や傍訓を附けることも、頓敏の讀者が師授によつてしたものである。畢竟後世刊本流行の時代よりも讀者の勞力が遥に多い。此う云ふ事も一應知つて置かねば、往々研究に合致せぬ事も無からぬと思ふので兹に蛇足を附けておく。さて肝心の書目と謂ふのは左の通りである。

經家三百六十二卷

尚書十三卷　抄　保延六年
同音釋二卷　首付　永治元年
同正義廿卷　首付裏書　康治元年
毛詩廿卷　抄　保延六年
同正義卅卷　首付裏書　康治元年
周禮十二卷　抄　永治元年
儀禮十四卷　抄　永治元年
禮記廿卷　抄首付　永治元年
新定三禮圖廿卷　康治二年
左傳三十卷　抄首付　永治元年
同釋例十六卷　首付　永治元年
諡法一卷　永治元年
同正義卅六卷　首付　康治二年
公羊十二卷　抄首付　永治元年
同解徵十二卷　首付裏書　康治元年
穀梁十二卷　首付裏書　永治元年
同疏十二卷　首付裏書　永治元年
古文孝經　保延五年
御注孝經一卷　保延六年
同述義五卷　首付裏書　康治元年
同去惑　康治元年

――稀代の好學家――
――(惡左府賴長)――

論語十卷　保延三年
同皇侃疏十卷　首付裏書　康治元年
老子二卷　抄　保延六年
莊子卅二卷　抄　保延六年
經典釋文七卷　康治二年
史家　三百廿六卷
史記五十一卷　保延三年
漢書九十二卷　保延四年
同敍例一卷　保延四年
後漢書百卷　抄　保延六年
三國志帝紀十卷　抄首付　永治元年
晉書帝紀十卷　抄首付　永治元年
同載記卅卷　首付　永治元年
南史帝紀十卷　抄首付　永治元年
北史帝紀十二卷　抄首付　永治元年
新唐書帝紀十卷　永治元年
雜家　三百四十二卷
蒙求三卷　保延二年
燕丹子三卷　保延三年
西京雜記二卷　保延五年
崔豹古今註三卷　保延五年
立身誡一卷　保延五年
洞冥記四卷　保延五年
荊楚歲時記一卷　保延五年
金公劍記一卷　保延五年
臣軌二卷　保延五年
帝範二卷　保延五年
六軍鏡三卷　保延五年
讀齊諧記三卷　首付　保延五年
李氏註文選六十卷　自筆抄　保延六年
新樂府二卷　保延六年
鬼谷子三卷　抄　保延六年
高才不遇傳四卷　抄　保延六年
漢武故事二卷　首付　保延六年
王子年拾遺記十卷　保延六年
顔氏七卷　首付　保延六年
太公家敎一卷　首付　保延六年
素書一卷　保延六年
註千字文一卷　保延六年
註百詠一卷　保延六年
貞觀政要十卷　首付　保延六年
孔子家語廿卷　保延六年
居易別傳一卷　首付　保延六年
劉子十卷　首付　永治元年
爾雅三卷　首付　永治元年
集明書五卷　首付　永治元年
孟子十四卷　首付　永治元年
同音義二卷　首付　永治元年
東齊記十二卷　首付　永治元年

都合一千三十卷

右の表を見て直に心附くことは賴長の讀書の仕方が立派に組織的である事である。例へば春秋を讀み出せば左氏、公羊、穀梁の諸傳を究め、禮を讀み始めると禮記、周禮、儀禮を通じ、史記、漢書から三國史、晉書、南北史等に及ぶ類で、順序あり次第あつて、甲乙丙丁の異類を手當り放題雜駁に見て行く風は無い。各書の下の讀了年紀を見ればそれが能く判る。此を以て彼の讀書が全く研究家の態度であることを知り得る。

右の目錄は康治二年九月以往三四ケ年に讀破した書の總計であるが、それから後は每年末（十二月三十日）の條下に當該年間に學んだ所の書物の目を擧げて、全く初見の本と再三閱の本との區別をも明かにして居る。康治二年末以降の書目は煩はしいから之を省くが、後年段々にむつかしい書物が加はつて行き、彼の讀書力も次第に勇健に赴くと察すれば可い。三十七歲の歿年までに幾許の卷數を消化したか精確の數字は擧げられぬけれど、初度讀了のものだけで少くとも五千卷を超え、再三反復の數々加へれば夥しいことにならう。彼は多讀にして精覽を兼ねて居ると謂ふに誰も躊躇をしまい。

× × × × ×

前揭目錄にも在る通り賴長の讀む書物は經史子集の四部に涉つて居る。併し彼が最も力を傾けたのは經書類であつて、殊に年齒と共に學問が長じてからは春秋、尙書、易の類に研鑽を深めた樣子が「台記」[illegible]の記事に見えて居る。[illegible]が無いか、さりとて全く史書を度外にするも遺憾であると思つて、[illegible]に奇妙な一法を案じ出した。それは飲食沐浴の時間の利用であつて、康治二年の春から實行した。同年十一月十七日の條に其樣子が詳記してある。即ち食事入浴の時に諸生五人を左右に侍らせて、それに史記（例へば「南史」）の要所を讀ませること一時に反復三回に及ぶ。それを聽聞して覺えるのである。併し只聽放しの無責任では面白く無いので、一通り聽き了へた後、一要項の初の部分を諸生が言ふとその末の部分を賴長が續けて言ふ、ちやうど試問に對して口答をする姿である。これで記憶の慥不慥をためして貰つて自分の敏鈍を覺ると謂つて居る。處が「南史傳」七十卷の內諸生の讀つて聽かせたものが五百九十一件あつたのに、滿足に覺えて居て答へ得たのは二百八十五件だけで、殘りの三百六件は答へられなかつたと謂つて、恥辱を甘んじて居る。食事や沐浴も落ち／＼出來ぬやうにしてまで知識を求めようとするのは、心懸だけでも偉いことである。但し知識を得るに專らになれば、食事や沐浴の方は御留守になつて、食へども味を知らず洗へども垢が墮ちぬことであらうと想ふと少々可笑しくなる。併し常人は些も不便不快を感じて居らぬ樣子である。但し飯を頰張つたり裸身になつたりしてゐる旦那を取捲いて本を讀む役の五人は、隨分と御難であつたらう。此「南史傳」は翌日即ち十一月十八日を以て讀り了つた即ち聽き了つたと記してある。

頼長は骨髄の書物好きで、讀書の爲には如何なる時間をも空しくせぬ。別業の在る宇治に行く時や氏神春日社の在る奈良に參る時などは、途も長し牛車は遲いのを結句良いことにして、其車中で必ず書物を讀んでゐる。その書物は今日の圓本や何かのやうな樂讀み性のもので無く、「毛詩」「老子」等の例のどつしりした卷物本である。「老子」を讀んだ事は天養元年十二月十一日の條、「毛詩」を誦した事は同二年三月十二日の條に出て居る。前者の時は閑が出來たと見えて、車中で氣霽しの笙を吹くと、隨從した師國朝臣が車に在つて之に和したとある。此處らは風流なもので繪卷物にして見たい。

勤學に熱心の餘り公邊の勤務を怠ることさへある。久安二年四月廿五日の條に、是より先「儀禮疏」を讀んで抄寫をし始めたが、その功を竣へんが爲に去る二月中旬から暇を申請して朝參せず、常に家に籠つて萬事を拋ち、夜を日に繼いで勉強、やう〳〵此日に抄し了つたと云ふ。學問の爲には公事も其地退けとある。

見書に方つて態度の謹嚴なことは驚くべき程である。始めて聖人孔子等の著書を讀む時は、髻を櫛つて吉日良辰を選び、手洗ひ口嗽いだ後、烏帽子直衣又は狩衣を着けて披見にかゝるのが定めである。但し佛典で無いから精進潔齋には及ばずと斷つて居る。且つ其條毎に「女犯魚食不レ可レ憚」と註してあるのは可笑しい。此人大分好きであつた形迹がある。第二流の書物を始めて見る時は唯烏帽子を着けるのみで

してある。眞に義理堅いことである。

易」初見の場合、後作は同三年六月廿九日「周易略例」初見の

見える。

學事が進み見識が立つやうになつてからは、當時の儒者で常に頼長の家に出入する人々を招いて諸經の講筵を催すことや論議問答の會を開くことが時々ある。其節の式作法も嚴肅なもので、席の正面には文宣王(孔子)の影像を掲げ、頼長以下一同禮服に威儀を整へ、影前に拜禮の後講說を始める。頼長が自ら講師を務めることもあるのは、既に諸老儒の間に立つて押しも押されもせぬ位になつて居る證據で、彼が堂々と構へ滔々と辯じたかの狀が想像される。此邊で鼻を高くし溜飲を下げて置いて、後日叛逆人になることを差控へたなら、頼長も日本一の御公家樣で通つたらうものをと聊か殘念である。俗講筵が濟むと所謂竟宴があり。布施(謝勞の金品)も出る。參加の儒者で度々名の出るのは藤原成佐、同俊通、同登宣、清原頼業等である。此例は天養二年九月廿八日の條等に見えてゐる。

久安三年八月廿九日の夜「儀禮」の竟宴を行つて、例に依り題を所講の書物に取つて參筵の一同が詩を賦した。その時頼長の作は左の如くである。

仲秋陪二文宣王影前一講二儀禮一、同賦二禮儀有レ序一一首

大射張翫未レ行先、主客昇降全不レ失、君臣両位敢無レ怨
膓才講匠迷レ敀レ答、執レ巻繳侍ニ聖影前一

この一首を以て彼の詞才を窺ふに足る。尤も題が題だけに理窟がちのぎごちなさは致し方がない。それにしても是だけの詩想を捻出す頭が有りながら、保元の不心得は何たる大俗大惡の態ぞ。なさけ無いことである。

× × × × ×

學問好きの人が良書冷籍を獲得するに力めるのは何時の代でも同じことである。頼長が一身一家を傾けることを辭せぬ次第と云つても本場の宋國で出來る刻本に上越すは無い。宋槧は版式の整美なる點に於て世界刊本中の尤であることは學者ならぬ素人をも納得させる。況や其内容がよく洗練されてあるので、誤脱の存在を免れぬ日本の傳寫本に慊らず思ふこと頼長の如き者は、何を差措いても宋刻を得たくなるのは當然であらう。果して彼は百方奔走して之を蒐集しようとしてゐる。収得に骨の折れるだけ収得の際の欣悦は大抵では無い。その若干の例が亦「台記」に出てゐる。

康治元年五月九日の事、侍宗弘と云ふ者がからに無く「五代史」の宋槧本を有つて居たのを頼長に贈つた時、彼は飛上つて欣んだ。此日の記中に「感悦有レ餘」と稍大柄に書いてあるのは、寄贈主が甚く眼下の者である故か。

同二年七月廿一日に皇太后宮大進以業が「禮記正義」の宋版を貸してくれたが、此時は「一時得言西尸公ニ」と云つて許さなかつた、何のただけで買つた譯でも無いのであるのに此うまで拒んだのは自分所持の宋本に校合する基本を得たからである。後には頼長に及んだらしい。

同年十一月三日には大宮大進行成と云ふ人が同じ「禮記正義」の宋本を貸與してくれたが、此時も我が監本に校合の便を得て喜んだ。是は前の以業本でした校正の不足を補はうとした場合でがなあらう。但し内々借り貰ひにしようとした譯がある。なか〳〵狡猾い。

同年十一月廿四日かねて懇意の儒者藤原信俊から「周易正義」の宋版を借りて寫本を作つた。作りはしたけれど、宋本の美しいのが欲しくて堪らぬ。そこで美紙能書の粋を盡した出來立の寫本を先方に提供して宋本と交換を申込んだ處、信俊に取つては何がさて大旦那の要求で辭まうやうもなかつたので、宜しうござると手を拍つた。そこで頼長の方は額を拍つて「余心悦甚於千金ニ」と叫んだ。尤も寫本を作る費用と宋本の價とを較べたら五分五分かも知れなかつた。只頼長は唐紙の香に醉つた處も有らう。

最後に大分手數をかけて横奪を企てた一例が面白い。時は久安二年三月十一日清原頼業が大學の先生である直講藤原信憲の家藏に「周禮疏」の宋槧本が有ると云ふことを頼長に報じたから、さあたまらぬ。何卒して之を揚げたいものでと右つ左つ苦心の極、陰陽博士加茂泰親に頼んで占はせると、是は得られますと云ふ。此人の占ひは昭和時代の天氣豫報より當り率が多かつたので、頼長はほくそ笑んだ。

もの事に使になつて行く人間の取極めをも占はせようと思つて又見て貰ふと、情報者の賴業が佳いと出た。そこで賴業が假面を被つて信憲の許に出かけて賴長の情願を述べた。信憲は相手方が四五人がかりの大だくみと知つてか知らずか、とにかく賴長い物には捲れよとあるからと思つて、ポンと投出して惜しいやうな貌もしなかつた。賴業は意氣揚々どんなものだと手を揮つて還つて來て上首尾の報告をした。賴長は今に始めぬ泰親の妙術を褒めて手本一卷を贈つたと云ふ、此手本と云ふは誰の筆ともないので少々齒痒いが、或は家に傳はつた三跡の中の一人例へば行成卿あたりではあるまいか。但し是は全然推測で、之を貰つた泰親の占ひ程には當りさうも無い、寧ろ豫報組に近い談である。此時信憲も相當の禮物を受けた。

仁平元年九月廿四日にも賴長の大に滿悅した事がある。宋の商賈で劉文冲と云ふ者（此者宋父和母の混血兒と云ふ）が「東坡先生指掌圖」二帖、「五代史記」十帖、「唐書」九帖（無論宋版本）を賴長に贈つた。それに對する返禮として沙金三十兩（目方）を與へ、同時に賴長年來所望の「周易疏」以下百二十七八部の書名を記して、好便に屆けてくれるやうにと、得意の漢文尺牘を劉に贈つてゐる。然るに此下に物語り無しであるのを見ると、宋商から無報であつたのであらう。尤も最によこした「東坡指掌圖」は存疑の書であるので、禮金を貰つた劉生少し尻こそばゆかつたのかも知れぬ。

賴長は意地の強い人であつて、一旦かうと睨んだら［…］す質である。處で人情味が全く無いでは無い。殊に我が好む學問の師匠又は友人に對して義理情愛の淺からぬ處がある。それも「台記」に頻々と例が見える。その二三を擧げると、

康治二年八月廿四日に賴長の師であつた大内記藤原令明の訃に接した時、幼年の頃「孝經」「文選」などの手ほどきを此翁にして貰つた昔を追懷して哀悼の情に堪へず、家臣に命じて宴樂を停止させ、藤原俊通を遣つて弔詞を傳へさせた。

天養元年七月廿二日には平生最も尊敬信仰してゐる師匠藤原通憲（少納言入道信西）が落髮したと聞いて沈痛の意を洩して居る。出家入道の事が志を得ないで卑官に在ることを歎いてゐた餘りであるのに同情した趣もある。然るに後年にはこの師弟兩人が相扞格して氷炭の關係になつた。信西は當時第一の博學宏才であつたが、意地が惡く執念深い點では賴長以上であつたので、兩つの陰性が衝突したものであらう。賴長は此人から易經を習つた。

同二年七月廿四日には最も師友關係の淺からぬ明經博士藤原信俊が病の爲に出家したと聞いて、清原賴業を遣つて遺憾の旨を述べさせた。

對師情誼の發現の最も著しい例は久安四年正月廿六日の條に見え

した上に、特に告文を大學に在る孔子廟に捧げた。その文は神靈に捧告のものとして祝詞の形式を取つて、中に微臣に孔公の教を致せる者若し有らば、それは師成佐の力である。師匠を尊敬することは禮經の主ら說く所である上は、文宣王我が微衷を憐んで成佐に惠みを垂れ給へと云ふ如き意味のもので、本告主は「大日本國內大臣正二位藤原朝臣頼長」とある。この告文の聖廟に出たものは事終つて後燒却すると註してある。さて此願は叶つたと見えて、同年二月六日に庭に出て大學の方を拜し先聖に御禮を申してゐる。何處までも篤いものである。

× × × × ×

頼長は我子の教育に亦漢學を以てした。當時漢學の外に學問は皆無であつたから、頼長は當然の事をしたのであるが、自分が大の漢學者であるだけに、我子に臨むところは一段の嚴しさであつたらしい。彼の嫡子は頼長が十九歲の年に擧げた兒で菖蒲丸と稱した。後に從一位太政大臣に登つた師長は是で、琵琶の名手である所から琵琶の大臣の綽名と「妙音院」の法名を得た人である。

この菖蒲丸が十歲の久安三年の正月十七日に豫て敎習を受けて居た「孝經」に就いて父の試驗を煩はした。其時菖蒲は自分の小机の上に載せられてある「孝經」の本をポンと伏せて、序文をスラ〳〵と暗誦して聽かせた。むづかしい顏をして我子を喚びつけた頼長が欣ぶまいことか、すつかり相好を崩して了つて、褒美に水精の玉一顆を取らせた。玉を與へたのは君子の德に比する心意氣とある。日記に「不レ堪感」と記しつけた三字には千萬無量の喜びが籠つてゐる。

右は年の始の事、さて同じ年の暮即ち十二月二十日に父が又菖蒲丸を呼んで今度は「孝經」と「論語」の復讀をさせた。「孝經」は藤原成佐、「論語」は藤原師光の擔任と云ふ。此時も大成功であつたので、褒賞には兄藤原忠通の書いた手本一卷を授けた。忠通は當時第一の能筆であつた（世に云ふ法性寺切れの先生）。頼長と忠通とは二十三年の開きがあつたから、幼少時には兄の手本で自分も習字したらう。其賞物の一本を菖蒲に遣つたのは、是で字を習へと云ふ意旨も含めてある。仲の善くない兄ではあるが、詩歌書の諸技にかけては內々敬服してゐるものと見えて、書道は伯父樣に學べとあつた。日記に「生年十歲不レ堪レ感」と記してある。定めて乃公兒有りと書き添へたかつたらう。保元の事に坐して土佐に流されたのは此兒が十九歲の時である。併し別段父の悪業に加擔した譯で無いから、程無く大赦に遇つて歸洛した後次第に立身した。

師長の外に權中納言兼長、右近衞中將隆長等の二三兒があつたが、それらの敎育については著しい記事も見えぬ。只二男今麿が例の藤原成佐に從つて「孝經」を讀み始めた事が久安四年二月十日の條に在る。

× × × × ×

當時佛教は漢學と相並んで上流社會を風化して居る。其力は偉いもので、頼長の如き儒教に心醉した人も一面に於ては大の崇拜家であつ

た。是は學問と云ふものでは無いが、文字に關係ある事として彼が經典の書寫に心力の一部を捧げた樣子を見よう。それも彼の日記「台記」の示す所である。由來寫經は信心と修養とを兼ねた所がある。賴長は例の凝り性から寫經にも相應に力を入れ而して佛陀の恩惠をも祈願した譯であらうが、その最後大妄念大慾心に驅られた刹那には、儒學の達者たる氣振も無かつた如く、亦佛道の信者たる痕跡も無かつた。我から孔夫子に反き佛陀に反いた彼は誰にも救はれようがなかつたのである。

さて寫經をするには餘程の筆まめと或點までの能書と云ふ條件が附帶せねばならぬ。筆を持つことが億劫であつては初めから寫經などは思ひ立てぬ。又自信も無い程の愚筆惡手では佛菩薩の納受如何と案ぜられる。處で賴長は短氣らしい癖に筆達者で而も可なりの美書家である。それは「台記別記」に據ると、久安五年十一月廿六日鳥羽法皇の命によつて御所の御藏の「行成記」(權大納言藤原行成卿の記錄)五十餘卷を覆寫することになつた時、其執筆者十餘人の中に賴長も召されて從事してゐる。行成卿は聞ゆる美筆であり、その自筆本は大切なものであるので、法皇も格別御配慮になり、覆寫は御坐所に近い處でさせ、時々御簾內で進行の樣子を御覽ある程である。筆者は早朝から夜晩く迄出仕する。功程を覗ふに、同月廿七日の一日に「下官十五枚書了」と賴長が記して居り、翌日も「書寫功如二昨日一」とある。此を以て

在る此人が執筆者の選に入つたことは、腕に覺

ては叶はぬ。左大臣ぐらゐなら隨從者に廻つてブラ〳〵して居さうな處、決してさうで無い。此くの如く筆を採つて達者な人又筆を揮ふことを得意とする人であるからこそ、寫經に努め得るのである。

さて賴長寫經の事の初は其二十三歲の康治元年五月廿五日に在るやうである。經文は「法華經壽量品」で、之を寫すのは先祖の供養の爲とある。今年以後每年「妙經」の一品づつ書寫することを豫定してゐる。三日めの廿七日に寫了した。翌年の二月廿七日の處にも右の照應が出てゐて、其處には「今日持二八齋戒一依二寫經之事一也書寫之間無言」とあるので、寫經の規式も判り、賴長の敬虔な態度も窺はれる。

其後三年を經た天養二年(改元久安)閏十月は奮發して血經を行つて居る。是は手指の血を取つて經文を書寫することで、非常の信心から來るのである。此月廿三日から準備して精進を始め沐浴齋戒してかゝり、廿五日に實行、經文は「藥師經」血經に經驗のある修理大夫敎任と云ふを招いて、賴長の左手の食指を割かせて、その出血を取つて墨汁に代用した。廿七日に今度は無名指を傷けて血を取り、午時かの經全部を寫了した。處が血が餘つたので更に別に「壽命經」一部を書き、申の刻(今の四時頃)に了へた。それから敎任を對手に讀合せをして半夜に及んだ。まだ血の殘りが有つたので、その捨處を[illegible]仁に

れは知らぬ。血經の後世に傳はつたものは時々見受けるが、いかにも陰氣不氣味なもので、こんな汚れた物を神聖なる佛陀が快く納受ありさうにも思はれぬ。併し此頃は彼岸の中日に天王寺に近い難波の海に投身して極樂參りをする人の有る程迷信の甚しかつた時代、指の一本位かたはにし血の二三勺位搾ることは大した苦痛で無かつたかも知れぬ。

久安四年(時に頼長二十九歲)の三月には此月七日から八日にかけて「壽命經」を金泥で寫した。是は鳥羽法皇の寶算長久を祈つたもので、高野山で供養すべしとある。同月九日から十日に亘つて墨書の「大日經開題」を作り靜經法眼と云ふ僧の許に送つて梵字を書入れさせた。此度は自分の祈願の爲である。

翌久安五年十月八日には「法華經」の頓寫をした。頓寫は俗に一日經と謂つて、大勢の手で一日中に寫すのである。此日經師三十人を集めて早朝に始めて午刻に終了した。尤も校合や裝釘は其後になる。當分毎月此業を反覆したやうである。是は頼長が僧施主になつたゞけである。寫經專門の法體寫字生が腕に捻をかけて慣れた御經を寫すのであるから、筆の運びは面白い程速い。併し三十人も雇つてやらせるには餘程の費用がかゝる。それを連月行ふと云ふには意趣が無くてはならぬ。それが分らぬのは殘念である。

久安六年二月廿一日に「金剛般若經」を親寫した。是は頼長の養女多子が當今(近衞天皇)の中宮になるやうにと祈願したのである。此所願は成就して同年十月に入內。次に閏月廿三日奈良の東院寶で一切衆經」の印本と寫本を合せて供養した。印本は多數を要する場合であるから、此時も五十部か百部に及んだであらう。寫經は大抵一部限りであらう。孰れも部數の明示が無い。その寫經は多分自筆であると思はれる。又同年三月一日には豫て作らせて置いた繪像炎魔天三十體一幅と印本「壽命經」三百六十部をば、法眼良修と云ふ僧に供養させて居る。是は父忠實(本年七十三歲)の延命を祈る心で、三百六十部と云ふ數は一部を一ヶ月に宛て三百六十部で三百六十ヶ月即ち三十年の壽算を保たせようと云ふのである。尚此經文は忠實の筆跡を版下にして印刷した由が願文の中に明記してある。頼長は父の鍾愛を受けた、又今後も永く之を受けたいので、此大願を起したものと見えるが、一面には孝心の動きも有つたらう。但し純なる至性から發したとは思はれぬ。忠實が愛兒の失敗を見た後六年生き延びて、應保二年(紀元一八二二)に八十五歲の高齡で薨じたのは、總領忠通の承順孝養に歸すべきやうもある。

頼長寫經並に納經の大略は凡そ此くの如きものである。經典讀寫の前には當經の訓み方や義理を知つて置く必要もあるので、時に「藥師」「壽命」等諸經を知名の僧に習つてゐる。又寫經には關係の無い佛典聖教類を專門の師に就いて學ぶこともあつた。後者は例の知識欲の旺盛な所から來たらしい。併し釋教に對しては儒道に對する程の深いつこみは無かつた。

篤學尙習の頼長が年來苦心をかさねて集めた書物を安全に保存する途を講じた談を以て本篇を結ぶことにする。それは文庫建設の件である。頼長が文庫の思ひ立は一朝のことでは無からうが、「台記」の文面に現れたのは天養二年（久安元年、時に頼長二十六歳）の正月十九日を初とする。此日の條に突如として大炊高倉の自邸の乾角に文倉を立つとある。尤も當日の午の刻に礎石を据ゑただけの事で、火難を避けるやうに設計したとある。置礎の日時は是より先に曆博士憲榮をして勘定せしめ、設計圖は佐渡前司伊倹に作らせた。それから凡そ七十日を經た四月二日の條に此建設が竣つて直に書籍を運び入れる樣子が記されてある。その搬入にも憲榮の勘定によつて午の刻を用ゐた。爾時頼長は冠直衣の禮裝、手傳ひ役の藤原成佐は束帶姿で出張して、頼長は陽の棚（東寄りの棚の義）に「春秋緯」の選入つてゐる櫃を置くと、同時に成佐は陰の棚（西寄りの棚）に「易緯」「詩緯」等の櫃を置く。之を手始としてあとは大勢で豫定の通り排列したらしい。さて倉庫の建方は高さ一丈一尺、外に礎の高さ一尺、東西二丈三尺、南北一丈二尺で、南北兩方に戸がある。四方とも木板で作つてあるが、其上から石灰を塗つて防火の用意をし、戸には特に蠣殻を塗つて石灰の剝落せぬやうにした。屋根は瓦葺。（是は建物に莊重味を添へるよりも防火の意趣から來て居らう。當時普通の住家は檜皮葺で、官廳や寺觀などが瓦葺であるばかり。）庫を繞して[…]

[…]垣）を築き上げた、その高さ七尺、高さ一丈三[…]一尺高い。此垣の坤角に出入の道が明けてある。乾角に地面を切つて水のはけるやうにしてある。芝垣の外周りに溝を掘つた、その深さ三尺廣さ二尺。その外方に竹を種ゑ廻らし、その又外に普通の築垣（土手垣）がある。築垣の巽角に門戸がある。此樣に二重三重の垣で嚴重堅固にしたのは尋常の貨財倉には類の無いことで、それ程に文籍を大切にしたのである。次に同四月十四日になつて、嘉例の午の刻から庫內の書物の整頓に着手した。是には家の侍であらう、實長、盛憲と云ふを出張させた。去る十一日から文字の讀める人々を集めて目錄を作らせ書筥の番號などを記させなどしたとあるから、今日が整理の最終日と見える。時刻を計らつて頼長が檢分に行つた。書物は四部に別ち、全經、史書、雜說、本朝とした趣である。文庫に關する記事は是で終つてゐる。頼長はさぞ安心したことであらう。「千金より甚し」の、「萬戸侯を得るに勝る」のと謂はれる貴重書も所を得て樂々と休んだことであらう。

然るに此くまで心を入れて作つた丈夫な文庫の事も亦其內容の事も保元の大變後には杳として世に聞えなくなつた。天養二年から保元元年までの僅々十二年が此寶庫の生命であつたとは、あはれ千萬である。察するに庫主の第宅ぐるみ兵火の禍にかゝつたものであらう。灰燼に歸し泥土に委ねられた幾千卷の[…]

つたらうに、くれ〴〵も遺憾な事である。

× × × × ×

結論は簡單である。曰く百日の說法何やら一つ。是より外に言ふことは無いのである。それにつけても人は最後が大切である。

× × × × ×

時は保元元年後の七百七十三年め、昭和三年は五月、興行の歌舞伎座「平淸盛」の序幕に、頼長の幽靈が成親、俊寛等の死靈生靈もろもろと巡番を立てゝ出て、おち目になつた淸盛を苛める場面がある。それを見た筆者はつく〴〵頼長に嫌氣がさした。と云ふのは、不心得をした男と謂つても、とにかく一度は三公の位に昇つた人、學問は春秋三傳や三禮や易の奧義まで究めた者が、何たることぞ、蒟蒻のやうに身を震はせ泣聲になつて、愚にも附かぬ怨言をならべて居る。如何に地獄に墮して氣弱になつたにせよ、あゝまで卑屈になつて相中風情の口を借りようとは想ひ設けなかつた。是も畢竟頼長がくだらぬ人物であつた所爲であらうか。惡人を辯護する譯では無いが、頼長は後年のこはだ小平次やお菊などに伍して幽靈になる程に思ひ切の能くない人間では無かつたらしい。若しこの不平を言ひたくば足序に狂言作者の處へ出ては如何。敢て煽てるのでは無いが。そして言ふことには、いくらお狂言でも少しは麿の人格を認めて貰ひたい、彼様に書かれては一向やくたいぢやと。

正誤○右稿本を改造社に送付の後記憶の誤からとんだ失態をした事を發見しましたので、爰に附記訂正して置きます。それは頼長が我が子の學問を試驗した條下に長子菖蒲丸を後の師長であるやうに記しましたが、右の菖蒲丸は師長の兄兼長（頼長の三子は兼長、師長、教長の順である）の童名で師長の事では無いのでありまして、尙其後に次男の學業に關して述べた處は師長に就いたことですから、さやうに御見直しを請ひます。つまり長子と次子とを誤つて顚倒したわけでした。



黒髪白髪

長谷川伸

（一）

三野林之助はこの二十餘年の間、本名を口にした事がなかつた。讃州高松の城主十七萬三千石、生駒家の士三野理兵衞の一子同苗林之助と、名乘る用が絶えてない旅から旅の漂泊人には、望みを果たす最後のその節までは、本名も故郷もさつぱり無用だつた。

が、林之助は心の底から滲みて出る淋しさに、日本諸街道の宿驛、山、川、さては難所悪所、心なき木にも草にも、ふと誘はれて思ひ出す昔があつた。

（はゝゝゝ。旅の費へに手詰れば、戰國武士を倣ふてする強盜を、三月に一度、半年に一度、いづくの國かでしてゐる俺にも、若い昔を思ふ血の氣が、いゝほとぼり冷めずにゐると見える、はゝゝゝ。）

笑つたとて打ち興じて出る聲ではなかつた。假りに形ちと笑

せて、泣いてゐるのが實は本性だつた。

木曾街道の摺針峠は、どつちへ行つても山阪路だつた。どこかに陰石陽石があるとは聞いたが、見たいと思ふ氣も起らなかつた。殘暑もこの頃薄らいで、旅には肌が冷え勝ちな秋、道づれもなくたつた一人、四國の者で高松水九郎と名乘つて通した林之助は、近頃われながらめつきりと、老が加はつたと思ふ顔つきを、けふもここで曇らせた。四方を眺める目の色に、泛ぶは無興の色だけだつた。

が、目の下はるかに日をうけて、佐和山の湖水が鏡の如く光つてゐた。

（高松にゐた昔を思ひ出すなあ。あすこの海が輝く月に彩どられた色は、もつと美しい）

日の輝きに月の色を思ひ、山冷えの國にきて夕凪の國を偲ぶ水九

の下に腰を卸して、思ひを過去に馳せてゐた。瞼を閉ぢれば過ぎ去つた、二十餘年の出來事が、思ひ出されたり消えたりする。その一つ一つに、嬉しいものは殆どなく、どれもこれも悲みを帯びたものばかりだつた。

と、水九郎の追憶を、破りに現はれた男があつた。漆黒の髭を胸までのばし、大太刀を腰に横へ、柄不似合の派手な小袖を、裾短く着た武士であつた。

『何だ。見かけによらぬ老ぼれ殿か』

顔をのぞいて去つて行く。水九郎は眼をあいた、うぬ!、毒口叩くは何奴だ。

『老ぼれ殿なら何とした』

そいつが着てゐる小袖の背中に一輪、牡丹の花が緋の色あざやかに繍つてあつた。それに向つて水九郎は、利かぬ氣は昔からの持越しだつた、火の强さで叱る調子が高かつた。

『何!』

ぶらりとして少しも急かず、引返してきたその男は、水九郎の眞ン前に、毛脛を揃へて突つ立ちどまり、毛深い腕を胸の上で、閂型に組んでにやりと笑つた。黒髭の中の赤い口白い歯が、熊をふと思はせた。

『老ぼれ殿、といふたのが悪いのか』

『老ぼれか老ぼれでないか、おぬし知つていふのか知らずにいふのか』

『フン。こりや面白いな。敎へてやるといふのぢやな。よし、敎はらう。遠慮ぎらひの俺ぢや。では、場所はどこがよい、ここでもよいか、それ共、平地か阪地か、この山は俺のもの同然ゆゑ、案内はよく知つてゐる、好みの場所へ連れて行き、老ぼれ試しをしてやらう』

『おのれは何者だ』

『浪人ぢや。食ふ術を失はせられた天下浮浪の徒ぢや』

『わしと同様だな』

『おぬしも浪人か。ふうン何處の者だ』

『四國、讃岐よ』

『讃岐か。はて』

『おぬしの年配ではわしの身の上は當らぬ、二十餘年の浪人だからなあ』

『そりや古いなう。苔のついた浪人ぢやな。それでは俺にはとてもわからぬ。したが、二十餘年間、今の今まで、一度も奉公にありつかずにか』

『うむ。生れてきて浪人ぐらしの方が長いくらゐだ』

『その間、何をして口過ぎをしてきた』

『何もせぬ。ただ諸國を漂泊した』

『嘘をつけ。今時は萬事が金ぢや、金がなくて一日も生きて行けるものか。見たところ服装も一通りぢや、懐中に若干かは持つてゐるらしい。浪人して金の實のる木を持つた男の話は聞かぬぞ。隠すな、何を

してきた』

『おぬしは何をしてゐる』

『知れた事。武士が扶持にはなれて、することは澤山ない。一には二度の主取りよ、が、戰國と違つて治平の今は、痩馬一頭つなぐ身分になるはさて置き、錆鎗一本立てる身分にも、とてもとても成れるものか、主取り望みの人間は多い、召抱へて扶持くれやうとする大名ともの數は限りがある、とても駄目よ。二には餓死する事だ、さもなくば腹切つて食ふに食へぬ身一つを、この世から我が手で掻き消すのだ。さりとて折角生れてまた世の中をむざと棄てるのは殘念ぢや。されば俺は、主取りもせぬ、餓死も厭ぢや、とあればする事は一つしかない。俺は第三番目に數へることをしてゐるよ』

『盗みだな』

『さうともよ。この小袖も盗み物ぢや、盗み物と思へばいつ脱いで棄てても惜しうない。や。あたら冗口を叩いたぞ。老ぼれの手並を見せてくれる筈だつたなう。さあ。どこでおのれ命を貰つてやらうかな』

(二)

場所好みをするまでもなく、この場でよいと水九郎は、父理兵衛讓りの大刀のそりを返して起ちあがつた。

山に棲む小禽か、やがて血をみる人間二つの頭の上を、美しく鳴いて、飛んで行つた。

山賊と稱する髭男は、ゆつたりと後へ下

『時に、おぬしは幾歳ぢや』

水九郎は冷たく答へた。

『五十三歳。おぬしは』

『三十九歳。働らかせればまたまだ十分働らけるものを、浮世の諸侯共、迎へにもこぬ、この方から願つて出ても相手にしをらぬ』

『さてはおぬし。扶持が欲しいな』

『何の、百石二百石の食祿が欲しいものか。さういふおぬしは五十三にもなつてまた扶持が戀しいのか』

『何の。扶持米なぞ。二十餘年の間浪人し、、びれのしてゐるわしだ。おぬしとは違ふ』

『ぬかしたな老ぼれ』

とギラリ、太刀を拔いて構へた。

『あはれな男め。おぬしは世をすねて盗みをしてゐるのだなあ』

『賢さうにものをいふな。さらばおぬしは何の益があつて二十餘年、むざむざと浪人して過してきた。大抵は知れてゐるぞおぬしも俺と同じ道の男ぢや。食ふ術を失つた者が落ちて行く先はみな一つ處ぢや。言葉に綾をつけ飾り立ても隱せぬは眞正の事ぢや。俺は正直に盗みをして食ふてゐるといつてゐる、盗みせねば食へぬから盗むのぢや、それが惡ければ惡いでもい、、[illegible]

[illegible]

ら俺だけが悪い事をしてゐる奴と仕舞ひには退治られるのよ。馬鹿な事よ、馬鹿な話だ。それと違つておぬしは確に盗みをしてゐるらしいが、胸一つに秘し隠し、胡麻化して世をわたるのだらう。俺よりは狡い奴だ、だが俺よりは世才に長けてもゐる奴だ。どつちが利口かな」

「何とでもいふがよい。しかし　わしは二十餘年前から一つの目當があつての浪人だ。氣の毒なおぬしは、何の目當もなく突然としての浪人だらう。よし目當があるといつても、飯食ふて屎して、その日をただ送るといふだけの事」

「ハ、、、たわけめ」

「さればこそ。僅な一言、些細の一句から直ぐに勝負の命のやり取りのといふ、目當を持たずに生きてゐる人間程、命を疎末にするものだ」

「何の目當がおぬしにはあるのだ。聞いただけでも退屈な二十何年かを、退屈させなかつたとは何だ」

「目當か。よい目當だ、永年の浪々中も退屈なぞしなかつたぞ、これから後も同様だらう」

「わかつた。仇討か」

「違ふ。が目當のものに打ち付かれば、帯してゐるこの刀がものをいふ」

「矢張りさうだ。仇討だ」

「父は病ひで死んだ。母はその前方に尋常に世を去つた。兄もないわしだ、弟もない」

「では、何だ」

「意趣をはらすのだ。――一生かかつてもな」

「何の意趣ぢや」

「それを聞かせる前に、わしは目前する事があつた」

「とは何だ」

水九郎はそれには答へず、抜刀して山賊と稱する男に對した。

「目前する事とはこの刃をつかつてみる事だ。今もいふ通り、わしは目當のものに打ち當れば、これこの刃にものをいはすのだ。いつ出會ふか我れ人ともに知らぬ、或は一生の間出會はずに終るかも知れぬ、それともおぬしの口から知れて、尋ぬる男にも女にも出會ふのが明日であるかも知れぬ。と、思ふから試みたい」

「こいつ不思議な考へ方をする奴ぢや」

「定命を過ぎて三年のわしが、血氣まだ衰へぬおぬしに勝てば、あすにもあれ出會つて、斬り合ひ闘ひとなつても、自身の力量を頼みに出來る」

「こ、こいつ。飛んでもない。亂心かな」

水九郎の刃は山賊と稱する男の眼の前で、西に廻つた日をうけて、ギラリと燦々しい光芒をはなつた。

見る見る山賊は、長い髭を戦かせて怒りの極度を、態度に現はした。

『うぬ！　老ぼれ。冗殺生ながら餘儀なく命を貰つてやるぞ！』朱を濯いだ顏の色の生氣といひ、思ひの外に鋭く光る眼の色といひ、ガッシリと構へて對した山賊は、頼な劍法が腕に十分鍛えてあると見えた。それに引返へ水九郎は五十三歳にしては、旅の風雨にいためられ、他國の水に飲みなれて肉も薄く、六十近い老ぼれの相に見えた。

『止めぢや』

突然、山賊は刄を引いて後へ下つた。

『敵しかねたか』

と、水九郎は苦く笑つていつた。

『うむ。何とでも思つてゐろ。俺あおぬしの顏が眼にちらついてならぬ。ハヽヽ、笑ふたよ。盗みをする程、薄運の俺でも、昔を思ふ、といふ事は矢張りある。俺の父はおぬし位に見える年頃に死んだ』

『……………』

『親を討つやうな氣がしてならぬから刄を引いた。さらばだ』

山賊はあとも振り向かず、深山木の幹に隠れ、森の下の薄い闇から、やがて濃い木下の闇に沒し去つた。

（三）

といふ、それは慶安三年の事であつた。それから年月は數多たつて萬治元年の暮、江戸は明暦の

二度の大火に、火を恐怖しつつ返り咲く、街々の昔

膝貫した頃、高松水九郎は六十一歳、ふと見ると七十近く見える老い衰ひた相が、燒場の跡のまだ生々しい街を、彷徨ふがごとく歩いてゐた。

その水九郎は草鞋かけだつた、帶してゐる刀は足かけ九年前、木曾街道摺針峠以來のものだつた、いやそれよりも古く、三十餘年の昔昔、本名の三野林之助を名乘つてゐる頃、祿で二百石をくださる、讃州高松生駒家の士だつた、關ケ原戰功の一人、父なる理兵衛から、讓られた無銘ながら家寶の一腰、それを今も持傳へてゐるのであつた、勿論三十何年の永い年月に、拵え萬端、鞘塗りはしてゐるが斬れ味の狂ひは毫もなかつた。

草鞋かけの水九郎は、笠をいただいてゐた、そして左の手には牢付きの布幟を持つてゐた。

人探し仕る。元讃州。番場本右衛門。當六十一歳。右。尋ぬる者。私。

布幟にから書いてある。

水九郎は盗賊改め小群立馬に喚ばれた。小群立馬は血色のよい四十七八歳、鼻の下、腮へかけ青髭のあとが濃かつた。

恐縮してゐる水九郎に、

だの二人ぢや』

『は』

『先づ、落着いて拙者の顏をみるがよい。——どうだ。思ひ出したかな』

『一向に』

『老ぼれたのか水九郎。それでは仕方がないからいろはで書いて話してやらうか。それ諸家が相踵いで潰れた時、世に充滿した浪人が、生計に困つて心ごころに、善惡二道に足を向けた、慶安、あれは三年だつたか、木曾街道の番場鳥本一里六丁のその間に、旅人泣かせの峠があつたな。あすこで出會つた男を忘れたか』

『いかにも』

『思ひ出したか』

『忘れて、とンと思ひ浮べられませぬ』

もとより忘れたのではなかつた、立馬の顏をみると直ぐ、あツこの男だつたと氣がついた、が、時を得て世に出てゐる男の昔を、知つてゐるといつた處で、向ふの利益になる事ではない、水九郎にしても多寡が路傍の人と同じ立馬の事であつた、古疵に觸れて喜ぶなら格別、さもないものを殊更に、痛ませ痒がらせるは餘計な事だと一切忘却を扮つた。

『はゝゝ。志は有難いが入らぬ斟酌ぢや、小群立馬は摺針峠で山賊をしてゐたかゐないか、隱すにも當らぬ事ぢや』

『は』

『口で大きた事をいつても、俺はあの頃、浮世に未練が澤山あつたよ。山賊とはいつたが俺はやりやせぬ、山賊共の群に投じ、彼奴等の食ひ物、着る物を分取つて、當座凌いでゐた。それが後年役に立つて、自慢でなけれど江戸中で、强賊を括めとる腕は、當時小群立馬は一二といつて三と下らぬ』

『は。その儀は噂で承り居ります』

『どうも固くなつてゐるなおぬしは。昔話は先づこの位といたし、さて水九郎、けふ呼び寄せて尋ねるのは、市中徘徊におぬしが職を持つて歩く、その仔細を聞く爲ぢや』

『は』

『人探し仕る、といふ、元讃州番場本右衞門六十一歳とは』

と立馬の眼がちらと光つて、

『足掛け九年前、木曾街道の峠の上で、おぬしがいつた。一生を通しての目當はその男か、仇討ではないか意趣を含む、出會つたら一刀に、ものをいはせるといひ切つた、相手はまさしくその番場本右衞門だらうなう』

『ご賢察の通りにござります。』

『意趣遺恨を持たれてゐるなら、當人もそれと覺つてゐやうものを、人の口から耳へ擴まり易い御府内で、職に背いてひろめたのでは、捜すといふより追つ拂ひぢや、逃げて行けといはぬばかりではないか

な』

『は。左様にも考へましたが。只今と相成つては、ただただ焦燥るのみでござります。ご存じの時より足かけ九年、その間に手前の老いはご覧の如くに加はりました』

さういはれねば氣がつかない、ではなく始めから小群立馬は、水九郎の夥しい老いの加はりに、眼をみはつたのではある。

『うむ。老いたなあ』

前に生れた人間が、後から生れた人間に見せてくれる老い、それは美しくもないどころか、醜く哀れなものであつた。で、立馬は少し酔を発らせ、ひそかに溜息をついた。

（四）

その夜、馳走の酒に酔つた水九郎は、身の上話を立馬に聞かせた。

水九郎事三野林之助は、二十歳の時妻を迎へる筈だつたが、許婚の娘が病つたので、延々になつて四年たち、その娘はたうとう死んだ。一年は死者への義理立と、律義な父理兵衛が説を立て、それが済んでから漸く、嫁さがしにかかつたのであつた。

林之助二十五歳の時、同じ讃州高松の生駒家中の野々村九郎右衛門の娘ときと縁仲となつた、といつても林之助の父は武功の餘榮で足腰の利かぬ躄ながら、[illegible]子二代ぶり、家來の努めを果させる心底だつたから、中指折りだつた。かてて叔父三野四郎左衛門は、家老並、御勝手何[illegible]行を勤め、寡黙で敢断で、捨身盡忠、この四文字を生涯貫いた人だけに、林之助は戀すれば直ぐ人目をしのび、互の瞳に消えやらぬ、契りの烙印を打つやうな男に出來てゐなかつた。戀情の情は互に深く濃かつたが、瞳二つは清浄を互に保つて、戀ひこがれて痩せはじめた。

二人の戀を早くから知つたものは、林之助の父理兵衛ではなく、とき女の父九郎右衛門であつた。もと、この野々村九郎右衛門は、大阪城共に亡びた野々村伊豫守幸成の一族で、始めは福島左衛門太夫正則の士であつた。福島家が改易になつて後、駿河大納言忠長に仕へてゐたが、忠長が罪を蒙りてその後は、浪々の身を尾張家の名物成瀬隼人正正成の口入で、藤堂大學頭高次が推擧し、七百石で生駒家の士になつた。藤堂家は生駒家の後見であるから、その推擧に力があつたのは勿論だが、九郎右衛門自身にも、七百石の値打ちはある程、當時人に知られた男であつた。

林之助の父理兵衛は二百石、とき女の父は新参ながら、家中若武士の手本と稱へられる七百石の九郎右衛門、身分格式からいへば甲乙はあるものの、林之助の叔父四郎左衛門は千石の家老並だから、先づ均衡はとれてゐた。

とき女は父から[illegible]

ち明けるよりは、叔父四郎左衛門に縋り、この縁の成就を扶けて貰ひに行つた。と叔父は當惑氣に珍らしくも、眼をみはつた。林之助は不吉の感を抱いて、ぞくりと冷たい汗を掻いた。

『九郎右衛門の娘なら、わしに異議はないなれど。困つたなう林之助』

『な、何故でござります』

わくわくとして年若い林之助は、膝頭に置いた拳がその時、ぶるぶると止め度もなく打ち顫えてゐた。

『實は、わしの子の孫之丞に、前野助右衛門が娘をくれる、嫁にしてくれといふてきた。前野は江戸定家老、國には居らぬのでけふ森出羽殿と野々村九郎右衛門と兩人でいふてきた』

『は。で

『さう急くな。おのれ自身の事ばかり思はず、よく四方を見究めろよ林之助。――で。わしは斷つた。それだけの事が、お前の縁談に響く筈はなからうと思ふと大違ひだ』

叔父の四郎左衛門が說く所はかうであつた。生駒家の當主は元和六年に家督を繼いだ時が十歳、寛永二年の今年、元服して高俊といつた。來年は十六歳で叙任がある――そして事實、從四位下壹岐守となつた。――と同時に後見の外祖父藤堂和泉守高虎が肝煎つて、老中隨一の土井大炊頭利勝の女を請ふて迎へ、生駒家長久の緣を結ぶといふ事になつてゐる。がしかし、口にはいはぬが重なる家臣はみな知つてゐる通り當主高俊はちと馬鹿だ。のみならず昨年の大凶作以來、諸政の窮乏は一方でないその上に家中には今、家老生駒將監とて先君の妹婿と、生駒左門とて先君の弟、この兩人を中心として後には御爲方と稱へた面々が、結黨の形ちをほのかに見せてゐる。その一方には家老森出羽、上坂勘解由の一派が、これも有志を率ゐて對抗してゐる。

『兩派の軋轢はあつたにせよ、まだまだ案ずる程でもなかつた、が、出頭人から出世して家老の列に加はつた石崎若狹、前野助右衛門が、權勢を得てからは、森殿上坂殿もいつの間にやら石崎、前野兩奸物の指圖のままに動くやうになつたのだから、近い未來が油斷ならぬ』

石崎前野と並べて家中で噂するが、追ひ追ひ前野助右衛門の機鋒は鋭くあらはれ、生駒將監、生駒左門に加擔の士のうち、三分一ほど前野の爲に、利に釣られて寢返つたのは、いはれるまでもなく林之助も知つてゐた。

『で、わしの態度ぢやが、わしは正論には加擔するが人物には決して加擔せぬ、御家公の極意はただこの外にない。それ故に森殿野々村兩名が强つての望みを刎ねつけた。刎ねつけたとて伜孫之丞は喜びもせず憂ひもせぬ、といふは孫之丞は在國ばかりでまだ江戸を知らぬ、前野の娘は江戸にゐて國を知らぬ、兩人とも知らぬ同志ぢや、戀も無常もあつたものではない。――が、それに引較べてお前は、不便な事にならうも知れぬなう』

時として傲岸と思はれる事のある叔父が、眼に涙を宿してゐる。林之助も自づから、涙の落つるのを禁め得ずにゐた。

『前野の奴、わしと縁を組んで身方に引き入れる策略を破られ、腹を立てる事であらう、やがては彼奴、三野の家に祟るであらう。——が、かういふ事のあつた折ゆゑ、誠にお前をいたはしくは思ふ。が、是非もない事だ。四郎左衛門は十三の時、土佐の國の敵方へ人質にやられたやうな戰國の世に若い頃を過したが、男、女の道を知らぬ木石の男でもないのだ。しかし、なう。野々村九郎右衛門は前野、石崎に義理もあり、けふの縁談を拒まれて、腹いせする程心は汚くなくとも、七百名の食祿に疵がつくかと恐れてゐるこの頃のあの男では、何程、娘が掻き口說いても、お前との縁談を承知するとは思はれぬ』

『はい』

『よしなき叔父を持つたばかりに、折角の戀が破れるか知れぬ。——不便な』

といつて叔父は涙を落した。

かうして頼む叔父の方は、望みが絶えたが、戀成就の希望まで捨てる林之助ではなかつた。が、しかし、この上はとき女の口から、父野々村九郎右衛門を極力說かせ、叔父四郎左衛門方の縁談不調に拘らず、林之助との縁組を確に承知させた上で、父理兵衛を說くには叔父の力を借りる方法が、責め林之助の胸の中には組立てられてゐた。が、その戀はやがて破れて、戀し、[illegible]林之助は泣く泣く他家の聟とならねばならなかつた。

(五)

林之助の水九郎は、ここまで語つてきた時に、まるで別人のやうに顏あをざめ、脣の色を紫にして、杯を置いた手が戰慄してきた。

『とき女が嫁入りしたのは、江戸家中の者、番場本右衛門といふ當時百石の士でござつた。こやつは前野助右衛門がいづくからか連れて參つた、素性わからずの劍道達者の男でござつた。役目は前野を護衞、その外には何もなしでござつた、もつともわしはその男を見た事がない、わしばかりか國許家中のたれかれ、一人として顏見知らずでござつた』

瞳を据ゑて一つ處を睨めた水九郎の顏は、皺一筋動かさず、呼吸をとめてでもゐるかのやうに見えた。

『立馬殿。わしは今年で三十七年間、旅から旅に老い年を拾ひ、今このやうに老衰してしまひました。が、これでも五體のうちに盛り籠めた赤い血は、二十五歳の若い昔をそのまゝでござる。わしは影も形ちも六十一歳の老い萎びた痩老人ではござるが、帶太刀の鐵刃、かッつて錆を浮べさせた事がございませぬ』——

奇を好んで走る小[illegible]馬だけに、三十七[illegible]

「然らば今にもあれ番場本右衞門に邂逅へば、勝負、と行くのか」

　立馬も醉つてゐて、言葉も氣象も荒々しく、搦針醉の眼を爛々させて來た。

「もとより。何の爲に三十何年、明け暮れを逝く水、行く雲と同樣、一所にとゞまらず、歩いてやまず來たと思はれますか。みな意趣をはらす爲、遺恨をはらす爲でござる」

「うむ面白いな。とはいふものの番場本右衞門といふ男、今もまだ生きてゐるかな、同年ださうぢやなう。膝にも書いてある、番場本右衞門六十一歳、か」

　急に水九郎は打ち沈んだ。いつかは死ぬと定まる人間は、闇から闇へ消える子もあり、百歳越ゆる他人もある。約束が出來かねるものは生死である。

「左樣。——その事を思ふと浮世が眞暗い心地がいたします。まして昨年今年と二度の大火に、死亡の人何萬とも數へがたいといひます。その黒焦燒死の人の中に、本右衞門夫婦もあるのではなからうか」

　鬱々として視線を伏せた水九郎の顏に、絶望の陰暗が見る見るうちに漲つた。と、俄に面をあげて聲高に、態とらしい力を入れていつた。

「生きてゐるかも知れませぬ！」

「さうぢや。生きてゐまいものでもない」

「死んだと確めぬうちに落膽するは馬鹿ばかりがする事だ」

　それでこそ三十七年間も、敵に離れながらも遺恨に生きてこられたのではある。

「女敵討も、おぬしのは無類ぢや、天下にたつた一つであらうて、なう」

「左樣。——女敵討かも知れませぬ。さう人々はいふかも知れぬ。が、わしはさう思つてはをらぬのでござる。わしは女に對つては不信を責める刄を下すのだ」

「男には」

「本右衞門めは舊主生駒家を亡した大藏前野助右衞門の爪牙ゆゑ天誅の刄を下します。それは公憤でござる。が、その公憤も云ひ譯の附燒刄と思ふかも知れぬ。それでも拙者はよろしうござる。どうで拙者の外に、拙者の眞意はわかるものはない」

「だがなう。俺にはたゞ面白いといふだけぢや、おぬしがそれ程に遺恨を含む譯、それがまだ呑み込めぬからな。俺も附燒刄と思ふ組ぢや」

「戀した女を奪はれた怨めしさが身に覺えがある者にはよく合點が行きます。覺えのない戀にはわからぬ恨みでござる」

「が。それにしても女までが憎いかなあ」

「憎うござるとも。ときといふその女は、嫁入り出立の日、ひそかに走り書の手紙をよこした。それには、江戸へ下り祝言して三日の後には、家出して奥樣の國加納領澤武市といふ知邊の方へ逃げて行く——」

ぱりッと疎な齒を咬み折るやうに音させた水九郎は、眼をみはつて言葉を絶つた、やがて、

「が、そりや嘘でござつた。——わしの浪人はその節以來だ」

立馬は默つて指折り數へてゐた。生駒家が亡びたのは寛永十七年、十七萬三千石の封を解かれ、當主だつた壹岐守高俊は隱居、一子右近高清に出羽由利の矢島で、堪忍分として一萬石を下され、忠臣の主なる者は——その中に水九郎の叔父四郎左衞門も入つてゐた。——諸家へ御預け。姦臣の主なる者は切腹死刑となつて以來。過ぎてしまへば年月は早く、足掛け十九年にもうなつてゐた。それを數へてゐたのであつた。

（六）

寛文七年の秋。落葉の下を力のない足で、ゆるやかに步んでゐるのは、また番場本右衞門夫婦を、探し當てずに生きてゐる水九郎であつた。吉祥寺火事のあつた萬治元年からは足掛け九年目、小群立馬が役目の落度と斷罪靈驗の爲に、腹切つて死んでからでも六年になる。

水九郎はもう七十歲だ。顏一杯に刻まれた皺にも、光りを失つた皮膚のまだら黑さにも、老の醜惡さが、並一通り以上にあつた、それは長い長い旅の四十六年の間、きのふもけふもの雨の日風の日が、彫り込み刻みつけたものだ。

糊口の爲には三月に一度、半年に一度、[illegible]盜をした水九郎だつたが、それも六[illegible]引ずつて、人の憐れみに生きるも同じに日を送つてゐた。

水九郎は掌を開いて行く人に錢を乞ふのではなかつた、與へる者があれば受けるだけだつた、そして有難しともいはなかつた、が、四十六年間の浪々に、一日も手放さなかつた一刀が、思はぬ役に立つてよしありげに見せ、勝手な推測で、あはれと見て錢をくれる人が相當ある。けふも水九郎は落葉に白髮を掠められ、芝ひぢり坂上、月の岬といひもする高臺に、念無和尚中興とかいふ、濟海寺門前に佇んでゐた。

（俺は佇んでゐても錢をくれと形ちでみせるのではない。秋の空を眺めてゐるだけだ）

與へれば受とる錢だ、そしてその錢で生きてゐる水九郎だ、それでゐて強情に、乞食でないと自身は思つてゐる事は、氣安めの口實らしくもある、が四十六年かゝつた今でも、意趣ばらしの一念まだ棄てずにゐるこの男では、堅く信じて乞食ではないつもりに嘘はなかつたのでもある。

けふ始めてこの寺の前へきた水九郎は、葉まばらに淋しい枝の立木も見飽きて、黑門をくぐつて廣い庭へ入つた、直ぐ眼につくのは海の向ふの房總の諸山だ、秋の海いろ、空のいろ、二つながら靑く冴へて美しかつた。が、自然の美趣は四十六年間、飽きる程見てきた水九郎

と路だつた。
　ぶらりと歩む庭に、漁船の僞の燈籠があつた、といつてそれが水九郎の興を惹きはしなかつた、そこを過つて暫く行くと、生垣結ふた一區劃は、一目でそれとわかる無常場だつた。
（死ねばたれしも行く土の下）
　呟きながら水九郎は墓場へ入つた。乞食と見ゆる零落の姿でも、腰の刀が武士と示すので、寺男の白眼がただちらと光つただけ、別に咎めはしなかつた。
　水九郎はこの頃、墓場を好んで足を入れた、何と思つても七十歳、殘命いくばくありやなしや、それを思つてて墓場好きかと見れば、さうではなかつた。水九郎は墓石の文字を見て歩くのであつた。刻命にその一々、俗名、年號、行年と、この三つを見屆けて、次から次からと移つて行つた、勿論、その一々に失望と確信とを持ち、そして合掌して行くのを忘れはしなかつた。
『おッ！』
　とある一基の前で見る見る變はる水九郎の顏の色だつた。
『お、俺だ！。わ、わしの墓だッ！』
　見付けた一つの古い墓石を、二度三度、おのが眼を疑つてみたが、まさしく俗名三野林之助、肩書に讃州高松とあるからは、紛れもない事ではある。
『わしの墓だッ。お、俺の墓を。だだれが建てた。だだれが回向してゐたのだ！』
　睨んで立つた水九郎の眼には、怒りでもなく驚きでもなく、さりとて寂びでは無論ない、名状する言葉がこの世にはない色に輝いた。
　しかし、水九郎の冷靜は間もなく戻つてきた、始めて見た時の異狀さとは、打つて變つた失望落膽に、力も拔け果てたやうによろめいて、ガックリ頭を垂れて、大地の苔なめらかな上に、うづくまり、
『死んでゐたのか！』
　と、ほつと吐く息は長々しかつた、四十六年間に溜め貯へて一度も吐かなかつた長大息、今ほッと吐いたかのやうだ。墓石に刻まれた俗名は、三野林之助と同列に、妻ときとあつたのである。
『死んだのは何日だ！』
　怨めしく思ふ女の死を確めると、かねてしてゐた考へ方とは打ち變り、ほろほろとこぼれる涙を禁めかねて、水九郎は老殘のむざんを示してゐる節も骨も高い手で、この頃少し覺束なくなつた眼を拭つて、もう一行あるのを讀んだ。寛文丙午六年九月二日、この文字だけが新刻であつた。
『去年か！』
　去年だな、去年だな。繰返して呟くうちに、水九郎の顏一面に生氣が甦つてきた。
『去年か。うぬ！　何が三野林之助の妻ときだ！　ここな賣女！』
　墓石を蹴つたが、よろめくものは却つて水九郎自身であつた。

つたが、只今はあらまし記憶を呼び返した。三野氏」
といつて番場伊織はにッこり笑つた。
「何だ」
「女敵ならこの方が討つ筋合でござる」
「な、何といはれる」
「貴殿は、ときと夫婦になられたのではござらぬのか」
「といはるると。——とき殿はどう相成つたのだ。——ああ、俺にはとンとわからなくなつた」
「拙者にも合點が行かぬ。先づ、それでは拙者から話すといたさうか」
伊織は武器を携へて、すわといへば飛び出さうとする、最前の若者始め四五人の男を退かせ、先立つて座についた。
水九郎は一刀を傍へ置いて、力なく座に就いた。その姿は枯れ木のやうに、あぶらも光澤も盡きてゐる。
「寛永三年、いや四年かな。何分古い昔の事ゆゑ、年號月日に覺えはない。が、何にいたせその頃、拙者の武術を賴み切つてゐた生駒家の江戸家老前野助右衞門といふ御人が、ともすれば勤めを嫌ひ、浪人の氣まゝな元へ戻りたがる拙者を繫ぎとめる爲、野々村九郎左衞門といふ御人の女を、無理往生に似た仕方で、拙者に押しつけ嫁にいたした、その女がときといふ、承はれば貴殿と相思の人であつたさうな。三野氏、拙者は江戸生れ江戸そだちの男でござる、大江戸を嵩に贅澤を吐くではござらぬが、讚州高松から見も知らぬ嫁を貰ふほど、女早りの男でもなかつたので[illegible]たされた、また拙者若氣にて分別不足の處もござつた、で[illegible]嫁女が江戸へ着到し、祝言といふ事になつた」
瞬きもせず水九郎は聞いてゐた。
「四海波靜に祝ひ納めたその晩、嫁女の口から打ち明けられた貴殿との事、聞いて驚きもし怒りもしたが、女のいふには最早肌身を許してある故、あなた樣と契りを結んでは、二夫に見える事になる、迷惑なから不貞の女として刺し殺すか、それとも自殺をさせてくれるか、さなくば駈落させてくれといふのだ。拙者はその三つのうち、殺すは厭だ、死なれるのも面倒だ。駈落がよいと翌日、人をつけて逃がしてやつた、逃げた先は尾張樣御家中、何とやらいつたが今では姓名が思ひ出されぬ。ハヽヽヽ。かやうの次第だ。これでも拙者が女敵かな、意趣遺恨をはらさねばならぬかな。ハヽヽヽ」
蟠りなげに伊織は大口を開いて笑つた。

（八）

その翌月の三日、屋根の霜が解けて間もない朝。番場伊織の家を訪れた僧侶があつた。
「ひぢり坂上の濟海寺の者でござります。三野林之助殿臨終の節、申し殘された言葉をお傳へに參上仕りました」
伊織はちよつと眼を曇らせた。

「三野林之助が、死去しましたか」

はい。昨日、寺内の墓地で腹をお斬りなされました」

「墓で。はて。菩提寺でありましたのか」

「いえ、左様ではござりませぬ。ご自分の墓の前で。夜に入つてからの事でござりました。」

「へ、、、。それでは菩提寺だ」

「いえ。誠に奇なる事でござります。ご自身も知らぬのに墓を建てゝくだされたご人があつたのださうにござります」

「だれが建てた。ああ、林之助の縁者かか」

「左様でもないらしく存じます。墓建立は林之助殿ご新造かと存じられます」

伊織は赤ら顔をキヨトンとさせた。

「墓は當住以前、餘程古う建立されましたと見え、寺にも文證が見當りませぬが、昨年九月中頃、尾張訛りの老女の方がお見えなされ、黒い髪の毛十筋程を、三野林之助殿遺髪と申され、また白い髪の毛一握り程をご新造とき殿の遺髪と申され、彼の墓に埋めてくれと申されました。その節事情を伺はうといたしましたが、使ひの者にて事情は辨へず、また身分も打ち明けかねるとの事でござりました。過去帳はその節はじめて、讃岐高松、三野林之助、妻ときとご兩名の分、書入れ仕りました次第」

「ふうむ。聞けば稀有な事でござるな。で、その墓の前でゆうべ林之助が殉死したのでござるか」

「はい。ご臨終の節の遺言はかうでござります。四十六年を徐々遡つたと、一時は後悔いたしたが、よくよく分別してみれば、目ざした事には副はねども、善悪の差あつてとき殿の道心たしかに相わかり、一生に銘じて今生随一の歓喜でござる。七十年の命、もはや用事もなければ自身で打ち切り、悦びのうちに相果てる果報のほど、貴殿等のかつて味はぬ處、おさらば。これだけが末期の水を所望なされ、飲み干される少々前に、いはれました言葉でござります。」

僧の態度は敬虔であつた、言葉の節に自づと厳粛さがある、聞いてゐて番場伊織は、拙い一生を過した男と今まで思つてゐた水九郎の林之助が、自分よりも結局は効果の高い生涯だつたのかと思つた、で、尋ねた。

「左様か。大滿悦の往生を遂げましたのでござるな。南無阿彌陀佛」

濟海寺の僧は、

「は。ではござりまするが。墓石にむかひ、四十何年が口惜しいと、罵詈してゐた聲を聞きつけ、寺男が見に參つたその節は、もはや腹切つてをられましたさうな」

と、いひ難くさうにいつた。やがて重い心で道に下駄の音高く歸つて行つた。

（をはり）

た時代の名殘をそこにありありと見ることが出來る。足を踏みしめ踏みしめ昇降したらしい駕籠かきの歩いた路は、あの刻みに刻んであるやうな古い石疊みの階段に殘つてゐる。

遠い佛蘭西の旅でのことを思ひ出して見る。巴里のサン・ゼルマンといへば、ずつと以前には殷賑を極めた町で、そこへ買物に行く女のことなぞがモオパツサンの小說にも出て來るくらゐのところである。おそらくあの佛蘭西の小說家がまだ達者でゐた時分には、サン・ゼルマンは巴里でも目ぬきの町であつたらう。旅人としての私達があの町を歩いて見る頃には、繁華はもう他へ移つてしまつてゐた。三年ばかりもあの都會で暮して見るうちに、本屋、文房具屋などの好ましい店がサン・ゼルマンのさびれた通りに殘つてゐることをも知つた。

同じ都會の中でもこんなに町の動いてゐることは、東西共に變りはないやうだ。これは交通機關の移動や市區の改正により、地價の騰貴、負擔の增加、その他種々な經濟事情によることはもとより言ふまでもないが、しかしそればかりでなしに、町には町の性格があり、生長があり、老衰があつて、一軒や二軒の力でそれをどう〔…〕いやうなところもあるかと思ふ。でも、曾て榮えた町の跡と、まるきり榮えたことのない町とでは、歩いて見た感じが違ふ。あだかも城として好かつたところは、城址として見ても好いやうなものだ。

過ぐる年の震災が來た。その時になつて見ると、この飯倉附近にある古いものがにはかに光つて見えて來た。何故かなら、こゝにある古い商家の黑光りのした壁、その紺暖簾のかゝつた深い軒なぞは、今ではもう日本橋あたりにも見られないものであらうから。私はあの石町、大傳馬町、それから本町あたりに軒を連ね甍を並べてゐた震災以前の商家の光景を忘れることの出來ないものであるだけに、一層この感が深い。この界隈には安政の大地震にすらびくともしなかつたといふやうな江戸時代からの古い商家の建物もある。紙屋兼菓子屋としての深山、疊表屋としての萬屋、今は洋服專門であるが以前は大きな呉服屋であつたといふ山城屋、好い店も多い。飯倉一丁目にある三つ星は明治初年に開業した最初の牛肉店の一つであるといふことも、この邊の昔を語つてゐないだらうか。その近くには、さゝやかな店頭に草鞋を掛け、煙草をも並べて、五十年このかた同じやうに商賣を

ゐるといふ家もある。

新しい創意に富んだ建築家としてのライト氏のことは、帝國ホテルなどの設計で多くの人に知られてゐる。このライト氏が飯倉に一つの住宅の意匠を殘して置いて行つたことは知る人もすくない。例の雁木坂の近くに、その家がある。簡素な伊豆石を按排した入口の趣きも深い。今はこの界隈にもかず／＼の新式な建築物を見るが、あれほど周圍とよく調和し得たものはめづらしい。床しい意匠だと思ふ。

ある日、增上寺の境內へ行つて、新築後の本堂の柱の側に座つて見た。廻廊を踏んで行くいろ／＼な參詣者の後について、高い天井の下を一廻りして見た。曼陀羅の圖の掛つた壁の前にも行つて立つて見た。私も外國から歸つたばかりの頃には、東京にある增上寺の位置はあだかも巴里にあるノオトル・ダムの位置にも當らうかなど思ひ比べて見たこともあつた。しかしこの空想は直ぐに破れた。私の座つて見た本堂の柱の側は、巴里のノオトル・ダムとは全く別の場所だつた。やはり私は歸朝當時の氣輕さから、まだ半分遍歷者のやうな氣分で、たゞ／＼距離にある二つの寺院を比較して見たといふに過ぎなかつたことを知つた。

ある日、愛宕下にある青松寺の境內へも訪ねて行つて、奧まつた庭の見える內陣の裏手へ行つて立つて見た。遠い旅にある間、私もゴシック風の建築に興味を覺えて、佛蘭西に多い羅馬舊教の寺院をあちこちとよく訪ね廻つたが、自分等の國の寺院に見つけるやうなすぐれた庭ばかりは、佛蘭西あたりにも無いものだと思つた。あれは全く東洋のものといふ氣もする。青松寺の番僧に案內されて、私があの廻廊に出たのは、まだあの寺の燒けない前のことであつた。一面の芝生があるだけの庭だ。唯一つ、庭の向ふに古雅な石燈籠の配置してあるのが眼についた。その空虛で、しかも生氣のある、青々とした芝生の上に薄日のあたつた感じは、森の奧にでも見るものゝやうな氣がして、忘れがたかつた。惜しいことに、過ぐる年の震災が來て、今はあの庭も無いものだらう。

前後に淺い谷の町をへだてゝ、狸穴坂の側面を望む。私達の今住むとこ

都會の中にあるさかり場は一種の公園か。さういふところへ行くと、風俗と流行が眼だち、輕快な人の動きがあり、ちよつとした買物なぞをするには便利でいゝ。そんなら好い店が皆さういふところへ集まつてしまふかといふに、さうでもない。この界隈にして見たところで、前に記した深山、萬屋、山城屋なぞは飯倉四つ辻の附近に、米屋としての三河屋は六本木に、その他それほどの老舗ではないまでも菓子屋、鮨屋、食料品店から、藥屋、經師屋、鐵物屋なぞの好い店はいろいろな町の間に散在してゐる。

飯倉四つ辻から三河臺を經て六本木に通ずる電車通りに續いた並木は、おもにマロニエである。私はあれほど歩道を虐待してあるところを他にあまり見かけない。あれは人間のための歩道であるのか、電柱のための歩道であるのか。でも私は用達のついで毎にあの並木の下を歩くのが好きで、白いマロニエの花が咲き出す時分にはあそこを通るのを樂みにする。幾つかの蠟燭をさした燭臺でもさし延べたやうなあの花の風情を見ると、いろ／＼なことを思ひ出す。晩秋の頃は殊に好い。學校通ひの男女の生徒達が、互ひに息をはづませながら、落葉を踏んで行き過ぎるのもあの道だ。

兩國の方に花火のあつた日は、子供達もそれ／＼旅行に出た後で家もさびしかつたせいか、何がなしに淺草新片町の古い住居のことを胸に浮べた。あそこは大川端に近かつたから、夏の朝なぞの散歩には好かつた。新片町時代も遠くなつたが、思ひ出して見るといろ／＼なことが浮んで來る。時には朝早く河岸を歩きに行つて、漁から歸る舟を呼び留め、鯉を買ひ、その活きた魚を提げながら町中を通つて歸つたことなぞもある。あの大川端ではよく日の出を望んだが、飯倉に來てからはそれが思ふやうに出來ない。斯うした高臺の上でありながら、出來ない。それには芝公園の丸山か、愛宕山か、何等の眼を遮るものゝないところまでわざ／＼出かけねばならない。

朝。早く起きて飯倉の家を出た。例の南葵文庫のあたりは、椎の老樹も杜のやうに薄暗く、鮨屋の鳴戸のならびにある家々なぞはいづれもまた戸がしまつてゐた。人通りもすくない。僅かに牛乳配達の町を引いて來る車が朝らしい空氣の中に白く見えるくらゐの頃だ。その時、私は六本木の方からやつて來る一臺の電車を見つけて、御成門まで乘つた。久しぶりであの紅い生氣のある日の出を望みたいばかりに、愛宕山へ急い



童馬山房漫筆

齋藤茂吉

墺 其の一

維也納に留學してから半年が過ぎた。その間、教室では精根を盡して爲事したのであつたが、七月に入つて、指導教授も山間の溫泉地へ轉地してしまふと云ふし、助手の一人二人は夏の休ちゆう休まずに實驗に來てゐても、取り立てて相談に乘つてもらふ必要もないので、これまで作つた顯微鏡の標本やら、研究題目に關する先進の文獻の書拔やらをその儘にしておいて、獨逸の旅に出掛けることにした。

維也納を立つたのは西曆一九二二年八月四日であるから、大正十一年の夏の事である。午後或る驛に着くと、Frisches Wasser! と云つて水を賣つてゐた。これは日本語ならばどう譯すべきか、これは、『汲みたての水!』と譯すべきであつた。アイスクリームも無論賣つてゐた。けれども水を買ふ乘客の方が多かつた。

税關の檢査の嚴しかつたころで、國境の Salzburg では持つてゐる貨幣まで檢査されて、先づ無事に通過した。ここに來ると、近くまで延びて來てゐるアルプス山系の山々が既に見え始めるのである。

國境を越すと、もう南獨逸の Bayern である。途中で日が暮れ、月光を浴びてミュンヘンに着いた。ミュンヘンでは旅舍が至るところ滿員のために、辛うじて素人の家に宿ることを得た。この家にはミュンヘン大學に學んでゐる露西亞の青年が一人宿つてゐて、僕を銀行とその近くの『玻璃宮』と稱する繪畫展覽會に案內して吳れた。上さんが親切で、丸三日見物したに過ぎぬが、實によく見物してゐる。僕はその時から一年經つて二たび此地に留學し滿一ケ年ゐたが、―その時一ケ年前のことを比較して實に好く見物したとおもつたことがある。夕食後ひとりで花火を見に行き、雷雨に逢つたり……でも明かに思出す。

それから、Oberammergau といふ山間の村に基督の受難劇を見に行つた。これは吹田教授の好意によつた。如是の古風な民間劇は當時猛威を逞うした疫癘などと結付いて、すでに十七世紀の初ごろから行はれてゐた。それが段々改良され大規模になつて、現今では世界的のものになつた。十年に一回の興行であるから、世界からの旅人がこの山間になだれこむのである。ミュンヘンの旅舍の滿員だつたのはさういふ理由にも本づいてゐた。

第十幕目で、Guido Mayr といふ人の扮したユダが、基督が磔刑に處せられたのち、痛恨の面持で舞臺にあらはれ。『基督はつひに死したり。噫、吾は彼を殺しぬ。わが母の吾を生みし刹那よりこそわが惡運はじまりけれ』の如き臺詞をいふ。"Soll ich noch länger dieses Marterleben hinschleppen?" などといふ。遂に、衣を脱ぎ、帶を解き、帶を樹の枝に巻きつけ、"Erwürge den Verräter!" といふとき、幕がしづかにくだつたが、その時、劇しい雷鳴があつて、沛然として雨が降つたので、ユダはづぶ濡になつて首を縊らうとしたのであつた。舞臺は天井が無く、向うの山野が一部背景になつてゐるぐらゐの、野外劇の特色をも加味してあつた。

翌日そこを立ち、ミュンヘンを經て、Nürnberg, Würzburg に滯在して、Frankfurt に行つた。

ミュンヘン停車場を出發するとき、二等切符を買つて待つてゐたが、いよいよ車房に乘込まうとすると、二等は悉く買切の標札が附いて居り、僕は詮方なく三等の車房に乘つた。三等の車房は英語のみを話す旅客で充滿されてゐた。

Nürnberg では、寺院を見、畫家デューレルの生家を見、美術館を見、古の王城を見、主だつた街を見た。城は巖石に寄つて建てられたもので、中には種々の古器物、罪人の責道具などがいろいろ陳列してあつた。古器物のなかに、日本のヒヨツトコ面が一つあるのは妙な氣持であつた。その夜も旅舍に宿ることが出來ず、素人家に宿つて南京蟲に襲はれ、實にひどい經驗を嘗めた。翌朝夜のあけるや否や、宿の媼を呼んで捕へてつぶした南京蟲を目の前につきつけると、媼は、Sehr peinlich! といつて、兩手をひろげて天の一方を見るやうな姿勢をしたりした。

Würzburg には、友人が一人ゐたので訪問したが、旅に出て留守であつた。爲方なく、ここでも僕は一人で町の主だつたものを見て歩いた。さうしてシイボルドの記念像を見、精神病學教室を訪問しての歸途であつた。群童がぞろぞろとあとを附いて來るので、試みに童子等の學校の名を問うた。彼等は先を爭つて學校の名を云つたが、一人の小童を指さして、『あいつは猶太だ!』といふと、皆して笑ひはやし

た。レニンがマルクスを足に踏まへて、遂に魯西亞を征服してしまつた今日、此處の小藏の仲間には斯くの如き現象が依然としてあつた。

精神病學教室では、助手が老教授の部屋を見せ、『先生のお部屋は歴史的です。博物館のやうでせう』と云つてゐると、そこに老教授が自ら實驗した一匹の猿をいかにも大切さうに持つて入つて來た。老教授は最初僕には見向きもせず猿をいぢつてゐたが、後にいかにも愛想よくなつて署名などして呉れた。老教授は Rieger といつて、腦の比重のことを研究してゐる。頭顱の形を平面に表はすことを研究してゐる。この狹い部屋から數多くの業績を世に送出し、大學教授として年老いたのであつた。ここの屍解剖室にも歐羅巴の處々に見るやうに、基督の木像が飾つてあり、それが幾年かの星霜を閲して古びてゐるのが目についた。

Frankfurt am Main に着いたのは、八月十二日の午後であつた。この土地には、同じ船で渡つて來たS學士が研究して居り、前以て手紙を出して置いたので、道を聞き聞き、それから電車に乘つてS君の宿に訪ねて行つた。S君は未だ教室から歸つて來ぬので部屋でしばらく待つてゐるうちにS君はやうやく歸つて來た。

當地に來て、僕は久しぶりで日本語を話した。その夜は、Hotel Vierjahreszeiten といふ格安の旅舍を周旋してもらつて、夜中に醒された。狹い部屋に入つたところが、硫黄の香を混じたフオルマリンのにほひがし、それが咽喉を刺戟するのでどうしても眠れない。僕は怒つて帳場に掛合に行つたけれど、もう明間がなく、料理場の隣のやうなところの部屋に移された。しかしその夜は却々安眠が出來なかつた。

ここの旅舍の朝食は麵麭も珈琲も極めて貧弱なものであつた。十三日は美術館を見、『ゲーテの家』を見た。美術館は美術學校の附屬と看做してもいいところがあつた。デューレルのもの幾つかあり、レンバッハの一八七〇年戰役を中心とした人物の肖像がいくつかあつた。佛國畫家では、クールベの海波圖、モネ、マネ、ドガ、ルノアル、コロ、ミレ、ドラクロアなど多勢のものを集めてゐた。ゴオホのもの二つばかり、一つはガッセ醫師の像で是は僕の目を惹いた。ベックマンといふ男の描いた磔刑にされた耶蘇をおろす圖は、從來澤山の畫家によつて試みられた畫題であるが、これは表現派向に取扱つてゐて、なまなまとして居つた。クラナッハの同じ畫題のもの、それからレンブラントの同じ畫題のものなどと較べて、この表現派のものはどれだけの生命があるだらうかといふことなどを、急がしく見てまはつてゐるうちに思つたりした。

『ゲーテの家』の材料もおもしろいものであつた。ここ

『ゲーテの家』を見れば大體

うが、いづれも矢張り豫備知識が必要であつた。豫備知識が深ければそれだけ益々興味があつた。僕の如く豫備知識の貧しいものは、全體としてたゞ朦朧と受納れたに過ぎなかつたのだけれども、それでもゲーテは實に豐富な生涯を送つた人だといふことを想像することが出來た。

夕餐は、S君そのほか二三の日本の留學生と共にしたが、皆が定食で儉約してゐるのが僕の心をひいた。當時、伯林あたりに居る日本留學生は獨逸の貨幣價の下落したに乘じ、贅澤三昧に耽つてゐるといふ評判が專らで、ために日本の當局者の心まで動かしたといふことを聞いたからであつた。

その夜、S君の部屋で互に訣別以來のことをいろいろ話合つた。S君はその後屢々の教室をのぞき、つひに此地の生理學教室に落付いたのであるが、細かい實驗がなかなか捗らず、困つてゐると云つて溜息を衝いた。このあひだ此處を通過した日本の旅人が、あるはずみに、留學生どもは論文をたゞ拾ひに來るやうな口吻を漏らしたので、猛烈に駁擊してやつたといふやうなことも話した。「しかし、僕らはこれでも戰爭の少し前あたりに較べれば、だいぶ呑氣なんだぜ。あのころの連中はまだまだ苦しんだといふことだから。それに、態々遠征に出掛けなくつて濟むだけ、我慢しろといふことだらうな」といふことをも附加へた。そのとき、S君は、「君、獨逸にも蕨が澤山生えてるところがあるね」と云つた。獨逸も地球の陸つゞきであり、山嶽地であるから、蕨の萠えるのは自然であり分けて不思議ではないのであらうが、蕨といふ語がすでに僕の耳に異様に響いたのであつた。

S君は、今年の晩春に宿の主人夫婦と中學校に出てゐる子と四人で、背嚢を負うて遠足に出掛けた。或る驛から下りて、追々山地に入つて行き、だいぶ歩いたころ湖水のほとりで食事をしたさうである。そのときS君は用便を催したので、ひとり丘陵のかげに行つて用便を足しながら、そのあたりを見ると、蕨が大小幾本も生えてゐたといふのであつた。そのとき、望郷心の強烈に湧いたのを我慢しながら、そして折があつたら伯林から味噌を仕入れて、も一度蕨狩に來てやらうと思つたさうである。

しかし教室での爲事は縦ひ一日でもさういふことを許さない、日一日と延びてゐるうちにとうとう夏になつてしまつたのである。

その夜、僕はS君の部屋のソファのうへに寢せてもらつた。稍窮屈でも硫黄のにほひする旅舍の部屋よりは安心が出來た。二人が日本語で話をしてゐるうちにS君は先づ眠つた。僕も、蕎し・蕨のことなどを空想しながら寢入つた。

次の日、僕等は連立つてS君の教室に行つた。S君は兩棲類の神經をいろいろの液につけて細かい實驗をやつてゐた。そのほか四名ばか

りの日本人もそれぞれ研究をしてゐるのに會つた。

僕は研究をしない覺悟でS君と其處で訣れた。それから神經系統研究所を訪ねた。ここはもと有名な學者 Edinger のゐたところであるがその後任に Goldstein といふ教授が主宰してゐる。ここにも日本人が一人ゐた。

　そこを辭して、大學の精神病學教室を訪うた。ここでは折よく、Jahnel といふ少壯教授に會つた。この人は、野口英世博士の後に、また特別の方法で麻痺狂腦髓の中のスペロヘータを研究した人である。教授は幾枚も標本をのぞかせ、しまひに三枚の標本を僕に呉れた。教授の靴紐は切れたのをつないだ結目がいかにも目立つた。それを大發見でもしたやうな氣持になつて教室を辭した。

　それから町の聳立つたものを見て、この町を去り、Giessen から Mainz に行き、ラインを船で下り Köln から伯林に行き、Weimar から、Leipzig, Dresden とまはつて、維也納に歸つたのは九月半ごろであつた。森鷗外先生の訃は、伯林の日本大使館に於て聞いた。

蕨　其の二

　それから丸二年過ぎた。その時は僕はもう南獨逸のミュンヘンにゐた。西暦一九二三年の七月にいよいよ維也納を去り、ミュンヘンに轉學してから、そろそろ滿一年にならうとしてゐる。

　ミュンヘンの教室でも僕はなかなか苦しんだ。併し僕の論文に關する小さい實驗がほぼ出來あがつたので、六月のはじめに三人の日本人と南獨逸の山中に旅した。同行は麥酒のことを調べてゐる醫學士と、魚類の研究に來てゐる理學士と、僕と同じ教室にゐる醫學士との三人であつた。

　この旅では實にいい山と、いい湖水と、原野とを見た。山はアルプス山系の續きで、雪のある鋭い山山が虚空を壓してゐる工合は、久しく教室内にくすぶつて苦しんでゐた僕等の目には不思議なもののやうに見えた。

　Königssee といふ山中の湖水を縱斷するとき、舟夫は一發猟銃を放つた。その音が湖をとり圍んだ山に響いたかとおもふと、それが幾つかの谺を伴つて、やうやくにして消えた。舟夫は、昔から代々の經驗をば今度は旅客のために聞かせるのであつた。それから角笛をも吹いた。これも段々に谺響して、奥山の方に行つて消えた。

　さういふ經驗を幾度かして、Wendelstein といふ山に登るときである。車が雄大な山の麓にかかつたころ、其處には延び過ぎて既に葉になつた蕨が一めんに生えてゐた。その蕨生は約一町ぐらゐ續いてゐたたらうか。僕は二年前に、Frankfurt a M

友から聞いた言葉を想起し、強い食慾をそそつたが、奈何ともすることが出來ぬのでそのまゝに過ぎた。登つたこの山は實に名山であつて、南方獨逸の國土山嶽湖川都邑を展望することが出來る。僕ら四人は心に滿足をおぼえて六月九日ミュンヘンの宿に歸つた。

翌六月十日僕は急に思立ち、ひとりで、南獨逸のGarmischといふところに行つた。ここはもう墺太利のチロール地方に境するところであり、獨逸の最高峰Zugspitzeを目前に見る山間の町である。

僕は九日にミュンヘンに歸ると獨りでかう思つた。若しWendelsteinの麓の蕨があれぐらゐに延びてゐるなら、Garmischならばひよつとしたら未だ食べられるほどの蕨が生えてゐるかも知れない。そこで慌しく行つて見る氣になつたのである。

Garmischに著いた時は、午を少し過ぎてゐた。停車場を出てPartenkirchenの方へ向いて行くと、新しい旅舍が數軒檐を並べてゐる。その二軒目の『金の太陽』といふ旅舍に入つて僕は部屋を極めた。部屋は質素だが、山嶽と相對してその雲烟を見極めることが出來るので僕は大體滿足した。旅舍を出て、明日以後の行程を定めるため乘合馬車の發足地點・時間・貨銀などを調べに行つた。

ここは山間の小邑であるから物靜かで、常に氣をいらだたせるやうなことはない。家は木造が多く、檐が長く、露臺も思切つて突出でて

ゐたりする。時計商と眼鏡商とを兼ねてその有樣な

土地のものは皆質素であるが、夏も冬も多くの旅客を相手にするので愛想がいゝ。

僕は町を去つて、Rissersee といふ小湖の方に行つた。行く途中、農夫等は日に燒けた健康な顔をして草を刈りそれを乾してゐる。その乾草のなかに幼童が戲れてゐる。さういふ青野が見わたすかぎり續いてゐる向うを、軍樂を響かして一大隊ばかりの歩兵が通つた。これなども戰後には珍らしいもののやうな氣がした。

喘ぎ喘ぎとうとう湖水まで行ついたが、なるほど山中にある靜かないゝ湖水である。森林に圍まれた湖水から出て行く、川口のところは森林が切れ、そこにZuspitze, Waxensteinなどいふ鋭い山が見えてゐる。

僕はこの湖畔で蕨を澤山採つた。蕨は或る一ところに簇生してゐた。大部分は最早時節を過ぎてゐたけれども、それでも尖の柔かいところは殘つてゐたのでそれを集めた。なかにはやうやく萌えたばかりのもある。採つた蕨を新聞紙に包んだ。僕は二年まへに友から話された蕨のことを思出し、ひとり心に滿足をおぼえて湖畔に沿うて林中を歩いて行つた。湖の淺いところには蓴菜に似た水草が繁殖してゐる。そこに水すましなどが泳いでゐる。谷地になつたところは地がぬ

來るためであつただらう。ここの山中は日本の東北の山中を歩いてゐるやうな氣持である。ただ鋭い山が直ぐそばに突立つてゐる趣きは、アルプス山系の特色であり、何か言ひ難いものがある。

旅舍に歸つたのは日の暮方なので、窓をあけて彼の高峰の暗黒に沒して行くありさまをも見ることが出來た。それには雲の動搖が伴ふために刹那々々の無常變幻を現出して、それから夜の暗闇のはじまると共に靜寂に歸るのであつた。夕食は山間に似あはず美味を食はせた。今は轉地客の尠い時であるが、それでもいつも相當の格を保つてゐるものと見える。部屋に歸つて、新聞包から蕨を取出して並べて見たりした。

けふは客は尠く隣室もひつそりとして誰もゐない。僕は靜かな氣分になつて寢に就いた。九時過でもあつただらうか。

それから一寢入したとおもふころ、隣室で何かなまめく話ごゑのするのを聞いた。はじめは夢現の境に聞いてゐたのであるが、やうやく意識が薄明を離れるに從つて、それは男女ふたりの聲だといふことが分かつた。僕は、はてなと思つた。これは隣室に客が來て宿の婢女に戲れ挑んでゐるのではあるまいかと思つた。その時、部屋の暗闇に、隣室との境の扉の下の方から細く幽かな光線の差してゐるのに氣づくと、僕は反射的に起きた。そして眼鏡をかけて扉に近づき、鍵の穴から隣室をのぞいた。[illegible]である。隣室にはあかあかと電氣燈がとぼつて、そこに二たりの若い男女がゐる。僕は息をこらし、氣を靜めてそれを見るに、驚かざることを得ぬ。女は體貌佳麗で、男もまた吉士と謂つていゝ。ふたりともゲルマン族らしく、猶太族の相貌はない。これは新婚の旅に來たのではあるまいかと僕は思つた。

、、、、、、、、、、。女は『潔白細膩』である。男が、、を持つてこちらの扉に近づいて來たとき、僕はおもはず後じさりをした。餘り距離が近いので反射的にさうなつたのであつた。それから急いで二たびのぞかうとした時、いきなり額をば扉の撮手に打つけたので、又反射的に後じさりした。しかし二人はその音にも氣づかなかつたらしい。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、彼等はつひに電氣燈を消した。暗黒は僕の『自我』意識を蘇らせたのであるから、僕は二たび床のなかにもぐつた。

けれども僕はもはや尋常には眠れない。さてさて不思議な晩であつた。萬有に意志があり、神の啓示があるといふなら、どういふことになるだらうか。一つは『客觀』といふことであるらしい。そこで僕は或時には飽くまで客觀に徹するが好からう。一つは『自然無邪氣』といふことであるらしい。巴里で見、マルセーユで見た人間の行動と、どういふ差別があつただらうか。そこには不意識のうちに不自然があつ

たのではなからうか。Pornographieはいづれの國土、いづれの民族にもあるが、あれは自然無邪氣ではない。今晩のとはどうも違ふ。それなら、シュニッツレルの輪舞劇に於て、幕間の内容を暴露せしめないのは極めて當を得たことに相違ない。あれは、歐羅巴人の間に於ていろいろの意見があつた。それで、〝unsittlich〟とか、〝frivol〟などの形容詞が冠せられたのであるが、今夜の現實は、もはや〝frivol〟などといふものではない。暗やみの中で僕は、『相狎無所不至』といふ熟語を思ひ、『親愛不盡』といふ熟語を思つた。寢られぬままに念頭に浮んで來ることは所詮理論の域を出でなかつた。然るに僕の見たものは、現實であるからそこには無間斷の生動があつた。かの〝Liebkosung〟といふ語のごときも所詮現實そのものではなかつた。

朝、めざめて夢ではないかと思つたが、それは夢ではなかつた。僕は、午前十時十五分發の乘合馬車で、Eibseeといふ湖畔に行つた。他國の旅人も五六人同乘し、山川景色の鑑賞を恣にしながら數時間を要した。湖畔には大きな旅舍もあり、物賣る店があり、食店珈琲店があつた。ここから登山しようといふ男女がここに群れて食事をしてゐた。これから登らうといふものは、此處でもやはり酒類は飮まなかつた。いまだよき時節でもないのに、ここの湖畔に望遠鏡などを据ゑて、太陽の黑點を見せて居る男などもゐたが、そこに留りゐなかつた。僕は湖畔を約一時間ばかりめぐり歩いた。來てがたいい湖水である。Zugspitze, Waxenstein Alpspitzeのこの連續した三山は、獨逸の高峰で、このあたりでは何處からも見えるから、仰望の際には左程に思はぬが、これを見おろした寫眞などを見るときには、實に雄大な光景として僕等を威壓してくるのである。僕はさういふ寫眞を幾枚か買つた。この繪葉書などを賣る家の主人は、シイボルトの孫だと云つた。バヴアリア師團の陸軍少佐であるが、戰後ここで店を開いてゐるといふことであつた。その主人と話してゐる一人の男は突然『今日は』といつた。この男は俘虜になつて久留米に五年もゐたなどといつた。

僕の計畫は、若し蕨の都合が惡ければ、もつと西方の山間に行き、Linderhofから、Füssenの方にまはつて、ルードウイツヒ二世の建てた、王城などを見物する豫定であつたが、それを罷めてミユンヘンに歸ることにした。停車場に著くと雷鳴がして雨が強く降つた。

夜になつてミユンヘンに著き、次の日の夕食に、宿の媼に日本飯を炊いでもらつた。伊太利のMaggiといふ醬油を買つて來、蕨は重曹を入れて煮た。媼は目を睜りながら、『そんなものを食べて中りますぜ』などといつた。媼は、Hillebrandといつて、多勢の日本留學生を

世話した。日本婆さんの名はそれに本づいてゐる。嫗は、„Vergissen' といふ語を使つた。

『なかゝに中らない。己だちには此はたいしたものなんだよ。マルチン・ルーテルは牛豚ばかり食べて肥りあがつたが、己はけふは畜類になるんだ。嫗さんは、ゲーテのファウストを知つてるか。あの中に魔女の厨といふところがある。何でも食物は純粋のものを食ふ。畜類になつて生きるといふ事があつただらう。己はけふは馬の如き畜類だよ』こんなことを云ひながら、軍曹で茹でた蕨を清水で洗つて卵とぢの汁を作つた。それを僕の部屋に持つて來、留學生の誰にも知らせず、獨りでむさぼり食つた。

和食には麥酒も珈琲も向かぬので、茶精を湯に溶かして飲んだ。茶精といふのは番茶の精としてあり、一人の友が遙々日本から持つて來たのを僕に呉れたのであつた。腹の滿ちた僕は宿を出てミユンヘンの町を歩いた。一直線に市役所の前を通りぬけ、イーサル門をくぐり、イーサル河の橋まで行きそして歸つて來て寢た。„zarte Geschee lit" といふ言葉も、かの夜の如き實在も、東海の國に歸ると間もなく忘れてしまふだらうなどといふことも思つた。

蕨　其の三

おなじ年（西暦一九二四年）の七月に愈々ミユンヘンを去つて佛國巴里に行つた。巴里を根據として諸國を旅し、間もなく巴里をも去らうといふとき、畫家のM君が案内して呉れて、バルビゾンにミレーの住宅を見に行つたことがある。それは十一月十六日であつた。

巴里のリオン停車場を發して Melun 驛に降りたのであるが、日曜であり、天氣も好く、それにもう十一月の半であるから、田舎の街路樹が黄色になつて落葉してゐる様も氣持よく、群鴉のおり立つてゐる畑には、砂糖大根が山のやうに積んであつたり、それを冬圍するために大根を堤防のやうに積立てたところなどもあつたりした。童兒どもが使ひ古した自轉車の護謨輪を以て遊んでゐて互に云ひ爭ふ、Allez! などといつてゐるのを聞くと、佛蘭西語の初歩を習はうとしてゐる僕にはなつかしく響いた。

食店のやうなところにも、汽車の中にも、掲示がしてあり、麵麭を節約せよ。つまりそれが佛貨の節約になるのであるといふ意味のことが書いてあつた。„economiser le pain. c'est economiser l'or de la France" と書いてある。„ne gaspillez pas le pain. c'est economiser de l'or pour la France" と書いたのもある。僕は佛蘭西でこの文句を聞くことをなつかしく思つた。そして、意味よりも言ひ方を興あることに思つた。

維新回天史の一面（其九）

久邇宮朝彦親王を中心としての考察

蘇峰　徳富猪一郎

（第七十三）　徳川慶喜と井伊直弼

果然米國との假條約調印の一件は、京都にも、江戸にも、大なる波瀾を激起した。それはこの事に就いては、豫め諸大名と評議を凝して、而して後更に案を具して、京都の旨を伺ふべしとの勅諚に關らず、何等の勅許をも經ず、そのまゝ調印し、しかも宿次奉書にて、屆け捨てにてすましたることは、京都に於て至尊の逆鱗在したことは申すに不レ及、江戸に於ても、苟も正議を主張する面々は、何れも異論沸騰した。

即ち安政五年六月二十一日、御三卿の一人、一橋慶喜は、幕府よりこの事に就き奏聞の書付を見るや、最早默止すべきに非ずとして、早速井伊に面會を申込み、二十二日登城した。慶喜は、

『條約調印の事は其許も承引のことと乎』

と詰問したが、直弼は

『恐入奉る』
とのみ申して、何等の答もしない。
『されば其許は不承知で、備中（堀田正睦）、伊賀（松平忠優）兩人等の取計らひ乎』
と畳かけて云つたが、直弼は、
『私も同意仕候事故、恐入奉る』
と答へた。慶永は、
『それでは將軍家は御違勅と申す事になりはせぬか』
と詰問すれば、直弼は、
『私も左樣に存候て、初の程は拒みましたが、大勢に無勢、詮方なく同意仕りました』
と申した。慶永は、
『御違勅ともあるべき事を奉書にて奏上とは何事ぞや。京都を御輕蔑の筋にも當るではない乎』
と更に詰問したれば、直弼は、
『一々恐入奉る。何れ私共の中早々上京仕り申譯仕るによつて、是迄の儀は幾重にも御宥恕上ぐ』
と申した。

斯くて話は轉じて養君問題に入つたが、直弼が、紀州に定りたることを語るを聞いて、慶永は、
『及ばず乍ら此方共も御爲筋を存じつめ、幾久しく奉公致すであらう』
と云つたから、直弼も、
『誠に以て難有安心仕り候』
と云つた。それから紀州の跡は如何になると聞いたらば、直弼は
『御前に思召もあらば、御取り持ち仕りませう』
と云つたが、慶永は、
『以つての外である。一橋の簾を離れ難き故を以つて、御養君のことを周旋したるに、紀州家抔は思ひもよらぬ』
と云ひ、それにてこの話は打切りとなつた。

（第七十四）松平慶永と井伊直弼

これは中根雪江の『昨夢紀事』には、二十三日とあるが、井伊家の記録には二十二日とあるから、暫くそれに從ふこととす

四日には、所謂水戸齊昭はじめ水戸慶篤、尾張慶恕、越前慶永の、推參登城なるものが行はれた。

これは實に井伊方にとつては、思はざる大勝利であつて、水戸一派はこれが爲めに江戸に於ては、一敗又た振はざる仕末に立ち至つた。この事は世間にも大評判のことで、これを語る者の側に於て、種々の色彩、調子がつけてある。今暫く事實と信ずるところによつてこれを語るであらう。

× × ×

さても六月二十四日の朝、水戸齊昭は、尾張慶恕と共に登城。井伊の違勅を詰責する旨、茅根伊豫之介を以つて松平慶永に通じ、同じく登城を促した。然るに慶永は、井伊邸を訪ふ先約があつたから、後より登城する旨を答へ、午前六時頃に井伊邸に出掛け、直ちに違勅問題に就いて直弼を詰問した。井伊もこの論には抗辯が出來ず、唯だ、

『眞平御免』と云つて謝つたが、

『扨如何にしてその罪を申しなだむる乎』

と問ひたれば、直弼は、

『某上京して申譯致すであらう』

と云つた。慶永は、

『然らば何日上京せらるゝ乎』

と問うたが、直弼は、

『明日とも申す譯には參らず、何れ老中共と相談の上、取り極めるであらう』

と答へ。これから又た議論は養君論に移つたが、なかなか議論に花が咲いて落着を見ず、直弼は近習が、

『早や御登城の刻限に御座ります』

と申し來つたから、

『今日はこれにて御斷りに及ぶ』

と座を立たうとしたが、慶永は袴の裾をつかんで引止めたとか、或は袖を引いて引止めたとか、兎に角これを引止めんとしたが、直弼はそれを振切つて登城した。

斯くて慶永も亦た直弼の後を趁うて、登城したといふ事である。

× × ×

云ふ迄もなく、慶永は當時既に開國の思想をもつてゐたから、違勅論には左程熱心ではなく、

であつた。即ち彼の主張は、至尊の思召が一橋にあると云ふことを楯として、『違勅の件に就き、京都へ申開きをなしたる後をまつて、徐ろに京都の思召に從ひ、一橋を立てたらよからう』と云ふ事であつたが、直弼は『既に紀州と定り、今明の中にも披露に及ばんとする場合に、左樣の事は出來べき乎』と頭からはねつけたのである。これが當日城中での活劇の序幕とも見るべきものであらう。

（第七十五）推參登城

扨て慶永は井伊の後を追ひ、そのまゝ登城したが、その時には齊昭及びその子慶篤、尾張慶恕等は既に登城してゐた。元來三家、三卿等の登城日は例日があるのに、斯く不時に推參した事は、只事に非ずと、城附きの御坊主などは、何れもわなわなと戰慄してゐた。

慶永は先づ上の御部屋に出て、水戸齊昭、その他に面會して、今日の仕組みを糺したるに、第一に違勅一件の罪を責め、次に獻賢の議を建て、それより立儲の事にも及び、場合によつて大老をも擯斥すべく。その席にて議論決せざれば、將軍の御前を憚ひ、大前に於て決着に及ぶべしとのことであ

氣焰當るべからざるものであつた。

× × ×

併しながら彼等は賢名世にしくも、要するに肉食者は肉食者だ。彼等はかゝる大事に臨むに際して、尤分の考慮と、準備を缺いてゐた。而して果然これが爲に井伊に致された。

× × ×

扨て三人は大廊下上の部屋に通り、井伊大老その他の老中に面會を求めたが、大老、老中共に御用とあつて、御前に出てゐるところであれば、暫く御待ちあれとて、一向に出て來ない。その實彼等は奥まりたる處に屏風を引廻して、その中に籠り、『兎やせん』『角やせん』と評議をこらしてゐた。

× × ×

慶永は大廊下、下の部屋に通つたが、又た水戸父子、尾張慶恕の居る上の部屋にも行つて、それ〳〵の打合せをした。然るに大老始め老中共はなか〳〵出て來ない。齊昭等は屢ば面會を促すけれ共、晝過ぎても音沙汰がない。御目付駒井右京が、水戸尾張家の方々が未だ晝飯もすまさるを見て、—

「御臺所より臺飯を差出すべき歟」

と伺つたが、直弼は聲を勵して、

「各々方は御召もなきに勝手の登城、定めし御辨當の用意もあるべし。臺飯杯は出すに及ばず」

と申した。

斯くてこの間、酒井忠義――若州小濱の城主、やがて京都所司代となつた漢――は、折々屏風圍ひの中に出入し、又た齊昭等の席にも出で來り、何げなき體にて物語り、何かと齊昭等の模樣を偵察して、これを井伊等に報告するの任に當つてゐたやうだ。

扨て屏風の中にて、如何なる評議をなした乎。將軍へ直謁を求められては容易ならぬ事である。如何にすべき歟と評議を凝したが、久世、間部等は、如何に齊昭等が申立ても、それは拒むべきであると云ひ。猶ほこの際井伊は遠慮して逢はぬ方がよからう。一切の事は他の老中にて受け答へするであらうと云ふことを云つたが、それでは上の御威光にもさはるとて、井伊は敢然としてその衝に當ることを主張した。

尚ほ上の部屋の中よりは、今日は掃部頭に腹を切らさねば退出致さずと、大音聲にて罵る聲が聞えたと云ふから、殿中の氣色も容易でなかつた事がわかる。斯くて彼等が出て來つた頃は、漸く午後三時頃であつた。

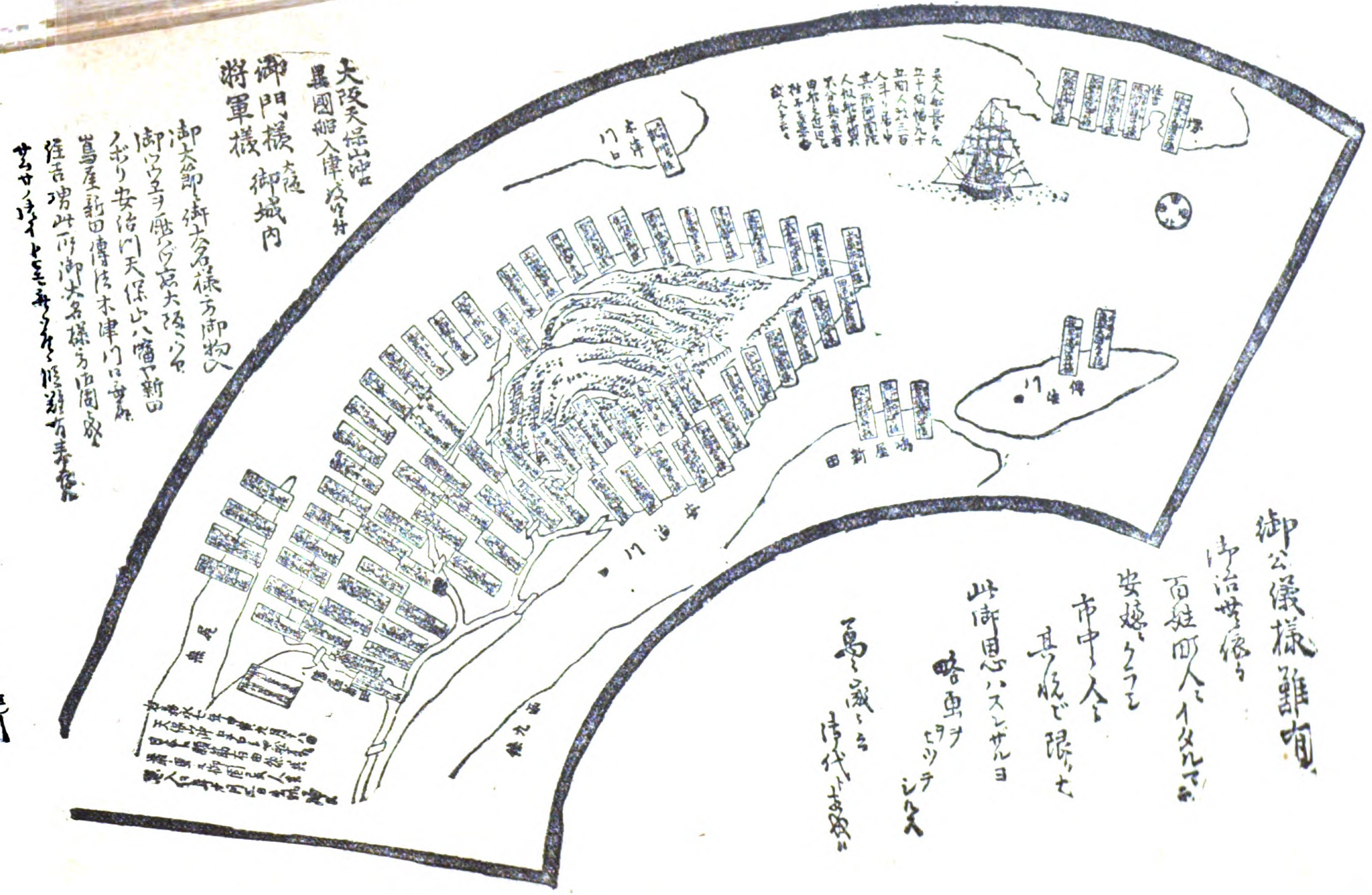
×　　×　　×

此の如く水戶、尾張、越前等は、井伊及びその他の閣老の爲に、時間責や兵粮責に逢つて、その朝來の鋭氣は殆んどこれが爲に疲れ、且つ餒ゆるに至らしめた。これは必ずしも彼等が軍略にて斯くしたのでもあるまいが、彼等の長評議の結果は、事實此の如く未だ戰はずして敵の勢を挫くこととなつて來た。

×　　×　　×

當時水戶齊昭の最も賴としたのは、松平慶永であつた。慶永は年少氣鋭、學問もあり、當世の務にも通じてゐるから、一橋慶喜を西城に据ゑ、慶永を後見として之を補佐せしむることは、一橋黨の期せずして合致したるところにして、所謂賢を薦むるといふことは、要するに慶永を薦めることであつた。而して井伊に對する議論も、慶永をして專らこれに當らしむる積りであつた。

されば齊昭は、


大阪天保山沖江
異國船入津致候ニ付
御門様 大坂 御城内
將軍様
御大名様方御物入
御公儀様難有
百姓町人ニイタルマデ
市中ノ人々
木津川口
新田

(第七十六) 井伊側の記事

尚ほこの事に就いては、井伊家側の記事は左の如くである。

『松平越前守様御出御逢有レ之、但今度假條約に調印相濟候ニ付而ハ、兼而京都より被二仰遣一候御趣意に相觸レ不二容易一御儀、此儀に而は難二相濟一との義被レ仰候故、左様之譯ニハ無レ之、此程御達し申候通之次第無二御據一事柄、京都御承知ニ相成候ハヾ、尤と御聞取も可レ被レ遊旨御答被レ遊候處、中々御聞入無レ之、其中御附人歸り候間、其旨申上御斷被レ成候處、今暫御談被レ成度との事に付、もはや登城刻ニ相成候間、是非御斷と申切被レ遊候處、殊之外御立腹ニ而、左様に候ハヾ只今より登城可レ致間、御逢被レ下候様にと御申ニ付、左様之儀ハ決而難二相成一儀、時刻も移候間、御送りハ御斷被レ成候旨御挨拶被レ遊、御引取被レ遊候。越前守様ニハ殊之外御立腹の體ニ而御歸り、御中門ニ而御供頭え御手紙様之物を御渡被レ成候處を見請候者有レ之、跡ニ而承り候得ハ、水戸様え早馬に而被レ參候由。

一、例刻御附人ニ而御登城御退出夜四時、

四ツ半時頃水戸中納言様、尾張中納言様、水戸前中納言様、松平越前守様登城。御大老御老中え御逢被レ成度旨被二仰入一、松平ニも御登城、久世様え御逢被レ成度旨被二仰入一、御三家方御廊下ニ而此度假條約え調印致候儀御違勅に付今日ハ掃部頭ニ腹切らせ不レ申而ハ退出不レ致迚、大音ニ御罵り被レ成、御役方追々聞付、御部屋へ御注進被レ成候ニ付、間部下總守様被レ仰候ハ、私共罷出如何様ニも御なだめ可レ申間、掃部頭殿には御逢無レ之様致度旨御申被レ成候得ば、御同列ニも如何ニも左様相成候方可レ然旨同音ニ被レ仰候處、御前被レ仰候ハ、私初御逢被レ成度旨被レ仰候處、御斷申而ハ臆し候様に被二思召一候而ハ上之御威權ニも拘り可レ申、私切腹致、上之御用ニ立候儀ニ候ハヾ厭ひ候譯ニも無レ之。各御一同可二罷出一旨被レ仰候へバ、左候ハヾ、一同罷出可レ申との御談しニ相成、御逢被レ成候處、前中納言様被レ仰候ハ、條約一條ニ付而ハ、京都ニ而厚御配慮被二仰遣一も有レ之處、勅答も不二相濟一内ニ調印爲レ致候而御渡ニ相成候而ハ、御

迚、御三家を御四家ニ被レ遊候事も難ニ相成一と滑稽交リニ御申被レ成、御一同御笑と相成、御談し相濟、御三家樣方ニハ八ツ時過手持不汰沙初め之御威勢ニ事變り、すごすご御退出被レ成候由。右御談しと相成候ニ付、若年寄衆初詰合之諸役人衆何と成行可レ申哉、萬一上樣へ御目見被ニ仰付一候樣相成候而ハ、如何成變事出來可レ致も難レ斗と手ニ汗を握り、御控被レ成候由、御小姓組御番頭酒井對馬守樣ニハ、以前奥勤被レ成候御方ニ而、御小姓頭取諏訪安房守樣、高井豊前守樣へ御逢ひ、老公初御三家方今日御登城之御樣子は不ニ一通一御樣子、誠ニ狂亂人之如き御有樣ニ而、品ニ寄リ御目通りも御願被レ成候との事、其子細ハ條約調印爲レ致候事難ニ相濟ニ付、今日ハ掃部頭ニ腹切らせ不レ申而ハ退出不レ致迚、先刻より高聲ニ御罵り被レ爲レ在、唯今掃部頭殿初御老中方御討論初り候處、不レ怪御勢ひニ付、樣子ニより御目通り御願ニ可ニ相成一も難レ斗、左樣相成候而ハ、如何樣之事出來可レ致も難レ斗と表方御役人共手ニ汗を握り居候次第ニ付、如何樣被レ仰候とも、今日ハ

驚、早速右之次第内々言上被レ成候處、上樣殊之外御逆鱗、掃部頭ニ腹切らす抔との儀不レ怪悪言逢度と之事ニ候得ハ、済候而嚴敷説得可レ致、今日天下之人心惑亂爲レ致候も、元ハ前中納言之仕業。此儘ニハ難ニ差置一とて以之外之氣色なり。尤上樣には平日御温和之御方ニ而今日之如く御逆鱗被レ遊候儀御側廻リニ而奉ニ見上一候事無レ之、彌御對顏と相成候而ハ、何樣之儀出來可レ致と皆々顏色を失ひ、御心配被レ爲レ在候處、掃部頭初老中より段々説得致し、御承伏被レ成候旨、内々申上り、左も可レ有レ之迚其御氣色不レ宜由、委細之譯柄藥師寺筑前守樣より承レ之、御三家方と御應對相濟、御用部屋に御引被レ遊候。御道筋へ大小御目付町奉行、御勘定奉行等追々御待請、今日之御應對如何可ニ相成一と一同御案思申上候處、流石之老公を御申伏被レ遊候御勢ひ、乍レ憚奉ニ感稱一候迚、御歡被ニ申上一候由。

一松平越前守樣ニハ御三家方御對話之御樣子御聞被レ成、もは

×　×　×

井伊家の記錄には彼等の退出を午後二時頃とあるが、『昨夢紀事』には四時頃とある。而して慶永の久世に接見したのは、申の半刻即ち午後五時頃にて、中根はあまり遲いから迎に行きたるに、酒井雅樂頭の邸前にて水戸家の人々の退出に逢ひ、日没頃御城に行つて祗候の間に參りたるに、程もなく慶永下り來るとあれば、この方が確かであらう。

兎に角、此日終日の論判は、內容は兎も角、天下に向つては、兩黨關ケ原とでも云ふべきところであつて、この推參登城は、全く水戸の大敗北となつて來た。

（第七十七）推參登城の結果

水戸側から云へば推參登城は、所謂泰山鳴動して鼠一匹の譬に漏れず、始は脫兎の如く、後には處女の如く、如何にも不結果に終つたが、併し井伊側に於ても可成り緊張した事は間違ない。井伊側にては其の日の模樣に就き、何れも心配をなし、長野主膳抔は千代田城の下馬に罷越し、其の偵察をなし、又た侍共は主人の樣子を心配して何れも群集し、漸く雨中暗夜、午後十時過ぎに退館した。

而して流石の直弼も宇津木六之丞に向ひ、『生きて居つた』と一口漏らした。斯る次第であれば、彼が如何に滿身の勢力を、この問題に傾け盡した事がわかる。

然もこれからして形勢は急轉直下し、其翌廿五日には、愈々紀州慶福が御養君として公表せられ、斯くて七月四日には將軍家定は薨去し、其翌七月五日には尾張慶恕、松平慶永に隱居愼み、水戸齊昭に愼み、水戸慶篤、一橋慶喜に登城差控を命じた。

此の如くして、江戸に於ては殆んど水戸黨、一橋黨とも云ふべきものを一掃し去つた。

×　×　×

そも〳〵井伊は朝廷に對して必ずしも不臣の志あつたと云ふのではない。又た彼は他の大名に比べて、殊更に朝廷を輕じなかつたと云ふ事はない。併しながら、彼の目的は、朝廷の御趣意を奉戴すると云ふでもなく、又た擧國一致、外交問題を處理すると云ふでもなく、謂はゞ一橋慶喜擁立の仲間を退治するのが、殆んど唯一の目的であつた。

而して彼は『鹿を追ふの獵師山を見ず』で、目的の爲には如

何なる事を犠牲とするも顧みなかつた。その結果として江戸に於ては、苟も一橋派に關係ある者は、根を絶ち葉を枯らし、殆んど剩す所なからしめんとし。京都に向つてもこれが爲に、如何に至尊の宸襟を重ね給ふをも、事實に於ては殆んど顧慮する所がなかつた。

（第七十八）直弼の心事

直弼が六月二十七日（安政五年）附、自筆にて九條尙忠へ答へたる書簡は、よく彼の心事を吐露してゐる。それは左の如くである。

『過日は御懇之令旨恭奉拜誦候。先以酷暑之節、益御機嫌能御勤職之條恐賀之至奉存候。今般就蒙大老職候爲、御祝詞蒙御懇之台命、冥加至極難有奉拜謝候。誠に不肖之小臣殊國家危難之場に臨重任難堪、再應雖及辭退候上、嚴命難默止、痛心此事に御座候。抑墨夷條約一條に付深被爲惱叡慮、一日勅答之趣乍恐御尤之御儀恐懼之至に付、是迄之御所置勝々致改復、廣く衆情を盡し候之處、幕府役人共之心得違者勿論、御不容易密計行之候間、右等取除候上に無之而は對蠻夷手强御所置も難相成、尤陰謀之起元は、西城御相續之儀に付速に開其元内關一決之上、外夷之所置に可取掛之處、作に而、雖長臣恐入候、群害將蹙之形勢欲見泥雜之間、依之漸々令沸滯候之處、魯墨英佛之軍艦追々渡來之注進有之、雖然可恐は何分夲始に帝都諸警衛並防禦之手當未行屆候之上、挫内夷唯今邦亂を開候而ハ實に國家之大事に付、雖未經叡聞候、危急之計に應接人之調印爲致候者、實に方今之御所置無念之次第、天朝之思召も如何可有之哉、恐縮之至に奉存候。前後之始末は先日以飛脚申上候得共、猶旨細に爲可奉言之、近々間部下總守被爲指登候。返々今度の一儀御聞濟相成候上は、速に鎭强猾反側之徒、專得平穩之基、而可奉安叡慮之思召、御賢察奉希候。便下總守よりも豫置候樣申聞候。猶書外近日可仕言上候。日外無

朝臣者處ㇾ希二殿下盡二鑑一候也。頓首、誠惶謹言。

六月廿七日　　直弼』

× × ×

これに依つて見れば、彼は只だ所謂陰謀派なる者を退治するるを專務とし、其後に於て外夷の處置にも取掛るといふことであつたから、外交も內治も、たゞこの一點に集中した事が判る。然るに京都に於ては、德川幕府が米國假條約に調印し、然もそれを宿次奉書を以て傳奏迄通告に及んだといふことになつては、如何に至尊の御逆鱗に觸れ、その影響が如何に至大であるかは、固より言を俟たない。

× × ×

元來この調印を井伊に强ひたのは、岩瀨修理と井上信濃守であつた。然るに流石の岩瀨も、その調印の翌日、書を松平慶永に呈し、幕府が宿次奉書にて、只だ屆濟にするといふことを、甚だ遺憾の事と爲し、『これは如何にも京を御輕蔑の姿にも相見え候樣に存ぜられ、然るべからざる事と愚存仕候。』と云つてゐる。岩瀨尙ほ然り、況んやその他をや。

然るに直弼がこれを以て自ら滿足したのは何故である乎。それは實に解し難きものである。

（第七十九）孝明天皇御讓位の宸翰

そは兎も角も、宿次奉書は六月二十七日を以て傳奏より奏聞に及んだ。

これを聞召されて、孝明天皇は左の如き宸翰を、關白九條尙忠に賜うた。

『（上略）今日武傳披露墨夷一件返答申來、扨々存外之事、實に心配歎痛絕體絕命、此時と悲歎無ㇾ限候。定 尊公も御覽候て御當惑御絕體 察入候。右に付今度此已前に增大評區々無ㇾ之如何と存候。此頃御 所勢氣御氣毒乍明日何れ御入來賴入候。左候はゞ三公三條前內府、二條亞相兩役召 設ニ大 評一之積りに候間、此段申入置候。此一大事中々うかく致居候時節に非、何卒格別御出膽御評議無ては不ㇾ叶と存候。仍早々爲ニ御心得一申入置 候 事。（下略）

六月二十七日　　此花』

× × ×

斯くて當日午後四時過、九條關白、左大臣近衛忠凞、右大臣

鷹司輔凞、内大臣一條忠香、及び前内大臣三條實萬等を御前に召され、御前會議を開かせ給うたが、翌日更らに、關白參內。近衛左府、・鷹司右府、一條內府、三條前內府、二條亞相、及議奏傳奏等の兩役を御召遊され、遂に御讓位の宸翰を下し賜うた。

この御宸翰は今猶ほ九條家に藏してゐるところにして、實に左の通りである。

「(御名)倩考ふるに、元來帝位を踏む事容易ならざる事、既に古書に見え、唐土に於ては子孫に限らず、譬へば下民たりと雖も、賢才を擇んで繼體と爲す。既に堯帝は舜を以て帝王と爲す(舜元農民)然るに日本に於ては忝くも子孫相續正流にして、他流を用ゐず。神武帝より皇統連綿之事、誠に他國に例なく、日本に限る事偏へに天照大神之仁恩言語に盡し難く、尊崇盡期なき事(御名)に於ても愚昧短才之質ながら、其血脈違はざるを以て、恐み恐みも天日嗣を繼ぐ事恐縮少なからず。既に先帝登遐之節、繼體之儀開闔申す筈之處、只々愁傷少なからざる節、心氣爽亂前後を辨へず踐祚。其後追々

丈け精勤、神宮御始祖皇祖に對し奉り、聖跡を穢がさず治レ國候存意之處、元來愚力に及ばざるの儀歎息之至之處、去る嘉永七年炎上後諸國變事數度、彼是萬民不安之事、是皆(御名)薄德之然らしむる處と、悲痛無限。猶更謹愼治レ國候所存ながら、前文之如く暗昧之質微力に及び難き事。然る處異船度々渡來之上、剩さへ墨夷使節者船應接和親通商を乞ひ、表には親睦之情を述べ、實は後年併呑之志顯はれぬ。條約之旨閣老を以て申出之條々、實に容易ならざる事に候間、先頃愚存を認め廻覽せしめ候事、其後も晝夜勘考候處、此度之一條如何體申候共免し難し。實以神州之瑕瑾、其上邪法傳染等も測り難く、仲々許るす間敷き事に候。若し許さゞるに於ては戰爭に及ぶべく、然る時は治世數年、人氣怠慢武備整はず。敵し難き旨誠に絕體絕命之時と、實に痛心候事。然るに(御名)存候は、武士之名目にて假令ひ治世續き候とて敵し難き旨申候ては、實に征夷之官職紛失數ケ數事に候。然るに當時政務は關東に委任之事、強て申候ても、公武隔絕に相成り候事、是

致レ難候。然るに昨日武傳披露の書附披見候處に、誠に以存外之次第實に悲痛など申居候位之事にて無レ之、言語に盡し難き次第に候。此上は將へ候了簡も無レ之候。前文之如き次第之上、如レ斯至大至重之事、追々增長苦心候。此一大事之折柄愚昧(御名)憖に帝位に居り治レ世候事、所詮微力に及ばさる事、亦此儘帝位に居り、聖跡を穢し候も實に恐懼候間、誠以歎个敷事に候得共、英明之人に帝位を讓り度候。差當祐宮有レ之候得共、天下之安危に拘る一重大事の時節に、幼年之者に讓り候事本意なき事、依レ之伏見、有栖川三親王之中へ讓り度存候。此段各存意承度候事。(御名)如レ斯之時節安逸之望にては決して無レ之、實に前文之如きの次第、愚昧之質迚も帝位に居り、萬機之政務を聽き治レ國候事力に及ばず。其上夷一件之儀申す儘斷候ては、天神地祇皇祖に對し奉り申譯なく、且所詮存念申立候共、右之次第實以身體茲に極まり、手足置く所を知らざる之至、何卒是非帝位を他人に讓り度決心候。猶早々關東へ可レ有二通達一事。」

×　×　×

此の御書の中にて伏見、有栖川三親王とあるは、有栖川幟仁親王、熾仁親王、伏見宮貞教親王を指し給へる所である。祐宮とあるは、即ち他日の明治天皇にて在す。

此の御宸翰は今日に於て奉讀しても、臣子の腸を斷つべきものにして、實に主上をして此の如き御宸翰を賜はらしめ給ふに至らしめた事は、實に言語道斷と云はねばならぬ。猶此の事に就いては、當日參列したる一條忠香卿の日記に、

『二十八日禁中參賀。今度關東より存外の言上有レ之、主上には甚だ御逆鱗の御樣子にて、勅命の御書付拜見仰せ付けられ、殿下(九條關白)初め皆々拜見候處、甚だ恐入る御書取り。一同恐入り御短慮の御事、先々御見合の方然る可しと段々願はれ候御事共なり。中間入御にて更に出御あらせられず。關白初め大心配。種々と御奧詰の殿上人を以て仰入れられ候處、更に出御有レ之、關白より段々恐入候段申上げられ、關東へ大老三家の中召に遣はし次第手續相濟候迄、御沙汰の儀、御延引相願はる。』

斯る次第にて、朝廷よりは傳奏より老中へ宛て、

『六月二十一日老中奉書を以言上之儀ニ付、三家並大老之内

早々上京可レ有レ之候様被レ遊度、此旨大樹公へ被二仰進一候事』

との旨を達した。

× × ×

併しながら井伊彼自身は、固より三家にも上京を命ぜず、かへつて井伊の腹心股肱とも云ふべき、間部下總守をして上京せしむることゝなつた。尤も間部が任命を受くるに至つたのは、六月二十六日の事にて、朝廷より三家大老御召の御沙汰の江戸に達したのは、七月四日の事であるから、その以前であつた。

× × ×

併し幕府は當初の規定通り朝旨を遵奉せしむることなく、何處迄も間部をして上京せしめ、彼によつて一切のことを處理せしむることにした。蓋し幕府は宸襟を安んじ奉るよりも、寧ろ他に目的があつた。それは井伊大老の目して、陰謀派といふべき者を、間部をして悉く一掃せしめんと欲したが爲である。

要するに井伊彼自身は、逆賊でもなく、不臣の念があつたでもなく、相當の勤王心もあつたが、然も彼の所作に至つては、

彦親王が、活動して居給うた事を記憶せねばならぬ。親王の名の表向きに露れなかつたのは、當時青蓮院の法親王にて在したからである。然も當時宮が至尊の至高顧問に在した事は、後記によりて證明せらるゝ。



佐渡の日蓮

武者小路實篤

登場人物

日蓮
阿佛房
千日尼
最蓮房
印性房
其他大勢

第一幕

第一場　佐渡塚原の堂

「一間四面なる堂の佛もなく、上はいたまあはず、四壁はあばらに雪ふりつもりて消ゆる事なく、かゝる所にしきがは打ちしき蓑うち着て夜をあかし日をあかす」

日蓮。日蓮、お前は法華經の行者ではないか。之しきの寒さに參つて何が出來る。お前は日本の魂、日本の柱ではないか。之しきの寒さでくたばつたらこの上ない恥ではないか。お前は今迄、あらゆる苦しみをたへて來た。それなのに、これしきの寒さ、これしきの飢えた、參つては恥辱だぞ。誰が參るものか。この日蓮は負けることを知らないものだぞ。俺の手はかぢかんでゐるが、そして硯の水は凍つてゐるが、しかし日蓮の身體にはあたゝかい血が通つてゐる。凍つた水を解かす力はあるぞ。

（日蓮手をこすり、息をかけ、かぢかんだ手で何かかきつゞけやうとする。然しがやゝもすると手が云ふことをきかない）

日蓮　日蓮の手よ。お前は日蓮の手だと云ふことを忘れたのか。今の世でお前許りが、法華經の行者に惠まれた唯一人の下僕ではないか。そしてお前の力で日蓮の文章が幾千人々の魂をあたゝめこの國を未來の恐ろしさから助けることが出來るのではないか。之しき寒さに、かぢかむやうでは日蓮の手とは云へないぞ。

（手をこする）

日蓮。だがこの寒さ。天よ、この日蓮を龍の口で生かしたのは、この北海の孤島で凍え死にさすためか。我に力を與へよ。法華經の行者を守護することを誓つた諸天子よ、この日蓮を凍え死にさせるつもりか。

（一人の男登場）

一人の男。和尚さん、飯を持つて來ました！

日蓮。さうか、それはどうも御苦勞さん。

一人の男。それならこゝに置いてきます。温かい内にめしあがつて下さい。（退場）

日蓮。どなたからとゞけて下さつたのです。かたぢけない。かたぢけない。天は矢張りこの日蓮をすてなかつたか。

（日蓮、小さいおはちをとる、湯氣が出てゐる、日蓮、それで手をあたゝめ、食はふとし、臭ひをかぐ）

日蓮（急に食はうとするのをやめる）。日蓮を毒殺しやうと思つても駄目だぞ。だが手をあたゝめるにはいゝものをよこしてくれた。天は日蓮の肉體を何處までも苦しめるが、しかし何處までも法華經の行者の仕事はたすけやうと思はれてゐる。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

（又、字を書く）

日蓮　ますく臭ひがへつて來たわい。（飯の臭ひをもう一度かいで見る。そして思ひ切つて、又字をかく）

だ、この僧を食つたことにしておいてやれ。(雪のなかに僧をすてる)今にきつと誰か日蓮はもう死んだ時分だと見にくるにちがいない。だが日蓮はさうたやすくは死なない。死ぬべき時がくれば死ぬが、死ぬ迄は生てゆく。之以上生きられない處まで、法華經のために生きてゆくぞ。今までに頸をはねられたり、遠島へ流されたり、拷問にあつたりした人は數かぎりがなくあるが、法華經のために日蓮のやうに迫害されて、しかも少しも參らなかつた男があるか。之しきの寒さ、之しきの餓で、この日蓮を殺されると思つてゐるのか。いくら手がかぢかんでも日蓮の心はかぢかみはしないぞ。

(なほ字をかく)

日蓮。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

(なほ字をかく。居眠りをはじめる。眠氣と戰ひながら、何かしらべながらかきつゞけやうとしてゐる內、遂に杜によりかゝり眠つてしまう)

(先きの男と僧侶登場)

僧侶。どうだ。

一人の男。とう／＼くたばりました。

僧侶。さうか。とう／＼くたばつたか。

一人の男。あの通りでございます。

僧侶。とう／＼くたばつたな。(上つていつて日蓮を[illegible]る)あはゝ。とう／＼この強情はりの日蓮もくたばつたか。

一人の男。首尾よく參りましたな。

(二人惡人らしく顔見合せて笑ひ、かへつてゆく、一人の男食事の用意をもつて歸る。日蓮まだねてゐる。犬吠える。日蓮目をさます)

日蓮。思はずねてしまつた。日蓮、そんなことで法華經の行者がつとまるか。俺は死んでもこの文章はかき上げないではおかないぞ。(又かき始める)

(阿佛房登場)

阿佛房。日蓮!

日蓮。誰だ。

阿佛房。お前の首をもらいに來た。

日蓮。なぜこの日蓮の首がほしいのぢや。

阿佛房。お前は念佛すると無間地獄におちると云つたな。そして畏くも法然上人が、無間地獄におちてゐられると云つたな。

日蓮。あたりまいさ。阿彌陀佛はなんと云はれた。彌陀の四十八願の內に正法を謗るものは救はじと誓はれたことをお前は知らないか。法華經の第二の卷に法華經を信じないもの、この經をのゝしるもの

は一地世間の佛種をたち、阿鼻獄におちるとかいてあるのを知らないか。法然の堕地獄は彌陀の言葉が證明してゐる。それとも君は阿彌陀佛の言葉を信じないのか。

阿佛房。お前はこの日本を亂さうとしてゐる。そして日本が今にも亡ぶやうなことを云つてゐる。

日蓮。君は今のまゝで日本が亡びないと思つてゐるのか。この頃つゞいて起る天變地變は何を語つてゐると思ふのか。この頃の人心のすさみ方を見て、ゆくすゑを思つて君は安心してゐられるのか。今こそ大事な時ではないか。

阿佛房。……

日蓮。恐ろしいことは、日々近づいて來てゐる。この恐ろしい日本の運命を心配して、身をなげ出して今日までくるしんで來たのは、この日蓮をおいて他にあるか。念佛云ふものはいくらあつても世の中は益々わるくなり、人の心はます〱すさむ許りではないか。内亂はつゞいて起り、下は上をこくし、外國は日本を亡ぼさうとしてゐる。君はそれを恐ろしいとは思はないか。そして君はこの日本の柱であり、眼であるこの日蓮を殺さうと云ふのか。鎌倉の八幡大菩薩に守護されてゐるこの日蓮を殺さうと云ふのか。君こそ、日本の賊、謗法と云ふべき輩だ。まだ云ふことがあれば、何んでも云ふがい〻。云ふことがなければ、さつさと歸れ！

阿佛房。（歸らうとして、又戻つてくる。言葉も態度もすつかり丁寧になる）。日蓮上人。

日蓮。なんだ。

阿佛房。私はまだあなたのおつしやることが腑におちないことが澤山ありますが、だが私はへんにあなたが好きになりました。上つていろ〱お聞きしてもよう御ざいますか。

日蓮。よろしいとも。どうぞゆつくり上つていつて下さい。こんな所ですが。

阿佛房。私はあなたは極惡無道な人だと思つておりました。

日蓮。誰でもこの日蓮の噂をきくものは皆さう思ふやうです。

阿佛房。だが私は一目見てあなたは實にお優しい方だと思ひました。私はこの齢になつてあなたのやうな方にお逢ひしたことは御ざいません。

日蓮。私を優しい男だと云ふのはあなた位いのものです。

阿佛房。あなたは隨分苦勞をなさりましたね。

日蓮。さう見へますか。

阿佛房。よく生てゐらつしやいましたね。こんな島に、こんな寒さで、お一人で。

日蓮。私は自分を法華經をひろめるのにさゝげてゐます。他のことは
この日蓮には大した問題ではありません。
阿佛房。なんでもお役に立つことがあればなんでもいたします。私は
もう理窟はよくわかりませんが、あなたのためなら生命でもさゝげ
たく思ひます。
日蓮。ありがたう。あなたはどなたですか。
阿佛房。まだ申しませんでしたね。私は遠藤爲盛と申すもので、順德
天皇のおともをしてこちらに參りましたもので御座います。
日蓮。さうですか。陛下にはさぞ御苦勞あそばされたでせうね。
阿佛房。それはお話にはなりません。
（二人、涙ぐむ）
日蓮。それからずつとあなたはこちらにゐらつしたのですか。
阿佛房。はい。それからずつと妻とお墓もりをしております。
日蓮。それはありがたいことです。
阿佛房。世の中は之からどうなりませうか。
日蓮。皆が心を入れかへないと恐ろしいことがつゞいて起るでせう。
私達は人々が心をあらためて、皆が釋迦牟尼の御心に從がはなけれ
ばならないと思ひます。
阿佛房。久しぶりにありがたいお話を伺ひました。妻にこの話をした
らさぞよろこぶで御ざいませう。御前はどうしてゐらつしやいま
す。
日蓮。時々、氣まぐれに持つて來てくれます。三日に一度、二日に一
度位い、今度は三日程、飯を持つてくるのを忘れてゐるやうです。
阿佛房。それなら之からさつそく歸つて持つて來ませう。
日蓮。いや、それには及びません。
阿佛房。いや、私の家はこの近くに御ざりますから、すぐ持つて參り
ます。之からひもじい目だけはおさせしません。
日蓮。それからもしお願ひが出來たら、紙を少しとゞけていたゞきた
いのです。御飯よりも紙の方が結構た位いです。何しろ生てゐる內
に、かいておかないと心配なことがあるのですから。
阿佛房。承知しました。それでは行つて來ます。さつきは失禮しまし
た。
日蓮。こゝであなたのやうな方にお逢ひ出來たのは淨行菩薩にお逢ひ
したやうにうれしく思ひます。
阿佛房。勿體ないことで御ざいます。それではいつて參ります。
日蓮。ありがたう。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。
（阿佛房退場）
日蓮。何處にも佛はゐられるものだ。こんな處にあんな人がゐるとは

思はなかつた。ありがたし、ありがたし。

(又何かかき出す。一人の男、僧侶他四五人登場)

一人の男。あ、大へん、生きてゐます。生きてゐます。

僧侶。なんだ。

一人の男。あれ御らんなさい。

僧侶。生きてゐるな。

一人の男。大へんです。大へんです。(逃げ出す)

僧侶。不思議なことがあるものだな、

(僧侶達退場)

日蓮。(笑ふ)あはゝゝゝ。

(阿佛房登場)

阿佛房。もつて參りました。もつて參りました。

日蓮。本當によく早く持つて來て下さいました。どうもありがたう。

阿佛房。何にもございませんが。

日蓮。この日蓮には山海の珍味よりもありがたい。

阿佛房。紙ももつて參りました。

日蓮。ありがたう。ありがたう。

阿佛房。御飯をおつけしませう。

日蓮。いや、自分がつけます。

阿佛房。いや、私にどうぞつけさして下さい。

日蓮。それでも。

阿佛房。いや、私がおつけしたいのです。

日蓮。それでは、恐れいりますが。

阿佛房。どういたしまして。本當にこんな島に流されて、こんなふきさらしの處で、こんな寒い雪のふるなかで、三日も飯もくわずに、平氣でかきものをしてゐられる。あなたは何と云ふ方でせうね。

日蓮。平氣ともゆきませんが、しかし法華經のため、眞理のために死ぬならば、私は本望この上なしと思つてゐます。

阿佛房。何と云ふ方でせう。あなたのやうな方を見たことはありません。

日蓮。それはあたりまいでせう。

阿佛房。おかへしませう。

日蓮。恐れ入ります。

(二人顏をあはせ會心の微笑をもらす)

第二場　阿佛房の室

(千日尼。おちつかずに阿佛房の歸りを待つてゐる。阿佛房

千日尼。お歸りがおそいので氣にしておりました。日蓮様はどんな方でした。

阿佛房。あんな立派な方にお逢ひしたことはない。

千日尼。そんなにすぐれた方なのですか。

阿佛房。わしは、御上人を一刀のもとに切らうと思つて、御顔を見た。その目を見た。そしたらわしは、思はず、御上人の前に跪づきたい氣がした。あんな方を見たことはない。この寒さにふきさらしの處に、しかも三日も飯を食はず、おちつき拂つて、わしをあはれむやうに、見つめられた時、その顔から何か後光のやうなものでも出て來たやうに思つた。御話すればする程、悪い方ではない。本當に日本のことを心配してゐられる。そしてお釋迦樣のおつしやつたことを信じ切つて、その爲にはいつでも一命をなげ出す覺悟をされてゐられる。それに何よりも力強い眼差と、すぐにも涙ぐみさうなその表情にわしはすつかり魅せられてしまつた。

千日尼。そんな方で御座いましたか。

阿佛房。お前も一度あの方に逢つて見るがいゝ。お前もきつと感心するにちがいない。わしはいろく昔話をしたら、泣いてゐられた。二人は厠鍛炊ハ御話をして泣いた。本當に心の美しい、温かい方だ。決して悪人ではない。わしはこの齢して、あの位い心の純な方にお逢ひしたことはない。又あの位い力強い方[illegible]にお逢ひしたことはない。まるで大きな山にでも向つてゐるやうな氣になる。

千日尼。そんな方でしたか。

阿佛房。わしは本當にありがたくなつた。そしてあの方にお逢ひ出來たのを實にうれしく思つてゐる。今日程うれしい日はまだ味はつたことがない。わしは何十年ぶりで心にうるほひが出來て、温い心にふれて思はず泣いてしまつた。それが非常に悲しい涙ではなく、なんとも云へないありがたい氣持になつて泣けたのだ。お前も一緒に居たらきつと泣き出したにちがいない。

千日尼。そんな方とは私には思へませんでした。ですけど本當によう御ざいました。お寒かつたでせう。早く火のわきにゐらつして、お酒でもお上り下さい。

阿佛房。今日は寒さなんかわすれてしまつた。火のそばによるのも勿體ない氣がする。あの方はふきざらしのなかに雪をきたまゝ、火のけは勿論ない處にぢつとして、何かかいてゐられた。

千日尼。本當にさぞお寒いでせうね。火でももつていつてお上げになつたらどうですか。

阿佛房。わしもさう思つてゐたが、つい夢中になつてしやべつてゐた

ので、すつかり忘れてしまつた。お手がかぢかんでは字をかくのにも御不自由だらう。早速持つて參ろう。

千日尼。道が大へんで御ざいます。今度は私が持つて參りませう。一度、お目にかゝりたくも思ひますから。

阿佛房。それならもつていつて上げてくれ。

千日尼。畏まりました。それでは一寸行つて參ります。

阿佛尼。誰かたのんでつれてゆく方がいゝぞ。火鉢ももつてゆかなければならないし炭も用意してゆかないといけないからな。明日はわしがまたゆくから、その時又炭はもつて行つてもいゝが。

千日尼。はい承知いたしました。ですが、うつかり他の人をつれて參りますと。

阿佛房。それも、さうだな。それなら二人で出かけることにしやう。

千日尼。それも大へんですから。

阿佛房。なになんでもないよ。まだ齡はとつても、老ひぼれはしない。

(印性房登場)

印性房。阿佛房さんはおうちかな。

千日尼。はいうちにおります。あなた印性房さんが御見へになりました。

阿佛房。(始めて氣がついたやうに家から首を出し)よくこんな大雪に見へられましたねどうかお上り下さい。

印性房。ありがたう。

千日尼。それなら私一寸行つて來ますよ。

阿佛房。それなら行つておいで、よろしく云つてくれ。

千日尼。はい。

印性房。之からどちらへお出かけです。

千日尼。一寸買ひものに。

印性房。之から大へんですね。

千日尼。それでは御ゆつくり。

印性房。用心していつてゐらつしやい。

千日尼。ありがたう。(退場)

印性房。(家へ上る)阿佛房さん。日蓮が來たことをどうお考へになります。あなたは日蓮を殺してしまへと云ふ御考へだと唱阿彌陀佛が云つてゐましたが、本當ですか。

阿佛房、そんなことも云つたかも知れません。しかし私はもう日蓮を殺す氣はなくたりましたよ。

印性房。どうしてゞす。

阿佛房。あした

印性房。誰がこんなことを云ひました。あいつは實際恐ろしい男です。あいつは惡魔のやうな男です。そして念佛云ふものはのこらず無間地獄におちる。日本で念佛をとなへるものを一人でも生かしておいたら、日本は亡びると云つてゐるさうぢやありませんか。そんな人間を生かしておけませんよ。

阿佛房。私は實は日蓮がどんな男か一寸見に行つて見ましたがね。どうも惡者とは思へませんでした。

印性房。それは一寸見た位いぢやわかりません。だが幕府へ、念佛宗や、天台宗や、禪宗を禁じろとあることないことをかいて、難題をふつかけたのは本當です。まちがいのないことです。だからあいつはやつけてしまはないといけないのです。內々鎌倉の方からもなきものにしろと云ふ、注意があつたさうです。

阿佛房。なんと云つても、私はもう、その話にのるのはいやです。

印性房。それなら法然様が地獄におちると云はれてもかまわないのですか。

阿佛房。なんと云つたつてかまわないぢやありませんか。日蓮様がなんとおつしやらうと。

印性房。日蓮様ですつて。

阿佛房。印性房さん。一度、日蓮様に逢つて御らんなさい。あの方は尊とは隨分ちがう方ですよ。

印性房。あなたは逢つたのですか。

阿佛房。實は殺さうと思つて出かけたのですが。

印性房。さかさまに改宗して歸つて來たのですか。

阿佛房。まだ改宗なんかしません。しかし日蓮は惡人ぢやありません。それ處ではなく稀に見る立派な人です。

印性房。日蓮のことを私の前で賞めないで下さい。

阿佛房。それならあなたも私の前で日蓮のことを惡口云はないで下さい。

印性房。君は仲間を賣つたのだね。

阿佛房。君達は日蓮様のことを本當には知らないのだ。

印性房。法然様が地獄におちると云はれても、念佛無間と云はれても、君は腹を立てないのか。そんなくさつた根性に君がなるとは誰も思ふまい。

阿佛房。わしは日蓮様があんな立派な方だとは思はなかつただけだ。法然様は偉い方にはちがいない。しかしお釋迦様のお弟子にはちがいない。そして阿彌陀様は釋迦に佛法の教を守護することをちかはれてゐらつしやる。そして正教は法華經より他にないのだ。

印性房。なにを云ふのだ、君のやうな奴は切つてすてべき奴だ。

阿佛房。切れるなら切つて見ろ。

印性房。切れなくつてどうする。

阿佛房。このわしはいくら齡をとつてもお前さんには切られない。

印性房。なにを。(そばにある刀をとりぬかうとする)

(千日尼登場)

千日尼。何をなさのるです。

印性房。あなたの御主人は日蓮にだまされてしまつたのです。そして私達を賣り、念佛をとなへると地獄におちると云ふのです。そんなことを聞いて辛抱が出來ますか。

千日尼。まあ、まあ、この場はこれでおひきとり下さい。いづれ又ゆつくりわかるやうにお話いたしますから。

印性房。さうですか。あなたがさうおつしやるなら、今日の處はおとなしく引き上げます。だが私達は近い内に中間をあつめて、あの日蓮の太い首を必ず切つてやりますからそのつもりでゐらつしやい。

阿佛房。何を。

千日尼。あなた、だまつてゐらつしやい。

(印性房。怒つて歸つてゆく)

阿佛房。どうだつた。

千日尼。私も泣いて來ました。あんな方には、始めてお逢ひしました。

阿佛房。さうだらう。あんな誠實そのまゝの人は見たことはあるまい。

千日尼。私はあの方の心にふれて來ました。

阿佛房。赤心を人の心におくとはあゝいふ方を云ふのだ。

千日尼。火をもつてゆきましたら隨分よろこんで下さいました。そしてあなたのことを隨分ほめてゐらつしやいました。そしてこの島で私達にあつたことを實によろこんで下さいました。

阿佛房。そしてお前は泣いたのか。

千日尼。はい。

阿佛房。そして俺も泣いたのだ。

千日尼。印性房さんは本當にあの方を殺すおつもりなのでせうか。

阿佛房。それはさうだらう。

千日尼。あなたはおとめにならなかつたの。

阿佛房。とめたので怒られたのだ。しかしいくら怒られたつてとめないわけにはゆかない。

千日尼。本當にあんな方を殺すなんて。ですが、あの方はお殺されにはならないでせうね。

阿佛房。それは大丈夫だらう。今迄にもつとあぶない處を何度も逢つて來られたのだ。印性房達に殺されるやうな方ぢやない。

千日尼。私、日蓮さまにあふまでは、印性房さんが、あんな安つぽい方とは思ひませんでしたわ。

阿佛房。俺もさうだ。人間と云ふものは皆、印性房のやうなもの許りだと思つてゐた。わしは今日から人間にたいする考がかはつた。山のやうな岩のやうな、しつかりした、何ものにも驚かない人を見た。死んでも死なない人、負けても負けない人、誰に向つてもたぢろがない人を見た。私が切りつけやうとしても、平然と私を見おろした。私は威壓されてしまつた。

千日尼。そのくせ實におやさしい方ですわね。

阿佛房。あれでこそ男と云ふものだ。わしは誰がなんと云つても、あの方の味方をする。

千日尼。私もあの方のためならどんな苦勞でもします。あの方は私達を信じ切つて下さいました。

阿佛房。わしも今日から生きる力が出來て來た。どんなことが起つても恐ろしくなくなつた。

千日尼。あの方のことを思へばね。どんな苦勞でも、苦勞とは云へませんわね。もう日がくれて來ました。お燈明をおあげするのを忘れてゐました。

（お燈明をつける）

二人。南無阿彌陀佛。

阿佛房。あゝ、なんだか南無阿彌陀佛と云ふのが變になつて來た。

（日蓮登場）

日蓮。さつきはどうもありがたう御坐いました。ふいに來たくなつて上りました。

阿佛房。どうぞこちらに。

日蓮。足がよごれてゐますから。

阿佛房。お湯をとつておあげ。

千日尼。はい。

日蓮。それにはおよびません。

阿佛房。まあ、おあがり下さい。

日蓮。ありがたう。

（千日尼、足を洗はふとする）

日蓮。恐れ入ります。

千日尼。どうぞ御遠慮なく、私に洗はして戴きます。

日蓮。それでは失禮します。

（千日尼が日蓮の足をあらふ）

阿佛房。今も上人樣のおうはさしてゐました。

日蓮。私も、あなた方のことが思はれて仕方がなかつたのです。こち

らに來て何日も人と話したこともなかつたのですから。なほ、うれしい氣がしました。それで御迷惑かと思ひましたが。

阿佛房。そんなことはありません。

日蓮。(千日尼に)どうもありがたう御座いました。

千日尼。どういたしまして。

日蓮。(上つて、第一に佛壇の前にゆき)南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、(少し讀經する。それから二人の前に戻つて來)日蓮もお二人にあつて、すつかり生きかへつた氣がしました。これも法華經のおかげと思ひます。しかしあなた方はあまり私とおつきあいになると御迷惑になりはしませんか。

阿佛房。そんなことは御安心下さい。御上人こそ御用心なさらないといけません。

日蓮。ありがたう。しかし私は私を守護して下さる方がありますから安心です。勿論用心はしますが。私の弟子達も、皆隨分ひどい目にあつてゐます。日朗なぞと云ふものは今も鎌倉の土牢に入れられております。その他殺されたもの、傷つけられたものも澤山ゐます。しかし皆、法華經のためにそんな目にあつたことをありがたく思つてゐます。私なぞも隨分いろ／＼の目にあいましたが、之を佛法のため、法華經のためと思へば、どんな難もありがたい氣がします。あなたがたも、もし私の弟子になるおつもりだと、之からどんな目にお逢ひになるかわかりません。

阿佛房。そんなことは私達はなんとも思つておりません。武士が君のために死を輕じるやうに、それ以上に私達は本當に國をうれい、佛法の精神をつたへやうとなさるあなたのためにつくしたく思つております。

日蓮。それなら今後、念佛はおとなへなさるた。

(阿佛房千日尼と顔を見合せ少し當惑する)

日蓮。それならあなたは地獄におちたいのですか。、、、を地獄からお救ひになりたくはないのですか。法華經の文句をお信じにならないのですか。

阿佛房。もう念佛は申しません。

日蓮。南無妙法蓮華經とおつしやれば、それこそ全世界の佛性が目ざめて、内と外からあなた方をお救ひするでせう。私が龍の口で切られかけた時、何處からともなく、南無妙法蓮華經の聲が聞へ出しました。すると忽ち、何十、何百の人が南無妙法蓮華經をとなへ出しました。すると一天かきくもつて、大風がふき、江之島の方から光るものがとんで來て、私を切らうとした刀をこな／＼に裂きました。南無妙法蓮華經の聲のする度、理性が生き、妙法が生き、日蓮

お出でます。

阿佛房。それなら私達も之から南無妙法蓮華經とおとなへすることにしやうね。

千日尼。はい。

日蓮。それでこそあなた方は私の弟子。百年後にはこの日蓮があなた方を極樂に御案內しませう。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

(二人とう〳〵聲を和する)

日蓮。之はこの全世界にゐる佛性をよび出して、自分の心の內の佛性をまたよび出してもらうのです。そして世界中が一つの佛性になり。其處でこの世がさながら佛國になるのです。その時、この世の禍ひはなくなり、內亂も外國からせめられることもなくなり、人人は榮えてゆくのです。我々はたゞ念佛をとなへて他のものにすがる許りでは世の中はよくはなりません。念佛をとなへるものは何千何萬何十萬とゐますが、この日本はそれで災がなくなりましたか。皆が力を一つにして、世界中の萬物の內にある佛性を目ざめさせ、その力で人々の心の佛性を目ざまさせ、そして皆が力を一つにして、佛國をたてなければならないのです。私達は迫害されゝばされる程、この佛性を信じてゆくことで、益々世界中の佛性をよびさますことが出來るのです。樂しく、人々がよくなる時はまだ來ないのです。本當の佛國が生れるまで、我々は苦しむことを恐れずにたゞますます日本國中の萬物の內の佛性をよびさまさなければならないのです、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。　(幕)

(二人も段々大聲に和してゆく)

第二幕

第一場

(幕の前、印性房と唯阿彌陀佛が話してゐる)

唯阿彌陀佛。阿佛房が本當に寢返りしたのか。

印性房。寢返りした。

唯阿彌陀佛。それは容易ならんことだ。どうにかしなければならない。すてゝおくわけにはゆかない。

印性房。日蓮と云ふ奴は魔法つかいのやうな奴だ。ほつたらかしておいたら何をするか知れない。俺達の檀家は一人のこらずとられてしまうかも知れない。何しろ大山師だ。口がうまく、またへんに人の心をうごかすことを知つてゐる。本も隨分よんでゐるらしい。何しろ日本中を法華宗許りにして、他の宗派は日本國から逐ひ出さうと云ふ奴だから、ほつたらかしておいたら、どんなことをするかわからない。それにこゝらの奴は皆馬鹿だから、經にかうかいてある。お釋迦さんがかうおつしやつたと云へばそれ迄だ。このまゝほつた

らかしておいたらどんなことになるかわからない。阿佛房が必ず殺すと云つてゐたので安心してゐたのが手ぬかりだ。

唯阿彌陀佛。それは君の云ふ通りだ。

印性房。俺は始めつから阿佛房を信用しなかつた。あいつは馬鹿正直だから、日蓮にあつたら、うまくまるめられると思つてゐた。それで實は日蓮の奴を毒殺してやらうと弟子達と相談してやつて見たのだが、奴、不思議に死なかつた。毒はたしかに食つたにちがいないのだが。

唯阿彌陀佛。不思議な奴だね。

印性房。きみのわるい奴さ。それだけ油斷は出來ない。

唯阿彌陀佛。本間殿にでも相談したらどうだ。

印性房。一寸こないだ逢つた時、當つて見たが、あいつは大事なあづかりもので、もしものことがあつて、おちどになると困ると云つてゐた。俺達のたよりになる味方ぢやない。

唯阿彌陀佛。それぢやどうしたらいゝかね。

印性房。日蓮が目の敵にしてゐるのは俺達許りぢやない。持齋の奴等もいつも日蓮にはこつぴどくやられてゐる。持齋の奴も日蓮を殺すのには贊成にちがいない。一つ持齋の道房にでも逢つて、相談して見やう。

唯阿彌陀佛。それはいゝことに氣がついた。奴等だつて日蓮がなし

をきかせば、飯の食へない連中だからね。その點さへぬかりなく合點がゆくやうに云つたら、きつとムキになつて味方をするにちがいない。

印性房。君は生喩房を知らないかね。

唯阿彌陀佛。一寸知つてゐる。

印性房。それなら君は生喩房の處へ行つてもらはう。僕は道房の處へゆくことにする。

唯阿彌陀佛。それなら之から一寸行つて來やう。

印性房。出ぬからないやうにしろよ。

唯阿彌陀佛。承知だ。君の方もうまくやれ。

印性房。合點だ。

（兩人退場幕とれる。又一つ幕あり、兩人兩方から出てくる）

印性房。君の方はうまくいつたか。

唯阿彌陀佛。うまくいつた。あいつもかねぐ日蓮をやつけたがつてゐたと云つてゐた。君の方はどうだつた。

印性房。僕の方も上首尾だ。すつかり道房は乘氣になつてゐた。日蓮には恨みがあるので、どうかしたいと思つてゐたと云つてゐた。

そして明日二人で逢つて相談

日蓮の奴をうんといぢめてやらなければね。今日は之から一つ佛の處へ行つて前祝ひでもやらう。

唯阿彌陀佛。それはよからう。

（兩人つれだつて退場。幕あく）

（四人密談してゐる）

印性房。君達の方は手ぬかりはないだらうね。

淡道房。大丈夫だ。

印性房。何しろ相手が相手だからね。

淡道房。大丈夫だね。

生喩房。それは僕達の方は大丈夫だ。君達の方は勿論大丈夫だらうね。

唯阿彌陀佛。勿論大丈夫だ。

印性房。それなら二三百人はいつでも集るわけだね。

生喩房。さうだ僕の方はすぐにでもあつまる。

印性房。僕の方だつてすぐあつまる。

唯阿彌陀佛。いくら日蓮だつて、鬼神ぢやない。二三百人も集れば、やつつけるのは朝飯前だ。

生喩房。さうとも、もうあいつをやつけたやうなものだ。

印性房。だが油斷してはいけない。あいつは何しろ鎌倉で幕府を相手にして一人でさわぎまわつた男だからね。

淡道房。だが佐渡へ來ちやさうもゆくまい。

印性房。僕達さへしつかりしてゐれば、大丈夫だ。だが小敵と見てあなどらずだ。

生喩房。それは大丈夫手ぬかりはないさ。

印性房。先づ始め誰か問答をして、日蓮が無禮なことを云つたら、私が合圖するから、その時、皆、怒つたふりしてなぐりつけるのだ。そしてそのさい、あたり處がわるくつて死んだやうにする。からきめたことを信用出來る人にだけ話してもらはう。

生喩房。承知した。

印性房。力の強い奴を一人味方にしておかないといけない。

生喩房。それには丁度いゝ奴がゐる。素人角力の大關で、亂暴ものがゐる。

印性房。秘密を守れる男だらうね。

生喩房。大丈夫。僕の云ふことなら、なんでもきく。

印性房。そいつに胸おちを力一ぱいに突いてもらうのだね。

生喩房。それがいゝだらう。

印性房。誰も反對はないだらうね。

三人。ない。

印性房。それなら手はづをさう云ふことにしやう。

三人。承知した。

印性房。いくら日蓮でも今度こそはまいるだらう。他宗のものを全部地獄におとして得意になつてゐる日蓮を一つ眞さかさまに地獄におとしてやることを考へると愉快だ。

三人。本當に愉快だ。

印性房。一人をのろへば穴二つと云ふが、日蓮こそ最も大きい地獄への穴を掘るものだ。日蓮を必ず僕達の手でやつけやう。

三人。やつけやう。(顔を見あはせすごく笑ふ)

(幕)

第二場

(日蓮、第一幕第一場と同じく何かかいてゐる。)

(阿佛房登場。暫く見てゐる)

阿佛房。上人様。

日蓮。おゝ、阿佛房さんか。

阿佛房。お仕事のお邪魔してすみませんが、容易ならぬことが起りました。

日蓮。なにが起つたのだ。

阿佛房。念佛の人々や、禅宗の人々が集つて、あなたを殺さうとたくらんでおります。

日蓮。そんなことか。そんなことなら覺悟してゐる。

阿佛房。處が今度は相手が一人や二人ではないのです。何十何百と云ふ人があつまつて、あなたを殺さうとしてゐます。

日蓮。安心するがいゝ。日蓮は殺されるやうな男ではない。又よし殺されても、法華經の爲に殺されるのだ。こんなありがたいことはない。

阿佛房。それでも今あなたになくなられましたら。

日蓮。弱いことは云ふものぢやない。しかしそれならどうすればいゝのだ、いゝ考へでもあるのですか。

阿佛房。別にありません。

日蓮。それならほつたらかしておけばよろしい。

阿佛房。それでも今おかきになつてゐるものが、かき上らない内にお殺されにでもなつたら。

日蓮。大丈夫です。之をかき上げるまでは日蓮は死にません。もしこれをかき上げない内に日蓮が死ぬなら、日本は神々から愛想をつかされた國でせう。日本が亡びることをのぞまない限りあらゆる神々はこの日蓮を守護されてゐます。心配なことはありません。

阿佛房。私もさうは思ひますが、今度はどうも少しあぶないと思ひま

す。

日蓮。阿佛房さん。あぶなければどうしろと云ふのです。この日蓮が逃げる方がいゝと云ふのですか。それとも他の人を怒らせないやうにおとなしくしてゐろとでも云ふのですか。私の弟子たちでも時々時、私にもう少しおだやかになれと云ふものがあります。しかしこの日蓮が骨ぬきになつたら、誰が日本の柱になります。誰が日本の魂になります。この日蓮のことを心配なさるのは、太陽や月を見て、おちることを心配するやうなものです。

阿佛房。それでも。

日蓮。阿佛房さん！（きつく）あなたはこの日蓮をいくぢなしにしたいのですか。

阿佛房。いや、決してそんなことはありません。

日蓮。あなたの親切はわかつてゐます。うれしく思はないことはありません。しかしこの日蓮のことを心配するのは、少しお門ちがいです。少し仕事をしますから、あとで又來て下さい。ゆつくり他のお話でもしませう。

阿佛房。それでは失禮します。

日蓮。もう三四枚かいたら、暇になりますから、どうか又來て下さい。

阿佛房。その時、あついお茶でも入れて持つて來ませう。

日蓮。ありがたう。尼さんにどうぞよろしく。

阿佛房。ありがたう。それではのち程。

（阿佛房退場しやうとし、日蓮の方を見日蓮が一心に何かかいてゐるのを見、おがみ、退場。日蓮一寸筆をおき）

日蓮。（宇宙によびかけるやうに）南無妙法蓮華經　南無妙法蓮華經。

（又かき出す。最蓮房登場）

最蓮房。日蓮上人。

日蓮。どなた。

最蓮房。私は最蓮房と云ふつまらない坊主ですが、少しおきゝしたいことがあつて參りました。

日蓮。さうですか、どうかお上り下さい。

最蓮房。それでは失禮いたします。隨分いやな天氣がつゞき、さぞお困りでせう。

日蓮。別に、

最蓮房。隨分嚴しい寒さでさぞお困りでせう。

日蓮。本當に八寒地獄にでもゐるやうな寒さですな。

最蓮房。こんな吹きざらしの處によく辛抱が出來ますね。

日蓮。仕方がないからですよ。夜はつたつてあたゝかにはなりません

からね。

最蓮房。御尤もです。時に日蓮上人、へんなことを願ひますが、あなたは法華經以外を信じるものは皆地獄におちるとおつしやつてゐらつしやるときゝましたが、本當ですか。

日蓮。本當です。

最蓮房。地獄と云ふものは本當にあるものですかね。

日蓮。それは考へやう一つでせう。誰も見て來たものはないのですからね。しかし法華經以外で人間は救はれず、又統一はとれないと思ひますね。國に二王なく天に二つの日月がない。お經にも王位にあたる經と、臣下にあたる經とがあります。

最蓮房。法華經がその王位にあたる經文であることは私も知つてゐます。

日蓮。それならば、法華經をすてゝ、他の經を法華經の上におくものは鶴の首を切つて蠶の首をつけるやうなものです。この位におろかなまちがつたことはありません。あなたはさうは思ひませんか。あなたは又今の日本をどう思ひます。天變地異、惡病の流行、饑饉がついで起り、日蝕や彗星の出現等をどう考へますか。又今の人心の離れを何と考へますか。内亂もその內起るでせう。又大蒙古も近い內に日本に攻め込んでくるでせう。處が日本の人々は精神的に統一がとれず、力を一つにすることが出來ず、四分五裂して滅亡する處を知りません。この世ながらの地獄が出現します。あなたにはそれをなくすだけの力がありますか。又今の日本でこの日蓮を他にして、その力を持つてゐるものがありますか。佛徒はよろしく、法華經の敎へのもとに統一される必要があります。あなたはそれとも念佛や持齋にその力があると思ひますか。彼等は小ぽけな世界にすんでちつぽけなこと許り考へ、そして一人でも信者をふやすことを考へ、信者におもねること許り考へてゐます。信者を導く力のあるものはありますか。今我等は呑氣にしてゐられる時ではありません。それなのに彼等は利害得失許りを頭におき、そして小ぽけなこと許りにくよくよしてゐます。彼等にこの日本を救ふ力があると思ひますか。我等がしつかりしなければ誰がしつかりします。人々は恐ろしいことがくるまで目がさめません。さめた時はもう遲いのです。この國民の目をさまさせ、そして一つの魂を與へ、そして盛大な佛國をつくり上げるのには私達が本氣になつて立ち上るより仕方がないのです。あなたはさうは思ひませんか。呑氣にしてゐて、國民が地獄のなかにおち、血みどろになつてあがくのを見ることをあなたは望みますか。

最蓮房。それは勿論のぞみません。

日蓮。さうですか。それならあなたはこの日蓮の仲間です。(最蓮房を見)それともあなたはこの日蓮を敵として、日本を亡ぼすものゝ手さきにならうといふのですか。正法の敵、法華經の敵にならうと云ふのですか。

最蓮房。そんなことはありません。今日からどうか、あなたのお弟子にして下さい。それにつけても、上人樣、あなたは大勢のものにねらはれてゐます。用心なさらないといけません。

日蓮。之より用心のしやうがありますか。法華經に身を任せてゐるより、日蓮は死んでもなほ生るのです。殺されゝば殺されるだけなほ法華經のために生るでせう。生れば生るでなほ聲高に法華經のために戰うでせう。私には恐ろしいことはないのです。之より安心なことがありますか。

最蓮房。あなたは本當に殺されることが怖くないのですか。

日蓮。あなたは怖いのですか。本當に法華經をよみなほし、その精神のもとに生き、聲高に南無妙法蓮華經と題目をとなへて御らんなさい。死は死ではなくなります。より高いもの、より遙かなものにゆく、天かける思ひがするでせう。

最蓮房。私は始めて、本當に宗教家らしい方にお逢ひしました。私はあなたのやうな方に本當にお逢ひしたかつたのです。今になつて私がこの佐渡に流されて來たことは、本當にありがたいことだと思ひます。今の世にあなたのやうな方がゐられるとは思ひませんでした。

日蓮。日蓮も、あなたにお逢ひ出來たことをうれしく思ひますぞ。

(阿佛房、千日尼とお茶をもつて登場)

日蓮。いゝ處にいらつした。

阿佛房。おや、最蓮房さんもおいでゞすか。珍らしい處でお目にかゝりますね。

日蓮。阿佛房さん、よろこんで下さい。最蓮房さんも今日から私達の仲間なのだ。

阿佛房。本當ですか、最蓮房さん。

最蓮房。えゝ。もうすつかり上人樣のお弟子になつてしまいました。こんな本當の宗教家らしい方に始めてお逢ひしました。

阿佛房。本當ですね。最蓮房さん。こんな方を敵にするものは馬鹿ですね。

最蓮房。本當です。之から私達は上人樣の手足となつて生てゐる限り働きたいと思ひます。

日蓮。千日尼さん、それでは冷へない内にお茶でもいたゞかうかね。

千日尼。はい、はい。すつかりお茶のことは忘れておりました。

阿佛房。最蓮房さん。本當にありがたう。私はうれしい

最蓮房。私もこんなうれしいことはありません。

日蓮。北海の孤島で、この雪のなかで、君達にあへるとは思はなかつた。鎌倉の人達に見せてやりたい。（お茶をのむ）何處にも人はゐるものです。德孤ならず必ず隣ありと孔子が云はれたのは本當ですね。私はこの島では一人ぽつちを覺悟してゐたのです。君達のやうな人がゐるとは思はなかつた。何處にどんな人がゐて、何處から出て來て私達の仕事をたすけるかわからない。日本はまだ亡びないと云ふ氣がします。こんな愉快なことはありません。（小便しにゆく）

阿佛房。最蓮房さん。どうです。

最蓮房。阿佛房さん。本當に私はうれしい

阿佛房。人間にこんな喜びが與へられてゐるとはこの齡まで氣がつきませんでした。

千日尼。本當にありがたい方ですね。

（日蓮登場）

日蓮。犬が吠へてゐる。誰か來たのではないか。

阿佛房。誰か様子でも見に來たのでせう。

日蓮。物好きた男もあるものですね。この日蓮を殺すことは出來ても眞理を殺すことは出來ません。南無妙法蓮華經の響は今に津々浦々にひびきわたるでせう。こんな庭でこうしてゐるよろこびは彼等にはわからないよろこびです。このよろこびは我等をいろ〱の菩薩が守護して下され、一緒によろこんで下さるからです。（犬近くで吠える、立つて外に向つて云ふ）殺すことの出來ないものを殺さうとするもの、負けざるものを負かさうとする愚かものよ。法華經の行者を負かさうとする愚かものよ、よく聞け。汝等は日本を滅亡さしたいのか。内亂を起したいのか。外國に攻めほろぼされたいのか。この日蓮か日本の柱だと云ふことを知らないのか、柱をたほすのは日本を倒すことだと云ふことを知らないのか。愚かものよ。逃げだしたか。あはゝゝゝ。

（幕）

第三場

（茶屋の一室、印性房、唯阿彌陀佛と酒をのみながら話してゐる）

印性房。あの變りもの〻最蓮房まで日蓮にかぶれたよ。

唯阿彌陀佛。さうか。

（女中酒をもつてくる）

印性房。其處へおいていつてくれ。呼ぶまでは來なくつていゝ。

女中。はい。（退場）

印性房。日蓮と云ふ奴は魔法つかいのやうな奴だら それにして

たことには本間殿は大事なあづかりもの丶日蓮を殺されては迷惑、殺さないやうにしてくれと云ふ話だ。

唯阿彌陀佛。それで君は殺さないつもりか。

印性房。どうかして俺達に罪がか丶らないやうに殺すより仕方がない。殺してしまへば、何とか理由をつけて、病死したことにすればい丶だらう。あいつを生かしておいては、益々俺達は食へなくなる。又うまく殺せば鎌倉から御褒美をもらへると云ふわけだ。本間殿は殺さないでくれとは云つてゐるが、自分に責任のか丶るのを恐れてゐるだけで、責任さへか丶らなければ、日蓮一人が殺されることなんか何とも思つてゐまい。だから本間殿の手で殺せないときまればます／＼僕達の手でやつてしまうより仕方がない。それに皆ものり氣になつてゐるのだ。やらないわけにはゆかない。しかしそれだけ手ぬかりのないやうに、怒つたまぎれでやつたやうにしないといけない。そして本間殿には、だまつて見てゐるのが得策だと思はせるやうにしないといけない。二三百もあつまれば、そしてそれ等の信者たち何百何千と云ふ人が、日蓮を殺したがつてゐることを知ればその多數の意志をいくら本間殿でも無視することは出來まい。たゞ自然に思はずやつてしまつたと云ふことにしないと面白くない。

唯阿彌陀佛。持齋の奴等も隨分のり氣だ。必ず今度はうまくゆくだらうと云つてゐた。

印性房。ゆくだらうぢや心細い。どうしても今度やつてしまはなければ。今度やらないと勢ひがぬけてしまう。

唯阿彌陀佛。持齋の仲間にもよく云つておく必要があるね。

印性房。それはよく云つておく必要がある。

唯阿彌陀佛。本當に日蓮と云ふ奴は、恐ろしい奴だね。

印性房。一種の氣ちがいだね。底ぬけの野心家、底ぬけの自ぼれ家だ。自分を日本の柱、日本の魂、法華經の行者、なぞとぬかして馬鹿ものをこけおどしにしてゐる。

唯阿彌陀佛。そんなことを云つて感心する奴もゐるのだね。

印性房。世の中は廣いし、馬鹿は多いからね。二三人弟子が出來ると、もう天下でもとつた氣になつてゐる。それに龍の口で切られなかつたのも、偶然おゆるしが出たゞけなのに、光るものが來たの、刀が折れたのと、勝手なことを云つてゐる。

唯阿彌陀佛。明星が庭の梅の木におこつて來て提灯のやうにぶらさがつたと云つて得意になつてゐるさうぢやないか。

印性房。あはゝゝ。氣ちがいだね。傳染しない氣ちがいなら、笑つてすませるのだがね。

唯阿彌陀佛。何しろ厄介な奴が出て來たものだ。この寒さに凍え死にでもすればいゝのに。

印性房。さむさなんか感じないのだね。野心で一杯なのでね。

唯阿彌陀佛。それで腹もへらないのだらう。

印性房。あはゝゝ。だが油斷は出來ないぞ。

唯阿彌陀佛。勿論だ。

印性房。誰か來たぞ。もう一杯のんだらどうだ。

唯佛阿彌陀。もう澤山だよ。

印性房。まだちつとものまないぢやないか。

（二人、あはてゝ二三杯のむ。女中登場）

女中。お客さまがいらつしやいました。

印性房。誰だ。

女中。最蓮房さんとおつしやる方です。

印性房。最蓮房？

唯阿彌陀佛。どうしやう。

印性房。まあ逢つて見やう。お通しして下さい。

女中。はい。（退場）

唯阿彌陀佛。何しに來たのかね。

印性房。樣子を見に來たのだらう。油斷してはいけないぞ。

唯阿彌陀佛。合點だ。

（最蓮房登場）

印性房。僕達がこゝにゐることがよくわかりましたね。

最蓮房。さつき君達がこゝに入るのをちらつと見たのさ。それから家へ歸つたが、おちつかないので、やつて來たのさ。一杯のみたくなつたのでね。實に寒いね。しかし來て御迷惑なら失禮するよ。

印性房。そんなことはない。それより僕は君に逢ひたかつた。

最蓮房。さうか。僕も君に逢ひたかつた。

印性房。君は日蓮の弟子になつたと云ふのは本當か。

最蓮房。本當だよ。あんな偉い奴に始めて逢つた。

印性房。僕達の前で日蓮のことをほめるのはよしてもらいたいね。

最蓮房。君達はまだ日蓮に逢つたことはないのだらう。一度あつて見るがいゝ。

印性房。あんな奴に逢ひたかない。

最蓮房。あふのがこわいのだらう。

印性房。そんなことはない。

最蓮房。君は日本が亡びることを恐れないのか。

印性房。君は氣でも狂つたのではないかね。

最蓮房。今のまゝでゆけば日本はたしかに亡びる。僕達は心を入れか

へ、決心しなほす必要がある。

印性房。さうして日蓮の弟子にでもなれと云ふのか。

最蓮房。さうだよ。

印性房。誰がなるものか。君じやあるまいし。

最蓮房。日蓮はたしかに日本の杜だ。

印性房。最道房さん、とうとう最蓮房は氣がちがつた。

最蓮房。日本は亡びないと云ふのか。

印性房。日本は神の國だ、亡びるわけはない。

最蓮房。日本の人は神や佛にはなれすぎてゐる。眞理に不忠實すぎる。本當の釋迦の精神からはなれすぎてゐる。佛敵になつて來てゐる。神佛の心に叶はなくなつてゐる。だから日本には恐ろしいことがついで起るのだ。皆、心を一つにして無上道に入るやうに努力しなければいけない。

印性房。君は僕に說教しに來たのかい。

最蓮房。君とは古い友達だから、君を地獄におとすのがいやでやつて來たのだ。

印性房。餘計なお世話だ。南無阿彌陀佛のかはりに南無妙法蓮華經と云ふと極樂へゆけるのか。

最蓮房。あたりまいさ。

印性房。君はそんな野望とは思はなかつた。

最蓮房。一度日蓮に逢つて見るがいゝ。

印性房。誰があふものか。

最蓮房。君は日蓮を殺す氣か。

印性房。勿論！

最蓮房。そんな馬鹿なことはよせ。

印性房。誰がよすものか。

最蓮房。日蓮は聖人だぞ。

印性房。あいつは野心家で山師だ。

最蓮房。あふまでは僕もさう思つてゐた。

印性房。あいつは氣ちがいだ。それが君にうつゝたのだ。僕は氣ちがいの仲間入りは御免かうむるよ。

最蓮房。あの人は眞理に忠實なだけだ、佛法に忠實なだけだ。

印性房。法然上人樣を地獄におちてゐると云つたのは誰だ。

最蓮房。法華經を信じないのか。君は。

印性房。僕達は彌陀佛さへおとなへすればいゝのだ。

最蓮房。それで日本は亡びないと云ふのか。

印性房。亡びはしない。

最蓮房。今の勢ひでゆけば、國内にどんな恐ろしいことが起るかわか

らない、早く皆が心がけをなほし、もろ〳〵の菩薩に守護していただけるやうな人間にならないといけない。

印性房。念佛云つても菩薩に愛されないと云ふのか。

最蓮房。この頃、恐ろしいことがつゞいて起るのはどうしたわけだ。

印性房。南無妙法蓮華經と云ふと、天災も饑饉も來ないと云ふのか。

最蓮房。皆が佛心をもち、皆が總がゝりで宇宙の內の佛性をよびさまさないといけないのだ。

印性房。それなら他の人の惡口を云つたり呪つたりするのは佛心なのか。

最蓮房。まちがつた考へや行ひはなほさなければならない。

印性房。なんと云つたつて俺は日蓮を殺す。

最蓮房。君に日蓮が殺されるか。日蓮上人は山のやうな方だぞ。あの目でにらみつけられ、あの聲でどなりつけられたら、君なんか腰をぬかすだらう。大へんお邪魔した、さよーなら。

印性房。待て、

最蓮房。何か用か。

印性房。必ず日蓮は殺して見せるぞ。

最蓮房。（ふり向かずに）あはゝゝゝ。（退場）幕

第三幕

第一場

（幕の前）

（印性房と滋道房あふ）

印性房。いよ〳〵今日になりましたね。

滋道房。今日はうまくやりたいものです。

印性房。私達の方は手ぬかりがありませんが、君達の方も安心でせうね。

滋道房。大丈夫です。

印性房。それを伺つて安心しました。

（唯阿彌陀佛登場）

唯阿彌陀佛。早かつたな。隨分待つたか。

印性房。今來た所だ。

唯阿彌陀佛。いよ〳〵今日になつた。昨晩は興奮して眠れなかつた。

滋道房。私もねむれませんでした。

（生喩房登場）

生喩房。皆おそろいですか。おくれてすみませんでした。

ませう。しかしその前に役をきめておきませう。何しろ澤山の人ですから、手ぬかりがあつては困りますからね。問答の係は滋道房さんと唯阿彌陀佛さんにお願ひします。問答したい人が多いでせうから、順をきめて、そしてあまりまぬけなことを云はさないやうにしないといけません。兎角出しやばりたがる人がゐるものですから、さう云ふ人が出ない内に問答する人をきめて、つゞけさまに問答さゝないといけません。

滋道房。承知しました。

印性房。それから私が手をあげた時、一時に日蓮へとびかゝる仲間の指揮を生喩房さんにおたのみします。

生喩房。承知しました。

印性房。私がやつつけろと云つて手をあげますから、その機會に躊躇せずにどつとおしかけてほしいのです。逃がさないやうにして下さい。力の強い人と云ふ人はまちがいなく來るでせうね。

生喩房。大丈夫來ます。昨日も一寸よつて見ましたが、大した元氣で、宗門のために難かしい大事な役目をたのまれたことを名譽にしてゐました。

印性房。それを聞いて安心しました。あの人が本氣になつて胸おちを力一杯ついたらたすかりやうはありますまい。

生喩房。昨日もつき[illegible]してゐました。

印性房。それではそろ／＼皆の集つてゐる處にゆきませう。

（四人つれだつてゆく。幕あく。大勢集つてがや／＼やつてゐる）

力士。俺はこの腕で日蓮の胸をこう云ふ風に突いてやるのだ。あはゝゝゝ。

。君につかれたら、誰だつてすぐ參つてしまうね。

力士。問答なんか面倒だ。すぐやつてしまうがいゝのだ。

B。しかし怒つたまぎれについやつてしまつたやうにしないと、あとがうるさいのださうだ。

力士。やつてしまへば、あとはいゝやうにしてくれるよ。何とか理屈

Aにあはないもつともらしい理由を云つておけばいゝのだ。

B。それはさうだが、誰がやつたかわからないやうにやる方がいゝのだ。

力士。一つその日蓮と云ふ男の腕をはやく一つぐんとついて見たいものだ。

C。印性房さん達はどうしたのだ。早くおしよせて、日蓮をやつけてやるがいゝのだ。

D。日蓮てどんな奴かね。

C。乞食坊主だと云ふ話だね。

D。そんな奴をやつけるのにこんなに大勢かゝらないとだめなのかね。

C。本間殿をおとして、日蓮を殺しても苦情が云へないやうにしやうと云ふ腹らしい。

E。なに、日蓮と云ふ奴は一通りの惡者ぢやないさうだ。日本をのつとらうと云ふくわだてをしてゐるさうだからね。

D。氣ちがいだね。

E。さうだ恐ろしい氣ちがいだ。蒙古軍を手びきして日本をやつけたがつてゐるさうだ。

F。野心家だね。

G。ともかく生かしてはおけない奴だ。

F。ともかく珍らしい奴が出て來たものさ。

（印性房達四人登場。四人あつちこつちにあいさつする）

印性房。皆さん、よくお集り下さつてありがたう御座います。之も皆樣が、御自身の宗門を愛し、佛を愛されるからと思ひます。又皆さんは日本を愛されるからと思ひます。實際日蓮と云ふ男は我々にとつて不倶戴天の敵であります。彼は幕府へ建白状をさし出し、日蓮宗以外のものはすべて禁じてしまへ。日本に南無阿彌陀佛の言葉を上げるものを一人のこらずふんぢばつてしまへ、又日蓮宗以外ののは殘らず地獄におちると云つて人々を迷はしてゐる。實に憎むべき男です。彼を生かしておくのは宗門の恥です。日蓮こそ眞さきに地獄におちる男であることを天下に知らすべきです。彼はあくことを知らない野心家です。我等の宗門を根こそぎやつけやうと惡だくみしてゐる男です。そのくせ口がうまく、愚民をまどはす恐るべき男です。彼に云はすと法然上人も、弘法大師も、地獄におちて苦しんでゐると云ふのです。皆さん、こんな無體な男を生かしておいていゝと思ひますか。殺す方がいゝとは思ひませんか。

五六の男。殺せ、殺せ！

印性房。殺すことに反對な方はゐますか。

五六の男。そんなものはゐるものか。

印性房。よろしい。しかし日蓮と云ふ男は稀代の惡僧です。言葉がうまく、又惡智慧と、惡學問にくわしく、議論にかけては珍らしい惡才をもつてゐます。ですから問答をすると、時に意表外のことを云ひ出して、我等をおどろかし、唖然とさせ、煙にまくかも知れません。だがそれにだまされてはいけません。そして私が手をあげたら、何人でもかまいませんから、わつといつて一時に日蓮にとびかかつて下さい。躊躇することを仕損じます。一度仕損じるととり

て恐れずと云ふことがありますが、手ぬかりのないやう。各々方の宗門のため、不倶戴天の敵をやつけなければいけません。それでは之から出かけることにします。それから問答したい方は、滋道房さんか、唯阿彌陀佛さんにさうおつしやつて、そしてお二人の指圖にしたがつて問答して下さい。あまり一度に皆がしやべり出すと、秩序がとれませんから、それから日蓮をなぐる時は私の合圖と同時に生喩房さんの指圖にしたがつてほしく思ひます。くれ〴〵もいゝますが、問答が主でなく、やつける方が主ですら、そのつもりでゐて下さい。それでは之から出かけることにします。どうぞ宗門のためにお働き下さい。

唯阿彌陀佛。それなら皆さん、日蓮をやつけにゆきませう。

生喩房。さうです。私達は日蓮をやつけなければなりません。稀代の惡僧を、我等の宗門の敵を。

五六人。われ等の敵を、われ等の敵を。

數名。やつけろ。やつけろ。やつけろ。

（ぞろ〳〵出かける）

第二場

（第一幕第一場と同じ。日蓮、何かかいてゐる。二三人様子を見に來る。歸つてゆく。大勢の人が出てくる）

人々。（勝手にわめく、意味はよく通じない程がや〳〵わめく）日蓮！ 山師！ 惡僧！ 問答問答！ やつけろ！ 殺してしまへ！ 早く出てこい。逃げると承知しないぞ。賣僧。佛敵！ 法敵！ 馬鹿野郎！ 氣ちがい！ 身の程知らず！

（段々日蓮の小屋に近づいてくる。本間六郎左衛門、家來をつれて登場）

本間。靜かに、靜かに、よく聞け、日蓮に手をさへたものは用捨はしないぞ。印性房！ 皆を靜まらせ！ 皆に日蓮に手をさへてはいけないことをよく云つて聞かせろ。

印性房。はい。靜かに！ 靜かに！

人々。日蓮をやつけろ！ 佛敵をやつけろ！ 日蓮を地獄におとせ！ やつけろ！ やつけろ！ 日蓮！ 日蓮！ 問答々々、やつけろ！ 馬鹿！ 畜生！ 怖いのか、早く出て來い。

本間。靜かにしろ！ 君達は何をしてゐるのだ。

人々。日蓮！ 日蓮！ 佛敵、賣僧、氣ちがひ！ 出てこい、やつけろ！ やつけろ！（ます〳〵がや〳〵する）

（本間の家來たちそれをさへぎりながら）

家來達。靜かに、靜かに。

──(佐渡の日蓮)──

日蓮。(だが群衆はますますさわぐ。日蓮躍り出でて、大聲で云ふ)君達は法門の爲に來られたのではないのか、たゞこの日蓮の惡口を云ひに來られたのか。法門のためならば、謹んでお相手をする。惡口を云ひに來られたのなら、勝手に云ひたいだけ云つて下さい。私はお相手をする氣にはなれないから。

人々。なんだつて？ 馬鹿！ 承知はしないぞ。

本間。日蓮殿の云ふことは本當だ。うるさい奴は引ずり出せ！

(なほわめくもの五六人を突き出した)

本間。靜かに問答したいものだけ出て、問答するがいゝ。

(唯阿彌陀佛前へ出て來)

唯阿彌陀佛。日蓮！

日蓮。なんだ。

唯阿彌陀佛。日蓮宗以外の宗派に屬するものはのこらず地獄におちると云ふのは本當か。

日蓮。法華經の王經であることを信じないものは皆地獄におちると、日蓮は云ふのだ。

唯阿彌陀佛。他の經文は皆、地獄へゆく道しるべだと思つてゐるのか。

日蓮。法華經は諸經の王經だと云ふことは經文にちゃんとかいてある。法華經一の卷方便品に云はく、正直に方便をすて、但無上道をとくと、正直に方便をすてるとおつしやつたのは何故か。皆が方便をはきちがへて無上道にゆく道をさへぎり、人々を迷はし、地獄におとし入れるのを釋尊が心配されて、無上道をとかれたのが、法華經なのだ。その法華經をあがめることを知らないものが、どうして人々を極樂に導くことが出來るか。釋尊の御心を知らずに、自分勝手に都合よく見て、無上道なんかどうでもいゝ。などと云ふものは地獄におちずに、何處におちる。法華經は一字も諸佛の本懷、一語も多生の助けなのだ。一言一語も虛妄ではない。此經の禁を用ない者は、諸佛の舌を切つて畜類の舌をつけて聖賢をあざむく人ではないか。その罪は實に恐ろしいものだ。さうは思はないか。

唯阿彌陀佛。なゝなにを。

日蓮。さあ、誰でも云ひたいことがあるものは遠慮なく出て來られい。

某一。それで法然殿も地獄におちられると云ふのか。

日蓮。法然上人は唐の善導大師の生れかはりと云はれる人だ。處がその善導大師、法然上人のお師匠さまとも云はれる淨土宗の偉いお坊さんは六十九才の時門前の柳の木からとびおりて死んだのだ。自分の教へで救はれなかつたのぢや。

某二。弘法大師も地獄におちてゐると云ふのか。弘法大師の神通力をお前は信じないのか。

日蓮。弘法大師が、三鈷をなげたのが、紀州の高野山と、土佐の室戸崎と、京の東寺におちたと云ふことをあなたは本當だと思つてゐるのか。弘法大師は大日經を法華經より上だと言つた。釋尊は法華經を大海に比せられその他の經を川に比較されてゐる。君達釋尊をすてて弘法に從かはふと思ふのか。海よりも川が大きいと云ふのか。又山に比較をとれば法華經は上下十六萬八千由旬ある須彌山にたとへられ、他の經は普通の山にたとへられてゐる。法華經を大日經におとると云ふのは、富士山は須彌山よりも大なりと云ふやうなものだ。

某三。日蓮！　貴様は自分を日本の柱、日本の魂だと云つて他の人間を皆自分より下等なものだと思つてゐるのは本當か。

日蓮。それなら日本の柱は誰だ。(某三何か云はうとするのを睨みつけ)この日本にこの日蓮より他に法華經の精神をそのまゝに實行してゐるものがあるか、法華經の行者の日蓮が日本の柱でなくつてなんだ。

人々。氣ちがい、馬鹿！　法敵！

日蓮。今の日本に恐ろしいことがつゞいて起るのは何のために知つてゐるか、日本の人々が釋尊の御心をないがしろにし、世尊の心にそむき、天照、神明を恐れず、尊敬すべきものを尊敬しないからではないか。諸神、諸佛に愛護されたきものはこの日蓮の弟子になれ。そして川よりも海を大にし、富士山よりも須彌山を大とし、星よりも月を大なりと思ふものは、法華經をよみ、法華經を信じ、南無妙法蓮華經と聲高くお題目をおとなへしろ。

某四。日本が亡びると云つたものは誰だ。

日蓮。神や佛に見はなされた日本は今のまゝだと必ず亡びる。

印性房。國賊！(手をあげる)

人々。國賊々々、國賊！

本間。靜かに、日蓮に手をかけるものがあつたら、この刄にかけるぞ。靜かにしろ。

(本間の家來達刀に手をかける)

日蓮。日本を亡ぼしたくないもの、諸佛諸神に愛されるやうに日本を愛したく思ふものよ。その人々は念佛をやめろ、律、天台を信ぜずに、ひたすら法華經を信じ來れ！

本間。もう問答するものはないか。なければ歸るがいゝ。

人々。今日の處は許してやるが、今に見ろ。たゞはおかないぞ。(段々退場數人のこる)

本間。それでは之で失禮します。

日蓮。御迷惑をおかけしました。

（會釋して本間等退場しやうとする）

日蓮。本間殿！

本間。何んですか。

日蓮。あなたはいつ鎌倉へお出かけになります。

本間。下人どもに田畑をつくらせて、七月にでも鎌倉へ行かうと思つてゐます。

日蓮。それでまにあふのですか。あなたは弓矢とる身ぢやありませんか、武功をたてゝ所領を賜はらうとは思はないのですか。

本間。戰爭でもあれば。

日蓮。今ないと思つてゐるのですか。

本間。それでは失禮します。（退場）

日蓮。あなたは日蓮はでたらめを云つてゐると思つてゐるのですか。あはゝゝ。

（阿佛房、千日尼、最蓮房、何處からか出てくる）

阿佛房。上人樣、お目出たう御座います。

日蓮。氣にして來て下さつたのですか。

阿佛房。いざと云ふ時は一働きしやうと思つておりました。之、この

通り、（刀を見せる）

千日尼。本當によう御座いました。

最蓮房。痛快でしたな。

日蓮。日蓮はこんなことにはなれてゐます。

（殘つてゐた人々何かさゝやきあつてゐたが、おづ〳〵日蓮の前に來、ひざまづき）

二三人の人。上人樣！

日蓮。なんですか。

二三人の人。私達をどうか、あなたのお弟子にして下さい。

日蓮。私の弟子になることは樂ではありませんよ。どんなひどい目にあふかわかりません。

二三人の人。どんな目にあひましても、私達は苦しいとは思ひません。今迄のことを思ふと夢のやうです。お話をきいて本當に目がさめました。私達は諸神の舌を切つて、毛物の舌でしやべつておりました。末おそろしく思ひます。

日蓮。それでは之から身命を惜まず、たゞ無上道を惜しみ、日本國が神や佛に守護される國になるやう、法華經の精神を弘めるために働いて下さい

人々。ありがたう御座います。（平伏する）

（幕）

第四幕

第一場　印性房の室

（印性房一人室にゐて何か考へてゐる。南無妙法蓮華經の聲何處からともなく聞へてくる）

印性房。あの聲をきくと胸がわるくなる。何とかしてあの聲を出させないやうにしたいものだ。（歩きまわつたり、耳をふさいだりする）

（弟子登場）

弟子。唯阿彌陀佛さまがお見へになりました。

印性房。さうか。こゝへお通しゝてくれ。

弟子。はい。（退場）

（唯阿彌陀佛登場）

印性房。いゝ處へ來た。今あの聲をきいて胸をわるくしてゐた處だ。

唯阿彌陀佛。本當にこの頃は何處へ行つてもあの聲が聞へてくる。わざ〳〵僕達に聞かすためにやつてゐるやうな氣がして、腹が立つて仕方がない。僕も今くる途中あの聲をきいて不愉快で仕方がなかつた。

印性房。あの聲をきくと生きてゐるのが、いやになつてしまう。

唯阿彌陀佛。今に佐渡の島中何處へ行つたつてあの聲をきかないわけにはゆかなくなるだらう。

印性房。蚊や蠅よりももつと不愉快だ。夏の蠅より五月蠅い。遠慮えしやくがない。本當に不愉快な禮儀を知らない奴だ。このまゝにしておいたらどんな結果になるか知れない。蒙古の使ひが來たり、鎌倉に騷動があつたりしたので、ます〳〵日蓮の奴は得意になる。そしてこの頃は隨分大事にされ出した。弟子はどん〳〵ふへる。本當にどうにかしなければいけない。

唯阿彌陀佛。僕もさう思ふ、それで今やつて來たのだ。

印性房。何とかいゝ考はないかね。本當にまだやつてやがる。あの聲をきくと本當に不愉快で不愉快で仕方がない。

唯阿彌陀佛。もうかうなつては鎌倉へ訴へるより仕方がないと思ふのだ。それで君に相談に來たのだ。

印性房。それはいゝことに氣がついた。それより他に道はない。あいつを殺すことはわけないが、うつかり殺して、死刑になつたら馬鹿氣てゐる。前だつたら殺しても何んでもなくすんだらうが、今日ちやあぶない。

唯阿彌陀佛。さうとも。本間の奴、この頃はすつかり信用してしまつた。あいつの出まかせがあたつたもので。

印性房。上から命令が下れば本間の奴だつて一言もないからね。

唯阿彌陀佛。さうとも。それで何と訴へたらいゝか相談したいと思つてゐるのだ。

印性房。誰がゆくのだ。

唯阿彌陀佛。僕が行つてもいゝと思つてゐる。それから生喩房と、良觀の弟子の道觀もつれていつた方が、きゝめが多いと思ふのだ。

印性房。それはさうにきまつてゐる。それなら厄介だが行つてもらうかね。留守は僕が引きうけるから。

唯阿彌陀佛。それで何と訴へたらいゝかね。

印性房。山へのぼつて北條の亡びることを祈つてゐると云ふことを暗示することが一番必要だ。それから今のまゝでゆくと佐渡中のこらず日蓮宗になり、寺はこわされ、阿彌陀佛は川へすてられてしまうと云つたらいゝだらう。

唯阿彌陀佛。少し大げさすぎはしないか。

印性房。その位いに云はなければ駄目さ。又氣ちがい坊主のことだからその位いなことは云つたつて、皆嘘にはしない。あることないことなんだつて云ふのだね。そして日蓮の弟子になるもの、日蓮に飯を運ぶものは酷い罰にあふやうにしてやるのだ。そしてうつかり南無妙法蓮華經と云つたらふんじばられるやうにしてやるのだ。やつとあの聲もやんだ。縁起がいゝぞ。

唯阿彌陀佛。さうゆけばしめたものだね。

印性房。それは大丈夫いくよ。僕が生喩房がゆけばね、生喩房あれで中中、口がうまいし、くせものだからね。

唯阿彌陀佛。ともかく出來るだけうまくやつて見るよ。それなら之から生喩房の處へ行つて相談してくる。

印性房。それぢや僕からもよろしくと云つてくれ玉へ。

唯阿彌陀佛。承知した。それでは失禮する。さよなら。

印性房。さよなら。

（二人退場、南無妙法蓮華經の聲又聞へだす。印性房まもなく登場）

印性房。お前達が吠へられるのももう暫くの間だぞ。

第二場　日蓮の室、月夜

（日蓮月を見てゐる）

日蓮。月天子。あなたは法華經の行者を守護することを誓はれたことをお忘れにはなりますまいな。日蓮の弟子達が罪なくして罰せられ、迫害されるのをだまつて見てゐていゝと思つてゐらつしやるのですか。この日蓮が、[illegible]

か。まさかそんなことはありますまいね。あなたを見ると私は鎌倉を思ひ出します。故郷を思ひ出します。知人のことや弟子のことなぞ思ひ出します。彼等は今どうしてゐます。日朗は丈夫にしてゐますか。日昭や、日興は今どうしてゐます。四條金吾殿は今どうしておいでゞす。その他の愛すべき人々は今どうしてゐます。彼等にやすらかな眠りをお與へ下さい。そして目がさめたら更に勇猛心を起して法華經のために働くやうにお守り下さい。日蓮は今へんに彼等がなつかしく、泣かねども涙をながしております。また佐渡の弟子達もお守り下さい。そして彼等に勇氣を與へてやつて下さい。日蓮がこの頭をさげておたのみします。思へば日蓮の一生は多難でありました。だがいつもよくお守り下さいました。この日蓮は何度も死んでゐるはづです。だのに今も生きて、腹をへらしております。だが日蓮は勇氣は失ないません。この頃はこの佐渡で南無妙法蓮華經をおとなへするものは一人のこらずつかまへられます。たゞ人にきかれないやうに云ふことだけがゆるされてゐるのです。だがこの日蓮だけはちがいます。この日蓮はいくら大きな聲でお題目を云つてもだれもとめることの出來るものはありません。云へない人々にかはつて日蓮はお題目をおとなへします。どうか日蓮の弟子達をお守り下さい。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

（遠くから南無妙法蓮華經の聲が聞える）

日蓮。月天子、不思議なこともあればあるものですね。何處の誰か、この眞夜中に、誰も恐れずに、この日蓮のお題目に言葉を合せるのです。かくれた所に日蓮の守護者がゐるのですか。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。（耳をすませる）そら耳ではない。たしかに聞へる。しかも女人の聲。不思議なこともあればあるもの。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

（南無妙法蓮華經の聲だん／＼近づいてくる）

日蓮。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

（日妙登場）

日妙。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

（日蓮のそばにかけより、前に跪づき）

日妙。あゝあなたは日蓮上人様ですか

日蓮。あなたはどなたですか。どちらからいらつしたのです。

日妙。私は鎌倉から參りました。

日蓮。えつ？　鎌倉から。千里の間、山山を通り海をわたつて、お子さんをつれて、たつた一人でゐらつしたのですか。

日妙。はい。

日蓮。あなたは實に不思議な方ですね。

日妙。死を覺悟して參りました。生てゐる内に一度でもお目にかゝつて敎へていたゞきたいと思つておりました。お逢ひ出來てこんなうれしいことは御ざいません。お逢ひ出來ませんでしたら、生て歸らうとは思つておりませんでした。

日蓮。その覺悟がなくつては、何事も出來ません。

日妙。早速でございますが、女でも救はれるものですか。

日蓮。救はれるものです。法華經を信じれば必ず救はれます。

日妙。いくら罪深きものでも救はれますか。

日蓮。必ずすくはれます。日蓮の生命をかけて云ひます。必ず救はれます。

日妙。ありがたう御ざいます。（平伏する）それを伺つて、私は死んでも心のこりはありません。

日蓮。死ぬのはいけません。そのお子さんを立派にお育てなさい。

日妙。この子も女の子で御座います。

日蓮。女のお子さんでも大事になさらないといけません。

日妙。御上人樣は隨分今までにお苦しみになりましたね。

日蓮。それも法華經のためですから、たとたとありがたいと思つてゐます。

日妙。ありがたいことで御ざいます。

日蓮。あなたも隨分お苦しみになつたと見へますね。

日妙。はい。女人は淺ましいもので御座ります。

日蓮。そんなことがあるものですか。

日妙。私は御上人樣にお逢ひするまでは地獄におりました。今御上人樣にお目にかゝりましたら、私は極樂に生れかへつたやうなあかるい、開けた心もちになりました。私の苦しみなぞ、御上人樣の苦しみにくらべると實に恥かしい御話でございます。之から私は心を入れかへて、御上人樣のお弟子になつて一生、法華經のために捧げ、お題目をおとなへしたいと思ひます。許していたゞけますか。

日蓮。許さないでどうします。私は今迄隨分いろくの人に逢ひました。だがあなたのやうな女の方に逢つたことはありません。男でさへこゝまでくるのは大變です。あなたの若さ、あなたの美しさで、一人で鎌倉から日蓮に逢ひにこゝまで行られたことは、須彌山を數いて大海を渡る人を見るよりも不思議な氣がします

日妙。勿體ないお言葉です。私は月がいゝので、宿にゐるのも淋しく一人でさまよつておりましたら、南無妙法蓮華經のお聲が微に聞えて參りましたので、失禮も顧みず、夜中に參りました。こんなにうれしいことはありません。

日蓮。いつ佐渡におつきになつたのです。

日妙。昨日で御ざいました。あまりつかれておりましたので、少しやすんでからお目にかゝりたいと思つておりました。

日蓮。本當によく來て下さいました。日蓮もこんなうれしいことはありません。私もあまり月がいゝので、不意にお題目をおとなへしたくなつたのです。するとあなたの聲が聞えて來て、私はどんなにおどろきましたか。この日蓮は龍之口で首を切られさうになつた時よりもおどろきました。今佐渡ではお題目をとなへることは許されてはゐないのですから。

日妙。御上人樣はいつまでお苦しみになるのでせうか。

日蓮。日蓮は苦しみの内によろこびを持つてゐます。諸佛に愛されるよろこびを知つてゐますから。

日妙。私もこんな淸いよろこびがこの地上にあるとは思ひませんでした。

日蓮。月天子に向つて、お禮のしるしに、二人でお題目をおとなへしませう。

日妙。はい

二人。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

（阿佛房登場）

阿佛房。御上人さま。

日蓮。おゝ阿佛房さんか、いゝ處に來た。今私の處には珍らしいお客が來た處だ。

阿佛房。御飯を持つて參りました。

日蓮。それはどうもありがたう

阿佛房。隨分おなかゞすいてゐらつしやるだらうと思つて氣になりましたが、どうしても人目をぬすんでくるおりがありませんでした。私達はどうなつてもいゝやうなものゝ、もし私達がつかまると誰も供養するものがなくなりますので。

日蓮。本當だよ。阿佛房さん、この方は女の身でたつた一人で鎌倉から、この日蓮に逢つて敎へをうけやうと思つて來た方だ。之は阿佛房と云つて遠藤武者盛遠の甥にあたる方で、順德院についてこちらにいらつした方だ。私が始終お世話になつてゐる方で、この方がゐないと、日蓮のひぼしが出來る處だつたのだ。あはゝゝ。

阿佛房。上人樣。ます〳〵御用心なさらないといけません。

日蓮。君こそ、用心しないといけないよ。

阿佛房。私は勿論用心してゐます。

日蓮。それでは早やくいたゞかう。實は隨分腹がへつて困つてゐたのだが、この方が見へて、腹のへつたのも忘れてゐた。何しろ今日で二日飯を食ひませんでしたから。

日妙。まあ、そんなに。

阿佛房。すみませんでした。

日蓮。君がわるいのぢやない。

（日蓮飯を食ふ。阿佛房、日妙手つだう）

日蓮。日蓮程仕合せものがあるか。腹がへれば飯をもつて來てくれる人がある。わざ〳〵鎌倉からはる〳〵女人の身でたづねて來て下さる方がある。そして日蓮の一ことでよろこんで生きかへつて下さる人がある。

阿佛房。（飯を片づけ）それでは見つかるといけませんから私は失禮します。

日蓮。それならこの方を宿屋まで御苦勞だが案内して上げて下さい。

阿佛房。承知しました。それでは失禮します。

日妙。それでは御上人樣、失禮いたします。

日蓮。さよなら。

（阿佛房、日妙、退場）

日蓮。聖天子！　日蓮はあなたに御禮を云ひます。日蓮のこのよろこび、涙がながれてやまないよろこびをたゞあなただけが御存知です。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。

第五幕

第一場　鎌倉

（廣間に日蓮の弟子信者達集つてゐる）

日昭。皆樣にお集まり戴きましたのは他のことでは御座いません。私達の御師匠日蓮樣から御手紙が皆樣あてに參りましたので、皆樣にお聞かせいたしたいと思つて、集つていたゞいたのです。御師匠さまの御手紙をおよみする前に一寸申し上げたいことが御座います。近ごろこゝにゐられる日妙樣が最近佐渡にお渡りになり、くわしくあちらの御樣子をお話し下さいましたが、何とも申しやうのないお苦しみに、實に立派に耐えてゐらつしやるさうで、この頃佐渡ではあまりにお師匠樣の御勢力が強くなりましたので、迫害がひどく、南無妙法蓮華經を申すものは勿論、お師匠樣のゐらつしやる前を歩くだけでもけんぎをかけられ、つかまへられたものも、一人や二人ではなく、お師匠さまの處へ御飯をおはこびするものは人目をしのび、夜なかにやつとおはこび出來るやうなありさまで、それも一日二日御運び出來ないことが、普通なことださうで御座ります。御話聞いたゞけでも勿體なく涙がこぼれて參ります。たかそんな目にお逢ひになりながら、相變らず御元氣で、益々御日數をまこれ、決心を

疑くされ、少しのお變りも見へず、日夜、御勤行遊ばされてゐるさうで、今更ながら、我々はあまりに意氣地がないやうに思はれます。毎日三度二度御飯がいたゞけ、そしてあたゝかくねられることを思ふと、誠にすまない氣がいたします。さう云ふ御ありさまで、この御手紙をおかきになつたので御座います。この御手紙は私達があまりにお師匠さまのお身體のことを心配して、一日も早く御赦免になるやう祈つておりますので、つい心がよわくなりがちなのをお感じになつてよこされたものと思ひます。それだけは之から拜讀いたします。

(日昭手紙に丁寧に禮をさげる。一同謹んできく)

日昭。それおもんみれば、末法流布の時、生を此土に受け、此經を信ぜん人は、如來の在世より猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候なり。其故は在世は能化の主は佛なり。弟子又菩薩阿羅漢なり。人天、四衆、八部、人非人等なりといへども、調機調養して法華經を聞かしめ給ふ。猶ほ怨嫉多し、何に況や、末法今の時は、教機時刻當來すといへども、其師を尋ぬれば凡師なり。弟子又闘諍堅固、白法隱沒、三毒強盛の惡人等なり。故に善師を遠ざけ、惡師に近づく、其上眞實の法華經の如說修行の行者の、師弟檀那とならんには、三類の敵をもつこと決定なり、さればこの經を聽く始めの日より、思ひ定むべし、況滅度後の大難の三類甚しかるべしと。然るに我弟子等の中にも、兼ねて聞いてゐたから、大小の難來る時始めて驚き、肝をけして信心を破りぬ。兼て申さざりけるか。經文を先として猶多怨嫉、況滅度後、況滅度後と朝夕教へし事は之なり。予が或は所をおはれ、或は疵を蒙り、或は兩度の御勘氣を蒙りて遠國に流罪せらるゝを見聞くとも、今始めて驚くべきに非ざるものをや、問て云ふ、如說修行の行者は現世安穩たるべし。何が故ぞ三類の強敵盛んならんや。答て云、釋尊は法華經の御爲に、今度九横の大難に値ひ給ふ。過去の不輕菩薩は法華經の故に、杖木瓦石を蒙むり。竺の道生は蘇山に流され。法道三藏は面に火印をあてられ。師子尊者は頭を刎られ。天台大師は南三北七にあだされ。傳教大師は六宗に悪まれ給へり。此等の佛菩薩大聖等は、法華經の行者として而も大難にあひ給へり。此等の人を如說修行の人と云はずんば、いづくにか如說修行の人を尋ねん。然るに今の世は闘諍堅固、白法隱沒なる上、惡國、惡王、惡臣、惡民のみありて正法を背きて邪法邪師を尊重すれば、國土に惡鬼亂れ入りて三災七難盛に起れり。かゝる時刻に、日蓮佛勅を蒙りて此土に生れけるこそ時の不祥なれ。法王の宣旨背きがたければ、經文に任せて權實二教のいくさ起し、忍辱の鎧を着て妙教の劍を提げ、一部八卷の肝心、妙法五字の旗を指上て、未顯眞實の弓をはり、正直捨權の箭をはげて、大白牛車に打乘

て、權門かつぱと破り、彼處へおしかけ、此處へおしよせ、念佛、眞言、禪、律等の八宗、十宗の敵人をせむるに、或はにげ、或はひきしりぞき、或は生取れし者は我弟子となる、或はせめ返し、せめ落しすれども、敵は多勢なり、法王の一人は無勢なり、今にいたつて軍やむことなし。法華折伏破權門理の金言なれば、終には權敎權門の輩らを一人もなくせめおとして法王の家人となし天下萬民諸乘一佛乘となつて妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず、雨壤を碎かず、代は義農の世となりて今生の不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理顯はれん時を各々御覽ぜよ、現世安穩の證文疑ひあるべからず。されば末法今の時法華經の折伏の修行をば、誰か經文の如く行じ給へしぞ、誰人にても在せ、諸經は無得道墮地獄の根源、法華經獨り成佛の法なりと、音も惜まずよばはり給ひて、諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ、三類の强敵來らん事疑ひなし。我等が本師釋迦如來は在世八年の間折伏し給ひ、天台大師は三十餘年。傳敎大師は二十餘年。今日蓮は二十餘年の間、權理を破す。その間の大難數を知らず、佛の九横の難に及ぶか及ばざるかは知らず、恐らくは天台傳敎も法華經の故に日蓮の如く大難に値ひ給ひし事なし。彼は只惡口怨嫉計り也。是は兩度の御勘氣、遠國に流罪せられ。龍口の頸の座、頸の疵等、其外惡口せられ、弟子等を流罪せられ、牢に入れられ、檀那の所領を取られ、御内を出されし、是等の大難には龍樹、天台、傳敎も爭でか及び給ふべき。我等を如說修行の者といはずば、釋尊、天台、傳敎等の三人も如說の修行の人なるべからず。提婆、瞿伽利、善星、弘法、慈覺、知證、善導、法然、良觀房等は卽ち法華經の行者と云はれ。釋尊、天台、傳敎、日蓮並びに弟子檀那は、念佛、眞言、禪、律、等の行者なるべし。法華經は方便權敎と云はれ、念佛等の諸經は還つて法華經となるべきか。東は西となり、西は東となるとも、大地は持つ所の草木共に飛び上つて天となり、天の日月星宿は共に落ち下つて地となるとも、いかでか此理あるべき。一期を過ぐる事程もなければ、いかに强敵、重なりくるともゆめ〳〵退する心なかれ。恐るゝ心なかれ。縱ひ頸をば鋸にて引切り、胴をば稜鉾をもつてつゝき、足には鉏を打て錐をもつて揉とも、命のかよはんほどに南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へ唱へ死に死るならば、釋迦多寶、十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば、須臾の程に飛び來て、手をとり肩に引きかけて、靈山にはしり給はゞ、二聖二天十羅刹女は、受持の者を擁護し、諸天善神は天蓋を指し、旗を上て、我等を守護して、慥かに寂光の寶刹へ送り給ふべきなり、あらうれしや、あらうれしや、日蓮　人々御中

へ。此鐵身を離さず常に修行あるべく候。（註。この手紙略しぬかしてあるのは、芝居の時のことを考へてである。乞ふ諒せよ）

（日昭手紙を拜す。一同拜す）

日昭。皆樣、誠にありがたい御手紙ではありませんか。早速私達でこの御手紙を拜讀いたしまして皆樣におわかちいたします。前に戴きました御手紙に「日蓮御房は師匠にておはせども、餘り強し。我等は柔かに法華經を弘むべしと云はんは、螢火が日月をわらひ、蟻塚が華山を下し、井江が河海をあなづり、烏鵲が鸞鳳をわらうなるべし」と云はれてありました意味もよくおわかりになつたことゝ思ひます。誠にありがたいお言葉で御坐います。私達は本當に覺悟をあらたにして、師のおともをし、妙法五字の旗じるしをかゝげてますます折伏の戰に死にもの狂ひに働かなければならないと思ひます。（日昭禮拜をし、席に歸る）

日朗。皆樣、私も一つ御師匠樣から大田金吾樣におよこし下さつた御手紙の内に、誠にありがたい御言葉がありましたから、其處だけよまして戴きます。「白小袖一つ、あつわたの小袖、伯耆房のびんぎに鵞目一貫並びにうけ給はる。伯耆房、佐渡房等の事、熱原の者どもの御心ざし、異體同心なれば、萬事を成し、同體異心なれば諸事叶ふことなしと申す事は、外典三千餘巻に定りて候。殷の紂王は七十萬騎なれども、同體異心なれば、いくさにまけぬ。周の武王は八百人なれども、異體同心なれば、かちぬ。一人の心なれども二つの心あれば其心たがいて成する事なし。百人千人なれども一つ心なれば必ず事を成ず。日本國の人々は多人なれども同體異心なれば諸事成ぜん事がたし、日蓮が一類は異體なれば人々すくなく候へども、大事を成じて、一定法華經ひろまりなんと覺へ候。

（この時四條金吾あはてゝ登場）

四條。皆さん、皆さん、およろこび下さい。日蓮殿の御勘氣が御赦免になりましたぞ。御赦免になりましたぞ。

皆。それは本當ですか。

四條。之を御らん下さい。

日昭。本當に御赦免になつたのですね。本當にありがたいことです、ありがたいことです。

日朗。まもなく私達は鎌倉にお師匠樣をおむかい出來るのですね。

四條。さうです、さうです。

日朗。まるで夢のやうでございますね。

皆てんでんに。ありがたいことです。ありがたいことです。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

四條。其處で皆樣の内どなたかに、この御赦免狀を佐渡におとゞけね

がいたいとのことですが、どなたかいらつして戴けますか。

日朗。私でよろしゆう御座いましたらどうぞその御役をもうしつけて下さい。

四條。日朗さんがいつて下されば之に越したことはないと思ひます。皆さんもさうお思ひになるでせう。

日持。それは日朗さんがゆくのが一番いゝでせう。御師匠樣も一番それをお喜びになるでせう。

日朗。ありがたう御座います。皆樣ありがたう御座います。それならば私は之からすぐ參ります。そして少しでも早く鎌倉へお迎へいたしませう。それでは失禮して一寸用意をして參ります。

日昭。本當にようございました。

皆。（お互に喋舌りあふ。聞くものはあまりない）本當にようございました。本當にようございました。之も法華經の御かげと思ひます。本當にありがたうございます。

（二三人南無妙法蓮華經と小聲でとなへ出す　その內皆が一緒になり、段々聲高にとなへ出す。日朗、旅の仕度してくる）。

日朗。それでは皆さま行つて參ります。

四條。身體を御大事に、あまり無理をなさらないやうに。

日朗。ありがたう御座います。それでは皆さんいつて參ります。

（皆南無妙法蓮華經をとなへつゝ、日朗を送る。日朗も[illegible]となへつゝ退場）

第二場

（印性房の室。例の四人集つて愉快さうに話してゐる）

印性房。どうです。この頃は南無妙法蓮華經の聲が少しも聞えなくなりましたね。實に愉快ですね。さすがの日蓮もこの頃は[illegible]ない[illegible]になつてね

さうです。こないだ私も一寸のぞいて見ましたら、[illegible]、[illegible]になつてねてゐました。腹がへつて起きてはゐられないのだと思つたら、いゝ氣味でもあり、氣の毒でもあり、可笑しくもありました。

唯阿彌陀佛。あいつの弟子は片つぱしから、しばられたり、罰せられたりするのですから、さぞ困つてゐるでせう。

印性房。それにしてもあの、阿佛房夫婦がゐるので厄介です。あいつさへ居なければどうにでもなるのですな。

生蓮房。本當にあの阿佛夫婦には困りますね。あれさへゐなければ今時分日蓮は骸骨のやうにやせて、日蓮のひぼしが出來る頃でしたらう

印性房。之から阿佛房を今迄よりもつと嚴しく見はりしないといけません。

滋道坊。日蓮の方を見はつたらどうです。どうも日蓮の處に飯をはこ

ふものは一人や二人ではない、何か正體のわからないものがゐて飯を運んでゐるらしい。いつかの夜は若い女の聲がしたと云ふうわさをしてゐるものがありました。

印性房。あいつは惡魔のやうな男ですから、狐狸のやうなものをなづけて自分の用をさせてゐるかも知れない。滋道房さんの云ふやうに之は日蓮の家を見はりすることが必要かも知れない。

生喩房。ともかくあいつはたゞものではない。島ながしにされて來て、あの位い平氣なしやあ〳〵してゐる男を見たことはない。

唯阿彌陀佛。本當にさうだ、あいつは吹きざらしの家に火のけもなく、大がいの人間なら凍え死にしなければならない處で、しやあしやあと仕事をしてゐた。それが流されて來た日からだからね。

印性房。つまりあいつは氣ちがいなのだ、法華經にこりかたまつた氣ちがいなのだ。他のことは感じないのだ。

生喩房。本當にさう云へばさうだ。しかしこの頃は本當に參つてゐるらしいね。つかれても來たのだらう。弟子はどん〳〵はなれてゆくし、誰も公然とたづねてゆくものはない。又我々の計略がだん〳〵實行されて、日蓮の弟子達にはものを賣らないことにしたので、大へん困つてゐるらしい。

印性房。あの計略は存外きいたらしいね。もう一息と云ふ處だ。この頃日蓮の處に來た日興とか云ふ坊主も隨分よわつて、弟子にも隨分ひどい目にあいつけてゐるが、佐渡ではその千倍もひどい目にあはされるとこぼしてゐたさうだ。

唯阿彌陀佛。もう一息だね。僕達が勝つのも。

印性房。ともかく俺達を見くびつてゐたが、この頃はすこし目がさめて來たらう。あんまり鳥なき里のかうもり面するからこんな目に逢ふのだ。

生喩房。何しろ愉快だね。

（南無妙法蓮華經の聲聞える）

印性房。之は又どうしたことなのだ。早くおとゞけしなければ、誰かゐるか？

小坊主。はい。

印性房。すぐとんでいつてお題目をとなへて歩いてゐるものがゐますと、注進して來てくれ。

小坊主。はい。

印性房。なか〳〵馬鹿や氣ちがいの種はなくならないものだね。

（南無妙法蓮華經の聲遠ざかつてゆく）

印性房。あいつを早くふんぢばつてやりたいものだな。本當にこんなにしやくにさわることはない。

日妙。まあ、そんなに。

阿佛房。すみませんでした。

日蓮。私がわるいのぢやない。

（日蓮飯を食ふ。阿佛房、日妙手つだう）

日蓮。日蓮程仕合せものがあるか。腹がへれば飯をもつて來てくれる人がある。わざ／＼鎌倉からはる／＼女人の身でたづねて來て下さる方がある。そして日蓮の一ことでよろこんで生きかへつて下さる人がある。

阿佛房。（飯を片づけ）それでは見つかるといけませんから私は失禮します。

日蓮。それならこの方を宿屋まで御苦勞だが案内して上げて下さい。

阿佛房。承知しました。それでは失禮します。

日妙。それでは御上人樣、失禮いたします。

日蓮。さよなら、

（阿佛房、日妙、退場）

日蓮。月天子！ 日蓮はあなたに御禮を云ひます。日蓮のこのよろこび、涙がながれてやまないよろこびをたゞあなただけが御存知です。南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。

第五幕

第一場 鎌倉

（居間に日蓮の弟子信者達集つてゐる）

日昭。皆樣にお集まり戴きましたのは他のことでは御座いません。私達の御師僧日蓮樣から御手紙が皆樣あてに參りましたので、皆樣にお聞かせいたしたいと思つて、集つていたゞいたのです。御師僧さまの御手紙をおよみする前に一寸申し上げたいことが御座います。近ごろこゝにゐられる日妙樣が遙々佐渡にお渡りになり、くわしくあちらの御樣子をお話し下さいましたが、何とも申しやうのないお苦しみに、實に立派に耐えてゐらつしやるさうで、この頃佐渡ではあまりにお師僧樣の御勢力が強くなりましたので、迫害がひどく、南無妙法蓮華經を申すものは勿論、お師僧樣のゐらつしやる前を歩くだけでもけんぎをかけられ、つかまへられたものも、一人や二人ではなく、お師僧さまの處へ御飯をおはこびするものは人目をしのび、それも一日[illegible]夜たかにやつとおはこび出來るやうなありさまで、それも一日日御運び出來ないことが、普通なことださうで御座ります。御師僧さまはいたゞけでも勿體なく涙がこぼれて參ります。たかそんな目にお遂ひになりながら、相變らず御元氣で、益々御日覺をまされ、決心を

弱くされ、少しのお疲も見へず、昨夜、御読誦遊ばされてゐるさうで、今更ながら、我々はあまりに意気地がないやうに思はれます。毎日三度三度御飯がいたゞけ、そしてあたゝかくねられることを思ふと、誠にすまない気がいたします。さう云ふ御ありさまで、この御手紙をおかきになつたので御座います。この御手紙は私達があまりにお師匠さまのお身体のことを心配して、一日も早く御赦免になるやう願つておりますので、つい心がよわくなりがちなのをお案じになつてよこされたものと思ひます。それでは之から拝読いたします。

(日昭手紙に丁寧に頭をさげる。一同謹んできく)

日昭。それおもんみれば、末法流布の時、生を此土に受け、此経を信ぜん人は、如来の在世より猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候なり。其故は在世は能化の主は仏なり。弟子又普賢文殊舎利弗目連等なり。人天、四衆、八部、人非人等なりといへども、調機調養して法華経を聞かしめ給ふ。猶怨嫉多し。何に况や、末法今の時は、教機時刻当来すといへども、其師を尋ぬれば凡師なり。弟子又闘諍堅固、白法隠没、三毒強盛の悪人等なり。故に善師を遠ざけ、悪師に近づく、其上真実の法華経の如説修行の行者の、師弟檀那とならんには、三類の敵をもつこと決定なり、さればこの経を聴く始めの日より、思ひ定むべし、况滅度後の大難の三類甚しかるべしと。然るに我等程の者にも、兼ねて聴いてゐながら、大小の難来たる時始めて驚き、肝をけして信心を破りぬ。兼て申さざりけるか。経文を先として猶多怨嫉、况滅度後、况滅度後と朝夕教へしは是なり、予が所を追はれ、或は疵を蒙り、或は両度の御勘気を蒙りて遠国に流罪せらるゝを見聞くとも、今始めて驚くべきに非ざるものをや。問て云ふ、如説修行の行者は現世安穏たるべし。何が故ぞ三類の強敵盛んならんや。答て云、釈尊は法華経の御為に、今度九横の大難に値ひ給ふ。過去の不軽菩薩は法華経の故に、杖木瓦石を蒙り。竺の道生は蘇山に流され、法道三蔵は面に火印をあてられ、師子尊者は頭を刎られ。天台大師は南三北七にあだまれ。伝教大師六宗に悪まれ給へり。此等の仏菩薩大聖等は、法華経の行者として而も大難にあひ給へり。此等の人を如説修行の人と云はずんば、いづくにか如説修行の人を尋ねん。然るに今の世は闘諍堅固、白法隠没なる上、悪国、悪王、悪臣、悪民のみありて正法を背きて邪法邪師を崇重すれば、国土に悪鬼乱れ入りて三災七難盛に起れり。かゝる時刻に、日蓮仏勅を蒙りて此土に生れけるこそ時の不祥なれ。法王の宣旨背きがたければ、経文に任せて権実二教のいくさを起し、忍辱の鎧を着て妙教の剣を提げ、一部八巻の肝心、妙法五字の旗を指上て、未顕真実の弓をはり、正直捨権の箭をはげて、大白牛車に打乗

唯阿彌陀佛。なーに、今につかまつて泣き面をするよ。氣にする程のことはないよ。

第三場

（日蓮の室。前よりいくらか立派になつてゐる。室も二つある。庭に面してゐる）

日蓮。又春が來る。日蓮はこゝに三年ゐた。日蓮のこゝですべき仕事は大概してしまつた。開目鈔もこゝでかいた。觀心本尊鈔もこゝでかいた。十界曼荼羅もこゝでかいた。日蓮は佐渡でなすべきことは皆してしまつた。そろ〳〵鎌倉へ歸つてもいゝ時が來た。さう思ふと急に鎌倉に歸りたくなる。日興。

日興（隣室で返辭をする）はい。

日蓮。まあお茶でもあつたら入れて來てくれ。

日興。はい。

日蓮。またあつたらうね。

日興。はい。少しのこつております。

日蓮。それならそれをへれてもつて來て下さい。

日興。それを入れますと、もうあとがなくなります。

日蓮。なくなつたらお湯をのむさ。火もおこせなかつたら水をのむさ。心配なことはない。

日興。それなら思ひ切つて入れませう。そして阿佛房さんか、最蓮房さんが見へたら、又御無心しませう。（お茶を入れる）

日蓮。そんなことはだまつてゐるものだ。

日興。だまつておりましても千日尼さまはよくお氣がおつきになります。

日蓮。氣がついて持つて來てくれゝば上々だが、こちらからはだまつてゐる方がいゝ。

日興。お師匠さまはへんな處で御遠慮なさるのですね。

日蓮。日蓮は人の厚意には涙もろい男だが、人の厚意につけ上るのには臆面ものだ。

日興。本當にお師匠樣の大膽さには私達はいつもおどろきますが、またお氣の弱い時は隨分お弱いので私達はいつも感心しております。

日蓮。へんな處で感心しないで、お茶が入つたらもつておいで。

日興。今すぐ持つて行きます。火が消えかけておりましたので。

日蓮。鎌倉に歸りたいとは思はないか。

日興。それは歸りたう御座います。ですけど一人では歸りたう御座いません。

日蓮。近い内に日蓮も歸る。

日興。御赦免になるのですか。
日蓮。さうだ日蓮は近い内に鎌倉に歸る。
日興。どうしてそれがおわかりになるのですか。
日蓮。もう日蓮はこゝでするだけのことはした。日蓮は鎌倉へゆかなければならない時が來た。
日興。蒙古でもせめに來るのですか。
日蓮。さうだ近い内にせめに來る。そしてこの日蓮が鎌倉で大獅子吼しなければならない時が近づいて來た。
日興。それでもこの島をぬけ出したら大へんでせう。
日蓮。日蓮は公然と鎌倉へゆくことが出來るのだ。
日興。どうしておわかりになります。
日蓮。日蓮にそれがわからなくつてどうする。
日興。お茶が入りました。
日蓮。それならお茶をのみながら呑氣に話をしやう。この佐渡を去るのもまもないことだから。
日興。隨分こゝでもお苦しみになりましたね。
日蓮。法華經の行者は何處でも苦しめられる。
日興。こゝの人達は鎌倉の人よりなほ惡らつですね。
日蓮。氣が小さいのさ。

(附十月、[illegible]になる)
日興。それにしても御師匠様はこの島に流されたものゝ内でも一番ひどい目にお逢ひになつていつも御元氣でゐられますね。
日蓮。あたりまいさ。日蓮は諸菩薩に愛され守護されてゐるから、心うれしい。日蓮は俊寛とはちがう。誰にも恨みはもつてゐない。たゞ日夜法華經のことを思ひ、國のことを思つてゐる。日蓮は參る時は人より參る。日蓮の身體は鐵でも石でもない。だが日蓮の心は常に法華經に滿されてゐる。他のものが入つて來ても、それは大海の中に一つの塵が入つたやうなものだ。どうだ日興、佐渡の冬は惡いものではあるまい。こゝも去るのかと思ふと、心殘りがないことはない。
日興。阿佛房御夫婦や、最蓮房さんは隨分力をお落しになるでせう。
日蓮。あの人達がゐてくれたのは實にありがたいことだつた。日蓮もあの人達とはなれるのは淋しい。だが鎌倉の人達に逢ふのは嬉しくないことはない。
日興。本當に鎌倉に歸れましたら。
日蓮。だがこゝの方が呑氣だ。鎌倉へ歸れば今度こそ最後の戰を始めなければならない。
日興。最後のですか。

日蓮。さうだ。日本國中に南無妙法蓮華經をひろめ、日本國中を佛の國にするのには最後の戰ひが必要だ。君達も決心つよくしなければいけない。よろこびすぎて決心がにぶつては駄目だぞ。

日興。はい。

日蓮。日蓮は赦免されるのはいゝが、弟子達がよろこびすぎて大勇猛心を失くなすことを一番恐れてゐる。

（庭に頭の白い鳥が來て鳴く）

日蓮。お、日興、あの鳥を御らん。

日興。本當に珍らしい鳥で御座いますね。烏のやうで頭が白い。

日蓮。日興、日蓮はいよ〳〵鎌倉に歸れるぞ。

日興。どうしてゞ御座います。

日蓮。昔、燕の太子丹と云ふ方が、人質として秦に囚はれて、國に歸りたくも歸れなかつた。そして秦王が白き烏が出て來たら歸してやらうと云はれたので、太子は一心に神佛に祈念された。すると不思議に白頭の烏があらはれ、ついに國へ歸ることを許されたことがある。又日本でも行基菩薩が紀州熊野に流されてゐた時、「山烏頭も白くなりにけり、我が歸るべき時や來ぬらん」と詠じて赦されの身になつたことがある。だからこの日蓮も、この烏を見た以上、やがて御赦免になるだらう。

日興。不思議なことも御座いますね。

（印性房、烏に石をぶつける）

日興。いたづら小僧が來てゐます。一つ叱つてまいります。

日蓮。ほつておけ。日蓮はどうせ赦免になるのだ。白頭の烏、御苦勞だつた、もうお前の用はすんだ。歸つてもいゝ。

（同時に石又とんで來、白頭の烏とんでゆく）

日蓮。はゝゝゝ。愉快なこともあるものだ。日興。日蓮は[illegible]たら、妙法の旗をおしたてゝ、念佛宗や、持齋の連中をうけてやる。そしてあいつらを改心させてやる。地獄におちさうだからな。

日興。あんな奴は地獄におちた方がよう御ざいます。

日蓮。どうせ地獄におちるだらうが、可哀さうな奴だ。

日興。可哀さうなことはありません。

（日蓮笑ふ。阿佛房夫婦、最蓮房登場）

日蓮。おそろいでよくやつて來ましたね。

最蓮房。何んだか急にお師匠樣におあいしたくなり其處まで來ましたら、阿佛房御夫婦に偶然お逢ひして、一緒に上つたのです

日蓮。それはいゝ時に來て下さいました。日蓮も急に皆さんにお逢ひしたいと思つてゐた所でした。

阿佛房。さうですか。それでわかりました。私達もわけわからずにお逢ひしたくたつてまいりましたら、最蓮房さんにお逢ひしたのでした。

日蓮。まあ私が皆さんをおよびしたやうなものです。日蓮は今迄随分御世話になりました。

阿佛房。そんなことおつしやられると困ります。

日蓮。日蓮も近い内に鎌倉に歸ることになりさうです。それで皆様ともゆつくりお話したいと思つて、來ていたゞくやうにさつき一寸お祈りしたのでした。

阿佛房。御赦免になつたのですか。

日蓮。まだ御赦免狀はうけとりませんが、近い内には受けとることゝ思ひます。もう使ひが鎌倉をたつたかも知れません。もしかしたらもう佐渡へ來てゐるかも知れません。日蓮にはなんだかさう思はれるのです。

最蓮房。お師匠様がさう思はれるなら、それはまちがいではありますまい。あとに殘る私達はどんなに淋しいかわかりませんが、しかしお喜び申すより他は御ざいません。

阿佛房。もしそれが本當でしたら、お祝ひ申さねばなりません。だが私達はどんなに淋しいか、わかりません。

（千日尼涙ぐむ）

日蓮。まだきまつたわけではありません。日蓮も皆様におわかれするのは實に心のこりです。本當にこの三年、皆さんがゐらつしたので生きて來られもし、よろこびも、希望も失なはずに愉快に過せましたのですから。阿佛房御夫婦がおゐでにならなかつたら、日蓮はとつくにひぼしになつておりました。あらためて御禮申します。

阿佛房。そんなあらたまつたことをおつしやられると私こそ何と申してよろしいかわかりません。私も千日尼も御上人様にお逢ひ出來てから、すつかり生きるのがうれしくなりました。生る力や樂しみが生れて參りました。お逢ひしませんでしたら、私達の一生は見じめなもので御座いました。

日蓮。何にも申しませんが、日蓮は皆さんに心から感謝しております。しかし日蓮が今度鎌倉へ參りますのも、佛の御命令からで御ざいます。日蓮は新たな力をもつて佛勅を蒙り戰ひにのぼるのです。戰ひ島流しがゆるされてよろこんで歸るのとはわけがちがいます。戰ひの門立として皆さんに送つていたゞきたいのです。

最蓮房。承知いたしました。

日蓮。それで皆さんもその決心で益々法華經のために働いて戴きたいのです

阿佛房。承知いたしました。

日蓮。いよ／＼佛の御命令が參りました。

日興。何處からですか。

日蓮。あの聲が聞えないか。

（南無妙法蓮華經の聲がかすかに聞え出す）

日興。聞えて參りました。

（沈默）

日蓮。日朗の聲だ。道に迷つてゐる。すぐ迎へに行つてやれ。

日興。はい。

阿佛房。御上人樣。本當に近い内にお別れしなければならないのですか。

日蓮。仕方があるまい。又逢ひにくるさ。

阿佛房　この節では。

日蓮。必ず逢ひに來れる。そなたは必ず長が生きされる。日蓮がお引きうけする。

阿佛房。ありがたう御座います。

千日尼。私は、私はさうなつてはお目にかゝれませんわね。（しのび泣く）

阿佛房。[illegible]

千日尼。はい。はい。

日蓮。心は何處におりましても必ず通ふものです。日蓮はこゝにゐて鎌倉の弟子達と心をかよわせることが出來ます。お題目をおとなへなされば、必ず日蓮の心はおそばに來ます。諸佛に愛護される時、必ず日蓮もその末席におりますことを覺えてゐて下さい。

千日尼。はい、はい、

（日朗、日興にたすけられてくる）

日朗。お師匠樣。

日蓮。日朗か。

日朗。御赦免で御座います。

日蓮。さうか。

日朗。お逢ひしたう御座いました。

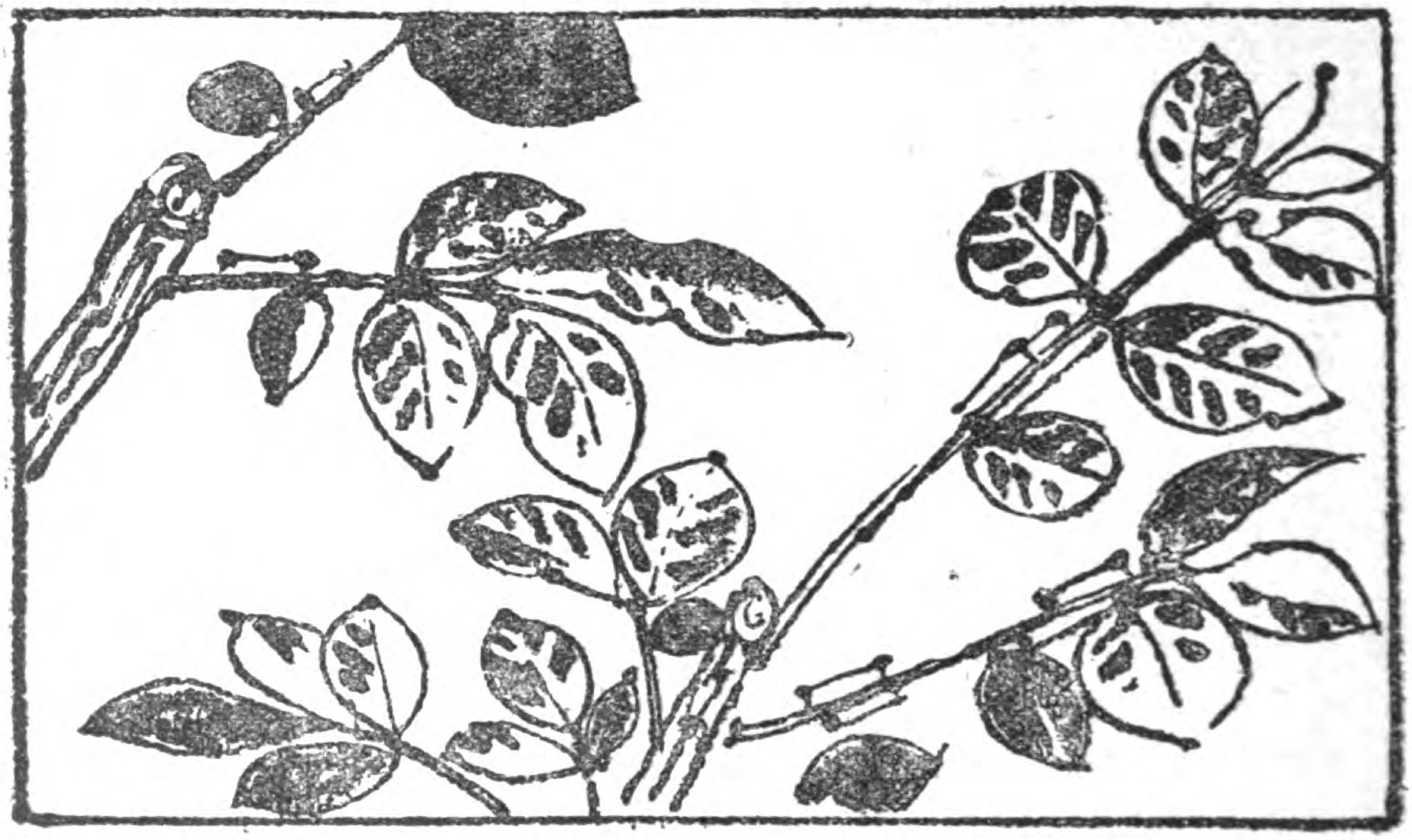
日蓮。日蓮もあいたかつた。

（日朗泣きながら赦免狀をとりさし出す、日蓮それを拜しよむ。）

日蓮。日蓮法師御勘氣の事、赦免せらるゝ所に候。（沈默）

（皆、平伏する、すゝり泣きの聲、印性房達くやしがる。）　幕。

（二八、八、六、）



拾萬圓事件（一幕七景）

藤森成吉

第一景

人物

田中。惡金貸。デップリ肥つた、禿げ頭の大入道。
小早川。昭和無盡會社々長。髮もヒゲも濃い、金ぶち眼鏡。
原。惡ブローカー。
水野ふみ子。二十三四歳位。美人。
田中の妾。
女中。
道具方三四人。プロレタリア的服裝と動作。

時

現代。夏の初め。

處

田中の客室。

舞臺注意

すぐ組み立てと分解の出來る簡明な裝置。此の場面のみならず、全場面が、舞臺端に控へた道具方の手に依つて組まれ、又解かれる。その時、絶對幕をおろさず、又

暗くしない。全進行中、照明は光輪式。（決して全舞臺を明るくしない。）その他の要領は、すべて嘗ての拙作「僞造株券」と同じ。

田中、小早川、原の三人、椅子へ掛け、黑い卓を圍んで密談してゐる。

田中。（野卑な調子で）ちやあ賣りッ拂はう！

原。から來なくちやアいけねえ。

小早川。（原をつついて）原君。近頃の儲けだらう？

原。（ニヤニヤして）まあ一杯飲めるね。此の頃シケつづきで、全くまゐッちまつてたとこだ。時々アこんな事でもなくちやア………。

田中。（冷嘲的に）なんて、しよッちうそればッかりやつてるくせに。

原。お！ 賣りッ拂ひは、失禮だが田中さん、あんたのほうが專門家だらう。

田中。（突ッ放すやうに）無論よ。だがおらア、君見たいに（口眞似して）時々アこんな事でもなくちやア………なんて云はねえだけよ。

小早川。（冷たい微笑を含んで田中へ）工藤から再擔（註、再擔保の形式）で取る時、もう此の見込みはあッたんですよ。だから、僕だけで儲けやうと思つたら、何の世話もなかつたんだ。それをあんたの方に廻したなア、懇意な原君にも儲けさせ、又かねがね原君から聞いてゐたあんたに、此の機會に御近づきをねがはうと考へたからですよ。

田中。（狡猾さうに）とか何とか云つて、實は別に儲けるコンタンぢやねえか。

小早川。無論さ。儲けたいなアお互ひさまでせう。精々これから一つ儲けさせて下さい。但し、あんたも儲け、僕も儲ける、それがいつも僕の交際の希望條件でさ。

原。（得意に、取り持つやうに）小早川君は實際腕ッこきだ。昭和無盡會社なんて物を考へつくとこからして、頭がわかる。

小早川。（揶揄的に）いやに、今日は大將持ちあげてくれるね。

原。は、は、は、………

小早川。いや御機嫌、々々々。……ところで田中さん、明日賣つたら、八掛マイナス七掛分だけ僕が貰つて、あとは當分あんたへ預けませう。

田中。（滿足さうに）よろしい。

原。ちよッと、ちよッと、僕の分はどうなるんだ？

小早川。（鷹揚に）適當に田中さんから貰つときな。

田中。此の前の貸もあるし、當座五六百圓渡しておかう。

原。（牙を鳴らして）冗談ぢやアねえ。四百八十株、四萬八千圓ぢやア

ねえか。せめて手つけに千三四百兩貸はなくちゃア……。
田中。馬鹿ア云へ！
小早川。おやんなさい、田中さん。原君も困つてるんだ。
田中。(悄々)ぢやアやる。
原。ありがてえ。これで今月の拂ひも出來るぞ。
小早川。(憐憫的に)心ぼそいブローカーだな。
原。全く僕のやうになつちやもうおしまひさ。これで昔ア、隨分鶯鳴かせた事もあるんだが、もうから年を取つて降り運になつちやア、昔の全盛時代を返す見込みア迚もねえ。人間て奴も、考へりやアはかねえもんさ。
田中。おいおい、いやに陰氣になつたな。此の頃の天氣豫報ぢやアねえが、晴れ、時々驟雨模様か？
原。洒落ぢやアねえ
田中。おれより二ツ三ツしかうへのくせに、年寄りじみ過ぎら。……おらア、まだこれからウント儲けて見せる了見さ。
原。君の身體の肥りやうと、慾の皮の突ッ張りやうは、特別誂えだからな。
小早川。(微笑を含んで)ここらで一つ仲裁役に立たう。僕は天下の廻り持ちッてね。幸運の田中さん、不幸の原君、兩君の爲めに、今後僕が大いにタクトを振つて儲けさせてあげやう！
原。何だい、タクトつてのは？
小早川。(眞面目くさつて)西洋のブローカーの神さまの名前さ。(立ちあがつて田中へ向つて)ぢやあ明日又。
田中。(横柄に)承知した。
小早川。(原へ向つて)君は？
原。(立ちあがつて)僕も歸らう。
小早川。失禮。
田中。さよなら。
原。さよなら。
二人去る。
田中。(目送してから、愉快さうに笑ひ出す)はッはッはッはッ……あの小早川ッて奴、なかなか目先きの利く野郎らしい。大いに利用してくれやう！
女中出る。
女中。水野さんてかたがいらつしやいました。
田中。(怪訝さうに)水野？
女中。はい、女のかたで御座います。
田中。(ややギクリとして)どんな女だ？

女中。若い、大へんハイカラなかたで御座います。

田中。ぢやアあいつか。――よし、通してくれ。

女中。かしこまりました。（去る。）

田中。（歩き廻りながら獨語）訪ねて來るなんて、實に性の惡い奴だ。うんとトッチメてくれねえと、くせになる。

水野ふみ子現れる。

ふみ子。（一寸腰をかがめて）こんちは！

田中。（威壓するやうに）何がこんちはだ？

ふみ子。（凝視して）あら、大へんな御挨拶ね。

田中。なぜ訪ねて來たりする？

ふみ子。（微笑を含んで）なぜ？――それは、あなたが先刻御承知でしよ。

田中。（怒つて）そんな事を訊いてるんぢやアねえ。なぜこんな處へやつて來るッてんだ。

ふみ子。（輕く地團を踏んで）だからさ、先刻御存じでせう、ッて云ふのよ。

田中。呆れ返つた奴だ。いくら來たッて、こんな處ぢやあ話されねえ。する處でするから、歸れ！

ふみ子。（小馬鹿にしたやうに）そう？ する處でする？ どこでするの？

田中。お前の宿でする。

ふみ子。いつまで待つたら？

田中。おとなしく歸れ！

ふみ子。（笑ひ出して）ホホホ……わからないかたね。いくらおとなしく待つてても、して下さらないから、今日は思ひ切つてやつて來たのよ。ひとにこんな手間をかけて、良心があつたらあやまつてよ。

田中。失敬な……。そんな口をきくと、お前の爲めにならねえ事を知つてるか？

ふみ子。失敬な？ あなたこそ随分失敬してるわ。

田中。おれがどんな失敬をしてゐる？

ふみ子。あら、虫のいいかたね。ぢやあなた、ちつともあたしに失敬してゐると思はなくて？

田中。（突つ張つて）思はねえ。

ふみ子。ちよいと、あなた、田中さん！ そんな強がりを云つてると、（田中の口眞似して）お前の爲めにならねえ事を知つてるか？

田中。（怒つて）馬鹿！ ここをどこと思ふ？ カフエーたアちがふぞ。

ふみ子。(聲を高めて）あなたこそ、あたしを前のカフエー女と間違ひしないで頂戴。

田中。(急に狡猾に下手に出て）よし、わかつた、わかつた。詳しい話は、此の次行つてユックリする。もう今日はおとなしく歸つてくれ。

ふみ子。わかンないわ、ちッともあたしのほうは。――あたし、今日出かけて來たのは、そんな生やさしい了見ぢやなくッてよ。

田中。(無理押さへに）わかッてる。此の次行つた時、きつと話の片を附けるよ。今日は何しろ忙しいから、歸つてくれ。

ふみ子。どこだッて話は同じよ。それに早いほどいいわ。あなたの忙しいなんかより、あたしにはこれは遙かに重大問題よ。

田中。(手古摺つて）わからねえ女だ。

ふみ子。(眞似て）わからねえ男だ。

田中。こいつ！(拳を振りあげる。)

ふみ子。(身體を進めて）ぶつ積り？ 面白いわね。ぶてるならぶッて頂戴！ そんな事で恐れて歸るふみちやんと思つて？

少し前、田中の妻現れる。立つて二人を凝視する。田中氣づいて、狼狽して腕をおろす。

ふみ子。(更に寄つて）さアぶつてよ。約束どほりしてくれない代りぶつての？ 面白いわ。

田中。(當惑して彼女の身體を押し返しながら）いい加減でやめろ。

ふみ子。(不思議さうに彼の視線の先きを眺めて、妻に氣づき、凝視して）あら、奥さん？……失禮。(少し馬鹿丁寧に頭をさげる。)

妻。(素ッ氣なく田中へ）これどう云ふ人？

田中。(強ゐて平氣を装つて）なアに、一寸カフエーで馴染になつた人さ。

妻。一寸？

田中。うん。

ふみ子。(妻へ向つて）えゝ、ほんとに一寸御馴染になつたんですの。

田中慌てて目くばせして、默つてゐろと命じる。

ふみ子。(彼の狼狽に快味を唆られて）多分、奥さんと同じ位一寸ですわ。

妻。それはどう云ふ意味？ あなた。

ふみ子。御免なさい、奥さん。あたし知つてますわ。奥さんも、やつぱりほんとの奥さんぢや御ありなさらないんですッてね。ほんとの奥さんは、沼津の呉服店を引き受けてゐらッしやるんですッてね。

田中。(びつくりして）そんな事を、どこで聞いた？

ふみ子。(振り向いて）あなたが話して下さらなけりや、あたし知つてち

やいけないの？ あたし、そんな馬鹿でも呑氣でもなくてよ。

妾。(田中を睨み据ゑて、ふみ子へ)ぢや此の人、あなたも妾にするやうな事、云つて？

ふみ子。えゝ、云つたばかりでなく、してますわ。

田中。(肝癪と擬勢で、大聲に)馬鹿ッ！

ふみ子。(冷然と)あたしほんとに馬鹿ね。あなた見たいな人に欺されるなんて。

妾。(激しい好奇で)あなた、いつからそんな關係になつて？

ふみ子。(親しく馴れ々々しい調子で)一月半ばかり前ッから。――それまで、淺草のカフエーグランドにゐましたの。そしたら此の人、原だの何だのッて人を連れてよく飲みにやつて來て、とてもお前が氣に入つちやつた、妾にしたい、なんて云ひ出すの。こんな禿げチヤンは禿げチヤンでも、いつもリユウと凝つた着物を着て、金持ちらしく、ウンとみんなに太鼓を叩かせてるでせう。これなら大した間違ひもあるまいと思つて、あたし、つい承知しちやつたんですの。そしたら何のこと、好い妾宅を見つける迄ッて本郷の宿屋住ひをさせたまんま、いつ迄經つても家を持たせてくれないぢやなくッて？……そのうち探つて見ると、あなたと云ふかたもゐらッしやるし、一體そう云ふ常習犯ッて事がわかつたから――。

田中。常習犯た何だ？

ふみ子。女を換へるのを商賣にしたらそうぢやなくて？

田中。女のほうが惡いからよ。

ふみ子。よかつたわね。そんなら、いつ迄も宿屋住ひさせて置くのも、あたしが惡いからなの？

田中。宿屋住ひ宿屋住ひッて、ナマやさしい費用のつもりでゐるか？

ふみ子。今迄あたしの小遣ひをべつにして、ざッと三百五十圓位使つて？ だからナマやさしくないッての？ でも一軒持たせるのに較べたら、隨分な安あがりね。

田中。(妾のほうを向いて、同情を求めるやうに)どうだい、此の女とおれと、どッちが引ッかけられたと思ふ？

妾。(ツンとして)そんな事、わたし知つた事ですか。

ふみ子。奧さんは、あたしと同じ被害者でいらッしやるから、よく御わかりになつてね。

妾。(冷たく)御二人で、どうぞよろしく定めて下さい。(急に泣き出して、ハンケチで顏を押へて去る。)

ふみ子。(見送つて)あら、――あたし達が痴話喧嘩でもしてゐると、あのかた、勘ちがひしたらしいわ。

田中。（膝を立てて）おい、手前、おれを困らせに今日はやつて來たのか？

ふみ子。（口眞似的に咎めて）何が手前よ？　そんな下等な言葉、苟くも金貸しの旦那たる者の口にすべきぢやなくてよ。

田中。お前のやうな貴婦人へはか？

ふみ子。これは珍らしい秀逸ね？

田中。それとも恥をかゝせにやつて來たのか？

ふみ子。そんな云ひがかり、見つともなくなくつて？

田中。云ひがかりだと？

ふみ子。本氣のつもり？　ぢや一體誰があたしを困らせ、あたしに恥を掻かせたの？

田中。男にや、金の都合つく時と　つかねえ時とあるんだ。

ふみ子。うそつき！

田中。かうなつたら、もう前の約束なんかみんな反古だ。その責任はお前にあるぞ。

ふみ子。（凝視して）それ、最後回答のつもり？

田中。そうだ。

ふみ子。いよいよ奥の手が出たわね。

田中。これからア、宿屋へ置かうと、どこへ置かうと、おれの勝手自由だ。

ふみ子。女中代りにしやうと、養家へ叩き返さうと？……眞ッ平よ。ぢやあたしも勝手にするわ。（片手を出して）手切れ金頂戴。

田中。手切れ金？

ふみ子。そうよ。

田中。馬鹿にするな！

ふみ子。あたしこそ、馬鹿にするな！

田中。云ひたい放題を云ふと、出るとこへ出てやるぞ。

ふみ子。出たいわ。どこ？

田中。（いきり立つて）警察へ云つて出てやる。

ふみ子。（持つてゐた團扇の角で、いきなり卓を強く叩きつけて）あたしの望むとこよ。――で、何て理由で訴へるの？

田中。さう云ふ亂暴をしに來て困るからつて云ふ。

ふみ子。（突然大聲に笑ひ出す）ホホホホ……此の頃の、、、、、、、、、、。町を歩いてゐれば浮浪罪、飯を食べてゐれば公安を亂す恐れのある者、そんな新式の罪人、此の頃カフエーでもよくあるわ。だけど、どつちが勝つか是非試したい。きつと訴へて頂戴！

道具方の叫び。オーライ！　次だ！

第二景

人物

ふみ子。
鈴木。ブローカー。無髭、五分刈りの、機敏な顔。
道具方。

時

前景から十日ばかり後。

處

ふみ子の宿屋の一室。

道具方。（組み立てると）ようシ！（舞臺端へ退く）

ふみ子。（立つて、鈴木を招じ入れる）どうぞ。

鈴木。初めて。――僕は、田中君の友人の鈴木ッて者です。どうぞ今後よろしく。

ふみ子。あたしこそ。

鈴木。今日は、田中君から是非ッて頼まれてあがつたんです。然しどうも甚だ困つた用事で、御話し惡くて弱るんです。

ふみ子。例の御金のこと？

鈴木。そうです。一昨日、田中君の番頭が何でも伺つたとかッて話ですな。

ふみ子。えゝ。

鈴木。その時、百圓だけ持つてあがつて、あなたに追ひ返されたそうですな。

ふみ子。えゝ――（再び輕蔑と憤慨を感じさせられたやうに）だッて、あんまり人を馬鹿にしてるんですもの。

鈴木。大體の樣子はききました。然し、また多少、田中の奴――いや、實際のところ、僕は人間としちやあの男にテンデ信用を置いてゐないんです。或は僕にゴマカして云つてるとこもありやしないかと思つて、念の爲め伺ふんですが、仲へ立つた、、の署長とかは、三百圓であたたに承知して頂いたんですか？

ふみ子。そうですわ。初め田中は百圓きり出さないッて云つたんですけど、署長さんの口添へで、とうとうそれだけ出す事になッたんですの。

鈴木。ふむ、ケチな奴だな。

ふみ子。ケチな奴よ。

鈴木。一體あなたを訴へるなんて、それからして馬鹿げてる。

ふみ子。ほんとよ。それもやつぱり金が惜しいからですわ。でもあたし、それをいい幸ひに、胸の透くほどタンカを切つてやりました

わ。田中こそ醜態を暴露したんだッて。

鈴木。全くだ。

ふみ子。實際あたしとしても、立つ瀬がないんぢやなくて？　グランドから暇を取る時、主人にも仲間にも、みんなに、立派な御亭主さんになるッてえらそうな顔をして出たんでせう。それが二月と經たないうちに、だまされてゐたの何のッて、悄々どの顔さげて歸つて行けて？　あそこへ戻れなければ、又ほかの店へでも入らなくちやいけませんけど、すると又初めッからやりなほしだわ。だからあたしその點だけでも充分損害を賠償して貰ふ必要があると思ふの。あなたはどう御思ひになつて？

鈴木。全部同感です

ふみ子。そう？　あたしがあんまり頑張るもんだから、あいつとうとうへコたれて、べつの警察の署長へなんか頼んだのよ。警察だの署長だのつて云ひさへすれば、女や弱い者はすぐ降參すると思つてるとこが憐れだわ。あんな下等な人間てないわ。

鈴木。いや、あの、、、、、、、、、、、、の札つきなんだ。それに、あその、、、、、と田中が懇意にしてゐるから、それで頼んだんですよ。

ふみ子。あらそう？　でも、そんな人を當てにするのは、やつぱりあたしの云ふ心理からぢやなくッて？

鈴木。無論。——いや、奴さん、今度は惚れ々々あなたを見そこなつたッてわけだ。はははは……。

ふみ子。でも、やつぱり今の世の中ぢや女ッて弱い者ね。とうとう三百圓ぽッちで我慢しなけりやならないなんて。——つくづくいやんなッちやうわ。でも、それッぱかりか、おまけに署長立ち會ひの示談金を、慾張勝手に二百圓だけ削つて番頭に持たせてよこすなんて、どこまで一體下等な田中でせう？

鈴木。實際、よくそんな眞似が出來ますよ。………が、あの男の立場に立つてやりやあ、こいつは一つは、彼まだ未練がある爲めかも知れないな。

ふみ子。取る物も取れなけりや、あたしが又あきらめて、折れて行くかも知れないと、考へてるッて仰しやるの？

鈴木。或は。

ふみ子。だッたら、いよいよ呆れ返つた代物ね。

鈴木。まア、あまり上品な代物ぢやありませんな。が、その代物の依頼で今日はやッて來たんで、實に弱つてるんです。

ふみ子。又百圓の御使ひ？

鈴木。（苦笑して）まさか！

ふみ子。あら、不遠慮な事云つて、済みませんわね。でもあたし、どんな條件にしろ、御金の用事でいらッしやつたんなら、おことはりしますわ。いゝえ、あなたがどうからうッてわけぢやないんですのよ。でもあたし、此の問題は一切署長さんにまかせてあるんです。

鈴木。御もッとも。

ふみ子。ですから、一昨日も番頭を追ッ拂つてやつたの。もし、署長さんが改めて、どうか百圓で済ませてくれッて詫びて來るんだつたら格別。

鈴木。まさか、そんた事署長は云へッこありません。それどこか、こんな事を聞いたら、幾らあの署長でも腹を立てるにちがひない。

ふみ子。人間の端くれならね。

鈴木。こいつは手きびしいな。けれども、田中と來たら又田中で、署長の裁きにプンプンしてるんです。こんな條件にきめる位なら、いッそ口なんぞきいて貰はなくてよかッたつてね。

ふみ子。まあ!

鈴木。てんで話にならねえんです

ふみ子。いゝわ。あたし、ぢや今度は自分で署長のところへ行つて、みんな云つてやるわ。

鈴木。それも一つの方法だ。が、どうも相手が惡いですな。何とかかんとか云つて、此のうへきッとあなたに手數を掛けるにちげえねえ。

ふみ子。構はなくてよ。默つて済ませれば、益々常習になるばかりだわ。

鈴木。僕も田中に頼まれたもんの、聞いて見るとあんまり怪しからんから、大いに云つてやつたんです。むしろあなたに代つてね。と、ぢやあ二百圓だけ持つてつてくれ、それ以上は、どんな事があらうと御免だッて云やアがる。何しろ今迄奴といろんな關係もあつて、で、いやいやながら、思ひ切つて今日はあかつたわけなんですが、御話を聞けば益々いやになる。然し僕も一旦引き受けて來たんだから、何とかしたいな。(一寸考へて)どうですふみ子さん。今僕が持つてるだけの金を、二百兩へ足して差しあげるから、それで我慢して、此の馬鹿々々しい事件のカタをつけて下さらんでせうか。(財布を出して、二百圓の包み紙と、べつにバラバラの紙幣を重ねて出す。)

ふみ子。(真面目な顔で)幾ら?

鈴木。二百九十兩。

ふみ子。(彼の顔を凝視して)それ、失禮ながら、ほんとにあなたの御

鈴?

鈴木。僕まで、田中とグルになつて駈け引きをやつてると御芝八ですか？

ふみ子。（彼の眼を瞬時見つめて、微笑して）どうも失禮。

鈴木。（被せるやうに）おや、承知して貰へますか？

ふみ子。その九十圓は、あたしの爲めに自腹を切る御つもり？

鈴木。（突然笑ひ出して）はははは……あなたのやうな綺麗な、聞惚れ出來るかたの爲めなら、九十兩どころか、ほんとの腹を切つたつて痛いたア思ひませんな。然しこいつは、僕は彼奴へあとで請求するつもりですよ。あなたに代つてね。それこそあなたの爲め、あなたの所謂彼奴の今後の爲めだ？

ふみ子。隨分キビキビしてゐらッしやるわね、あなたは。田中なんかの友人にや、ほんとに勿體なすぎるわ。

鈴木。（頭を掻いて）御褒めたア面喰つたな。

道具方。こいつなかなか凄い役者だ。

他の聲。全くだ。

ふみ子。でもあたし、まだあんまり田中を憎んで輕蔑してますわ。でなけりや、もう、あなたに御委せしたつて構はないけれど。

鈴木。おやおや、又逆轉か。

ふみ子。正轉よ。

鈴木。よろしい。おや、あとも綺麗に揃ひませう。

ふみ子。（ややおどろいて）え？

道具方の呼び聲。次だ。逆轉だ！

第三景

人物

田中。

原。

鈴木

女中。

時

翌日の夜

處

田中の客室。

田中、原、相變らず密談してゐる。

田中。例の四萬八千圓で、大抵あいつの顏と腕はわかつた。

原。なかなか腹もある。

田中。あの調子なら、今度の十萬圓も信用してよさそうだ。

原。大丈夫さ。僕アもう可成り長いこと附き合つてるが、小早川位は腕はいいが、仲間をだますやうな眞似はしねえ男だよ。それに、株も前と同じ滿鐵、取つて來るとこも同じ工藤だからな。

田中。うむ。……が、何しろ千二百株つて云やあ、可成りな大モノだ。

原。君の身分にしたら、十萬圓やそこら何でもねえぢやないか。

田中。馬鹿ア云へ。金が矢鱈そこらに落つこツて居るもんか。

原。とにかく、大モノなら大モノだけ儲けも大きい。こいつを引き取つて賣り拂つたら、今度ア酒の一杯や二杯ぢやア濟まねえ。

田中。飲む算段ばか考へてやがる。

原。（愉快そうに）ははは――からたびたびいい目が重なるとこを見ると、おれの運もまだ捨てたもんぢやアねえかな。人間萬事塞翁が馬か？ これだから世の中は面白えや。

田中。取らぬ狸の皮算用で、ひとりでいい氣になつてやがる。

原。おや、おや、まだ考へが定らねえのか？

田中。だが、まだ株も來てゐねえぢやアねえか。

原。なアに、君の決心さへ附きやア、株は手に入れたも同然よ。

田中。（急に鋭く相手の眼を見つめて）君、十萬圓は確かか？

原。確か？

田中。まさか、さきへ下駄を穿いちやアゐめえな。

原。（ややギクッとしたのを、何氣なく紛らして）おいおい、相棒を疑ふのか？ そんな餘計な氣を廻すと、（自分の頭を指して）ここが益益禿げるぜ。

田中。ほんとに穿いてゐねえか？

原。ゐるもんか。――うそを吐いてると思ふなら、工藤へでも何でも行つて訊いて見るがいい。

田中。そうか。ぢやあ一つ融通してやれ。

原。やるかい？

田中。これからすぐ神田の弟のとこへ行つて、九萬圓ばかり若尾から出す裏書を頼む。

原。（手を拍つて）素敵！ 素敵！

女中出る。

女中。鈴木さんがいらつしやいました。

田中。通してくれ。

女中。はい。（去る。）

原。鈴木君とは久しぶりだな。……いい別口でもあるのか？

田中。なアに。……例の女の話だらう。

原。あの野郎に後始末を頼んだのか？

田中。そうよ。君なんかぢやあ、あんまり女に惚れられてゐて醜態だから。

原。よう鈴木君！

鈴木。原君か。――（皺提に座の様子を見て）何かボロイ相談か？

原。（狡猾に）相變らずの借金話さ。

田中。解決してくれたか？

鈴木。どうにかやつた。（やや大仰に）だが、こんな手古摺つた事アねえ。

田中。手古摺つても何でも、解決せえしりやアいい。

鈴木。君はよくても、おれはやり切れねえや。

田中。二百兩受け取つたかい？

鈴木。受け取つた。二百兩足すの九十兩。

田中。九十兩？

鈴木。仕方ねえから、有り合はせの僕の金を足してやつたんだ。

田中。君の金を？――君も女にや甘えな

鈴木。僕が甘いぢやアねえ、君がさもしいんだ。

田中。はははは……そんな事アどうでもいいが、九十兩とは大奮發したな。

鈴木。奮發した？

田中。君からさでフンだくるたあ、あの女ア全く凄いよ。

鈴木。おい田中君、勘ちがひするなよ。

田中。勘ちがひ？

鈴木。九十兩は、急場君に立て替へてやつた金だぜ。

田中。なに、ぢや僕に拂へつてのか？

鈴木。無論。

田中。質つびらだ。僕が頼んだなア二百兩で、二百九十兩ぢやアねえ。

鈴木。わからねえ男だな。その二百で解決出來なくなつたから、二百九十にしたツてんだ。然もそれでも承知しねえところを、やつとおがみ奉つて納得して貰つて來たんだぜ

田中。そりや御苦勞。――が、僕の頼んだなあ二百さ。

鈴木。（怒つて）それが君の挨拶か？

田中。ほかにあるか？

鈴木。ふざけるな！

田中。君こそ、ひとりでのぼせるなよ。

鈴木。（あきれ返つて）あきれた。君の人並みはづれは知つてたが、まさかこれほどたア思はなんだ。（原へ向つて）どうだ原君、あきれたらう？

原。(困つて避けるやうに)……僕にやあ問題の内容がよくわからねえ。

鈴木。カフエーから女を引かせる時の事ア、君が一番知つてるぢやアねえか？

原。そりや知つてるが、そのあとさ。

鈴木。あとつてのは、署長から三百兩にして貰つて、そいつを手形見たいに勝手に割引きした事か？

原。うん――。

鈴木。ぢや、今度はわかつたらう。

原。(當惑して)なるほど。

田中。おれは一體、署長の取り定めが不服さ。

鈴木。ぢやあ何故頼んだ？

田中。あんな無能な署長たあ知らなかつたからさ。

鈴木。ぢやあ今度も、僕が無能たア知らなかつたからつてわけか？

田中。とにかく餘計な世話よ。

鈴木。(むしろ感心して)ふむ、こいつア別誂えだ。

田中。君もブローカーの仲間なら、お互ひそんな調子でやつて行けるかどうか位わからねえ筈があるか？――ぢやあ失敬して、これから神田へ行つて來る。(立ちあがる。)

鈴木。(田中の肩を押へて)待て！　そう云ふ氣なら、腕にかけても取つて見せる。

田中。(びつくりして)腕？

鈴木。うん、俺にやあ壯士が控へてる事を知らねえか？

田中。(おびえながら)亂暴するなら警察へ云つて行くぞ。

鈴木。ははは、又警察か？　云ふなら云つて見ろ！(突き飛ばす)。

田中、よろけて尻餅をつく。

原。(鈴木を遮つて)おい、亂暴するなよ。

鈴木。(吐き出すやうに)案山子野郎め！

道具方。ひでえ蛆蟲だな。何て世界だ！(道具を壞す。)

第四景

人物

田中。

その番頭。

原。

その番頭。

小早川。

工藤事務所の連中。

ウエイトレス。

失業者等。

時

翌々日。

處

大ビルディング内。

舞　臺

簡單な構成風。下段右隅、喫茶店。その反對隅に黒の長椅子。その中間に階段。階段のうへ工藤事務所。斜めに對ひ合つてトアレツトのドア。トアレツトの背後から、もう一本のほそい階段が喫茶店の右そと側へ降りる。

道具方。(作りあげると)手間を掛けやがる。かう云ふ所で、何を彼奴等はやるだらう？

小早川左手から現れる。

小早川。(見廻して)まだ誰も來てゐねえか？(時計をポケツトから引き出して見る。獨語)一かバチか！　だが、きつとやつて見せる

原、田中等、番頭に附き添はれて出る。

小早川。(逸早く進み寄つて)やあ諸君！

原。おう。

小早川。(田中へ)御足勞をかけて、濟みません。

田中。(鷹揚に)いやア。

田中や原の番頭。(小早川へ)今日は。

小早川。(愛想よく)よう番頭さん達、御苦勞さま。

原。(小早川へ)工藤へはもう行つて來たかい？

小早川。まだ行かん。僕も今來たばかりだ。

原。ぢや、直ぐ行くか。

小早川。待つてくれ。かう大勢で押し寄せても困る。子供の遠足ぢやアなえし——。まづそこのカフエーへでも落ちついてくれ。(先きへ立つてカフエーへ入る)。

皆つゞく。

ウエイトレス。(新聞を拾ひ讀みしてゐたのを、立ちあがつて)いらつしやい！

小早川。コーヒーと菓子でも貰はう。

ウエイトレス。御幾たり。

小早川。御覽の數だけ。

ウエイトレス。かしこまりました。(去る)。

みんな椅子へ掛ける。

小早川。(田中へ)例の金は御持ちですか？

田中。ここに持つてる。(卓へ載せた黒鞄を叩く。)

小早川。いや、濟みません。——ぢや、一つ僕か番頭さんに渡して下さい。わざわざ事務所まで行つて頂くにも及びませんから。

田中。よろしい。（番頭へ向つて）君、これを持つて、ぢや小早川君と行つてくれ。

番頭。へい。（小早川と共に立つ。）

原。（立ちあがつて）僕も行く。

小早川。來てくれ。

原。（自分の番頭へ）ぢや、田中さんと茲で待つててくれ。

番頭。承知しました。

小早川。ぢやあ行つて來ます。

　田中うなづく。原と田中の番頭、つゞいて出る。

ウエイトレス。（菓子を持つて現れる）あら、ほかの御かたは？

田中。じき歸つて來る。

ウエイトレス。さうで御座いますか。

　小早川等、長椅子のところから階段をあがりかける。

原。仰山だなあ。——立ち止つて小早川君。君はひとりで行つた方が都合がいいだらう？

小早川。そりやあ勿論。

原。ぢやアそうしたらどうだ？

小早川。だが金は？

原。（田中の番頭へ向つて）ねえ君、二人なんかで行かなくても、僕が引き受けるから、小早川君へ渡してやり給へ。

番頭。でも……

原。大丈夫だよ君、ほかの人間なら兎も角、此の僕が保證するから、絶對間違ひはありッこねえ。

番頭。無論間違ひはないでせうが、何しろ大將から云ひつけられてますから……。

原。構ふもんか。そつちも僕が引き受けるから、二人でそこの長椅子に待つてゝやらうよ。

小早川。（降りて來て）出來るならそうして頂きたいな。なに、どんな事があッたつて間違ひを起すやうな事はしません。これでも、僕も大勢の信用を受けてる一個の社長だから。

原。全くだ。ここまで來てゐりやあ、君おんなじ事だ。

番頭。が、何しろ大金で……。

原。（呑み込んだやうに）わかッてるよ。

番頭。ほんとに大丈夫ですか？

原。大丈夫とも。

小早川。大丈夫です。

番頭。ぢや、渡しますよ。（鞄から新しい百圓紙幣の束を取り出す）

原。（食物に對する嗜慾と同じ感じを以て、涎をこぼすばかり）新しいパリパリだな。

番頭。ほんとにようがすか？

小早川。（手を出す）よろしい。

原。切れさうだ。

番頭。（數へながら渡す）一つ、二つ、三つ、四つ……。

小早川。（全部自分の鞄の中へ入れて）確かに。——ぢやあ一寸待つて下さい。（階段をあがり切る）

原。（急に思ひついたやうに）あゝ、小早川君、小早川君！

小早川、トアレットの前に立ちどまる。

原。（番頭へ向つて）一寸まだ話す事を忘れた。待つてゝくれ給へ。（階段を駈けあがる）

小早川、眼くばせして、一緒にトアレットのドアを押して入り、四方を鋭く見る。

原。（手を出して）さ、約束の分だ。

小早川。よろしい。（鞄から紙幣の束を出し、素早く機械のやうに數へる）そら！（原へ渡す）

原。たしかに四千兩か？

小早川。たしかとも。

原。ありがてえ。（懐へ押し入れる）。

二人すぐドアを押して出る。

原。ぢや、僕は下で待つてる。

小早川。よろしい。（すぐ工場事務所のドアをあけて入る）。

それを見届けて、原、長椅子のところへ降りる。

事務員。（小早川を認めて）やアいらッしやい！

小早川。こんちは。——どうだね景氣は？

事務員。相變らずですね。

他の雇人。いらつしやい。

小早川。（素早く眺め廻して）大將は？

事務員。今ゐません。

小早川。どこかへ出かけた？

事務員。今日はまだ出て來ないんです。

小早川。（さも不審さうに）そいつア變だな。もうそろそろ時間だが。（時計を見る。）

事務員。約束でもあるんですか？

小早川。あゝ、今日は少し大物があるんだ。

事務員。そうですか。ぢやあ少し待つてゝ下されば、きッとやつて來ま

るでせう。

小早川。そう。待つててもいいが、……いや、そのあひだ、一寸連れのとこへ行つて話をして來やう。

事務員。そうですか。

小早川。(ドアから出る。思はず胸を叩いて) 首尾は上々だ。かうなつたら、うんと落ちついてやれ！(そのまゝ、もとの階段を降りる。)

長椅子に待つてゐた番頭と原、彼を見つけるや立ちあがる。

原。どうした？ もう濟んだ？

小早川。いや、工藤が留守だ。

原。道理で早すぎると思つた。

番頭。(眉をひそめて) 留守？

小早川。まだ出て來ないッて。――大事を取つて、少し早目に時間を見積つたから、きッと今に來るでせう。

原。(特に念を押して) 君、金は大丈夫か？

小早川。大丈夫、金の臍繰。ほら、此のとほり。(鞄をあけて、ギッシリ詰つた紙幣束を二人に見せる。)

番頭。おやそのあひだ、御一緒に下へ行つてコーヒーを飲みませう。

小早川。いや、もうそれだけの時間もあるまい。濟ませてから飲みませう。君は何なら……。

番頭。いや、僕はちッとも構はないんです。

小早川。おや、又行つて來るよ。あッちで話をして待つてる。

原。よし。

小早川再び階段をあがり、トアレットの前に立つ。正面を向き、大口をあけて聲なき哄笑を笑ふ。つゞいて鼠の如く素ばしこくトアレットの蔭へかくれ、もう一つの階段を駈け降りる。

階段の下、ビルディングの出口に、よごれ破けた勞働服を着た失業者が、壁に一人倚つてゐる。小早川いきなりぶッつかる。

失業勞働者。ア、痛え！

小早川。(びつくりして、汚い姿を見て) 氣をつけろ！(去る。)

失業勞働者。(見送つて) どッちが氣をつけろだ？

道具方の一人。(叫ぶ) 大詐欺師だ！ 兄弟、そいつをつかまへろ！

他の者。よせよせ！ あんな者、資本主義社會の條虫に過ぎねえ！

異議なし！

一人。(田中達を指して) あの、條虫に血を吸はれてゐる奴等の間拔けさを見ろ！

いつも俺達を吸つてやがるくせに。

(聲を揃へて) は、は、は、……。

ちやッた。白銅一つでも落つてりやアいいが！

第五景

人物

警部。

刑事。

小早川の細君。

時

前景と同日。

處

小早川の家と街路。

舞臺右手に小早川の家。斜めに、閉じた表戸。

自動車のとまる音。左手から、警部と刑事出る。

道具方の聲。ようし！

警部。確かに慌て過ぎてるよ。

刑事。まさか、持ち逃げなんぞするたア思へませんな。

警部。工藤へも顏を出してるッて云ふからな。きッと、誰か知り合ひにでもぶッつかつて、大儲けの前祝ひにどこかで一杯やッてやがるんだらう。

刑事。多分そんな事です。

警部。人騒がせな奴等だ。

刑事。風聲鶴唳ッて奴です。ちと金がデカイから、のぼせ易い。

立ちどまつて見廻し、警部家の前を行き過ぎて、裏へ消える。

刑事。(氣がついて)小早川……あッ、此の家だ。

警部。(戻つて來て、標札と家の様子を見て)なるほどここだ。しまッてる。

刑事。あけませうか。

警部。うむ。

刑事表戸を押しあけやうとする。あかない。

警部。あかないか？

刑事。中から錠がかかッてるやうです。

警部。(電光のやうに直覺して)彼奴、ほんものか！

刑事。そうかも知れませんな。

警部。裏へ廻つて見やう。

二人、家の際へ消える。やがて裏の戸をあける音。暗い家の中へ射し込む外光。警部達家の中へ現れ、龕燈のスウヰッチをひねり、あちこち搜す。

刑事。誰もゐません。
警部。ゐないな。
刑事。こんなに、着物なんか何枚も屏風へ掛けッ放して、如何にも一寸用に出たつて恰好です。
警部。道具も何も片つけた跡はない。
刑事。(台所へ取つて返して、飯櫃の蓋を取つて見て)飯も殘つてる。
警部。(覗いて)今朝夫婦で飯を食つて出たままらしい。
刑事。と、細君はどこへ行つたんでせう。
警部。そいつが鍵だ。――まさか女房を連れて逃げるへマはしまい。
刑事。共謀でせうか。
警部。わからん。
刑事。少し張り込んで見ますか。
警部。そうだ。が、兎にかく電話をかけやう。(行かうとする。)

下駄の音。
警部達キッと見る。

おどろいた女の聲。おや誰?
刑事。(進み寄つて)あなたは誰です?
聲。あなたは?
刑事。僕は警視廳の刑事です。
聲。あら!
刑事。あなたはここの奥さんですか?
聲。そうですわ。
刑事。御主人は?
聲。今朝會社へ出て行きました。
警部。ふむ、――まアこつちへ御あがり下さい。僕は本廳の警部です。

細君、初めて看客の視野へ現れる。手に花束を持つ可成り若い女。

細君。小早川がどうかしまして?
警部。少し調べたい事が出來たんです。失禮ですが、あなたは今朝一緒に御出かけでしたか?
細君。え。
警部。(緊張して)會社へ?
細君。いゝえ、途中で別れて、實家へ行きました。
警部。御實家へ?　何に?
細君。遊びに。――久しぶりに遊びに行つて來たらどうだつて、小早川が云ふもんですから。
警部。ふむ。……ほかに、何も御主人は豫定は仰らなかつたんです

か?)

細君。(恍惚そうに)恍惚にも。

警部。女中さんは?

細君。昨日から、一寸用があつて宿さがりしてますわ。

警部。(見つめて)仰る事にウソはないでせうな。

細君。いゝえ。

刑事。(傍から)確かにそうですか?

細君。變ですこと。

警部。いや、どうも失禮。――(刑事へ向つて)まるで本人の行動を知らないらしい。……と、まづこれは單獨行動だ。

刑事。そのほうが諸事便利ですからな。それに、こんな家財道具なんか現ナマ十萬圓に較べりや、みんな棄てツぼかして逃げたつて惜しかありません。

警部。おまけに神速を尊ぶよ。

刑事。無盡會社のほうも、いつもどほりやつてるだらう。

警部。無論だ。

細君。(その會話に依つて激しい驚きと不安に驅られて)あの――小早川、どこかへ行きまして?

警部。(微笑しながら)どうもそうらしいです。

細君。どうして?

警部。瀧鐵株の擔保十萬圓の持ち逃げらしいです。

細君。(おどろいて)あら!(花束を落す。)

警部。訴えが出てゐるんです。

細君。そしてわたしに默つて、わたしを置き去りにして、逃げちやツたんでせうか? あとの御金も何もくれないで。……だツたら、わたしどうしやう! どうしやう!(突然ハンケチを顏に當てて泣き出す。)

警部。ふむ、あなたには何の話もなかつた?

細君。ひどいわ、ひどいわ、……そうだつたら、ほんとに、ほんとにあんまりだわ。

刑事。(凝と其の様子を見て、警部に)芝居ぢやないやうですな。

警部。うむ。――(細君へ向つて)一應取り調べの必要上、濟みませんが僕達の自動車で御同行ねがひたいです。

細君。(まるで聞えないやうに)あんまりだわ、あんまりだわ。

道具方達。次の愁歎場だ!

第六景

人物

田中。
その番頭。
女中。
原。

時　二十日ばかり後。

處　田中の室。

田中。（「三千五百圓の懸賞」の大字だの、小早川の寫眞だのを刷り入れたビラやポスタアや新聞の切り抜きを貼りつけた壁の下に。卓へ向ひながら、兩手を擧げて呻き叫ぶ。）ああ、幾日待つてもつかまらねえ。逃げたあいつより、逃げられたこツちのほうが身も根も盡きちまふ。御蔭で此の頃メツキリ痩せちまつた。（頭を引ツ掻き廻して）こんな馬鹿げ切つた話があるか？　苟くも帝都の眞ン中で、おまけに眞ツ晝間悠々と、十萬圓もの金を掻ツ拂つて行くなんて。おまけに、その大盗人が、二十日も經つた今日までつかまらずにゐる、つかまるどころか、捜査の見當さへついてゐねえなんて。――一體何を日本の警察はしてゐるんだ？　何の爲めに存在してゐるんだ？　、、、、、、、りばかり精出しやアがツて、これで一等國の警察なんて云へるか？　こんな、、、、、ツきり、、、、は今迄持つてなかつたのか？　あんな小早川見たいな惡黨一人に馬鹿にされるやうぢやあ、警視廳の威信は完全に地に墜ちた！

道具方。何云つてやがるんだ！　、、財産の小惡魔め！

田中。警察の手へ委せて置くだけぢやアねえ。こツちで散々手傳つて、新聞へ廣告してやつたり、ビラを撒いてやつたりしてるんだ。（正面の寫眞へ向つて、嚇しつけるやうに手を擧げて）五萬枚の寫眞入りビラだ。三千五百圓の懸賞だ。そいつを全國の警察へ送りつけて、なほ目ぼしい所へはすツかり配つてあるんだ。それでどうしてもつかまへられねえなんて、責任觀念があつたら警察は總辭職しろ！……ああ、氣がちがひさうだ。まつたく生き地獄だ！（頭を押へる。）

道具方の笑ひ聲。ははは……。

番頭。（一重ねの郵便を持つて出る。）大分又問ひ合はせが來ました。

田中。（ムツクリ頭をあげて）見込みのある奴があるか？

番頭。やつぱり碌なのはありません。あのビラの寫眞はちつとも人相書きと似てないなんて、又二三本云つて來てゐます。

田中。餘計な事ばかり云つてよこしやアがつて。——手蹟はちがつてるか？

番頭。似てゐません。

田中。そいつア、みんな小早川の同類か？

番頭。そうとも限らんでせう。あの寫眞は、どこへ行つてもあんまり評判がよくないやうです。昨日も面と向つてそう云つてた奴があります。

田中。ぢやアなぜ、君アそんな寫眞を刷らせた？

番頭。でも、大將、あの時これでいいッて仰つたでせう？

田中。が、みんながそう云ふとこを見ると、よつぽど刷りが惡いんだ。君が、もう少し店へ駄目を押しやアよかつたんだ。

番頭。隨分駄目は押したんですが。

田中。チエッ、どいつもこいつも氣の利かねえ奴ばかりだ。

女中出る。

女中。あの——原さんがいらつしやいました。

田中。原？　とほしてくれ！

女中。はい。（去る。）

番頭。出て、すぐやつて來たんですな。

田中。馬鹿野郎め。二十日も番頭と一緒にとめられやがつて。

番頭。その位當り前でせう。

原出る。

原。ヤアしばらく。

田中。（冷たい苦みを以て）實際しばらくだよ。

原。（番頭へ）こんちは。

番頭。こんちは。——此のあひだぢうは御氣の毒でしたな。

原。いやどうも、すつかりまゐつた。出て來るなり、今日はやつて來たよ。

田中。ふん、それつ位當然さ。

原。（同情を求めるやうに）だが君、僕にも同情してくれ。何しろ飛んでもねえ共謀の嫌疑なんか受けて、今まで番頭と一緒に留置所に置かれてさ。そのあひだ商賣は出來ず、當てにしてゐた骨折り賃は貰へず、こんな馬鹿を見たタメシあねえ。

田中。（冷嘲して）それも四千兩の下駄を穿いた報ひさ。そう思やア安いもんだ。

原。冗談ぢやアねえ。その四千兩だつて、一文殘らず吐き出しちまつてるんだ。

番頭。（皮肉に）でも、何時間でも四千兩持つてたからいいでせう。そこへ行きやあ、僕なんざ全くの飛ばッちりで三四日も留められた。

ッて………。

原。おいおい、もういい加減で勘辨してくれ。

田中。全く君なんざ愚痴を云ふ分はねえ。僕の身になつて見ろ。

原。いや、君にやあ何とも濟まねえ。僕あ愚痴のつもりで云ふわけぢやアねえ。

田中。だが、君もえらい奴を紹介してくれたな。

原。實、小早川にやアおどろいたよ。あんな凄い奴たア思はなんだ。おまけに今までつかまらねえなんて、まるで魔物見てえな野郎だ。

田中。、、、、、がボンクラだからよ。

原。いや、、、、鈍いより、彼奴がすばしツこいからさ。

田中。變に賞めるな。

原。おい、おい、妙に勘ぐらねえでくれ。僕ア、、、、、をしてゐるんだ。

田中。、、、、、きわまるぢやアねえか。

原。(避けるやうにポスターを見あげて)これほどにしてつかまらねえとこを見ると、彼奴を匿まつてる奴がきッとある。

田中。(鋭く見つめて)心當りでもあるのか?

原。心當りはねえが、見當はつく。

田中。見當?

原。うん、僕の見當ぢやアね。相棒と迄あ云へなくても、わけを知つてかくまつてる壯士がゐるにちげえねえと思ふんだ。

番頭。壯士?

原。そうだ。そいつと相談づくでゐちやあ、こいつアとても容易にやアつかまらねえ。

田中。たかゞ壯士位え………。

原。どうして君、奴等の中にやア恐ろしい奴がゐるからな。今まで出ねえのが何よりの證據だ。これで、もし滿洲あたりへ高飛びでもしたら、もうとてもわかりッこねえ。

田中。おい、おい、馬鹿を云へ。そんな事をされてたまるか。だが警視廳ぢやあ、そう云ふ方面へ探りをつけちやアゐねえのか。

原。どの程度まで氣がついてるか疑問だ。

田中。(番頭へ向つて)おい君、すぐ警視廳へ電話をかけてくれ。そつちのほうを充分探つてくれつて。

番頭。承知しました。(去る。)

原。(眉をひそめて)君もだが、小早川の逐電にやあ工藤も弱つてるだらう?

田中。おどろいてるそうだ。

原。四萬八千圓だからな。が、こつちの方は、こいつア大丈夫だらう

な？

田中。無論さ。薄々見當はつけてゐるらしいが、確かな證據はなし、何しろ當の相手の小早川がゐねえと來てるから、告訴も出來ねえや。

原。と、もし小早川の奴が見つかつたら、こつちも氣をつけなくちやアいけねえぜ。

田中。彼奴しやべるか？

原。無論やるぜ。だつて、そうすりやアこつちを中へ捲き込む事が出來るし、彼奴のほうはその爲め大した刑の増す心配もねえから。

田中。(唸つて)うむ、彼奴ならやりかねねえな。(急に氣がついたやうに)おやあ、奴そのつもりで初めから芝居を書いたか？ 前の相棒に引ッ張り込んで置いて、今度もし自分がつかまつた時、おれ達に思ひ切つた眞似が出來ねえやうに。

原。確かそうだ。僕ア留置所にゐるあひだ、暇にまかせていろいろ考へて見たあげく、そう思つた。

田中。(拳固を振り廻して)畜生！ 悪黨め！

原。全く用意周到な奴さ。

田中。叩ッ殺しても足りねえ！

原。だが仕樣ねえ。こッちやア、そうなつた日の用意をして置かなくちやアいけねえぜ。僕ア、その時あ告訴を取りさげるか？

田中。(唸る)うむ……

原。捲き添へを食ふも馬鹿々々しいから、やッぱり示談にして、十萬圓の中から取れるだけ取つてケリにするんだな。

田中。だが、檢事のほうで告訴するかも知れねえ。

原。そうなッても、こつちア大丈夫だよ。

田中。何が大丈夫だい畜生！——何てベラボウな話だ！ 盗人に追銭たアまさにこいつだ。今まで、廣告代やら自動車賃やらで五六千兩も費つてる。それから此の(ポスターを指して)三千五百兩だ。それから雜費だ。その結果が、、、、取れるだけ取るツきりか……もしマンマと七年間逃げてゐやがつたら、時効で鐚一文取れず了ひか！ 何て不都合な、、だ！ 不都合な、、だ！

原。全く不都合な、、だよ。

道具方達。ははは……盗人どもにあ、盗人どもで、、の不合理があるとさ。

奇妙な不合理だ。

どしどし轉換しろ！

第七景

人物

田中。
鈴木。
原。
警部。
料理屋の女中

時　前景から十日ばかりあと。

處　料理屋の一室。

田中と警部、飲みながら話してゐる。

田中。(注ぎながら)どうして旦那がたの力總がかりで擧げられねえか、實際不思議です。

警部。いや、小早川見たいな奴は珍らしいよ。ありやアよつぽどの惡黨だ。

田中。もう丁度一月になります。

警部。此のまんまぢやあ、二月が三月でもあぶねえ。

田中。戯談ぢやアありませんぜ、旦那。

女中出る。

女中。御待ちかねの御客さまがいらッしやいました。

つづいて原と鈴木出る。

原。(田中へ)首尾よく鈴木君を引ッ張つて來たよ。

田中。いや、御苦勞。

原。(警部へ向つて)こりやあ旦那。

警部。やあ。此の前は、君、氣の毒をしたな。

原。いや、僕のほうこそ御手數をかけて。

田中。(愛想よく)鈴木君、よく來てくれたな。此の前は濟まなかつたよ。

鈴木。今やッとわかッたかね。

田中。まアそう云ふなよ。不足の分は拂つたぢやアねえか。

鈴木。おい、拂はせられたんだらう？(警部へ)こりやアしばらく。

警部。しばらくだなあ。

鈴木。田中君の事件ぢやあ、飛んだ御骨折りですな。

警部。いや、僕ア職務だから。

鈴木。どうです、ちッたア目星がつきましたか？

警部。駄目さ。で、今日は田中君と相談して君に來て貰つたわけさ。

鈴木。(笑ひ出して)ははは……………私立探偵ッて格ですか。

田中。君は、大分壮士仲間に知り合ひがあるやうだから、是非一つ相談

談に乘つてくれ。御禮はタンマリ出すよ。
鈴木。こいつあ晴天の霹靂だ。珍しい事を聞くなあ。
警部。まあ一杯。(猪口をさす。)
鈴木。恐縮。
田中。いや、ほんとだよ。
鈴木。(猪口を吸つて、わざと感心したやうに田中を眺めながら)だが君ア、いつもながら警察や御役人好きだな。
田中。どうして?
鈴木。どうしてツて、今度の事件も早速此の旦那達(警部を指して)へ頼んでるぢやアねえか?
田中。そりやあ當り前だらう?
鈴木。當り前かね。ふん。(又原の注ぐ猪口を飮む。)
田中。ぢや、君ならどうするんだ?
鈴木。僕なら?……僕なら、そう云つちやあ、、、、あ失禮だが、、、へなんか、決して頼まねえや。
田中。で、どうする?
鈴木。「小早川キタレ」……とか何とか、その代り簡單な新聞廣告をするよ。
原。ほう。
鈴木。すると奴さんさツとやつて來るさ。、、へ云つて出るなんざあ、馬鹿の下々の下の手さ。云つて出やうと思つたら、そんな事アいつだツて出來るぢやアねえか。君のやうに慌てふためいて飛んで行く必要はちツともねえ。
田中。だが、それで奴さツと來るか?
鈴木。來るとも。——が、もう今からぢやあ駄目さ。
田中。來たら、、へ突き出すツて寸法か?
鈴木。ヘツ、又、、かい? なんの、來たら十萬圓の半分位、スツパリ奴に呉れてやるんだ。そのほうがよツぽど悧巧で、おまけに利益よ。なぜツて、そうしたら、此の後いつまでも奴を自由に使ひ廻す事が出來るぢやアねえか。——(警部へ向つて)ねえ旦那、そうでせう?
警部。(苦笑して)そう云ふ質問には我輩は返答しかねるな。
鈴木。だが、、、、、、、、、でせう? 、、、、、、、、、コツを知つてる人間なら、こんな事ア誰だつて朝飯前の、わかり過ぎてる事だ。——そいつを、のぼせて慌てて、矢鱈こんなに事件を大きくしちまツちやあ、犯人のつかまる見込みアもう絶對ねえ。
原。おいおい。鈴木君。そうタカをくくられちやあ困るよ。その表口からぢやあ出ねえとこを、一つ君の力で裏口から突ツつき出して貰

ひてえんだ。

鈴木。駄目だよ。ぢや今になつて何か出來るもんか！

警部。まアそう云ひ切つたもんでもなからう。

鈴木。（皮肉に）こゝらが旦那の見せどころでせう。

田中。だが鈴木君。旦那がたへ賴まなんだほうがよかつたの何のツて云ふなあ、今になつてから云ふ事さ。あとからなら、誰だツて、何とだつて云へるさ。

鈴木。戲談云ふない。だから君ア、狡猾いくせに目先きの利かねえ土龍だツて云ふんだ。一體小早川がどんな人間か位、初めツからわかつてゐなくてどうする？　僕ア一度きり彼奴に會つた事アねえが、その時すぐ、はゝア、こいつアどうして一筋繩や二筋繩の代物ぢやアねえ、今にドエライ事をヲツ初めるだらう、とすつかり睨んでたんだ。

警部。こゝを知るだらう。

鈴木。こりやあ痛み入つた御賞めだな。だが、當らずと雖も遠からずかも知れねえ。旦那、正直なとこを云やあ、僕ア奴よくやツたなと思つてるんですよ。僕だけぢやアねえ。陰ぢやアみんなそう思つてるんだ。何故ツて云へば、此の田中君があんまり金一方で、下等で、野鄙で、みんなに憎まれてゐるからです。ほんとうの味方ツたら、まツたく一人もゐねえんですから情ね
だから君ア矢鱈悲觀してるか知らねえが、一體こんな目に會ふなあ當然だぜ。

原。ひでえ事を云ふな。

鈴木。ひでえもんか。君だつて、ぢやあ田中君のほんとの味方かね？

四千兩はどうした？

原。（滑稽で紛らせるやうに手を振つて）おい、もうそんな濟んだ事は云ひツこなしだ。

鈴木。同じ惡黨でも、人氣不人氣ツて奴がある。今の世の中ぢやあ、田中君のやうな人間か出來るなア一向不思議アねえが、から味方がなくつても不人氣すぎらあ。おい君、現に僕自身、君から十萬兩位取つてやらうと考へた事を知つてるか？　そいつを一足小早川に先を越されちまつて、僕ア殘念で仕方ねえんだ。

田中。おい、あんまり調子に乘つて脫線するなよ。

鈴木。此の頃の電車ぢやアあるめえし、心配御無用よ。君は知るめえが、相當君の信用してゐる或る同志に賴まれて、僕ア實際内々その計畫を進めてたんだ。マンマと成功したら、あとどう金を處分するか迄、ちやんと考へてたんだぜ。參考までに一つ話して見やうか。

警部。そいつア、こッちの參考にもなりさうだな。

鈴木。大いになりますぜ。成功してからの計畫ってのはかうさ。首尾よく君から取つたら、僕ア小早川とちがつて決して逃げねえ。逃げおほせねえ事ア無論ねえさ、が、女房や子供やいい女があつちやあ、一寸そうは出來かねら。田中君、一寸ここで告白して置くが、君が僕に後始末を頼んだあの女ね、あいつアその後、僕と多少の仲になつてるよ。

田中。なに、ふみ子が？

鈴木。うん。その位な仕事ア僕にも出來るさ。――で、僕ア逃げられねえ。もつとも小早川だつて女房があるが、奴と僕たア少々ちがふさ。すると金はどうするかだが、僕ア五萬圓ばかり持つて、すぐ深川へ自動車で乘りつけて、あそこらの貧民窟へウンとバラ撒いてやる。長屋々々の門口から、何々會の救濟金だとか何とか云ひながら、ポンポン軒並み抛り込んで行くんだ。そいつあ無論、今日にも腹が減つて死んでゆく貧民救助の意味もあるが、同時に十萬圓全部匿し了せるわけにやあ行かねえからさ。そんな盗人一方となると、世間への品も惡くなる。大正の鼠子僧を氣取るわけぢやアねえが、かうすりやあ世間の人氣も出る上へ、いくらでも、十萬圓そつくり撒き散らしたやうに見せかけられるぢやアねえか？　あとで幾ら警察で金を取りあげて廻つたつて、おそらく撒いた金の半分も出やアしめえ。と、そこんところ五萬や十萬の違ひが、わかりッこあるもんか。さてそこでつかまつたら、一體犯罪の動機ぢやアあんまり田中君は評判がよくねえから、きつと大して嚴しい訊問はなくて濟む。刑だッて、精々まあ一年半か二年で放免になるにちげえねえ。さアその時あ、天下晴れて殘りの犧牲報酬五萬圓、すつかりこッちのものになるッて寸法さ。(警部へ向つて)どうです旦那、何と妙案ぢやありませんか？

警部。(凝視して)そりやあシラフかね？――ならば、、、、、、、、、、しやべりまくるなア、一寸不敵すぎるなあ。

鈴木。ちと醉ひが廻つてますか？(愉快そうに)はッはッはッはッ

…………。

原。全くヅケヅケ云ひ過ぎる。

鈴木。だが、聞いてて愉快だらう？

田中。(悄氣て)ちッとも愉快ぢやアねえや。

鈴木。や失敬、失敬。君がゐる事をつい忘れちまつたよ。だが君、諺にも云ふぢやアねえか、良藥口に苦しッて。――君に取つちやあ、こいつア此の後どの位藥になるか知れねえぜ。ただ聞かせるなア惜しい位えなもんだ。

田中。(ブリブリして)苦すぎらア！

鈴木。はツはツ、利き過ぎたかい？

警部。まるで病人問答だな。鈴木君、まアそんなに云ふなよ。御馳走になりながら。

鈴木。はツはツはツ……。

原、痛いやうな痒いやうな表情で微笑する。

道具方達。（その時立つて）我々を馬鹿にした芝居だ！　こんな芝居をやらせる爲めに働く必要があるか？

（一人舞臺の前へ進み出て、看客へ向つて）

諸君！（田中等を指して）こんな怪しからん芝居を、諸君は默つて觀てゐられるか？

看客席の聲々。ゐられねえ。おれ達は、こんな芝居の爲めに高い見物料や税金を拂ふ必要はない！　絶對ない。

道具方達。よろしい！　（一齊に田中鈴木達の一群へ進み寄つて）やめろ、こんな芝居は！

田中達。なんだ君達ア？……か？

道具方達。（胸の赤い星の印を指して）見ろ！　道具方だ。

田中達。なアんだ。道具方の分際で生意氣な！

道具方達。芝居をさせてやる君はおれ達だ。やめないと叩きつけるぞ！（腕や鐵鎚を振りあげる）

田中等みな立つ。

……。こら、亂暴をするな、……？

道具方達。なに此の木偶。——みんな失せろ！

田中。……だ！

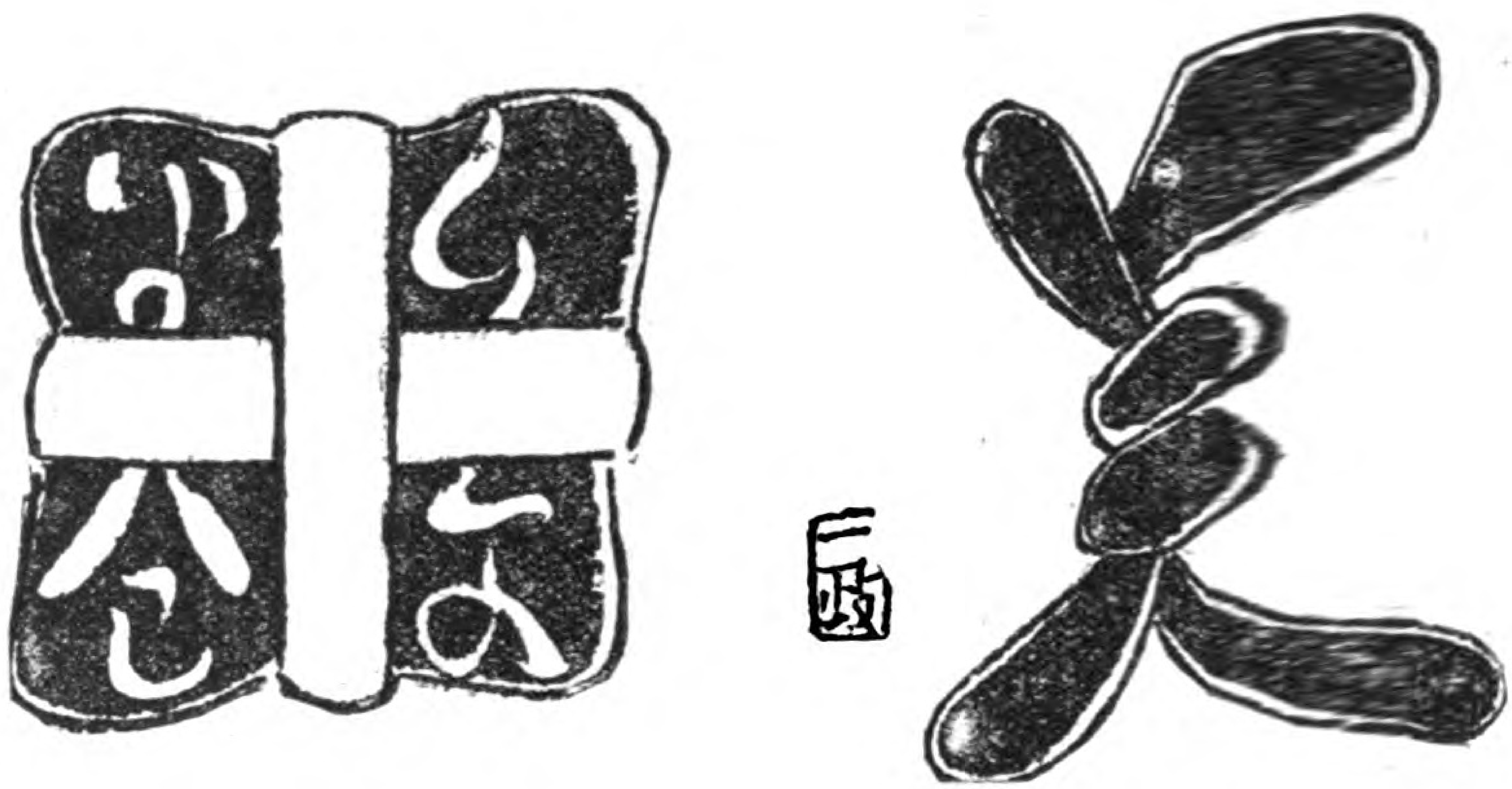
原達。おれ達の芝居妨害だ！

彼等、喚きながら右手へ逃げ出す。

看客達の聲。追つ拂へ！　みんな追ツ拂へ！

——幕——

一九二八、八



或るソシアリスト
(眞知子のつゞき)

野上彌生子

一

三日の後、眞知子は學校からセツルメントに廻つた。到るところ工場と屑屋の多い、町と云ふよりそれ等の工場と屑屋の延長の如く見ゆる通りに、ちよつとしたメリヤスの作業場と材木置場に挾まれて、その建物はあつた。褐色の質素な二階屋であつた。米子は階下の日當りのよい、が、隣りの機械の音に一番近い一室で、十人あまりの子供たちを相手に折紙を折つてゐた。

『あら。』

入口のドアから覗いた顔を見つけると、米子は五色の正方形の紙の散らかつた卓から立ち上つて來た。先夜別れた時、一度見に行く約束はしたのであるが、今日すぐ果されようとは考へてもゐなかつたらしかつた。眞知子は午後からの講義が休みになつたので、その時間を利用する氣になつたことを話した。

『どなた。』

『××先生。』

『相變らずなのね。』

『聽きたいお講義ほどお休みが多いのだから厭になつちまふの。』

社會學を全然經濟學の基礎の上に置かうとしてゐるこの教授のやり方は、大學でも最も評判のよい講義であつたが、同時にまた彼が時間の半分出ないことも有名であつた。併し如何なる理由からにもせよ、それを見捨てゝ斯う云ふ場所で働いてゐる友だちに對して、呑氣らしく學校の話を續けるのは氣がさした。眞知子は代りに聞いた。

『お邪魔ぢやなかつた。』

『ちつとも。でも、斯んなところ初めてなんでせう。』

云はれる通りであつた。電車を下りてからも何軒あつたか知れない屑問屋の嘔氣つくやうな屑の集積。それを分類するために同じ屑の塊まりになつて働いてゐる人々。鐵工場の見透しになつた盛んな爐と、灼けた眞つ赤な鐵板と、火花と、荒いぶつ切るやうな金槌の音と、それを振りあげた逞ましい腕。染物工場らしいトタン塀から往來いつぱいに溢れ出した藍青のやうな臭い水、その中をどこから現はれたかぼしやぼしや歩いてゐる二羽の貧しげな家鴨。――途中出逢つた光景が今一度眞知子の目にあつた。同時に一種の感慨と好奇的な興味の觸發として、其處に米子を取り巻いてゐる子供たちもそれ等と等なら

のではなかつた。思つたほど見苦しい

の不良と發育の不完全が共通の缺點らしかつた。何處か知ら繃帯した

り、膏藥を貼つたりしたものが多かつた。普通の幼稚園に見る明つ放しな可愛らしさに缺けてゐた。併しこの子供たちを、米子が最上の優しさと注意で手際よく取り扱つてゐる有様は、眞知子を喫驚させたほどであつた。彼女の態度には少しも職業的なところがなかつた。細工物の出來を讃めてやるのでも、何か仲間にいたづらした男の子を叱るのでも、また誰かがひようきんなことを云つたのを面白がつて笑つたりするのでも、自然で、樂しさうで、ふだんの彼女よりはずつと生き生きして見えた。大學の聽講生になる前の一年間、米子が或る外國婦人の經營してゐる傳習所で嚴正なフレーベル式の教習を受けたことは眞知子も知つてゐたのであるが、正直に云つて、斯うまで立派に役目を果してゐようとは今日まで信じてゐなかつた。で、玩具で自由なお遊びになつて、一人が少し話をする暇が出來た時、何より先きにそれを云つて讃めると、米子は、自分が傳習所に入つたのは、百姓たちが働いてゐる間、田の畔や閉め切つた小屋の中に打つちやられてゐる彼等の子供たちのために、丁度このセツルメントでやつてる託兒所と幼稚園を兼ねたやうなものぶしこ見たかつたのだと云つた。

『兄に都合がついて、私の計畫した仕事が田舍で出來てゐたら、それつきり東京には來なかつたかも知れないわ。』

『ぢやそのことが旨く行かなかつたのは、私たちに取つては仕合せだつたのね。』

『それはさうよ。大學で一緒になるまでは』そこまで云ひかけ、米子はその灰がゝつた眼で狡さうに瞬きながら念を押した。『怒らない。』

『なにを。』

『あなたのこと、正直に云つても。』

『大丈夫。』

『私のやうな田舍者には、取つつき場のないお孃さんに見えたんですもの。』

眞知子は出來るだけ怖い顏を裝つて相手を睨んだ。返報として、見知り越しの上級生のうちで、一番陰氣で、むつちりして、底が知れなかつたのは米子だつたと云ひ返した。二人はこの惡口の交換が樂しかつた。

壁にかゝつた、多分寄附らしい、他の道具類とは不似合にハイカラなクックウ時計が二時を打つた。眞知子は子供たちにもう玩具を片づけなければならない時の來たのを注意した。これで『左樣なら』のお揃の歌をうたへば、彼等は歸れるのであつた。

『私に彈かしてくれない。』

部屋の隅に置いたオルガンの前に進み寄る米子を見ると、眞知子はふとさう云ふ氣になつた。米子は勿論悅んで入れ代つた。子供たちにも、今日は先生のお友だちが彈いて呉れるのだから、いつもよりもつと上手にしませうと云ふやうなことを云ひ聞かせ、自分は彼等の輪の中に交つて、左樣なら、皆さま。左樣なら、ごきげんよう。と云ふ別れ言葉をうたひながら、お互ひにお辭儀し合つた。

眞知子は歌に合せて單純な音譜を何遍も繰り返して彈いた。ひどい樂器であつたが、オルガンの持つ哀愁と、子供等の可憐な肉聲が、殊に見すぼらしい小さい群の合唱であるだけ、もの悲しい、和やかな、柔らぎを眞知子の胸に與へた。而かも彼女は彈きながら、周りの有樣とはまるで別なことを思ひ浮べてゐた。彈條のゆるい、こわれた籠のやうな音を立てる貧弱な樂器の代りに、一と月前の園遊會の晚、富美子と多喜子とでリストのチュエットを彈いた素破らしいベヒシュタイン製のグランド・ピアノや、贅澤な客間や、着飾つた客の群がそこにあつた。あの時無理に彈かされて、先きに彈いた二人よりもつと立派に出來たとしても、今これ等の子供たちのために、隣りのメリヤス機械に邪魔されながら彈くほど愉快ではなかつたに相違ないだらうと思はれた。

子供たちが歸つてしまふと、眞知子は××と云ふ富豪の有名な洋畫の蒐集を主として、半月ばかり前から上野で催されてゐる展覽會が、今日で終る筈であることを注意した。

『よかつたら、一緒に行つて見ようかと思つて。』

『さあ、どうしませう。』

何か思案する時の癖で、米子はその白い長めな頸を傾けながら、ひとり言のやうに云つた。義務としては幼稚園だけでよかつたが、自分から夕方まで託兒所の仕事を手傳つてゐたのであつた。

『あんたもまだ。』

眞知子は一度は既に行つて見たこと、でも何度見に行つてもいゝ位立派な畫が揃つてゐること、今日來たのも半分は誘ひ出すためであつたことを打明けた。米子が畫の好きなことを眞知子は知つてゐた。

『どうしても都合わるければだけれど、――あれを見ないのは惜しいわ。』

『何時まで。』

『たしか五時よ。でもすぐ暗くなるから早い方がいゝの。』

二人はめいめいの手頸をのぞいた。頓て三時に近かつた。米子はあちらの様子を見た上にするからと云ひ、眞知子を入口の廊下に殘しておいて、赤ん坊の泣き聲のしてゐる奥の部屋の方へ駈けて行つた。引つ返して來た時には歸り支度になつてゐた。

鶯谷まで十五分とはかゝらなかつた。早い落葉の散つた坂を、二人はそれでも急いでのぼつた。博物館に添うた路から、向ふの廣場に立つた寂びた鉛色の建物と、正面の灰がゝつた大理石の圓柱や階段が、晩秋らしい櫻のしづかな木立を通して眺められる場所に出ると、その時まで默つて歩いてゐた米子が、彼女を默らせてゐたものに就いて、矢張り話さないではゐられないと云ふ様子で口を開いた。

『ふだん考へてることなんか何んにもなりはしないのね。』

『それはどう云ふ意味。』

『斯んな場合になつて見れば、これまでの生活を一歩も出てゐないことがはつきり分かるんですもの。』

彼女の最初のためらひも、その内省からであつたのが眞知子には分つてゐたから、わざと強く、働くことゝ優れた畫を見ることが抵觸する筈はないと抗辯した。

『それに、あんたの仕事は幼稚園ですんでるのですもの。』

『でもね、夕方あの赤ん坊を受け取りに來るかみさんたちのことを考へると、畫を見るなんてことが、どんなに暇の多い贅澤な生活かと思ふの。』

「畫ぐらゐ見るのが贅澤なら、——もしそれを惡いと云ふんなら、——」

『畫を見て惡いなんて、』米子は急いで云ひ直しながら『そんな意味ぢやないわ、たゞ誘はれゝばする事を打つちやつても行つて見たくなる私の氣持が、自分としては駄目だと思ふだけよ。』

『さう云ひかければ——』

併し入口の階段に到着した。それをのぼり、青茶色の粗い布張りの壁で出來た陳列室に進むと共に、二人の會話の主題は、セツルメントの埃りつぽい窓や、ぼろつ屑の山や、工場のハンマや、旋盤や、煙突の轟や、煤煙のうづ巻きやと共に後に消滅した。彼等はそれに就いてもう何んにも話さうとはしなかつた。十八九世紀のイギリス及びフランスの代表畫家の作品を主として、一層古いフランドル派や南歐のものをさへ交へたその豐富な蒐集は、これまで寫眞版で想像したり、名前を聞いたりしてゐた畫家たちの原作を見せて呉れる點だけで云つても、貴重な觀物であつた。たとへばセガンチニの『羊毛刈』の畫に向ふ時、彼等は、板小屋の前で一匹の羊の毛を刈つてゐる女の背中、腰、羊を押さへつけた左の腕と鋏を動かしてゐる右の腕の素晴らしさに先づ驚かされる。それから金髪の上に載つてゐる、うす藍色の着物に對して最も効果的な赤い帽子。その女と向ひ合つて、反對の側から同じ仕事に從事してゐる男の、中こゞみになつた素朴な姿、二人の周圍に散らかつてゐる和やかな綿毛、後の柵にうごめいてゐる羊の群、その上に遙かに澄み渡つた蒼い空と灰黄色の土の擴がり——これ等に依つて、如何にもアルプスらしい高原の空氣と、自然と、生活を味ふ樂しみに醉ふと共に、同時にひそかな子供らしい感激に打たれる。今こそ眞實のセガンチニを見る、と云ふ悅びでそれはあつた。ロゼチの三つの作品の前では、二人ともそのこゝろを言葉に出し合つた。レ・ラファエル派の繪畫を我々の上野で自由に鑑賞されることを誰か想像し得たらう。——取り分け『生』の哀愁を表象してゐるやうな灰がゝつた肉づけで仕上げられた婦人の半裸像が、顏面と頸の特異性に依つて、疑ひもなく詩人なる畫家の妻で、若くして逝いたシダルであつたことは、畫の價値以外になつかしい興味であつた。米子は今日が初めてゞあるだけ、一層強くその思ひを感ずるらしかつた。長くその前に佇み、それから回顧的な微笑で眞知子の方へふり向くと、學校時代に教はつた英文學の若い教授の名前を囁いた。ロゼチと彼女とのロマンチックな結婚や、その墓窟に收めた詩が再び世に現れるに至つた顚末を話して、三四年前のもつと平氣に無邪氣であつた彼女たちを面白がらせたのはその人であつた。

同じやうな女らしい追懷から忘れることの出來ない畫家を、眞知子

も他に一人持つてゐた。それはバスチアン・ルパアジュであつた。最も堅實な寫實主義の上に立脚した外光派の代表畫家としてよりも、マリ・バシュキルツエフの死の前の哀しい愛人であつた點で、深い興味が彼にあつた。で、その『林間樵夫』の圖は最初見た時から非常に好きとは云へなかつたし、傑作とも信じなかつたが、それでも畫面の前は、懇意な家の門口のやうな親しみを今日も彼女に感じさせた。眞知子はしばらくその場所から離れなかつた。お仕舞ひには畫のみを見てゐたのではなかつた。マリの手記に殘されたバスチアンに關する記事の斷片を、それよりもその二卷の記録に示された彼女の驚くべき生命力を、而かもマリが自分と同じ年までしか生きなかつた婦人であり、それに比べて、どんなに貧弱な見すぼらしい生活しか自分が持つてゐないかを思ひ續けることに依つて、丁度愛讀書にしてゐる彼女の手記を讀む時、感じさせられると同じ發奮と嘆聲が畫を通じて湧いてゐた。入つて來る人々も既に數へるほどしかない、また四面の繪畫の性質から、普通の展覽會よりもどこか外國の古い町の畫廊にでも在るやうなその場の靜寂の中では、何を思ふても、どの畫の前にどれ程長く留まつてゐても邪魔はされなかつた。

側へ來て自分に近づく人のけはひで眞知子は我に返つた。いつとなく思ひ思ひの畫に別れてゐた米子が寄つて來たのだと考へた。胸いつぱいになつてゐる感激も打ち明けたかつた。が、見ると

は關が立つてゐた。

「お一人ですか」

「いゝえ」

米子と一緒だと云ふことが、すぐ續かなかつた位、その不意打ちは彼女をあわてさせた。何それより、自分は彼に氣がつかない前から、彼の方ではバスチアンの前にうつとりしてゐた自分を注意してゐたのだと想像することが、變に腹立たしかつた。何んだつて、逢つたたびいやな念ひをさせるのだらう。――眞知子は三日前の晩の彼の露骨な素ツ氣なさを考へ、再び斯んなところで出逢つた運のわるさにたれないから、米子を探し出さうとしてあたりを見廻した。その時、次ぎの部屋に連なる隅の壁の古風なオランダ畫の前から、丁度二人の邂逅を見つけた米子が後戻つて來た。

「御一緒だつたのですか」

「曾根さんに引つ張り出されて。」

お互ひだけに分かる調子で米子は答へたから、眞知子を振り向いた。でもそれに就いて彼になにか說明する氣は眞知子にはなかつたから、わざと知らぬ顔をしてゐた。米子はこの間の晩自分でもこの展覽會のことを話して置かうと思つてゐて忘れたのだと云つた。

同じものを同じ順序で見て廻る關係から、彼等は離れた後もすつかり離れ〴〵にはならなかつた。二人の方が先きに進んでみても、何かの壷に少し長く立ち留まつてゐるうちには關に追ひ越された。追ひ越した關も同一の理由で後に殘された。斯うして出口に近づいた時には、彼等は最初からの伴れのやうに三人で並んで階段を下りた。

外には早い灯がつき、僅に風が出てゐた。が、申分なく上天氣であつた名殘りの夕陽で、時間にしては明るく、空氣も冷えてゐなかつた。却つてまだ黄昏になり切れない影が、あたゝかい霧のやうに低く地面をぼかし、木立、森、表慶館の青銅の圓屋根、その上の蒼い空と雲、それ等に殘つてゐる輝きに點綴して、奇妙に美しい陰翳を作り出してゐた。

米子は、もし疲れてなく、これから谷中の墓地を抜けて田端まで歩いて具れるなら、わるい散歩ではないだらうと云つた。併し關には訪問しなければならない人があつた。眞知子もまつすぐに歸つた方今日は都合がよかつた。

『本郷はね』鶯谷までいつしよに出ることになつて歩きかけると、米子は云つた。『私たちの來るときの話、關さんに聞いて貰はうと思つたの。』

『何です。』

眞知子より先きに、花の蔭を歩いてゐた關自身が口を入れた。

『この次ぎでもまた三人落ち合つた時のことにしますわ。ねえ。』

先刻の話だけならば何も關の批評を俟つまでもない、と眞知子は考へたし、且つ逢つたたび氣まづい念ひをさせられる彼にいつかまた出逢ひたいとも感じなかつた。がそれを機會に、總選と云はず一般の藝術に對する、ソシアリストとしての新しい見解が何か彼から聞かれるならば、聞いて見たい興味がないことはなかつた。眞知子はそれを云ひ出さうとしかけ、ふとほかのことに注意が逸れた。誰か女の聲で後の方から彼女を呼んだ。尚その呼びがけを確實にしようとするやうに手を叩いた。大した人通りもなかつたとは云へ、まだ十分明るい公園の廣場でのこの仕方は、眞知子と連れ立つた二人をも驚かし、彼等はいつしよに振り返つた。今あとにして來たばかりの階段前の砂利道に、海色に塗つた新型の自動車を側にして、頸筋の白い田口と、その肥つた老博士の横では一層高く見ゆる河井が多喜子と共に佇み、それから一間ばかり先きのところに、富美子が兩手をらつぱにして口に當てゝゐるのを眞知子は認めた。彼女は自分の呼びかけが成功したのを見ると、今度はその手で眞知子をさし招いた。それからあとの人たちを顧みて何か面白さうにしやべつた。眞知子は避けることが出來なかつた。すぐ追つつくから遠慮なしに歩いてくれるやう米子に頼み、今

一度うしろへ引つ返した。

『いま云ひ合ひしたとこなのよ、あなたかあなたでないかつてことでもつて。』眞知子が近づくと、富美子はまつ先きにいつもの風ではじめながら『多喜子さんと父は違ふと云ふ方の組で、河井さんと私は此度あなたゞつて云ひ張つたの。でも本統を云ふと私あなたの洋服のこと滅多に見ないでせう、ですからこちら向くまでは、若しかしてほかの人だつたら大變だともつて心配したの。――勝つてよございましたわねえ、河井さん。』

非常に滿足な勝利だと云ふ意味を、河井が實際滿足さうな微笑で答へると、田口はこの負けは富美子から必ずたゞではすまされないだらうとおどけ、多喜子はまた、これまで一度でも眞知子の洋裝を見てゐたら、自分も決して間違ひはしなかつたのだと云つた。

『そんなこと仰しやれば。』富美子はこの面白い諧謔の材料を容易に捨てまいとして『河井さんだつてお分かりにならなかつた筈ですわ。』

併し河井はこの洋服の眞知子に一度逢つたことのある話をしたので、それなら勝ちにはならないと抗議された。

『はじめから知つてゐらしたのですもの、ねえ、多喜子さん。』

『それを默つてゐらしたのだから、なほと人がお悪いわ。』

多喜子は富美子に加勢しながら、いつ何處で見たのかを河井に聞き出さうとした。

眞知子はほんの通學の便利のため着てゐる自分の得意でもない服裝が、彼等のお饒舌に利用されることは厭やでもあれば恥しくもあつた。で、それを打ち切るためにわざと河井に話しかけた。

『今日はじめていらつしやいましたの。』

『さうです。丁度先日お目にかゝつた明けの日から旅行に出てたものですから。』

『今朝やつと歸つて來られたので、お誘ひした譯なんです。』

田口は新しくつけた葉卷の煙の中から言葉を添へ、序でに河井に向つて豫想したものと違つたかどうかを尋ねた。非常に立派なものが多いやうだ、と河井は素直に讃めた。

『これは一部分で、倘この何倍と云ふほど××さんでは蒐めてゐるのださうですから大したものですね。それに就いて實は面白い話があるのでして。』何か興味のある話を持ち出さうとする人の、誰よりも先づ自分自身面白がつた樣子で、田口はこの展覽會を見た或る男の批評を傳へた。『仲々警句家ですが、それが云ふのです。××さんなんて人間が、一代にあれだけの富を成すには碌なことしてないのは事實だが、斯う云ふ書を日本のものにした功績で、過去のことは帳消しにしてやつてもいゝだらうつて。これも一[illegible]

河井は直接彼の意見を述べる代りに、靜かに眞知子を顧み、それをどう考へるか尋ねた。併し彼女はそんな話よりも、どうかして彼等から別れるきつかけを探す方熱心であつた。自分を待つため、意識してゆつくり歩いてゐるらしい關と米子の後姿が、向ふの榎の下の道に、いつまでも遠ざからないで目に入るのも氣になつた。そこへ田口の兵隊上りだと云ふ岩丈な運轉手が、動物園の方の通りからいそいで歸つて來た。何か使ひにやられてゐたのだと見え、彼は返事の言葉を傳令のやうな口調で報告し終ると、早速、その間の遲延を取り返さうとするやうに車の戸を開けた。

富美子は眞知子にも乘つて行つてはくれまいかと頼んだ。

『目白の家でなにか出來てる筈なのよ。御一緒に入らして下されば母さん悦ぶわ。お宅には電話でさう仰しやればいゝんでせう。ねえ、お父様。』

田口も好人物らしい氣輕さで娘の申出でを支持した。併し眞知子は連れの待つてることを云つて斷つた。

『どこに。——まだ待つていらつしやるの。』

云ひながら富美子はくるりと向き直り、その茶つぽいいたづらつ兒じみた眼で二人の方を眺めた。その時彼等は木蔭の道から博物館前の廣い通りへ出ようとしてゐた。左を歩いてゐる、關の白皙な横顔は、薄暮の淡い斜光のうちでも紛れなかつた。それだけその目標には、富美子のみでなく、他の人々の注意をも新たに引いたやうに見えた。併し彼か、若しくはその隣りの彼女か、誰であるかを聞かうとするほど無作法ではなかつたから、眞知子はそれに就いて別に說明させられないので別れを告げることが出來た。なにか逃れた感じであつた。でその儘、後に續いて疾走し去つた彼等の威勢のよい乘物とは反對の方向へ、俄かに黯ずみかけた道を少年の如く馳けて行つた。

關と米子は博物館の門のところで彼女を待ち受けた

『すまなかつたのね。』

『うゝん。』

河井たちが二人に對して愼しみのある沈默を守つたと等しく、彼等もその華美な仲間に就いて餘計な質問をしようとはしなかつた。この默殺は眞知子にはむしろ苦痛であり、同時にあんな人々と親密な間柄であること、一緒にあゝして立つてゐた間、明白にその同類と見えたであらうことも恥かしかつた。眞知子は何かひけめのあるもののやうにそのまゝ默つて米子の横を歩いた。

と、關が突然向側から話しかけた。

『あなた方の議論を聞きましたよ。』

『どちらに贊成なすつて。』

眞知子は待ち構へてゐたやうな速度で、先刻まで彼に持つてゐた反感も忘れて聞き返した。何か話すことは、彼女のその場の感情を紛らすに便利であつた。

『私のこと、安價なヒユマニズムだつてうんと惡口云はれたとこなの。』間から米子が說明しようとしながら、後半に關に對して續けられた。『でも幾ら古くても、この考へ方は私にはまだ魅力がありますわ。』

『古いの新しいのと云ふ問題ぢやないでせう。』

『どちらにしろ、愛の精神を基礎としない社會主義の効果は、私には十分信じられないのだから。』

『さう云ふ人にはオウエンあたりが丁度いいのです。』

『いつもオウエンね、私の惡口つて云ふと。』

『最も正直な批評ぢやありませんか。あなたがオウエン的な思想から一歩も進み得ないと云ふことは。』

『もう澤山よ、ねえ。』

米子はそのまつ白なしやくれた顏に、憐れつぽい微笑を浮べて眞知子に訴へた。今までの例ですれば、關の斯う云ふ調子に現はれる冷酷さは、眞知子には不快な筈であつた。が、不思議とこの場合にはそれが却つて面白かつたと共に、彼に聞くことに興味を感じてゐた質問を持ち出して見ようとする望みが誘ひ出された。で、彼女は直ぐ率直にはじめた。米子をオウエン的だと云ふたらば、オウエン的でない考へ方——例へばマルキシズムの見地から、今日のやうな結婚の價値はどう解釋さるべきであるか、と云ふ風な尋ね方で。——

『ルーヴルなんか燒いて仕舞へと云ふ人があるのですつて。』

『そんなことを聞いたら、誰よりもマルクス自身が驚くでせう。彼は皮肉な快活さで應じながら『希臘劇が好きで、セクスピヤやモリエルーを悦んで見たと云ふ彼が、ルーヴルを愛しない筈はないのですから。併し僕はマルクスを非常にわづかしか讀んでゐないので、結婚に限らずその他の藝術の本質的價値が、麻布や小麥の價値を解剖したやうに彼に依つて立派に解剖されてゐるかどうか知りません。』

『解剖され得るものだとお思ひになつて。』

『ロシアの或る人々はやらうとしてゐるやうですが、非常に困難な問題でせう。』どの點に於て非常に困難であるか、眞知子はそれが續けて聞きたかつた。マルクス的唯物論の不幸な廉が、もしあるとすればその邊に潜んでゐさうにさへ感じられた。併し關の關心はその時少し惰けて默まり込んでゐた米子の方へ轉じてゐた。彼はまへの辛辣な態度を償はうとするかの如く、兄貴らしい優しさで語つた。今日の戀を見るために彼女がしたやうな心配は、軈て到來すべき新しい時代に於ては滑稽な世話に過ぎなくなるだらうと云ふことを。

「その時には、屑屋のかみさんも一人前の鑑賞家として美術館に來ますよ。」

「なら、あんな人たちは働いてるのになんつて氣兼ねしないでも、一緒に仲よく誘つて來られる譯ね。」

「誰かに氣兼ねを要するやうな、一切の不幸な状態が、その社會では消滅してゐる筈です。」

もう暮れてゐた。彼等はわざと博物館裏の淋しい場所を遠廻りして歩いてゐた。木立の道では三人は並ばれなかつたので、一列になつたり、一人と二人に別れたりした。丁度その時は、淺い松林を拔けようとして、米子と關が先に立ち、眞知子は後になつてゐた。

「關さん、」

彼女は今までになかつた親しさと熱心で彼を呼びかけた。關は振り返り、足を留めた。今度は二人が並んだ。

「本統にあなた方は、それを信ずることがお出來になるのですか。」

「さう云ふ時代の來ることをですか。」

「さうして一切の不幸が消滅すると云ふ社會の實現を。」

「ぢや、あなたは信じないんですか。」

眞知子は突嗟には答ふることが出來なかつた。と、關は彼女の暗い耳許に顔を差し寄せ、ずかりと壓しつけるやうに云つた。

「それを信じないのは、人類を信じないのです。」

その晩勉強をはじめかけると、眞知子は自分の注意力がいつもほど純粹になり得ないのに氣がついた。分かりきつた綴りを間違へたり、引照すべき參考書の或る章が容易に探し出せなかつたりした。その癖午後を潰して、やらなければならないことが多く殘つてゐたので、急いで片附けようとすればするほど思ふやうに行かなかつた。そのじれつたさは、同時に何が自分の集注を妨げてゐるかを考へることに依つて、一層不安定な状態に彼女を置いた。初めはすべてを展覽會の影響にしようとした。併し優れた畫から引き起された興奮ならば、もつと朗らかに樂しかるべき筈であつた。彼女をかき亂してゐるものは性質に於てたしかに違つてゐた。眞知子は早く自分を胡麻化すことが出來なかつた。それが話そのものゝ感銘であるよりも、それに媒介された關との對話の効果であることを認めないわけに行かなかつた。

「それを信じないのは、人類を信じないのです。」

彼女の鼓膜の内側には、この一語が云はれた瞬間の波動でまだ響いてゐた。それ以上、それを云つた時の彼の脣の接近と、男性らしい熱つぽい息の感じまで、左の半面から消えてゐたかつた。而かも普通ならば、何等か性的の顧慮なしには考へられなかつたかも知れない

この追憶が、その場合の眞知子には少しの羞恥をも與へなかつた。彼女はたゞ驚くべきことを聞いたと云ふ念ひで一杯であつた。あの人は、あの人の云つたやうなことを理論でなく、實行として本統に信ずるのか知ら。——いつの間にかペンを捨て、左右の組み合せた手で頰を支へながら、眞知子は机の上の電燈の青い笠をぢつと見守つてゐた。單に彼がソシアリストの口馴れた科白の一つとして云つたのであつたならば、あゝ云ふ最大級の言葉は、却つて空虛な嫌味なものに響いたであらう。が、それは何等の誇張もなく、素朴に、さうして非常な自然さで彼から迸つた。それが眞知子を打つた。同時に今までは書物や新聞雜誌を通じてわづかにその煙を嗅ぎ、火花の音を耳にするだけで、何處にどんな姿でそれは果して燃えてゐるかはつきり知ることの出來なかつたものに、不意にぶつつかつた氣がした。あの人がどこか昂然としたところを持つてるのは無理もないのだわ。——眞知子は思ひ續けた。威張つていゝ仕事をしてゐるんだらうから。よしんば、あの人たちの考へてるやうな社會がさう容易に出來上るものではないにしたつて、寧ろ困難なら困難なだけ、あの人たちは素破らしい仕事に參加してる譯なのだわ。——併し斯んな余計なことで忙しい夜を無駄にしようとしてゐる自分を見出すと、眞知子は驚き、急いで再びペンを取りあげた。彼女は參考書からの拔萃に戻つた。が、その努力にも拘はらず、腦細胞の全面に膠着してゐる或る種の強い感激をどうすることも出來なかつた。その感じの來かたは變に特殊でありながら、眞知子には決してはじめてではない氣がした。質に於ても、量に於ても寸分違はないものを彼女はいつか確かに感じた記憶を持つてゐた。まだほんの子供の頃、まつ青に晴れ渡つた朝の大空に悠々と現はれた巨大な飛行船を目にした時の、突然な烈しい衝動でそれがあつたのをふと思ひ出し、彼女は不思議な氣持がした。

二

朝、七時過、電話室のベルが氣忙しく鳴つた。眞知子は廊下一つ隔てた茶の間から急いで出て行つた。

『もしもし、——あら、お姉さま、お早う、——えゝ、えゝ——まあ、さう、それで——今日になつたのですつて、えゝ——築地のいつもの家——えゝ、分かつてよ——お晝御飯——わたしは學校があるわ、——だつて駄目、お母樣は屹度入らつしやるでせう、——お呼びしませうか、——えゝ今すんだところよ。』

朝つぱらから何の用事だらうと云ふ顏つきで、食後の爪楊子を使ひながら硝子戸の中から出て來る娘を待つてゐた母に、眞知子は姉の辰子からの電話の意味を取り次いだ。[illegible]

日本に歸つてゐた彼等の從妹のひとりが、來月の船で夫の任地に歸る筈になつてゐたところ、關西にある郷里の家で姑が病氣だと云ふ知らせが來たので、俄かにその方へ廻らなければならなかつた。で、多分そのまゝ神戸から出發するだらうから、彼女のために計畫してあつた親類の送別の會食を、ほかに日がないので今日の午餐ですまさうと云ふのであつた。

『大さうまた急な話になつたものだね。』

未亡人はひとり言のやうに云ひ〳〵食卓の前を離れ、繼いだまゝの電話に娘と入れ代つた。二人は重に餞別の種類や價格に就いて、年配の母娘だけが持つ信頼の調子で打ち合せた。實際なにかの相談ごとになると、辰子は未亡人に取つてはなくてならぬ人であり、眞知子の方は平生こそ一人前の道徳や義務を强制されるが、斯う云ふ場合は相手にされないのであつた。この矛盾はいつも彼女をおかしがらせた。併しそれの方が面倒でなくてよかつたし、なりたけ狀態の變化しないやうに自分でも氣をつけてゐたので、部屋に戻つた母を見てもすぐそれに就いて聞かうとはしなかつた。未亡人の方でも辰子と極めたものを單に知らせたに過ぎなかつた。

『小早に出かけて高島屋にでも寄つて見よう。』たいした時間も取らないだらうからと話し、『でなくも、お晝御飯だと云へば何をする間もありはしないよ、その積りで支度をしなけりや。』

『わたし矢張し行かなきやいけない。』

『またそんなことを云ひ出した。』

『だつて學校があるんぢやないの。』

『それで母さんだけやつておけばいゝ、買物ぐらゐひとりだつて出來ない筈はないと云ふのかい。』未亡人はだん〳〵氣色ばみながら『——さあつてば學校だ。それがどうしたんです。小學校や女學校ぢやあるまいし、一日や半日休んで休めない道理はないぢやありませんか。母さんにはちやんと分つてる。そんなことは皆んなあんたの口實だつてことが。』

それに相違なかつた。彼女の非社交的な氣持は、丁度上流の下段と中流の上部に位して、プチ・ブルヂョアの標本的な退屈と滑稽と醜陋に充ちてゐる親類仲間の環境に於て、近頃ます〳〵いちじるしくなつてゐた。

『そんな我儘がこの世間で通るものだかどうだかよく考へて御覽。』

『わたし自身には理由があるのよ。我儘ぢやないわ。』

『それが即ち我儘ぢやないか。』未亡人は極めつけた。『どんな理由があつたつて、行きたくなければ義理を缺いても行かない、また氣に入つたところなら、どこへでも夜何時まででも飛び歩いてゐようと云ふ、

それで我儘でないと云へますか。ひとが默つてゐれば、いゝ氣になつて——」

それは一時間半も無斷で晩飯におくれた昨日の當てつけに相違なかつた。眞知子は默つて赤くなり、母の擦つた薄いこめかみを見詰めた。彼女は遲い歸宅の說明として米子のセツルメントに寄つたこと、いつしよに美術館の畫を見たこと、洲非たちに出逢つたこと、それから氣持のよい夕暮の公園をぶら／＼歩いて來たことは話したが、その他に就いては何故と云ふことなく話しそびれた。その些細な秘密のため、母の干渉がましい言葉に對しても、眞知子はいつもほど單純に怒れなかつた。學校もとうと休ませられた。

豫定の時間に家を出ると、彼等は先づ贈物の買物をすました。未亡人は顏とは打つて變つて滿足さうに見えた。反對に眞知子は隔意のあるよそ／＼しい顏をしたまゝ、電車の中も話しかけなければものも云はなかつた。彼女には母のだん／＼上機嫌になつた譯が見通せるだけ一層忌々しかつたのであつた。買物が案外安かつた——たしかにそれが半分の原因であつた。月々極まりきつた金で暮らしてゐる、恐らく親類ぢうで一番餘裕のない未亡人の家計簿に取つては、斯うした臨時支出の塲合には、十錢の高下も大問題であつた。それに彼等は十錢の贈りに五十錢高くても取らし〳〵[illegible]はなければならなかつた。同じ理由に依つて、今日小石川の奧から築地まで電車で運ばれて行くのだつて、決して自動車代を惜しむのではなく、ガソリンの臭氣とひどい動搖が、未亡人を持病の偏頭痛にするためでなければならなかつた。相手の方ではまた、それを信じないでも信ずるやうな顏をすることを知つてゐた。

昨日とはまるで違つた、寒い曇り日の晝間の電車には數へるほどしか乘つてゐなかつた。眞知子は一定のリズムで閑らしく躍つてゐる、鼠皮のセルロイドのしら／＼した輪の列を眺めながらそれ等の乘客が、どこに何の用事で行きつゝあるにしても、自分よりはずつと仕合せな時間をこれから過すに相違ないやうな氣がした。

目的の場所は、居留地あとの靜かな横町にあつた。上村の贔屓の家で、支那風の燈籠や、額や、聯や、呉昌碩の書で飾られた奧の廣間は、醇親王の廚人であつたと云ふ北京生れの老人の料理の味と共に眞知子には親しかつた。それに割合に早く着いたから、今日の世話役を引き受けた姉の辰子と、正客の弓子がいち早く來てゐた外には、氣立ての優しい、皆んなに好かれてゐる父方の伯母が見えてゐただけであつた。この年寄が母に取つて丁度よい話相手であつたと等しく、弓子は親類うちの同じ年頃の婦人たちの中では姉と合ひ口であり、自分に對しても好意を持つてくれてゐるのを知つてゐた。

眞知子は途中とは幾らか違つた輕い氣持で、二人の間の緊張の調子にかけた。

『でも、まあちやんに逢へてよかつたこと。』

弓子は無地御召に包んだ細長い脚を、着馴れた洋服の時のやうに右を上にして重ね、組み合せた左右の手でその膝を抱へながら、辰子の話では彼女は今日は來ないかも知れないと云ふことであつたから失望してゐたのだと話した。

『だつて、今朝の電話ではちやんと勿體ぶつたお斷りがあつたんですもの。學校があるんだから駄目――つて。』辰子は意地惡く誇張してまね、なほ冗談の口調で附け加へた。『それでよく匆々しく出て來られたものね。』

眞知子も姉の調子を外づさないで應じた。

『急に燕窩が食べて見たくなつたのよ。』

『ほら、斯う云ふ我まゝ屋さんだから叶はない。』

『結構ぢやないの、ねえ、まあちやん。』弓子は輕快に引き受けながら、『お孃さんの間には出來るだけ我まゝをさして貰つた方がいゝんだわ。今に幾らしたくもされない時が來るのだから。』

『ところで』向ふの壁際の火鉢の前に、さつきから彼等を離れて伯母と二人しきりに何か話し込んでゐる母の方を、辰子はちらと警戒的に見やつてから『そのお姉さんの眼か、このお姉さんにはあまり見過ぎると云ふので母さん大頭痛なのよ。それにこのお孃さんつたら相變らずで――』

『いやなお姉さん、よしてよ、そんなこと。』

『何故さ、弓子さんに隱すことはないぢやありませんか。』で若し、彼女の說得で眞知子の結婚避忌病が少しでも減退するならば、何よりの置き土産だらうと云つた。『母や私の云ふことなんか、てんで受けつけやしないのよ。』

『まさか。――私のまあちやんがそんな分らず屋ぢやないわ、ねえ。』

眞知子は、母は兎に角として姉までがこの頃無條件に母の意見の支持者になつてることの不平を述べた。

『あちらでも斯んなに五月蠅いもの、周りの人たちが。』

『皆んな同じですとも。小說なんかを見ても分かる通り、一度のお茶の會だつて娘さんや妹さんの結婚つてことを考へないで開く家はないんですからね。』

『でも、結婚に對して男でも女でも日本ほどあはてないつてことは確かでせう。』

『その代り機會さへあれば決して逃さないことも確かですわね。』

弓子は外交官の細君の機智をもつてそれを云ふと、銀のケイスから

細巻の煙草を一本抜き出して辰子につけて貰ひ、綺麗に爪みがきの出來た指で伊達らしくゆらせながら、經濟的並びに社會的の事情から、年と共にます〱稀になりつゝあるその機會に對して、彼等が如何に敏感であるかを話した。

『殊にあちらの女のひとは、どんな用心深いものでも一つの大事なことだけは忘れないわ。分かつて。』

眞知子は、いゝ匂の煙の中でほゝ笑んでゐる、相手の姉さんぶつた顏を眺めたのみであつた。

『――五十の獨身者でも、男は結婚しようとなれば十六の娘とでも結婚される、と云ふことなの。ね、――どう。』

と、その時まで口を入れなかつた辰子が、寶石のはまつた指先で、眞知子の輕くウエイヴした鬢の下にのぞいてゐる可愛い耳朶を引つ張つた。いゝお說教を忘れないでゐらつしやい。――眞知子は美しい眼でさう云つて笑つてゐる姉が憎らしかつた。うま〱と彼等の穽にかけられた氣がした。で、何か非常に氣の利いたことを云つて敵打がしてやりたかつたが、丁度入つて來た新しい人々の群で妨げられた。

鄭重なお辭儀と一層鄭重な挨拶の交換。――順序として先づ弓子を取卷いてなされ、それからお互ひ同士の間に繰り返された。急な催の上に晝の食事で、客の大部分は婦人であつたから、人數が増すに從つてこの上なく賑やかな、言葉數の多い、且つ複雜な折衝となつた。彼等は流行の着物や贅澤な裝飾品といつしよに、家、財産、父や夫の地位をそれ〲身につけてゐた。同時にまたそれ等から生ずる權威や區別は、單なる親族の繫がりだけではどうすることも出來なかつた。如何に慇懃に見え、如何に親密らしく裝つても、ちよつとした口の聞き方や、お辭儀の角度でそれは露見した。

田口夫人の倉子は、どうしたのであらうかと噂されてゐたところへ漸く現れた。いつしよの筈であつた老博士は、丁度危篤に陷つた或る著名な貴族の邸に詰め切つて拔けられさうにないため、不參する旨が傳へられた。

『昨日私もちよつとお見舞にうかゞつたら、あのお綺麗な侯爵夫人が別な方見たいにおやつれになつて――』

斯んな侯爵の病氣や侯爵夫人の話は、話手の彼女自身にも一種の威嚴を附與するやうに見えた。でなくも親類で最も羽振のよい、また其の意識のもとに行動することに馴れてゐた倉子は、今日のやうな會合では取り分けうはてな勿體ぶつた態度を示した。

人々は、倉子のこのやり方に就いて蔭では惡口を云つた。併し、と他の親類の誰に對するよりもちやほやし、氣を迎へようとする

共通の習慣になつてゐた。

眞知子は母のあとから彼女に近づいた。

『おや、お珍らしい。』

倉子はこの一言と、年齢のわりに派手な化粧をした顔に浮べたわづかな微笑で、眞知子の挨拶に答へた。それつきりで、周りの人たちに見せたやうな、眞知子自身にも一と月前の園遊會の日までは確かに惜しまなかつたお愛想を、微塵も表はさなかつた。さう云へば未亡人に對してもいつもよりよそ〳〵しかつた。このぶあしらひは眞知子には寧ろ笑止であつた。で、自分もその儘引き下つて知らん顔をしてゐればすむのであるが、それで怖れたやうに思はれたくはなかつたから、平氣で尋ねた。

『富美子さん今日はお見えになりませんの。』

『いゝえ、參ります。』併し都合で少し後れるかも知れないと云ふ意味を、切り口上で述べたと思ふと、急に何か考へついたやうに。『さう云へば昨日お逢ひしたんですつて。』

『上野で、ちよつと。』

『どなたかおつれがおありだつたとかつて。』

夫人の調子にあらはれた明白な輕蔑は、今まで餘裕のあつた眞知子の心を俄かに硬くした。云ふまでもなく、それは關のことを打ち開けなかつたため、母の前には感じた後めたさとは別な感情であつた。彼女は、自分の昨日の作がもつと目立つやうな服裝をし、洲片たちの如く自動車で乘りつけてゐたならば、倉子が決して斯んな云ひ方はしないであらうことを知つてゐた。同時に相手のその種類の淺薄さには、ふだん馴れてゐた筈であるに拘はらず、新たな強い憤りを覺えたのであつた。

食事がはじまつた。倉子は弓子と並んで重な椅子に着いた。眞知子は彼等からなりたけ離れた席を見つけた。それはいろ〳〵な意味でよい選擇であつた。第一には倉子との交渉が避けられたし、その他にはすぐ横にかけてゐた支那通の老人から面白い料理の話を聞くことが出來たから。

丁度家鴨の出た時であつた。老人は薄い肉片を葱といつしよに上手に衣に包みながら、それが何處から持ち來たされたものと思ふかと眞知子に尋ねた。支那だと云ふだけは分かつてゐた。併しその手順は彼女を驚かした。老人の說明に依れば、それ等の家鴨はやつと雛から出たばかりの頃、遠い四川省の奥から筏で揚子江に運び出される。家鴨飼の一家はその日から筏を家とし、何千羽と云ふ家鴨の雛をその上に飼ひながら江を下りはじめる。天氣次第、風次第の航行である。雨季にかゝつて雨に降り籠められると、いつまでも同じ岸の楊柳の陰に筏

を繋いで晴れる日を待つてゐる。斯う云ふ悠長な明け暮れの間に、船艙で積まれた家鴨はだん〳〵と大きくなり、六ヶ月目でやつと目的地の上海に着いた時には、立派に成育した家鴨になつてゐる。併しそれがすぐ食膳に上される譯ではなかつた。その前に家鴨は問屋の暗室作りになつた倉庫に閉ぢ込められ、豐富な旨い餌と熟練で養はれる。さうして十分肥つて脂肪が乘り切つた頂上に取り出されて、丸燒にして諸方へ送られる。

『どうです、支那とは斯う云ふ國だ。』

老酒の影響で、無口な平生とは別人の如くなつた老人は、この古い文明國が有してゐる、日本などでは想像もされない多樣な生活樣式とその背景に就いてなほ語り、斯う云ふ立派な研究對象がすぐ手近にあるのに、今の若い者たちが何んでも西洋の學問でなければならぬやうに考へてるのは愚だ、と云ふいつもの氣焔をあげた。併し亜知子は、その頃には食卓の向側で盛んになつてゐるほかの話の方へ氣を取られてゐたので、前ほど熱心な聽き手ではなかつた。

はじめ二三の婦人たちは、親類で最も評判のわるい放蕩息子の噂をしてゐた。その家からは今日は誰も來てゐなかつた。

『何んでも△△ちやんばかりぢやなく、弟さんたちまでこの頃ぢや兄さんに負けないんだつて云ふぢやございませんか。』

『三人揃つてぢやたまりませんですわね。』

『それも一と通りの遊びなら、若い者のことですし、諦らめもつきませうが。』

彼等の放蕩はたちがよくないので、中の兄は學校もやめさせられたらしいと云ひ、その背徳の實例が囁かれた。

と、彼等のすぐ向ひにゐた倉子が急にその方へ注意を向け、無遠慮な高い聲で問ひかけた。

『ちよつと、――何のお話、それは。』

自分の面前で、自分を除け者にしたやうな話ぶりをされるのは、最も彼女の威嚴を損ふものであつた。で、どんな話にでも斯う云ふ調子で侵入し、それを支配しなければ承知しなかつた。

『あゝ、そのことなら、』說明を聞くと、倉子は重々しく自分の役割を演じようと身構へながら『この間私も奧さんに逢つていろ〳〵詳しい相談を受けたのですが、でも、ものは思ひやうですからね。私は奧さんに申しましたの。よろしいぢやありませんか、それしきのこと、結構な位ですつて。』

倉子はそこでわざと言葉を切り、自分の奇警な逆說の效果を疑ふやうに人々を見廻はした。誰の顏にも豫期したものが現はれてゐるのが分かると、滿足さうに落ちつき拂つてつゞけた。

『もしこれが、高等學校や大學で近頃流行るやうな危險な思想問題で檢擧されたとか、警察に引つ張られたとか云ふやうなことであつて御覧なさいまし、それこそ大變で、お父樣のお役にさし響くのは勿論、親類の端まで世間に顏向けが出來ないことになるのですからね。怖いのはそれですよ。ですからどんな道樂をしようと遊ばうと、マルクスとかなんとかつて騒がれるに較べりや、何でもありはしませんわ。――ねえ、曾根さんのお母樣、さうはお思ひになりません。』

　この問ひかけは唐突であつた。未亡人はその時も伯母と並んですぐ側にはかけてゐたけれども、噂話の仲間には入つてゐなかつた。にも拘らず、倉子がわざわざ相手にえらんでそんな問を發した理由は眞知子には分かつてゐた。彼女は大學の選擇學課に關する夫人の非難を忘れてゐなかつた。で、この下等な振舞ひは、不意でどう返事してよいか當惑してゐる母の樣子を見ると共に、強く彼女を刺戟した。眞知子は、得意で斯んな講義を皆んなにして聞かした夫人が、さつき輕蔑した上野の伴の素性を若し知つたならばどうであらうと思つた。眞知子は云つて驚かしてやり度い衝動を感じた。

　富美子は八寶飯が配られる頃になつて飛び込んで來た。彼女は弓子と辰子の間にかけさせられた。來月の音樂會の練習會が今日多津子のところであつたので、お晝までには是非歸らうと思つたが拔けられなかつたと云ふ云ひ譯を、挨拶といつしよに陽氣に喋り立てながら、眞知子の方にはいつもの無邪氣な子供らしい眼で意味のある合圖を送つた。あとでね、あなたに話してあげることがあるのよ。――

　食事がすむと、富美子は早速約束を實行するために、緞子の帷で半分しきられた、斯んな大一座の場合には休憩室に使はれる次の小部屋の方へ眞知子を誘ひ込み、行きなり云つた。

『今來る時あの人に逢つたわ。』

『どなた。』

『ほら、昨日上野で御いつしよだつた方。』

　その話しぶりで、眞知子はそれが米子ではなく關の方であるのを知つた。

『丸善へ入るところを車の窓からちらと見ただけだけれど、たしかにあの人よ。だつてあの顏はめつたにほかの人と見違へられる顏ぢやないんですもの。』

　富美子は近頃映畫で評判の高いドイツの悲劇役者の名前を擧げ、彼のプロフイルが非常によく似てゐると云つた。

『さうか知ら。』

『あら、そつくりですわ。若しさう思はないんなら、あんたはしよつ

ちら見馴れて感じが薄くなつてるのよ。』

眞知子はその言葉で笑ひ出しながら、彼に逢つた度數なら自分も富美子と變りはないことを云つた。

『あんたは昨日出逢つてまた今日逢つたんだし、私は展覽會で偶然落ち合ふまでは、たつた一度、いつしよにゐたあのお友達の家で逢つて知つてゐると云ふだけの違ひですわ。』

この說明は富美子には意外らしかつた。が、それに依つて却つて强まつた好奇心を隱さうとしないで、米子と彼の關係や、名前や、その他のことをいろ〳〵尋ねた。眞知子は富美子になにか話すことは親類ぢうに觸れ太皷を廻すと同じであるのを知つてゐた。と云つて、それ等の間の惡い成行から遁れることは出來なかつたから、答へられるだけは正直に答へた。たゞ、關の現在の身の上に就いては、さつき彼女の母に對して感じたやう無謀な感情からは十分冷靜になつてゐた。

『なにかまだ勉强してるのよ、多分。』

眞知子はそれで簡單に片づけようとした。富美子はなほ聞いた。

『矢張り社會學。』

『いゝえ、經濟の方でせう。よく知らないわ。二度つきや逢はないんですもの。』

咄嗟に嘘をついた。と、その意識で早く話題を變へようと努めながら、彼等の音樂會はいつ頃になるのか尋ねた。眞知子の作戰は成功した。

『來月の第二土曜よ、今度こそ間違ひなく入らつしやるわね。』富美子は今まで話してゐたことなぞは忘れてしまつたやうに『とても大物揃ひなの、私なに彈くと思つて。ベートーヴェンの奏鳴曲よ。この頃は毎日八時間位稽古するわ。木村の世話なんかてんでしてやらないの。だから仕方なしにひとりで洋服着たり靴下穿いたりするやうになつたわ。だつてそんな暇はないんですもの。え、多喜子さん。あの方はシユーベルト。だから乾度入らつしやいね。もしかしたら河井さんのお母樣もお見えになる筈よ。お身體の具合さへよけりや乾度誘ひ出すつて河井さん私たちに約束したの。――いゝえ、初めてぢやないけれども、どつちかと云へばあの方は西洋音樂より日本ものがお好きで、殊にお能が一番お好きなんだつて。大皷でもお鼓でもとてもお上手よ。だでもね、いつだつたか、寶生會に誘はれた時には困つちまつたの。だつてお能なんてあんな退屈なもの我慢されやしないんですもの。欠伸の出るのをやつと耐へて多喜子さんの方を見ると、同じに赤い眼してゐるからおかしくなつちまつて。』

富美子は帶に支那風についた黄色い絹の總を兩手でおもちやにしながら、とめ度なく續けた。彼女のお饒舌はどんな場合でも尠がなか

つたし、相手は時々[illegible]た受け答へをするだけで勝手に話させておけばいゝので面倒でもなかつたが、それでも眞知子は頓て帷の外側で誰かが別れの挨拶をはじめるのを聞きつけたので、並んで掛けてゐた椅子から立つた。

『ぢやまた。――母さん待つてるかも知れないから。』

『さうね。』

富美子もいつしよに立ち上りながら、その儘すぐには放さうとせず、眞知子に逢つたら一番に報告しようと思つてゐたことを忘れてゐたと云つて再びはじめた。それは竹尾の結婚に彼女夫婦が媒酌人をつとめたこと、そのためにいつ結つたか覺えない位の丸髷に結はされたと云ふことであつた。

『何しろあと六日すると九州に行かなければならないつて時にやつと話がきまつて、出立の前日に式を擧げたのだからその騷ぎつてなかつたの。可愛らしいいゝ奧さんだわ。でもね、竹尾さんはあんまり氣に入つちやゐないの。だつて、』彼女は意味のある眼つきをして見せながら『竹尾さんずつと前から一番あんたを貰ひたがつてたのよ。』併しこの打ち明けは、眞知子には何等の興味をも與へなかつた。彼女はたゞ、竹尾は園遊會の晩にたつた一度しか自分に逢つたことはない筈だと云つた。

『そりやさうよ、でもその前に寫眞で見て知つてるわ。』

『寫眞。』

『いやなひと、母さまのとこにあんたのお見合の寫眞來てるぢやないの。』

眞知子の全身の血は恥づかしさで沸騰した。お前は泥棒だと云はれてもそれ程までに赤くはならなかつたであらう。自分の見本が商品の引札のやうに到るところの家々に振り撒かれ、ひたすら結婚の愛顧と取引が待たれてゐると云ふのは、彼女には想像するに忍びないことであつた。母がそんなことまでしてゐようとは思ひもかけなかつた。が、日本の風習としては珍しくない手段であつた。田口夫人の居間に飾つた大きな寫眞帳の中には、花嫁の新しい候補者がいつも何枚かづつ保管されてゐるのを眞知子自身も知つてゐた。同時にまた希望者に對して、一人々々の地位や、持參金や、寫眞よりは遙かにすぐれてゐる容貌を説明しながら、トランプをする時のやうにアルバムから拔き出しては並べて見せる夫人のもの馴れた手つきさへも。

眞知子はどうかして自分をその汚辱から救ひ出さうとすることで一生懸命になつた。來月の音樂會に間違ひなく行くと云ふ約束が、寫眞を富美子の手で送り返して貰ふ約束とやつと交換的に成立した

すぐ近所にゐる上村の同族の家へ顏出しをして行くと云ふ辰子と門口で別れてから、未亡人と眞知子は、二人だけで電車通の方をさして歩いた。大部分は自動車であつたし、さうでないものも母娘でそんな話をして殘つてゐた間に先に歸つたので、他に連れ立つやうな人もゐなかつた。築地の裏町は、午後になつて漸く和やかに晴れた日射しの中で蠟のやうにひつそりしてゐた。二人はどちらからも話さなかつた。黑いコートを着て、同じく黑い薄手のショールに襟元を包んだ未亡人は、行く時の元氣を失つてゐた。眞知子によく似た、稍廣い額の上には、平生は餘り目立たない皺が深く現はれ、それを横ぎつて一本の靜脈が斜に青く浮き出してゐた。人中に出て疲れたり、なにか肝癪を起したりしてゐる時のこれはしるしであつた。

終に未亡人は、田口夫人の今日の素振に氣がついたかと聞いた。

『あのひとの機嫌買は今にはじまらないんぢやないの。』

眞知子はこの問題をなりたけ輕く取り扱ふことに依つて、續く面倒な話を避けようとした。未亡人はその手には乘らなかつた。

『あれがたゞの機嫌買ですまされますか。』

通りすがりに、ぢつと眞知子に眼を留めて行つた、くろうとらしい姐の連行人をやり過すと、未亡人は富美子と鮎女がゐなかつた間に田嶋夫人が自分にどんな挨拶をしたかを話した。

『御飯がすんでから、わざわざとなりの伯母さんのところへやつて來て何を話すかと思ふと、竹尾さんの結婚の御披露ぢやないか。お數あのひともいゝ奥さんを貰ひましたつて。お嫁さんを褒めること、褒めること、伯母さんはかこつけで、こつちに云つてるんだつてことは分かつてるけれど仕方がない、おとなしく聞かされてゐなけりやならないんだからね。』

斯んな思ひをさせられるのも誰のためだか考へて見るがいゝ。――母の怨嗟は、眞知子が祕密に忍ばうとしてゐた寫眞に就いての嫌惡を新たに喚び起こした。何か云ひかゝれば乾度それを云はずにはゐられない氣がした。大した人通りもないにしたつて、往來であつた。眞知子は相手にならないで歩いた。

このし方は却つて未亡人を苛立たせた。彼女は娘を嚴しく尻眼にかけながら、彼女といつしよに外出するのは大嫌ひだと云ひ出した。

『なぜ。』

『あんな大きなお孃さんを抱へてどうする氣なんだらうつて、皆んな通る人から氣の毒がられて歩くのはあまり外聞のいゝ話ぢやないだらう。』

『ぢや、氣の毒がられないやうにしてあげるわ。』

さう云つたと思ふと、眞知子はつかつかと横路を曲り、母とは反

軒の低い家並に遮られて、その道ひとりで進んだ。未亡人は不意を打たれたやうに、娘の高いまつすぐな後姿を見送つたが、あとを追はうとはせず、自分もその儘自分の歩みを續けた。向にはもう電車道が見えてゐた。

眞知子にしても電車まで別々に乘る氣は勿論なかつた。彼女は母とのあゝ云ふ話にはあれ以上我慢されなかつたまでであつた。で、たつた五六間、道を隔てゝ別れただけであつたが、急に晴れ〴〵と何かから脱却した氣持がした。眞知子は大路に學校に行く時のやうに歩いた。震災以來目立つて廣濶になつた下町の空が、今は一層ひろやかに、初冬らしい紺碧に輝いて彼女の上にあつた。それを凝と見あげながら歩いてゐると、向側の母のことや、今日の會食や、行手の電車道や、その方から勢よく駈けて來る自動車や、鉦や三味線の囃子で練つてゐる陽氣な廣告の行列や、それ等の一切が意識の外に消滅した。眞知子は曠野の遙かな一本道をひとり自由にのび〳〵と歩いてゐた。その道とその空の續くる限り、何處までもさうやつて歩いて行きたかつた。

丁度その前にさしかゝつた時、或る店のドアが不意にうちから彼女を突き除けるやうな勢ではね開けられた。われともなく軒先に寄りすぎて歩いてゐた眞知子は身を轉し、厚い板ガラスに書き出した××印刷の金文字の前から飛びのいた。その刹那開けた男と顔を見合せた。男は最初の驚きからすぐ恢復すると、持ち前の冷淡な表情に返り、どうして斯んなところを歩いてゐるのか尋ねた。眞知子はそれに對して答へながら、彼が小脇に挾んでゐる丸善の焦茶色の包紙に眼を留めてゐた。富美子が見たと云ふのは矢張り彼に相違ないと思つた。同時に眞知子は、そこに買つて持つてゐるのはどんな書物だか知りたい氣がした。これで三度も逢ふ彼に、殊に昨日はあんな話までもし合つた間柄で、聞かれないことはない筈であつた。にも拘はらず、その時の興に乘つた親しげな態度は彼には殘つてゐなかつた。前よりは一層素つ氣なく無情に見え、取つつき場がなかつた。さうして眞知子がいつになく變に氣おくれしてゐる間に、男は彼女には既に見馴れたものとなつた黑の縁の廣い帽子に手をかけ、反對の道の方へ靜かに去つた。

『どなた、今のは。』

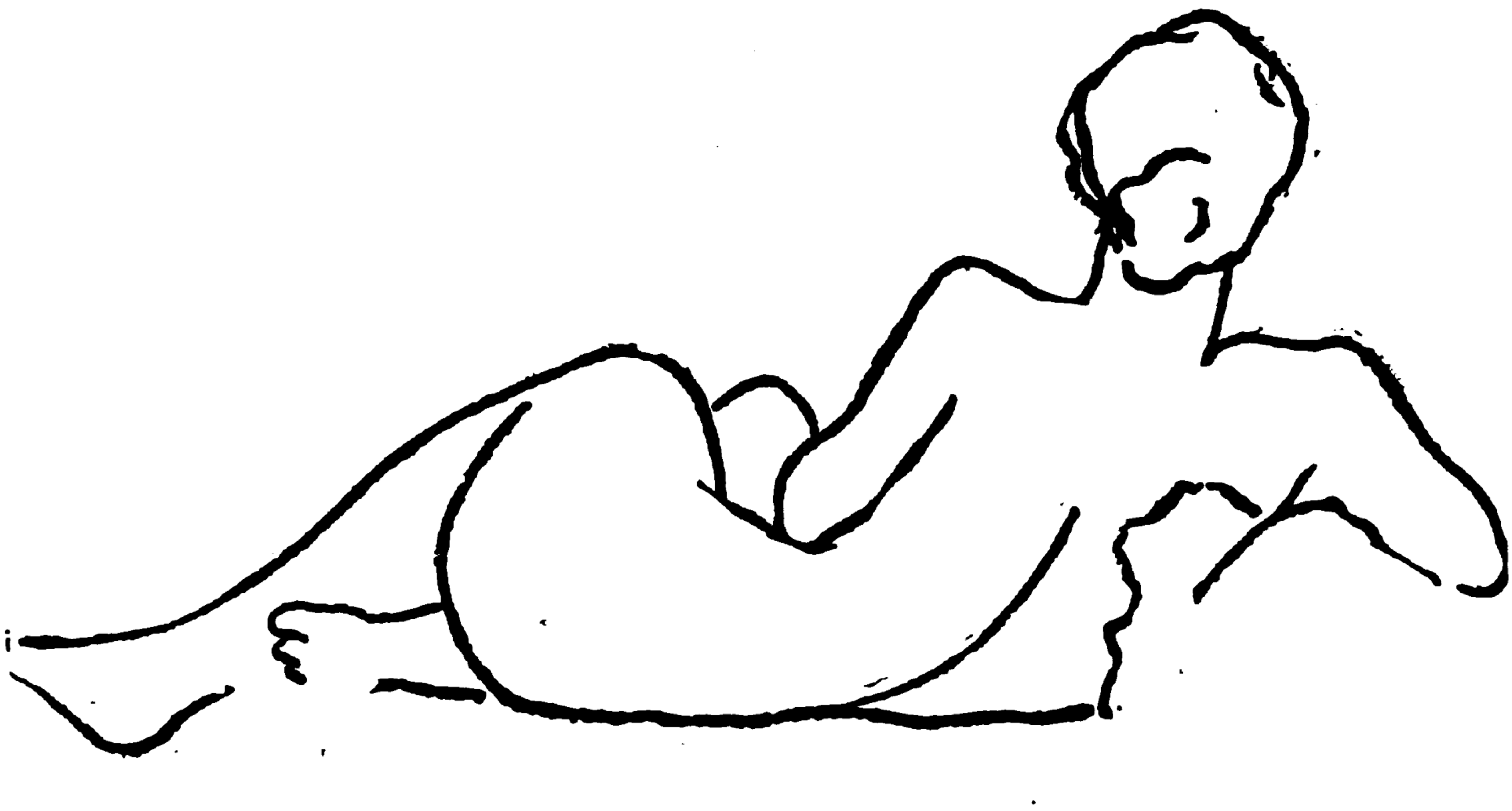
停留場で落ち合ふと、未亡人は一番にそれを聞いた。母は道の向側からすべてを見てゐたらしかつた。

『米子さんのお國の方。』

『なにをしてゐる方です。』

『そんなこと知らないわ。』

それだけではあまりに不自然であつたから、眞知子はほんの一度米子の家で逢つたのだと云ふ言葉で繕うた。併しその嘘は、さつき富美子の場合に感じたほどの氣咎めをも今は感じさせなかつた。彼女は奇妙に無感覺になつてゐた。と云ふより、そんなことを聞かれたり、說明したりしないですませたかつた。その癖、關のことより外に何んにも考へてゐたのではなかつた。昨日のやうな打ち解けた態度のあとで、何故再び彼があんな冷淡を示したか、彼女にはそれが分らなかつた。少くとも關は米子に對してはもつと優しく振舞ふのを眞知子は見た。それはまたどこから考へても暗さのない率直な親しさであつたその他の誰に對しても、彼は眞知子自身に對するほど露骨に邪險ではなささうに思はれた。このことは今までのやうな腹立たしさの代りに、輪劃の不明な淋しさを初めて彼女の胸に植ゑた。



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その七

ここにその時分やりとりしました手紙を持つて來ましたから、お讀みになつて下さいませ。まだ此の外にもたんとたんとありますけれど、とてもみんなは持つて來られませなんだので、これはほんの一部分、その中の面白さうなのを選つて來ましたのです。こつちの方のが古いので、大體順番になつてゐますから、どうぞ此れから見て下さいませ。光子さんからわたしの方へ來ましたのはひとッつも殘らず大事にしもて置いたのですが、わたしの方から光子さんへ上げたのが中に交つてゐますのは、それはあのう、――あとでお話しますけど、少し事情がありまして、あの方の家から取り戻しましたのです。

（作者註、柿内未亡人がほんの一部分だと云つたところのそれらの文殻は、約四寸立方ほどの縮緬の帛紗包みにハチ切れるくらゐになつてゐて、帛紗の端が辛うじて四つに結ばれてゐた。その小さい堅い結び目を解くのに彼女の指頭は紅を潮し、そこを抓つてゐるやうに見えた。やがて中から取り出された手紙の數數は、まるで千代紙のあらゆる種類がこぼれ出たかのやうであつた。なぜならそれらは悉くなまめかしい極彩色の從

様のある、木版刷りの封筒に入れられてゐるのである。封筒の型は四つ折りにした婦人用のレターペーパーがやつと這入る程に小さく、その表面に四度刷り若しくは五度刷りの竹久夢二風の美人畫、月見草、すずらん、忘れな草などの模様が置かれてある。作者はこれを見て少からず驚かされた。蓋しから云ふケバケバしい封筒の趣味は決して東京の女にはない。たとへそれが戀文であつても、東京の女はもつとさつぱりしたのを使ふ。彼女たちにこんなのを見せたら、なんてイヤ味ッたらしいんだらうと、一言の下に輕蔑されることは請け合ひである。男も彼の戀人からから云ふ封筒の文を貰つたら、彼が東京人である限り、一朝にしてあいそを盡かしてしまふであらう。とにかくその毒々しいあくどい趣味は、さすがに大阪の女である。さうしてそれが相愛し合ふ女同士の間に交されたものであるのを思ふ時、尚更あくどさが感ぜられる。ここにその手紙のうちから此の物語の眞相を知るのに參考になるものだけを引用するが、ついでにそれらの模様に就いても一つ一つ紹介するであらう。思ふにそれらの意匠の方が時としては手紙の内容よりも、二人の戀の背景として一層の價値があるからである。

（五月六日、柿内夫人園子より徳光光子へ。封筒の寸法は縦四寸、横二寸三分、紫色地に櫻ん坊とハート型の模様がある。櫻ん坊は十八で五顆、黒い茎に眞紅な實が附いてゐるもの。ハート型は十箇で、二箇づつ重なつてゐ、上の方のは淡紫、下の方のは金色。封筒の天地にも金色のギザギザで輪廓が取つてある。レターペーパーは一面に極くうすい緑で蔦の葉が刷つてある上に、銀の點線で罫が引いてある。夫人の筆蹟はペン字であるが字の略しかたにゴマカシがないのを見れば、相當に習字の稽古を積んだものに違ひなく、女學校では能筆の方だつたであらう。小野鵞堂の書風を更に骨無しにしたやうな、よく云へば流麗、わるく云へばぬらりくらりした字體で、それが又不思議なくらゐ封筒の繪とぴつたり合つてゐる。）

しとしとしとしと……今夜は五月雨が降つてゐる。あたしは今窓の外の丁子の花にふりそそぐ雨の音をききながら、あの、あなたが編んで下さつた紅いシェードの垂れてゐるスタンドの蔭でじつと机に向つてゐます。なんだかうつたうしい晩だけれど、軒端を傳ふ雨の雫に靜かに耳を傾けてゐると、思ひなしかそれがやさしい囁きのやうに聞えて來る。しとしとしとしと……何をささやいてゐるのか知らん? しとしとしと……ああさうだ、光子光子光子、……

……戀ひしい人の名を呼んでゐるのだ。徳光光子、……光子光子、……戀、戀、戀、……光、光、光、……あたしにはいつも

間にかペンを執つて、誰の手の指の先へ「徳光」と云ふ字や「光子」と云ふ字を數限りもなく書いてゐた、親指から小指まで五つの指の先へ萬遍に。………

堪忍して頂戴、こんなつまらないことを書いて、

毎日顏が見られるのに手紙なんか書くのはおかしい？ でも學校だと傍へ寄るのがきまりが惡くて妙に氣がひけるのだもの。さう云へばこんなにならないうちはわざとお互ひに寄り添うてみんなに見せびらかしたのに、噂が事實になつてしもたら却つて人眼を憚るやうになるなんて、やつぱりあたし氣が弱いのかしら？ ああ、どうかして強くなりたい、もつと、もつと、………神をも、佛をも、親をも、夫をも、恐れないほど強く強く、………

明日の午後はお茶の稽古？ そしたら三時にあたしの家へ來られない？ あした學校でイエスかノーを知らして頂戴、此の間のやうに合圖してね。きつと、きつと、きつと來て！ 、、のテーブルの瑠璃の花瓶の中で綻びかけた白い芍藥が、あたしと一緒にあえかなためいきを洩らしながらあなたの來るのを待つてゐるの。失望させると可哀い芍藥の花が泣きます。洋服箪笥の姿見もあなたの姿を映したいと云つてゐます。

ではきつと！

明日お晝の遊び時間にあたしはいつもの[illegible]立つてゐます。合圖を忘れてはいけません。

光　　　　園樣

（五月十一日、光子より園子へ。封筒縱四寸五分。横二寸三分。オールドローズの地色の中央に幅一寸四分程の水縞目が縦に通つてゐて、その中に四つ葉のクローバーを散らし、下の方に骨牌が二枚、ハートの一とスペードの六が重なつてゐる。水縞目とクローバーは銀色、ハートは赤、スペードは黑。レターペーパーは淡い黄色の無地で、その右下の隅の所から斜めに白繪の具のペン字で文句が書いてある。筆蹟は園子より拙く、落ち着きのない走り書きのやうに見えるが、此の方が字體が大きく、イヤ味がなくて生き生きとした奔放な感を與へる。）

姉ちやん。

光は今日一日機嫌が惡かつたの。床の間の花をむしつたり、罪もない梅やら光子に付いてゐる小間使ひの名を叱り飛ばしたり、信雄（光子の弟、五つ歳下）にあたり散らしたり、………

光はきつと日曜になると機嫌が惡いの。なぜつて一日姉ちやんに會

へないのだもの。日曜にはハズさんがゐるから來てはいけない――
――なぜいけないの？ でも電話ぐらゐならと思つて、さつきかけたらハズさんと一緒に鳴尾へ苺狩りに行つてお留守！ まあお樂しみ！

ひどい、ひどい！

あんまりやわ、あんまりやわ！

光は一人で泣いてゐます。

たまには姉ちゃんの、、、、、、、、、可愛い白いあての足を想ひ出して！

いつ又姉ちゃんはあんぺいのやうな、、、、、、、、、、、くれるの？

あゝ、あゝ、あゝ、

くやしいからもうなんにも云はない、

Ta Sœur Clair

Ma chère Sœur Mlle. Jardin

（上文中のあんぺいと云ふのは東京語のはんぺんである。"Ta Sœur" は佛蘭西語で your sister と云ふこと、"Clair" は光りの義から轉じて「光子」を意味するのであらう。"Ma chère Sœur" は"My dear sister"。"Mlle. Jardin" は Miss. Garden にて「園子孃」の意。「マダム・ジャルダン」と云はないで「マドモワゼル・ジャルダン」としたに就いては宛名の末に下の如く追記してある。――）

あて姉ちゃんを「マダム」とは云はない

「奥様」――まあ嫌な！ 思てもぞつとする！

でもこんなことハズさんに知れたら大變ね、

Be careful!

姉ちゃんはなんで手紙に「園子」とサインするの？ なんで「姉より」としてくれないの？

（五月十八日、園子より光子へ。封筒縦四寸横二寸四分。圖は横に書いてある。緋色の地に鹿の子絞りのやうな銀の點線が這入つてゐて、下に大きな櫻の花瓣の端が三枚見え、その上に後ろ姿の舞妓が半身を出してゐる。緋、紫、黑、銀、青の五度刷りの最も色彩の濃厚なもの。從つてその表面へ文字を書いても讀みにくいので、宛名は裏面に記してある。レターペーパーは丈七寸幅四寸五分程の大きさの中に八寸ぐらゐの白百合の莖のたわめられたのが左へ寄せて描いてあり、その[illegible]である。[illegible]に罫の引いてある[illegible]は

僅かに紙面の三分の一の面積しかない。それへ四號活字より小さい文字で細く細く書き續けてある)。

とうとう來た、一度は來るとかねがね覺悟してゐた事が、……

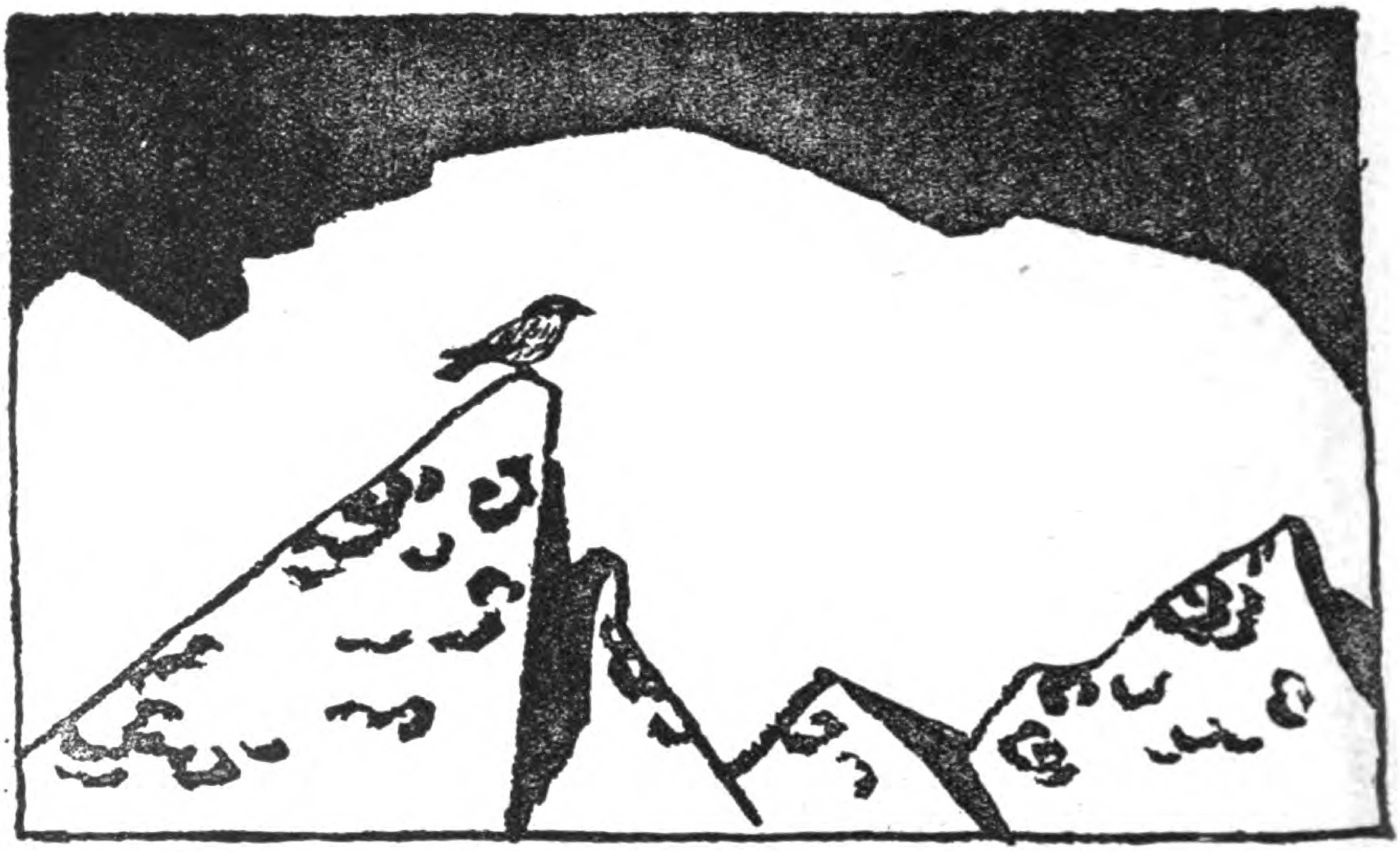
ゆうべは隨分猛烈だつた。光ちやんが見たらどんなにびつくりするかしらん。あたしたち夫婦——あ、堪忍して頂戴、あたしたちと云へば光ちやんとあたしのことだつたのね、——ハズもあたしも久しぶりであんな大喧嘩をした。久しぶりどころかこんなことは結婚以來始めてだつた。京都の問題があつた時でもゆうべのやうに激しい云ひ合ひをしたことはなかつた。あのおとなしい優しい人があんなに腹を立てるなんて！ けど無理もないかも知れない、なぜつてあたし今考へるとほんとに惡いことを云つたのだもの。どうしてあたしハズに向ふとああ剛情になれるのしら？ それにゆうべは特別に强硬だつたの、どう云ふ譯だか。……あたし今度は自分でちつとも濟まない事をしたと云ふ氣が起らないの。

でもハズだつて隨分亂暴なことを云つた、不良少女、ヴンパイア、文學中毒、ナオミズムの女、變態性慾、そしてしまひには色情狂、——ありとあらゆる汚名をあびせて、それでも足りないで光ちやんのこと迄も「野獸の闖入者」だの「家庭の破壞者」だのと、……あたし自分のことだけなら堪忍するけど、光ちやんのことを云はれたのでもう我慢がならなかつた。「あてが不良少女なら何でそんな者を妻にしなさつた、あんたは男らしいもない、あての家から學費を出して貰ひたうて好きでもない者と結婚しなさつたんか。あての我が儘は初めから分つてゐるやないか。あんたは卑怯や、意氣地なしや」と、思ひきりくさしてやつた。そしたらいきなり灰皿を取つて振り上げたので、えらい目に遇はすかと思たら、それを壁へ叩きつけたり、手荒なこともようせんとまつさをになつて默つてしもた。「あての體に怪我でもさして御覽、いいか、うち覺悟があるよつて」さう云うてもやつぱり默つてゐた。それきり今日までハズとは一ぺんも口をきかない。……

——その手紙にある云ひ合ひのことについてはもつと先生に聞いて頂きたいことがあるのです。前にもお話しましたかどうか、わたしと夫とはどうも性質が合ひませんし、それに何處か生理的にも違うてゐると見えまして、結婚してからほんとに樂しい夫婦生活を味はうたことはありませなんだ。夫に云はせるとそれはお前が氣儘なからだ。何も性質が合はんことはない、合はせんやうにするよつてだ。己の方は

合はせるやうに努めてゐるのに、お前がさう云ふ心がけにならんのがいかん。世間の夫婦てそない理想通りに行つてる奴はあれへんで。ハタから見たら圓滿のやうでも、內情を知つたら不平のない奴はおるもんか。己等だつて人が見たら羨ましいやうに見えるかも知れんし、一般の標準から思たら實際幸福の方かも知れん。お前は世間知らずのいとはんやよつて、自分で自分の幸福が分らんと何や彼や贅澤を云ふのや。お前みたいな人間はどない申し分のない夫を持つても此れなら滿足やと云ふ時はあれへんで、と、いつもそない云ふのですけど、わたしは夫の世の中を悟りすましたやうな、あきらめたやうな物の言ひ方が氣に入りませんよつて、あんたはちよつとも煩悶なんかしたことがないやうに見える。あんたと云ふ人は人間らしいところがあれへん、と、さう云うて攻撃するのです。夫の方ではわたしの性質に合はせるやうに努めてゐるのでせうけど、それがほんとに氣持ちがぴちつと合ふのでなうて、此方を子供扱ひにして、ええ加減にあやしてゐるやうに思はれますので、さう云ふ態度が癪にさわつて仕方がありません。あんた大學では秀才やつたさうやさかい、あてみたいなもんは定めし幼稚に見えるやろけど、あてから見たらあんたはまるで化石みたいな人やわと、云うてやつたこともあります。いつたい此の人の胸にはパッションと云ふものがあるのかしらん？　此の人でも泣いたり怒つたり驚ろいたりすることがあるかしらん？　わたしは冷靜な夫の性格にやるせない淋しさを感じたばかりでなく、いつの間にかさう云ふわるさしみた好奇心を抱いてゐましたので、それが京都のことや光子さんのことや、いろいろの事件を惹き起す元になつたのです。

（つゞく）



王は笑ふ（五場）

前田河廣一郎

【この戯曲は、ケマル・パシヤ出現以前のオスマン帝國の、政治その他の國情に卽した現代史劇ではない。作者は、多少の史料と、大部分は自分の空想によつて、亡び行く制度、暴政、文物などに對して、一つの文學的プロテストを試みてゐるに過ぎない。】

時

歐洲大戰當時

所

トルコの宮殿

人

スルタン
スルタナ
陸軍大臣（巨漢）
大藏大臣（小男）
警視總監
軍人大勢
スルタンに扮した臣下A（アリ・パシヤ）
同　B（アモン）

ハレムの鍵を保管する女
美しい外國婦人
その夫
宦官五人
外國の使節
暗殺者
闖入者の群
寵妃、屬從、黑人、乞食等多數

第一場

宮殿の表門に面した一室。
晝過ぎ。

スルタンに扮した臣下AとBが、窓の下で將棊を指してゐる。何處か遠くの方で賑かな囃の音が聞える。

一と繩に吊された金の籠の鸚鵡が、時折羽搏きをする。

臣下A　そら、これで、女王が生捕られりあ、お前の國は亡びるぢあないか？

臣下B　冗談云ふな。——俺の國は、王樣で持つてゐるんだ！　女王なんざあゐなくなつたつて平氣なもんさ。

臣下A　それでは、かう二桁飛び越して、武將の首をちよん斬るぞ！

臣下B　そんならこちらも、かう行つて、お前の國の旗を仆してやるがどうだ？

臣下A　旗なんざあなくとも、兩陛下お揃ひでぴんぴんしてゐりや國は確かなもんさ！

臣下B　アリ、國旗のない國が何處にある！

臣下A　それより、お前の王樣を氣を附けろ！——そら、首が飛ぶぞ！

臣下B　まだ、まだ！　そんな手ぢや、かう身代りを立てて飛び退く方法はいくらもある！

臣下A　ぢあ、濟まないが、お前によく似た王樣の身代りを生捕ることとしよう。

臣下B　俺の方ぢや、お前さんによく似た王樣の身代りを、これこの通り、先刻から貰つてるので、別に文句はないぞ。

臣下A　女王のなくなつた王樣——さあ、これからどう動くか？　アモン、負けたら負けたと、城を開いて降參しろ！

臣下B　生意氣云ふな！　たつた一と手のちがひぢあないか！　お前こそ國旗のない國をしてゐやがつて！　亡國だ！　さまあ見ろ！

臣下A　しかし、勝つたのは俺だからな！
この時、正面の帷から、臣下AとBとによく似たスルタンが上半身を表はす。
臣下B　國旗を奪はれて戰さが出來るか！
臣下A　王様の首が飛んで國が持つか？
臣下B　王様はなくとも、いくらも共和政體といふ奴があるわい！
臣下A　同じことさ、政體なんざあいくらでも新らしいのを拵へれあいいんだ。
臣下B　この野郎、口のへらない野郎だな。まるで、俺達の王様みたいに、右と云へあ左とぬかしあがる！
スルタン（大きく咳拂ひして）おい、おい、お前達は、先刻から俺の實驗の邪魔ばかりしてゐる。それに、云ふことが皆俺の惡口ばかり！　氣をつけないと、首を刎ねるぞ！
臣下AとB俄かに狼狽して、土下座しながら大仰な身振りで憐みを乞ふ。
籠の鸚鵡、けたたましく叫び出す。
鸚鵡　おい、女が通るよ！
スルタン　こら、早く窓から様子を見ろ！　美人だつたら、容赦することはない、一聯隊の兵隊を出しても取押へるんだぞ！（臣下達窓より下界を覗く）
スルタン　どうだ？――
臣下A　あの頸は、やさしい牝鹿の頸すじそつくりで御座います。――
――どうやら、外國婦人らしう御座います。
臣下B　あの女のそばには、ペルシヤの薔薇の花も邪魔で御座いませう。
臣下A　大王の御心が通じましたか、こちらを見上げてにつこりと笑つて居ります。
臣下B　オスマン帝國の大空に、あの眸ほどに澄んだ星は光つたことは御座いません。
スルタン（大きく欠伸しながら）外國の女か！――よし、よし、アリ、こつそり尾行をつけて、何處にゐるかを突き止めさして來い！
臣下A（恭しく敬禮して）宦官のアデブに命じてまゐりませう。
スルタン　いいか、女王へは内密だよ！（臣下A去る）――ところで、アモン、今朝讀みかけた探偵小説の續きを聽かしてくれ。
スルタン室の中央の寢椅子に掛ける。臣下B、懐中より一册の探偵小説を取り出して朗讀し始む。
臣下B（朗讀）……怪しの扉は、音もなく開いて、美人の姿を魔物の口のやうに呑み込んだと思ふと、後にはぱつたりと暗の沈默が

廊下を占めたのである。青年は、探偵ドレーキの片腕を掴むと、片手に持つたピストルを閃めかして、あはや件の扉めがけて發砲しようとした時、探偵は慌てて押とどめながら『待て！　まだ早い！』と騒いて、忍び足に扉口へ近寄つたのである。二人の耳は自づと扉の鍵孔へ吸ひ寄せられたが、この時、世にも悲しげな聲が扉の內側に聞えて、なにやら人の助けを呼ぶらしく思はれた、素破こそ大事と、青年は……。

スルタン　面白くないな。そんな探偵小說なら、俺の方がまだほん物だよ。いつたい、作家なんてものは、だんだん下手になつて行くやうな氣がするな。一人の女子を保護するために、戀人や探偵局總係りで大騒ぎをするなんて、少し常識を外れてるよ。世の中に、戀人といふものはたつた一人しかないやうな騒ぎだ。そんなへぼ作家を、俺のハレムへ一と晩留めてやつて見たいものだ。作風ががらりと變るにちがひない。――何處の作家だつけな？

臣下B　アメリカ人で御座います。

スルタン　道理で下手だと思つた。

臣下B　際立つて、かういふ通俗小說にまでキリスト教的な一夫一婦主義を鼓吹するところなどは、大王様、いかにも野暮で御座いますな！

スルタン　同じアメリカでも、そこへ行くと感心なのはモルモン宗ぢや！　あれなどは、たしかに、わが尊きマホメット教の靈旨を承け傳へたものにちがひない。一夫多妻主義が人類を……

この時、再び鸚鵡鳴き出す。

鸚鵡　おい、女が通るよ！

臣下B　そら、またお通りだ！　今日は世の中の女の厄日だな！

スルタン　何？――

臣下B　いや、何でも御座いません。（窓の下へ行き）大王様、またまた別嬪で御座いますよ！　外國人で。

スルタン　うむ、堪らんな！　國際關係が頻繁になつて來るとこの俺の體も自然と忙しくなつて來るわい！　王様になるのも樂なこつちあないわい！――それ、その別嬪もハレムへ叩き込んで置け！　いいか、新しく建て增した、池の前の女部屋だぞ！

臣下B　かしこまりました。（敬禮。急ぎ去る）

スルタン（大醉にて）誰かゐないか？――おい、誰かゐないか？（手を鳴らす）……ゐないのか？　困つたな！　よくこんな時、惡い奴めが、俺の生命を取りたがるんだ！　ああ、誰でもいい、早く出て來い！

孤獨の自分に恐怖を感じて、腰の大刀を抜きながら、室內を巡

戰競々として歩きまはる。と、中央の帷に當つて、何かかすかに觸れ動く氣勢。恐る恐る帷を揭げて見ると、ア!深く胸を刺されて、朱に染まりながらばつたり室内へ仆れ込む。スルタン吃驚して飛びのく。鸚鵡再び鳴く。

鸚鵡　おい、女が通るよ!

スルタン　ええッ　やかましいわい!　すんでのことに、この俺が殺られるところだつた!——ああ、誰か居らぬか!　誰か出て來い!　ええッ、こりあかうしては居られない。と云つて、今動いては危いし——さてどうしたらいいことか……(スルタン臺へ上がりながら四邊を見まはす)……馬鹿ッ、俺は、俺のこの態はなんだ!　俺は、敎祖マホメットの後裔、オスマン大帝國の大王ハミッド樣ぢあなかつたか!　起て、起て、狼藉者が何で怖わい!　俺は王樣だ!——俺は大王だ!　オスマン帝國の大王陛下だ!(絕叫)おお、アラーの神よ!(拜跪して神に救ひを求む)

第二場

窖の底。

同じ夜。

各種の拷問の道具が壁々に吊されてある。正面に入口、その奥に石段。

宦官四人、一人の外國婦人を取圍んでわいわい罵りわめいてゐる。婦人の手は縛ばられてゐる。ぼんやりと東洋風な洋燈がともつてゐる。

宦官一　さう剛情を張つてゐないで、うんと云つたらどうだ?

宦官二　痛い思ひをするだけ、お前さんの損だよ。

宦官三　さうだ、この王宮へ連れて來られた女は、どつち道逃げようたつて、死ぬよりほかに逃げ路はないんだ。

宦官四　厭と云ひや、王樣は仲々あれで慘酷な方だから、どんな新しい刑罰の方法をお考ひになるか知れないぜ。

宦官二　お前、先刻、ここへ來る途中渡つた池があるだらう?——あれは何だと思つてるか?　あの中には、お前さんみたいに、王樣の前へ出ては頭を振つた外國の女の骨が一杯はいつてるんだぜ!

外國婦人戰慄する。宦官一、苛立つて、壁から長い鞭を外づす。

宦官一　もうこの上は、體で返答するがいい!　君達、よくこの女を引据えて措いてくれ給へ。(鞭の空ら鳴り)どうだ、この殘忍な音樂は?　こいつが、弦を放れた白金の矢のやうに、ひゆ——ッとお前さんのその美しい頸や胸へお見舞するんだぞ!　さあ、まだ返答しないか?(正に鞭を打おろさんとす)

宦官五あわただしく登場。

宦官五　待て、待て！

宦官達　アデブ、何で留める？

宦官五（外國婦人の前へ慇懃に敬禮し）大王陛下には、直々に御目にかかつて、お談がなさりたいとのことです。――君達、この婦人の縄をほどいて上げ給へ。

宦官一　――でも。

宦官五　大王の命令だ。（縄ほどかる）

軍人達、扈從、ハレムの鍵を保管する女等を引具して、スルタン登場。宦官達左端へ平伏する

スルタン　女、顔を擧げい！

外國婦人　あたしの夫に會はして下さい！

スルタン　何、夫――？

外國婦人　さうです、今日、あたし達はこの城を見物に來たのです。二人いつしよにホテルを出て、この城門の外へ來かゝると、掏摸があたしの手下げを盗みました。夫は、その邊に立つてゐた警官へ掏摸を捉へてくれるように話してゐたのです。――その時でした、この男が（宦官五を指さす）すられたあたしのハンド・バッグはあちらに御座います、と云ひながら、あたしを城門の中へおびき寄せたのは。それから――

スルタン　一人の夫――で貴女は滿足出來るかの？

外國婦人　まあ、何といふ――あたしをこの上もなほ侮辱するつもりですか！

スルタン　いや、俺は、貴女のほんとの意見が承はりたいんだ。わし達は偽善者ぢやないのだ。

外國婦人　獸でせう！

スルタン　人間は獸からいくら隔つてるか――そいつも考へものだ。

外國婦人　野蠻人です、貴方がたは！

スルタン　どうでもよろしい。それで、貴女は心から滿足して一人の男に一生を托して居なさるのか？

外國婦人　そんな非基督教的な質問に答へるわけには行きません！

スルタン　どうしてかう西洋人といふ奴は偽善者に出來てるのかな！……よろしいか、御婦人、わしの眞心がわからんのか！　人間といふものは、今貴女も云はれるとほり、半分がた獸みたいなものさ。誰にしたところが、先づ食ふことを始終考へる。次には子孫を殖やすことを考へてゐる。貴女がたにしたところが、それに變りはあるまいぢやないか？

外國婦人　あたし達には精神生活といふものがあります。人間に[illegible]

生活がなかつたら、動物とすこしも變りはありません。だからこそ精神生活を高く、豐かにする必要があるのです。

スルタン　精神生活とは――肉體の生活を離れてあるものか？

外國婦人　肉の生活を統御するもの、調節するもの、より氣高くする力こそ精神生活です。

スルタン　いや、わしの云ふのは、肉の生活をせんで精神生活だけがふらふら存在するかどうか――といふことぢやが？

外國婦人　………

スルタン　そら見なさい。精神の生活といふものは、つまりは肉の生活に從屬する一部分にしか過ぎんのぢや。例へば、今、ここに、わしが貴女の首を刎ねるとすると、貴女は、それを甘んじてもなほ、精神生活を主張しなさらうといふのか？

外國婦人　………

スルタン　どうも、わしには、數々の外國婦人が今まで貴女と同じやうなことを云つては、結局、池の底へ骸骨となつて沈んでしまふ、その氣持が解せんのぢやて。――そんなに、精神生活といふものを主張しなさるなら、何のために貴女がた西洋人は他人の國を占領したり、物質上の發明をしては食物や住宅や衣服の改良を計つたりするのか？　何のために、第一、貴女などが、そんな御化粧などを施して、俺の城下をこれ見よがしに絹をふり撒いて歩るいてゐなさるか？

外國婦人　貴下は逆立ちしてゐる。貴下の考へは、全然動物的です。あたし達は、それと正反對に考へてるのです。肉體は、人類の精神的活動を盛り上げるための補佐にしか過ぎないのです。基督は四十日間斷食しても………。

スルタン　いや、わかつてる。同じ基督が、一日磔刑に處されると、彼れの精神生活もなくなつたぢやないか！　さういふこまくわしの教義はどうでもよろしい。このスルタンの聽きたいことは、貴女がたが、頭のさきから靴の底まで、僞りと嘘とで固めてゐながら、果して心中に矛盾を感じないかどうかといふことだ。――好ならば、いくら男を拵へて戀をしたところが何でもないぢやないか？　それは、英國が植民地をどしどし殖やすのと何の相違があるか？　男も、惚れたと思つた女なら、あらゆる手段を講じて戀をしかけても構はないぢやないか？　それは、アメリカが金でもつて、この半島からどしどし石油を買つて行くのと何の相違もないぢやないか？

外國婦人　貴下に道德性といふものがない。貴下は動物のやうに無道德だ。

スルタン　わし等の國へ來る外國人は、殊に金持の西洋人は、みなわ

し等よりも無道德だよ。彼等は、金をさへ拂へば何でも勝手に自分の好きな物が手に入るものと信じ切つてゐる。それで對手が渡さぬとすると、、、、、、、、、、近頃は、、、といふ物で、、、、、する！　わしが外國婦人へ戀の代償として寶石を與へ、一生安穩に暮らして行けるやうにハレムを公開してやるのと、そこにどれほどのけぢめがあるといふのだ？

外國婦人　いゝえ、婦人の貞操といふものは――

スルタン　子供を生むまでの芳香さ。わしの花園には澤山の花が咲き亂れてゐる。その花の一つ一つが、この蜂でなければ花粉を媒介させぬ、あの蜜蜂はいいが、蝶はいけないと云つて斷つてゐるか？――愚かな女よ！　貴女は、その無智と頑迷とからだけでも、十分に死刑に値する婦人だ。眞理は、斷頭臺の刃物よりも良く切れるのだよ。東洋の眞理も、西洋の眞理も、眞理に二つはない。人間は動物である――この一つこそは千古を貫く眞理なのだ！（鍵を保管する女にむかつて）こら、この婦人を、獨房へ案内して鄭重に待遇して置け！　ここ二三日熟慮したら、わしの云ふことが會得出來るやうになるだらう（鍵を保管する女、外國婦人を引立てて去らうとする）

外國婦人　あたしは、世界のありとあらゆる國々を旅行して、かなり多くの主權者達に謁見をゆるされてゐます。し よ、あたしは貴下ほど憫むべき、心から同情すべき不具者を見たことはなかつた。貴下は、貴下の權力に服從した臣下の拵へた、アンゴラ猫の寢床のやうな、都合のいい思想にぬくもつて、そこを一歩たりと外へ出ようとはされないのだ。あたしは大膽に豫言します。――貴下の王國は、ごく最近に潰れてしまうでせう！　そして、嫌でも應でも、貴下は、自分の脫け毛で温かくなつてゐる寢床から引ずり出されるでせう……！

スルタン　（宦官達へ）この婦人は、すこし口が多過ぎる。やはり帝國の風習としてわしが謁見を仰せつけたときの婦人には一切面覆をさせた方がいゝ！　引立てい！（一同慴伏す）

外國婦人　あたしの體に指一本でも觸れて見るがいゝ。スルタン、貴下の廢物のやうな王國は、忽ち大嵐のために跡方もなくなりますよ！（去る）

スルタン　ああ、馬鹿な女に取りあつたものだ！　折角氣持よく醉つた晩餐の酒も、これでだいなしにされてしまつた。誰か、アモンを召し出せ。――二號の廣間を眞晝のやうに照らして、俺はアモンと心ゆくまで酒を汲み交はさう！　女達を皆呼べ！

――幕――

第三場

玉座のある廣間。

正面高く、二口の偃月刀が斜に交叉してある。その前に、高い玉座。

第二場の翌日、午前。

スルタン玉座に掛けてゐる。程良き場所に、陸軍大臣、警視總監、ヌルタンに扮したアモンなどが、それぞれの席に着いてゐる。遙か末席に、宦官五人、武裝した軍人達及び扈從等が立ち列んでゐる。正面奧の入口には、二人の逞ましい半裸體の警護の黑人が、長劍を拔き放つて黑耀石の柱のやうに立つてゐる。一方の窓から日光。スルタンの水煙管から立騰る煙草の煙。

一隅の卓上に、大型のコーランがある。

スルタン（猜疑心に富んだ眼付にて一同を見廻はし、やたらに煙草の煙を吐く）もうほかに來る者はないか？ ——總理大臣はどうした？

警視總監　病氣です。

スルタン　大藏大臣は？

陸軍大臣　あの倭人めは、この國家多端の際に、石油會社の株かなんかを調べて居るんですよ。私の方へどんどん軍用金を注ぎ込まねば、英軍のためにクト・エル・アマラの戰線が危ないんですがね。何しろ英軍のタウンセンドといふ將軍は、強か者でしてね。

警視總監　それに、どうやらロシアの軍隊もモスル・バグダッド線へ百哩も近づいて來てるといふがほんとですか？

陸軍大臣　ありや、まア、山地ですから、ペルシャの方も左程危險に曝らされてゐるわけでもありませんがね——何しろ問題は英軍ですよ。此間もフオン・デル・ゴルツ將軍と會見したところなんですが、この際私共がうんと踏ん張らぬと、王樣、貴下も、曾てはスルタンの御代に於て、このオスマン・トルコと、モロッコ、エヂプトの三大國の君主であられた昔の名譽を二度と御回復が出來ないといふものです。

スルタン　ほんとに憎い奴は英國だ。俺の掌からエヂプトを掠め取つたのはあのジョン・ブルだ！ 俺は一九一四年からこつち、たとへどんな事をしても、假に、もう一度ロシアと屈辱的な條約を結んでも英國をやつつけなければならぬと思つてゐたのだ。そのロシアも、今は英佛露の三國同盟を結んでやがる！

臣下B　幸ひドイツとオーストリアが大王陛下を御援助申上げて居る

からいいやうなものですが。

スルタン　ああ、英國をやつつけたい！　俺の國は、ながい間英國人の血のやうな赤い國旗を掲げてゐる。俺の尊稱は、スルタン即ち『アウンケイアル』――平たく云へば人類の殺戮者、と云ふんだ！

陸軍大臣（起つてのそのそ歩き廻りながら）何にしても早くあのちびの大藏大臣を呼んで來ないと話が出來ない。誰か官邸まで一と走り行つて來ないか？

臣下B（官官の一に對ひ）では、一と走り行つて來て呉れ給へ。（官官一退場）

スルタン（陸軍大臣に對ひ）さうのそのそその邊を歩き廻るなよ。――あのアリ・パシヤの奴が暗殺されてから、俺はひどく神經過敏になつてしまつて、夜も碌々眠れはせんわ。

臣下B　御安心なさいまし、大王陛下、あの時は、まつたく以て運が惡るかつたので御座います。これからはこのアモンが、パシヤの分までも稼いで御目にかけます。

陸軍大臣（左側に立ち停まり、腕組みしながら一同を見廻す）何、大王は、べつに國事に就いて御心配なさらんでも、ゆつくり美しい女子にトルコ人種の改良方法でも講義をなすつてればいいんです。仕事は私共がやりますよ。それはさうと、昨日素敵な別嬪が舞ひ込んださうで御座いますね？

スルタン　もう知つてるか、早いのう。――うふ、ふふふ……手強い奴でのう！

臣下B　あれは、英國人ぢやありませんか？　ですと、時節柄危險ですがな。

スルタン　まさか、この戰時狀態を知つてゐてぬけぬけと來る奴もあるまい。また、國境の役人が通すわけのものでもあるまい。――でも、いいぢやないか。英國女だとすると、なほのこと俺の征服慾が挑發されるといふものだ。これだけは、獨軍の力を借りなくとも立派に征服して見せるよ。

陸軍大臣　女王樣の嫉妬を背後に控へておいでになるからには、ニキツン將軍がペルシヤ灣へ上陸し、カウカザスにはコサツクが馬を進めた、――まあ、あの當時の、腹背に敵を受けた我が軍のやうなものですな。はツは、ははは――。

警視總監　しかしオスマン王族歷代の血を享けられた大王陛下には、それぐらゐの戰爭は何でもないですよ。

スルタン　――どうもあの女は妙な女だよ、ほかのことは何でも、昨晩非常に氣がかりになることをしやべり散らしてのう。このわしが、人もあらうに、このハミツドが、世界でたつた一人逆立ちをし

てゐる人間だといふやうなことを云ひくさつたよ。わしは、お前達の眼から見て、ほんとに逆立ちしてゐるやうに見えるかの？

大官達（異口同音に）逆立ちを――滅相もない！

警視總監　逆立ちをしてゐるのは私共で御座いますよ。

スルタン　さうだらう。べつにこのオスマン帝國が今日明日に亡びるといふこともないやうだし、役人は役人で滿足して賄賂を取り、兵隊は兵隊で一人でも餘計にギリシヤ人やアルメニア人を虐殺しようとしてゐるし、ベルリン・バグダツトの縱斷鐵道に儂の特別列車が運轉されるのも間もないことだらう。西部戰線では中央同盟は破竹の勢ひで聯合軍を追ひ拂つてゐるし、然へりあ、わしの帝國も國々教と共に、ますます膨脹して行く一方だよ。が、昨日のアリ・パシヤの暗殺と云ひ、あの外國女の惡態と云ひ、――多少そこに氣懸りのないこともないのだが。………いつたい君等は、、、、、、、、これからの世界に於ける壽命はながいものと思ふか、それ共短いか？

警視總監　どうも大王は近頃いい探偵小說をお讀みになりませんね？――安靜した國王の御精神は、偏へに、何をお讀みになるかよりも、何をお讀みにならないかにあることだと思へます。私のやうに、檢閲の方にまでも眼を通してゐますと、それは腹立たしいほど自分の氣持がひねくれて、、、、、、、、、、、、、どんな人間を見てもく、、、、、、かと考へるようになつてまゐります。やはり、大王は、お心持からのんびりとなられ、地中海のやうに廣いお氣持で女を愛され、一旦異國人や非回々教徒を御覽になれば、片手にコーラン、右手に劍を握つて猛然とオスマン帝國二十億の民衆を驅ひ立たせられるだけの勇氣をお持ちになることが肝心です！

スルタン　ふむ、なかなかお前も近頃は辯舌がさはやかになつたな。ついでに、ちよつとコーランを持つて來い。（宦官の二、壇から聖典を運び來たる。スルタン瞑目して、片手を頁の間へ挾み、その一行を指さしながら、宦官二に對ひ）わしの神かけての占ひぢや、讀め！

宦官二（躊躇してゐる）………

スルタン　讀めと云ふに！

宦官二　はツ。――『惡魔の徒よ！　早く去れ！』で御座います。

スルタン（大きく眼を開いて）呆け者！（再び瞑目して、別の頁へ指をさし込む）もう一度讀め！

宦官二『神へ歸るべし！』

スルタン　馬鹿か、この不吉な馬鹿者の首を仲庭へ出てちよん切つてくれ！

扈從の一人慌しく登場。黒人の衛兵に遮られながら。

扈從　申上げます。――只今、さる通信社の者が傳へて參りましたところに依りまするとロシアに革命が勃發いたしまして、ツアール・ニコラス大帝には王位を剝奪されたとのことで御座います！

一同　ロシアに、革命とな――？

スルタン　ツアールが王位を？

間。

スルタン（頭を抱へながら）どうも俺にはわからん！（扈從に對ひ）それきりか？　もつと詳しい報告はないのか？

扈從　電文はごく簡單で御座いまして、それ以上を傳へては居りません。（去る）

陸軍大臣　革命だな？――ロシヤに？（小間）ふむ、こりや、大王、吉報です。これで、クト・エル・アマラは勝つて御目にかけます！　いづれ内亂が起りますれば、ペルシヤ方面のロシア軍は撤退するにちがひありません。よし、早速、アダンナ將軍へ指令を發しよう。

大藏大臣、宦官一に伴はれて慌てて登場。宦官一部厚な帳簿を擁ひ來る。

陸軍大臣　ふむ、來たな、卑怯者。今日の御前會議を後らした理由はわしにはちあんと讀めて居るぞ！

大藏大臣（スルタンへ恭しく敬禮したのち）大王陛下、世の中には、獲物を殺しても、その肉を食はうとしない猛獸も御座います。獲物を嗅ぎ出して、それを屠るのも一と役、屠つた獸の跡始末をするのも一と役、殺すばかりが戰爭の能では御座いませぬ。今、陸軍大臣の當てこすりも御座いましたが、實は昨日以來、某國の使節がひそかに參りまして、バクダッド・モウスル間の數限りもなき油田の開發に就いて、ドイツ系のアナトリアン鐵道とは別口に交渉を開始したいと申出ましたので、拙者めは昨晩夜を徹して、一九〇四年以來の政府の許可權や、技師の諸報告などを調べて居つたもので御座います。何にしましても、陛下の前では御座いますが、歷代の諸大臣が勝手氣儘に財布の中へ手を突つこんで掻きまはした財政で御座いますから、その亂脈を極めた有樣は、とても御話にはならないので御座います。――それにも拘らず、或る方面の大臣などは、自分勝手の豫算を編成しまして、大王の御前に出來るだけ頻繁に伺候して、國家財政が破産しても戰爭をやり通さうなどといふ氣儘な振舞も目につきますやうな次第で……。

陸軍大臣　こらッ、君は、一國の財政を司つてゐるのか、それ共他人の讒訴を陛下に申上げるために生きてゐるのか？――次第によつては、我輩の名譽にかけても是非曲直を陛下の御前で裁いて戴から

ではないか！

スルタン　二人とも、良い、良い！　畢竟するに、お前達は、双方とも熱心に國事に參與するのあまりの衝突と見受ける。——俺は、可笑な話だが、わがオスマン帝國の現狀をもつと小說的に眺めて居るのぢや。一人の大臣によつて代表されたわが國は、飽くまで侵略的で強く逞ましく武斷主義であり、もう一人の大臣によつて代表される方面は、細心にして良く國の原動力を考へ、諸外國との交涉には飽くまで狡獪に悧巧に拔け目なく立ち廻はる——取りも直さず、お前達二人の體格がそれを表はしてゐるといふものだ。尤も、財政の方は、大藏大臣の體格によつても證明されるとほり、痩せ細そつて、些か賴りなげに見えるが、これもトルコの現在だと思へば、猶更らのこと今後は太つて貰はねばならない。——まあ、まあ、それにつけても二人共仲良くやつて貰ひたい。

女王スルタナ扈從達を供して登場。そのあとにハレムの鍵を保管する女從ひ來たる。スルタンの前にて挨拶。一同起ち上がつて敬禮す。女王スルタンの傍らへ掛く。

ヘルタナ　會議で御座いますか？　でも、いつもの議政府では御座いませんのね。

スルタン　戰時は、だいたいまあこんなところさ。人が出揃はんからね。

スルタナ　戰時は、いろいろな會議が多う御座いませうよ。——外國の、禮儀知らずの、ヤシマックも懸けないやうな、怪しげな女達も侍るので御座いませうね。

スルタン　これ、これ、何を申す。今わし達は國家の重大事に就いて打合せをして居るところだ。

スルタナ　國家の重大事が——赤い縮れ毛をして、ハレムの窓の下で、首を縊つて死んで居りますよ！

スルタン　縊死を遂げた？——あの外國女がかい？

スルタナ　さぞ吃驚なさつたでせう。しかし、申上げて置きますが、今度だけはわたくしの差金では御座いませんですよ。でも、あれほど昨晩お口說きになつた以上は、今朝死んでゐてもお心殘りはないでせう。あまり素性の知れない外國女などに手をお出しになると、それこそ國家の重大事で御座いますよ。(鍵を保管する女に對ひ)先刻の遺書をお見せ。(紙片に書かれたる遺書女王の手に渡る)お樂しみで御座いませう、さあ、ゆつくりお讀み遊ばせ！

スルタン　どうもお前の邪推にも困つたものだ。まるでその邊のタアター人の賣り言葉のやうな口吻だからね。(遺書を讀む)——ふむ、あの女らしい凄文句だ。(警視總監へ紙片を手渡す)

警視總監　ほほう、アメリカ人ですな？――こりや、少し穩當を缺きますな。銀行家の妻君でせう。この男なら、最近たしか私も會つて居りますよ。ちよつと困つたな。――國際關係といふ奴がありますんでな。

スルタン（汗を拭ひながら）鸚鵡が惡るいんぢや！　アモン、お前あの鸚鵡を殺して來い！

臣下B　でも、大王樣、あれが居りませんでは――その、いろいろと御不自由も御座いませうて。

スルタン　さう云ひあ、それもさうだのう。

大藏大臣　差し出がましう御座いますが、何やら大變御當惑の御樣子、そのアメリカの銀行家とか申す者なら、だいたい拙者めがよろしく取り繕つてさし上げませうか？

陸軍大臣　さう、さう。さういふことにかけては、君はたしかに猶太人以上の腕前がある筈だ。

大藏大臣　またしてもあんな侮辱、お默りなさい。――それで、つらつら戰局を考へて見まするに、今こそかうやつて聯合軍と中央同盟とが干戈を交へ、アメリカも我が國と敵對關係になつて居りまするが、拙者の考へではこの戰爭も追つつけパリ當りで決がつくことと思はれまする。もともと、アメリカといふ國は、モルガン系の銀行團が聯合軍側に大金を貸付けて居る關係から參戰しましたので、もとはと云へば、デモクラシーの安全のためなどとは嘘の皮、つまりは慾得づくで出しやばつたもので御座います。どちらにせよ、戰爭が濟めば、アメリカはヨーロッパに先んじて通商や利權の版圖をバルカンの方へ求めて來るのは解つて居ります。幸ひオスマン帝國には、アメリカ人がかねてから手を廻はして買ひ占めよう買ひ占めようとしてゐるいろいろな寳物があるので御座います。そこをな、大王陛下、ほんのちよつぴりでも嗅はして置きますれば、事面倒になる前に、このケルマンシヤの爺が嗄れた掌でうまく圓めてお目に懸けます。その婦人とやらの行衞につきましては、警視總監殿とよく相談して、コンスタンチノープルには、それ、ベドウインやアルメニア人の素性の良くないのが澤山居りますから、迷宮入りの事件として、氣永く搜索中として置きますればあまり騷ぎも大きくならないことと思はれます。

警視總監　さすがは大藏大臣だ、それで私の方の責任もだいぶ輕くなつたといふもの。

スルタナ　ですが、輕くならないのはわたしの胸ですよ！――貴方の亂行が止まぬうちは、御前會議はいつもわたしのために邪魔されるものとお覺悟遊ばせ。

スルタン　これは怪しからん。オスマン帝國代々の王の權利……

臣下B　女王樣、その大部分の責任は拙者めにあるので御座います。御覽の通り、大王陛下とは瓜二つの樣子をして居る私めで御座いまして、時折、女王陛下のお目に餘るやうな事がありますれば、それは、ハレムの威嚴を保つために拙者めがいたづらをするので御座います。

スルタナ　大王陛下には忠心無二の臣下をお持ちになつて、さぞ心の中で感謝してお出でなさるだらうよ。心の中では、さぞ大きい舌をぺろりと吐いてお出でなさることでせうよ。——ああ、わたしは堪えられない！　わたしは、今に、火をかけてあの淫賣窟を燒き拂つてやるから！　あそこの壁に巢喰うてゐる寄虫の一匹一匹を、わたしはこの手で捻り潰さずには措かない！　いかほどトルコの軍隊が外國を征服し、ペルシヤ、印度の果までも屬國としたところが、あの國寳の拔け穴があつては、オスマン帝國は治つて行きますまい！　それまでは、大王陛下、貴方とわたしとは、今流行の言葉で申しますと國交斷絶ですよ！

スルタン　何を申す。——お前までが、西洋かぶれして、人類の本能を蹂躪しようとするのか！　お前までが、あの外國女の眞似をして、基督教の僞善文明を押つけようとするのか！わしは、歷代の諸王の傳統に從つて云ふ——女よ、去れ、汝は汝の主人たる男性に服從する以外に、汝の本分はないのだ！　美しい奴隷よ、永遠に麗はしかれ、しかれ、しかし、寸時も奴隷たることを忘れるな！さあ、起て！　今日の會議は、これで終つた！

スルタナ憤然として下面部を覆ふたヤシマックを引裂いて立ち上がる。臣從の一部と鍵を保管する女、彼女をなだめながら退場。その他の一同、威丈高になつたスルタンの前に慴伏して低頭する。

——幕——

第四場

圓柱の聳えたハレムの中庭の一部。

第三場より一と月ほど經た後のこと。

月光の漲つた夜。

棕櫚の植込みを背景にして、花壇が設けてあり、その前左隅に大理石で疊んだローマ風な泉水の一部。

右奥には、遙かに宮殿の一部にアラビヤ風なランプが、柔かい多彩的な光を鏤めてゐる光景が見える。石の上、叢みに溜まつた月光が、時と共に次第に移行する。

ナイチンゲールの聲。
聞くと、大理石の泉水の石段に、白衣を着てスルタンに扮した臣下Bが、打案じながら腰をおろしてゐる。
二人の黒人の衛士、後方左右に別らて、不動の姿で警戒してゐる。
すべては、暫らくこのままで動かない。

臣下B（深い吐息）……ああ、嫌だ、嫌だ！　俺は、つくづくこの妙な生活が厭になつて來た？――こんな不自然な生活が何處にあらう！　馬鹿々々しい。かうやつて、孤兒のやうに、朝も晩もスルタンの身代りになつて、自分の妻子眷族の顏一つ見ることも出來ず、まるで奴隷のやうに宮中にだけ閉ち込められてゐた日にや、人間としての生活が何處にあるのかと云ひたくなるね！――そりや、俺だつてトルコの國民だ、國家のためになることならスルタンの身代りもやるにはやるが、から何事もなくて、毎日毎晩、あの、やきの廻はつたスルタナの託言を聽かせられるには、ほとほと閉口だ！（靜かに立ちあがつて歩き廻はる）それに、出るも入るも、この二人の黒ん坊めが、惡魔のやうに俺の踵へくつついてあがる！（黒人の衛士へ）おい、お前達、俺のことは構はんでもいいから、暫らく彼方へ行つて休息しとれ！　せめて、この煙草を喫ふ間だけでも、俺の頭の上に君達の禿鷹のやうな執念深い眼を

（黒人二人双手を前へ差し伸べ、頭を低く垂れて退場）

遠くの方に宴會のさんざめき。

臣下B（續ける）さうだ、何か起こりや、これで氣が紛るといふこともあるんだが、實際退屈きわまる話さ。――俺がかうやつて、胃を削り膽を炒りながら彼奴の眞似をしてゐる傍らに、スルタンは何をしてゐるかといふに、毎日々々新しい女を一人づつハレムへ誘拐しては、日に夜を繼いでの淫酒に耽つてやがる！――さういふことになると、決してこのアモン樣には代理を勤めさせあがらねえから癪だ！　そして、俺の出る場と云ひや、いけ面白くもねえ、あのケルマンシャの侏儒爺や、野牛のやうな陸軍大臣といつしよに、思ひ上がつた毛唐共と四角な談をする會見の場だけだ！　そこでだつて、何一つ俺の云ふことと云つてはありアしない。萬事はあの饒舌家の大藏大臣が、エヂプトの鸚鵡みたいにしやべり捲くつたあとで、俺は帽子が頭からころげ落ちるほど頷いて見せさへすりや良いんだ！――馬鹿々々しい！　さうさ、これでもあのアリ・パシヤの奴が生きてゐる時分には、二人で交替してやつてゐたから、隨分と面白可笑しいこともあつたんだが。から朝から晩まで一人で勤務してゐる分には、退屈よりも苦痛だ！

間。

臣下B　一體、考へて見りや、物事は非常に間違つてゐそうな氣がしてならない。いつかも、あの死んだ外國女が云つたといふが、世の中で皆がまつ直に立つてゐるのに、たつた一人逆立ちしてゐるのはスルタンだといふことだ。自分で代理を勤めて見ると、つくづくそれが本當らしく思はれるよ。外國と戰爭をしたり、その都度國民から血の出るやうな税金を搾り取つて、やれ鐵道の、やれ運河のと、名目ばかりは國民の爲めになるやうな布令を廻はして置いて、その實、王宮の酒盛と女達を千人も二千人も圍つて置く贅澤三昧に金を濫費してるのだ。スルタンがスルタンなら、大臣や役人も同じことだ。てんでに何かの名義を拵へては國民の税金を、自分の財布の中へ落とし込んで知らぬ振をしてやがる。彼奴等の豪奢な生活振りを見ろ！　あれで、スルタンの前へ出た時だけは、やれオスマン帝國の盛運がどうの、國家の基礎が、國民の赤誠が、忠節が、と、齒の浮くやうな御世辭ばかり並べてやがる！　――ああア、俺は知らねえ。こんなことぢや、ほんとにトルコの王國もさう永續きはせんだらうよ！（不圖考へ込む。俄かに葉卷を捨てて立ちあがる）――さうだ、俺の執るべき道は、二つしかない！　このままスルタンに成り濟まして、どこまでも圖々しく生きて行くか、それとも、この宮殿を逃げ出すか――そのどつちかだ！　逃げ出す、とたると、こいつは仲々容易なことぢやないぞ。――と云つて、スルタンに成り濟ます……あッ、俺は、何を考へてるのか！　そ、そんなことは出來ない！　そんなことを考へるだけでも、俺は臣下の本分を外れてゐる！　大逆罪だ！　――

スルタンが同じやうな服装で奥の方からぶらぶら歩るいて來る。暫らくじつと立停まつて、アモンの姿を眺めてゐる。小間。

スルタン　アモン、何を諄々と獨り語を云つてるのか？――

臣下B　（ぎよつとして）あッ、これは、陛下で御座いましたか？――どうも、その、仲々良い月で御座いますな！　つひ見惚れまして、思はずこの中庭まで浮かれ出た處で御座います。……

スルタン　時に、この頃の奥の機嫌はどうぢやの？

臣下B　女王樣には、さほど御腹立ちの樣子でも御座いません。私も聞き嚙りの政治のことや、西部戰線の話や、新聞などの御話を御耳に入れるので御座いますが、殊の外良く御理解になりましてな、大王樣のことなどは頓と御惡く仰せられないやうに成られました。

スルタン　その方の達者な手管で操られた分には、遉がの奥もころりと參るだらうな！

臣下B　御冗談を！

スルタン　いや、俺も近頃萬事をお前に任せきりだから安堵しとるが、俺も人間だ、人一倍娑婆ッ氣の強い男だ——時には、お前に對して嫉妬を感ずることもあるよ。——兎も角も、アモン、近頃のお前は、實に立派に奉公してくれてゐる。アリ・パシヤがあんな最後を遂げてからといふものは、お前の忠勤振りは實に見上げたものぢやよ。臣下の者達でも、この頃は、この俺とお前とで、どちらが本當のスルタンか、ちよつと見ただけでは容易に見分けがつかんそうだからの！

臣下B　見分けがつきまするやうでは、大王様、かうやつて御奉公申上げてゐる甲斐がないと申すもので御座います。

スルタン　確かにそれはさうだ。——しかし、人間といふ奴は妙なものでな、自分に似た男を見ると、その男がどこまで自分に似てゐるか——自分の惡るい性質や、缺點や、暗い半面なども、やはりその男に在るのではないか……とまで疑ぐつて來るものだ。殊に、事情が事情で、お前も飛んだ宥め役として、最近はしげしげと奧の宮殿へ出這入りしてゐるとなると——は、は、はア。

臣下B　大王様には、この私奴を御揶揄ひ遊ばして、春の夜の醉ひに一段と御感興を御添えになるおつもりでせうが——それにはどうぞ、この私奴のやうな醜い男を御對手になさらずに、今日新しく加はりました筈のペルシヤ美人をでも御對手にな……のでせう？

スルタン　この俺に瓜二つのお前が——醜い男だとは、ちと氣懸りになる言葉だな。

臣下B　こ、これは、飛んだ失言を！　でも、大王様、もとを洗ひますると、大王の別當にしか過ぎない男、このフエツを脱ぎますれば、頭のまん中にはこの通り馬蹄に掛けられた傷が御座いますやうな——謂へば下賤な私奴で御座いまするを。

スルタン　良い、良い。辯解には及ばん。したが、似たもの序に、このわしの氣持の上の苦勞をまでお前が分擔してくれるとな。

臣下B　と仰有いますと？

スルタン　そこは、それ本物と贋物との相違だけあるわ。お前には、このわしの苦勞がわからんたらう？——いいか、、、、、、、、、、、、、、、になつてしまつたのだ。世界にだんだんと、、、、、、、出して來たのぢや。どうやら、時勢は、士民や商人や職工や泥溝浚ひ人夫達の威張りくさる時代に變つて來てるのぢや。——それがどうしてさうなるのか、このわ、、には皆目と合點が行かぬのぢやよ！

臣下B　思想の力——と申すでは御座いませんか？

スルタン　思想——といふと、つまり、眼に見えぬ頭の中の考へといふ奴だな！　そんな物は何にもならんよ。それこそ、例の西洋かぶれのした話だ。世の中を動かすのは、兵力だ、金だ、性の力だ！　ロシアに起つた革命なども、恐らくこの三つの力が人民を驅り立てたからであるにちがひない！

臣下B　でも大王樣には謀叛人の心持といふことをお考へになられたことが御座いますか？

スルタン　謀叛人？——さあ、そいつも一夫一婦と云つたやうな、不自然なことだらうな？　わしには、聖ソフィヤの塔が眞逆樣になつた場合を想像することは出來ぬよ。よし、眞逆樣になつたとしても、すぐとそれは崩れてしまふだらう。すべて、上に在る者を下と置き換へることは、理學の上からも肯かれぬ無理と云ふものだ。

臣下B　大王樣！——陛下には思想の力といふものが本當におわかりではないのです！

スルタン　やはりお前は、まだまだ本當のスルタンの眞似は出來んのウ。

臣下B　いや、陛下は、いろいろな佞臣共にあざむかれてお出なので御座います。

宦官二人登場。

宦官　御出掛けの準備が成りまして御座います

スルタン　うむ、出來たか？　よし、すぐと出掛けよう。——アモン、今宵は、このハミッドは其方の館と名前を借りて、久し振りに街へ微行して見ようと思ふのぢや。長らく酒場や遊び場へ出ないから、どうも氣がくさくさしてならん。

臣下B　大王樣。そ、それだけはどうぞ思ひ御留まり下さいませ！——この戰爭中の首都には、どんな惡者が陛下の御生命を狙つて居るかわかりませんのです。この前の外國女の夫といふ人間も、聽く由によるとまだこの邊を徘徊して居るそうで御座います。それから、アリ・パシヤを殺ろした者とても、まだその筋の手に擧らぬとのことで御座います。もし萬一大王の御身の上に一大事變でも御座いましたなら、私達臣下一同は……。

スルタン　良いわ。——わたしにもまだ昔の若い時分の冒險の血が流れてる。危險が多ければ多いほど、それを犯した時の勝利の氣持はまた格別ぢやよ。

スルタナひそかに花壇の傍らに表はれて、立聽きしてゐる。

臣下B　それに敵方の飛行機が、近頃は音もなく首都の空に姿をあらはすといふ風說で御座います。

スルタン　飛行機からの爆彈で殺られるなら、最先にこの宮殿に火が

ついてゐさうなものだ。何處で死ぬのも、人間の死に變りはない
て——では、行かう！

臣下B　でも御座いませうが——では、もしものことがありましては大變で御座いますから、憚りながら御行先なりと仰言つて下さいまし。

スルタン　今夜は久し振りに方々を陸軍大臣と飲み延つて見るつもりだから、ここと云つて突留めた場所もないが、夜更までには大通りのカシノへ行つて居るぞ！　其方こそは、邸を抜け出したりなんぞしてはならぬ。よいか、きつと頼んだよ！（宦官等と共に去る）

臣下B　道樂もああまで徹底すると、人間業でないな。——しかし、ほんとに氣の毒な人間だ。片輪だよ。また、その片輪の身代りになつてぬけぬけと同じ服裝をしてゐるこの俺も、よほどどうかしてゐるな！

この時、徐ろに歩み出でたスルタナ、臣下Bの肩を輕ろく叩く。アモン吃驚する。ナイチンゲールの啼き聲ひとしきり。

スルタナ　陛下さま、何と良い月では御座いませぬか？　この柔かい月光に照らされましては、どんな頑強な宮殿の窓でも、自づと門がはづれます。——御免遊ばせ、この花びらの盃は、酒のやうた夜の香にしとど醉ひしれて居るでは御座いませんか。あの憐ましげなナイチンゲールの聲は、空虛な血腥さい地上に、數限りもな

かなでる微妙な琴線の音としか思はれませぬ。——すこし、御歩きになりませぬか？

臣下B　滅相もない！——女王様、ちがひます！　この私奴は、私は決して……。

スルタナ　またしても御揶揄ひですの？　何を貴方はこの妻としてわたくしにまで、左程に隱しだてを遊ばさるほど、世の中を御恐れになつて御出でなので御座いませう！　トルコ大帝國の王ともあらうものが、もつと大手を振つて悠々と御歩きになつても差支ないでは御座いませぬか？——

臣下B　そ、それが、女王様、相憎とこのまやかしの月光の下では御わかりになりませぬかも知れませぬが——私奴は大王陛下の御身代りに過ぎないので御座います。陛下には、つひ今しがた、あれ、あの自動車の警笛こそは、城門をお出かけになる王様の御召の車に相違御座いません。どうぞ御放し下さい。恐れ多いことです！

スルタナ　ほ、ほ、ほ——もうおなぶりになるのは御休め遊ばせ。臣下のアモンを御仕込みになつて、間諜や暗殺者の多い街々を、トルコ王は決して汝等如きに恐れを持たぬぞと仰言るやうに、堂々と乘り廻はさせる御心は、このわたくしには夙と讀めまして御座いま

す。——それよりは、ここしばし人目のないこの中庭に、褐の装ひを凝らしましたわたくしと、昔の戀心に浸たりながら、睦み啼き交はす鳥どもを羨ませようでは御座りませんか！

臣下B　ああ、王様は、今頃は御城下の歌妓の集ふてゐる酒場に…………。

スルタナ　かうわたしと腕を組み合はせながら、愛の囁きを交はして御出でなのでせう！（スルタナ臣下Bを、、、）

臣下B　女王様、——飛んでもない！　私奴は、もし、この事が誰かに見つかりましたなら、それこそ大變で御座います。

スルタナ　トルコ王と女王とが仲睦まじく、花の香に重い庭の空氣を掻き別けて、樹々の下を逍遙したといふまでのことです。——ああ、これでわたくしも、久し振りで若やいだ氣持になりました。昔の樂しい乙女心が、貴方の、、、、、よつて、若草のやうに萌え出して參りました。

臣下B　女王様、貴女は、このアモンが國王様の御身代りであることを御承知の上で、このやうな御戲れを遊ばさるので御座いますか？

スルタナ　まだその御戲れを御休めにならぬので御座いますか？——よくわかつて居ります。それは、どれほどアモン奴が巧みに扮裝しましても、根があゝした下賤な者ゆゑどこかしら貴方の凛とした御姿とは比較にならぬ卑しい後姿が眼につきます。どれほど貴方様が、あのアモン奴の眞似を巧みになすつても、そこには掩ふことの出來ない氣高さが漂つて居ります。

この時、滿身黒い裝束をした暗殺者が物蔭から忍び寄つて、臣下Bの背後に肉迫する。白刃の閃めき。と、女王は、素速く臣下Bを前方へ曳き倒して、危ふく難を逭がれしむる。暗殺者、しつかと女王に片手を執られながら、

暗殺者　邪魔をするな！

スルタナ（低聲にて）狼藉者、血迷ふたか！　これは、ハミツド王ではありませぬぞ！　これは、王の身代りの役として、同じ服裝をして居る臣下アモンであるぞ。王の生命を求めるなら——それほどお前がこのオスマン帝國の前途を憂ふる志士であるなら、これ、近ふ寄れ！（スルタナ暗殺者の耳に囁く）おわかりか？——早ふ行け！

暗殺者、影のやうに飛び去る。スルタナ徐ろにアモンを抱き起こす。

スルタナ　アモンよ！　アモン！——今宵から、トルコには二人の王はゐないのだよ！　夫の亂行は眼にあまる、わたくしは固く決心しました！　いいか、今宵から、お前が代つてこのオスマン帝國の王になるのだ！

臣下B　えッ！　この私が――あの、大王樣、大王樣の……！

スルタナ　聲が高い！――お前は默つて、平常のとほりに振舞つて居ればよいのです！

臣下Bよろめきながら、身悶えする。

――幕――

第五場

宮殿の城門。重々しい圓柱、樓門、胸壁などが正面にそそり立つてゐる。鐵の大扉は左右に開かれて、内部の廣場が見える。扉の外は吊橋。橋はおろされて、誰でも通行出來るやうに自由に公開されてゐる。橋の下に青い濠。木立。

第四場から二年ほど經た後の春の午後。

賑かな人聲、馬の鈴、鄙びたアラビヤ風の音樂の音など

乞食、黑人などの群が、濠端に列んで口々に話し合つてゐる。

乞食の一　どうだい、この頃の王樣の御機嫌の良さは！

乞食の二　全くだ、愈々ハレムも今日限りですつかり開け放してしまふたそうだつてよ。

乞食の三　何十年となく女をかどわかしては押籠めて置いたんだか――さぞ別嬪がゐることだらうな？

乞食の四　よくよくのことだね。ドルコ歴代の王樣がやつて來たハレムを引拂ふなんてさ！

黑人の一　奴隷の群も解放されるさうだよ。

黑人の二　面白いことになつたぞ。

乞食の一　戰爭には敗けても、やはりオスマン帝國の王樣は偉らいところがあるといふもんだ。

黑人の三　でも、對手方の何とか云ふ將軍が愈々コンスタンチノープルへ攻めて來るといふ噂さだがほんとかね？

黑人の四　攻めて來るも來ないもない。もう其處まで來てる筈だよ。それがどうして戰爭にならないかといふに、王樣の方ではすつかりお城を開け渡して御仕舞ひになる覺悟を定められたんださうだよ。

乞食の三　そりやほんとですかい？

黑人の四　ほんとですとも。追つけその方の人達も來るでせうよ。

美しい外國婦人の夫、某外國使節といつしよに微行の姿で登場、ひそかに群集に入り混つて見てゐる。軍人の群もそれに加はる。

闖入者の一群が、左から出て來て、城門の中へ勢揃ひして行く。手に手に武器は携帶してゐるが、べつに戰鬪的な行爲は示さな

い。先頭に『我等は平和を要求す』と大書した旗が揭げられてある。

群集はてんでにわいわい云ひ囃しながら、彼等の行列を見送つてゐる。

ハレムの鍵を保管する女によつて率ゐられた、先代の王の寵妃達が、思ひ思ひのきらびやかな服裝をして、ぞろぞろと城門の內から出て來る。古風なヤシマックは撥ねられ、一人々々は晴がましい顏をして群集に微笑み掛ける。その或る者は、恥かしさうに人眼に隱れて左端へ遁げ込む。しかし大部分の者は群集に混じて、城門の方を眺めてゐる。

闖入者の代表によつて、手を縛られた、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、珠數つなぎにたつて曳かれて來て、右端へ退場する。

外國婦人の夫　もうこれきりか？（傍らの女に訊ねる）――まだ女達が來ますか？

女　さあ、もうこれでお終ひでせうよ。

某外國の使節　君、斷念し給へ。仕方がない、こんな邦へ來たんだから。――僕の考へぢや、きつとゐなくなつた當座既にどこかで殺されでもしたかと思ふがね。

外國婦人の夫　僕はこれからどうして生きて行つたらいいかわからない！

某外國の使節　國はこの通り共和國になつてしまふし、もうこの國にも我々の用はないではないか？

外國婦人の夫　ああ恨めしいのはこの城門だ！

スルタン（アモン）とスルタナ、普通市民の服裝で表はれて來る。闖入者の群の一部が護衞してゐる。

群集の間から歡呼の聲が湧き揚がる。スルタン、黑のフェルト帽を高く頭上に翳ざして群集の聲に答へる。

誰かが『市民王樣萬歲！』と叫ぶ。

一同これに和す。

スルタン群集心理に動かされて、一段高くなつた梯段の上に攀る。

スルタン　市民諸君！――なつかしいコンスタンチノプールの同胞達よ！　今、私達夫婦が、久しく棲み慣れたこの宮殿を明け渡して、田舍の僧院へ隱退するにあたつて、私は實に感慨無量な氣がいたします。――それにつけても、ここに告白しなければならぬことは、皆樣の誰もがまだ知られない、このトルコ宮殿にまつはる一つの秘密であります。（スルタナを顧みる。彼女は頤で云へといふやうな表

情をする）——私は、潔よくこの場で告白しませう。それは外でもありません——この私は、本當はオスマン帝國（現在ではトルコ共和國の）の王ではないのであります！

群集の間に驚愕の聲。人達犇めいて橋の前へ詰め寄せる。

スルタン　私こそは、嘗にトルコ王國の全國民を過去二ケ年間まんまと欺き過した、眞赤な贋物の王様であつたのであります。皆さん、静粛にして御聴き下さい。理由といふのはかういふ次第です。（スルタン顱頂の瘢痕を示す）御覧のとほり、私の頭のてつぺんには古瘢があります。この瘢は、決して先代のハミツド王にはなかつた筈です。先代の王には、賤しい馬丁として、馬の蹄に掛けられたかうした瘢痕はある筈はないのです。何故か？——ハミツド王こそは、本當のトルコ王であつたからであります。そして、トルコ王を潜稱してゐます私は、もと彼によつて使役された一馬丁であつたに過ぎないからであります。

群集の驚愕と懐疑の聲が高まる。

スルタン　不審に思はれるのは御尤です。——ハミツド王は、皆さんも御存知の通り、大變聰明な方でありました。しかし、どんなに聰明な君主でも、その陛下に佞臣や悪るい大臣が侍つて居つたのでは、折角の名君も光が鈍くなつて行くのは無理もない話でありま す。——さういふ理由で、王は、御自身では此［…］統といふものに縛られまして、日夜酒色に身を持ち崩され、酒宴に耽られ、、、、、、、、、、、、、、、機會はなかつたものであります。しかも、その傍ら、佞奸邪智なる大臣大官達は、、、、、、、、、、、、、、、て、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。搗て加へて、トルコ王朝歴代の淵藪とも云はるべきハレムの存立であります！國中の婦女子を買收して來ては、見るも忍びないやうな所業をします。さういふ荒みきつた境遇が、王の心持に影響を與へずに置きませうや？王はだんだんに偏執的な性格になられまして、終ひには一介のマニヤ——拗ね狂人となられたのであります。

群集の喧聲。

スルタン　世にも浅間しいこの狂人は、常に誰かしらず自分の身邊を附け狙つて生命を奪はふとしてゐるものと考へまして、一つの狂氣染みた發明をしたのであります。それは外でもありません。かく云ふ私と、もう一人の、今は亡くなりましたが、軍人のアリ・パシヤといふ男とを、その二人が偶然にも王の相貌骨格に酷似して居りまするところから、自分の身代り、影武者として、同じ服装をつけ、

同じ髭の刈り方をし、同じ靴下をまで穿かせまして、始終王宮内に同居させ置いたのであります。――私も、一介の馬丁から、王の分身のやうな地位に立身しましたので、これも忠義の途であると思ひまして、出來るだけハミツド王の眞似をし、その性癖やら音吐にいたるまでも王そつくりにならうと心掛けたものでありました。

　群集の間に笑聲。

スルタン　しかるに、さうしてゐる間も、王の性行は次第次第に荒淫に燒け爛れ、野獸性が募り、あらゆる婦人を見ますと、直ちにその婦人を宮中へ誘拐して參りまして野獸慾を發揮しないと納まらなくなつたのであります。そのために、一度などは、某國の一銀行家の若き妻はハレムの鐵窓に縊死を遂げたほどであります。この悲劇が國際問題とならうかと氣づかはれました際に、奸智に長けました大藏大臣が、國の利權の一分を割いても――つまり賠償として、市民諸君の共有の土地を賣つて揉み消さうとしたのであります。もとより腐敗に腐敗したトルコ王宮のことでありますから、誰一人としてそれに異議を唱へる者はなかつたのです。しかし、良く考へて下さい。その某國といふのは、實にその當時わがオスマン帝國の陸軍を擧げて敵對關係の間にありましたアメリカであつたのです。一方ドイツ、オーストリアの中央同盟に加はりながら、他方に於ては私かにその敵國と誼みを通じ、或る種の利權をまで譲り渡さうとする、その心根は甚だ面白くないものがあります。――それに憤然として起たれたのは、ここに居られまするスルタナであります。それまでは、トルコ王朝の傳統によつて押へつけられてゐました彼女も、もう我慢がしきれなくなられて、會議の席に於て先代の王へ挑戰されたのであります。――かうして、白く塗られた墳墓のやうな宮中は、二た手に別れまして、日々夜々そこに紛爭は絶えなかつたのであります。――或る月の澄んだ夜でありました。ハミツド王は從臣二三と陸軍大臣とを伴はれまして、市中に色を漁られたのでありました。その際、私は正直に告白しますが、御氣の毒な女王に同情したあまり、遂に二人は戀人となつたのでありました。私は、よし王様はハレム二千人の美女を抱へて淫蕩極まりなき生活に沈湎してお出でも、私だけは臣下の分際として、王様の正室であられる女王に戀をすることの罪咎の恐ろしさに打たれまして、非常な煩悶をつづけて居つたのであります。――が、この時、突然、私を王様であると思ひ込んだらしい刺客が飛び出して參りまして、私を刺さうとしたのであります。この私を救つて下すつたのは、實にスルタナでありました。續いて刺客は、計畫の不成功に終つたのを知つて、市中の酒場を尋ね廻はつた上、たうとう王様を大通りのカシノに於て暗

殺したのであります。

群集　ざわめく。

スルタン　王の暗殺はいろいろな事情から絶対に秘密にされました。これは、現在の世の中に於て行はれる政治や外交そのものが根本的に、、してゐるところから来る恥づべき、、、、、、、、であります。この秘密の間に、どうやら世界大戦も終局に近づきました。

私は、幸か不幸か、ハミッド王そつくりの姿をしてゐましたところから、女王陛下や諸大臣と默契の上、依然としてハミッド王が生存されて居るかの如く、そして、酒場に於て殺されたのは、實は王の影武者であるところの馬丁アモンであるといふやうな風説を立てて、自ら國の政治に携はつて居つたのであります。私が政治に關與するやうになつてからの市民諸君に與へた印象については、自らここに述べようとは致しません。──ともかく、かういふ偽善は長続きはしないことだけは私によくわかつて居りました。女王も内心そのことは繰返へし繰返へし後悔されて、何時か好機会があれば、二人して白日の下に天下の審判を仰ぎたいといふ存念であつたのであります。、、、、、、、、、、、、、、。トルコ幾百年の暴君政治を包んだ王朝は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、這入つてゐたも同然であつたのです。今、民衆はここに蹶起して、新しい共和政体をトルコの古るい土の上に建てられました。──これはトルコにとっては實に一大革命であります。しかも、その起こるやさほどの流血の惨事をも見ずに、熟した果物が大地へ墜ちるやうに、自然と将来したのでありました。今後この共和政体トルコを如何運転して行かれるかについては、偏へに市民諸君の御決心に待つ以外にはないので、多年の陰惨な宮中生活から隠退しようとする私達の申上ぐべきことではないのです。──か、一言私から、この城門を永遠に歩み出るものとして忠告を申上げるとすれば、決して決して諸君は再びオスマン帝國時代の悪夢のやうな暴君政治を諸君の頭上に戴かれざらんことです。──これが實に私達二人の今までに犯した罪であります。今この忠告をしまして、市民諸君が私達市民夫妻をこの門から外へ出て、大道を歩み行けとお許して下されば、私達は欣んで通過さして貰ひます。

群集　ブラボー！　通れ！　通れ！

スルタン　然らば、私達は笑つて、この春の日に地平線の彼方まで歩み続けます！（大きく敬禮）

歓呼の聲。

──幕──



足立先生

佐藤春夫

海はまづ凪だつた。だが、岡本夫妻は船に弱いので夕飯は八時に入港する大阪へ上陸してからにすることにした。大阪での宿は行きがけに四五日滯在したあの變性男子のゐる家に決めてゐる。そこは大して立派でもなければ又まんざらの商人宿では決してない。岡本には柄相應といふところだ。大川筋の別館は、川に面した窓が落着いてゐる。少しさびれかかつてゐて泊客がさう多くない。變性男子はさすがに女のやうによく氣がついて、その癖男だからものを頼みやすい。岡本はもし出來たら、そこで土地の雜誌のために少し書きものをしたいと考へてゐた。

宿へつくと、自動車から下りた岡本夫妻を迎へたのは、例の變性男子であつたが、一年前の客を一目で見覺えてゐた。それから生憎といい部屋のないことを、心から氣の毒がつた。通したのはすぐ玄關わきの四疊半だつた。全くこれでは少し困ると岡本は思つたが、明日になれば何とか都合がつくといふのだから、一晩ぐらゐはどうでもよかつた。空腹を訴へて飯を急がした。飯を食つてゐると、玄關でがや／＼と三四人一度にし

やべる聲がする。大阪の言葉は殊にやかましい。そのなかに一人だけ東京言葉が雜つてゐる。ひどく落着きのある音だ。岡本はふと誰かの聲に似てゐると思つた。多分、同じ東京辯だから東京の誰かに似て聞えるのだらうと思ひながら、箸をやめて注意してゐると、似てゐるだけではない確かに誰かの聲に相違なかつた。それがよく知つてゐる人でありながら誰のだか思ひ出せない。岡本はぢれつたくなつて、細君が不思議がつてゐるのにも答へず、飯を途中でやめて部屋の入口へ立つた。三尺だけ開く襖をちよつと隙けてのぞいて見た。一かたまりの人間が玄關に立つてゐて、そのうちのひとりが歸る客を送り出したらしく、その送つてゐる人の言葉が岡本の氣にしてゐる聲だつた。客たちは歸つてしまつて問題の聲の主は、岡本の隙見してゐる前をすつと通つた。電燈の關係でただ黑いものとして見えただけだつた。その聲がまた廊下の外で變性男子と何か話してゐる。その時、岡本はふつと思ひ出した。襖を勢よくあけると、

「足立先生。――足立先生ぢやありませんか」

足立先生はけげんさうに視線を向けたが、

「や、岡本君」

「あんまりお聲がよく似てゐるので、さつきからここで隙見をしてゐたが判らなかつたのです」

「君はいつここへ來たの」

「今のさつきです、ほんの今」

「さう。これは奇遇だ。おひとり？」

「いや、家内も一緒です」

「はあ、お國からの歸り？」

「え」

「ともかくも、まあ、僕の部屋へいらつしやい」

「後ほど伺ひます。實は今、膳をこしらへてゐるところなのです」

岡本が部屋へ這入ると、變性男子もお茶を持つてついて來た、足立先生と岡本との慣れ慣れしい對話を不思議がつた。

「あれは君、僕の學校時代以來の先生だよ。もう十五年もお世話になつてゐる」

「へえ、それがひよこりお會ひなされましたのかいな。へえ」

「どなた？」

「足立先生といふ方だよ。お前はまだお目にかからん。あとから一緒にお部屋へ行つて見よう」

聞けば、足立先生はもう三ヶ月近くもこの宿に滯在してゐて、近いうちには歸らうと思つてゐられる樣子だが、まだ今日明日ではあるまいといふ、變性男子の話であつた。岡本は自分の滯在の間、思ひがけ

ないいい話相手があるのを仕合せに思つた。

先生は有名な話好きで、それに第一、岡本の自惚れでは先生は岡本を弟子として愛して下さると信じてゐる。岡本の方では、づぼらな男だから、ろくに氣候のお見舞もしないけれどもそれでも年に二三回ぐらゐは、近年でも會ふ機會があつて、先生を敬慕してゐた。就中、得がたいのは先生の人柄だと常に思つてゐる。正直で、まつとうで、ちいよくで、またその年齡の人としては何ものにも最も囚はれない正義を愛する自由思想家であつた。進歩主義者であつた。温健な大常識に自づと則つたイギリス風の老紳士であつた。それでゐて青年たちの馬鹿な話を馬鹿にせずによく聞き、又どんな矯激な議論と雖、そのなかに多少でも眞理がある以上は耳を傾け、それを理解した。青年たちには寛大な代りに世俗の偶像は認めない。さうしていつでも機會さへあれば民衆を啓蒙することを心掛けてゐられる。かういふ心掛けのあるところへ、話すことは好きだし、勿體ぶらないし、先生はよくくだらない講演會などでも頼まれゝば演説をする。弟子たちのなかには先生がも少し貫目をつける工夫さへすれば、もつとえらくなれるのだがと考へてゐる人間もあつた。しかし、先生は或る私立大學の大して重要でもない講座を受持つて、殆ど名ばかりの教授をつとめ、清貧に甘んじながら、あんまり報ひられない飜譯をしたり、時にはやはりあんまり花々しくない原著なども書く。さうして翻譯者などといふことはもう超越してゐられる。もう十年も以前、岡本がとても世に出られさうにもなくて郷里に沈もれてゐたころであるが、先生は或る小雜誌の質問に答へて、數の多いその知り合ひの青年たちのなかから前途有望な者として、岡本の名を擧げたことがあつた。岡本は郷里で人から教へられてその雜誌を手にして感激した。しかし、自ら省みてとても先生の期待にそむかないやうな仕事などは出來さうも無いと思つた。感謝と同時にその感慨を先生のところへ洩した。先生からはわざわざ返事があつて、——僕が君を有望な青年といふのは、君がこの後世間から認められるやうな仕事をするだらうといふ意味ではない。寧ろ君を一とほりに出來上る人物だと僕が信じてゐる事を言つたまでで、君の人物が君が仕事をして世間に認められると否とによつて左右さるべきものではなく、その世間的な仕事の如何に係はらず自分は君の前途を信頼するのだから、この點君は、僕の期待に副ふやうな仕事が出來ないと言つて氣を揉むにはあたらない云々と書かれてあつた。岡本は先生からこれほど信頼をうける自分を自愛しなければならないといふ念に打たれると同時に、その文句のなかに先生自身がはつきりと表現せられてゐることに氣づいて、今更に先生に敬服した。かういふ岡本にとつては、たとひ人々の言ふがごとく先生の新思想には自由

民衆主義時代の匂ひがあり、先生の藝術論は依然として初期自然主義的であり、また先生が長い間文筆の生活をしながら所謂大家らしい風格が缺けてゐるにしても、そんな事などは先生を觀察するのに何の差支へにもならないのである……

岡本は自分の妻に足立先生の人柄や、先生と自分との間柄などを手短かに説明して、食事がすむと先生の部屋へ行つて見た。二階の一等奥まつた八疊と六疊とのつゞいた部屋だ。この前岡本たちが滯在した部屋のちようど眞上になる。ここではこの部屋と岡本のこの前居たところとが先づ一番よい部屋らしい。そこに、今かへつたばかりの客の坐布團などを取り散らしたまま、煙草の灰のなかに先生は居られた。岡本が妻を紹介し、一とほりの挨拶がすむと、先生は岡本の部屋のことを心配し、玄關わきのあの四疊半では書き物などはとてもむづかしいから、もし明日になつてもほかに部屋の都合がつかないようならば、先生の二室のうちの一間を襖つづきでも我慢して使ふがよからうと言つて下さつた。先生自身はほんの十日か二十日ほどのつもりで來たのだが、夏中この水には面してゐるが西日の差す部屋で暮してしまつて、着物なども秋のものをほんの二三枚だけ送らせたが、それさへも今はもう寒くなつて來たし、いつまでもここにはゐられまいと言はれた。何か先生にとつてこの土地で、特別に醱酵させうた事でも出來たやうな氣もしたが、さうしてふたりきりなら隨分何でも話し合ふ[illegible]と先生とではあつたが、妻が雜つてゐるのでちよつと遠慮をして岡本はそんな事は何も言はなかつた。

岡本の部屋はうまく都合が出來て、先生のゐられる二階のすぐ下の、この前ゐたその部屋であつた。そこでならば岡本も仕事が出來さうだつた。部屋がきまつて、十日ばかり滯在することに決まると、妻は岡本に買ひ物のことを言ひ出した。それは田舍女學校にゐる姪に頼まれて、懷中時計を買はなければならなかつた。買ふのはどこの店でもいいのだけれども、相手は子供だから一日も早く、買ひ物を待ちこがれてゐるに相違ない。ここで買はないとすると、東京で買ふ事になるのだが、それでは待ち兼ねるだらうといふことである。田舍に一年もゐた妻はそんな事を言つて久しぶりで都會の店でものを買つてみたいのであらうが、その心持も尤もなれば、買ひ物が急ぐといふのも妻の説のとほりであつた。それならば一日も早い方がよい、今日おひるからでも行つてみようといふ段になつて、この土地をよく知らない岡本は、買ふ店に困つた。二十圓金をあづかつてゐるだけだから、いづれは大した買ひ物ではないが、同じことなら信用の置けるところで買つてやりたかつた。岡本は以前、この土地のある店で買つた一足の靴を忘れないでゐた。それは避暑へ旅行する途中ここで急いで買つたもの

だが、値段はさう安くなかつたくせに一ケ月ほど穿いてゐるうちにすつかり大きな口が開いてしまつた。可なり波茶苦茶には穿いたけれども、しかし、以前から穿いてゐてとてももう永持ちはあるまいと覚悟した古靴の方は、新らしい靴が駄目になつてから後の間まだ二ケ月間の旅行に充分間にあつた。大阪商人のこのとほり信用し難いことを妻に話して、岡本はこの知らない土地の時計屋に迷うた。妻は足立先生に尋ねて見ようと提案した。三月もゐられるならば自然に大きな時計屋ぐらゐは覚えられたらうといふのである。妻の意見に従つて、岡本は、部屋が決つたことの報告を兼ねて安時計を買ふ店の相談を持つて、二階の先生の部屋へ出かけて行つた。先生は直ぐに有名な時計店の名を教へてくれた上に、そこは心斎橋筋で近いから案内をしてやらうと言つて下さつた。岡本も心斎橋筋ぐらゐはひとりでも出られたが、ひる飯の後の散歩だと先生が言はれるので、妻をも誘うて三人で出かけた。

志した店は折悪く休日であつた。案内役たる先生は当惑された。岡本は今日に限つた事はないと思つたが、それでは先生が気が済まないらしかつた。休日の札がかかつてウヰンドウには横たるみの織のある白い幕を一面におろした店の前に、通行の群集のなかに立つて先生はしばらく考へてゐられたが、岡本に言つた

「で、一たい、どんな買ひ物をするつもりです」

岡本は先生にはまだその買ひ物の内容を話してなかつたことに気がついて、説明をすると、先生は言はれた。

「それぢや、それぐらゐの買ひ物なら——と言つては失礼だが、ともかくもさう面倒なものではなささうなのだから、一つデパアトメントストアへ行つて見てはどうです」

「あ、さうでしたわ。どうせ外につまらないもので欲しいものがいくらか御座いましたのですよ」

「それでは、奥さん。角やへ行つて見ませんか。あそこを御覧なさい。近ごろ新築をしたばかりださうで、みんな評判をしてゐるやうだが、僕もまだ行つたことはない。ね、岡本君。さうしよう。それだと僕もちよつと買ひ物をしてもいいものがあるのだから。つひこの近くではあるし」

先生は歩きながら、先生の買ひ物といふのを説明された。それは眼鏡だつたが、以前から用ひてゐられる近眼鏡ではなく、もう一つ遠視の眼鏡が必要になつたといふのである。年をとると近視眼のものでも、近視眼なりにそれとは別にまた、遠視眼にもなるらしく、見るものの距離によつて、遠視の眼鏡がないとどうも不自由でいけない。

「君も、近眼だから、いづれそのうち御老体になつたら経験をするだ

はコルクなどをつけてあるのもありますし、さうでないのはここの上の方のばねが柔かに出來てゐるとか、兎も角も兩方から肉をはさむわけなのだから、普通の眼鏡のやうに骨の上へ金屬の台がぶつつかつてそれが全體の重みを支へてゐるのとは自然わけが違ふので。殊に、あなたはお見受けすれば、今はまだ何もかけてはゐらつしやらないが、さういふ程度に輕く目の惡い方――つまり眼鏡を用ゐてもよし用ゐなくてもよしといふやうな方には、鼻にかけるのは外したり掛けたりするのがまことに自由で、便利で……」

先生は、岡本にとつても多少不思議に思へるほどの熱心をもつて鼻眼鏡の長所ともいふべきものを數へ立てた。努めて數へ上げた。事實、岡本は最初にふと思ひ出した事がなかつたらこの時の態度は、いかに親切な先生とはいへやや不思議なものに感ぜられたに相違ない。けれども、岡本は鼻眼鏡をかけた足立先生の寫眞と一緒に「ハイカラ醫師」といふ一文が先生にあつたのを思ひ出した。それはもう二十年も前、岡本がまだ中學生であつたころの事だが、足立先生はその輕い隨筆のなかで、世人が新奇な趣味に對して投げつける意味のない嘲笑に抗議してゐた。さうしてそのなかには鼻眼鏡に關する一節があり、鼻眼鏡をかけてゐる先生の寫眞はその雜誌のその文章と同じ頁に掲げられてゐたものだつた。若く新々しいそのころの先生の面影を、岡本はちらと念頭に空想するとともに、先生は今まさしく二十年前の昔での考へを街頭で說敎しようとしてゐられるのだと思つた。先生は先生の所謂ハイカラ趣味の一黨員である弟子の代りに、先生は自ら趣味の精神を宣傳してゐるとも言へる。恐らく先生は單に鼻眼鏡に就てから熱情をもつて說いてゐるのではなからう。鼻眼鏡の事だけならば、それはただ趣味の問題だけで、それを用ゐてゐる人間自身も、別に足立先生の說かれるが如く、普通の蔓のあるものよりもこの方が工合がいいとも便利だとも實用的に考へてゐるわけではあるまい。尠なくとも岡本はさうだ。又、足立先生自身もさうだらう。それは實用的の便利不便利ではなく、どこまでも趣味なのだ。もしさうでないとすれば、足立先生はそれほど工合のいいものを捨てゝ、工合のよくない普通のものなどうしてその後に使用する事になつたらう。また岡本自身にしてもそのとほりだ。實は岡本はもう鼻眼鏡は邪魔になつてしまつてゐた。さうして用否ではずつと蔓のある鼈甲のものをかけてゐた。その方が便利でもあり似合ふやうな氣がしてゐた。それが昨日、船のなかでケビンの縁になつた欄のなかへそれを外して置いて、再びそれを取り上げようとする時に、蔓を網のなかへひつかけてその片方を折つてしまつたのであつた。それで以前用ゐてゐた鼻眼鏡を、豫備として持つてゐたのを今かけてゐるわけなのであつた。この二種の眼鏡を[illegible]して

又實用としてどちらがいいか惡いかは恐らく、足立先生の説かうとする本心ではあるまい。ただつまらない人前の氣兼ねなどをして自分のやつて見たい事もやれないといふろくでもない氣持を打破して、自分の好むがまゝのものを自分で厭やになるまで成し遂げさせて見ようーー個性を因襲のなかから解放してやらう。かういふのがわが足立先生の精神であり、使命であり、さうしてさればこそ先生はかうも熱心にこの男に鼻眼鏡を勸誘してゐるものと思はれるのであつた。さうして先生の鼻眼鏡そのものに對する讃美は或る程度までは嘘ではないにしても、より以上に誇張された方便なのであらう。先生のこの微に入り細を極めた縷々たる説明に、相手の男は多少氣を呑まれた形で、時々「はあ」とか「へえ」とか感歎に似たやうな聲を發するばかり、それかと言つて、先生の意見に別段動かされたといふわけでもないらしく、先生の説明と意見とが一段落ついてしまつても、それでは一つ鼻眼鏡を試みませうとは言ひ出さなかつた。先生は、そこで更に別の方面から説きつづけた。

「一たいがです。眼鏡といふものは、この、鼻にかけるのの方が本當なので、西洋ではこの方が普通なのですよ。日本で普通のものとして使つてゐるものの方こそ、あれは少し變つた人とか學者とか、或はまた山登りでもする特別の場合とかに限られた特別のものであつたのを、それが日本へ輸入される時に日本人は一たいに鼻が低いものだから、仕方がなしに變則のやつの方をみんなが用ゐるやうになつて、本當のやつを却つてへんなもののやうに思つてゐるのですよーー井戸のなかの蛙ですさ。だからどうしてもかからないやうななさけない鼻の人には致し方がないとしても、かかる人は鼻眼鏡をどんどん使つたつて一向をかしくはないわけで、それを何とか思ふのは、思ふ人の方がわからないわけですからね。なに、あなた、思ひ切つて一つかけてごらんなさい。それや、なかなかいいものなのだから」

「へえ。でも、私にはかかりませうかな。どうも私のは、あの方やあなたののやうに高く出來てはゐさうもありませんけれど。へへへへ」

その男はへんな笑ひ聲を出して、ちらと岡本の横顔をうかがひ、それから彼の鼻を撫でてみてゐた。いかにも、あまり高いとも恰好がいいともいいにくい形である。先生はその鼻をまともに見つめながら、

「なにかかりませうよ。初めは二三度ぐらゐ落ことすにしても、すぐ慣れてしまひますよ。慣れればうまく落ちつくものです。それに時々落ちるおそれがあると思へば、耳のところへちよとかけて置くひもがありますからね。つひでにそいつをつけて置けばよござんすよ」

「へえ、さうですかね。大丈夫でせうかな、私でも」

その男はさう言ひながら、先生の方からむきなほると、ちつとガラ

戸のなかを覗き入つた。先生はも一歩その男に近づくと、その男の肩越しにその男の注視してゐるものを見つけた。

「なるほど、あれですか。あれはなかなかしやれてゐますな」

言はれた男はちよつと先生の方を見かへり、それから直ぐ店員のひかへてゐる台の方へ向くと、手を上げてそこにゐる一人を招いた。それに應じて出て來たのは學校を出たばかりかとも思へる紺の背廣を着た若い店員だつた。例の男は、この店員に言つた。

「あれを、一つ見せて下さい」

店員はかう命じた客の顏を眺めてゐたが、念を押した。

「あの鼻眼鏡をですか」

「さうです」

店員は戸棚のうしろへまはつて、鍵をあけると、その鼻眼鏡を持つたままで、台の方へ歩いて行つた。客はそれに從いて行つたが、茶の天鵞絨を張つた細い台の上に載せられた問題の鼻眼鏡をへだてて、店員と客とは向ひあつた。客が言ふのである。

「どうでせう。これ、わたしに似合ひませうかな」

「さ。あなたにですか。さ。あんまりお似合にはなりますまいよ。まあ、おやめになつた方がいいでせう。——普通のになすつてはいかがですかね。」

言ひながら店員は、台の下にあつたらしい一つの扁平な箱をとり出すと客の目の前へ置いた。そのなかには普通の金の眼鏡が一杯ならべられてゐた。

「さうかな。やつぱりこの方がええですかな」

「それや、この方がいいでせうね」

客はそのなかの一つをつまみ出すと、ケースから出した鼻眼鏡と並べて見較べた。それから二つをかはるがはる手にとつて見てゐた。しばらく默つてそんな事をしてゐたが、そのうちに腰かけから立つて再び戸棚のあたりをのぞきまはり始めた。

先生の老眼鏡はやつと出來上つた。岡本の妻はもう一階おりて三階で買ひ物をした。それは田舍で世話になつた人々に贈るつまらないものと、外には宿屋にゐる間に退屈しのぎとして自分で仕立ようといふ銘仙が一反とだつた。

店を出て足立先生はひどく草臥れたらしかつた。人ごみのなかで暫くゐた爲めであらう。先生はいつになく殆んど口を利かうともされない。默々と歩いてゐられたが、不意に

「岡本君」

と低い聲で言つた。岡本が返事をする間もなく先生は言ひつづけた。

「あれはね、君、さつき鼻目鏡のことを我々に聞いた奴さ、あれはス

パイなのだね。あそこは貴金屬や寶石などのあるところだから、客の見張りをするために店に備つてゐる探偵見たやうな奴だよ。それがちよつと我々をからかつて見たのだね。」

「なるほど。さうでせうかな。さう仰言られると氣がつきましたな」

「ね、あの男は我々があそこへ行つた時からあの邊に立つてゐたでせう」

「え」

「それが、我々の歸る時になつてもまだうろうろしてゐたでせう。買ひ物をするでもなくしないでもなしにね。我々は必要があつてあそこに大分長くゐたのだが、あの男は何の必要もなささうだのに、ずゐ分長くうろついてゐる。それに第一、店の奴が客に向つて、そんなものは似合はないだの、まあおやめになつたがいいだらうの、とそんな失禮なことを言ふべき筈はないぢやないか。ね」

「え、僕もあの時はへんに思ひましたよ」

「あいつらは、なれ合ひで我々をあんな工合に………」

先生は低い聲でゆつくり言ひつつ、自分の足もとへ目をやりながら煙草を吹かして歩いてゐられた。

「すつかり田舎者にされてしまひましたね。おかげで」

「うむ」

先生はやつぱり下を向いて歩いてゐられる。

「怪しからん奴らですね」

「うむ」

先生は言葉も態度も同じ調子である。岡本は確かに先生の觀察されたとほりに相違ないと思つた。それと同時に洒脫ではあるが一面に青年のやうに純眞な性格のある先生が、この見さかひのない惡戯を腹立しく思つてゐられさうな氣がした。岡本は思ひ出して別の話を先生にしかけた。

「先生、あの宿の番頭ですね。あれは實にへんですね。半日ぐらゐの動作を見てゐたのぢや男だか女だか見當がつきませんね」

「うむ。まるで散切にした男が兵兒帶をしめてゐる形だね。それにその骨柄だの何だのまるで女だよ」

「それに變態なんだよ」

「どういふ風に？」

「お風呂へお召しになる時にあれが流しに來ませんか」

「來るがね――それがどうしたのだ」

「いや、別にどうてこともありませんけれど。ひどく丹念に流してくれるのです。僕は流しといふものは擽くてあまり好かないのですから一層さう思ひますかね、それにあの男――ですか女ですか、あれはま

るで女が男の肌へさはるやうに恐る〳〵手をかけるので、少し氣味が惡いやうです。これだけなら、ただ私の氣持だけですけれど、いつかこんな話をしましたよ。——若い時分に、金澤さ中佐はんに口說かれたことがある。こんなことをいふとをかしい思ふかも知れんけれども、十六七の時はええ器量で——何でも旅役者の女型だつたさうですよ。それから男が男を口說くなんて、へんな事やと思うてですやらうけれど、そこにはちよつと、、、、、、、がまた おますのや。——なんて、いろんなへんな事を話し出しましたよ。さうして僕が女房と一緒にお湯へ這入るときげんが惡いのです」

「へえ。僕の流しにも來るが、そんな話はしないよ。——君はつまりあの男にくどかれたわけかな。」

「ハ、ハ、ハ」

先生も少し笑つた。

岡本は氣がついて後から步いて來る妻に注意をした。妻はもう半丁ほどおくれて、人ごみのなかを見え隱れに、さつきの白い買物の紙包を抱いたまま、田舍ものらしくあたりの店をきよろ〳〵としながらやつて來る。暮れやすいとは言へ、田舍ならまだ夕方の光をたよりに仕事が出來る時だのに、この都會ではもう兩側の店には瓦斯燈をすぐ點へて賑しいほどともし立てた飾り窓を、妻は珍らしげにきよろ〳〵してゐた。その妻の姿をふと見た時に、いかにも田舍者らしいと思つた。同時に又、洋服を出すのが面倒さに田舍で着なれた着物のままで步いてゐる自分も、きつと妻以上に田舍者らしいだらうと氣づいた。岡本はのろく步いてゐる妻を待つてゐたが、ぢれつたくなつて二三間步きかへした。妻は近づいて來ながら寒いと言つた。岡本は四五間前を、自分たちを待つためにのろく步いてゐる先生の後姿を見ると、これも少しうすら寒さうな貧弱な姿で、この三人づれでは、あんなことを言つてからかはれても仕方がないやうな氣がした。それまでは、大阪といふ町が田舍で鼻眼鏡が珍らしいからだらうとばかり思つてゐたのだつたが、岡本はふと何だかがをかしいやうな氣持がしてひとりで笑へて來た。足立先生のところへ近づいて行くと、先生は步き出したから言つた。

「あいつらは、退屈なものだから、あんな事をして生活の單調を破つて樂しんでゐるんだね。——それにしても、鼻眼鏡一つでも、個性を發揮するために多少の犧牲を拂はなけやならないからね。大竹が殺されるのも無理はないよ」

大竹といふものは、、、、この最中に市民を保護すべき、、、、、、、實行的思想家で、先生とは親しい間柄であつた。岡本はさつきの出來事が今だに、先生の頭のなかで動いてゐるのを知つた。步きなが

ら、彼自身も少しいまいましいやうな氣がして來た。

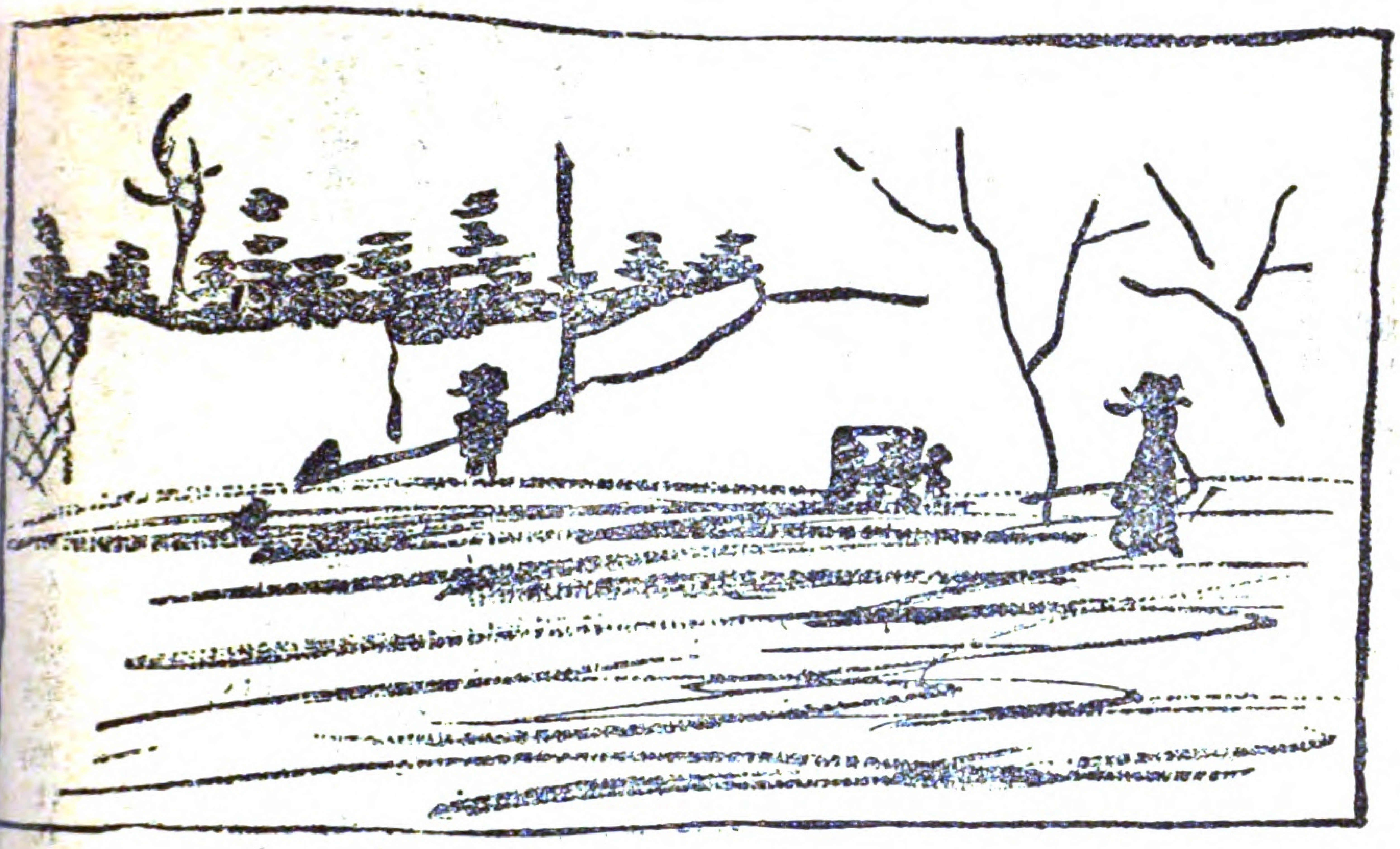
「先生、あしたも一度、あそこへ出かけませうか」

「…………？」

「さうして、あの男がゐたら言つてやりたいものですね。君は昨日から、まだ普通の眼鏡と鼻眼鏡との決定に迷うてゐるのかいつて」

「ハヽヽ、ハ、ハ、ハ」

先生の笑聲はいつものやうに快活なものになつて響くやうな氣がした。



無想庵物語

序

武林無想庵

一

漱石先生の言に、一年洋行すれば一年がた馬鹿になるとあつたが、さうしたニュアンスの多い言葉の意味が、どうやらなるほど、頷かれるやうになつた。考へて見ると、わたしの馬鹿も五年がたになる。いや、はじめての洋行からかぞへると、ことしでもう九年目だ。

二

今更月日のたつのが疾いことを驚いたつてはじまらないが、さうかと云つて、そんなことは驚くにたらないといふのはウソだ。人間は年とるに従つて、だん〳〵あたりまへのことが不思議になる。世の中のことはすべてあたりまへだけれど、さうしてあたりまへでないことなんぞ世の中にある筈もないけれど、年々歳々にそのあたりまへのことが一々不思議でたまらなくなる。

三

たとへば夜が朝になる。窓が白む。目がさめる。例によつて朝が来たなと思ふ。が、なぜ例によつて朝が来るのだと考へると、さア、不思議になる。さうしてそれは太陽に對する地球の自轉公轉によつてさうなのだとわかつてゐても、その不思議さには

してかはりがない。のみならず、そんな知識が加はれば加はるほど、不思議はいよいよ不思議になる。

四

又たとへば、起きてたま／＼デカルトを開く。なるほどデカルトが一切森羅萬象を疑ひ去つたのち、「われ思ふゆゑにわれ在り」と云つたことはわかるけれど、さて、さう云はれて見たところで、その「在り」といふ「われ」の生體が、デカルトのわかつたやうには、わたしにはまだどうもハッキリとはのみこめない。さうしてデカルトにはそれほど明々白々なことが、なぜわたしにはこんなにわからぬのかと、それがはなはだ不思議になる。

五

又たとへば、紙をのべて筆をとる。わたしはなにもこんなことを書くつもりでこの文章をはじめたわけではなかつたのだが、書きだすそばから、筆がわたしの書きたいと思ふことにはかまはず、こんな風に勝手にズン／＼走つてゆくことは實際不思議でたまらない。

六

二三日前にもこんなことがあつた。

わたしはかう書きはじめた。

わたしも人並に動いて來た。どうしても動きたくてたまらなかつたわけではなかつたのだが、結局動かざるを得なくて動いて來たのだ。が、動くといふことは、いつも動かないといふことに對して動くのだ。そこに動かないといふことがあつて、はじめて動くのだ。然らば、その動かないといふことは、果してどういふ状態か？　かうしてゐる間にも、つねに動いてやまないところの、わたしのからだを通じ、わたしのこゝろを通して、かくものを云ひ、かく筆を動かしてゐるかぎり、わたしにはその動かないといふ状態はつかまへることができない。

七

すべての動に對して、靜はかならず無くてはならぬものだけれど、人間の意識へは到底のぼつては來ない。なるほど、時空をわかつ理智の上だけでなら、それはある。時は動を意味し、空は靜を意味してゐるからだ。しかし人間の實際生活にあつては、時空は理智のわかつやうにはわかたれてゐない。又理智そのものも、それが意識へのぼるが最後、つねに動いて／＼やまない。

八

そこで、わたしも人並に動いて來たわけだ。さうしていつも動かない、いつも依然として摩訶不思議な感じのする何物かに對して動いて來たわけだ。

九

摩訶不思議な何物かは、わたしのからだの、その時々の生理的變化に伴つて、いろ〱さま〲な幻影となつて、まざ〱とわたしの目のまへにあらはれた。さうしてそれがその時々のわたしのこゝろをそそのかしては、わたしのからだをばかく世の中のいろんな方向へフラ〱とひツぱりまはして來たものだ。

一〇

實際、わたしは自分自身の自由意志で動いて來たやうには考へられない。自分以外の或力で、不可抗的にグイ〱とたゞこづきまはされて來たゞけのものゝやうに思ふ。

一一

なるほど、わたしは十年前に、一切の家財をたゝき賣り、カバン一つの身がるさとなり、一個氣まぐれの放浪者として、心のむくまゝ足のむくまゝにさまよひ歩き、さうして世界のどこかの一隅で、そこで命數のつきたところで、晏然としてのたれ死にしようと決心したにはちがひない。しかしその決心はわたしの意志の結果ではなくて、むしろ反對に、生活に對するわたしの無意志の結果だつたと云へる。

一二

が、食慾とか性慾とか叉智識慾とか、さういつた人間の五慾煩惱が、とりもなほさずそのまゝに生活意志だといふ場合には、もちろんわたしは無意志ではなかつたけれど、又放浪を志したのは、或意味で知識欲の一變態だとも云へるけれど、當時そのまゝの生活狀態をつゞけることが、しみ〲いやになつて了つてゐた事實から考へると、全然無意志ではなかつたにしても、その時のわたしの生活意志は、少くとも積極的には働いてゐなかつたに相違ない……

一三

こゝまで書くと、わたしの筆はパツタリとまつて了つた。書きたいと思つたことから、いつの間にか遠ざかりつゝあることに、ふと氣がついたからなのだ。

一四

きのふもこんなことを書いた。

大風と地震とが、まだあり〱とわたしの目のまへにある。大風はわたしに親ゆづりの家をたゝき賣らした。さうして地震はわたしをして何の未練もなく日本から立去らした。

一五

いや、さうではない。親ゆづりの家をたゝき賣る動機も、日本を立去る動機も、決して大風と地震とにあつたわけではない。天變地異と[illegible]

が、互に交錯しあつた結果、さうした動機を生じたにすぎない。さうしてその時期が偶然大風と地震とに一致したにすぎない。

一六

が、日本を立去つたことを思ふと、すぐ地震が浮かぶ。親ゆづりの家をたゝき賣つたことを考へると、すぐ大風を思ひ出す……

一七

が、わたしの書きたいのはこんなことでもない。

一八

わたしは何が書きたいのであらう？

一九

一切が書きたいのだ。一伍一什が書きたいのだ。

二〇

が、一切を書くといふことは、なにも書かぬといふことに等しい。わたしの綜合は虚無に等しいからだ。又一伍一什を書くといふことは、いくら書いても書きゝれないといふことに等しい。わたしの分析は無限に等しいからだ。

二一

それにも拘らず、わたしは書きたいのだ。書かずにはゐられないのだ。

二二

なぜ書きたいのか？　なぜ書かずにはゐられないのか？

二三

書くといふことが、現在のわたしにとつては、生きるといふことと、全く同意義になつて了つてゐるからだ。さうしてわたしは生きたいからだ。生きずにはゐられないからだ。

二四

書くことゝ、生きることゝ、全く同意義でない時代は、わたしにもあつた。その時代には、書くことは、わたしの生活中の單なる一行爲にすぎなかつたものだ。が、さういふ時代はすぎた。さうしてわたしの一切の生活が、ことごとくたゞ書くといふ一行爲だけに集中されて了つてゐるのが現在だ。飲食、起臥、行屎、送尿、讀書、思索、すべてたゞ書くためだ。さうして書くといふことは、そのわたしにとつては、なにも書かぬといふことに等しく、いくら書いても書きゝれないといふことに等しい。

二五

矛盾してゐるのでは決してない。わたしはたゞ不可能事に沒頭してゐるだけなのだ。

二六

なぜわたしは洋行したか？ ——それを考へることは、なぜ林檎が地上へ落ちるか？ と考へるのと同じでない。さうしてそれはわたしが林檎でもニウトンでもないといふことばかりではないのだ。

二七

なぜわたしは洋行したか？ といふ問題は、わたしにとつては、なぜわたしは生まれたか？ といふ問題に歸着する。さうしてそれはエデイポス以來解決不可能の難問題だ。

二八

しかるに、わたしはその難問題を考へようとしてゐるばかりでなく、あまつさへその難問題の一切と一伍一什とをば、併せ明かうとまであへてしてゐるのだ。

二九

なぜわたしは洋行したか？ また洋行するについて、なぜアメリカへは行かなかつたか？ なぜフランスを擇んだか？ それはわたしがアングロサクソンの文學よりはフランス文學の方へ牽きつけられてゐたからといふよりは、むしろわたしのうちにある男性が、わたし以外にある女性に對する、その牽きつけられかたの微妙さによつて、その方向が決定されたと云つた方がちかい。

三〇

この世に於けるわたしの一切行動は、すべてわたしのからだが男性として生まれたことに起因する。

三一

なぜわたしは生まれたか？ また生まれるについて、なぜわたしのからだが男性であつたのか？ それがそも／＼の問題だ。わたしがもし女性に生まれてゐたとしたら、わたしの經過すべく餘儀なくされた一生涯の行程は、決してかうした方向はとらなかつたであらう。

三二

わたしの父の精系の一トすぢが、わたしの母の卵子の一つにすがりついた瞬間に、なぜわたしの第一細胞が男性として分裂すべく因緣づけられたか？ わたしの懷疑は一切のフアタリテを認めない。しかもわたしの理性は一番はじめの驚異としてそれを留保することに吝でない。

三三

一ケ月まへにはこんなことを書いてゐた。

安政二年の大地震で、妻を失つた長之助は、三つになる女の子を里方へあづけると、下廚の一人として旅役者のむれへ加はり、そのまゝ江戸を立去つて了つた。地震までに家產を蕩盡した長之助は、いかなる職業にも適してゐなかつたが、[illegible]

流れ〳〵て出羽の酒田まで辿りついた時、さうしてそこで甚だしいトヤをくつた時、かれは蝦夷地の繁昌をきいた。殊に箱館は將軍家の直轄だつたので、流離にたへぬうら若い江戸つ子の心が、忽ちそこへ牽きつけられるには何の苦もなかつた。

水際だつてセンチメンタルな音色を出す横笛が、この垢ぬけた江戸つ子の朱唇に觸れる時、およそ廓看板の下をばいそ〳〵と潜つたほどのものが、藝者と云はず、娘と云はず、誰か胸の高鳴りをおぼえずにその耳が澄まされたであらう？　箱館は血の氣の多い港町である。追分節で名高い辨天町のお茶羅がいちはやくも嬉しい仲となつた。高田屋を忍ばせる廻船問屋の一人娘が、その豐麗な肉線とその奔放な情熱とを傾けて、つゞいてその戀を爭つた。汐首崎の巖頭からお茶羅はやがて身を投げて死んだ。歌麿もどきの濃艶な目元にはさすがの長之助も敵しかねた結果であつた。

放浪はそこでをはりを告げた。かれは堅氣になつた。さうして天神町でさゝやかな袋物屋を營みはじめた。袋物はかれの親ゆづりの家業である。もちろん廻船問屋の一人娘が願ひかなつてかれの箕箒を執ち得たことに、あづかつて力のあつたのは云ふまでもない。

三四

これがわたしの養母の實父に關する傳説だ。さうして三歳で江戸へ置去りにされた女の子といふのが、即ちわたしの養母であつた。

三五

また元祿のころ、若狹の國の淵といふ一寒村から、六十六部が、一人さすらひいでた。何物に感じての發心か、何人をたづねての廻國か、それは知るよしもないけれど、とにかく諸國巡禮の末に、遠く奥の鰺ケ澤へ落ちついたといふことだけが傳へられてゐる。さうしてこの一人の放浪者の末裔が、それから百五十年もたつた後には、瀧淵といへば、その漁村でたれ知らぬものもない四軒の豪家となつて殘つた。

天保十三年正月二日、そのうちの一軒、舟乘り萬兵衞の家で、男の子が一人生まれた。さうしてそれは萬兵衞の子ではなかつた。

傳説によると、鰺ケ澤萬兵衞家元から、弘前なる黒石家の家老職大道寺なにがしの奥向きへ、かつてお數寄屋を承はる女中が一人奉公にあがつたことがあるといふ。さうしてそれへいつとなく家老職の手がついて、やがて身重になつたゝめに、少なからざる黄金と、立派な墨附とを與へられて、そのまゝ家元へさげられた事實があるといふ。然るに、萬兵衞は出産と共にその女が死んだのを幸に、墨附は燒き、黄金は着服し、さうしてその子を亀藏と名づけて、人知れずわが子にして了つたものだといふ。

三六

鶴藏はわたしの養父の幼名であつた。で、さうした事柄については、養父はわたしには勿論、又わたしの養母にさへ、生涯何事も洩らしてはくれなかつた。併しながらその充分に氣品を具へた容貌と云ひ、その堂々たる風采と云ひ、決して單なる舟乘りの子でないことは、一見して爭はれなかつた。

三七

傳説はその上に附加へて云ふ。黒石家の吉例として、毎年追儺の年男には、領内の少年達を弘前へ召しよせて、かれ等にその役を仰せつける習慣があつたが、或年鶴藏もその少年達の中へ立ちまじり、おそる〳〵殿中へ伺候したことがあるといふ。さうして小升片手に鬼やらひの豆をまきながら、どの人が果して自分の實の父親であらうと、默然と殿主の左右へ居流れた侍達をば、涙ながらに物色したものだといふ。

三八

津輕なまりの重苦しい養父の口から、わづかに洩れた言葉のはしによると、養父はなんでもその十四の年とかに、ならひおぼえた凧繪をかいて、一枚につき四文の錢をもうけ、それでかつ〳〵親を養つたものだといふ。

三九

おそらくさうした十四の年以後であつたらう。鶴藏は萬兵衛もろとも鯵ケ澤を去つて箱館へ渡つた。さうして江戸から來た或旗本の屋敷へ仲間として住み込んだ。自分は侍の種だから、どうかして侍になりたい一心からだつたといふ。さうしてその一心が屆いて、やがて士分に取立てられた時、皮肉にも維新が來た。

四〇

維新は五箇條の御誓文と共に四民を平等にはしたけれども、大和民族の日常生活は、まだ依然として家長主義的家族制度のうちにあつた。從つて父權は絶對であつた。女權は皆無であつた。不羈放埒な萬兵衛が、さうした特權を濫用して、衣食の責任は一切鶴藏の双肩へ荷はせ、又何人となくその妻妾をとりかへ得たことに不思議はなかつた。箱館に於ける萬兵衛の生活は、毎日鶴藏に充たさせた皮財布を懷にして、たゞブラ〳〵と市中を遊びあるくことだけであつた。あらゆる種類の女が、その時々に鶴藏の母と名乘つた。が、經典餘師に教へられた鶴藏は、たとへそれがいかなるあばずれであつたにしても、あくまでも母として仕へる孝順さを失はなかつた。

四一

また五稜郭附近で、[illegible]入りの[illegible]を、[illegible]に[illegible]

めたりしてゐたといふ時代であらう。例へなくかれにやさしかつた一人の母親が死んだ。生まれて眞實の母親を知らなかつた龍藏は、恰も眞實の母親を失つたやうに悲しんだ。

四二

五稜廓に近い、神山村の淨土寺無想庵に、わたしの養父の手蹟たる、見事に特色あるお家流で「武林龍藏の母」と、わづかにその文字の辿られる程度まで苔蒸した小石塔が、わたしの大學時代にはまだ殘つてゐた……

四三

こゝまで書くと、わたしはまたこの章がいやになつて、例によつて、そのまゝ放擲して了つたものだ。

四四

ゐても立つてもゐられない或日、よくわかりもしないデカルトのメトードを開いて、讀むともなく拾ひ讀みしてゐるうちに、わたしはふと次のやうな意味の文字に行きあたつて、急にまた心をとりなほす氣になつた。

四五

「森の中で迷つたら、右へ左へウロ〳〵せず、又ひとつところへ立ちどまらず、一方へむかつてまつすぐに歩きつゞけ、たとへその方角がでたらめに擇ばれたものでも、みだりにそれをかへてはいけない。といふのは、さうすれば、行かうとしたところへは行かないまでも、少くともしまひにはどこかへつくであらう。その方がたぶん森のまん中にゐるよりはましだ……」

四六

「さうだ。」とわたしは思つた。「どこからどう書かうかと迷ふからいけないのだ。どこからでもかまはないぢやないか？　でたらめでもよかつたんぢやないか？　要はたゞまつしぐらに書くといふことにあつたんぢやないか？」と、藁にでもすがる氣で、わたしは思つた。

四七

と、さう思つた瞬間、どういふわけだか、クラ〳〵するわたしの頭の中へ、忽ち凧をあげてゐたわたしの幼時の或斷面が、まざ〳〵と描き出されて來た。

四八

さうだ。わたしは凧をあげてゐた。原始的な、太い白木の大鳥居が、わたしの背後にあつた。で、夏は涼しげな氷屋になる、さうしてそこに瓢簞なりのソバカスだらけな顏をした、まつ子の金ちやんがゐる、社のお水屋をとり込んだ掛茶屋のコケラ葺の上で、寒さうにかじかんだ櫻の木の枝先が、風のまに〳〵その鳥居をなぶつてゐた。又

これも白木の、所謂千木高知る荘厳な社殿が、わたしの右手に聳えてゐた。

四九

わたしの凧はつきあたりの新しい神楽堂のまへにあつた。西北の内二枚半の障子骨で、大江山を極彩色にした五人立の武者絵が、新藁あざやかな尾縄を二タ流れ、その両腰へ行儀よくゆら／＼と垂れさげつつ、又こみ入つた糸目にちかく、雁木の双金をキラ／＼と朝日に映じつゝ、底力のある藤のウナリをしきりと立てゝゐた。

五〇

わたしは誇りを感じた。おそらくその感じた誇りをば自分の家の誰かの目に示したかつたものであらう。わたしはすつかりダマをだしきつた糸巻を片手にして、ジリ／＼と左の方へ歩みよると、そこへ盛りあがつた低い芝土手の上へあがつた。さうして下を見おろした。

五一

三丁目谷とお厩谷との往還をつなぐ、十間幅の道路が脚下にあつた。さうして芝土手の外側は、三尺ほど下から道路面へ達するまで、一丈ばかりの石垣になつてゐた。

五二

で、わたしの位置が驟くにつれて、凧も同時に神楽堂からはなれて、そのそばの梅、杏、無花果などの灌木の頭上を渡り、恰も池の緋鯉のそれのやうに、尾の尖端を悠容と滑らかに揺りうごかしつゝ、やがて道路上の青々と澄んだ大空へ来てとまつた。と、道路の譏頭には黒いポストと相対して、巡査のたゝずむ交番が見えてゐた。麹町へ出る三丁目谷と千鳥が淵へ通ずる五味坂と、その双方へくだる丁度そこが分岐点だ。

五三

わたしの家は石垣の真正面にあつた。カマクラヒバがその緑髪を二つ三つぬきだしてゐる建仁寺垣の内面から、すばらしく丈の高い白ペンキの旗竿が一本、スッキリと青空をさしてゐた。さうしてその最端には、恰もフランスの國旗を二等辺鋭角三角形に引歪めたやうな、赤、白、青、三色の金巾をはぎあはした、甚だエキゾチックな大旆が一流朝風に飄いてゐた。

五四

建仁寺につゞいて、わたしの家の建物があつた。左り文字に書いたへの字形の屋根の、その短い方の一面は普通の瓦ぶきだが、長い方の他の一面は残らずガラス張りであつた。二階建で、下の中央部に山形の採光窓を出した、洋館まがひの入口が一つ、雨が降らなければいつも水のない小溝をへだてゝ、往来に面してゐた。それにならんで、ボウ

トウの打込まれた横窓が、のぞきガラスを帯にした小障子を見せてゐた。

五五

胍に感じたと同じ誇りをば、わたしは併しこの自分の家に對してもち得なかつた。のみならず、殊に入口の頭上に掲げられた楕圓形の看板に對しては、わたしは一種いひしれぬ恥のやうなものをさへ感じた。さうしてその黒漆の表面へもつて行つて、横さまに書きならべられた金文字の平假名をば、往來の人々が物珍しさうに、「さ、つ、ぽ、ろ「し、や、し、ん」と、そゞろに口ずさみながら通りすがるのを、たま／＼横窓の蔭などにゐて小耳にはさんだ時、わたしはなんとなく顔が熱くなるやうに思つた。

五六

で、片手に胍をあやつりつゝ、土手の上から見るともなくヒヨイと自分の家の入口を見た瞬間、わたしの胸はドキッとした。そこに今云つた金看板の下に、思ひもよらぬ青すだれが、ダラリとさがつてゐたからだ。さうしてその上へ貼りつけられた忌中札が、何事を意味するものであるか、わたしにもすぐそれとわかつたからだ。

五七

わたしの養父が浦賀へ石川艦を出寫しに行つてゐた留守の間に、わたしの養母がいくらとめてもきかず、足元から鳥の立つやうに札幌へ歸つて行つた萬兵衛が死んだのであつた。

五八

萬兵衛に關するわたしの記憶は、傳説をのぞくと、いくらも殘つてゐない。

五九

二七不動か、平河天神か、或は四谷の大横町か、養父がさうした夜店の古道具屋から掘出して來た丹塗の小簞笥の、その一番深い小抽出しの底へ、モロッコ表紙の厚い寫眞帖が一つ、家庭用としていつも押込められてゐたが、わたしはよくそれを出して見た。

六〇

第一頁には、まづ明治天皇を中心として、皇后、皇太后、有栖川、小松、北白川の諸親王、それから三條、岩倉、木戸、大久保、西郷以下、維新の諸元勳が、大禮服いかめしく、たゞ一枚の手札形の中へ、ズラリと縮寫された寫眞があつた。さうしてそれをめくると、その裏に萬兵衛がゐた。

六一

床屋か何かの看板を背に、チョン髷姿の爺さんが、頰のこけた、眼の小さい、頤長の顔をキヨトンとして、すこし背中を丸くして腰かけ

た全身の膝の上へ、たなごころを仰むけて無心に兩手をかさねてゐたが、寫眞はもう黄ろく古びきつて、よほど影がうすかつた。

六二

生まれてから七年間といふもの、札幌でも東京でも、わたしは始終この爺さんを目擊してゐたわけだが、わたしの目に殘つてゐる萬兵衛その人の容貌は、それがわたしの生まれるズツと以前とつたものであるにも拘らず、どうしてもこの寫眞以上に出ない。恐らくわたしの注意力が實物よりもより多くこの寫眞の方へ拂はれた結果であらう。

六三

札幌ではたゞ一つ、わたしはこの爺さんと二人して、洋傘をさし、鞄をさげ、「越中富山の萬金丹！」と、大聲に家中をどなり歩いたことだけしきや覺えてゐない。で、東京へ出てからは、カン／＼日の照る荒木坂をば、わたしはこの爺さんにぐい／＼手を曳かれつゝ、後れじと登つて行くわたしの姿が、まづ第一に思ひ出される。その時の爺さんは、鼠色の羅紗の火消頭巾見たやうなものを、頸までスツポリとかぶつてゐた。

六四

番町の出雲大社前へ、叔父が寫眞館を建築する前は、わたし達は士官學校下のさゝやかな二軒長屋の一つにゐた。二疊、六疊、四疊半の三間きりであつた。さうしてわたし達より半年ばかり前に東京へ出た爺さんは、四谷荒木横町の、黒い小さな衡門の中の、そこにお蓮さんと云つて、わたしの叔母とは札幌以來仲よしの、嫁入前の娘などがあつた、東浦といふ人の離れを借りて住んでゐた。この、爺さんに手を曳かれて荒木坂を登つたわたしの記憶は、その時代のことだ。

六五

で、わたし達もはじめて東京へついた時、そのころの驚異の一つであつたところの、裸瓦斯の火などに目をまるくした博勞町の刈豆屋から、とりあへずこの爺さんの離れへ引越して來て、さうして坂町の二軒長屋が見つかるまで、しばらく厄介になつてゐたものだ。淺草の仲見世から、さつそくながらテラ／＼した朱胴の巴太鼓や黒髯生けるが如き鍾馗の面などを、大喜びでわたしの持ちかへつたのはこの家だ。

六六

坂町の家へ落ちつくと、士官學校の崖下にあつた練兵場へ、わたしは毎日凧をあげに行つた。わたしと同じ年頃の子供達は、みんな西の內一枚若しくは半枚の小さな凧をあげるのが普通だつたけれど、わたしはそれでは滿足が出來ず、[illegible]にせびつて、ずつと年上の用ふる、二枚若しくは二枚半の凧を[illegible]もらつてはあげた。が、わたしにはまだ凧が大きすぎて、一人[illegible]にこなしきれず、從つて練兵場へ

行くたんびに、きまつて凧を立木の梢、或は土手の上の枳殻の生垣などへ引きかけた。で、どうしてもそれをとることができず、むりに引ッぱると、バラ〳〵と糸目がきれて、破れた凧ばかりそのまゝ梢へ殘つた時など、わたしは涙をこらへながら、大いそぎで家へ歸つた。さうして格子戸をガラリあけると、同時にワッと泣き出した。すると、養母は四疊半の茶の間からやさしく聲をかけて、

「坊や、また凧かい?」と云つたものだ。さうしてすぐ新しいのを買つてくれた。

六七

出雲大社の境内で、わたしが凧をあげてゐたのは、それから二度目の正月であつたが、その時分にはわたしはもう凧をあげることが人一倍上手になつてゐた。

六八

凧に關する追憶は、萬兵衞に關するそれよりもハッキリしてゐる。

六九

十四の年に凧繪をかいて親を養つたといふ位だから、わたしの養父も凧がすきであつた。晴れると屋根から突落した雪が、軒下まで堤のやうに家の前へ積みあがつてゐた札幌の南二條通りで、養父はよく西の内十一枚半といふ大凧をば、細引のやうに太い凧糸であげてゐた。その凧にも坂田の金時のまさか[illegible]ラ〳〵と銀色に光つてゐた。

七〇

暖かさうな狐の皮を裏一面へ[illegible]けた、微塵格子の茶色の地味な手織の外套を着て、獵虎皮の帽[illegible]かぶつたわたしの養父は、凧だけ奇麗に刷つた立派な蝦夷凧を風に靡かしつゝ、凧を仰いで雪の中に立つてゐた。で、糸をすつかり出しきると、その端をば、そこにもあつた家の前の旗竿の根方へ縛りつけて置いて、養父は張りきつた糸の上へムカヒをとりつけた。と、ムカヒは紅白だんだらの兩翼をひろげつゝ、胡蝶のやうにヒラ〳〵と糸をのぼつて行つた。やがて糸目まで達した時、カチリと手答して、忽ちパッと五色の紙片が空中で散亂した。同時に翼をたゝんだムカヒはスル〳〵と手元まで戻つて來た。わたしが四つばかりの頃だから、養父は四十を越したほどの年配であつたらう。

七一

坂町でも一度わたしのためにあげてくれたことがあるが、番町へ引越してからも、さうしてこれはわたしのためといふよりは、むしろ養父自身の興味のために、西の内四枚障子骨の達摩凧へ、二本づゝ左右へ尾をつけて、養父は家の前の、（明治二十三年に改築した家の前であつたと思ふ。）そこに人力車[illegible]場の棒杭が立つてゐた道路の一隅で、今

た全身の膝の上へ、ただぞこを仰むけて無心に両手をかさねてゐた

三間きりであつた。さうしてわたし達より半年ばかり前に[illegible]牛込区横寺町の、黒い小さな衡門の中の、そ[illegible]よしの、嫁入前の[illegible]た。この、爺[illegible]代のこ[illegible]

七二

[illegible]といふ名目で、九段の国家教育社員一の側から、わたしの家へ来てゐたことがある。痩せた、色の白い、口髭の濃い、黒目がちの眼の大きな人だ[illegible]。顔毛に[illegible]、いかにも[illegible]のハッキリした[illegible]、[illegible]

七三

忌中札がわたしの聯想作用へもつて行つて、はしたなく[illegible]兵衛[illegible]と腕とを締むつけた[illegible]

七四

[illegible]

七五

[illegible]館の、その寄贈館と[illegible]書架に、[illegible]一つあつたね わ[illegible]

しはそこからばかり出はいりしてゐた。……露地だが、左はわたしの家の十坪ばかりの小庭をかくした板塀で、右は杉の生垣が、例のイーストレーキの家の、鉄管のはへた面白い岩組の積みあがつた、さうして訪問客のある毎に、芭蕉の下の薄暗いドアの外にぶらさがつた鐵鈴が、チリン／＼と異様に響くのを常とした、

「ママ！ー」

「おツかちやんは？」

「おツかちやんのはいムアバタだ。」

このいムアバターといふのが、をかしいと云つて、継母は嬉しさうによく人にそれを話してゐた。継母のアバタは顔中に白くひツつツいたお君どんのそれとはちがつて、實際よく見なければ一寸わからない程度くらゐであつた。

七八

七七

まさにそれをあげようとしてゐた。すると、さつきからその有様をば見ぬふりをして見てゐたやうな交番の前の巡査が、ブラリ〳〵こちらへやつて來ると、やがて養父のそばへ近よりざま、小聲で何か云ひにくさうに云つた。と、養父はひどく恐縮して、匆々凧をかたづけると、家の中へはいつて了つた。さかんに電柱の立ちはじめてゐた時代なので、道路ではもう凧があげられなくなつてゐたものだ。

七二

又これはズッと年を經た後のことだが、直さんといふ人が、營業養子といふ名目で、九段の同業者鈴木眞一の店から、わたしの家へ來てゐたことがある。痩せた、色の白い、口髯の濃い、黒目がちの眼の大きく窪んだ、睫毛の長い、いかにも頭腦のハッキリしたやうな顔立の人であつたが、わたしは養父母からこの人を特に「兄さん」と呼ぶやうに命じられてゐた。直さんは無論寫眞もうまかつたであらうが、多藝な才人で、就中圍碁と將棊とは素人ばなれがしてゐた。何しろ二段だからなどゝ、舌を卷いて人々が噂しあふのをわたしはよく耳にした。直さんは文字がうまかつた。健腕直筆で巧に鳴鶴を書いて見せたりすると、わたしは畏敬の念を起さずにはゐられなかつた。で、記憶も相當によかつた人であらう。直さんは毎晩わたしの枕元へ端座しては、馬琴の美少年錄などを、爽やかな口調で、事こまやかに話してくれたりした。この直さんが、或時わたしを喜ばすために、長崎の凧といふものをこしらへてくれた。多分天正の昔、カステラと共に西班牙あたりから輸入されたものであらう。奇妙な五角形の凧で、糸目の上下たゞ二本きりなのが特長であつた。で、それを西の内三枚ほどのものに仕立てゝ、繪はいふまでもなく養父が淸正か何かを描いてくれた。さうしてこれがわたしのあげた一番最後の凧であつたものゝやうに思ふ。何でももう十二三才にはなつてゐた頃だ。

七三

忌中札がわたしの聯想作用へもつて行つて、はしなく萬兵衞爺さんと凧とを結びつけた始末だが、わたしの追憶はお調子にのつて、うかうかと爺さんをそッちのけにして、ひたすら凧の跡ばかり追蒐けて了つた。

七四

萬兵衞の死んだのは、わたしが數へ年八才の正月九日であつた。さうして出雲大社の土手の上で、わたしの忌中札を見たのはその翌日か翌々日であつたらう。

七五

[illegible]

しはそこからばかり出はいりしてゐた。冬は霜解のひどくぬかるんだ露地だが、左はわたしの家の十坪ばかりの小庭をかくした板塀で、右は杉の生垣が、隣のイーストレーキの家の、熊笹のはへた面白い岩組の積みあがつた、さうして訪問客のある毎に、青桐の下の薄暗いドアの外にぶらさがつた銅鑼が、ボアン〳〵と異様に響くのを常とした、その前栽に境してゐた。で、二間ばかり露地をはいると、そこに又小さな建仁寺が一トかこひあつて、そのうしろへ見苦しい兩便所と塵溜とがかくされてゐた。その前を通りすぎて、露地はそのまゝ突きあたりの泰ちやんの家までつゞいてゐたが、便所のかこひと相對したところに、そこに桔槹の深い堀井戸があつた。さうしてその苔むした井戸流しの前に、わたしの家の上り框が見えてゐた。

七六

坂町から引越して來た翌年の節分頃であつたらう。わたしは外から歸ると、その上り框で、見なれぬ銀杏返しの女が一人、火鉢の前へかしこまつて、金網の上のかき餅をば、杉箸でしきりと引くりかへしてゐるのを見た。それは柏木から來る細淵角次郎といふ八百屋さんが世話した、わたしの家のはじめての女中であつた。名はお若どんと云つた。

七七

お若どんに關して、わたしは養母とこんな問答したことを覺えてゐる。

「お若どんはアバタだねえ。」

「おツかちやんは？」

「おツかちやんのはいゝアバタだ。」

この「いゝアバタ」といふのが、をかしいと云つて、養母は嬉しさうによく人にそれを話してゐた。養母のアバタは顔中に白くひツつッたお若どんのそれとはちがつて、實際よく見なければ一寸わからない程度のものであつた。

七八

これだけのことが、いつもきまつて一緒に思ひ出されて來るところの、この裏口の上り框と、それから桔槹の堀井戸との右側に、はいつて來た露地から鍵の手に折れまがつた左側の板塀の袖とむかひ合つて、そこにも又一つ、これは併しブク〳〵に朽ち腐れた建仁寺垣があつて、くすぼつた赤松がのぞいてゐたが、その木戸からはいると、夏は一隅に試植された玉蜀黍などの目につく、荒るゝにまかせた庭に面して、屋根にペン〳〵草のはへた、恐らく維新前からの遺物であつたらう、古びきつた、六疊二間の小家が一軒建つてゐた。さうしてそこが萬兵衛の隱居所であつた。

七九

日が傾くと、爺さんは大いそぎで雨戸をしめ、さつさと寢て了つた。さうして燈火といふものは決してつけたかつた。で、寢坊であつたわたしは——札幌でさへ九時すぎて他へ來るを常としたカンカチ團子（杵でカンカチ〳〵と小臼をならしながら黄粉團子を賣る行商）の音をきくまでは目をさまさなかつたといふわたしは、爺さんがいつ起きるか知りさうな筈もなかつたが、よく朝日の一杯あたつた井戸流しの前へ突立つて、そこで威勢よく鼻糞などこしらへてゐる玉さんといふ杉のポテフリと、津輕なまり丸出しの高聲で、ガラ〳〵物を言つてる爺さんの姿は時に見かけた。

八〇

爺さんは日に二度しきや飯をたべなかつた。さうしてわたし達と食事を共にすることは全くたかつた。わたしの養母のこしらへたものばかりでなく、恐らく誰のこしらへた食事でも、爺さんの氣には入らなかつたにちがひない。もう七十を越してゐたけれど、爺さんはいつも隱居所の暗い臺所で、氣樂さうに二重鐵灸を打返しつゝ、ひとりゴソゴソ好物の小魚を燒いてゐた。

八一

たま〳〵粟餅など燒いてゐるところへ偶然わたしが行つたりすると、「坊、ふとつ、くわねか？」と爺さんから一トきれつまみ、わざとそれを手のひらの上へのせ、「わい！ わつぷ、わつぷ！」と仰山に叫びながら、きつとわたしにもお招伴させたものであつた。

八二

で、札幌で死ぬ前の晩、看病してゐたわたしの實父が、生前に何か遺言はないかときいた時、爺さんは大聲でたゞ一言、

「武林の不孝者！」とどなつたきりであつたといふ。

八三

マンフレッドではないが、わたしの眼はいつの間にか外に閉ぢて内へ開いてゐる。さうしてそこに天空のやうに漠々たる一個の宇宙を見る。が、その宇宙はかの太陽に眩惑されて、青空か、然らざれば雲の外には、又地平線と稱する、たゞ極めて近距離内にかぎられた、粗大な輪郭の物象の外には、全く見るよしもない白晝のそれではない。むしろ月の出ない晩、山上の斷崖に立つて、仰いだ星空に類似してゐる。さうしてその場合の星座こそ、とりもなほさず、われ〳〵の常に認識と名づけてゐるところのものだ。

八四

かの心理學者が靜的に見て[illegible]といひ、又動的に見て意識と稱して
ゐるものは、

て天文學の星座には、測定の便宜上、古來學者の分類した傳統的の區劃があるけれども、又望遠鏡と寫眞術との結果に對して、そこに依據する數學と物理化學との原則があるけれども、この記憶の星座にはそれ等の便宜も依據もない。

八五

內へ開いたわたしの眼は、さうした百千萬億那由陀恒河沙の、無量の記憶に鎭められた、混沌たる意識の渦卷を眺めてゐる。いや、眺めてゐるわたし自身の眼が混沌なのだ。渦卷く記憶なのだ。渦卷く記憶そのもの丶森の中をまつしぐらに馳せぬけようとしつ丶あるわたし自身の姿なのだ。

八六

が、デカルトの數へたとほり、わたしは果して林間の一空地へ出た。勿論、どこまで行つても際涯のなさ丶うな、まだ千古の森の中だけれど、到着した一個の「どこか」であつたには相違ない。さうしてそれが萬兵衞の死だ。

八七

わたしは考へる。――わたしの綜合は虛無に等しいと云つたが、その虛無中へかりに任意の一點を定めたとすれば、その任意の一點が定められたといふことだけのために、虛無は忽ち虛無ではなくなつて了ふ。さうして對應してそれが一切となる。無數の方向がその定められる一點から、盡十方へむかつて發足し得る可能性をもつからだ。同時にかの第三次及び第四次のダイメンションが、そこではじめて建立されるからだ。

八八

――さうだ。出雲大社の境內でわたしの偶然あけてゐた眼が、所謂任意の一點だつたものにちがひない。さうしてそこから萬兵衞の死といふ一方向が引き出されて來たわけだ。

八九

さう考へて、わたしは林間の一空地を出る。

九〇

六七十間つゞいた石垣の、左の端には神樂堂の横手から降りて來る大社の裏門があつた。さうしてそれに隣つて、そこへ時々立派な二頭立の馬車が出入する、樅の林のコンモリした鷹司家の入口があつた。又石垣の右の端には、巨大な柳と皂莢の樹とが、恰も一本の大木のやうに枝葉を交へて、大社の黑い表門にかぶさつてゐた。夏はその樹でジイ／＼と油蟬が鳴いた。で、その大木を境にして、そこにいつても靑洟をたらした愛ちやんのゐる、玉泉堂といふ菓子舖が一軒黑い表門に並んでゐた。[illegible]

もらつては、そこへ餅菓子を買ひに行つた。赤いのが一つ、白いのが二つ、虎斑の竹の皮へ包まれた大福が、その頃は一錢に三つあつた。

九一

赤縞の細二子、着物も同じ柄の筒袖の羽織を着て、まん中にボンボンの房のついた蝦茶の毛糸のベレエをかぶり、青い小倉の袴をつけ、編あげの靴をはき、襷にわたした澁革の學校鞄を腰にさげ、さうして片手に赤い毛糸の袋にはいつた甑蓋三つ組の辨當箱をぶらさげながら、わたしは毎朝斜に道路を横ぎつて、大社の表門をはいつた。

九二

飲のお水屋と、金ちやんの掛茶屋と、それから大鳥居とを左に見て、小さなだらく坂をのぼりきると、右手に久ちやんの人力宿があつた。と、突きあたりは黒板塀をとりまはした宮司千家さんの住宅で、右へまがると、そこが上二番町の横通りへぬける古風な屋敷門になつてゐた。

九三

或朝、わたしはそこまで來ると、突然足がすくむやうな氣がして、どうしてもその門が出られなくなつて了つた。人通りの滅多にないその横町は、中ほどにある加藤弘之の西洋館を除いては、かど並ほとんどまだ徳川時代そのまゝの屋敷門も武者窓ばかりがつゞいてゐた。さうしてその通りには大きな犬が澤山ゐて、よく人に吠え

袴のすそをくはへられて、砂利の上へ曳きづり倒された覺えのあるわたしは、或はその犬が怖かつたものかも知れなかつたが、その時のわたしの佉へ方は全く一種異様なものであつた。

九四

蛇苔のこびりついた屋根瓦の合はせ目から、帚木のついくと立枯れた、この屋敷門の内部は薄暗かつた。で、古びた大扉がいつも左右一杯に開かれてゐたが、その門のついた方の扉の一端が、門内の一隅をなす壁面と出會つて、出會つたところへ五六寸の間隙を殘しながら、そのうしろへもつて行つて、三角形のまつ暗な空間をこしらへてゐた。どういふ了見だつたものか、わたしは恰もその口を開いた黒い間隙の神秘さに吸ひよせられたやうに、フラくと三角形の内面へ身をかくして了つた。さうしてさながら山椒魚のそれのやうに、そのくらすまでジッと息を凝らしてゐた。

九五

七八才の頃のかうしたわたしの奇異な行動は、その動機も理由も、今もつて全くわからない。併しその時感じた心持だけは、四十年後の今日まで、不思議にハッキリと殘つてゐる。で、その心持はといふと、その後二十歳を越してから、はじめて開いて見た山家集の中に、ふと、

「はるかなる岩のはざまにかくれゐて人目おもはでものおもはばや」
といふ一首を發見して、忽ちそこにその時の自分自身の姿を見た、丁度その心持だ。又それから後帝大文科の學生であつた頃、その時分巣鴨にあつた精神病學教室で見た、さうして吳教授が手にもつた針でその鼻先をつゝいたりして、いかにその感覺の遲鈍であるかを說明してくれた、右を向けば右を向いたまゝ、半日でも一日でも、そのまゝの狀態をつゞけてゐるといふ、かの痴狂と名づくる一種の精神病患者その人自身になつて見ることのできる人でなければ、到底理解のできさうもない、その心持だ。いや、さうした心持の、いはゞ發芽狀態だ。

九六

三角形のくらすまの中で、かくしてわたしはかくれ簑を着たお伽噺中の人物になりすましてゐた。と、今わたしのすべり込んだ側の五六寸の間隙からすこしばかり見えてゐる、扉とは反對の側の門內が、何だか急に明るくなり出した。つまり、朝日がまはつて來て、歩くたびに砂ほこりの立つそのどろ砂の土の上へ、フウワリと黄ろい光線を落しはじめたものだ。とたんに、パタ／＼と足音がきこえて、同時にまだ學校へは通はないほどの女の子と、その弟とも見える男の子とが、忽ちその光線のさし込んだどろ砂の上へ姿をあらはした。さうしてそこで遊びはじめた。わたしは一層息を凝らして、そツとかれ等の動作に注意した。

九七

そこに地を掠めてパツト開いた紅葉のやうな手が四つ見えた。と、かきよせられたどろ砂がすぐ盛りあがつて、その盛りあがつた頂天へもつて行つて、チヨイと指先が小孔を穿つた、何のことはない、月面の死火山か、或は一種の蟻地獄見たやうなものができあがる。と、二人はパタ／＼とどこかへ出かけて行つた。かと思ふと、すぐ戻つて來て、ふくらがした頰一杯にくゝんだ口中の水をば、その小孔へチヨロチヨロと流しこむのであつた。やがてどろ砂がスツカリ水を吸收して了ふのを待つて、二人はいそ／＼と砂をかきわけつゝ、その中から銘銘の作品を引きだした。それは黑い原始的の土器であつた。

九八

この動作が何遍かくりかへされた後、いくつか並んだ土器だけをそこへ殘して、二人の子供は奇蹟のやうに姿を消して了つた。さうしてもう戻つては來なかつた。わたしはホツと太息をついた。

九九

一旦さし込んだ日蔭は探海燈のやうにいろ／＼その地位をかへた。後、再び外へ出て了つた。さうして屋根の影を垂直に地に落した門外の光線がクワツと強烈になるにつれて、門內は前よりは暗くなつた。や

がて正午に近づいた徴候であらう。わたしは腹がすいたので、その主僧院のくらすまの中で、しやがんだまゝ、ぶらさげてゐた辨當箱を開いた。と、毎朝養母が見事に卷いてくれた、わたしの大すきな玉子燒の匂ひがプンとした。

一〇〇

悪夢からでもさめたやうに、わたしがコッソリくらすまをぬけだして、漸く外氣に觸れた時、日ざしはもう午後に傾いてゐた。そしらぬ顏して、わたしはそのまゝ家に歸つた。この不可思議なわたしの行動は、養母には全く氣どられずにすんだ。養母はわたしがいつもの通り學校へ行つて、いつもの通り歸つて來たものと思つてゐた。

一〇一

これがわたしの養母を欺いた第一の追憶だ。

一〇二

追憶は深林の寂寞を破つて、發止と池中へ投げ入れられた小石だ。と、物理學の原則に從つて、水面は小石の觸れた一點を中心として、そこへ廓大しては消滅する無數の圓をゑがく。感想は恰もその波紋に相當する。

一〇三

出雲は旅行ずきなわたしが日本にゐた時、殘念ながら一歩も足を踏入れる機會をつくれなかつた國の一つであることを感[illegible]ラフカデイオ・ヘルンがそこで古事記日本に感激して、小泉八雲と名乘つた國であることを思ひ出す。と、今でもわたしの頭からぬけきれないシエリイ、キイツのロマンチズムをば、晩年のヘルンその人の口づから朗らかに鼓吹された學生の一人でわたしがあつたことを思ひ出す。さうしてヘルンの一生こそ、わたしにとつては、あらゆる人間の一生中、世に最も羨むべき生活の一つであるやうにまで思ひ出されて來る。

一〇四

その出雲から、江戸時代のいつごろか、はる〴〵この番町へ勸請された大社だ。頭の四角な神主の長谷川さんが、神殿づくりの豔やかなお堂の一隅に据ゑられた大太鼓を打ちつゞけつゝ、昔のまゝにまだ朝夕を報じてゐた。見たもの聞いたものをば一度は必ず眞似せずには置かなかつたわたしは、買つてもらつた大社のそれと同じ形の小太鼓をば、本物と同じやうな木枠へはめて、長谷川さんと寸分たがはぬ音を立てたものだ。さうしてそれが養父母の誇りにさへなつたほど、わたしの模倣は眞に迫つてゐた。

一〇五

また老分に目のさめきれぬ[illegible]中で、わたしは[illegible]

タツタラツと響いて來る豆太鼓の音をきいた。わたしの家の裏木戸と相對した石垣のはづれの裏門前に、緣日にはきつと大きな傘をひろげたタンキリ飴の家臺がまづ目についた。境内へはいつてからも、遊色のさうした大傘は、その下へさま〴〵の緣日物をならべて、あちらこちらにひろげられてあつた。そのほか、小さい煙突を立てた蒲鉾なりの鐵器の中で、キイ〳〵金網を廻轉させつゝある炊豆屋、一題がかはれば宇都宮の釣天井」と、獨特の節面白い覗きからくり、いかにも指先の器用に動く新粉細工、砂文字、居合拔き、大道講釋――わたしの目には今も鉛器械をまはしてゐる豆屋の娘の色の黒い無表情の顏が見える。鉛糖を大地へ模倣しつゝ、チョロ〳〵と色砂のこぼれ落ちる砂文字屋のにぎり拳が見える。又からくり屋の御詠歌じみた悲哀な聲が、エヘンと痰をきる大道講釋のせきばらひが、まざ〳〵とわたしの耳にきこえる。

一〇六

質問しに教壇へ近づくと、片目は白く盲い、片目に胸へブラさげたチエンバレンをあてがつて、ジツと質問者の顏を見つめながら、教壇の上から前こゞみにわたし達の質問に答へてくれた、又放課時間には、山上御殿の下蔭道の、人なき池の緣などを、氣のきいた中折に、ヘヅナの紫を搖曳しつゝ、ひとり淋しく逍遥してゐられるのをよく見かけた、さうした小泉八雲先生の風貌と、ブルウタ、ロフタスレエホール、シャロツト、イノーン、ユーリセス、又プリンセス、イムメモリアムと、わたし達へテニズンを講じてくれた、恰もその文章のやうに飄飄たる發音とが、――この毎月十四日に行はれるのを常とした、出雲大社の例祭とアラベスタをなして、未來派ダダ派の繪のやうに又ジャズのやうに支那樂のやうに、時々わたしの心耳と心眼とに錯綜する。

一〇七

麹町區一番町十一番地――そこに七八才から二十五六才まで、約二十年間、恰も溫室へ移植された異國の草花のやうに、人間としての寶父母の慈悲忍辱の、そのありつたけの愛撫に浴しつゝ、すく〳〵と成育したわたしの生活は、云ひかへれば、この出雲大社の例祭にはじまつて、ラフカデイオ・ヘルンの英文學にをはつたものであつた。さうしたわたしの追憶の、そのアルフアとそのオメガとが、同時に今わたしの識域までこみあげて來たものだ。

一〇八

自傳を書くのはわたしの本意ではない。いたづらに讀者に不快と退屈とを強ひるより外には、書いて示すに足るほどの問題價値が、わたしの一生涯にあらうとも思はれないからだ。併しながら自傳を書くと

いふことを離れては、殘念ながらわたしには全く書く材料の持ちあはせがない。それほどわたしの頭は空疎で且つ貧弱なのだ。それほどわたしの心はエゴイストで且つルムペンなのだ。

一〇九

さうしてその同じエゴイストにしてからが、プルウストのやうな心理的分析と藝術的敏感とが伴つた場合なら又格別でもあらうけれど、就中その點に關して缺如してゐることが、その上にとりつく島もなくわたしを失望させる。

一一〇

が、わたしの失望はプルウストを讀んでからはじまつたわけではない。わたしはこれまでに何遍自傳を書かうと企てたか知れない。さうしてそのたびごとにそれを書きこなすだけの哲學的洞徹と藝術的才能がわたしに皆無であることに心づくと、わたしはきまつて長大息しては、そのまゝ筆を投じて了ふのが常であつた。

一一一

小泉先生が帝大文科を去られると、わたしは一年間休學までして、一高時代から頭の中にあつた、「神祕」と題する創作に沒頭したことがあるが、そのあくまでも十九世紀的ロマンチックを極めた構想に拘らず、わたしのひそかに書きたいと念じてゐたのは、却つて異常な境遇の下に、はじめて惟にめざむべく餘儀なくされた、わたし自身の目前のセンチメンタルな生活そのものであつた。しかもその要點へ觸れるまでもなく、わたしの創作は未完のまゝで放擲されて了つた。それがわたしの哲學と藝術とに對する一番最初の失望だ。

一一二

又それからズツと後、小石川區宮下町七番地の家で、養父が死んで二三年もたつた頃であつたらう、いきなり字書と首引で、大膽にも原文の「創造的進化」にとツついた時、ふと「ニユアンス・ヒユイヤント」といふ、ベルグソンの哲學そのものにとつては大して深い意味もないフランス語をば、いかにも意味ありげな題名に揭げて、生き殘つてゐた養母を喜ばすために、わたしが二度目の結婚をしようとしつゝあつた、その相手の惠子が、新潟から書き送つたかの女の幼時の思ひ出に刺戟された衝動から突發的に書きはじめたのが、わたしの生まれてから四五才までの札幌時代の追憶であつた。百枚ばかり一氣に書いて、さうして惠子に對する見えからの、文壇人になりたさが一杯で、早速それを田山花袋氏の許へ送つたが、「力强いが、もつと繪のやうであつてほしい。」といふ評言の手紙をもらつたまゝ、肝腎の「文章世界」へは採用されずに葬られて了つた。それはその後山本露葉君が「モザイク」の埋草として雜誌には附してくれたけれど、わたしにはそ

れを雜誌の上で讀みかへす勇氣もなかつたほど、自分の藝術的才能に關しては、心の底からスッカリ失望しきつてゐた。

一一三

又養母が死んで五六年もたつた後、加藤謙君の「鐘が鳴る」のために書きはじめた、「因緣生」と題する天台かぶれの長篇も、やはり同樣の失望から、わづかに一二回で尻切蜻蛉にして了つた苦々しいわたしの一生の追憶に外ならない。

一一四

また地震と共に、二度目に巴里へ來て、今度は無法にも、それだけで親子三人の衣食を支へようとして、無理おしつけに川田順君へ宛てて書いた感想斷片の連續も、歸するところは結局自傳をまとめたい妄念の下にあつた。さうしてかくわたしのほとんど一生につきまとつて、年々歲々にたゞその苦がさのみを增すところの、このわたしの藝術的才能に對する失望は、とうとう何も知らぬわたしの妻をまでとんでもない奈落の底へ突落さなければやまない原因をつくることに終つた。

一一五

で、現在もまたその通りだが、併し親ゆづりの家をたゝき賣らない前の、かの書かうと書くまいと衣食の道だけは別にチャンと保證されてあつたアマトウルの時代とはちがつて、若しこのまゝに又長太息して筆を投じて了つたら最後、今度こそは本當に妻子もろとも路頭で餓死の憂目を見なければやみさうにない、絕對絕命の破目にある。

一一六

失望はできぬ。筆は投じられぬ。さうして息たえるまでこの机には獅嚙かみつかねばならぬ。——書くこと〻生きることとの合致點はそこだ。

一一七

麴町區一番町十一番地——その頃は畑であつたといふ百坪ほどの空地へさゝやかな寫眞館を新設して、わたしの養父母がいよいよ東京へ永住することに決したのは、果してわたしの實父母が信じてゐたやうに、わたしをして札幌なるかれ等をば根本的に忘れさせて了はうとした養父母の下心であつたかどうかわからない。

一一八

實父はわたしに向つてよくかう云つた。——お前を養子にしたいといふ先生御夫婦からのお話があつた時、磐雄はわしの家の長男で厶いますから、あれはさしあげるわけにはまゐりませんが、若し次男の昌司の方でおよろしかつたら、喜んで御意に從ひませうと、わしはお答へ申上げた。併し先生御夫婦は昌司では御承知がなく、どうしてもお前をもらひたいと仰クしやるのだ。わしも當惑して、その事をお前の

母と鵜谷のおやぢに相談して見たところ、お前の母はまだ若かつたせいかして、大して不服もとなへなかつたけれど、おやぢの方は無論長男を養子にとは以つての外だと立腹した。そこでその由を先生へ申上げて、もう一度お斷りしたのだが、御夫婦は中々おきゝ入れにならない。のみならず、これまでのよしみに免じて、この事だけは曲げてどうか承諾してもらひたいと、再三再四懇々とのお賴みだ。さうなつて來ると、元來が意志の弱い上に、又永年蒙つた厚い恩義にからまつて、わしはとう〱お斷りがしきれなくなつて了つた。で、考へた。先生御夫婦がそれほどまでにしてお前を愛して下さるのは、これは佛法などでいふよく〱の因縁事であらう。又もらはれてゆくお前の將來を考へて見ても、境遇のわるい、力のないわし等のやうなものゝ手に育てられるよりも、何かにつけて御運のいゝ先生御夫婦の鍾愛を一身に集めて、立派に教育していたゞく方が、どの位お前には幸福かわかるまい。それに養子と云つたところで、どうせ一つ家根の下で、かうして一緒に起き臥しゝて暮らしてゐられる以上は、お前とわし等との間の愛情になんのへだたりが生ずるといふわけでもない。と、さう考へて、わしは思ひきつてお前を先生へさしあげて了ふことにきめた。鵜谷のおやぢも元々わしとわしの母とを越後へ抛りだして置いたまゝ、勝手に北海道へわたつて來て了つた人間だから、わしに對してさう〱は強いことも云へず、不承々々わしの意[illegible]谷の戸長を勤めてゐた關係上、戸籍はお前を次男になほし、滞りなく入籍の手續きをすましてくれた。ところが、いよ〱事が養子ときまると、先生御夫婦には急に思ひ立たれて、お前を伴つて東京へ出られることになつた。一寸意外には思つたけれど、併したゞほんの二三ケ月の豫定といふお話しだつたので、わし等は何氣なくさう信じてゐたところ、東京へおつきになるや否や、忽ち御豫定が變更になつて、番町へ店まで出されて、そのまゝ東京へ永住なさることにきめられたといふ。寢耳に水の御通知に接して、わし等は實際ビックリして了つた……

一二九

かうしたわしの實父の言葉には、事實上の虚構は全くないが、併しその、大切な自分の長男をば、師弟の義理から、見す〱手離すべく餘儀なくされて了つたといふ、さうして一生遂にとりかへしがつかなくなつてしまつたといふ、さうした感情の誇張が、それがきゝづらい愚痴に墮するまで、一種エゴイスチックな響となつて、かくいつまでもわたしの耳の底へこびりついてゐる。

一三〇

さうして、「なぜわたしが男性としてこの世の中へ生まれなければならなかつたか?といふやうな、はなはだ愚にもつかぬ哲學問題?に、

生涯わたしが悩まされつゞけた原因の一つとして、このエゴイスチックな癖が、わたしの神経の中枢へ有力に作用したことは争はれない。

一二一

そこにアダムとエヴだけがあつて、さうしてカインが生まれたといふ傳統的な一例は、それゆゑにわたしの場合には始めからあてはまらない。明治十三年二月二十三日、札幌の堅く光る根雪の中で、生まれ落ちたその瞬間、わたしといふものゝ躍動する小さな一個の肉塊上へもつて行つて、その同じ家根の下に起居してゐた二タ組の夫婦の本能が、かれ等の生の存續に關する本能が、同時になま〳〵しく刻みつけられて了つたものだ。

一二二

が、なぜであらう？　實父母のそれは云ふまでもないとして、なぜ肉親でもない養父母の本能が、殊更にわたしの肉體だけにかぎつて、それほど深く働きかけるべく因縁づけられたのか？

一二三

それはわたしの養母が致命的の石女であつた爲であらうといふ一事の外、さうしてその石女の底に潜んでゐた母性としての要求が、わたしの肉體を一目見ると、忽ちその燃焼を開始したものであらうといふ一事の外、わたしにはそれ以上考へられぬ。

一二四

三才で江戸へ置去りにされたわたしの養母は、父長之助の家の元祿以降代々の菩提所であつたところの、淺草新谷町の日蓮宗慶印寺地内に、ほそ〴〵と暮らしてゐた瀧口のおちさんを親元として、十九の年に箱館から長之助がかの女を迎へに來てくれるまでは、たゞ律儀一遍のお屋敷奉公を除いては、全く世間といふものを理解せずに育つた。

一二五

堅氣になつた長之助はといふと、維新にぶつかつたその時代の日本人が誰しも齊しく痛切に感じたやうに、これはこのまゝかうして安閑としてはゐられない時勢になつて來たといふ氣がしきりにすると共に、この際どうしても過去一切の傳統をかなぐりすてゝ、さうして何か新時代に適應する人の氣づかぬ新職業にありつく必要があると考へた。そこでまづイの一番にチョン髷をきりすてると同時に、ふと長之助の目にとまつたのは、恰も一山十文のくされ蜜柑と云つたやうに、戸板へのせて波止場で賣つてゐた外國水兵の穿き古したボロ靴であつた。

「さうだ。これにかぎる。」と長之助の直覺が絶叫した。

一二六

勿論、皮類を取扱ふものは、その頃はまだ、、と賤しめられてゐた

、、、、の一種族にかぎられてゐたけれど、長之助の發心は浴びせかけられる世間の侮蔑位には決して動じなかつた。さうして二十間坂の坂下へ高々と卍の屋號を揭げて、敢然として靴店を開いた。

一二七

同じ廻船業者の娘であり、又同じ津輕者であつた妻を通じて、長之助が萬兵衞を知つたのは、恐らくまだ一管の橫笛に一身を托してゐた時代からであらうが、併し江戸から連れて來た自分の長女をば、いよいよ龜藏の後添ひと思ひついたのは、それが靴店を開いた前か後か、わたしの記憶にある傳說は殘念ながら白紙のまゝに殘つてゐる。

一二八

が、廻船問屋の娘から生まれた、長之助の長男なる源三郎叔父の言葉によると、わたしの養母はわたしの養父のところへ嫁にやられることを、最初はひどく厭がつたものだといふ。それは去られた龜藏の前の妻が、わたしの養母とは仲のいゝ友達の一人であつたからだといふ。と、長之助はひどく立腹して、結納を囲爐裡にくべ、娘を後手に縛つて、三日三夜責め懲らした後、漸くその意に從はせたものだと、誇張ずきな源三郎叔父は面白をかしくその上に附加へた。

一二九

維新の變動は長之助以上にわたしの養父を脅した。榎本武揚が五稜廓を陥城した後は、恐らくさしづめに何をどうした[illegible]く途方にくれて了つたことゝ察せられる。さうして名を盛一と改めて、いよ〳〵寫眞といふ新職業で身を立てようと決心するに至つた動機は、靴に着眼した長之助とほゞ大差はなかつたものであらうが、併し長之助に比べると、その外國の事々物々に對する好奇心は、養父の方が遙に深く又ズッと強かつたに相違ない。それは養父がその時代の油繪をいぢくつたり、懷中時計の器械を分解したり、又雨風の烈しい日など、柱へかけたアネロイド・バロメートルをジッと見ることを知つてゐたりした事實から想像できる。又Lotの番號札が貼りつけられたまゝの、甚だ精密な、厚い大型の和蘭語の世界地圖が、十年前わたしが家財道具をたゝき賣つた時まで、舊式のアネロイドと共に、依然としてわたしの書齋中に殘つてゐたが、それも箱館時代の養父の好奇心を語るものゝ一つとして、とりわけてわたしにはなつかしく思ひ出される。

一三〇

例の源三郎叔父のアテにはならない話によると、養父がまだ主取りした旗本の門長屋にゐた時分、碇泊中の露國軍艦ではじめて見て來た、話にきいた寫眞術といふものゝ實際にひどく感服して了つて、それからといふものは、買ひあつめた蟲眼鏡と、自分で工夫した暗箱とにとッついて、ダゲールもどきの朝夕に、スッカリ我を忘れたものだ

といふ。すると精緻な萬兵器は、人の生血を吸ひとる切支丹伴天連の邪法だと罵つて、いきなりその器械をたゝきこはしたものださうだ。

一三一

で、店をあけた時は、勿論もうそんな怪しげな原始的の手製器械ではなかつたけれど、何しろ乾板といふものゝまだ發明されてゐなかつた以前のことだから、恐ろしく複雑な長々しい手續を經て、さうしてわづかに出來あがつたものはと云へば、桐の小筥の底一面に敷きつめられた、黒天鵞絨の上へ安置した、かのナマ寫眞と稱するガラスどりのまゝであつた。

一三二

が、開業まもなく、わたしの養父の寫眞館は、隣から出た失火のために運わるく丸やけになつて了つた。で、若しこの火事にあはず、又丸やけにもならなかつたとしたら、養父は或は札幌へなど出かける氣にはならなかつたかも知れない。

一三三

尊王攘夷で幕府を倒した薩長の明治政府が、その攘夷主義の延長であるところの、かの北門鎖鑰の標語の下に、ロマノフ露西亜に備ふる軍事的見地から、そこへ屯田の兵制を布くために、慌たゞしく、千古の大處女林を伐採して、一夜にして京都に準じた一大都市を建設しようと企てたのが札幌であつた。

一三四

森林には野獣の群れ、原野にはアイヌ部落、さうして大和民族としては、わづかにたゞ豐平川の渡守一人きりであつたといふ。さうした草莽の時代から、わたしの養父がはじめて札幌の土を踏んだのは、それほどまだ遠くかけ離れてもゐなかつた頃であらう。そこにはたゞ東久世侍從を長官に戴いた開拓使廳の役人の一團と、それから都市建設に驅使せられる數千の勞働者ばかりがゐた。わたしの養父のうつした第一の寫眞によると、本陣と稱する官營旅館の門前には、羽織袴に大小を腋ばさんだ、まだ徳川時代の侍そのまゝの姿した役人どもが立つてゐた。

一三五

で、その本陣の一室を根城として、わたしの養父は徒手空拳勇ましく寫眞業を營みはじめたが、恰もその時その本陣の書記役を引受けてゐた人間こそ、さうしてわたしの養父に對して一方ならぬ同情と友誼とを示した人間こそ、とりもなほさずかの妻子を越後二田へ放擲したまゝ、フラリと北海道へわたつて來た、わたしの實父の父親その人に外ならなかつた。

一三六

辻潤が「らぷそでいあ・ぼへみあな」の中へ書いた、麹町九丁目の所謂「白蛇の出るのは芭蕉庵」を解散した時、わたしのためにその家をさがしてくれて、そこで一年あまり同棲した後、松葉杖をついてアメリカへ出かけて行つたわたしの妹の所有品は、すべてその愛弟子の一人の嫁入先、今川橋の松橋醫院へあづけることにしたが、その恐らく地震のために全部燒失して了つたであらう少しばかりの荷物の中に、わたしの實父がかつてわたしへ手渡しゝた、何枚か重ねて綴ぢた半紙四つ折の小さな帳面がまじつてゐた筈だ。さうしてそれがわたしの實家の系圖であつた。

一三七

系圖などゝいふものは、勿論わたしには興味がないが、殊にわたしの實家のそれに至つては、あらゆる系圖には共通な、かの荒唐無稽を通り越して、たゞに信用ができないばかりでなく、しかも見えすいたその捏造とその虚榮とが、云ひやうのない不快さを與へずには置かないやうな種類に屬してゐた。尤も實父の話によると、これは決して父祖傳來のそれではない。たゞ何年か前、一家のわかれであると稱してゐるところの、雄鹿半島の豪農二田なにがしが、特にわざ／＼本家のために調製してくれて、それを實父の手元まで送つて來たものにすぎないのだといふ。

一三八

とにかくこの系圖によると、わたしの先祖は、かの天津日子番能瀰邇藝命が、高千穂の久士布流峰に降つた時の、それをとりまいた五伴緒の眷屬の一人まで溯つてゐる。して見ると、わたしの血統は、日本人としては最も古い、又最も純粹な、所謂天孫氏族に屬してゐることになる。

一三九

興味がもてないから、從つて系圖の内容は忘れて了つたが、たゞ代代二田の連といふ姓氏の下に、神官を職として、皇室と共に連綿と續いて來た家であることをば、極力證據だてようとした意向だけは、すくなくともその四つ折の帳面から思ひ出すことはできる。

一四〇

長岡藩の家老職の家から養子に來て、一生引籠つて讀書ばかりしてゐたといふ曾祖父の跡をついで、越後刈羽郡二田村なる二田神社の宮司となつたわたしの祖父は、飄然北海道へわたる前までは、要するにたゞ飲酒と豪遊とそれから女狂ひとだけに一身を持崩した無頼漢にすぎなかつたといふ。さうしてそれは祖父とはまるツきり正反對な、人一倍謹直なるわたしの實父の話だが、同時に實父とは逆に又正反對な傾向をもつてこの世へ生まれいでたわたし自身には、それがどうやら

かの動かすべからざるアタヴイズムの好適例であるやうにのみきゝなされるのが常であつた。

一四一

併し實父は一方口を極めて祖父の非行を指摘してやまないにも拘らず、そのわたし自身のうちに見出される正反對な性向をば、どうしても自分の家の血統中へは歸納することを好まなかつた。さうしてその原因のもつて行きどころをば、いつも實母のそれに轉嫁して、

「さういふ性質はわしの家の血にはない。それはみんな丸山の筋をひいたものだ。」と斷言してゐた。

一四二

實母の家は代々契沖眞淵の國學をもつて南部家へ奉仕してゐた盛岡の藩士であつたが、維新前後の動搖時代には、丸山家の養子婿として跡をついでゐたわたしの祖父は、どういふ都合か一家をあげて箱館へ移住し、そこでかなり繁昌した寺小屋を開いてゐたものだ。で、わたしの實母は兄が二人弟が一人あつたが、その後寺小屋といふものが廢止された爲に活計を失つて、一家が室蘭から札幌へと轉々して行つた頃は、もう併し長兄はカトリックの宣教師として、又次兄は小學教員として、互に協力しつゝ、かつ〴〵一家を支へてゐた。

一四三

九つの年、東京へ出て、明治政府の新しい試みの一つとして[illegible]へ創立された我國嚆矢の女學校へ入門し、さうしてその學校が開拓使の物議を招いて間もなく札幌へ移轉した時、かの女も共に札幌へ赴いたといふわたしの實母は、その後業を卒へて、やがてわたしの實父の許へ嫁入して來るやうになるまでは、次兄同様家計を助けるために、その時代にはまだ珍しかつた小學校の女教師を勤めてゐた。

一四四

さて、前記の系圖によると、連綿と列記された二田の迹は、それが祖父の代になると、突然吉野の迹と書きかへられてあつた。又實父の代にはそれが更に三島の迹に變つてゐた。恐らく新政府の戸籍法によつた祖父の姓が吉野であり、又實父の姓が三島であつたところから、系圖作成者が氣をきかしたものであらうが、併し系圖とは何の關係なしに、この祖父の姓と實父の姓とが、かく初期に異つてゐる一點に、二田時代のわたしの實父の云ひやうのない不幸な境遇がまざ〳〵と物語られてゐる。

一四五

とめどのない祖父の放埒は、あくまで慎ましやかなわたし[illegible]生母として、とう〳〵吉野家から去らしめた。生母に[illegible]とを知つてゐたわたしの實父は、さん〴〵に[illegible]

ひそかに山を越えて生母の許へ走つて了つた。それ以來わたしの實父は祖父の姓を名乘ることを潔しとしなくなつたものだといふ。さうして三島は云ふまでもなく祖父の生家の姓であつた。

一四六

放埒の極、一切をかなぐりすてゝ、祖父が北海道へわたつて了つた後の、又そのまゝ生家へとゞまることは許されなかつた祖母が、心ならずも他家へ縁づいて了つた後の、わたしの實父のやるせない孤獨の境涯は察するにあまりある。さうして風呂敷包一つを肩にして、實父がはるぐ祖父を尋ねに北海道まで出かける氣になつたのは、既に二十歳の青年期に達した後であつた。

一四七

黒田清隆が北海道長官になつた時、かれは大阪城造營に於ける秀吉の智に倣つて、かの一藝あるものには一官を與へるといふ、大いに門戸開放主義の人材登用法を行つた。わたしの養父が寫眞術をもつて、月俸三十圓を頂戴する十五等出仕に任命されたのは、さうして繪畫の望月金鳳や英語のサンマア等と相並んで、所謂官宅なるものを支給されたのはその時代だ。

一四八

箱館から森へ出て、一艘蒸汽ほどの小定期船で噴火灣を横ぎつた後、アイヌが手綱をとつて先へ立つ馬の背にのせられたまゝ、室蘭から晝夜兼行、幾たびか熊の足跡に驚きながら、道なき原野と山林とをかきわけつゝ、命からぐ札幌へ到着したわたしの養母が、はじめて一家の主婦として養父の箕帚をとるやうになつたのは、とりもなほさず、この、——毎朝臺所の流し元へ狐が食をあさりに來てゐたといふ——原始林中の官宅であつた。

一四九

前後して札幌へ到着したわたしの實父は、幇間以來養父と親交のあつた祖父の熱心なる勸告に從つて、程なくわたしの養父の弟子となつた。

一五〇

が、この弟子入については、實父は後年になつてから、わたしに向つてこんなことを云つてゐた。——わしがおやぢをたよつて北海道へ行つたといふのは、實はどうかして外國の新しい學問を勉強したい考があつたからなのだ。ところが、おやぢはわしが學問に志したことは絶對に不贊成で、かういふのだ。これからの世の中は、なまじつか學問なンぞするよりは、何でもまづ手ッとりばやく目新しい實業に從事するのが勝だ。で、それには幸ひ自分の親しくしてゐる人に、武林先生といふ腕のたしかな寫眞師があるから、一つ思ひきつてこの

人につき、充分に寫眞術を習つて見てはどうだ。わしはあんまり氣はすゝまなかつたけれど、何しろ學校へはいりたいにも金はなし手蔓もなし、又おやぢを除いては相談する人は一人もなし、結局おやぢの云ふとほりになつたわけだが、併し又考へなほして見ると、とにかく寫眞などゝいふ外國の技術を心得てゐる人である以上、武林先生はきつと外國の學問も相當にあるにちがひない。して見れば、これは或は技術と學問と兩方ともおぼえることができるかも知れない。さう思つて弟子入することにきめた。ところが、いよ〳〵弟子入して見ると、武林先生といふ方は豫想以上人格の立派な人ではあつたけれども、殘念なことには技術以外學問とては一向にない人だといふことがわかつた。それにはわしも一方ならず失望した………

一五一

黑田長官の積極政策が云ふまでもなく經費膨脹のために失敗したので、その反動として、次の松本長官は、極力經費の節減を計るために、凡そ不必要と認めらるゝ官職は一切容赦なく廢止して了つた。わたしの養父も勿論それがために免官になつた。併し土地開發を目的とする道廳は、免官になつたわたしの養父に對して、その代償として二戸分に相當する一廓の家屋敷をば無償で拂下げる特典を與へることを

一五二

札幌市南三條西一丁目七番地——行きなやんだ北海道廳の施政方針の一端は、そこにわたしの養父の免官が變形された、一個の小私有財産たる武林寫眞館といふものゝ出現を見た。又社會組織の變動は、立場を失つたわたしの養父をして、結局さうした小私有財産中に一身を寄託することに終らしめた。

一五三

武林寫眞館の內弟子として、實父は支給された五疊半の一室で結婚した。さうしてわたしはそこで生まれた。

一五四

これからわたしの書かうとしてゐるのは、無想庵物語であつて、必ずしもわたしの自傳ではない。しかも自傳ではないけれども、勿論わたしの一生の見聞錄であるには相違ない。さうしてこの序文はその見聞の據つて來たる一精神の素地を示さうとしたものだ。

一五五

一木一草が若し悉く中道に非るなきものとすれば、無想庵物語もまた中道に立つてゐるものだ。さうして中道に立ちつゝ生き且つ死するものに、宇宙の存在するかぎり、地球の永續するかぎり、生物とし

編輯だより

◇支那問題は刻下の最大關心事。否、一歩間違へば取返しのつかぬ大問題とならん。我が國は傳統的に外交はまずいがしかも今度のやうな拙劣さを曝露したことは開闢以來始めてだ。

◇田中內閣は責任の重大なるを痛感して一刻も早くその前後策に任ぜよ。國民はシツカリした意志を合流して田中內閣打倒に努力すべきだ。さるにても民政黨の無氣力なるには呆れ返らざるを得ない。

◇二老骨、林權助、內田康哉の海外特派。一體彼等に現時の支那や世界を理解する能力があるだらふか。霞ケ關の若き人々はそれに甘んじているのか。

◇九月特輯はずゐぶん大物が集まつた。創作欄の武者小路氏の「佐渡の日蓮」藤森氏の「十萬圓事件」は非常の力作で、白柳氏の「西園寺公評傳」は一度も新聞雜誌に現れなかつた方面の公を取材した百枚の力作。

◇それから「面白いアビシニヤ」はアフリカの變つた帝國の狀態を描出して誰にも示唆の多いよみもの。

◇九月號に附錄とすべかりし浮世繪は別項社告記載の如く十月號に添付することになつた。尙「浮世繪全集」のことは十月號で發表する筈。

◇七月廿三日葛西善藏君逝く。君の如き藝術に眞劍であり、そして眞面目な人物は少い。酒仙としてのみの君が傳へられてゐるのは遺憾だ。君の人物の眞骨頭は知る人ぞ知る。

◇それから「葛西善藏全集」は書翰、隨筆をいれて第四卷を出すことになつた。それで書翰その他を持合せの方は本社內佐々木千之まで御知らせ願ひたい。

◇マルクス、エンゲルス全集第二回配本もすんだ。今回も九百四十二頁の巍然たる、そして內容の充實せるものである。エンゲルスの油の乘つたときの力作が殆んど這入つた。第三回配本も定日には配本ができる。

◇世界大衆文學全集は讀者の要求により十月配本より一ケ月二册宛としたい。十月配本はハルボー著秦豐吉譯「メトロポリス」もう一册はサバチニ著小田律譯「スカラムツシユ」である。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵稅不要
壹ケ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるを最も便利とす

昭和三年八月十八日印刷納本
昭和三年九月一日發行
(壹圓)
(郵稅五錢)

編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町四ノ六 山本三生
印刷人 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六 改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一一三一 一一三二 一一三三 一一三四